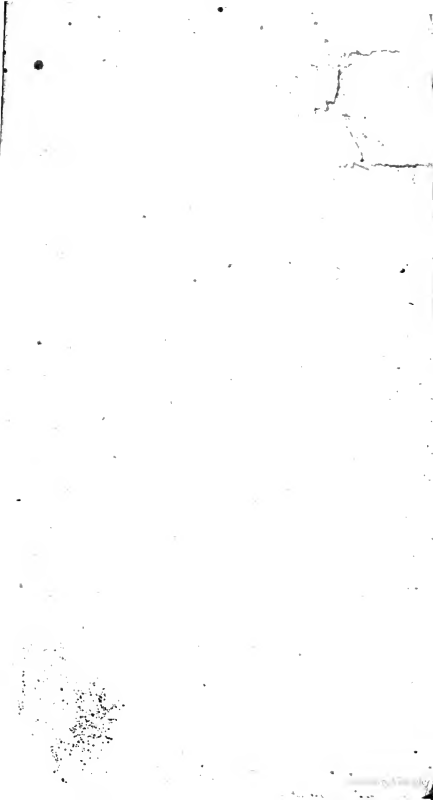




4.5.147

~~14~~ ~~15~~ ~~16~~ ~~17~~ ~~18~~ ~~19~~ ~~20~~ ~~21~~ ~~22~~ ~~23~~ ~~24~~ ~~25~~ ~~26~~ ~~27~~ ~~28~~ ~~29~~ ~~30~~ ~~31~~ ~~32~~ ~~33~~ ~~34~~ ~~35~~ ~~36~~ ~~37~~ ~~38~~ ~~39~~ ~~40~~ ~~41~~ ~~42~~ ~~43~~ ~~44~~ ~~45~~ ~~46~~ ~~47~~ ~~48~~ ~~49~~ ~~50~~ ~~51~~ ~~52~~ ~~53~~ ~~54~~ ~~55~~ ~~56~~ ~~57~~ ~~58~~ ~~59~~ ~~60~~ ~~61~~ ~~62~~ ~~63~~ ~~64~~ ~~65~~ ~~66~~ ~~67~~ ~~68~~ ~~69~~ ~~70~~ ~~71~~ ~~72~~ ~~73~~ ~~74~~ ~~75~~ ~~76~~ ~~77~~ ~~78~~ ~~79~~ ~~80~~ ~~81~~ ~~82~~ ~~83~~ ~~84~~ ~~85~~ ~~86~~ ~~87~~ ~~88~~ ~~89~~ ~~90~~ ~~91~~ ~~92~~ ~~93~~ ~~94~~ ~~95~~ ~~96~~ ~~97~~ ~~98~~ ~~99~~ ~~100~~ ~~101~~ ~~102~~ ~~103~~ ~~104~~ ~~105~~ ~~106~~ ~~107~~ ~~108~~ ~~109~~ ~~110~~ ~~111~~ ~~112~~ ~~113~~ ~~114~~ ~~115~~ ~~116~~ ~~117~~ ~~118~~ ~~119~~ ~~120~~ ~~121~~ ~~122~~ ~~123~~ ~~124~~ ~~125~~ ~~126~~ ~~127~~ ~~128~~ ~~129~~ ~~130~~ ~~131~~ ~~132~~ ~~133~~ ~~134~~ ~~135~~ ~~136~~ ~~137~~ ~~138~~ ~~139~~ ~~140~~ ~~141~~ ~~142~~ ~~143~~ ~~144~~ ~~145~~ ~~146~~ ~~147~~ ~~148~~ ~~149~~ ~~150~~ ~~151~~ ~~152~~ ~~153~~ ~~154~~ ~~155~~ ~~156~~ ~~157~~ ~~158~~ ~~159~~ ~~160~~ ~~161~~ ~~162~~ ~~163~~ ~~164~~ ~~165~~ ~~166~~ ~~167~~ ~~168~~ ~~169~~ ~~170~~ ~~171~~ ~~172~~ ~~173~~ ~~174~~ ~~175~~ ~~176~~ ~~177~~ ~~178~~ ~~179~~ ~~180~~ ~~181~~ ~~182~~ ~~183~~ ~~184~~ ~~185~~ ~~186~~ ~~187~~ ~~188~~ ~~189~~ ~~190~~ ~~191~~ ~~192~~ ~~193~~ ~~194~~ ~~195~~ ~~196~~ ~~197~~ ~~198~~ ~~199~~ ~~200~~ ~~201~~ ~~202~~ ~~203~~ ~~204~~ ~~205~~ ~~206~~ ~~207~~ ~~208~~ ~~209~~ ~~210~~ ~~211~~ ~~212~~ ~~213~~ ~~214~~ ~~215~~ ~~216~~ ~~217~~ ~~218~~ ~~219~~ ~~220~~ ~~221~~ ~~222~~ ~~223~~ ~~224~~ ~~225~~ ~~226~~ ~~227~~ ~~228~~ ~~229~~ ~~230~~ ~~231~~ ~~232~~ ~~233~~ ~~234~~ ~~235~~ ~~236~~ ~~237~~ ~~238~~ ~~239~~ ~~240~~ ~~241~~ ~~242~~ ~~243~~ ~~244~~ ~~245~~ ~~246~~ ~~247~~ ~~248~~ ~~249~~ ~~250~~ ~~251~~ ~~252~~ ~~253~~ ~~254~~ ~~255~~ ~~256~~ ~~257~~ ~~258~~ ~~259~~ ~~260~~ ~~261~~ ~~262~~ ~~263~~ ~~264~~ ~~265~~ ~~266~~ ~~267~~ ~~268~~ ~~269~~ ~~270~~ ~~271~~ ~~272~~ ~~273~~ ~~274~~ ~~275~~ ~~276~~ ~~277~~ ~~278~~ ~~279~~ ~~280~~ ~~281~~ ~~282~~ ~~283~~ ~~284~~ ~~285~~ ~~286~~ ~~287~~ ~~288~~ ~~289~~ ~~290~~ ~~291~~ ~~292~~ ~~293~~ ~~294~~ ~~295~~ ~~296~~ ~~297~~ ~~298~~ ~~299~~ ~~300~~ ~~301~~ ~~302~~ ~~303~~ ~~304~~ ~~305~~ ~~306~~ ~~307~~ ~~308~~ ~~309~~ ~~310~~ ~~311~~ ~~312~~ ~~313~~ ~~314~~ ~~315~~ ~~316~~ ~~317~~ ~~318~~ ~~319~~ ~~320~~ ~~321~~ ~~322~~ ~~323~~ ~~324~~ ~~325~~ ~~326~~ ~~327~~ ~~328~~ ~~329~~ ~~330~~ ~~331~~ ~~332~~ ~~333~~ ~~334~~ ~~335~~ ~~336~~ ~~337~~ ~~338~~ ~~339~~ ~~340~~ ~~341~~ ~~342~~ ~~343~~ ~~344~~ ~~345~~ ~~346~~ ~~347~~ ~~348~~ ~~349~~ ~~350~~ ~~351~~ ~~352~~ ~~353~~ ~~354~~ ~~355~~ ~~356~~ ~~357~~ ~~358~~ ~~359~~ ~~360~~ ~~361~~ ~~362~~ ~~363~~ ~~364~~ ~~365~~ ~~366~~ ~~367~~ ~~368~~ ~~369~~ ~~370~~ ~~371~~ ~~372~~ ~~373~~ ~~374~~ ~~375~~ ~~376~~ ~~377~~ ~~378~~ ~~379~~ ~~380~~ ~~381~~ ~~382~~ ~~383~~ ~~384~~ ~~385~~ ~~386~~ ~~387~~ ~~388~~ ~~389~~ ~~390~~ ~~391~~ ~~392~~ ~~393~~ ~~394~~ ~~395~~ ~~396~~ ~~397~~ ~~398~~ ~~399~~ ~~400~~ ~~401~~ ~~402~~ ~~403~~ ~~404~~ ~~405~~ ~~406~~ ~~407~~ ~~408~~ ~~409~~ ~~410~~ ~~411~~ ~~412~~ ~~413~~ ~~414~~ ~~415~~ ~~416~~ ~~417~~ ~~418~~ ~~419~~ ~~420~~ ~~421~~ ~~422~~ ~~423~~ ~~424~~ ~~425~~ ~~426~~ ~~427~~ ~~428~~ ~~429~~ ~~430~~ ~~431~~ ~~432~~ ~~433~~ ~~434~~ ~~435~~ ~~436~~ ~~437~~ ~~438~~ ~~439~~ ~~440~~ ~~441~~ ~~442~~ ~~443~~ ~~444~~ ~~445~~ ~~446~~ ~~447~~ ~~448~~ ~~449~~ ~~450~~ ~~451~~ ~~452~~ ~~453~~ ~~454~~ ~~455~~ ~~456~~ ~~457~~ ~~458~~ ~~459~~ ~~460~~ ~~461~~ ~~462~~ ~~463~~ ~~464~~ ~~465~~ ~~466~~ ~~467~~ ~~468~~ ~~469~~ ~~470~~ ~~471~~ ~~472~~ ~~473~~ ~~474~~ ~~475~~ ~~476~~ ~~477~~ ~~478~~ ~~479~~ ~~480~~ ~~481~~ ~~482~~ ~~483~~ ~~484~~ ~~485~~ ~~486~~ ~~487~~ ~~488~~ ~~489~~ ~~490~~ ~~491~~ ~~492~~ ~~493~~ ~~494~~ ~~495~~ ~~496~~ ~~497~~ ~~498~~ ~~499~~ ~~500~~ ~~501~~ ~~502~~ ~~503~~ ~~504~~ ~~505~~ ~~506~~ ~~507~~ ~~508~~ ~~509~~ ~~510~~ ~~511~~ ~~512~~ ~~513~~ ~~514~~ ~~515~~ ~~516~~ ~~517~~ ~~518~~ ~~519~~ ~~520~~ ~~521~~ ~~522~~ ~~523~~ ~~524~~ ~~525~~ ~~526~~ ~~527~~ ~~528~~ ~~529~~ ~~530~~ ~~531~~ ~~532~~ ~~533~~ ~~534~~ ~~535~~ ~~536~~ ~~537~~ ~~538~~ ~~539~~ ~~540~~ ~~541~~ ~~542~~ ~~543~~ ~~544~~ ~~545~~ ~~546~~ ~~547~~ ~~548~~ ~~549~~ ~~550~~ ~~551~~ ~~552~~ ~~553~~ ~~554~~ ~~555~~ ~~556~~ ~~557~~ ~~558~~ ~~559~~ ~~560~~ ~~561~~ ~~562~~ ~~563~~ ~~564~~ ~~565~~ ~~566~~ ~~567~~ ~~568~~ ~~569~~ ~~570~~ ~~571~~ ~~572~~ ~~573~~ ~~574~~ ~~575~~ ~~576~~ ~~577~~ ~~578~~ ~~579~~ ~~580~~ ~~581~~ ~~582~~ ~~583~~ ~~584~~ ~~585~~ ~~586~~ ~~587~~ ~~588~~ ~~589~~ ~~590~~ ~~591~~ ~~592~~ ~~593~~ ~~594~~ ~~595~~ ~~596~~ ~~597~~ ~~598~~ ~~599~~ ~~600~~ ~~601~~ ~~602~~ ~~603~~ ~~604~~ ~~605~~ ~~606~~ ~~607~~ ~~608~~ ~~609~~ ~~610~~ ~~611~~ ~~612~~ ~~613~~ ~~614~~ ~~615~~ ~~616~~ ~~617~~ ~~618~~ ~~619~~ ~~620~~ ~~621~~ ~~622~~ ~~623~~ ~~624~~ ~~625~~ ~~626~~ ~~627~~ ~~628~~ ~~629~~ ~~630~~ ~~631~~ ~~632~~ ~~633~~ ~~634~~ ~~635~~ ~~636~~ ~~637~~ ~~638~~ ~~639~~ ~~640~~ ~~641~~ ~~642~~ ~~643~~ ~~644~~ ~~645~~ ~~646~~ ~~647~~ ~~648~~ ~~649~~ ~~650~~ ~~651~~ ~~652~~ ~~653~~ ~~654~~ ~~655~~ ~~656~~ ~~657~~ ~~658~~ ~~659~~ ~~660~~ ~~661~~ ~~662~~ ~~663~~ ~~664~~ ~~665~~ ~~666~~ ~~667~~ ~~668~~ ~~669~~ ~~670~~ ~~671~~ ~~672~~ ~~673~~ ~~674~~ ~~675~~ ~~676~~ ~~677~~ ~~678~~ ~~679~~ ~~680~~ ~~681~~ ~~682~~ ~~683~~ ~~684~~ ~~685~~ ~~686~~ ~~687~~ ~~688~~ ~~689~~ ~~690~~ ~~691~~ ~~692~~ ~~693~~ ~~694~~ ~~695~~ ~~696~~ ~~697~~ ~~698~~ ~~699~~ ~~700~~ ~~701~~ ~~702~~ ~~703~~ ~~704~~ ~~705~~ ~~706~~ ~~707~~ ~~708~~ ~~709~~ ~~710~~ ~~711~~ ~~712~~ ~~713~~ ~~714~~ ~~715~~ ~~716~~ ~~717~~ ~~718~~ ~~719~~ ~~720~~ ~~721~~ ~~722~~ ~~723~~ ~~724~~ ~~725~~ ~~726~~ ~~727~~ ~~728~~ ~~729~~ ~~730~~ ~~731~~ ~~732~~ ~~733~~ ~~734~~ ~~735~~ ~~736~~ ~~737~~ ~~738~~ ~~739~~ ~~740~~ ~~741~~ ~~742~~ ~~743~~ ~~744~~ ~~745~~ ~~746~~ ~~747~~ ~~748~~ ~~749~~ ~~750~~ ~~751~~ ~~752~~ ~~753~~ ~~754~~ ~~755~~ ~~756~~ ~~757~~ ~~758~~ ~~759~~ ~~760~~ ~~761~~ ~~762~~ ~~763~~ ~~764~~ ~~765~~ ~~766~~ ~~767~~ ~~768~~ ~~769~~ ~~770~~ ~~771~~ ~~772~~ ~~773~~ ~~774~~ ~~775~~ ~~776~~ ~~777~~ ~~778~~ ~~779~~ ~~780~~ ~~781~~ ~~782~~ ~~783~~ ~~784~~ ~~785~~ ~~786~~ ~~787~~ ~~788~~ ~~789~~ ~~790~~ ~~791~~ ~~792~~ ~~793~~ ~~794~~ ~~795~~ ~~796~~ ~~797~~ ~~798~~ ~~799~~ ~~800~~ ~~801~~ ~~802~~ ~~803~~ ~~804~~ ~~805~~ ~~806~~ ~~807~~ ~~808~~ ~~809~~ ~~810~~ ~~811~~ ~~812~~ ~~813~~ ~~814~~ ~~815~~ ~~816~~ ~~817~~ ~~818~~ ~~819~~ ~~820~~ ~~821~~ ~~822~~ ~~823~~ ~~824~~ ~~825~~ ~~826~~ ~~827~~ ~~828~~ ~~829~~ ~~830~~ ~~831~~ ~~832~~ ~~833~~ ~~834~~ ~~835~~ ~~836~~ ~~837~~ ~~838~~ ~~839~~ ~~840~~ ~~841~~ ~~842~~ ~~843~~ ~~844~~ ~~845~~ ~~846~~ ~~847~~ ~~848~~ ~~849~~ ~~850~~ ~~851~~ ~~852~~ ~~853~~ ~~854~~ ~~855~~ ~~856~~ ~~857~~ ~~858~~ ~~859~~ ~~860~~ ~~861~~ ~~862~~ ~~863~~ ~~864~~ ~~865~~ ~~866~~ ~~867~~ ~~868~~ ~~869~~ ~~870~~ ~~871~~ ~~872~~ ~~873~~ ~~874~~ ~~875~~ ~~876~~ ~~877~~ ~~878~~ ~~879~~ ~~880~~ ~~881~~ ~~882~~ ~~883~~ ~~884~~ ~~885~~ ~~886~~ ~~887~~ ~~888~~ ~~889~~ ~~890~~ ~~891~~ ~~892~~ ~~893~~ ~~894~~ ~~895~~ ~~896~~ ~~897~~ ~~898~~ ~~899~~ ~~900~~ ~~901~~ ~~902~~ ~~903~~ ~~904~~ ~~905~~ ~~906~~ ~~907~~ ~~908~~ ~~909~~ ~~910~~ ~~911~~ ~~912~~ ~~913~~ ~~914~~ ~~915~~ ~~916~~ ~~917~~ ~~918~~ ~~919~~ ~~920~~ ~~921~~ ~~922~~ ~~923~~ ~~924~~ ~~925~~ ~~926~~ ~~927~~ ~~928~~ ~~929~~ ~~930~~ ~~931~~ ~~932~~ ~~933~~ ~~934~~ ~~935~~ ~~936~~ ~~937~~ ~~938~~ ~~939~~ ~~940~~ ~~941~~ ~~942~~ ~~943~~ ~~944~~ ~~945~~ ~~946~~ ~~947~~ ~~948~~ ~~949~~ ~~950~~ ~~951~~ ~~952~~ ~~953~~ ~~954~~ ~~955~~ ~~956~~ ~~957~~ ~~958~~ ~~959~~ ~~960~~ ~~961~~ ~~962~~ ~~963~~ ~~964~~ ~~965~~ ~~966~~ ~~967~~ ~~968~~ ~~969~~ ~~970~~ ~~971~~ ~~972~~ ~~973~~ ~~974~~ ~~975~~ ~~976~~ ~~977~~ ~~978~~ ~~979~~ ~~980~~ ~~981~~ ~~982~~ ~~983~~ ~~984~~ ~~985~~ ~~986~~ ~~987~~ ~~988~~ ~~989~~ ~~990~~ ~~991~~ ~~992~~ ~~993~~ ~~994~~ ~~995~~ ~~996~~ ~~997~~ ~~998~~ ~~999~~ ~~1000~~ ~~1001~~ ~~1002~~ ~~1003~~ ~~1004~~ ~~1005~~ ~~1006~~ ~~1007~~ ~~1008~~ ~~1009~~ ~~1010~~ ~~1011~~ ~~1012~~ ~~1013~~ ~~1014~~ ~~1015~~ ~~1016~~ ~~1017~~ ~~1018~~ ~~1019~~ ~~1020~~ ~~1021~~ ~~1022~~ ~~1023~~ ~~1024~~ ~~1025~~ ~~1026~~ ~~1027~~ ~~1028~~ ~~1029~~ ~~1030~~ ~~1031~~ ~~1032~~ ~~1033~~ ~~1034~~ ~~1035~~ ~~1036~~ ~~1037~~ ~~1038~~ ~~1039~~ ~~1040~~ ~~1041~~ ~~1042~~ ~~1043~~ ~~1044~~ ~~1045~~ ~~1046~~ ~~1047~~ ~~1048~~ ~~1049~~ ~~1050~~ ~~1051~~ ~~1052~~ ~~1053~~ ~~1054~~ ~~1055~~ ~~1056~~ ~~1057~~ ~~1058~~ ~~1059~~ ~~1060~~ ~~1061~~ ~~1062~~ ~~1063~~ ~~1064~~ ~~1065~~ ~~1066~~ ~~1067~~ ~~1068~~ ~~1069~~ ~~1070~~ ~~1071~~ ~~1072~~ ~~1073~~ ~~1074~~ ~~1075~~ ~~1076~~ ~~1077~~ ~~1078~~ ~~1079~~ ~~1080~~ ~~1081~~ ~~1082~~ ~~1083~~ ~~1084~~ ~~1085~~ ~~1086~~ ~~1087~~ ~~1088~~ ~~1089~~ ~~1090~~ ~~1091~~ ~~1092~~ ~~1093~~ ~~1094~~ ~~1095~~ ~~1096~~ ~~1097~~ ~~1098~~ ~~1099~~ ~~1100~~ ~~1101~~ ~~1102~~ ~~1103~~ ~~1104~~ ~~1105~~ ~~1106~~ ~~1107~~ ~~1108~~ ~~1109~~ ~~1110~~ ~~1111~~ ~~1112~~ ~~1113~~ ~~1114~~ ~~1115~~ ~~1116~~ ~~1117~~ ~~1118~~ ~~1119~~ ~~1120~~ ~~1121~~ ~~1122~~ ~~1123~~ ~~1124~~ ~~1125~~ ~~1126~~ ~~1127~~ ~~1128~~ ~~1129~~ ~~1130~~ ~~1131~~ ~~1132~~ ~~1133~~ ~~1134~~ ~~1135~~ ~~1136~~ ~~1137~~ ~~1138~~ ~~1139~~ ~~1140~~ ~~1141~~ ~~1142~~ ~~1143~~ ~~1144~~ ~~1145~~ ~~1146~~ ~~1147~~ ~~1148~~ ~~1149~~ ~~1150~~ ~~1151~~ ~~1152~~ ~~1153~~ ~~1154~~ ~~1155~~ ~~1156~~ ~~1157~~ ~~1158~~ ~~1159~~ ~~1160~~ ~~1161~~ ~~1162~~ ~~1163~~ ~~1164~~ ~~1165~~ ~~1166~~ ~~1167~~ ~~1168~~ ~~1169~~ ~~1170~~ ~~1171~~ ~~1172~~ ~~1173~~ ~~1174~~ ~~1175~~ ~~1176~~ ~~1177~~ ~~1178~~ ~~1179~~ ~~1180~~ ~~1181~~ ~~1182~~ ~~1183~~ ~~1184~~ ~~1185~~ ~~1186~~ ~~1187~~ ~~1188~~ ~~1189~~ ~~1190~~ ~~1191~~ ~~1192~~ ~~1193~~ ~~1194~~ ~~1195~~ ~~1196~~ ~~1197~~ ~~1198~~ ~~1199~~ ~~1200~~ ~~1201~~ ~~1202~~ ~~1203~~ ~~1204~~ ~~1205~~ ~~1206~~ ~~1207~~ ~~1208~~ ~~1209~~ ~~1210~~ ~~1211~~ ~~1212~~ ~~1213~~ ~~1214~~ ~~1215~~ ~~1216~~ ~~1217~~ ~~1218~~ ~~1219~~ ~~1220~~ ~~1221~~ ~~1222~~ ~~1223~~ ~~1224~~ ~~1225~~ ~~1226~~ ~~1227~~ ~~1228~~ ~~1229~~ ~~1230~~ ~~1231~~ ~~1232~~ ~~1233~~ ~~1234~~ ~~1235~~ ~~1236~~ ~~1237~~ ~~1238~~ ~~1239~~ ~~1240~~ ~~1241~~ ~~1242~~ ~~1243~~ ~~1244~~ ~~1245~~ ~~1246~~ ~~1247~~ ~~1248~~ ~~1249~~ ~~1250~~ ~~1251~~ ~~1252~~ ~~1253~~ ~~1254~~ ~~1255~~ ~~1256~~ ~~1257~~ ~~1258~~ ~~1259~~ ~~1260~~ ~~1261~~ ~~1262~~ ~~1263~~ ~~1264~~ ~~1265~~ ~~1266~~ ~~1267~~ ~~1268~~ ~~1269~~ ~~1270~~ ~~1271~~ ~~1272~~ ~~1273~~ ~~1274~~ ~~1275~~ ~~1276~~ ~~1277~~ ~~1278~~ ~~1279~~ ~~1280~~ ~~1281~~ ~~1282~~ ~~1283~~ ~~1284~~ ~~1285~~ ~~1286~~ ~~1287~~ ~~1288~~ ~~1289~~ ~~1290~~ ~~1291~~ ~~1292~~ ~~1293~~ ~~1294~~ ~~1295~~ ~~1296~~ ~~1297~~ ~~1298~~ ~~1299~~ ~~1300~~ ~~1301~~ ~~1302~~ ~~1303~~ ~~1304~~ ~~1305~~ ~~1306~~ ~~1307~~ ~~1308~~ ~~1309~~ ~~1310~~ ~~1311~~ ~~1312~~ ~~1313~~ ~~1314~~ ~~1315~~ ~~1316~~ ~~1317~~ ~~1318~~ ~~1319~~ ~~1320~~ ~~1321~~ ~~1322~~ ~~1323~~ ~~1324~~ ~~1325~~ ~~1326~~ ~~1327~~ ~~1328~~ ~~1329~~ ~~1330~~ ~~1331~~ ~~1332~~ ~~1333~~ ~~1334~~ ~~1335~~ ~~1336~~ ~~1337~~ ~~1338~~ ~~1339~~ ~~1340~~ ~~1341~~ ~~1342~~ ~~1343~~ ~~1344~~ ~~1345~~ ~~1346~~ ~~1347~~ ~~1348~~ ~~1349~~ ~~1350~~ ~~1351~~ ~~1352~~ ~~1353~~ ~~1354~~ ~~1355~~ ~~1356</~~



HISTOIRE
ANCIENNE
DES EGYPTIENS,
DES CARTHAGINOIS,
DES ASSYRIENS,
DES BABYLONIENS,
DES MEDES ET DES PERSES,
DES MACEDONIENS,
DES GRECS.

Par M. ROLLIN, ancien Recteur de l'Université de Paris, Professeur d'Eloquence au Collège Roial, & Associé à l'Académie Roiale des Inscriptions & Belles-Lettres.

TOME TROISIE'ME.

Seconde Edition revue & corrigée.



A PARIS,
Chez la Veuve ESTIENNE, Libraire,
rue saint Jacques, vis-à-vis la rue
du Plâtre, à la Vertu.

M. DCC. XXXII.
Avec Approbation & Privilège



[illegible]

AVERTISSEMENT

de l'Auteur.

JE m'étois flaté de conduire ce troisième Volume jusqu'à la fin de la guerre du Péloponnèse, & de le terminer par quelques réflexions sur les mœurs, le caractère, le gouvernement des peuples de la Grèce les plus connus. Je me suis trouvé hors d'état de tenir ma parole. Les additions que j'ai faites dans le cours de l'impression pour tâcher de ne rien omettre d'intéressant, ont fait croître le Livre plus que je ne l'avois prévu. J'ai donc été obligé de m'arrêter à la déroute de l'armée des Athéniens devant Syracuse, & à la mort de Nicias, qui arrivent la dix-neuvième année de la guerre du Péloponnèse. J'aurois même souhaité pouvoir finir plutôt ce Volume: mais c'est ce qu'il ne m'a pas été possible de faire, quel qu'envie que j'en eusse. L'entreprise des Athéniens contre Syracuse étant la plus grande que cette République ait jamais faite, & étant devenue la principale cause de sa chute, je n'ai pas cru devoir

couper la narration d'un événement si grand & si lié ; & il me semble que ç'auroit été tromper l'attente du Lecteur, si, après l'avoir introduit dans une scène pleine d'actions & de mouvemens, je lui en avois dérobé la catastrophe.

J'ai retranché tout le reste, & l'ai renvoié au Volume suivant. Malgré tous ces retranchemens, celui-ci est demeuré encore très incommode, pour les Lecteurs qu'il charge d'un trop grand poids ; pour les Ouvriers, qui ne peuvent le relier qu'avec peine ; & sur tout pour le Libraire, dont la dépense est augmentée considérablement par le surcroit de cinq ou six feuilles de plus que dans les deux premiers Volumes, c'est-à-dire de 150 ou de 200 pages. Il m'a paru que le Public, par rapport à l'impression de ce Livre, n'étoit pas mécontent ni du papier, ni des caractères, ni de l'exactitude & de la correction ; & j'ai veillé à ce qu'on y apportât tous les soins possibles. Sur la représentation que m'a fait la Veuve du Libraire, (car Dieu a appelé

à lui depuis peu son mari) que ce troisième Volume surpassoit de beaucoup les deux autres, je n'ai pu lui refuser la grace qu'elle m'a demandée, & que je regarde comme une justice, qui est d'ajouter dix sols au prix ordinaire, mais pour ce Volume seulement. Je l'ai priée de continuer d'avoir égard aux personnes qui s'adresseront à elle avec un témoignage de ma part. Je prendrai de meilleures mesures dans la suite, & ne tomberai plus dans le même inconvénient.

Dès que l'impression de ce troisième Volume à été achevée, on a commencé à réimprimer les deux premiers. J'y ai fait quelques corrections & quelques légers changemens sur les avis que des amis m'ont donnés. Je les aurois marqués à la fin de ce Volume, si je n'a-vois crain de le trop charger : je le ferai dans les Volumes suivans, afin que ceux qui ont la première édition puissent en faire usage. Ce petit recueil de corrections, c'est-à-dire de fautes, ramassées ensemble, & mises sous les yeux du Le-

Auteur, ne peut pas être fort agréable à l'amour propre, mais il peut être utile au public en rendant le livre moins défectueux, & cela doit me suffire. D'ailleurs, en matière de littérature, comme dans la morale, les fautes reconnues & avouées sincèrement, sont oubliées, ou, pour mieux dire, ne subsistent plus.

Je prie les Lecteurs, qui auront remarqué dans ces trois Volumes des endroits qui leur paroîtront demander quelque changement nécessaire, soit pour la justesse de l'expression, soit pour la vérité des faits, soit pour l'exactitude des dates, soit même pour quelques circonstances essentielles que j'aurai omises, de vouloir m'en donner avis, en adressant leurs lettres chez le Libraire. On me permettra de n'y faire d'autre réponse que celle que je fais ici par avance, en témoignant dès à présent une très sincère & très vive reconnoissance à toutes les personnes qui voudront bien m'aider de leurs lumières.

J'aurois dû, dès le commencement de cet Ouvrage indiquer l'édition des principaux Auteurs.

DE L'AUTEUR. v

grecs que j'y cite. Je le ferai ici.

HERODOTUS. *Francof. An. 1608.*

THUCYDIDES. *Apud Henricum Stephanum, an. 1588.*

XENOPHON. *Lutetia Parisiorum, apud Societatem Græcarum Editionum, an. 1625.*

POLYBIUS. *Parisus, an. 1609.*

DIODORUS SICULUS. *Hanovia Typis Wechelianis, an. 1604.*

PLUTARCHUS. *Lutetia Parisiorum, apud Societatem Græcarum Editionum, an. 1624.*

STRABO. *Lutetia Parisiorum, Typis regiis, an. 1620.*

ATHENÆUS. *Lugduni, an. 1612.*

PAUSANIAS. *Hanovia, Typis Wechelianis, an. 1613.*

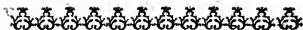
APPIANUS ALEXANDR. *Apud Henric. Stephan. an. 1592.*

PLATO, *ex nova Joannis Serrani interpretatione. Apud Henricum Stephanum, an. 1578.*

ARISTOTELES. *Lutetia Parisiorum, apud Societatem Græcarum Editionum, an. 1619.*

ISOCRATES. *Apud Paulum Stephanum, an. 1604.*

DIOGENES LAERTIUS. *Apud Henricum Stephanum, an. 1593.*



APPROBATION.

J'AI lû par ordre de Monseigneur le Garde des Sceaux le troisiéme volume de *l'Histoire ancienne des Egyptiens, des Carthaginois, des Assyriens, des Babyloniens, des Médes & des Perses, des Macédoniens, & des Grecs*, par M. Rollin, & je n'y ai rien trouvé qui puisse en empêcher l'impression. Ce premier Juin 1731.

S E C O U S S E.

HISTOIRE



HISTOIRE
ANCIENNE
DES PERSES
ET
DES GRECS.



AVANT-PROPOS.



VANT que de commencer l'histoire des Perses & des Grecs, je placerai ici premièrement quelques observations préliminaires qui y préparent; ensuite le plan & la division de ce troisième Volume; enfin une espèce d'abrégé de l'histoire des Lacédémoniens depuis l'établissement de leurs Rois jusqu'au règne de Darius, où commence ce troisième Volume.

Tome III.

A

ARTICLE PREMIER.

*Idee abrégée de l'histoire renfermée dans
ce troisième Volume. Fruit que l'on
en doit tirer.*

CE TROISIÈME Volume de l'histoire que je donne au public , présentera aux yeux du Lecteur un spectacle tout nouveau , & qui ne sera pas indigne de sa curiosité. Dans le précédent , on a vû sous Cyrus deux États assez médiocres , la Médie & la Perse , se répandre au loin comme un incendie ou comme un torrent , & par une rapidité de conquêtes étonnantes , subjuguier un nombre considérable de provinces & de royaumes. Ici l'on verra ce vaste Empire mettre en mouvement tous les peuples soumis à sa domination , Perses , Médes , Phéniciens , Egyptiens , Babyloniens , Indiens , & beaucoup d'autres , & venir fondre avec toutes les forces de l'Asie & de l'Orient sur un petit pays , renfermé dans des bornes fort étroites , & dénué de tout secours , je veux dire sur la Grèce. Quand on envisage d'un côté tant de nations réunies ensemble , des préparatifs de guerre faits pendant

AVANT-PROPOS. 3

plusieurs années & avec une si grande vivacité, des armées de terre & de mer innombrables, des flotes auxquelles la mer peut à peine suffire; de l'autre, deux foibles villes, Athènes & Lacédémone, abandonnées de tous leurs alliés, & réduites presque à elles seules: on auroit lieu de croire que ces deux petites villes vont être détruites & absorbées par une puissance si formidable; & qu'il n'en restera pas même de vestiges. Cependant ce seront elles qui demeureront victorieuses, & qui par leur courage invincible, & par plusieurs combats qu'elles gagneront sur terre & sur mer, feront perdre pour toujours à l'Empire Persan le dessein de revenir attaquer la Grèce.

Le récit de la guerre entre les Perses & les Grecs, rendra sensible la vérité de cette maxime, que ce n'est point le nombre mais la valeur des troupes, & la conduite des Chefs, qui décident dans les batailles. On admirera la fermeté d'ame & de courage des grands hommes qui étoient à la tête des affaires de la Grèce, que l'ébranlement de l'univers ne fut pas capable d'abattre, que les plus grands mal-

4 A V A N T - P R O P O S .

heurs ne purent déconcerter , qui entreprirent de tenir tête avec une poignée d'hommes aux armées innombrables des Perses , qui osèrent malgré une si prodigieuse inégalité espérer un heureux succès , qui forcèrent la victoire à se ranger du côté du mérite & de la vertu , & qui apprirent à tous les siècles quelles ressources on trouve dans la prudence , dans la valeur , dans l'expérience , dans le zèle pour la patrie & pour la liberté , dans l'amour du devoir , & dans tous les sentimens d'une ame noble & généreuse.

A CETTE guerre des Perses contre les Grecs en succédera une autre entre les Grecs mêmes , mais d'un caractère tout différent. Il n'y aura guères ici que des actions peu importantes en apparence , & peu capables de sembler de satisfaire un Lecteur avide de grands événemens : des disputes particulières entre quelques villes , ou quelques petites Républiques ; des sièges de places pour l'ordinaire peu considérables , (j'en excepte le siège de Syracuse , l'un des plus importans de l'antiquité ;) mais qui ne laisseront pas de traîner souvent en lon-

AVANT-PROPOS. 5

gueur ; des combats entre des armées peu nombreuses, & où quelquefois il y a peu de sang répandu. Qui a donc pu rendre ces guerres si célèbres ? Salluste nous l'apprend. «^a Les exploits des Athéniens, dit-il, peuvent être considérés en eux-mêmes comme grands & magnifiques : on peut dire pourtant qu'ils sont en quelque sorte au dessous de leur réputation. Mais parce qu'il y a eu dans la Grèce une foule de beaux esprits & d'excellens écrivains, ces exploits sont vantés dans tout l'univers, comme grands & merveilleux. Ainsi les actions des Athéniens paroissent grandes à proportion de l'esprit & de l'habileté des écrivains qui les ont célébrées. »

Salluste, assez jaloux d'ailleurs de la gloire qu'avoient acquis aux Romains les actions éclatantes dont leur histoire est pleine, rend ici justice à celles des Grecs, en reconnoissant qu'elles ont

^a Atheniensium res gestæ, sicuti ego existimo, factis amplæ magnificæque fuerunt : verum aliquanto minores tamen, quàm famâ feruntur. Sed quia provenere ibi scriptorum magna ingenia, per terrarum orbem Atheniensium facta pro maximis celebrantur. Ita eorum quæ fecere virtus tanta habetur, quantum eam verbis potuere exrollere præclara ingenia. Sallust. in bello Castlin.

une vraie grandeur & une vraie magnificence, quoiqu'inférieures selon lui à leur réputation. Qu'est-ce donc que cet éclat étranger & emprunté que les historiens y ont ajouté par leur éloquence ? C'est que par toute la terre on vante de concert les actions des Athéniens comme tout ce qui s'est jamais fait de plus grand : *Per terrarum orbem Atheniensium facta PRO MAXIMIS CELEBRANTUR*. Toutes les nations, séduites & comme enchantées par les charmes des écrivains Grecs, mettent les exploits de ce peuple au dessus de tout ce qui s'est fait ailleurs de plus beau. Voilà, selon Salluste, le service qu'a rendu aux actions des Athéniens l'histoire écrite comme elle l'est par les Grecs : & il est bien fâcheux que la nôtre, faute d'un pareil secours, ait laissé périr une infinité de belles actions & de belles paroles, auxquelles l'antiquité eût bien su donner du relief, & qui feroient beaucoup d'honneur à la nation.

Mais, quoi qu'il en soit, on doit convenir qu'il ne faut pas toujours juger du prix d'une action, ni du mérite de ceux qui y ont eu part, par

l'importance de l'événement. C'est dans les sièges & dans les combats, tels que ceux dont il est parlé dans la guerre du Péloponnèse, que paroît véritablement toute l'habileté d'un Général. Aussi remarque-t-on que ce n'est qu'à la tête de petites armées, & dans des pays assez peu étendus, que nos plus grands Capitaines du siècle passé ont fait paroître leur grande capacité, & ont égalé les plus fameux Capitaines de l'antiquité. Dans ces sortes d'actions le hazard n'a part à rien, & ne couvre point les fautes si l'on en fait. La prudence du Chef règle & conduit tout. Il est véritablement l'ame de ses troupes, qui n'agissent & ne se remuent qu'au signal qu'il en donne. Il voit tout, & est par tout. Rien n'échape à son attention ni à sa vigilance. Les ordres sont donnés à propos, & exécutés de même. Ruses, stratagèmes, fausses marches, attaques vraies ou simulées, campemens, décampemens, tout en un mot part & dépend de lui seul.

Et c'est en quoi la lecture des historiens Grecs, tels que Thucydide, Xénophon, Polybe, peut être infiniment utile aux jeunes Officiers; parce

8 A V A N T - P R O P O S .

que ces historiens , qui étoient en même tems excellens Capitaines, entrent dans un grand détail , & conduisent les lecteurs comme par la main dans les sièges & dans les combats qu'ils décrivent , leur apprenant ainsi par l'exemple des plus grands Généraux de l'antiquité , & par une sorte d'expérience anticipée , comment il faut faire la guerre.

C E N'EST PAS seulement pour les actions guerrières que l'histoire de la Grèce nous fournira de grands modèles. Nous y verrons de fameux Législateurs , de très-habiles Politiques , des Magistrats nés pour le gouvernement , des hommes qui ont excellé dans tous les arts & dans toutes les sciences , des Philosophes qui ont poussé leurs recherches aussi loin qu'on le pouvoit dans ces tems reculés , & qui nous ont laissé des maximes de morale capables de faire rougir des Chrétiens.

Il est vrai que ces mêmes Philosophes, si éclairés sur de certains points, ont été entièrement aveugles sur d'autres , jusqu'à ignorer & à combattre les principes les plus clairs de la loi naturelle ; & que souvent leur con-

duite a démenti leur doctrine , s'étant prostitués aux déréglemens les plus grossiers. La divine Providence l'a permis ainsi , & les a livrés à un sens réprouvé , pour punir leur orgueil , & pour nous instruire par leur exemple , en nous montrant de quoi sont capables les hommes , même les plus habiles & les plus éclairés , quand ils sont abandonnés à leur propre foiblesse & à leur corruption naturelle , & de quels abymes la grace du divin Médiateur nous a tirés. Mais les déréglemens où ils sont tombés & du côté de l'esprit S. August. de Doctr. Christ. lib. 2. cap. 40. & du côté du cœur , quoique nous devions les détester , n'empêchent pas qu'il n'y ait dans leurs livres d'excellentes maximes , que nous devons , selon la pensée de S. Augustin , revendiquer comme un bien qui nous appartient , de même que les Israélites , en sortant de l'Egypte , s'enrichirent de ses dépouilles ; & c'est ainsi qu'en ont usé tous les saints : *Ipsi gentiles si quid divinum & rectum in doctrinis suis habere poterunt , non improbaverunt sancti nostri.* De bapt. contr. Donat. lib. 6. cap. 87.

J'en dis autant des actions vertueuses qui se rencontrent chez les payens , telles que l'histoire des Grecs nous en fournira un grand nombre.

Saint Augustin a nous avertit, *que selon la règle de la justice, SECUNDUM JUSTITIÆ REGULAM, non seulement nous ne pouvons point blâmer & condamner ces actions, mais que nous avons raison de les louer & de les relever.* Ce n'est pas que ces actions soient bonnes & louables en tout; saint Augustin étoit bien éloigné de le penser.^b Il les trouvoit telles en elles-mêmes, & du côté du devoir: mais du côté de la fin il les trouvoit très condamnables, parce qu'elles n'étoient point rapportées à Dieu. Ce n'est pas au vrai Dieu, qui leur étoit inconnu, qu'ils demandoient la sagesse des bons conseils, le succès des entreprises, les talens, la vertu. Ce n'est pas au vrai Dieu qu'ils en rendoient grâces, & qu'ils en raportoient

a Habendi sunt in eorum numero, quorum etiam impiorum, nec deum verum veraciter justeque colentium, quædam tamen facta vel legimus, vel novimus, vel audimus, QUÆ SECUNDUM JUSTITIÆ REGULAM NON SOLUM VITUPERARE NON POSSUMUS, VERUM ETIAM MERITO RECTE QUE LAUDAMUS, S. *August.*

lib. de Spir. & lit. n. 48.

b Noveris itaque, non officiis, sed finibus, à vitiis discernendas esse virtutes. Officium autem est, quod faciendum est: finis verò, propter quod faciendum est. *Id. contr. Julian. lib. 4. cap. 3. n. 21.*

Non erat in eis vera justitia, quia non actibus sed finibus pensantur officia. *Ibid. n. 26.*

la gloire par une humble reconnoissance. Ils ne le regardoient ni comme la source & le principe, ni comme le terme de tout ce qu'ils faisoient de bien. Leurs meilleures actions étoient corrompues ou par l'amour propre, ou par l'ingratitude. Elles n'ont pu leur être utiles pour le salut, qui ne s'obtient point sans la foi en Jesus-Christ.

Mais cela n'empêche pas, selon le même saint Augustin, qu'il ne soit très-utile pour l'instruction des chrétiens, & pour la règle des mœurs, de rapporter & de mettre dans tout leur jour les actions des payens, pourvû qu'on ne les fasse valoir que leur juste prix : car je puis bien ici appliquer aux Grecs, ce que ce Pere dit des Romains. Il emploie un chapitre entier, qui est assez long, à en indiquer les actions & les vertus les plus éclatantes : amour du bien public, dévouement pour la patrie, constance à souffrir les tourmens les plus cruels & la mort même, desintéressement noble & généreux, estime & pratique de la pauvreté, profond respect pour les dieux & pour la religion. Il fait sur ce sujet quelques réflexions, qui mèn-

*S. August.
de Civ. D. lib.
5. cap. 18.*

ritent bien de trouver ici leur place.

Premièrement, il reconnoit que c'est pour récompenser toutes ces vertus des Romains, qui n'en avoient pourtant que le nom & l'apparence, que Dieu leur a accordé l'Empire de l'univers, récompense proportionnée à leurs mérites, & dont ils ont été assez aveugles pour se contenter. ^a C'est par la même raison qu'il a voulu que leur nom fût si glorieux & si honoré chez toutes les nations & dans tous les siècles, afin que tant de belles actions ne demeurassent pas absolument sans récompense.

En second lieu, il remarque que ces vertus, toutes fausses qu'elles sont, ne laissent pas de devenir fort utiles au genre humain, & qu'elles entrent dans les vûes secrètes que Dieu a sur les peuples, soit pour les récompenser, soit pour les punir. En effet l'amour de la gloire, qui est un vice, en étouffe d'autres beaucoup plus nuisibles & plus funestes, comme sont l'in-

^a Si Romanis Deus neque hanc terrenam gloriam excellentissimi imperii concederet, non redderetur merces bonis artibus eorum, id est virtutibus, quibus ad tantam gloriam pervenire nitebantur. At non est quod de summi & veri Dei justitia conquerantur: perceperunt mercedem suam. *Ibid. cap. 15.*

justice, la violence, la cruauté.^a Et qui doute qu'un Magistrat, qu'un Gouverneur de province, qu'un Roi, qui ne sera doux, patient, juste, chaste, bienfaisant, que par des vûes humaines de gloire ou d'intérêt, ne soit infiniment plus utile à la République, que s'il n'avoit pas cette ombre & ces dehors de vertu; & que des hommes de ce caractère ne soient un présent du ciel bien précieux. On en peut juger par la comparaison de Magistrats & de Princes d'un caractère opposé, qui renonçant à tout honneur & à toute probité, comptant pour rien la réputation, foulant aux piés les loix les plus saintes, n'en reconnoissent d'autres que leurs passions & leur brutalité: tels enfin que Dieu en donne dans sa colére aux peuples qu'il veut punir, & qu'il juge dignes de tels maîtres. *Et talibus quidem dominandi potestas non datur nisi summi Dei providentia, quando res humanas judicat talibus dominis dignas.* Ibid. cap. 19.

La troisième & dernière réflexion, & la plus propre à mon sujet & au

^a Constat eos, qui ci- | habent virtutem vel ip-
ves non sint civitatis | sam, quam si nec ipsam.
æternæ, utiliores esse ter- | Ibid. cap. 19.
renæ civitati, quando

but que je me propose en écrivant l'histoire ancienne , regarde l'usage qu'il faut faire des louanges qu'on donne aux payens. Elle montre le fruit qu'un sage Lecteur doit tirer du récit des belles & vertueuses actions des Grecs , dont ce volume & les suivans seront remplis. Quand on les verra sacrifier leurs biens au soulagement de leurs concitoyens , leur vie au salut de l'Etat , leur gloire même à l'utilité publique , quand on leur verra pratiquer les vertus les plus difficiles , & cela par de purs motifs humains , pour acquérir une réputation passagère : ^a quels reproches ne doit-on pas se faire , & combien ne doit-on pas rougir , si dans une religion qui nous promet des récompenses éternelles , & qui nous présente de si puissans motifs d'amour & de reconnaissance , nous n'avons pas le courage de pratiquer les mêmes vertus ? Que si nous avons le bonheur d'être fidèles à nos engagemens , pouvons-

^a Ideo nobis proposita sunt necessariae commotionis exempla , ut , si virtutes , quarum istæ utcumque sunt similes , quas isti pro civitatis terrenæ gloria tenuerunt , pro Dei gloriosissima civitate non teneamus , pudore pungamur ; si teneamus , superbia non extollamur. *Ibid.* , cap. 18.

nous en tirer vanité, en comparant le peu que nous faisons avec ce que la gloire seule faisoit entreprendre à des hommes qui ne connoissoient point Dieu, & qui bernoient tous leurs desirs aux biens de la vie présente?

Voilà donc, selon saint Augustin, la principale utilité que l'on doit tirer de l'étude & de la lecture de l'histoire profane, & à Dieu n'a rendu les Grecs & les Romains si connus & si illustres, que pour donner plus de poids aux exemples de vertu que leur histoire nous fournit, afin que les étudiant avec une attention sérieuse, nous comprenions par l'amour qu'ils ont eu pour une patrie terrestre & pour une gloire de peu de durée, quel zèle nous devons avoir pour la patrie céleste, où une félicité éternelle nous attend.

SI LES VERTUS de ceux dont il est parlé dans l'histoire, peuvent nous servir de modèles dans la conduite de la vie, leurs défauts & leurs vices ne

^a Ut cives æternæ illius civitatis, quamdiu hic peregrinantur, diligenter & sobriè illa intueantur exempla, & videant quanta dilectio debeat	supernæ patriæ propter vitam æternam, si tantum à suis civibus terrena dilecta est propter hominum gloriam. <i>Ibid.</i> cap. 16.
--	--

sont pas moins propres à nous instruire, & le respect qu'un historien doit à la vérité ne lui permet pas de les dissimuler dans la crainte d'obscurcir leur réputation. Ce que je dis ici n'est point contraire à une règle que Plutarque établit sur ce sujet dans la préface qui est à la tête de la vie de Cimon. Il exige qu'on fasse valoir & qu'on mette dans tout leur jour les belles actions des grands hommes : mais pour les fautes qui leur échappent quelquefois dans le trouble de la passion, ou que la nécessité des affaires leur arrache, ^a les regardant plutôt comme quelque degré de perfection qui manque à leur vertu, que comme des vices & des crimes qui partent d'un mauvais fonds, il veut que par compassion pour la foiblesse de la nature humaine qui ne produit rien d'absolument parfait, on se contente de les montrer légèrement : de même qu'un peintre habile, s'il a un beau visage à peindre, & qu'il s'y rencontre quelque tache, quelque petit défaut, ne les supprime pas entièrement, mais aussi ne se croit pas obligé de les ren-

*In Cim. pag.
479. 480.*

^a Ελαίματα μὲντοι ἀρετῆς πλεον, ἢ κακίας
πυρρίσματα.

dire avec une exactitude rigoureuse, parce que l'un gâteroit la beauté du portrait, & que l'autre détruiroit la vérité de la ressemblance. La comparaison même qu'il emploie fait voir qu'il ne parle que de défauts légers & pardonnables. Mais pour les actions d'injustice, de violence, de brutalité, nul prétexte ne doit les faire dissimuler, & je ne croi pas qu'on voulût accorder à l'histoire le même privilège qu'à la peinture, ^a qui a inventé l'art du profil pour représenter de côté un Prince qui avoit perdu un œil, & pour couvrir par cet innocent & ingénieux artifice une difformité si frappante. L'histoire, dont la loi la plus essentielle est la sincérité, ne souffre point ces sortes de ménagemens, qui lui feroient perdre un grand avantage.

Le blâme, la honte, l'infamie, la haine, & souvent l'exécration publique, toujours attachées aux actions criminelles & brutales, ne sont pas moins propres à inspirer de l'horreur pour le vice; que la gloire, qui suit toujours les belles actions, est propre

^a *Habet in pictura speciem tota facies. Apelles tamen imaginem Antigoni latere tantum altero*

ostendit, ut amissi oculi deformitas lateret. Quintil. lib. 2. cap. 13.

à faire aimer la vertu. Et ^a c'est là ; selon Tacite , le double but que tout historien doit se proposer , en faisant un choix de ce qu'il y a de plus frappant en bien & en mal , pour rendre au solide mérite par un hommage public de louanges la justice qui lui est dûe , & pour faire abhorrer les vices par la crainte d'une infamie éternelle.

L'histoire que je traite ne fournira que trop de ces derniers exemples. Du côté des Perses , on verra par ce qui est dit de leurs Rois , que les Princes qui peuvent tout , sont souvent livrés à toutes leurs passions : Que rien n'est plus difficile que de résister à l'illusion de sa propre grandeur , & aux flateries de tous ceux dont on est environné : Que la liberté de contenter tous ses desirs , & de faire le mal impunément , est une dangereuse tentation : Que les meilleurs naturels ont bien de la peine à s'en défendre : Qu'après avoir eu d'assez heureux commencemens , ils se laissent gâter

^a Exequi sententias haud institui , nisi insignes per honestum , aut notabili dedecore : quod præcipuum munus annalium reor , ne virtutes fileantur , utque pravis dictis factisque ex posteritate & infamia metus sit. *Tacit. Annal. lib. 3. cap. 69.*

insensiblement par la mollesse, par l'orgueil, par la haine des conseils sincères ; & qu'il est rare qu'ils comprennent que c'est quand on se voit au dessus de tout, qu'on a un plus grand besoin de modération & de sagesse & pour soi, & pour les autres ; & qu'il faut être alors doublement sage & doublement fort, pour borner au dedans par la raison une puissance, que rien ne borne au dehors.

Du côté des Grecs, la guerre du Péloponnèse fera connoître les tristes effets de leurs divisions intestines, & les excès funestes où la jalousie de la domination les porta : l'injustice, l'ingratitude, la perfidie, le violement ouvert des traités, ou de petites fineses & indignes ruses pour en éluder l'exécution. Elle montrera comment les Lacédémoniens & les Athéniens s'avilissent honteusement devant des barbares, pour en mendier quelques secours d'argent : comment les libérateurs de la Grèce renoncent à la gloire de tous leurs travaux passés & de tous leurs exploits, pour aller faire leur cour à des Satrapes fiers & dédaigneux, & pour aller implorer successivement & à l'envi la protection de

leur ennemi commun tant de fois vaincu ; comment ils se servent des secours qu'ils en tirent , pour opprimer leurs anciens alliés , & pour étendre leur propre domaine par des voies injustes & violentes.

De part & d'autre , & quelquefois dans un même homme , on verra un mélange étonnant de bien & de mal , de vertus & de vices , de nobles actions & de bas sentimens ; & l'on se demandera peut-être souvent à soi-même si ce sont donc les mêmes personnes & les mêmes peuples dont on raporte des choses si différentes , & s'il est possible que d'un même fonds sortent tantôt une lumière si brillante , tantôt une fumée & une noirceur si ténébreuse. Je raporte les choses comme je les trouve dans les Auteurs , & les portraits que je présente au Lecteur sont toujours peints d'après ce que l'histoire ancienne nous apprend de ceux dont je parle , & je pourrois dire aussi d'après la nature du cœur humain. Mais il me semble que ce mélange même de bien & de mal , quoique bizarre en soi , peut devenir pour nous d'une grande utilité , & nous servir de préservatif contre un

danger assez ordinaire & assez naturel.

Car, si nous trouvions, soit chez les peuples soit dans les particuliers, une probité & une noblesse de sentimens qui se soutinssent toujours également, & qui parussent sans tache & sans foiblesse, nous serions tentés de croire que le paganisme est capable de produire de véritables & de parfaites vertus, quoique la religion nous enseigne que celles que nous y admirons le plus n'en ont que l'ombre & le nom. Mais la vue des défauts, des imperfections, des vices, des crimes même quelquefois les plus noirs, qui se trouvent mêlés & qui succèdent assez souvent de fort près aux actions les plus vertueuses, nous apprend à modérer notre estime & notre admiration; & en même tems que nous louons ce qui nous paroît d'honnête, de beau, & de grand chez les payens, à ne pas prodiguer au fantôme de la vertu un hommage entier & sans réserve, qui n'est dû qu'à la vertu même.

Voilà les bornes que je desire qu'on mette aux louanges que je donne aux grands hommes de l'antiquité, & à

leurs belles actions ; & si , contre mon intention , il m'échape quelques termes qui ne paroissent pas assez mesurés , je prie le Lecteur de les interpréter favorablement , & de les réduire à leur juste valeur.

ARTICLE SECOND.

Plan & division de ce troisième Volume.

L'HISTOIRE renfermée dans ce troisième Volume, comprend l'espace de cent dix-sept ans , sous les régnes de six Rois de Perse , savoir Darius premier de ce nom , fils d'Hystaspe ; Xerxès I ; Artaxerxe , surnommé *Longue-main* ; Xerxès II ; Sogdien ; (ces deux derniers régnèrent très-peu de tems) & Darius II , appelé ordinairement Darius Nothus. Cette histoire s'étend depuis l'an du monde 3483 jusqu'à l'an 3600.

Tout cet espace se divise naturellement en deux parties , & je le diviserai aussi en deux Livres.

P R E M I E R E P A R T I E.

LA PREMIERE partie, qui est de quatre-vingts-dix ans , s'étend depuis le commencement du règne de

Darius I. jusqu'à la quarante-deuxième année de celui d'Artaxerxe, où commence la guerre du Péloponnèse, c'est-à-dire depuis l'an du monde 3483, jusqu'à l'an 3573. Elle contient principalement les différentes entreprises & expéditions des Perses contre la Grèce, qui ne fut jamais plus féconde en grands hommes ni en grands événemens, & qui ne fit jamais éclater de plus grandes ni de plus solides vertus. On y verra les célèbres journées de Marathon, des Thermopyles, d'Artémise, de Salamine, de Platée, de Mycale, d'Eurymédon, &c. Les plus grands Capitaines de la Grèce y signaleront leur courage, Miltiade, Léonide, Thémistocle, Aristide, Cimon, Pausanias, Périclès, Thucydide, &c.

Pour mettre le Lecteur en état de se rappeler plus facilement dans l'esprit ce qui se passoit, dans l'espace de tems dont je parle ici, chez les Juifs, & même chez les Romains, dont l'histoire est entièrement étrangère à celle des Perses & des Grecs, j'en marquerai ici en peu de mots les principales époques.

Le peuple de Dieu étoit pour lors

retourné de Babylone à Jérusalem sous la conduite de Zorobabel. Ussérius croit que c'est sous le règne de Darius qu'il faut placer l'histoire d'Esther. Le peuple de Dieu, à l'ombre de la protection de ce Prince, animé par les vives exhortations des prophètes Aggée & Zacharie, acheva enfin le bâtiment du temple, que les cabales de ses ennemis l'avoient obligé d'interrompre pendant plusieurs années. Artaxerxe ne fut pas moins favorable aux Juifs. Il envoya d'abord Esdras à Jérusalem, qui y rétablit le culte public & l'observation de la loi; puis Néhémie, qui environna cette ville de murs, & la mit en sûreté contre les attaques des voisins, jaloux de sa grandeur renaissante. On croit que Malachie, le dernier des prophètes, étoit contemporain de Néhémie, ou qu'il a prophétisé peu de tems après.

La première année de Darius étoit la 233^e de l'établissement de Rome. Tarquin le superbe y régnoit alors. Environ dix ans après il en fut chassé. Au gouvernement des Rois on substitua celui des Consuls. Dans l'espace qui suit, arrivent la guerre contre
Porsenna;

Porfenna ; l'établissement des Tribuns du peuple ; la retraite de Coriolan chez les Volſques , & la guerre qui en fut la ſuite ; les guerres des Romains contre les Latins , les Veiens, les Volſques , & autres peuples voiſins ; la mort de Virginie ſous les Décemvirs ; les diſputes entre le peuple & le ſénat au ſujet des mariages & du Conſulat , ce qui donna lieu à la création des Tribuns militaires à la place des Conſuls. Cet eſpace ſe termine à la 323^e année depuis que Rome fut bâtie.

SECONDE PARTIE.

LA SECONDE partie de ce Volume, qui eſt de vingt-ſept ans, s'étend depuis la 42^e année d'Artaxerxe Longue-main , juſqu'à la mort de Darius Nothus ; c'eſt-à-dire depuis l'an du monde 3573 juſqu'à l'an 3600. Elle renferme les dix-neuf premières années de la guerre du Péloponnéſe qui en dura vingt-ſept , dont la Grèce & la Sicile furent le théâtre , & dans laquelle les Grecs , vainqueurs des barbares, tournèrent leurs armes les uns contre les autres. Du côté des Athéniens , Périclès , Nicias , Alci-

biade ; de celui des Lacédémoniens, Brasidas , Gylippe , Lyfandre , s'y distinguèrent d'une manière particulière.

L'histoire Sainte , pendant l'espace des vingt-sept ans dont nous parlons ici , est fort stérile ; ou pour mieux dire , elle est absolument inconnue.

Rome continue d'être agitée par différentes disputes entre le sénat & le peuple. Vers la fin de cet intervalle, & à peu près la 350^e année de Rome , on forme le siège de Veies , qui dura dix ans.

ARTICLE TROISIEME.

*Abrégé de l'histoire des Lacédémoniens
depuis l'établissement de leurs Rois
jusqu'au règne de Darius I.*

AN du Monde.
2900.
Avant Jésus-Christ. 1104.

L'ib. 6. cap. 52.

J'AI DÉJÀ remarqué ailleurs que quatre-vingts ans après la prise de Troie, les Héraclides , c'est-à-dire les descendants d'Hercule , rentrèrent dans le Péloponnèse , & se saisirent de Lacédémone, où deux freres, Eurysthène & Proclès , fils d'Aristodème , régnèrent ensemble. Hérodote remarque que ces deux freres , pendant leur vie, furent toujours en discorde , & que

presque tous leurs descendans héritèrent d'eux cette disposition d'antipathie & de haine : tant il est vrai que le pouvoir souverain ne peut souffrir de partage , & que ce sera toujours trop que deux rois pour un royaume ! Depuis eux , le sceptre demeura toujours conjointement dans ces deux familles. Il est très-remarquable que ces deux branches ont subsisté près de neuf cens ans , depuis le retour des Héraclides dans le Péloponnèse jusqu'à la mort de Cléomène , & qu'elles ont fourni sans interruption des Rois à Sparte , presque toujours de pere en fils , sur tout pour la première branche.

§. I. *Origine & condition des Ilotes.*

QUAND les Lacédémoniens commencèrent à s'établir dans le Péloponnèse , ils trouvèrent beaucoup d'opposition de la part des habitans du pays , qu'il falut domter par les armes les uns après les autres , ou les recevoir dans leur alliance à des conditions douces & équitables , en leur imposant un léger tribut. Strabon Strab. lib. 8. parle d'une ville , nommée *Elos* , si- pag. 365. tuée assez près de Sparte , qui après Plut. in Lyc. pag. 40.

avoir subi le joug comme les autres ; se révolta ouvertement , & refusa de paier le tribut. *Agis*, fils d'Eurysthène, nouvellement établi sur le trône, sentit toutes les conséquences de cette première revolte , & se mit aussitôt en campagne avec *Soüs* son collègue. La ville fut assiégée , & après une assez longue résistance , forcée de se rendre à discrétion. Il crut devoir faire un exemple qui intimidât tous les voisins par la sévérité du châti-
ment , mais qui cependant n'aliénât pas les esprits par une cruauté inhumaine. Il ne versa point de sang. Il laissa la vie à tous les habitans de la ville , mais il leur ôta la liberté , & les réduisit tous à la dure condition d'esclaves. Ils furent employés aux ministères les plus vils & les plus pénibles , & traités avec une extrême rigueur. C'est ce qu'on appelloit *Ilotes*. Le nombre s'en accrut extraordinairement dans la suite, les Lacédémoniens sans doute donnant ce nom à tous ceux qu'ils réduisoient en servitude. Comme ils étoient accoutumés à un grand loisir , & ne respiroient que la guerre , ils confièrent la culture de leurs champs à ces esclaves, leur

assignant à chacun une certaine portion de terres dont ils devoient rendre le fruit tous les ans à leurs maîtres, qui s'attachoient à appesantir leur joug par toutes sortes de mauvais traitemens. C'étoit une-mauvaise politique, qui ne servoit qu'à nourrir dans le cœur de l'Etat un grand nombre d'ennemis dangereux, toujours prêts à prendre les armes, & à se révolter. Les Romains en usèrent avec bien plus de sagesse, en incorporant à l'Etat les peuples qu'ils subjugoient, en les associant au droit de bourgeoisie, & par là, d'ennemis qu'ils avoient été, les rendant leurs concitoiens & leurs frères.

§. II. *Lycurgue Législateur des Lacédémoniens.*

Eurytion, d'autres le nomment *Enrypon*, succéda à *Soüs*. Pour gagner l'amitié du peuple, & faire mieux goûter son gouvernement, il jugea à propos de relâcher quelque chose de la puissance absolue des Rois : ce qui le fit tellement aimer du peuple, qu'on donna son nom à tous ses descendans, qui furent appelés *Eurytionides*. Ce relâchement produisit dans

Sparte une horrible confusion & une licence effrénée, qui y causèrent des maux infinis pendant un assez long-tems. Le peuple devint si insolent, que rien ne pouvoit l'arrêter. Si les Rois, qui succédèrent à Eurytion, vouloient employer la force pour recouvrer leur autorité, ils se faisoient haïr; & si, par complaisance ou par foiblesse, ils prenoient le parti de dissimuler, leur bonté ne servoit qu'à leur attirer le mépris de la part de ces rebelles: de manière que tout étoit en desordre, & qu'on n'écouloit plus les loix. Ces troubles avancèrent la mort du pere de Lycurgue. Il se nommoit *Eunomus*, & fut tué dans une émeute populaire. *Polydeste*, son fils aîné, qui lui succéda; étant mort bientôt après sans enfans, tout le monde crut que Lycurgue alloit être roi. Il le fut en effet pendant que la grossesse de sa belle-sœur fut inconnue: mais sitôt qu'elle parut, il déclara que la roiauté appartenoit à l'enfant qui en naîtroit, si c'étoit un fils; & dès ce moment il administra le royaume comme son tuteur, sous le titre de *Prodicos*, que les Lacédémoniens donnent aux tuteurs des Rois.

Quand l'enfant fut venu au monde, Lycurgue le prenant entre ses bras, & adressant la parole à ceux qui étoient présens, *Voici*, dit-il, *le Roi qui nous vient de naître, Seigneurs Spartiates*; & en même tems il le mit dans la place du Roi, & le nomma *Charilaüs*, à cause de la joie que tout le peuple témoigna de sa naissance. On peut voir, à la fin du second volume, tout ce qui regarde l'histoire de Lycurgue, la réforme qu'il fit dans Sparte, & les loix qu'il y établit. *Agésilas* régnoit pour lors dans la branche aînée.

§. III. *Guerre entre les Argiens & les Lacédémoniens.*

QUELQUE tems après, sous le règne de Théopompe, il s'éleva une guerre entre les Argiens & les Lacédémoniens, au sujet d'un petit pays appelé *Thyrea*, qui confinoit aux deux peuples, & qu'ils prétendoient chacun leur appartenir. Les deux armées étant près d'en venir aux mains, on convint, pour épargner le sang, de vider la querelle par trois cens des plus braves qu'on choisiroit de chaque côté, à condition que la terre en litige demeureroit au parti vainqueur.

Pour laisser aux combattans plus de liberté, les troupes se retirèrent. Alors ces généreux champions, qui avoient tout le courage de deux grandes armées, s'avancèrent fièrement les uns contre les autres, & combattirent avec tant d'acharnement, qu'ils restèrent tous sur la place, excepté trois, deux du côté des Argiens, & l'autre de celui des Lacédémoniens : encore fut-ce la nuit qui les sépara. Les deux Argiens, se comptant pour vainqueurs, coururent en porter la nouvelle à Argos : le Lacédémonien, il s'appelloit Othryade, aiant dépouillé les corps morts des Argiens, & porté leurs armes dans le camp des siens, demeura dans son poste. Le lendemain, les troupes revinrent de part & d'autre. Chacun prétendoit avoir la victoire de son côté : les Argiens, parce qu'il étoit resté plus de soldats de leur part que de l'autre ; les Lacédémoniens, parce que le peu d'Argiens qui étoient restés avoient pris la fuite, au lieu que leur unique soldat étoit demeuré maître du champ de bataille, & avoit dépouillé les corps morts des ennemis. Il falut en venir aux mains, pour décider la question.

Le sort se déclara pour les Lacédémoniens, & le champ Tyreate leur demeura. Othryade, ne pouvant se résoudre à survivre à ses braves compagnons, ni soutenir après leur mort la vûe de Sparte, se tua lui-même sur le champ de bataille, & voulut avoir avec eux un sort & un tombeau commun.

§. IV. *Guerres entre les Messéniens & les Lacédémoniens.*

ON COMPTE jusqu'à trois guerres entre les Messéniens & les Lacédémoniens, toutes très-vives & très-sanglantes. La Messénie étoit une région du Péloponnèse, au couchant & assez près de Sparte, qui étoit puissante, & qui avoit ses rois particuliers.

Première guerre de Messénie.

LA PREMIÈRE guerre de Messénie dura vingt ans entiers, & commença la seconde année de la ix Olympiade. Les Lacédémoniens prétendoient avoir plusieurs griefs considérables contre les Messéniens, entre autres l'injure faite à leurs filles qui furent deshonorées par les habitans de la

AN. M. 3261.
A. J. C. 743.
Pausan. lib. 4.
pag. 216. 242.
Justin. lib. 3.
cap. 4.

Messénie, lorsqu'elles alloient selon la coutume à un temple limitrophe des deux peuples, & le meurtre de Télécle leur roi qui en fut la suite. Peut-être l'envie d'étendre leur domination, & de s'emparer d'un terrain qui étoit si fort à leur bienfaisance, fut-elle la véritable cause de cette guerre. Quoiqu'il en soit, elle éclata sous le règne de Polydore & de Théopompe rois de Sparte, dans le tems qu'à Athènes les Archontes étoient encore dix ans en charge.

Pausan. pag.
235. 226. Euphaès, 13^e descendant d'Hercule, étoit pour lors roi de Messénie. Il confia le commandement de son armée à Cléonnis. Les Lacédémoniens commencèrent la campagne par le siège d'Amphée, petite ville & peu considérable, mais qui leur parut fort propre à en faire leur place d'armes. Elle fut emportée d'emblée, & tous les habitans furent passés au fil de l'épée. Ce premier échec ne servit qu'à animer les Messéniens, en leur faisant voir ce qu'ils avoient à craindre s'ils ne se défendoient courageusement. Les Lacédémoniens de leur côté s'engagèrent par serment à ne point mettre bas les armes, & à ne point retour-

nier à Sparte, qu'ils ne se fussent rendu maîtres de toutes les villes & de toutes les terres des Messéniens, tant ils comptoient sur leurs forces & sur leur courage.

Il se donna deux combats, où la perte fut à peu près égale de part & d'autre. Après le second, les Messéniens furent affligés de maux extrêmes par la disette de vivres, qui donna lieu à une grande désertion dans leurs troupes, & ensuite y causa la peste. *Ibid. pag. 227-234.*

Ils consultèrent l'oracle de Delphes, qui leur ordonna, pour appaiser la colère des dieux, de leur immoler une vierge du sang roial. Aristomène, qui étoit de la race des Epytides, offrit sa fille. Alors les Messéniens, voyant bien que s'ils laissoient des garnisons dans toutes leurs places, ils affoibliroient extrêmement leurs forces, abandonnèrent toutes les autres villes, allèrent se camper près d'Irthome, petite ville située sur le haut d'une montagne de même nom, & s'y fortifièrent. Il se passa sept années entières, où il n'y eut que de légères escarmouches de part & d'autre, sans

que les Lacédémoniens osassent présenter bataille à l'ennemi.

*Diod. lib. 15.
pag. 378.*

Ils desespéroient presque de pouvoir le vaincre, & il n'y avoit que la religion du serment qui les contraignit à continuer une guerre qui leur étoit devenue si onéreuse. Ce qui les inquiétoit le plus, étoit la crainte que leur absence qui les tenoit éloignés de leurs femmes depuis plusieurs années, & qui pouvoit encore durer lontems, ne fît périr leurs familles, & ne laissât Sparte destituée de citoyens. Pour obvier à ce malheur, ils y envoièrent ceux des soldats qui étoient venus à l'armée depuis qu'on avoit prêté le serment rapporté ci-dessus, & ne firent point difficulté de leur prostituer leurs femmes. Ceux qui naquirent de ces conjonctions il légitimes, furent appelés *Parthéniens*, nom qui désignoit la honte de leur naissance. Quand ils furent dans un âge avancé, ne pouvant souffrir cet opprobre, ils se bannirent eux-mêmes de Sparte, & sous la conduite de Phalante ils allèrent s'établir en Italie à Tarente, après en avoir chassé les anciens habitans.

*Et regnata
petamLaconi
rura Phalan-
to. Horat. Od.
6. lib. 2.*

Enfin la huitième année de la guerre, *Pausan. 234.*
 qui étoit la troisième du règne d'Euphaès, se donna le sanglant combat *Diodor. in
Fragm.*
 près d'Ithome. Euphaès enfonça les
 bataillons de Théopompe avec trop
 d'ardeur & de précipitation pour un
 roi. Il y fut percé de coups, dont plu-
 sieurs étoient mortels. Il tomba, &
 sembloit rendre l'ame. Alors on fit de
 part & d'autre des efforts extraordi-
 naires de courage, les uns pour enlever
 le Roi, les autres pour le sauver.
 Cléonnis tua huit Spartiates qui l'en-
 traînoient, & les aiant dépouillés,
 mit leurs armes en garde entre les
 mains de ses soldats. Il avoit reçu plu-
 sieurs blessures, & elles étoient toutes
 par devant, preuve certaine qu'aucun
 des ennemis ne lui avoit fait lâcher le
 pié. Aristomène, combattant dans la
 même occasion & pour le même sujet,
 tua cinq Lacédémoniens, dont il em-
 porta aussi les dépouilles, & il ne re-
 çut aucune blessure. Le Roi fut em-
 porté par les Messéniens, & tout san-
 glant & percé de coups, il témoigna
 sa joie de ce qu'ils n'avoient pas eu du
 dessous. Aristomène après la bataille,
 rencontra Cléonnis, qui ne pouvoit,
 à cause de ses blessures, marcher ni

de lui-même, ni avec le secours de ceux qui lui donnoient la main: Il le chargea sur ses épaules sans quitter ses armes, & le porta au camp.

Après qu'on eut mis le premier appareil aux plaies du Roi de Messénie & des Officiers, il s'éleva parmi les Messéniens un nouveau combat, non moins vif que le premier, mais d'une espèce bien différente, & qui en étoit la suite. Il s'agissoit d'adjuger le prix de la gloire à celui qui s'y étoit le plus distingué par sa bravoure. C'étoit pour lors un usage, déjà assez ancien, de faire proclamer publiquement le plus brave de la journée après chaque bataille. Rien n'étoit plus propre à animer le courage des Officiers & des soldats, à leur inspirer une audace intrépide, à étouffer en eux toute crainte des dangers & de la mort. Deux illustres champions entrèrent en lice, savoir Cléonnis & Aristomène.

Le Roi, tout blessé qu'il étoit, présida avec les principaux Officiers de l'armée au Conseil où cette importante dispute devoit être décidée. Chacun des contendans plaida sa cause. Cléonnis appuioit sa prétention sur le plus grand nombre d'ennemis

qu'il avoit tués , & sur les plaies qu'il avoit reçues dans le combat , témoins non douteux du courage avec lequel il avoit affronté la mort ; au lieu que l'état dans lequel Aristomène étoit sorti du combat sans y avoir reçu aucune blessure , laissoit entrevoir qu'il avoit été fort attentif à conserver sa personne , ou prouvoit tout au plus qu'il avoit été plus heureux mais non pas plus brave que lui. Quant à ce qu'il l'avoit transporté sur ses épaules dans le camp , c'étoit une action qui pouvoit montrer la force de son corps , mais rien de plus : & ici , disoit-il , il s'agit de bravoure.

Le seul reproche qu'on faisoit à Aristomène , étoit de ce qu'il n'avoit point été blessé , & c'est à quoi il s'attacha. » On m'appelle heureux , dit-il , parce que je n'ai point reçu de » blessures. Si j'en étois redevable à » ma lâcheté , je ne mériterois point » ce nom ; & au lieu d'être admis à » disputer le prix , je devrois subir la » rigueur des loix qui punissent les » lâches. Mais ce qu'on m'objecte » comme un crime , c'est ce qui fait » ma gloire. Car , soit que les enne- » mis étonnés de ma valeur n'aient

» osé me résister, ce m'est une grande
 » louange de m'être fait craindre
 » d'eux. Soit, quand ils ont combattu,
 » que j'aie eu tout ensemble & la force
 » de les tailler en pièces, & la sage
 » précaution de me préserver de leurs
 » coups, j'aurai été tout à la fois &
 » vaillant & prudent. Car quiconque
 » dans la chaleur même du combat
 » s'expose aux hazards avec sagesse &
 » retenue, montre qu'il possède en
 » même tems les vertus & du corps &
 » de l'esprit. On ne peut pas certai-
 » nement reprocher à Cléonnis qu'il
 » ait manqué de courage : mais je
 » suis fâché, pour son honneur, qu'il
 » paroisse manquer de reconnoissance.

Après ces discours on alla aux suf-
 frages. Tout le monde demeure sus-
 pendu dans l'attente du jugement.
 Nulle dispute n'égale celle-ci en vi-
 vacité. Il ne s'agit point d'or ou d'ar-
 gent. L'honneur est ici tout pur. La
 gloire desintéressée est le vrai salaire
 de la vertu. Ici les Juges ne sont point
 suspects. Les actions parlent encore.
 C'est le Roi, environné de ses Offi-
 ciers, qui préside & qui prononce.
 C'est toute une armée qui est témoin.
 Le champ de bataille est un tribunal

sans faveur & sans cabale. Toutes les voix se réunirent en faveur d'Aristomène, & lui adjugèrent le prix.

Euphaès ne survécut pas longtemps à ce jugement, & mourut quelques jours après. Il avoit régné treize ans, & fait la guerre pendant tout ce tems contre les Lacédémoniens. Comme il mouroit sans enfans, il laissa au peuple Messénien le soin de lui choisir un successeur. Cléonnis & Damis le disputèrent à Aristomène : mais celui-ci fut élu préférablement aux autres.

Quand il fut roi, il honora des plus grandes charges ses deux rivaux. Vifs amateurs du bien public encore plus que de la gloire, concurrens mais non ennemis, ces grands hommes brûloient de zèle pour la patrie, & ils n'étoient ni jaloux ni amis que pour la sauver.

J'ai suivi dans le récit que je viens de faire le sentiment de feu M. Boivin l'aîné, & ai profité de sa savante * dissertation sur un fragment de Diodore de Sicile qui étoit peu connu. Il y suppose & y prouve que le Roi dont il est parlé dans le fragment est Euphaès, & qu'Aristomène est celui que Pausanias appelle Aristodème, selon

Pausan. lib.

4. pag. 235-841.

* *Mémoires de l'Académie des Inscriptions.*

Tome 2. pag. 84-113.

42 DE L'HISTOIRE
la coutume des anciens qui souvent
avoient deux noms.

Aristomène, nommé autrement
Aristodème, régna près de sept ans,
& fut également estimé & aimé de
ses sujets. La guerre continua toujours
Clem. Alex. in Protrept. p. 20. pendant ce tems-là. Vers la fin de
son règne il battit les Lacédémoniens,
Euseb. in Prepar. lib. 4. cap. 16. prit leur roi Théopompe, & égorgea
en l'honneur de Jupiter d'Ithome trois
cens hommes, parmi lesquels le Roi
étoit la principale victime. Lui-même
s'immola peu de tems après sur le
tombeau de sa fille, pour satisfaire à
la réponse d'un oracle. Damis lui
succéda, mais sans porter la qualité
de roi.

Pausan. pag. 241. 242. Depuis sa mort, les affaires des
Messéniens allèrent toujours fort mal,
& ils se trouvèrent sans ressource &
sans espérance. Réduits à la dernière
extrémité, & manquant absolument
de vivres, ils abandonnèrent Ithome,
& se retirèrent chez ceux de leurs al-
liés qui étoient les plus voisins. La
ville aussitôt fut rasée, & tout le reste
du pays se soumit. On obligea les
Messéniens de s'engager par serment
à ne jamais abandonner le parti des
Lacédémoniens, & à ne se point ré-

volter contre eux : précaution bien inutile, & qui ne devoit servir qu'à leur faire ajouter le parjure à la révolte. On ne leur imposa point de tributs, & on se contenta d'exiger d'eux, qu'ils portassent à Sparte la moitié des grains qu'ils auroient recueillis dans la moisson. Enfin il fut stipulé que tant hommes que femmes ils assisteroient en habits de deuil aux funérailles des Rois & des principaux citoiens de Sparte ; ce qu'on regardoit apparemment comme une marque de dépendance, & comme une sorte d'hommage rendu à la nation. Ainsi fut terminée la première guerre de Messène, après avoir duré vingt ans.

AN. M. 3287.

A. J. C. 723.

Seconde guerre de Messénie.

LA DOUCEUR que les Lacédémoniens avoient montrée d'abord à l'égard des peuples de Messénie, ne fut pas de longue durée. Quand ils virent tout le pays soumis, & qu'ils le crurent hors d'état de leur susciter de nouvelles affaires, ils s'abandonnèrent à leur caractère naturel, qui étoit un caractère de fierté & de hauteur, qui dégénéroit souvent en dureté, & quelquefois même en féroçité. Au

Pausan. lib.

4. pag. 242.

261.

Justin. lib. 3.

cap. 5.

lieu de traiter les vaincus avec bonté comme des alliés & des amis, & de s'attacher à gagner par la douceur ceux qu'ils avoient domtés par la force; ils ne sembloient attentifs qu'à appesantir de jour en jour leur joug, & à leur en faire sentir tout le poids. Ils les chargeoient de tributs, les livroient à l'avarice de ceux qui étoient commis pour en faire la levée, n'écoutoient point leurs plaintes, ne leur rendoient aucune justice, les traitoient avec mépris comme de vils esclaves, & emploioient contre eux les violences les plus criantes.

L'homme, né pour la liberté, ne s'appriivoise point avec la servitude: la plus douce l'irrite & le révolte. Que faloit-il donc attendre d'un esclavage aussi dur qu'étoit celui des Messéniens? ^a Après l'avoir supporté avec peine pendant près de quarante ans, ils songèrent à secouer le joug, & à se rétablir dans leur ancien état.

AN. M. 330. Cette année étoit la quatrième de la
AV. J. C. 684. **XXIII^e.** Olympiade: la charge d'Ar-

^a Cum per complures annos gravia servitutis verbera, plerumque & vincula, ceteraque captivitatis mala perpessi essent, post longam penarum patientiam bellum instaurant. *Justin. lib. 3. cap. 5.*

chonte à Athènes étoit pour lors réduite à l'espace d'un an : Anaxandre & Anaxidame régnoient à Sparte.

Leur premier soin fut de se fortifier du secours des peuples voisins. Ils les trouvèrent fort disposés à entrer dans leurs vûes. Leur propre intérêt les y portoit. Ce n'étoit point sans crainte & sans jalousie qu'ils voioient s'élever au milieu d'eux une ville puissante, qui paroissoit manifestement vouloir étendre sa domination sur toutes les autres. Les peuples de l'Elide, ceux d'Argos, ceux de Sicyon se déclarèrent en leur faveur. Avant qu'ils fussent assemblés, il se donna un combat. * Aristomène, second de ce nom, étoit à la tête des Messéniens. C'étoit un Chef d'un courage intrépide, & d'une extrême habileté dans le métier de la guerre. Les Lacédémoniens furent battus. Aristomène, qui vouloit donner d'abord aux ennemis une idée avantageuse de lui-même, sachant qu'elle influe sur tout le reste des entreprises, eut la hardiesse d'entrer de nuit à Sparte, & d'attacher à la porte

* Selon plusieurs Histo-
riens, il y avoit en un an
trois Aristomènes dans la

première guerre de Messé-
nie. Diod. lib. 15. p. 378.

du temple de Minerve surnommée *Chalcioecos* un bouclier, dont l'Inscription marquoit que c'étoit un présent qu'Aristomène offroit à la déesse, des dépouilles des Lacédémoniens.

Cette bravade en effet étonna les Lacédémoniens. Mais ils furent encore plus allarmés de la puissante ligue qui se formoit contre eux. L'oracle de Delphes qu'ils consultèrent sur les moyens de réussir dans cette guerre, leur ordonna de faire venir d'Athènes un Chef pour leur donner conseil, & les conduire. La démarche étoit humiliante pour une ville aussi fière que Sparte. Mais la crainte de s'attirer le courroux du dieu par une desobéissance si marquée, l'emporta sur tout autre motif. On députa donc vers les Athéniens. Cette demande les embarrassa. Ils n'étoient pas fâchés de voir ceux de Lacédémone aux mains avec leurs voisins, & n'avoient pas envie de leur fournir un bon Général: d'un autre côté ils craignoient aussi de desobéir au dieu. Pour se tirer d'embarras, ils leur présentèrent Tyrée. Il étoit poète de profession, avoit quelque chose d'original dans l'esprit, & de choquant dans le corps, car il

étoit boiteux. Malgré ces défauts, les Lacédémoniens le reçurent comme un Chef que le ciel même leur envoie. Le succès ne répondit pas d'abord à leur attente. Ils furent battus trois fois consécutivement.

Les Rois de Sparte, abbatus par tant de défaites, & n'espérant pas un meilleur succès pour l'avenir, vouloient absolument retourner à Sparte, & y remener les troupes. Tyrée s'opposa fortement à ce dessein, & les fit revenir à son avis. Il parla aux troupes, & prononça des vers qu'il avoit préparés dans cette vûe, & travaillés avec un soin extrême. Il les consoloit de leurs pertes passées, qu'il attribuoit, non à aucune faute de leur part, mais à un malheur & à un destin que nulle sagesse humaine ne peut surmonter. Il leur représentoit la honte qu'il y auroit pour des Spartiates à fuir devant l'ennemi, & combien il leur seroit glorieux de périr même, s'il le falloit, les armes à la main en combattant pour la patrie. Comme si tout danger fût disparu, & que les dieux, satisfaits pleinement & apaisés par les défaites précédentes, se fussent tournés entièrement de

leur côté, il leur faisoit envisager la victoire comme certaine & comme déjà présente, & comme si elle-même les invitoit au combat. Tous les anciens qui ont parlé du caractère de la poésie de Tyrtée, remarquent qu'elle étoit pleine d'un feu, d'une ardeur, d'un enthousiasme, qui enflammoit les esprits, qui les élevoit au dessus d'eux-mêmes, qui^a leur inspiroit je ne sai quoi de généreux & de martial, qui étouffoit en eux tout sentiment de crainte des dangers ou de la mort, & qui les rendoit uniquement attentifs au salut de la patrie, & à leur propre gloire.

Ce fut véritablement l'effet que les vers de Tyrtée produisirent dans cette occasion sur les soldats. Ils demandèrent tous d'une voix commune qu'on les conduisît contre l'ennemi. Devenus indifférens pour la vie, ils ne songeoient qu'à s'assurer l'honneur de la sépulture. Ils attachèrent tous à leur bras droit des bandelettes, où ils avoient inscrit leur nom & celui de leurs peres, afin que s'ils périroient dans le combat, & que les

*Plat. lib. 1.
de leg. p. 629.
Plut. in Agid.
& Cleom. pag.
805.*

^a Tyrtæusque mares | Versibus exacuit. *Horat.*
animos in Martia bella | *in Art. poet.*

traits de leurs visages vinssent à se confondre par la longueur du tems, on pût certainement les reconnoître à ces marques. Des soldats déterminés à mourir, sont bien forts. Cela parut dans la bataille qui se donna. Elle fut très-sanglante, & la victoire longtems disputée : mais enfin les Messéniens cédèrent. Quand Tyrtée dans la suite passa à Sparte, il y fut reçu avec de grandes marques de distinction, & aggrégé au nombre des citoyens.

Le gain de cette bataille ne termina pas la guerre : elle avoit déjà duré trois ans. Aristomène aiant ramassé les débris de son armée, se retira sur une montagne qui étoit d'un difficile accès, appelée Ira. Les vainqueurs avoient compté l'emporter d'emblée : mais il s'y défendit pendant onze ans, & y fit des actions de bravoure extraordinaires. Ce ne fut même que par surprise & par trahison qu'il fut obligé d'en sortir, après avoir combattu comme un lion. Ceux des Messéniens qui tombèrent entre les mains des Lacédémoniens, furent réduits au sort & à l'état des Ilotes : les autres, voyant leur patrie ruinée, allé-

50 DE L'HIST. DES LACEDEMON.
rent s'établir à Zancle ville de Sicile,
qui depuis fut appelée de leur nom
Messane; & elle est encore aujourd'hui
nommée Messine. Aristomène, après
avoir conduit une de ses filles à Rhode,
dont le Tyran l'avoit épousée, son-
geoit à passer ou à Sardes chez Ardy;
roi des Lydiens, ou à Ecbatane chez
Phraorte roi des Médes, mais la mort
le prévint.

AN.M. 3334.
A. J. C. 670.

La seconde guerre des Messéniens
avoit duré quatorze ans. Elle finit la
première année de la xxvii^e Olym-
piade.

Il y en eut encore une troisième qui
commença du tems & à l'occasion
d'un grand tremblement de terre ar-
rivé à Sparte. Il en sera parlé dans la
suite,





LIVRE SIXIÈME

HISTOIRE

DES PERSES

ET

DES GRECS.

CE LIVRE comprend l'histoire des Perses & des Grecs, depuis le commencement du règne de Darius I. jusqu'à la 42^e année de celui d'Artaxerxe Longue-main.

CHAPITRE PREMIER.

Histoire de Darius, jointe à celle des Grecs.

DARIUS s'appelloit auparavant **DARIUS**. Ochus. Il prit le nom de Darius, qui, selon Hérodote, signifie en langue Persane un vengeur, un homme
 C ij

*Herod. lib. 6.
cap. 98.*

*Val. Max.
lib. 9. cap. 2.*

DARIUS. qui s'oppose aux entreprises de quel-
 qu'un, peut-être parce qu'il avoit ar-
 rêté & puni l'insolence du Mage. Il
 régna trente-six ans.

§. I. *Mariage de Darius. Imposition de tributs. Insolence & punition d'Intapherne. Mort d'Orétes. Histoire de Démocède médecin. Permission donnée aux Juifs de continuer le bâtiment du temple. Générosité de Syloson récompensée.*

AN. M. 3483.

A. J. C. 521.

Herod. lib. 3.

cap. 88.

QUAND Darius fut monté sur le trône, il épousa, pour s'y affermir davantage, deux filles de Cyrus, Atoffe & Artistone. La première avoit été d'abord femme de Cambyse son propre frere, & ensuite du Mage Smerdis, tandis qu'il occupa le trône. Artistone étoit encore fille lorsqu'il l'épousa, & ce fut de toutes ses femmes celle qu'il aima le plus. Il épousa aussi Parmys, fille du véritable Smerdis frere de Cambyse, & Phédyme fille d'Otane, par l'adresse de laquelle l'imposture du Mage avoit été découverte. Il eut de ces femmes un grand nombre d'enfans de l'un & de l'autre sexe.

On a vû que les sept Conjurés qui **DARIUS.**
 avoient fait mourir le Mage , étoient
 convenus que celui d'entr'eux dont le
 cheval , en un certain jour marqué ;
 hanniroit le premier au lever du so-
 leil , seroit déclaré Roi ; & que celui
 de Darius , par l'industrie & l'ingé-
 nieuse précaution de son Ecuier , lui
 avoit procuré cet honneur. Il voulut
 transmettre aux siècles futurs sa re- *Ibid.*
 connoissance pour cet insigne bien-
 fait , & se fit eriger une statue éque-
 stre avec cette inscription : *Darius fils*
d'Hystaspe a acquis le royaume de Perse
par le moyen de son cheval , (le nom en
étoit marqué) & d'Oebarès son Ecuier.
 Il y a dans cette Inscription , où l'on
 ne rougit point de devoir à un cheval
 & à un Ecuier un bienfait tel que la
 roiauté , que l'on auroit ce semble
 intérêt de faire regarder comme le
 fruit d'un mérite extraordinaire ; il y
 a , dis-je , dans cette Inscription une
 simplicité & une sincérité qui ressent
 tout-à-fait le caractère des tems an-
 ciens , & qui est fort éloignée du faste
 des nôtres.

UN des premiers soins de Darius , *Herod. lib. 3.*
 quand il se vit établi sur le trône , fut *cap. 89-97.*

DARIUS. de régler l'état des provinces, & de
mettre de l'ordre dans ses finances.
Avant lui, Cyrus & Cambyse se contentoient de recevoir des peuples conquis des dons gratuits qu'on sembloit offrir volontairement, & d'exiger d'eux certain nombre de troupes dans le besoin. Darius comprit qu'il ne lui étoit pas possible de maintenir dans la paix & dans la sûreté toutes les nations qui lui étoient soumises, sans avoir sur pié des troupes réglées, ni d'entretenir ces troupes sans les soudoyer, ni de paier exactement cette solde sans mettre des impositions sur les peuples.

Pour mettre donc plus d'ordre dans l'administration de ses finances, il divisa tout l'Empire en vingt départemens ou gouvernemens, dont chacun devoit paier tous les ans une certaine somme au Satrape commis pour cet effet. Les sujets naturels, c'est-à-dire les Perses, étoient exemts de toute imposition. Hérodote fait un dénombrement exact de ces provinces, qui peut beaucoup servir pour connoître l'étendue de l'empire des Perses.

Voici à peu près l'idée que l'on

s'en peut former. Ils possédoient en **DARIUS;**
 Asie, tout ce qu'y possèdent aujourd'hui les Perses & les Turcs; en Afrique, l'Egypte, & partie de la Nubie, & de plus les côtes de la Méditerranée jusqu'au royaume de Barca; en Europe, partie de la Thrace, & la Macédoine. Mais il est bon de remarquer que dans cette vaste étendue de pays il y avoit plusieurs peuples, qui étoient plutôt tributaires que sujets: ce qui a lieu aussi maintenant par rapport à l'empire des Turcs.

L'histoire observe que Darius, en imposant ces tributs, montra une grande sagesse & une grande modération. Il fit venir les principaux de chaque province, qui en pouvoient le mieux connoître le fort & le foible, & qui avoient intérêt de parler avec sincérité. Il leur demanda si une certaine somme, qu'il proposoit à chacun d'eux pour leurs provinces, ne montoit point trop haut, & n'excédoit point leurs forces; son intention, leur disoit-il, n'étant pas d'accabler ses sujets, mais de tirer d'eux des secours proportionnés à leurs revenus, & qui étoient absolument nécessaires pour la défense.

*Plut. in
 Apophthegm.
 pag. 172.*

DARIUS. se de l'Etat. Ils répondirent tous que cette somme leur paroissoit fort raisonnable, & qu'elle ne seroit point à charge aux peuples. Il en rabatit pourtant encore la moitié, aimant mieux demeurer beaucoup en deça des justes bornes, que de s'exposer peut-être à passer au delà.

Malgré une si étonnante modération, comme les impôts ont toujours quelque chose d'odieux, les Perses, qui avoient donné à Cyrus le surnom de Pere, à Cambyse celui de maître, n'en trouvèrent point d'autre pour caractériser Darius que celui de * marchand.

Les sommes que Darius tiroit par l'imposition des tributs, montoient à peu près; autant qu'on le peut conjecturer par le calcul d'Hérodote qui souffre de grandes difficultés, à quarante quatre millions.

*Hérod. lib. 3.
cap. 118. 119.*

APRES la mort du Mage on étoit convenu que les Seigneurs Persans qui avoient conspiré contre lui, outre plusieurs autres marques de distin-

* *Κάπηλος* porte une idée plus basse & plus méprisable, mais je n'ai su comment l'exprimer. Il peut signifier un courtier, un revendeur, un homme qui achette pour revendre.

tion, auroient les entrées libres chez **DARIUS.** le Roi en tout tems, excepté lorsqu'il seroit seul avec la Reine. Intapherne, l'un de ces Seigneurs, à qui l'on avoit refusé pour cette raison de l'admettre dans l'appartement du Prince, transporté de colère contre les Officiers du palais, les maltraita d'une manière étrange, leur aiant balafré tout le visage à coups de sabre. Darius sentit vivement une telle injure. Il craignit d'abord que ce ne fût un complot entre les Seigneurs. Mais aiant été assuré du contraire, il fit arrêter Intapherne avec ses enfans, & tous ceux de sa famille, & les fit condamner à mort, confondant, par un excès aveugle de sévérité, les innocens avec le coupable. La femme du criminel venoit tous les jours aux portes du palais, se lamentant, versant des larmes en abondance, jettant des cris, poussant des sanglots, & ne cessant d'implorer la clémence du Roi. Il ne put résister à un spectacle si touchant; & lui accorda la grace de celui de sa famille qu'elle lui désigneroit. Ce fut un grand embarras pour cette femme infortunée, qui auroit souhaité les pou-

DARIUS.

voir tous sauver. Enfin, après une longue délibération, elle se déterminna en faveur de son frere. Ce choix, où il paroissoit qu'on avoit peu consulté les sentimens que la nature doit inspirer à une mere & à une femme, étonna le Roi, & comme il lui en fit demander la raison, elle répondit qu'un second mariage pouvoit lui procurer un mari & des enfans : mais que son pere & sa mere étant morts, elle ne pouvoit pas recouvrer un frere. Darius, outre son frere, lui accorda l'aîné de ses enfans.

*Herod. lib. 3.**cap. 120-128.*** Pag. 331.*

J'AI MARQUE' dans le * volume précédent par quelle perfidie Orètes, l'un des Gouverneurs de l'Asie Mineure pour le Roi, avoit fait mourir Polycrate Tyran de Samos. Un crime si noir & si détestable ne demeura pas impuni. Darius apprit que ce Satrape abusoit d'une manière étrange de son autorité, & qu'il ne comptoit pour rien le sang de ceux qui avoient le malheur de lui déplaire. Orètes porta l'insolence jusqu'à faire mourir un courier que le Roi lui avoit envoyé, parce que l'ordre dont il étoit chargé lui étoit desagréable. Darius, qui ne

se croioit pas encore bien affermi sur **DARIUS.**
 le trône, n'osa pas l'attaquer ouver-
 tement. Ce Satrape n'avoit pas moins
 de mille soldats armés pour sa garde,
 sans compter les secours qu'il pou-
 voit tirer de son gouvernement, qui
 comprenoit la Phrygie, la Lydie, &
 l'Ionie. Il s'y prit donc d'une manière
 sourde & cachée, pour se défaire d'un
 ennemi si dangereux. Il chargea de
 l'exécution de cet ordre l'un de ses
 Officiers les plus fidèles & les plus
 affectionnés à sa personne. Cet Offi-
 cier, sous un autre prétexte, se rendit
 à Sardes. Il pressentit habilement les
 esprits. Il commença par présenter
 aux principaux Officiers de la Garde
 des lettres du Roi qui ne renfermoient
 que des ordres généraux. Bientôt
 après il en produisit de secondes, qui
 étoient plus précises. Et quand il se
 fut parfaitement assuré de la disposi-
 tion des troupes, il leur fit la lecture
 d'une dernière lettre, par laquelle le
 Roi leur ordonnoit de mettre à mort
 le Satrape; & cet ordre fut exécuté
 sur le champ. Tous ses biens furent
 confisqués au profit du trésor roial,
 & tous ceux qui se trouvèrent dans sa

DARIUS. maison furent transportés à Suse. De ce nombre étoit un célèbre médecin de Crotone, nommé Démocède. L'histoire de ce médecin est fort singulière, & elle donna lieu à de grands événemens.

*Herod. lib. 3.
cap. 129. 130.* **IL ARRIVA** quelque tems après que Darius étant tombé de son cheval à la chasse, se donna une violente entorse au pié, & que son talon se déboita. Les Egyptiens passoient alors pour les plus habiles dans la médecine, & le Roi en avoit plusieurs auprès de lui. Ils entreprirent de le traiter, & déploierent tout leur art dans une occasion si importante : mais ils s'y prirent si mal adroitement & si durement en lui maniant le pié, qu'ils lui causèrent des douleurs incroyables; & il fut sept jours & sept nuits sans dormir. Quelqu'un pour lors indiqua Démocède, dont il avoit entendu parler à Sardes comme d'un médecin très habile. Il étoit actuellement en prison. On le fit venir sur le champ dans l'état où on le trouva, c'est-à-dire avec ses chaînes, & avec un habit fort mal propre. Le Roi lui demanda s'il avoit quelque connoissan-

*Ancien-
ment les mé-
mes exerçoient
la médecine &
la chirurgie.*

ce de la médecine. Il le nia d'abord par **DARIUS.** la crainte qu'il avoit que s'il faisoit preuve de son art, on ne le retînt en Perse, & qu'il ne fût privé pour toujours de la vûe de sa patrie, pour laquelle il avoit une extrême passion. Darius, mécontent de sa réponse, ordonna qu'on le mît à la question. Il falut avouer la vérité. Voila donc Démocède reconnu pour médecin. Il commence par appliquer des fomentations douces sur la partie malade. L'effet du remede fut prompt. Le sommeil revint au Roi, & en peu de jours il fut parfaitement guéri, & le talon fut remis à sa place. Darius lui fit présent de deux paires de chaînes d'or. Démocède lui demanda s'il prétendoit le bien récompenser de l'heureux succès de sa cure, en doublant son mal. Ce mot fit rire le Roi : il le fit conduire par les Eunuques chez ses femmes, pour leur montrer celui à qui il étoit redevable de sa santé. Elles le comblèrent toutes de présens magnifiques, & ce jour seul l'enrichit extrêmement.

Ce Démocède étoit de Crotone, *Herod. lib. 5.* ville de la Grande Grece en Italie dans *cap. 131.*

DARIUS. la Calabre ultérieure, d'où les mauvais traitemens de son pere l'avoient obligé de sortir. Il avoit passé en Egine, où il commença à se faire connoître par plusieurs cures fort heureuses : les habitans lui assurèrent par an un talent. Le talent avoit soixante mines, & revenoit à trois mille livres de notre monnoie. Quelque tems après il fut appelé à Athènes, où l'on fit monter ses appointemens à cent mines. cinq mille livres par an. Enfin il s'établit chez Polycrate Tyran de Samos, qui lui donna deux mille écus. Deux talents. Il est honorable aux Villes & aux Princes de s'attacher par des établissemens honnêtes & par des pensions considérables des personnes utiles au public, en les attirant même des pays étrangers. Les Crotoniates depuis ce tems-là passèrent pour les plus habiles des médecins, & après eux ceux de Cyrène dans l'Afrique. Les Argiens, dans le même tems, avoient la réputation d'exceller dans la musique.

Herod. cap. 132. Démocède, depuis la guérison du Roi, devint fort puissant à Suse, & il avoit l'honneur de manger à sa ta-

ble. Il obtint la grace des médecins d'Egypte, qui avoient tous été condamnés à être pendus pour avoir été moins habiles que le médecin de Grèce, comme s'ils eussent été tenus de répondre du succès, & que ce fût un crime de ne pouvoir guérir un Prince. Etrange abus & effet assez ordinaire d'une puissance sans bornes, qui n'est point conduite par la raison ni par l'équité, qui est accoutumée à voir tout plier sous ses ordres, & qui prétend que ses volontés, quelles qu'elles soient, ne doivent jamais demeurer sans exécution ! On a vu quelque chose de pareil dans l'histoire de Nabutodonosor, qui prononça un arrêt de mort généralement contre tous les Mages, parce qu'ils n'avoient pu deviner le songe qu'il avoit eu pendant la nuit, & qu'il avoit lui-même oublié. Démocède tira aussi de la prison plusieurs de ceux qu'on y avoit mis avec lui. Il étoit dans une abondance universelle, & avoit un crédit extrême auprès du Roi. Mais il étoit éloigné de sa patrie, & il tournoit sans cesse ses regards & ses desirs vers la Grèce.

DARIUS.

DARIUS.

Une autre cure contribua encore beaucoup à augmenter la réputation & le crédit de Démocède. Atossé, fille de Cyrus, & l'une des femmes du Roi, fut attaquée d'un cancer au sein. Tant que la douleur fut médiocre, elle la supporta avec patience, ne pouvant se résoudre, par pudeur, à découvrir son mal. Mais enfin elle y fut forcée, & elle fit venir Démocède, qui lui promit de la guérir, & la pria en même tems de vouloir bien de son côté lui promettre de lui accorder une grace qu'il lui demanderoit, laquelle ne préjudicieroit en rien à son honneur. Elle s'y engagea, & fut guérie. Cette grace étoit de lui procurer un voyage dans sa patrie. La Reine n'oublia pas sa promesse. Il n'est pas inutile de se rendre attentif à ces sortes d'événemens, peu considérables en eux mêmes, mais qui souvent donnent occasion aux plus grandes entreprises des Princes, & qui en sont le mobile secret & la cause éloignée.

a Non sine usu fuerit | magnarum sæpe rerum
introspectere illa primo | motus oriuntur. *Tacit.*
aspectu levia, ex quæis | *lib. 4. cap. 32.*

Un jour qu'Atoffe s'entretenoit **DARIUS.**
avec Darius, elle lui représenta qu'é-
tant à la fleur de l'âge, d'une comple-
xion forte & capable de soutenir les
fatigues de la guerre, & aiant à sa
disposition des armées nombreuses,
il étoit de son honneur de former
quelque grand projet, & de montrer
aux Perses qu'ils avoient pour roi un
homme de courage. Vous avez deviné
ma pensée, répliqua Darius, & je
roulois dans mon esprit le dessein
d'aller attaquer les Scythes. J'aime-
rois bien mieux, dit Atoffe, que vous
tournassiez d'abord vos vûes du côté
de la Grèce. J'entends fort parler des
femmes de Lacédémone, d'Argos,
d'Athènes, de Corinthe; je souhaite-
rois fort en avoir pour me servir.
D'ailleurs vous avez un homme qui
pourroit vous être d'un grand secours
pour cette entreprise, & vous donner
une parfaite connoissance du pays:
c'est Démocède, qui nous a guéri
vous & moi. Il n'en falut pas d'avan-
tage: l'affaire fut conclue sur le
champ. Le Roi chargea quinze des
principaux des Perses de suivre Dé-
mocède en Grèce, & d'en examiner

DARIUS, avec lui le plus exactement qu'il leur seroit possible les places maritimes; & il leur recommanda sur tout de ne point perdre de vûe ce médecin de peur qu'il ne s'échapât, & de le ramener avec eux.

Ce Prince, en donnant un tel ordre, faisoit voir qu'il ignoroit comment il falloit s'y prendre pour attirer dans ses Etats, & pour arrêter auprès de sa personne des gens d'esprit & de mérite. Prétendre employer pour cela l'autorité & la contrainte; c'est un moien sûr d'étouffer dans un royaume toute industrie, & d'en écarter les beaux arts, qui sont libres comme l'esprit dont ils partent. Pour un homme habile qu'on retient de force, on en éloigne des milliers, que la liberté & les bons traitemens auroient attirés.

Quand Darius eut formé le dessein d'envoier en Grèce, il fit venir Démocède. Il lui exposa ses vûes, & le besoin qu'il avoit qu'il conduisît les Seigneurs Persans dans la Grèce; & principalement dans les villes maritimes, pour en connoître la situation & les forces; & le pria instamment,

quand cela seroit fait, de revenir **DARIUS.**
avec eux. Il lui permit d'emporter
avec lui tous ses meubles, pour les
donner à son pere & à ses freres, lui
promettant de lui en rendre à son re-
tour de plus magnifiques ; & il ajouta
qu'il feroit charger la galère dans la-
quelle il partiroit des présens les plus
précieux, pour en faire part à sa fa-
mille. L'intention du Roi, en par-
lant ainsi, paroissoit simple & sans ar-
tifice : mais Démocède craignit que
ce ne fût un piège qu'il lui tendît,
pour connoître s'il avoit dessein de
revenir ou non ; & pour écarter tout
suspçon, il laissa ses meubles à Suse,
& accepta seulement les présens qui
étoient destinés pour ses freres.

Les Députés arrivèrent d'abord à
Sidon en Phénicie, où ils équipèrent
deux grands vaisseaux, & transporté-
rent dans un vaisseau de charge tout
ce qu'ils avoient apporté. Après avoir
parcouru & examiné avec soin les
principales villes de la Grèce, ils pas-
sèrent à Tarente en Italie. Les Sei-
gneurs Persans y furent arrêtés com-
me espions : Démocède, profitant de
ce mouvement, leur échapa, & s'en-

DARIUS. fuit à Crotone. Les Persans , aiant recouvré leur liberté, l'y poursuivirent : mais ils ne purent persuader aux Crotoniates de leur livrer leur concitoien. Ceux-ci se saisirent même du vaisseau de charge ; & les Députés , n'ayant plus leur guide , ne songèrent pas davantage à parcourir le reste de la Grèce , & prirent la route de leur pays. Démocède leur fit dire , à leur départ, qu'il épousoit la fille de Milon , célèbre Athlète de Crotone , dont le nom étoit fort connu du Roi , & dont il sera parlé dans la suite. Le voiage des Seigneurs Persans en Grèce n'eut pas de suite alors , parce qu'à leur retour ils trouvèrent le Roi occupé d'autres soins.

Esdr. cap. 5.

LA TROISIE'ME année du règne de ce Prince , qui n'étoit que la seconde selon le calcul des Juifs , les Samaritains suscitèrent de nouvelles affaires aux Juifs. Ils avoient obtenu contre eux sous les régnés précédens , & leur avoient fait signifier une défense de passer outre à la construction du temple de Jérusalem. Mais sur les vives exhortations des Prophètes , & sur l'ordre exprès de Dieu , les Israélites

avoient depuis peu recommencé l'ou- **DARIUS.**
 vrage interrompu pendant plusieurs
 années, & le pouſſoient avec beau-
 coup d'ardeur. Les Samaritains eu-
 rent recours à leurs anciennes intri-
 gues pour y mettre obſtacle. Ils ſ'a-
 dreſſèrent à Thatanaï, à qui Darius
 avoit donné le gouvernement des
 provinces de Syrie & de Paleſtine. Ils
 ſe plaignirent à lui de l'audace des
 Juifs, qui de leur propre autorité,
 & malgré les défenſes qui leur en
 avoient été faites, relevoient le tem-
 ple; ce qui ne pouvoit qu'être préju-
 diciable aux intérêts du Roi. Sur leurs
 plaintes, ce Gouverneur ſe rendit à
 Jérusalem. Comme il étoit modéré &
 équitable, après qu'il eut pris connoiſ-
 ſance de l'ouvrage, il ne crut pas de-
 voir l'arrêter brufquement & avec
 violence; & il ſ'informa des anciens
 des Juifs qui leur avoit permis de l'en-
 treprendre. Les Juifs lui aiant produit
 l'Edit de Cyrus, il ne voulut rien or-
 donner de lui-même qui y fût con-
 traire: mais il en écrivit au Roi, pour
 ſavoir quelle ſeroit ſa volonté ſur ce
 ſujet. Il lui expoſa le fait de bonne
 foi: il lui marqua que les Juifs allé-

DARIUS. guoient en leur faveur l'Edit de Cyrus, & le pria d'ordonner qu'on consultât les registres pour savoir si en effet Cyrus avoit donné un tel Edit, & qu'il lui plût lui prescrire ce qu'il avoit à faire dans cette rencontre.

Esd. cap. 6. Darius aiant fait faire cette recherche, l'Edit fut trouvé à Ecbatane dans la Médie, où Cyrus étoit lorsqu'il le donna. Comme il étoit plein de respect pour la mémoire de ce Prince, il le confirma, & en fit dresser un, où celui de Cyrus étoit rappelé. Ce motif, quand il auroit été seul, seroit fort louable : mais l'Ecriture nous apprend que ce fut Dieu lui-même qui agit sur l'esprit & le cœur du Roi, & qui le rendit favorable aux Juifs : *Converterat Dominus cor Regis Assur ad eos, ut adjuvaret manus eorum in opere domûs Domini Dei Israel.* La teneur de l'Edit le fait assez connoître. Premièrement il ordonne qu'on fournisse abondamment toutes les viâtes, les oblations, & les autres dépenses du temple selon que les Prêtres le demanderont. En second lieu, il exige que les Prêtres de Jérusalem, en offrant ces sacrifices

au Dieu du ciel, prie pour la con- DARIUS.
 servation de la vie du Roi & des
 Princes ses enfans. Enfin il va jusqu'à
 faire des imprécations contre les Rois
 & les peuples qui troubleront le tra-
 vail du bâtiment du temple, ou qui
 entreprendront de le détruire : par où
 il reconnoit clairement que le Dieu
 d'Israël est le maître de renverser les
 roiaumes de la terre & de détroner les
 plus grands Rois.

En vertu de cet Edit, non seule-
 ment ce peuple fut autorisé à pour-
 suivre le bâtiment du temple, mais
 encore les frais lui en furent fournis
 des impôts de la province. Que se-
 roient devenus les Juifs accusés de dé-
 sobéissance & de revolte, si dans cette
 occasion on n'avoit écouté que leurs
 ennemis, & qu'on ne leur eût point
 donné lieu de se justifier ?

Le même Prince, quelque tems
 après, donna une preuve bien plus
 éclatante de son amour pour la justice,
 & de l'horreur qu'il avoit des déla-
 teurs, ces hommes détestables, enne-
 mis par état de tout mérite & de toute
 vertu. On sent bien que je veux parler
 du célèbre Edit qu'il publia contre

DARIUS. Aman, en faveur des Juifs à la sollicitation d'Esther, qui avoit été substituée à Vasthi épouse du Roi. Selon Ussérius, cette Vasthi est la même que celle qui est appelée Atosse par les historiens profanes, & l'Assuérus de l'Ecriture Sainte le même que Darius. D'autres croient que c'est Artaxerxe. Le fait est connu de tout le monde, & appartient à l'Histoire Sacrée : je l'ai rapporté ailleurs en abrégé.

Tom. 2. pag. 367.

CES ACTIONS de justice rendent la mémoire d'un Prince respectable. Darius fit paroître de la reconnoissance dans une occasion qui lui fait aussi beaucoup d'honneur. Syloson, frere de Polycrate tyran de Samos, avoit fait autrefois présent à Darius d'un habit de couleur rouge, dont il témoignoit beaucoup d'envie, & n'avoit jamais voulu en recevoir le prix. Darius étoit pour lors simple particulier, Officier dans les gardes de Cambyse, qu'il avoit suivi à Memphis en Egypte. Quand il fut monté sur le trône, Syloson alla à Suse, se présenta à la porte du palais, & se fit annoncer comme un Grec à qui le Roi avoit obligation. Darius, surpris de

Herod. lib. 3. cap. 139-149.

de cette annonce & curieux d'en approfondir la vérité, le fit entrer. Il reconnut en effet que c'étoit son bienfaiteur, & loin de rougir d'une aventure qui paroïssoit ne lui être pas fort honorable, il loua avec admiration une générosité qui n'avoit eu d'autre motif que celui de faire plaisir à un homme de qui il n'avoit rien à attendre, & lui promit de lui donner beaucoup d'or & d'argent. Ce n'étoit point ce que Syloson désiroit : l'amour de la patrie étoit sa passion. Il demanda au Roi de vouloir l'y rétablir, mais sans répandre le sang des citoyens, & en chassant seulement de Samos celui qui en avoit usurpé la domination depuis la mort de son frere. Darius chargea de cette expédition Otane l'un des premiers seigneurs de sa Cour qui s'en acquitta avec joie & avec succès.

DARIUS.

§. II. *Revolte & réduction de Babylone.*

AU COMMENCEMENT de la cinquième année de Darius arriva la revolte de Babylone, dont la réduction lui couta vingt mois de siège. Cette ville, autrefois la maîtresse de l'Orient, ne pouvoit supporter le joug des Perses,

AN. M. 3488.

AV. J. C. 516.

Herod. lib. 3.

cap. 150-160.

DARIUS.

sur tout depuis que le siège de l'Empire avoit été transféré à Suse, ce qui lui avoit fait beaucoup perdre de sa grandeur & de son opulence. Les Babyloniens, profitant de la révolution qui arriva en Perse, premièrement à la mort de Cambyse, & ensuite après le massacre des Mages, firent secrètement pendant quatre ans toute sorte de préparatifs de guerre. Lorsqu'ils crurent leur ville suffisamment pourvue de provisions pour plusieurs années, ils levèrent l'étendart de la rébellion : ce qui obligea Darius à les assiéger avec toutes ses forces. Dieu continuoit d'accomplir les terribles menaces qu'il avoit faites contre Babylone, qui consistoient, non seulement à dégrader & à humilier cette ville superbe & impie, mais à la dépeupler, à la mettre à feu & à sang, à l'exterminer, à la réduire en une solitude éternelle. Pour accomplir ces prédictions, Dieu permit que les Babyloniens se révoltassent contre Darius, & attirassent contre eux toutes les forces de l'empire : & ils furent les premiers à mettre ces prophéties à exécution, en égorgant eux-mêmes une partie des habitans, comme

on le verra dans un moment. Il y a **DARIUS.**
 apparence que les Juifs qui étoient
 restés à Babylone en assez grand nom-
 bre, en sortirent avant que le siège
 fût formé, comme Isaïe & Jérémie Isai. 48. 20.
 lontems auparavant, & Zacharie tout Jerem. 50. 8.
 récemment, les y avoient exhortés. Et 51. 6. 9.
 Voici les paroles du dernier : *Sion, qui* Zachar. 1. 6.
demeures avec la fille de Babylone, sauve-
toi, & fui du pays. 9.

Les Babyloniens, pour faire durer
 plus lontems les provisions, & soute-
 nir plus vigoureusement le siège, pri-
 rent la résolution la plus desespérée
 & la plus barbare dont on eût jamais
 oui parler : ce fut d'exterminer toutes
 les bouches inutiles. Ils rassemblèrent
 donc toutes les femmes & tous les en-
 fans, & les étranglèrent. Tout ce qui
 ne pouvoit servir à la guerre fut mis à
 mort. Il fut seulement permis à cha-
 que homme de conserver celle de ses
 femmes qu'il aimoit le plus, & une
 servante pour faire l'ouvrage de la
 maison.

Après cette cruelle exécution, ces
 malheureux habitans se croiant en-
 tièrement en sureté, & par leurs for-
 tifications qui paroissoient imprena-
 bles, & par l'abondance des vivres.

DARIUS. qu'ils avoient amassés, insultoient du haut des murs aux assiégeans, & les accabloient d'injures. Les Perses, pendant dix-huit mois, mirent en usage tout ce que la ruse & la force peuvent dans les sièges, & n'oublièrent pas le moien qui avoit si heureusement réussi à Cyrus quelques années auparavant, c'étoit de détourner le cours du fleuve. Tous leurs efforts furent inutiles, & Darius commençoit presque à desespérer de pouvoir se rendre maître de la place, lorsqu'un stratagème, inoui jusques-là, lui en ouvrit les portes. Il fut fort surpris un jour de voir arriver devant lui Zopyre, l'un des plus grands Seigneurs de sa Cour, fils de Mégabyse l'un des sept qui avoient conspiré contre les Mages, de le voir, dis-je, tout couvert de sang, le nez & les oreilles coupées, & tout le corps déchiré de plaies. Se levant de son trône, il s'écria : Hé qui a donc pu vous traiter ainsi ? Vous même, Seigneur, reprit Zopyre. Le desir de vous rendre service m'a réduit en cet état. Persuadé que vous ne voudriez jamais y consentir, je n'ai pris conseil que de mon zèle. Il lui exposa ensuite le dessein

qu'il avoit de passer chez les ennemis, & convint avec lui de tout ce qu'il faudroit faire. Ce ne fut point sans une extrême douleur que le Roi le vit partir. Zopyre s'approcha de la ville, & aiant dit qui il étoit, il y fut admis. On le conduisit chez le Commandant. Là il exposa son malheur, & la cruauté que Darius avoit exercée à son égard, parce qu'il lui conseilloit de ne pas demeurer davantage devant une ville qu'il lui seroit impossible de prendre. Il fit offre de ses services, qui pourroient n'être pas inutiles aux assiégés, parce qu'il étoit instruit de tous les desseins des Perses; & que le desir de la vengeance lui inspireroit un nouveau courage & de nouvelles lumières. Le nom & le visage de Zopyre étoient fort connus à Babylone. L'état où il paroissoit, son sang, ses plaies, faisoient foi pour lui, & attestoient par des preuves non suspectes la vérité de tout ce qu'il avançoit. On se fia donc pleinement à lui, & on lui donna autant de troupes qu'il en demanda. Dans une première sortie, il fit périr mille hommes des assiégeans. Quelques jours après il en tua le double. Une troisième fois,

DARIUS. quatre mille demeurèrent sur la place. Tout cela se faisoit de concert. Chez les Babylonniens on ne parloit que de Zopyre : c'étoit à qui l'exalteroit le plus, & les termes manquoient pour exprimer le cas qu'on en faisoit, & le bonheur qu'on avoit de posséder un si grand homme. Il fut déclaré Généralissime des troupes, & on lui confia la garde des murailles. Darius ayant fait approcher son armée dans le tems & vers les portes dont on étoit convenu, il les lui ouvrit, & le rendit ainsi maître d'une ville qu'il n'auroit jamais pu prendre ni par assaut, ni par famine.

Quelque puissant que fût ce Prince, il se trouva hors d'état de pouvoir récompenser dignement un tel bienfait, & il répétoit souvent qu'il auroit sacrifié de bon cœur cent Babylones s'il les avoit, pour épargner à Zopyre le cruel traitement qu'il s'étoit fait lui-même. Il lui laissa pendant sa vie le revenu entier de cette ville opulente dont lui-seul l'avoit rendu maître, & le combla de tous les honneurs qu'un Roi peut accorder à un sujet. Mégabyze, qui commanda l'armée des Perses en Egypte contre les Athé-

niens, étoit son fils ; & Zopyre, qui **DARIUS.**
passa chez les Athéniens en qualité de —————
transfuge, son petit fils.

Dès que Darius se vit en possession de Babylone, il fit enlever les cent portes, & abattre les murailles de cette superbe ville, pour la mettre hors d'état de pouvoir encore se révolter dans la suite. Il pouvoit, usant des droits de vainqueur, exterminer tous les citoiens. Il se contenta d'en faire empaler trois mille de ceux qui avoient eu le plus de part à la revolte, & pardonna à tout le reste. Et pour empêcher que la ville ne fût bientôt sans habitans, il y envoya de toutes les provinces de l'Empire cinquante mille femmes, pour remplacer celles dont ils s'étoient si cruellement défaits au commencement du siège. Voila quel fut le sort de Babylone, & la manière dont Dieu vengea sur cette ville impie le cruel traitement qu'elle avoit fait aux Juifs, en attaquant sans raison un peuple libre ; en détruisant son gouvernement, ses loix, son culte ; en l'arrachant à sa patrie pour le transporter dans un pays étranger ; en le chargeant des travaux les plus humilians de la servi-

DARIUS. tude, & employant tout son pouvoir pour accabler un peuple malheureux, mais chéri de Dieu, & qui avoit l'honneur d'en porter le nom.

§. III. *Darius se prépare à marcher contre les Scythes. Digression sur les mœurs de ce peuple.*

Herod. lib. 4.

cap. 1.

Justin. lib. 2.

cap. 5.

APRÈS la réduction de Babylone, Darius s'appliqua à faire de grands préparatifs de guerre contre les Scythes, qui habitoient cette étendue de pays qui est entre le Danube & le Tanaïs. Le prétexte de cette guerre étoit de punir ces peuples de l'invasion que leurs ancêtres avoient faite autrefois dans l'Asie : prétexte également frivole & ridicule, qui réveilloit une vieille querelle, passée il y avoit environ six vingts ans. Pendant

** Il en est*

parlé Tom. 1.

pag. 103. &c.

28 ans.

cette irruption, dont la durée fut assez longue, les femmes des Scythes avoient épousé leurs esclaves. Quand leurs maîtres voulurent revenir dans leur pays, ces esclaves allèrent au devant d'eux avec de nombreuses troupes pour leur en disputer l'entrée, & il se donna quelques batailles où l'avantage fut à peu près égal de part & d'autre. Les Scythes, faisant ré-

flexion que c'étoit faire trop d'honneur à leurs esclaves que de les traiter DARIUS.
comme des soldats , marchèrent contre eux le fouet à la main pour les faire ressouvenir de leur condition. En effet, ils ne purent soutenir cette vûe, & prirent tous la fuite.

J'IMITERA ICI Hérodote ; qui prend occasion de cette guerre pour décrire ce qui regarde les Scythes : mais j'abrégèrai de beaucoup ce qu'il en dit.

Digression sur les Scythes.

IL Y AVOIT anciennement des Scythes en Europe & en Asie , situés pour la plûpart vers le septentrion. Il s'agit ici principalement des premiers , c'est-à-dire de ceux d'Europe.

Les historiens , dans les relations qu'ils nous ont laissées des mœurs & du caractère des Scythes , en disent des choses tout-à-fait opposées , & qui semblent absolument se contredire. D'un côté ils les représentent comme les peuples du monde les plus justes & les plus modérés : de l'autre ils en font une nation féroce & barbare , qui porte la cruauté à des excès.

DARIUS. qui font horreur à la nature. Cette contrariété est une preuve évidente qu'il faut appliquer des traits si différens à différens peuples répandus dans ces contrées si étendues & si vastes ; & , quoiqu'ils soient tous compris sous un même nom , ne les pas confondre sous une même idée.

*Strab. lib. 7.
pag. 29.*

Des Auteurs cités par Strabon parlent des Scythes qui habitoient sur les bords du Pont Euxin , lesquels égorgeoient tous les étrangers qui arrivoient chez eux , se nourrissoient de leur chair , & après avoir fait dessécher leurs cranes s'en servoient comme de pots & de vases pour boire.

*Herod. lib. 4.
cap. 62.*

Hérodote , en décrivant les sacrifices que les Scythes offroient au dieu Mars , dit qu'ils lui immoloient des victimes humaines. Il rapporte une coutume assez bizarre de faire les traités , usitée parmi ces * peuples.

Ibid. cap. 70.

Ils versoit du vin dans un grand vase de terre , & les deux parties contractantes , après s'être découpé les bras avec un couteau , y faisoient couler de leur sang , y teignoient leurs armes ,

* Cette coutume subsistait encore parmi les Ibériens , peuple Scythe d'origine , du tems de Tacite , qui en fait mention , *Ann. lib. 12. c. 47.*

& buvoient de cette liqueur eux & DARIUS. tous les assistans , en faisant de grandes imprécations contre celui qui violeroit le traité.

Ce que le même historien raconte *Ibid. cap. 71.* des cérémonies observées dans les ^{72.} obsèques des Rois , est bien plus extraordinaire. Je ne raporte que celles qui font connoître la cruauté de ces peuples. Après avoir embaumé le corps mort du Roi , & l'avoir enduit de cire , ils le promènent sur un chariot de ville en ville , & le montrent à tous les peuples qui étoient de sa dépendance. Quand cette course est achevée , ils le déposent dans le lieu destiné à sa sépulture , où ils font une large fosse , dans laquelle ils enterrent le Roi , & avec lui une de ses femmes , son grand Echançon , son Maître d'Hôtel , son Grand Ecuier , son Chancelier , son Secrétaire d'Etat , après les avoir tous égorgés : ils y mettent aussi plusieurs chevaux , grand nombre de coupes d'or , & quelque partie de chacun des meubles du défunt : après quoi ils ferment la fosse , & la couvrent de terre. Ce n'est pas tout. Quand le jour de l'anniversaire est arrivé , ils égorgent en-

DARIUS. core cinquante des Officiers du Roi défunt, & autant de chevaux, dont ils préparent & embaument les corps, & ensuite placent ces Officiers sur les chevaux au tour du tombeau, apparemment pour lui servir de gardes. Il paroît que l'esprit de ces cérémonies étoit de regarder le Roi comme vivant encore, & dans cette vûe de laisser toujours auprès de lui sa Cour & ses Officiers ordinaires. Je ne sais si des charges, qui aboutissoient à une telle fin, étoient fort briguées.

*Justin. lib. 2.
cap. 2.*

Il est tems de passer à des mœurs plus douces & plus humaines : peut-être que, dans un autre sens, elles ne paroîtront pas moins sauvages. C'est Justin sur tout qui fait la description que je vais rapporter. Les Scythes, selon cet Auteur, vivoient dans une grande innocence & une grande simplicité. Tous les arts leur étoient inconnus : mais il ne connoissoient point non plus les vices. Ils n'ont point partagé entre eux les terres, dit Justin : inutilement l'auroient-ils fait, puisqu'ils ne les cultivent point. Horace, dans un Ode dont je rapporterai bientôt une partie, nous marque que quelques-uns d'entre eux cultivoient une

certaine portion de terre , mais pour **DARIUS.**
 un an seulement; après quoi ils étoient
 relevés par d'autres , qui leur succé-
 doient aux mêmes conditions. Ils
 n'ont point de maison , point de de-
 meure fixe. Ils errent sans cesse de
 campagne en campagne avec leurs
 troupeaux. Ils transportent avec eux
 leurs femmes & leurs enfans dans des
 chariots couverts de peaux , qui leur
 tiennent lieu de maisons. ^a La justice
 y est observée & maintenue par le ca-
 ractère propre & le goût de la nation ,
 non par la contrainte des loix qu'ils
 ignorent. Aucun crime parmi eux
 n'est puni plus sévèrement que le vol,
 & cela avec raison. Car leurs trou-
 peaux , qui font toutes leurs richesses,
 n'étant jamais renfermés , comment
 pourroient-ils subsister si le vol n'é-
 toit rigoureusement interdit ? Ils ne
 desireront point l'or & l'argent comme
 le reste des hommes. Le lait & le miel
 est leur principale nourriture. Ils ne
 connoissent point l'usage de la laine
 & des étofes , & pour se défendre des
 froids violens & continuels de leur
 climat , ils n'emploient que des peaux
 de bêtes.

^a *Justitia gentis ingeniis culta , non legibus.*

DARIUS. J'ai dit que ces mœurs des Scythes pourroient paroître à plusieurs grossières & sauvages. En effet, pourroit-on dire, ils ont des terres ; & ne les cultivent point. Ils ont des troupeaux ; ils se contentent d'en tirer le lait, & en négligent la chair. La laine de leurs moutons leur pourroit fournir des habillemens commodes ; & ils n'ont d'autres vêtemens que des peaux de bêtes. Mais ce qui, dans l'esprit du plus grand nombre des hommes, est le plus capable de les convaincre de grossièreté & d'ignorance, c'est qu'ils n'estiment point l'or & l'argent, qui ont toujours été en si grand honneur parmi tous les peuples policés.

Heureuse ignorance, grossièreté infiniment préférable à notre prétendue politesse ! Ce mépris de toutes les commodités de la vie, continue Justin, leur a donné une droiture de mœurs, qui les empêche de jamais rien désirer du bien d'autrui. Aussi la

<i>a</i> Hæc continentia illis morum quoque justitiam indidit, nihil alienum concupiscentibus. Quippe ibidem divitiarum cupido est, ubi & usus. Atque utinam reliquis mortalibus similis moderatio & abstinencia	alieni foret ! profecto non tantum bellorum per omnia secula terris omnibus continuaretur ; neque plus hominum ferum & arma, quam naturalis factorum conditio raperet.
---	---

passion des richesses n'a lieu, que lorsqu'on en peut faire usage. Et plutôt à Dieu, dit le même Auteur, que l'on vît régner parmi le reste des hommes une pareille modération, & un pareil éloignement de tout desir du bien d'autrui ! L'on n'auroit pas vû les guerres se succéder sans cesse les unes aux autres dans tous les siècles & dans tous les pays ; & le nombre de ceux qui périssent par le fer & par les armes ne seroit pas plus grand que celui des hommes qui sont enlevés par la nécessité inévitable de la nature.

Justin termine le portrait des Scythes par une réflexion bien sensée. ^a C'est une chose bien surprenante, dit-il, qu'un naturel heureux, destitué du secours de l'éducation, ait donné aux Scythes une modération & une sagesse, où les Grecs n'ont pu parvenir ni par les établissemens de leurs Législateurs, ni par les préceptes de leurs Philosophes ; & que les mœurs d'une nation barbare soient préférables à

^a Prorus ut admirabile videatur, hoc illis naturam dare, quod Græci longâ sapientium doctrinâ præceptisque philosophorum consequi nequeunt, cultosque mores incultæ barbariæ collatione superari. Tanto plus in illis proficit vitiorum ignoratio, quàm in his cognitio virtutis!

DARIUS. celles de ces peuples cultivés & polis
 — par les arts & par les sciences. Tant
 l'ignorance du vice a de plus heureux
 effets dans les uns, que dans les autres
 la connoissance de la vertu !

*Plut. de gar.
 vol. pag. 511.*

Les peres croioient avec raison
 laisser à leurs enfans une précieuse
 succession, en leur laissant la paix &
 l'union entre eux. Un de leurs Rois,
 il s'appelloit Scylure, se voiant près
 de mourir, fit venir ses enfans, &
 leur présentant à tous successivement
 un faisceau de dards liés fortement
 ensemble, les exhorta à les rompre.
 Quelque effort qu'ils fissent, ils n'en
 purent venir à bout. Quand le faisceau
 fut délié, ils rompirent tous les dards
 sans peine. Voila, leur dit-il, l'image
 de ce que pourra parmi vous la con-
 corde & l'union. Pour fortifier & éten-
 dre ces avantages domestiques, ils y
 joignoient le secours des amis. L'a-
 mitié, chez eux, étoit regardée com-
 me une alliance sacrée & inviolable,
 qui approchoit beaucoup de celle que
 la nature a mise entre les freres, & à
 laquelle on ne pouvoit donner attein-
 te sans se rendre coupable d'un grand
 crime.

*Lucian. in
 Tox. pag. 51.*

Il semble que les Auteurs anciens se

soient efforcés à l'envi de relever l'innocence des mœurs qui régnoit parmi les Scythes, par de magnifiques éloges. Je transcrirai ici en entier celui qu'on en lit dans Horace. Il associe aux Scythes les Gètes, qui en étoient fort voisins. C'est dans la belle Ode où ce Poëte s'élève contre le luxe & les desordres de son siècle. Après avoir dit que ni les plus immenses richesses, ni les plus superbes bâtimens ne peuvent procurer le repos & la tranquillité de l'esprit, il ajoute : « ^a Plus heureux cent fois

2 Campeſtres melius Scythæ,
Quorum plauſtra vagas rite trahunt domos,
Vivunt, & rigidi Getæ;
Immetata quibus jugera liberas
Fruges & Cererem ferunt!
Nec cultura placet longior annuâ;
Deſunctumque laboribus
Æquali recreat ſorte vicarius.
Illic matre carentibus
Privignis mulier temperat innocens:
Nec dotata regit virum
Conjux, nec nitido fidit adultero.
Dos eſt magna parentium
Virtus, & metuens alterius viri
Certo fœdere caſtitas;
Et peccare nefas, aut pretium eſt mori.

DARIUS. » les Scythes , qui roulent sur des
» chariots leurs maisons errantes :
» plus heureux les Gètes , qui habi-
» tent des terres glacées par les fri-
» mats ! Chez eux la terre , sans être
» partagée par des bornes , produit
» des grains & des fruits qui se re-
» cueillent en commun. Les travaux
» de la campagne ne durent qu'un an
» pour chacun d'eux ; & celui qui
» vient d'achever son année , ne man-
» que point d'être relevé par un suc-
» cesseur qui prend sa place aux mê-
» mes conditions. Là les belles-meres,
» loin de faire tort aux enfans du pre-
» mier lit , les ménagent avec bonté ,
» & ne se permettent point d'attenter
» sur la vie des enfans d'un premier
» lit. Les femmes sont en garde con-
» tre les discours séduisans de ceux
» qui cherchent à les corrompre , &
» ne tirent point de leur dot le droit de
» maitriser leurs maris. La plus gran-
» de dot d'une fille , c'est la vertu de
» ses pere & mere ; c'est son inviola-
» ble attachement pour son époux , &
» l'éloignement qu'elle a pour tout
» autre ; c'est enfin la persuasion où
» elle est que l'infidélité est un crime ,
» & que la mort en est le salaire.

Quand on examine sans prévention **DARIUS.**

Le caractère & les mœurs des Scythes, est-il possible de refuser à ces peuples son estime & son admiration ? Leur manière de vivre, pour l'extérieur, est-elle fort éloignée de celle des Patriarches, qui n'avoient point de demeure fixe, qui ne cultivoient point la terre, qui ne s'appliquoient qu'à la nourriture des troupeaux, & qui habitoient sous des tentes ? Croit-on ce peuple fort à plaindre d'avoir ignoré, & même méprisé l'usage de l'or & de l'argent ? Ne seroit-il pas à souhaiter qu'ils fussent toujours demeurés dans les entrailles de la terre, & qu'ils n'en eussent jamais été arrachés pour devenir la cause & l'instrument de tous les crimes ? Quel usage les Scythes en pouvoient-ils faire, eux qui n'estimoient que ce qui sert véritablement aux besoins de l'homme, & qui mettoient à ces besoins des bornes si étroites ? Il n'est point étonnant que vivant sans maisons, ils ne fissent

^a Aurum irrepertum, & sic melius situm

Cum terra celat, spernere fortior,

Quàm cogere humanos in usus

Omne sacrum rapiente dextra.

Horat. Nô.

3. Od. 3.

DARIUS. nul cas des arts si vantés ailleurs, tels
— que sont l'architecture, la sculpture,
la peinture; non plus que de la somp-
tuoſité des vêtemens & des meu-
bles, trouvant dans les dépouilles des
bêtes de quoi ſe défendre des injures
du tems. Après tout, peut-on dire
que ces avantages prétendus contri-
buent au bonheur réel de la vie? Les
peuples qui les avoient en partage,
étoient-ils plus ſains & plus robustes
que les Scythes? Vivoient-ils plus
longtems? Menoient-ils une vie plus
libre, plus tranquille, plus exemte
de ſoins & de chagrins? Avouons-le,
à la honte de l'ancienne philoſophie.
Les Scythes, qui ne faiſoient point
une étude particulière de la ſageſſe,
l'avoient portée plus loin que ni les
Egyptiens, ni les Grecs, ni les autres
peuples policés. Ils ne donnoient le
nom de biens & de richesses qu'à ce
qui le mérite véritablement en par-
lant ſelon le langage humain, je veux
dire à la ſanté, à la force, au coura-
ge, à l'amour du travail & de la liber-
té, à l'innocence des mœurs, à la
bonne foi, à l'horreur pour tout men-
ſonge & toute diſſimulation, en un
mot à toutes les qualités qui rendent

l'homme meilleur & plus estimable. **DARIUS.**

Ajoutez à ces heureuses dispositions la connoissance & l'amour du vrai Dieu & du Médiateur, sans quoi elles leur étoient inutiles, ils deviennent un peuple parfait.

En comparant les mœurs des Scythes avec celles du siècle présent, on est tenté de croire qu'un si beau portrait est flaté, & que Justin, aussi bien qu'Horace, leur prête des vertus qu'ils n'avoient point. Toute l'antiquité leur rend le même témoignage; & Homère, dont le suffrage doit être d'un grand poids, les appelle *les plus justes des hommes*.

Mais, (qui le croiroit?) le luxe, qui sembleroit ne pouvoir subsister que dans un pays agréable & délicieux, pénétra dans cette région âpre & inculte; & forçant les barrières que lui avoit opposé jusques-là un usage constant de plusieurs siècles, fondé dans la nature du climat & dans le génie des habitans, il vint à bout enfin de corrompre aussi les mœurs des Scythes, & de les égaler en ce point aux autres peuples dont il s'étoit rendu maître. C'est Strabon qui nous ap- Strab. lib. 7. pag. 301. prend cette particularité très-digne

DARIUS. de remarque : il vivoit du tems d'Au-
guste & de Tibère. Après avoir beau-
coup loué la simplicité, la frugalité,
l'innocence des anciens Scythes, &
leur extrême éloignement de toute
fourberie, & même de toute dissimu-
lation ; il avoue que le commerce
qu'ils avoient eu dans les derniers
tems avec les autres peuples avoit
substitué à ces vertus des vices tout
contraires. Il sembleroit, dit-il, que
l'effet naturel d'un tel commerce avec
des nations polies & civilisées, n'au-
roit dû être que de les humaniser &
de les apprivoiser, en leur faisant
perdre cet air sauvage & farouche
qu'ils avoient : & cependant il causa
la ruine entière de leurs mœurs, & les
Athen. lib.
12. pag. 524. transforma en d'autres hommes. C'est
sans doute par rapport à ce change-
ment qu'Athénée dit que les Scythes
se livrèrent à la volupté & aux déli-
ces, en même tems qu'ils se livrèrent
à l'amour du gain & des richesses.

Strabon, en faisant la remarque
que je viens de rapporter, ne dissimule
pas que c'est aux Romains & aux
Grecs que les Scythes durent ce fune-
ste changement. Notre exemple,
dit-il, a perverti presque tous les peu-

ples de la terre, en y portant avec le **DARIUS.**
 luxe l'amour des plaisirs & des déli-
 ces, la mauvaise foi, & mille sortes
 de fourberies honteuses pour amasser
 de l'argent. C'est une triste distinction
 & un malheureux talent pour un peu-
 ple, que de devenir par son habileté
 à inventer des modes & à raffiner sur
 tout ce qui nourrit & entretient le
 luxe, le corrupteur de tous ses voisins,
 & leur maître pour le dérèglement &
 le vice.

Ce fut contre ces Scythes, mais
 encore entiers & dans leur plus grande
 vigueur, que Darius tourna ses armes.
 C'est ce que je dois maintenant ex-
 poser.

§. IV. *Expédition de Darius contre les Scythes.*

J'AI DÉJÀ fait observer que le pré-
 texte dont se servit Darius pour en-
 treprendre la guerre contre les Scy-
 thes, étoit l'irruption qu'ils avoient
 faite anciennement dans l'Asie : mais
 il n'avoit d'autre but réellement que
 de satisfaire son ambition, & d'éten-
 dre ses conquêtes.

Son frere Artabane, pour qui il
 avoit un grand respect, & qui de son

*Hærod. lib.
 4. cap 82. 96.*

DARIUS. côté n'avoir pas moins de zèle pour
 — les véritables intérêts du Roi, se crût
 obligé dans cette occasion de lui dé-
 couvrir ses sentimens avec toute la
 liberté que demandoit l'importance
 de l'affaire. » Grand Prince, lui dit-il,
 » ^a ceux qui forment quelque grande
 » entreprise, doivent considérer avec
 » soin si elle sera utile ou préjudicia-
 » ble à l'Etat, si l'exécution en sera
 » aisée ou difficile, si elle pourra con-
 » tribuer ou nuire à leur gloire, enfin
 » si elle est conforme ou contraire
 » aux règles de la justice. Je ne voi
 » point, Seigneur, quand même vous
 » seriez assuré du succès, quel avan-
 » tage vous pouvez attendre de la
 » guerre que vous entreprenez contre
 » les Scythes. Ce sont des peuples sé-
 » parés de votre empire par de longs
 » espaces de terre & de mer, qui ha-
 » bitent de vastes deserts, qui sont
 » sans villes, sans maisons, sans éta-
 » blissemens, sans richesses. Qu'y a-t-il
 » à gagner pour vos troupes dans une
 » telle expédition, ou plutôt quen'y

^a Omnes qui magna-
 rum rerum concilia susci-
 piunt, estimare debent
 an, quod inchoatur,
 reip. utile, ipsis glorio-

sum, aut promptum effe-
 ctu, aut certè non ar-
 duum sit. *Tacit. Hist. lib.*
2. cap. 76.

a-t-il

a-t-il point à perdre ? Accoutumés « **DARIUS.**
 comme ils sont à passer d'une con-
 trée dans une autre, s'ils s'avisent «
 de prendre la fuite devant vous, «
 non par crainte ou par lâcheté, car «
 ils sont très-courageux & très aguer- «
 ris, mais dans le dessein de harasser «
 & de ruiner votre armée par de «
 continuelles & de pénibles courses, «
 que deviendrons-nous dans un pays «
 inculte, stérile, & dénué de tout, «
 où nous ne trouverons ni fourages «
 pour nos chevaux, ni nourriture «
 pour nos soldats ? Je crains, Sei- «
 gneur, qu'une fausse idée de gloire, «
 & des conseils flatteurs, ne vous «
 précipitent dans une guerre qui «
 pourra tourner à la honte de la na- «
 tion. Vous jouissez d'une paix tran- «
 quille au milieu de vos peuples, «
 dont vous faites l'admiration & le «
 bonheur. Vous savez que les dieux «
 ne vous ont placé sur le trône que «
 pour être le coadjuteur, ou plutôt «
 le ministre de leur bonté encore «
 plus que de leur puissance. Vous «
 vous piquez d'être le protecteur, «
 le tuteur, le pere de vos sujets ; & «
 vous nous répétez souvent, parce «
 que vous le pensez ainsi, que vous «

DARIUS. » ne vous croiez roi que pour les
 » rendre heureux. Quelle joie pour
 » vous, grand Prince, d'être la source
 » de tant de biens, & de faire vivre
 » à l'ombre de votre nom tant de
 » peuples dans un si aimable repos !
 » La gloire d'un Roi qui aime son
 » peuple, & qui en est aimé ; qui, loin
 » de faire la guerre aux nations voisines
 » ou éloignées, les empêche de
 » l'avoir entre elles, n'est-elle pas infiniment
 » plus touchante que celle
 » de ravager la terre, en répandant
 » par tout le carnage, le trouble,
 » l'horreur, la consternation, le desespoir ?
 » Mais un dernier motif doit
 » encore faire plus d'impression sur
 » votre esprit que tous les autres,
 » c'est celui de la justice. Vous n'êtes
 » point, graces aux dieux, de ces
 » Princes, ^a qui ne reconnoissent
 » d'autre loi que celle du plus fort, &
 » qui regardent comme un privilège
 » attaché à la roiauté, à l'exclusion
 » des simples particuliers, d'envahir
 » le bien d'autrui. ^b Vous ne faites

^a Id in summa fortuna æquius, quod validius : & , sua retinere , privatæ domus ; de alienis certe , regiam laudem esse *Tacit. Annal. lib. 15. c. 1.*

^b Ut felicitatis est quantum velis posse, sic magnitudinis velle quantum possis. *Plin. in paneg. Traj.*

point consister votre grandeur à » **DARIUS.**
 pouvoir tout ce que vous voulez , «
 mais à ne vouloir que ce que vous «
 pouvez selon les loix , & ce que «
 vous devez. En effet sera-t-on «
 injuste & ravisseur quand on ne «
 prend que quelque arpent de terre «
 à son voisin ? & sera-t-on juste , se- «
 ra-t-on héros , quand on usurpe & «
 qu'on envahit des provinces en- «
 tières ? Or j'ose vous demander , «
 Seigneur , quel titre avez-vous sur «
 la Scythie ? Quel tort vous ont fait «
 les Scythes ? Quelle raison pouvez- «
 vous alléguer pour leur déclarer la «
 guerre ? Celle que vous avez portée «
 contre les Babyloniens , étoit en «
 même-tems & nécessaire & juste : «
 aussi les dieux l'ont-ils favorisée «
 d'un heureux succès. C'est à vous , «
 Seigneur , de juger si celle que vous «
 entreprenez maintenant a les mê- «
 mes caractères. «

Il n'y avoit que le zèle généreux
 d'un frere uniquement occupé de la
 gloire de son Prince & du bien pu-
 blic , qui pût inspirer une telle liberté :
 mais aussi il n'y avoit du côté du
 Prince qu'une parfaite modération

DARIUS. capable de la souffrir. Darius, ^a comme Tacite le remarque d'un grand Empereur, avoit su joindre deux choses, qui pour l'ordinaire sont inalliables, la souveraineté & la liberté. Loin de se choquer de celle que son frere avoit prise, il le remercia de son conseil, mais n'en profita pas. L'engagement étoit pris. Il partit de Suse à la tête d'une armée de sept cens mille hommes : sa flotte étoit de six cens vaisseaux, composée principalement d'Ioniens, & d'autres nations Grecques qui habitoient les côtes de l'Asie mineure & de l'Hellespont. Il marcha vers le bosphore de Thrace, qu'il passa sur un pont de bateaux : après quoi, s'étant rendu maître de toute la Thrace, il arriva sur les bords du Danube, appelé autrement Ister, où il avoit ordonné à sa flotte de le venir joindre. Il érigea en plusieurs endroits de son passage des colonnes avec des inscriptions magnifiques, dans l'une desquelles il s'appelloit **LE MEILLEUR ET LE PLUS BEAU DE TOUS LES**

^a Nerva Cæsar res olim
dissociabiles miscuit,
principarum ac liberta-
tem. Tacit. in vit. Agric.
cap. 3.

DES PERSES ET DES GRECS. 101
HOMMES. Quelle vanité, quelle petitesse ! DARIUS.

Encore, si les défauts de ce Prince se fussent terminés à des sentimens d'orgueil & de vanité, ils paroïtroient peut-être plus pardonnables : du moins n'auroient-ils pas été si funestes pour ses sujets. Mais comment concilier avec le caractère de Darius, qui paroïsoit plein de bonté & de douceur, la cruauté barbare qu'il exerça à l'égard d'Oebazus, vieillard respectable par sa qualité & par son mérite ? Il avoit trois enfans qui se préparoient à suivre le Prince dans son expédition contre les Scythes. A son départ de Suse, ce pere lui demanda par grace de vouloir bien lui laisser un de ses enfans, pour être la consolation de sa vieillesse. Un seul ne suffit pas, répliqua Darius ; je veux vous les laisser tous trois : & sur le champ il les fit mourir.

Après avoir passé le Danube sur un pont de bateaux, il avoit dessein de le rompre, afin de ne point affoiblir son armée par le gros détachement des troupes qu'il seroit obligé de laisser à sa garde. Un de ses Officiers lui représenta qu'il étoit bon de se réserver

Herod. lib.

4. cap. 84.

Senec. de

Tra. lib. cap.

16.

Herod. lib.

4. cap. 97.

101.

DARIUS. cette ressource en cas de quelque accident fâcheux dans la guerre qu'il entreprenoit. Il le crut, & confia la garde du pont aux Ioniens qui l'avoient construit, avec permission de s'en retourner chez eux s'il ne revenoit dans l'espace de deux mois : puis il s'avança dans la Scythie.

Herod. lib. 4. cap. 101. & 118. 119. Dès que les Scythes eurent appris que Darius marchoit contre eux, ils délibérèrent ensemble sur les mesures qu'ils devoient prendre. Ils sentirent bien qu'ils n'étoient pas en état de résister seuls à un ennemi si formidable. Ils députèrent vers tous les peuples voisins, pour leur demander du secours, en leur remontrant que le danger étoit commun, & qu'ils avoient tous un égal intérêt à repousser un ennemi qui en vouloit à tous. Quelques-uns répondirent favorablement à leur demande : d'autres refusèrent absolument d'entrer dans une guerre qui ne les regardoit point, & ils eurent bientôt lieu de s'en repentir.

Herod. lib. 4. cap. 120. 125. Les Scythes avoient pris la sage précaution de mettre en sûreté leurs femmes & leurs enfans, en les faisant passer sur des chariots vers les parties

les plus septentrionales avec tous leurs troupeaux, ne se réservant que ce qui étoit nécessaire à l'armée pour les vivres. Ils avoient eu soin aussi de boucher tous les puits & toutes les fontaines, & de consumer tous les fourrages dans les lieux où les Perses devoient passer. Ils allèrent donc à leur rencontre avec leurs alliés, non pour leur livrer combat, ils avoient bien résolu de l'éviter, mais pour les attirer dans les lieux où ils avoient intérêt qu'ils vinssent. En effet dès que les Perses paroissoient vouloir les attaquer, ils se retiroient toujours devant eux, en avançant dans le pays; & ils les conduisirent ainsi de contrée en contrée chez tous les peuples qui avoient refusé d'entrer dans leur alliance, dont les terres furent entièrement ravagées par la double armée des Perses & des Scythes.

Darius, fatigué par ces longues courses qui ruinoient son armée, envoya un héraut au Roi des Scythes, appelé Indathyrse, & lui dit par sa bouche : « Prince des Scythes, « pourquoi fuis-tu continuellement « devant moi ? Que ne t'arrêtes-tu « enfin, ou pour me donner bataille, »

Herod. lib.

4. cap. 126.

127.

DARIUS. » si tu te crois en état de me résister ;
 » ou , si tu te sens trop foible , pour
 » reconnoître ton Maître , en lui pré-
 » sentant la terre & l'eau » ? Les Scy-
 thes étoient fiers , extrêmement ja-
 lous de leur liberté , & ennemis dé-
 clarés de tout esclavage. Indathyrse
 répondit ainsi : » Si je suis devant toi ,
 » Prince des Perses , ce n'est pas que
 » je te craigne : je ne fais autre
 » chose maintenant , que ce que j'ai
 » coutume de faire en tems de paix.
 » Nous n'avons , nous autres Scy-
 thes , ni villes ni terres à défendre :
 » si tu veux nous forcer au combat ,
 » viens attaquer les tombeaux de nos
 » peres , & tu sentiras qui nous som-
 » mes. Pour la qualité de Maître que
 » tu prends , garde-la pour d'autres
 » que pour les Scythes. Je ne recon-
 » nois pour Maîtres que le grand Ju-
 » piter l'un de mes ayeux , & la déesse
 » Vesta.

Herod. lib.
4. cap. 128-
132.

Plus Darius s'avançoit dans le pays ,
 plus son armée avoit à souffrir. Elle
 étoit réduite à une fort grande extré-
 mité , lorsqu'il arriva de la part des
 Scythes un héraut , chargé d'offrir
 pour présens à Darius , un oiseau ,
 une souris , une grenouille , & cinq

flèches: Il demanda ce que signifioient **DARIUS.**
ces présens. L'Officier répondit qu'il
avoit ordre simplement de les lui of-
frir , & rien de plus ; que c'étoit à
lui d'en pénétrer la signification. Ce
Prince conclut d'abord que les Scy-
thes lui livroient la terre & l'eau ,
marquées par la souris & la grenouil-
le ; leur cavalerie , qui avoit la légé-
reté des oiseaux ; leurs propres per-
sonnes & leurs armes , désignées par
les flèches. Gobryas , l'un des sept qui
avoient conjuré contre le Mage, don-
na un autre sens à l'énigme. « Sachez ,
dit-il aux Perses , que si vous ne «
vous envollez dans l'air comme les «
oiseaux , ou si vous ne vous cachez «
dans la terre comme les souris , ou «
si vous ne vous enfoncez dans l'eau «
comme les grenouilles , vous ne «
pourrez échaper aux flèches des «
Scythes. »

En effet l'armée entière , conduite
dans une région vaste, inculte, déserte,
& absolument déstituée d'eau , se
trouva exposée à un danger presque
inévitables de périr ; & Darius lui-
même ne fut pas exempt de ce péril.
Il dut son salut à un chameau , qui ,
chargé d'eau le suivit avec beaucoup

Strab. lib
7. pag. 305
& lib. 16. pag
737.

DARIUS. de peine dans cet affreux desert. Le Prince noublia pas son bien-facteur. Pour le récompenser du service qu'il lui avoit rendu, & des fatigues qu'il avoit essuiées, à son retour en Asie il lui assigna pour sa nourriture un certain endroit qu'il possédoit en propre, & qu'on nomma par cette raison *Gaugamele*, c'est-à-dire en langue Persanne, *Maison du Chameau*. C'est auprès de cette petite ville que Darius Codoman fut vaincu pour la seconde fois par Alexandre le Grand.

Herod. lib. 4. cap. 134.
 240. Darius ne délibéra pas davantage, & il se vit forcé malgré lui de renoncer à sa folle entreprise. On songea donc sérieusement au retour, & l'on jugea bien qu'il n'y avoit point de tems à perdre. Quand la nuit fut venue, pour tromper l'ennemi, les Perses allumèrent beaucoup de feux à l'ordinaire, & aiant laissé dans le camp les vieillards & les malades avec tous les ânes qui faisoient beaucoup de bruit, ils se mirent en marche pour regagner le Danube. Les Scythes ne s'en aperçurent que le lendemain matin. Ils firent sur le champ un gros détachement pour aller vers le Danube; & comme ils connoissoient

parfaitement les chemins, ils arrivèrent au pont beaucoup de tems avant les Perses. Ils y avoient déjà envoyé auparavant pour exhorter les Ioniens à rompre le pont, & à s'en retourner. On leur en avoit donné parole, mais sans dessein de l'exécuter. Ici ils les pressèrent bien plus vivement, en leur représentant que le tems que Darius leur avoit prescrit pour l'attendre étoit passé; qu'ils pouvoient, sans manquer à leur parole ni à leur devoir, retourner chez eux; qu'il ne dépendoit que d'eux de secouer pour toujours le joug de la servitude, & de se rétablir dans une entière liberté; & que les Scythes mettroient Darius hors d'état de former aucune entreprise contre qui que ce fût.

On mit l'affaire en délibération. Miltiade Athénien, Prince, ou, comme les Grecs l'appellent, Tyran de la Chersonnése de Thrace à l'embouchure de l'Hellespont, étoit du nombre de ceux qui avoient accompagné Darius, & fourni des vaisseaux pour favoriser cette entreprise.^a Plus sensible à l'intérêt public, qu'à son

^a Amicior omnium libertati quam suæ domi- | nationi fuit. *Cor, Nep.*

DARIUS. avantage particulier, il fut d'avis de donner satisfaction aux Scythes, & de profiter d'une si favorable occasion pour remettre l'Ionie en liberté : tous les autres Chefs pensèrent comme lui, à l'exception d'Hystiée Tyran de Milet. Quand son rang de parler fut venu, il représenta aux Chefs des Ioniens que leur fortune étoit liée à celle de Darius ; que c'étoit sous la protection de ce Prince qu'ils étoient maîtres chacun dans leur ville ; que si la puissance des Perses venoit à tomber ou à s'affoiblir, les villes d'Ionie ne manqueroient pas de chasser leurs tyrans, & de se rétablir en liberté. Ce dernier avis fut goûté de tous les autres Chefs ; & , comme c'est l'ordinaire, l'intérêt particulier l'emporta sur le bien public. Il fut résolu qu'on attendroit Darius. Mais, pour tromper les Scythes, & les empêcher de faire eux-mêmes quelque entreprise, ils leur déclarèrent qu'ils avoient pris le parti de se retirer comme ils le souhaitoient, & ils firent mine effectivement de rompre le commencement du pont, après avoir exhorté les Scythes à faire aussi de leur côté leur devoir, & à retourner promptement contre l'ennemi

commun pour l'attaquer & le défaire. **DARIUS.**
 Les Scythes trop credules se retiré-
 rent, & furent encore trompés une
 seconde fois.

Ils manquèrent Darius, qui avoit
 pris un autre chemin que celui où ils
 avoient compté l'atteindre. Ce Prince
 arriva de nuit au pont du Danube, &
 le trouvant rompu, il ne douta point
 que les Ioniens ne se fussent retirés,
 & pour lors il se crut perdu. On ap-
 pella à haute voix Hystiée le Milésien,
 qui répondit enfin, & tira le Roi d'in-
 quiétude. Le pont fut entièrement
 rétabli. Darius repassa le Danube, &
 vint dans la Thrace. Il y laissa Méga-
 byse, un de ses premiers Généraux,
 avec une partie de son armée, pour
 achever la conquête de ce pays-là,
 & le soumettre entièrement à son
 obéissance. Après quoi il repassa le
 Bosphore avec le reste de ses troupes,
 & se retira à Sardes, où il passa tout
 l'hiver, & la plus grande partie de
 l'année suivante, pour rafraîchir ses
 troupes qui avoient extrêmement
 souffert dans cette expédition, aussi
 malheureuse que mal concertée.

Mégabyse demeura quelque tems
 dans la Thrace. Les peuples qui l'ha-
 bitent, auroient, selon Hérodote,

*Herod. lib.
 4. cap. 143.
 144.*

*Herod. lib.
 5. cap. 1-11.*

DARIUS. été invincibles, s'ils avoient su réunir leurs forces, & se donner un seul Chef. Quelques-uns d'eux avoient des coutumes fort particulières. Dans un certain canton, quand un enfant venoit au monde, tous ses proches s'abandonnoient à la douleur, & répandoient des larmes en abondance dans la vûë des maux auxquels il alloit être exposé : ce n'étoit que joie au contraire à la mort de leurs proches, parce que ce n'étoit que de ce moment qu'ils les croioient heureux, les voiant délivrés pour toujours des misères de la vie. Dans un autre canton, où la polygamie étoit d'usage, lorsque le mari étoit mort, c'étoit une grande dispute entre les femmes pour savoir laquelle étoit la plus aimée. Celle à qui cet avantage étoit adjugé, avoit privilège d'être immolée par son plus proche parent sur le tombeau de son mari, & d'y être ensevelie avec lui ; & toutes les autres portoient envie à son bonheur, & se croioient en quelque sorte deshonorées.

*Herd. lib.
5. cap. 11. &
83.*

Darius, à son retour à Sardes après sa malheureuse expédition contre les Scythes, aiant été pleinement informé qu'il devoit son salut & celui de toute son armée à Hystiée, qui avoit

DES PERSES ET DES GRECS. III
persuadé aux Ioniens de ne point **DARIUS.**
rompre le pont sur le Danube, le fit venir à sa Cour, & lui dit de demander hardiment la récompense qu'il souhaitoit. Hyftiée lui demanda Mircine d'Edonie, territoire sur la rivière de Strymon en Thrace, avec la liberté d'y bâtir une ville. Il n'eut pas de peine à obtenir sa demande, & il s'en retourna à Milet, d'où il partit pour la Thrace après avoir fait équiper une flotte. Aiant pris possession du territoire qui lui avoit été accordé, il s'appliqua sur le champ à exécuter l'entreprise qu'il avoit projetée d'y bâtir une ville.

Mégabyse, qui étoit alors Gouverneur de la Thrace de la part de Darius, s'aperçut bientôt du préjudice que cette entreprise pourroit apporter aux affaires du Roi dans ces quartiers-là. Il considéroit que cette nouvelle ville étoit sur une rivière navigable : que le pays des environs abondoit en bois de charpente, propre à construire des vaisseaux : qu'il étoit habité par diverses nations tant grecques que barbares, qui pouvoient fournir un grand nombre de gens propres à servir sur terre & sur mer : *Ibid. cap. 29.*

DARIUS. que si une fois ces peuples avoient à leur tête un Chef aussi adroit & aussi entreprenant qu'Hystiée , ils pourroient devenir si puissans sur terre & sur mer, qu'il seroit ensuite impossible au Roi de les contenir dans le devoir ; sur tout étant maîtres de plusieurs mines d'or & d'argent qui étoient dans ce pays-là, & qui pouvoient leur donner les moïens de faire réussir toutes les entreprises qu'ils voudroient former. A son retour à Sardes , il representa toutes ces choses au Roi , qui goûta fort toutes ses raisons , & manda à Hystiée de le venir trouver à Sardes sous prétexte qu'ayant de grands desseins en vûe , il avoit besoin de ses conseils. L'ayant ainsi attiré à sa Cour , il l'emmena avec lui à Suze , lui faisant entendre qu'il savoit faire tout le cas qu'il devoit d'un ami aussi fidèle & aussi intelligent que lui, deux qualités qui le lui rendoient bien précieux , & dont il lui avoit donné d'éclatantes preuves dans son voyage en Scythie , qu'au reste il trouveroit en Perse de quoi se dédomager avantageusement de tout ce qu'il pourroit quitter. Hystiée , flaté agréablement d'une distinction si honorable , &

d'ailleurs se voiant dans la necessité **DARIUS.**
 d'obéir, accompagna Darius à Suse,
 & établit Aristagore pour gouverner
 à Milet en sa place.

Pendant que Mégabyse étoit en- *Herod. lib. 5.*
 core en Thrace, il avoit député plu- *cap. 17. 21.*
 sieurs Seigneurs de Perse vers Amyntas
 roi de Macédoine, pour lui de-
 mander qu'il donnât la terre & l'eau à
 Darius son maître : c'étoit la formule
 ordinaire de soumission. Amyntas
 accorda sans peine ce qu'on desiroit
 de lui, & fit à ces envoiés tout l'hon-
 neur possible. Dans un repas qu'il
 leur donna, ils demandèrent vers
 la fin qu'on fit venir les Dames, ce qui
 étoit contre l'usage du pays : cepen-
 dant le Roi n'osa le leur refuser.
 Echaufés par le vin, & se croiant
 tout permis comme dans leur pays,
 ils gardèrent peu de mesures à l'égard
 de ces Princesses. Le fils du Roi,
 nommé Alexandre, n'avoit pu voir
 sans une extrême indignation la ma-
 niere dont on avoit traité sa mere &
 ses sœurs. Il les fit sortir de la salle sous
 quelque pretexte, comme pour y re-
 venir bientôt après, & eut aussi la
 précaution de faire retirer le Roi son
 pere. Dans l'intervalle il fit habiller

DARIUS. en femmes de jeunes gens , qu'il arma de poignards sous leurs habits. Quand les prétendues Dames furent rentrées, & que les Députés se mirent en état de les traiter comme ils avoient déjà fait auparavant , alors les poignards furent tirés , & l'on fit main basse sur les Seigneurs Persans & sur toute leur suite , sans qu'un seul de leurs gens fût épargné. On n'ignora pas cette exécution à Suse , & l'on y nomma des Commissaires pour en informer : mais Alexandre , à force de présens , étouffa l'affaire, & elle n'eut point de suites.

*Herod lib. 6.
149. 40.*

Les Scythes , pour se venger de l'invasion que Darius avoit faite dans leur pays , passèrent le Danube, & ravagèrent toute cette partie de la Thrace qui s'étoit soumise aux Perses jusqu'à l'Hellepont. Miltiade , pour éviter leur fureur , abandonna la Chersonnèse : mais après la retraite des ennemis il y retourna , & fut rétabli dans le même pouvoir qu'il avoit auparavant sur les habitans du pays.

§. V. *Darius fait la conquête de l'Inde.*

*AN. M. 3496.
AV. J. C. 508.*

VERS le même tems , (c'étoit la treizième année du règne de Darius)

ce Prince voulant étendre sa domination du côté de l'orient, pour se faciliter la conquête de ces pays-là forma le dessein d'en faire auparavant la découverte. Pour cet effet il fit construire & équiper une flotte à Caspatyre, ville située sur l'Inde, & en plusieurs autres endroits sur le même fleuve, jusques aux frontieres de * Scythie. Il en donna le commandement à Scylax, Grec de Caryandie ville de Carie, qui entendoit parfaitement bien la marine. Il lui donna ordre de descendre ce fleuve, & de découvrir, autant qu'il lui seroit possible, tous les pays qui étoient le long de ses bords d'un & d'autre côté, jusqu'à son embouchure, de passer de là dans l'océan méridional, & de prendre ensuite sa route vers l'occident, pour retourner par là dans son pays. Scylax ayant exactement exécuté ses ordres, & parcouru le fleuve de l'Inde, entra par le détroit de Babelmandel dans la mer rouge, & après un voyage de trente mois depuis son départ de Caspatyre, il aborda en Egypte dans le même

DARIUS.

Hrode. lib. 3. cap. 44.

* Il entend
la Scythie
Asiatique.

Ibid. cap. 42.

* Nous avons un ouvrage de géographie, intitulé *περί πλάτος*, & composé par un Scylax de Caryandie, qu'on croit être le même que celui dont il est parlé ici. Cette opinion souffre pourtant quelques difficultés, qui ont donné lieu à plusieurs savantes dissertations.

DARIUS. port, d'où autrefois Néchao roi d'Égypte avoit fait partir les Phéniciens qui étoient à son service, pour faire le tour des côtes d'Afrique. Il y a beaucoup d'apparence que ce port est le même que celui où est aujourd'hui située la ville de Suez au fond de la mer rouge. De là il se transporta à Suse, où il rendit compte à Darius de ses découvertes. Après cela Darius entra dans les Indes avec une armée, & réduisit tout ce grand pays sous sa domination. On s'attendroit naturellement à connoître les circonstances d'une guerre si importante. Hérodote n'en dit pas un mot. Il nous apprend seulement que le pays des Indes faisoit le vingtième des gouvernemens de l'empire de ce Prince, & qu'il lui rapportoit tous les ans trois cens soixante talens d'or, ce qui monte à près d'onze millions.

Lib. 3. cap.

§. VI. *Revolte des Ioniens.*

AN. M. 500.

Av. J. C. 504.

Herod. lib.

5. cap. 25.

DEPUIS que Darius fut revenu à Suse après son expédition de Scythie, il avoit donné le gouvernement de Sardes à Artapherne un de ses freres, & à Otane le commandement en chef de la Thrace, & des pays voi-

fin le long de la mer , à la place de **DARIUS.**
Mégabyse.

Une légère étincelle , formée par une sédition qui s'éleva à Naxe , alluma un grand incendie , & donna lieu à une guerre considérable. Naxe étoit la plus puissante île des Cyclades dans la mer Egée , aujourd'hui l'Archipel. Les principaux habitans aiant été accablés par le plus grand nombre, plusieurs des riches furent chassés de l'île , & exilés. Ils se réfugièrent à Milet , où ils implorèrent l'assistance d'Aristagore , pour les faire rétablir dans leur patrie. Il gouvernoit alors cette ville comme Lieutenant d'Hyftiée , dont il étoit neveu & gendre , & que Darius avoit emmené avec lui à Suse. Aristagore promit aux exilés tous les secours qu'ils demandoient.

Mais n'étant pas assez puissant de lui-même pour exécuter ce qu'il avoit projeté , il se rendit à Sardes , & communiqua l'affaire à Artapherne. Il lui représenta que c'étoit là une occasion très favorable pour réduire Naxe sous la puissance du Roi : que si une fois il en étoit maître , toutes les autres Cyclades tomberoient d'elles-mêmes l'une après l'autre sous sa do-

*Herod. lib.
5. cap. 28. 34.*

DARIUS. mination : qu'ensuite l'Ile d'Eubée ,
—— (Négrepont) qui étoit aussi grande
que celle de Cypre , en étant tout
près , seroit fort facile à conquérir ,
ce qui donneroit au Roi un libre passa-
ge en Grèce , & les moyens de sou-
mettre tout ce pays à son obéissance :
qu'au reste cette entreprise ne deman-
doit qu'une centaine de vaisseaux pour
être exécutée avec succès. Cette pro-
position plut si fort à Artapherne ,
qu'au lieu de cent vaisseaux qu'Aris-
tagore lui demandoit , il lui en pro-
mit deux cens , pourvû qu'il obtînt
le consentement du Roi.

Le Roi , ébloui par les grandes es-
pérances dont on le flatoit , ne man-
qua pas d'approuver extrêmement
cette entreprise , qui pourtant n'étoit
qu'injustice , qu'ambition démesurée ,
que perfidie de la part d'Aristagore
& d'Artapherne. Aucune considéra-
tion ne l'arrête un moment. Le pro-
jet le plus criant est formé & accepté
sans la moindre hésitation. L'utilité ,
la convenance , décident seules. Cette
île est à la bienséance des Perses : c'est
un titre suffisant pour y porter la
guerre. Et il faut juger à peu près de
même de presque toutes les autres ex-
péditions de ce Prince.

Dès qu'Artapherne eut obtenu le DARIUS. consentement du Roi pour cette entreprise, il se mit en devoir de l'exécuter. Afin de cacher son dessein, & de surprendre ceux de Naxe, il fit courrir le bruit que la flotte alloit vers l'Hellespont, & il envoya au printems suivant à Milet le nombre de vaisseaux dont il étoit convenu, sous le commandement de Mégabate, noble Persan de la famille royale d'Achémené. Mais sa commission portant qu'il obéiroit aux ordres d'Aristagore, ce fier Persan ne put supporter d'être sous le commandement d'un Ionien, qui d'ailleurs agissoit à son égard avec hauteur & empire. Cette pique fit naître entre ces deux Généraux une division, qui alla si loin, que Mégabate, pour se venger d'Aristagore, fit savoir sous main aux Naxiens que c'étoit à eux qu'on en vouloit. Sur cet avis, ils pourvurent si bien à leur défense, que les Perses, après avoir employé quatre mois au siège de la capitale de l'Ile, & consumé toutes leurs provisions, furent obligés de se retirer.

Cette entreprise aiant ainsi échoué, *Herod. lib. 1.* Mégabate en rejetta toute la faute sur *cap. 34-36.*

DARIUS. Aristagore, & le déclara absolument auprès d'Artapherne. L'Ionien sentit tout d'un coup que l'affaire entraîneroit, non seulement la perte de son gouvernement, mais sa ruine entière. L'extrémité où il se voioit réduit, lui fit naître la pensée de se révolter contre le Roi, n'envisageant point d'autre moien de se tirer de cet embarras. A peine avoit-il formé ce dessein, qu'il reçut un messager de la part d'Hyftiée, qui lui conseilloit la même chose. Hyftiée, après avoir demeuré quelques années à la Cour de Perse, dégouté des manières Persanes, & desirant ardemment de retourner en son pays, donna ce conseil à Aristagore, comme le moien le plus apparent de parvenir à ses fins. Il se flatoit, qu'en cas qu'il s'excitât quelques troubles en Ionie, il pourroit persuader à Darius de l'envoier en ce pays-là pour les appaiser, comme cela arriva effectivement. Dès qu'Aristagore eut vû ses desseins appuyés des ordres d'Hyftiée, il les communiqua aux Chefs des Ioniens, qu'il trouva très-disposés à entrer dans ses vûes. Il ne délibéra donc plus, & déterminé à la revolte il ne songea plus qu'à en préparer les voies. Les

Les Tyriens, après la prise de leur ville par Nabuchodonosor, aiant été réduits dans l'esclavage, avoient gémi sous cette oppression pendant le cours de soixante-dix ans. Mais, ce terme expiré, ils furent rétablis, selon la prédiction d'Isaïe, dans la jouissance de leurs anciens privilèges, avec la liberté d'avoir leur propre roi; liberté dont ils jouirent jusqu'au tems d'Alexandre le Grand. Il semble que cette grace leur fut accordée par Darius, en considération des services qu'il pouvoit tirer de cette ville, très-puissante sur mer, pour remettre les Ioniens sous son obéissance. C'étoit la dix-neuvième année de son règne.

L'année suivante Aristagore, pour engager les Ioniens à se tenir plus fortement attachés à son parti, les rétablit tous dans leurs privilèges & dans leur liberté. Il commença par Milet, où il renonça à son autorité, & la remit entre les mains du peuple. Il parcourut ensuite toute l'Ionie, où il obligea tous les autres tyrans par son exemple, par son crédit, & peut-être

Herod. lib. 5. cap. 37-38.

a Et erit post septuaginta annos, visitabit Dominus Tyrum, & redu-

cet eam ad mercedem suam. *Isaï. 23. 17.*

DARIUS. aussi par la crainte d'y être forcés malgré eux , à faire la même chose dans chaque ville. Ils s'y déterminèrent avec d'autant plus de facilité, que la puissance Persane , depuis l'échec reçu en Scythie, étoit moins en état de les protéger contre les Ioniens , naturellement amateurs de la liberté & de l'indépendance , & ennemis de toute tyrannie. De cette manière les aiant tous unis dans une commune ligue, & s'en étant fait déclarer le Chef , il leva l'étendart de la révolte contre le Roi , & arma puissamment par terre & par mer pour lui faire la guerre.

Ibid. cap. 38-41. & 49-51. Aristagore , dans la vûe de pousser plus vigoureusement cette guerre , se rendit à Lacédémone au commencement de l'année suivante , pour engager cette ville à entrer dans ses intérêts , & à lui donner du secours. Cléomène étoit pour lors sur le trône. Son pere Anaxandride l'avoit eu d'une seconde femme ; que les Ephores l'avoient obligé d'épouser , parce que la première étoit stérile. Celle-ci , après la naissance de Cléomène , eut trois fils , savoir Doriée , Léonide , & Cléombrote, dont les deux derniers régnèrent dans la suite. Aristagore

s'adressa donc à Cléomène ; & après **DARIUS.**

qu'on fut convenu d'un lieu pour l'entrevûe , il s'y rendit , & lui représenta que les Ioniens étoient leurs compatriotes : qu'il étoit digne de Sparte , la plus puissante ville de la Grèce , de concourir au dessein qu'il avoit de les rétablir dans leur liberté : que les Perses , leurs ennemis communs , étoient une nation peu belliqueuse , & en même tems infiniment riche , dont les Lacédémoniens viendroient aisément à bout : qu'avec les facilités qu'ils trouveroient dans la disposition présente des peuples , il leur seroit aisé de porter leurs armes victorieuses jusqu'à Suse , capitale de l'empire des Perses , où leur Roi faisoit sa résidence ; & il lui montra en même tems sur une petite table d'airain qu'il avoit apportée avec lui tous les peuples & toutes les villes par où il falloit passer. Cléomène prit trois jours pour délibérer. Quand ce terme fut expiré , il demanda à l'Ionien combien il y avoit de chemin de la mer d'Ionie à Suse , & combien il falloit de tems pour faire ce voiage. Aristagore , sans faire réflexion à l'effet que produiroit ce qu'il alloit

DARIUS. dire, répondit qu'il y avoit pour *
trois mois de chemin. Cléomène,
effraïé d'une telle proposition, lui or-
donna de sortir de Sparte avant le
coucher du soleil. Cependant il le sui-
vit jusques dans sa maison, & em-
ploia une autre voie pour se le rendre
favorable; ce fut celle des présens. Il
commença par lui offrir dix talens,
ce qui valoit de notre monnoie trente
mille livres; & allant toujours en au-
gmentant, il poussa ses offres jusqu'à
cinquante talens. Gorgo, qui étoit la
fille de Cléomène, âgée de huit ou
neuf ans, & que son père n'avoit pas
voulu faire sortir de la chambre ne
craignant rien d'un enfant de cet âge,
s'écria, lorsqu'elle entendit toutes ces
propositions: » Fuyez, mon pere,
» fuyez; cet étranger vous corrompra.
Cléomène se mit à rire, & se retira
en effet. Aristagore sortit de Sparte.
Il passa de là à Athènes, où on lui

*Hérod. lib.
5. cap. 55. &
96. 97.*

* Selon le calcul que fait
ici Hérodote, qui compte
la parasange. mesure de
Perse, pour trente stades,
(on met ordinairement
vingt stades pour une de
nos lieues communes) il y
a de Sardes à Susse 430.
parasanges qui font 13500.
stades; & de nos lieues 673.

Ainsi en faisant chaque
jour 150. stades, ce qui
monte à sept lieues & de-
mie, il y a de Sardes à
Susse pour 90. jours de che-
min. Si l'on parloit d'Ephé-
se, il faudroit ajouter près
de quatre jours: car Ephèse
est éloignée de Sardes de
540. stades.

fit un accueil plus favorable. Il eut le DARIUS.
 bonheur d'y arriver dans un tems où
 les Athéniens étoient parfaitement
 préparés à accepter tout ce qui pou-
 voit leur être proposé contre les Per-
 ses, contre qui ils étoient extrême-
 ment irrités pour le sujet que je vais
 rapporter. Hippias, * fils de Pisistrate
 tyran d'Athènes, aiant été banni de
 cette ville environ dix ans aupara-
 vant, après avoir essayé inutilement
 divers moiens pour s'y rétablir, se
 rendit enfin à Sardes, & s'adressa à
 Artapherne. Il eut l'adresse de s'insinuer si bien dans son esprit, qu'Arta-
 pherne écouta favorablement tout ce
 qu'il lui dit pour lui rendre les Athé-
 niens odieux, & l'irriter contre eux.
 Les Athéniens en aiant eu avis, lui
 envoièrent une ambassade à Sardes,
 pour le prier de ne point écouter ce
 que leurs pros crits pouvoient dire à
 leur désavantage. La réponse d'Ar-
 tapherne fut, que s'ils vouloient vivre
 en paix, il falloit qu'ils rappellassent
 Hippias. Quand cette réponse arro-
 gante eut été rapportée aux Athéniens,
 elle mit toute la ville en fureur con-
 tre les Perses. Aristagore y étant arri-
 vé dans cette conjoncture, obtint

* Ce fait a
 été traité plus
 au long dans le
 second Volume,
 pag. 587.
 &c.

DARIUS. sans peine tout ce qu'il demanda. Il est bien plus aisé, dit Héródote, d'en imposer à la multitude qu'à un seul. Aussi ce qu'Aristagore n'avoit pu persuader à Cléomène, il le persuada ici à trente mille Athéniens. Ils résolurent d'abord d'envoyer vingt vaisseaux à son secours. On peut dire que cette petite flotte fut la première cause & l'origine de tous les maux qui arrivèrent depuis tant aux Perses qu'aux Grecs.

Herod. lib. 5. cap. 99.
103. La troisième année de cette guerre, les Ioniens ayant rassemblé toutes leurs forces, & assistés des vingt vaisseaux d'Athènes & de cinq d'Erétrie ville de l'île d'Eubée, firent voile pour Ephèse; & y ayant laissé leurs vaisseaux, ils marchèrent vers la ville de Sardes, qu'ils trouvèrent sans défense, & dont ils se rendirent maîtres, excepté la citadelle, où Artapherne se retira, & où on ne put le forcer. Comme la plupart des maisons de cette ville étoient construites de roseaux, & par conséquent fort combustibles, un soldat ayant mis le feu à une maison, la flamme se communiqua aux autres, & réduisit toute la ville en cendres. Après cet accident,

les Perses & les Lydiens aiant rassem- DARIUS.
blé leurs forces pour leur défense, —
les Ioniens comprirent qu'il étoit
tems de songer à la retraite. Pour cet
effet, ils marchèrent avec toute la
diligence possible pour regagner leurs
vaisseaux à Ephèse : mais les Perses y
étant arrivés presque aussitôt qu'eux,
les attaquèrent fort vivement, & en
défirent un grand nombre. Les Athé-
niens, de retour chez eux, ne vou-
lurent plus prendre de part à cette
guerre, quelques instances que leur
fit Aristagore pour les y engager de
nouveau.

Darius aiant appris l'incendie de *Ibid. cap. 105.*
Sardes, & la part que les Athéniens
y avoient eue, résolut dès ce tems-là
de faire la guerre à la Grèce; & afin
qu'il ne vînt jamais à l'oublier, il
ordonna à un de ses Officiers de lui
dire à haute voix chaque jour lors-
qu'il prendroit son repas : *Seigneur,*
souvenez-vous des Atheniens. Il arriva
dans l'incendie de Sardes que le tem-
ple de Cybèle, la déesse du pays, fut
consumé avec le reste de la ville. Cet
accident servit ensuite de prétexte aux
Perses pour mettre le feu à tous les
temples qu'ils trouvèrent dans la

DARIUS. Grèce ; & ils y furent aussi portés par
un motif de religion , que j'ai expli-
qué ailleurs.

Tom. 2. pag.

44. *Herod. lib.* Comme Aristagore , chef de la
5. *cap. 105.* révolte , étoit Lieutenant d'Hyftiée
107. à Milet , Darius crut que celui-ci

pourroit bien avoir conduit toute
cette trame ; & il eut avec lui une
explication , où il lui découvrit sa
pensée , & les justes raisons qu'il avoit
de le soupçonner. Hyftiée , qui étoit
un rusé courtisan , & un maître habile
dans l'art de dissimuler , parut surpris
& affligé , & prenant un ton qui mar-

quoit en même tems & de la douleur
& de l'indignation : « Quoi , Sei-
« gneur , lui dit-il , avez-vous donc
« pu concevoir un soupçon si inju-
« rieux contre le plus fidèle & le plus
« affectionné de vos serviteurs ? Moi ,
« exciter une révolte contre vous ?
« Hé ! quel auroit été mon but ? Me
« manque-t-il ici quelque chose ?
« Je tiens un des premiers rangs dans
« votre Cour. J'ai l'honneur d'assister
« à tous vos conseils , & je ressens
« tous les jours de nouvelles preuves
« de votre bonté pour moi par les
« bienfaits dont vous me comblez.
Il ajouta que la révolte d'Ionie ne

venoit que de son éloignement de ce DARIUS.
pays-là ; qu'on avoit attendu son ab-
sence pour la faire éclater ; que s'il
fût resté à Milet , ce complot n'auroit
jamais eu lieu ; & que le moien le
plus sûr de rétablir les affaires du Roi
étoit de l'y envoyer pour appaiser ces
troubles ; qu'il lui promettoit , sur sa
tête , de lui livrer Aristagore , & s'en-
gageoit outre cela à lui rendre tribu-
taire la grande île de * Sardaigne. Les
meilleurs Princes sont souvent trop
crédules , & quand ils ont donné leur
confiance à quelqu'un de leurs sujets ,
ils ont peine à la retirer , & ne se dé-
trompent pas aisément. Darius , sé-
duit par cet air de bonne foi avec le-
quel Hystiée lui parloit , le crut sur sa
parole , & lui permit de retourner en
Ionie , en lui enjoignant de revenir à
sa Cour quand il auroit exécuté ses
promesses.

Cependant les révoltés , malgré la *Herod. lib.*
défection des Athéniens , & l'échec *5. cap. 103-*
considérable qu'ils avoient reçu en *104. & 108-*
Ionie , ne perdirent point courage , *122.*
& poussèrent toujours leur pointe.

* Cette île est bien éloi-
gnée de l'Ionie , & n'y a nul
rapport. Je ne sais si ce ne se-
roit point une faute dans le
texte d'Hérodote.

DARIUS. Grèce ; & ils y furent aussi portés par
un motif de religion , que j'ai expli-
qué ailleurs.

^{44.} *Herod. lib.* Comme Aristagore , chef de la
^{5. cap. 105.} révolte , étoit Lieutenant d'Hyftiée
^{107.} à Milet , Darius crut que celui-ci
pourroit bien avoir conduit toute
cette trame ; & il eut avec lui une
explication , où il lui découvrit sa
pensée , & les justes raisons qu'il avoit
de le soupçonner. Hyftiée , qui étoit
un rusé courtisan , & un maître habile
dans l'art de dissimuler , parut surpris
& affligé , & prenant un ton qui mar-
quoit en même tems & de la douleur
& de l'indignation : » Quoi , Sei-
» gneur , lui dit-il , avez-vous donc
» pu concevoir un soupçon si inju-
» rieux contre le plus fidèle & le plus
» affectionné de vos serviteurs ? Moi ,
» exciter une révolte contre vous ?
» Hé ! quel auroit été mon but ? Me
» manque-t-il ici quelque chose ?
» Je tiens un des premiers rangs dans
» votre Cour. J'ai l'honneur d'assister
» à tous vos conseils , & je ressens
» tous les jours de nouvelles preuves
» de votre bonté pour moi par les
» bienfaits dont vous me comblez.
Il ajouta que la révolte d'Ionie ne

venoit que de son éloignement de ce DARIUS.
 pays-là ; qu'on avoit attendu son ab-
 sence pour la faire éclater ; que s'il
 fût resté à Milet , ce complot n'auroit
 jamais eu lieu ; & que le moien le
 plus sûr de rétablir les affaires du Roi
 étoit de l'y envoyer pour appaiser ces
 troubles ; qu'il lui promettoit , sur sa
 tête , de lui livrer Aristagore , & s'en-
 gageoit outre cela à lui rendre tribu-
 taire la grande île de * Sardaigne. Les
 meilleurs Princes sont souvent trop
 crédules , & quand ils ont donné leur
 confiance à quelqu'un de leurs sujets ,
 ils ont peine à la retirer , & ne se dé-
 trompent pas aisément. Darius , sé-
 duit par cet air de bonne foi avec le-
 quel Hystiée lui parloit , le crut sur sa
 parole , & lui permit de retourner en
 Ionie , en lui enjoignant de revenir à
 sa Cour quand il auroit exécuté ses
 promesses.

Cependant les révoltés , malgré la *Herod. lib.*
 désertion des Athéniens , & l'échec *5. cap. 103-*
 considérable qu'ils avoient reçu en *104. & 108-*
 Ionie , ne perdirent point courage , *122.*
 & poussèrent toujours leur pointe.

* Cette île est bien éloi-
 gnée de l'Ionie. & n'y a nul
 rapport. Je ne sais si ce ne se-
 roit point une faute dans le
 texte d'Hérodote.

DARIUS. Leur flotte fit voile vers l'Hellespont & la Propontide, & réduisit Byzance & la plupart des autres villes grecques situées de ce côté-là. Après quoi les confédérés retournant sur leurs pas, obligèrent les Cariens à se joindre à eux dans cette guerre, aussi bien que ceux de Cypre. Les Généraux Persans, aiant partagé les troupes entr'eux, marchèrent par trois différentes routes pour aller attaquer les rebelles, & les défirent en plusieurs rencontres, dans l'une desquelles Aristagore fut tué.

Herod. lib. 6. cap. 1-5. Quand Hystiée fut arrivé à Sardes, son génie intrigant lui fit former un complot contre le gouvernement, dans lequel il attira un grand nombre de Perses. Mais aiant reconnu par quelques discours qu'il eut avec Artapherne, que ce Gouverneur n'ignoroit pas la part qu'il avoit eue à la révolte d'Ionie, il comprit qu'il n'y avoit point de sûreté pour lui à rester plus longtems à Sardes; & s'étant retiré secrètement la nuit suivante, il passa dans l'île de Chio. De là il envoya une personne de confiance à Sardes avec des lettres pour ceux des Persans qu'il avoit gagnés. Cette per-

sonne le trahit , & remit ses lettres à DARIUS. Artapherne , par où tout le complot fut découvert, tous ses complices mis à mort, & son projet absolument déconcerté. S'imaginant néanmoins qu'il pourroit encore exécuter quelques entreprises d'importance s'il étoit une fois à la tête de la ligue Ionienne, il fit quelques tentatives pour entrer à Milet , & y être admis par les citoiens, mais elles ne lui réussirent pas. Il fut donc obligé de retourner à Chio.

Là, comme on lui eut demandé *Ibid. cap. 31* pourquoi il avoit si fortement pressé Aristagore de se révolter, & avoit attiré ainsi de si grands malheurs à l'Ionie, il répondit que c'étoit parce que le Roi avoit résolu de transférer les Ioniens en Phénicie, & les Phéniciens en Ionie. C'étoit une pure supposition de sa part & une imposture qu'il avoit fabriquée, un semblable dessein n'étant jamais venu dans l'esprit de Darius. Cet artifice néanmoins servit merveilleusement tant à le justifier dans l'esprit des Ioniens, qu'à les animer à poursuivre la guerre avec vigueur. Car, allarmés de cette transmigration, ils prirent une ferme ré-

DARIUS. solution de se défendre jusqu'à l'extrémité.

Herod. lib. 6. cap. 6-10. & 31.33. Artapherne & Otane, avec les autres Généraux de Perse, voyant que Milet étoit le centre de la confédération Ionienne, résolurent d'y conduire toutes leurs forces, comptant que s'ils pouvoient emporter cette ville, toutes les autres tomberoient d'elles-mêmes. Les Ioniens en aiant eu avis, convinrent dans leur assemblée générale de ne point mettre d'armée en campagne, mais de fortifier Milet, & de la pourvoir, autant qu'il leur seroit possible, de tout ce qui étoit nécessaire pour soutenir un siège; & de rassembler toutes leurs forces pour combattre les Perses sur mer, leur habileté dans la marine leur faisant croire qu'ils auroient l'avantage dans un combat naval. Leur rendez-vous fut à Lade, petite île vis-à-vis de Milet, où ils se trouvèrent avec 353 vaisseaux. A la vûe de cette flotte, les Perses, quoique plus forts de la moitié pour le nombre des vaisseaux, craignirent l'événement du combat, & l'évitèrent, jusqu'à ce que par le moien de leurs émissaires ils eurent débauché la plus grande partie des

confédérés, & les eurent engagés à se DARIUS.
 retirer : de sorte que, quand on en
 vint aux mains, ceux de Samos, de
 Lesbos, & plusieurs autres, firent
 voile pour retourner en leur pays ; &
 la flotte confédérée ne se trouva forte
 que d'une centaine de vaisseaux. Aussi
 fut-elle bientôt accablée par le nom-
 bre, & presque absolument détruite.
 Ensuite la ville de Milot ayant été as-
 siégée, devint la proie des vainqueurs,
 qui la ruinèrent entièrement : ce qui
 arriva six ans après la révolte d'Ari-
 stagore. Toutes les villes, tant celles
 du continent, que celles qui étoient
 sur le bord de la mer & dans les îles,
 rentrèrent bientôt après dans le de-
 voir soit volontairement, soit par
 force. On traita ceux qui firent quel-
 que résistance, comme on les en avoit
 menacés. Les jeunes gens les mieux
 faits furent destinés à servir dans le
 Palais du Roi, toutes les filles furent
 envoyées en Perse : les villes, de même
 que les temples, furent réduites en cen-
 dres. Voilà ce que leur attira la révolte
 où ils furent entraînés par les desseins
 ambitieux d'Aristagore & d'Hystiée.

Ce dernier eut aussi sa part dans le Herod. lib.
 malheur général. Car, cette même 6, cap. 29. 30.

DARIUS. année, aiant été pris par les Perses ;
il fut conduit à Sardes, où Artapherne
le fit pendre sur le champ, sans en
demander la permission à Darius, de
peur que l'affection de ce Prince pour
Hystiée ne le portât à lui accorder son
pardon, & qu'il ne laissât en vie un
dangereux ennemi, qui pourroit sus-
citer de nouvelles affaires aux Perses.
La suite fit voir que cette conjecture
étoit bien fondée. Car, dès que la
tête d'Hystiée eut été apportée à
Darius, il témoigna beaucoup de mé-
contentement contre les auteurs de sa
mort, & fit enterrer honorablement
cette tête, comme les restes d'un
homme à qui il avoit des obligations
infinies, dont le souvenir, gravé pro-
fondement dans son esprit, n'avoit
pu être effacé par la grandeur des fau-
tes qu'il avoit commises depuis. Hy-
stiée étoit de ces hommes inquiets,
hardis, entreprenans ; qui joignent à
beaucoup de grandes qualités des vi-
ces encore plus grands ; à qui tous
moïens sont bons pour parvenir à leur
but ; qui regardent la justice, la pro-
bité, la bonne foi, comme des noms
sans réalité ; qui ne se font aucun
scrupule d'employer le mensonge, la

DES PERSES ET DES GRECS. 135
fourberie , la perfidie même & le par-DARIUS.
jure , quand tout cela peut leur être
de quelque utilité ; & qui ne com-
ptent pour rien la ruine des peuples &
de leur propre partie , si elle est né-
cessaire à leur élévation. Il eut une fin
digne de ses sentimens , & assez ordi-
naire à ces politiques irréguliers , qui
sacrifient tout à leur ambition , & qui
ne connoissent d'autre règle , ni pres-
que d'autre dieu , que leur intérêt &
leur fortune.

§. VII. *Expédition des armées de Darius
contre la Grèce.*

DARIUS , ayant rappelé tous ses AN M. 3910.
Av. J. C. 494.
Herod. lib.
6. cap. 43-45.
autres Généraux , dans la vingt-hui-
tième année de son règne , envoya
Mardonius fils de Gobryas , jeune Sei-
gneur d'une illustre famille de Perse
qui venoit d'épouser une de ses filles ,
pour commander en chef dans toutes
les parties maritimes de l'Asie , avec
ordre de faire une invasion dans la
Grèce , & de le venger des Athéniens
& des Erétréens pour l'incendie de
Sardes. Le Prince montroit peu de
sagesse dans ce choix , où il préféroit
un jeune homme de faveur à ses
plus vieux & plus expérimentés Gé-

DARIUS. néraux, sur tout dans une guerre très-difficile, dont le succès lui tenoit fort à cœur, & qui intéressoit infiniment la gloire de son règne. La qualité de gendre du Roi pouvoit augmenter son crédit, mais n'ajoutoit rien à son mérite, & ne le rendoit pas excellent Général.

A son arrivée dans la Macédoine, où il étoit passé avec l'armée de terre après avoir traversé la Thrace, tout le pays effraïé de sa puissance se soumit. Mais sa flotte, aiant voulu doubler le mont Athos, (nommé présentement Capo Santo) pour gagner les côtes de la Macédoine, fut accueillie d'une si violente tempête, que plus de trois cens vaisseaux, avec plus de vingt mille hommes, y périrent. Dans le même tems, l'armée de terre reçut un échec non moins considérable. Car comme elle campoit dans un lieu mal sûr, les Thraces tombèrent de nuit sur le camp des Perses, en firent un grand carnage, & blessèrent Mardomius lui-même. Tous ces mauvais succès l'obligèrent bientôt après de retourner en Asie avec la honte & la douleur d'avoir mal réussi dans cette expédition tant par terre que par mer.

Darius s'apercevant trop tard que **DARIUS.**
la jeunesse & le peu d'expérience de
Mardonius étoient la cause de l'échec
qu'avoient reçu ses troupes, le rap-
pella, & mit à sa place deux autres
Généraux, Datis Méde de nation, &
Artapherne fils d'Artapherne son fre-
re qui avoit été Gouverneur de Sar-
des. Ce Prince songeoit sérieusement
à mettre en exécution le grand dessein
qu'il vouloit depuis longtemps dans son
esprit ; c'étoit d'attaquer la Grèce
avec toutes ses forces, & sur tout de
tirer une illustre vengeance des Athé-
niens & de ceux d'Eréttrie, dont l'en-
treprise contre Sardes lui étoit tou-
jours présente.

*1. Etat d'Athènes. Caractères de Miltiade,
de Thémistocle, & d'Aristide.*

IL FAUT nous rappeler dans l'es-
prit l'état où étoit pour lors Athènes,
qui seule soutint le premier choc des
Perses à Marathon, & nous former
par avance quelque idée des grands
hommes qui eurent part à cette célé-
bre victoire.

Athènes, délivrée tout récemment
du joug de la servitude qu'elle s'étoit
vû contrainte de porter pendant plus

DARIUS. de trente ans sous Pisistrate & sous ses enfans, goûtoit en paix les avantages de la liberté, dont cette courte privation n'avoit servi qu'à lui faire mieux sentir & le prix & la douceur. Lacédémone, qui dominoit pour lors dans la Grèce, & qui d'abord avoit beaucoup contribué à cet heureux changement, sembla dans la suite s'en repentir, & jalouse du tranquille repos qu'elle-même avoit procuré à ses voisins, elle entreprit de le troubler en essayant de faire remonter sur le trône Hippias fils de Pisistrate. Ses efforts furent inutiles, & ne servirent qu'à marquer sa mauvaise volonté, & la douleur qu'elle avoit de voir qu'Athènes voulût se maintenir dans l'indépendance même à son égard. Hippias eut recours aux Perses. Artapherne, Gouverneur de Sardes, fit dire aux Athéniens, comme nous l'avons rapporté ci-dessus, qu'ils eussent à le rétablir dans son autorité, s'ils ne vouloient s'attirer sur les bras toute la puissance de Darius. Cette seconde tentative n'ayant pas mieux réussi que la première, Hippias attendit une occasion plus favorable. Nous verrons bientôt qu'il servit de guide

& de conducteur aux Généraux que le DARIUS.
Roi de Perse envoya contre la Grèce. —

Athènes, depuis le recouvrement de sa liberté, étoit toute autre que sous les tyrans, & montrait un courage tout nouveau. Parmi ses citoyens, Miltiade fut celui qui se distingua le plus dans la guerre contre les Perses dont nous allons parler. Il étoit fils de *Herod. lib. 6. cap. 34-41.* Cimon, illustre Athénien. Celui-ci *Cornel. Nep. in Milt. cap. 1-3.* avoit un frere, de mere non de pere, nommé aussi Miltiade, d'une maison fort noble & fort ancienne, originaire d'Egine, qui avoit été adopté depuis peu au nombre des citoyens d'Athènes. Il y étoit fort puissant du tems même de Pisistrate: mais comme il souffroit avec peine son pouvoir despotique, il accepta avec joie l'offre qu'on lui fit d'aller s'établir avec une colonie dans la Chersonèse de Thrace, où il étoit appelé par les Dolonces habitans du pays pour être leur roi, ou, comme on parloit pour lors, leur tyran. Etant mort sans enfans, il laissa la souveraineté à Stésagore son neveu, fils aîné de son frere Cimon: & celui-ci étant mort aussi sans postérité, les fils de Pisistrate, qui gouvernoient alors la ville d'Athé-

DARIUS. nes, avoient envoyé dans ce pays-là, pour lui succéder, Miltiade son frere, qui est celui dont nous parlons ici. Il y arriva & s'y établit l'année même que Darius entreprit la guerre contre les Scythes. Il accompagna ce Prince avec quelques vaisseaux jusqu'au Danube, & ce fut lui qui conseilla aux Ioniens de rompre le pont, & de se retirer sans attendre Darius. Pendant son séjour dans la Chersonèse, il épousa * Hégésipyle, fille d'Olore un roi de Thrace du voisinage, de laquelle il eut Cimon ce fameux Général des Athéniens dont il sera beaucoup parlé dans la suite. Miltiade ayant renoncé pour plusieurs raisons à son établissement dans la Thrace, s'embarqua avec tout ce qu'il avoit sur cinq vaisseaux, & fit voile vers Athènes. Il s'y établit de nouveau, & s'y acquit une grande réputation.

Plut. in Dans le même tems, deux autres
Arist. f. 319. citoyens, plus jeunes que Miltiade,
320. & in commençoient à se faire connoître à
Themist. pag. Athènes; savoir, Aristide & Thémis-
112. 113. tocle. Plutarque observe que le pre-

An seni sit
ger. resp. pag.
790. 791.

* Après la mort de Miltiade, cette Princesse eut de Timoclide l'historien. Herod. ibid.
 d'un second mari un fils, appelé Olore du nom de son grand-pere, qui fut pere de Timoclide l'historien.

mier s'étoit formé sur le modèle de **DARIUS** Clisthène, l'un des plus grands hommes de son temps, & zélé défenseur de la liberté, qui avoit beaucoup contribué à la rétablir à Athènes, en chassant de cette ville les Pisistratides. C'étoit une salubre coutume établie chez les anciens, & qu'il seroit à souhaiter qui le fût aussi parmi nous, que les jeunes gens qui aspireroient aux charges, s'attachassent particulièrement aux vieillards qui s'y étoient le plus distingués, & qu'ils apprissent par leurs conversations, & encore plus par leurs exemples, l'art de se bien conduire eux-mêmes, & de gouverner sagement les autres. C'est ainsi, dit Plutarque, qu'Aristide s'attacha à Clisthène, Cimon à Aristide, & il en raporte plusieurs autres, parmi lesquels il met Polybe, dont nous avons parlé si souvent, qui se rendit le disciple assidu & l'imitateur fidèle du célèbre Philopémen.

Thémistocle & Aristide étoient d'un caractère très-différent, mais rendirent tous deux de grands services à la République. Thémistocle, qui penchoit naturellement vers le gouver-

a Discreto à petitis, sequi optimos. Facit in Agric.

DARIUS. nement populaire, ne négligea rien pour se rendre agréable au peuple, & pour se faire des amis, se montrant affable à tous, complaisant, toujours prêt à rendre service aux citoyens, qu'il connoissoit tous par leurs noms, & n'étoit pas fort délicat sur les moiens qu'il employoit pour leur faire plaisir. Aussi quelqu'un lui disant qu'il gouverneroit parfaitement, s'il conservoit l'égalité parmi les citoyens, & qu'il ne panchât pas plus pour l'un que pour l'autre; » A Dieu » ne plaise, répondit-il, que je sois » jamais assis sur un tribunal, où mes » amis n'aient pas plus de crédit & de » faveur que les étrangers. Cléon, qui parut quelque tems après à Athènes, garda une conduite toute opposée, mais qui n'étoit pas exemte de blâme. En entrant dans le maniement des affaires publiques, il rassembla tous ses amis, & leur déclara que dès ce moment il renonçoit à leur amitié, parce qu'elle pouvoit être pour lui une occasion de manquer à son devoir, & de commettre des injustices. C'étoit leur faire peu d'honneur, & juger d'eux peu favorablement. Mais, dit Plutarque, ce n'est pas à ses amis,

*Cic. de senect.
n. 21.*

*Plut. An se-
ni sit gerenda
resp. p. 806.
807.*

mais à ses passions qu'il devoit re- DARTUS.
noncer.

Aristide fut garder un sage tempérament entre ces deux excès vicieux. Porté pour l'aristocratie à l'exemple de Lycurgue dont il étoit grand admirateur, il marcha, pour ainsi dire, seul ; ne cherchant point à plaire à ses amis aux dépens de la justice, toujours prêt néanmoins à leur rendre service quand il le pouvoit justement. Il évitoit avec grand soin d'employer la recommandation de ses amis pour arriver aux charges, craignant que ce ne fût pour lui un engagement dangereux, & pour eux un prétexte plausible d'exiger de lui les mêmes services en pareille occasion. Il avoit coutume de dire que le véritable citoyen, l'homme de bien, ne devoit faire consister son crédit & son pouvoir qu'à pratiquer lui-même en toute occasion & à conseiller aux autres ce qui étoit honnête & juste.

Avec cette contrariété d'humeurs & de principes, il n'est pas étonnant que pendant tout le tems de leur administration il y ait eu une opposition continuelle entr'eux. Thémistocle, qui étoit hardi & entreprenant, trou-

DARIUS voit presque toujours à sa rencontre Aristide, qui se croioit obligé de s'opposer à ses desseins, quelquefois même lorsqu'ils étoient justes & utiles, pour l'empêcher de prendre un ascendant & une autorité qui seroit devenue pernicieuse à la République. Un jour qu'il l'emporta sur Thémistocle, qui avoit proposé une chose fort avantageuse, il ne put se retenir en sortant de l'assemblée, & dit tout haut, » Qu'il n'y avoit de salut pour » les Athéniens qu'à les jeter tous » deux dans le barathre: « c'étoit le lieu où l'on jettoit les coupables condamnés à mort. Mais l'intérêt commun les réunissoit: & quand ils étoient près de partir pour la campagne, ou pour quelque autre expédition, ils convenoient ensemble de déposer au sortir de la ville leurs dissensions, avec liberté de les reprendre à leur retour, s'ils le jugeoient à propos.

La passion dominante de Thémistocle étoit l'ambition & l'amour de la gloire, qui parut en lui dès ses plus tendres années. Après la bataille de Marathon dont nous parlerons bientôt, comme on célébroit par tout la valeur & la conduite de Miltiade qui l'avoit

l'avoit gagnée, on le voioit le plus DARIUS.
 souvent renfermé en lui-même tout
 pensif. Il passoit les nuits entières sans
 fermer l'œil : il ne se trouvoit plus
 aux festins publics comme il avoit
 coutume. Et lorsque ses amis, éton-
 nés de ce changement, lui en deman-
 doient la raison, il leur répondoit *que*
les trophées de Miltiade ne lui laissoient
point de repos. Ils furent pour lui com-
 me une espece d'éguillon qui le pi-
 quoit & l'animoit sans cesse. Dès lors
 la passion des armes saisit Thémisto-
 cle, & s'empara entièrement de lui.

Pour Aristide, l'amour du bien pu-
 blic étoit le grand mobile de toutes
 ses actions. On admiroit sur-tout en
 lui la constance & la fermeté dans les
 changemens imprévus auxquels sont
 exposés ceux qui se mêlent du gou-
 vernement, ne se laissant ni élever
 par les honneurs qu'on lui rendoit,
 ni abbattre par les mépris & les refus
 qu'il avoit quelquefois à essuier. Il
 conservoit en tout sa tranquillité &
 sa douceur ordinaire, persuadé qu'on
 doit se livrer à sa patrie, & la servir
 avec un parfait desintéressement, en-
 core plus du côté de la gloire que de
 celui des richesses. L'estime générale

DARIUS. qu'on faisoit de la droiture de ses intentions, de la pureté de son zèle pour les intérêts de l'Etat, & de la sincérité de sa vertu, parut un jour où l'on jouoit une pièce d'Eschyle. Car l'Acteur ayant récité ce vers qui contenoit l'éloge d'Amphiaraus, *Il ne veut point paroître homme de bien & juste, mais l'être effectivement*, tout le monde jeta les yeux sur Aristide; & lui en fit l'application.

Ce qu'on raconte de lui à l'occasion d'une charge qu'il exerça, est tout-à-fait remarquable. Il ne fut pas plutôt élu Trésorier Général de la République, qu'il fit voir que ceux qui l'avoient précédé dans cette charge, avoient pillé de grosses sommes, & sur tout Thémistocle: car celui-ci avec tout son mérite n'étoit pas sans reproche de ce côté-là. C'est pourquoi lorsqu'Aristide voulut rendre ses comptes, Thémistocle fit une grosse brigue contre lui, le chargea d'avoir volé les deniers publics, & vint à bout de le faire condamner. Mais les principaux de la ville, & les plus gens de bien, s'étant élevés contre un jugement si inique, non seulement l'amende lui fut remise, mais on le nom-

ma encore Trésorier pour l'année DARIUS suivante. Alors il fit semblant de se repentir de sa première administration. Se montrant donc plus traitable & plus facile, il trouva le secret de plaire à tous ceux qui pilloient la République. Car il ne les reprenoit point, & n'épluchoit point exactement leurs comptes : de sorte que tous ces pillards, engraisés de vols & de rapines, combloient de louanges Aristide. Il lui étoit facile, comme on voit, de s'enrichir dans un poste comme celui-là, qui semble presque y inviter par les occasions qu'il en présente ; sur tout avec des Officiers, qui ne songeant de leur côté qu'à piller, étoient tout préparés à dissimuler les vols de leur Trésorier à charge de retour.

Ils firent donc eux-mêmes des brigues auprès du peuple pour le faire continuer une troisième année dans la même charge. Mais le jour de l'élection étant venu, comme tous les suffrages se réunissoient pour le nommer, Aristide se levant, fit une forte réprimande aux Athéniens. « Quoi, » leur dit-il, quand j'ai administré « vos finances avec toute la fidélité & «

DARIUS. » toute la vigilance d'un homme de
» bien j'ai essuïée de votre part les
» traitemens les plus durs & les plus
» humilians : & aujourd'hui que je les
» ai abandonnées à tous ces voleurs
» publics, je suis un homme admira-
» ble, & le meilleur des citoiens ! Je
» vous déclare donc que j'ai plus de
» honte de l'honneur que vous me
» faites en ce jour, que je n'en eus
» l'an passé de la condamnation que
» vous prononçates contre moi ; & je
» voi avec douleur qu'il est plus glo-
» rieux ici d'user de complaisance en-
» vers les méchans, que de ménager
» & de conserver les biens de la Ré-
» publique. Par ce discours, il ferma
la bouche à tous ces voleurs publics,
& s'acquit l'estime de tous les gens de
bien.

Tel étoit le caractère de ces deux
illustres Athéniens, qui commencè-
rent à faire connoître toute l'étendue
de leur mérite dans le tems sur tout
que Darius attaqua la Grèce.



2. *Darius envoie des Hérauts dans la Grèce, pour sonder les peuples, & pour demander qu'ils se soumettent.* DARIUS.

CE PRINCE, avant que de s'engager entièrement dans cette entreprise, jugea à propos de sonder les Grecs, & de savoir quelle étoit la disposition de ces différens peuples à son égard. Dans cette vûe, il envoya des Hérauts par toute la Grèce, pour demander en son nom la terre & l'eau: c'étoit la manière dont les Perses avoient coutume d'exiger la soumission de ceux qu'ils vouloient assujettir. A l'arrivée de ces Hérauts plusieurs villes de la Grèce, redoutant la puissance des Perses, firent ce qui leur étoit commandé. De ce nombre furent les habitans d'Egine, petite île située vis-à-vis & tout près d'Athènes. Cette conduite des Eginètes fut regardée comme une trahison publique. Les Lacédémoniens, à la prière de ceux d'Athènes, y envoièrent Cléomène, l'un des deux Rois de Sparte, pour se saisir des coupables. Les Eginètes refusèrent de lui obéir, apportant pour prétexte de ce refus de ce qu'il ne venoit point avec son

*Herod. lib.
6. cap. 49-86.*

DARIUS. Collègue : c'étoit Démarate , l'autre roi , qui leur avoit lui-même suggéré ce moien. Aussi-tôt que Cléomène fut de retour à Sparte , pour se venger de cet affront , il entreprit de chasser du trône Démarate , comme n'étant point de la famille roiale ; & il y réussit par le secours de la Prêtresse de Delphes qu'il suborna pour rendre une réponse favorable à ses desseins. Démarate ne pouvant souffrir une injure si ignominieuse , se bannit lui-même de sa patrie , & se retira vers Darius , qui le reçut à bras ouverts , & lui fit un établissement considérable dans la Perse. On lui donna pour successeur Leutychide. Il se joignit à son Collègue , & s'étant rendus tous deux de concert à Egine , en enlevèrent dix des plus puissans citoyens , qu'ils confièrent à la garde des Athéniens , leurs ennemis déclarés. Cléomène étant mort quelque tems après ; & la fraude qu'il avoit faite à Delphes ayant été découverte , les Lacédémoniens voulurent obliger ceux d'Athènes à rendre les Eginètes ; mais ils le refusèrent.

Herod. lib. 7. cap. 133. Les Hérauts qui allèrent à Sparte & à Athènes , n'y furent pas reçus
216.

aussi favorablement que ceux qui **DARIUS.**
 avoient été envoyés dans les autres
 villes. L'un fut jetté dans un puits, &
 l'autre dans une fosse profonde, avec
 ordre de prendre de là de l'eau & de la
 terre. Je serois moins étonné de ce
 traitement indigne, s'il ne s'agissoit
 que d'Athènes. C'est une suite & un
 effet du gouvernement populaire,
 brusque, impétueux, violent; où ra-
 rement la raison est écoutée, & où
 l'on n'agit que par passion. Je ne re-
 connois point ici l'équité & la gravité
 Spartaine. Ils pouvoient refuser ce
 qu'on leur demandoit : mais traiter
 ainsi des Officiers publics, c'étoit vio-
 ler ouvertement le droit des gens. Si
 l'on en croit les historiens, ce crime
 ne demeura pas impuni. Talthybius,
 héraut d'Agamemnon, étoit honoré
 à Sparte comme un dieu, & y avoit
 un temple. Il vengea l'injure faite
 aux hérauts du Roi des Perses, & fit
 sentir sa colère aux Lacédémoniens
 par plusieurs accidens funestes. Ceux-
 ci, pour l'appaiser, & pour expier
 leur faute, envoièrent dans la suite en
 Perse plusieurs de leurs principaux
 citoyens qui s'exposèrent volontaire-
 ment à la mort pour leur patrie. On

Hersd. lib.

7. cap. 133.

136.

Pausan. in

La. on. p. 182.

183.

DARIUS. les livra entre les mains de Xerxès :
 — mais ce Prince les renvoia , sans leur
 avoir fait souffrir aucun mal. Pour les
 Athéniens , Talthybius fit tomber sa
 colère sur la famille de Miltiade , qui
 avoit eu part au mauvais traitement
 fait aux hérauts de Darius.

3. *Défaite des Perses à Marathon par
 Miltiade.*

AN. M. 3574.
 AV J. C. 490.
 Hierod. lib.
 6. cap. 94-
 101. **DARIUS** fit partir avec empresse-
 ment Datis & Artapherne qu'il avoit
 nommés pour Généraux à la place de
 Mardonius. Leurs ordres portoient
 de mettre au pillage Erétrie & Athé-
 nes , d'en brûler toutes les maisons &
 tous les temples , d'en faire prison-
 niers tous les habitans , & de les lui
 envoyer : & pour cet effet ils s'étoient
 munis d'un grand nombre de chaînes.
Plut. in Mo-
 val. pag. 829. Ils mirent à la voile avec une flotte de
 cinq ou six cens vaisseaux , & une ar-
 mée de cinq cens mille hommes.
 Après s'être rendu maîtres sans peine
 des îles de la mer Egée, ils firent route
 vers Erétrie ville de l'Eubée , qu'ils
 emportèrent après un siège de sept
 jours par la trahison de quelques-uns
 des principaux habitans, la réduisirent
 en cendres , mirent aux fers tous ceux
 qu'ils y trouvèrent , & les envoièrent

en Perse. Darius , contre leur attente, **DARIUS.**
 les traita avec bonté , & leur donna
 pour habitation un village du pays de *Herod. lib.*
 Cissie , qui n'étoit qu'à une journée *6. c. 119.*
 de Suse , où Apollone de Tyane trou- *Philosfr. lib.*
 va encore de leurs descendans six cens *1. cap. 17.*
 ans après.

Après l'expédition d'Erétrie , les *Herod. lib.*
 Perses s'avancèrent vers l'Attique. *6. cap. 102-*
 Hippias les conduisit à Marathon , *120.*
 petite ville située sur le bord de la *Cornel Nep.*
 mer. Ils firent savoir à Athènes le sort *in Milt. cap.*
 d'Erétrie , & comment aucun de ses *4-6.*
 citoyens ne leur avoit échappé , espé- *Justin. lib.*
 rant que cette nouvelle obligeroit la *2. cap. 3.*
 ville de se rendre sur le champ. Les *Plur. in*
 Athéniens avoient envoyé à Lacédé- *Aristid. pag.*
 mone demander du secours contre *321.*
 l'ennemi commun , qui leur fut ac-
 cordé promptement & sans délibérer ,
 mais qui ne put partir que quelques
 jours après , à cause d'une coutume an-
 cienne & d'une maxime superstitieuse
 de religion qui ne leur permettoit de
 se mettre en marche qu'après la pleine
 lune. Aucun des autres alliés ne se mit
 en état de les secourir , tant l'armée
 formidable des Perses avoit répandu
 par tout la terreur. Il n'y eut que ceux
 de Platée , qui leur amenèrent mille

DARIUS. soldats. On fut obligé à Athènes, dans cette extrémité, de faire prendre les armes aux esclaves, ce qui ne s'étoit point encore pratiqué jusques-là.

L'armée des Perses, commandée par Datis, étoit de cent mille hommes d'infanterie, & de dix mille chevaux. Celle des Athéniens ne montoit en tout qu'à dix mille hommes. Elle étoit conduite par dix Chefs, dont Miltiade étoit le premier, qui devoient commander successivement l'un après l'autre chacun leur jour. Il y eut une grande dispute parmi les Chefs, pour savoir s'il falloit hasarder le combat, ou attendre l'ennemi dans la ville. Ce dernier avis l'emportoit de beaucoup, & paroïssoit fort raisonnable. Quelle apparence en effet d'aller avec une petite poignée de soldats à la rencontre d'une armée aussi nombreuse que celle des Perses ? Miltiade se déclara pourtant pour l'avis contraire, & fit voir que l'unique moien de relever le courage de leurs troupes, & de jeter la terreur parmi celles des ennemis, étoit de s'avancer vers elles avec un air de confiance & d'intrépidité. Aristide appuya forte-

ment cet avis, & y fit revenir quelques autres, en sorte que les suffrages se trouvèrent également partagés. Miltiade alors s'adressa à Callimaque qui étoit * Polémarque, & avoit droit de suffrage comme les dix Chefs. Il lui représenta avec vivacité que le sort de la patrie étoit entre ses mains, que son suffrage alloit décider si Athènes seroit libre ou esclave, & qu'un mot sorti de sa bouche l'égaleroit à Harmodius & Aristogiton auteurs de la liberté dont jouissoient les Athéniens. Il le prononça ce mot, & se joignit au parti de Miltiade. Ainsi la bataille fut résolue.

Aristide, faisant réflexion qu'un commandement qui change tous les jours, est nécessairement foible, inégal, peu suivi, contraire souvent à lui-même, & ne peut avoir ni projet ni exécution uniformes, crut que le danger étoit trop grand & trop pressant pour s'exposer à tous ces inconvéniens. Afin de les prévenir, il jugea nécessaire de réunir tout le pouvoir dans un seul ; & pour y porter ses

* Le Polémarque à Athènes étoit un Officier, un Magistrat considérable, employé également à com-
mander dans les troupes, & à rendre la justice: Il en sera parlé ailleurs.

DARIUS.

Collègues, il en donna l'exemple le premier. Ainsi, quand le jour d'Aristide fut venu, il remit le commandement à Miltiade, comme plus habile & plus expérimenté que lui. Les autres en firent autant, l'amour du bien public étouffant en eux tout sentiment de jalousie; & l'on vit en ce jour qu'il est presque aussi glorieux de reconnoître le mérite dans les autres, que de l'avoir soi-même. Miltiade cependant crut devoir attendre que son tour fût arrivé. Pour lors, en habile capitaine, il songea à regagner par l'avantage du poste ce qui lui manquoit du côté du nombre. Il rangea son armée au pié d'une montagne, afin que l'ennemi ne pût l'enveloper & la prendre par les derrières. Il fit jetter sur les deux côtés de grands arbres qu'il avoit fait couper exprès, afin de couvrir ses flancs, & de rendre inutile la cavalerie des Perses. Datis leur Chef, sentit bien que le lieu ne lui étoit pas favorable: mais comptant sur le nombre de ses troupes, infiniment supérieur à celui des ennemis, & d'ailleurs ne voulant pas attendre que le renfort des Lacédémoniens fût arrivé, il accepta le com-

Bat. Les Athéniens n'attendirent pas **DAREUS**, qu'on vînt les attaquer. Dès qu'on eut donné le signal, ils coururent de toutes leurs forces contre l'ennemi. Les Perses regardoient cette première démarche comme une folie pour des gens qui étoient en si petit nombre, & absolument déstitués de cavalerie & d'archers : mais ils furent bientôt détrompés. Hérodote remarque que c'est ici la première fois que les Grecs allèrent ainsi au combat en courant : ce qui peut paroître étonnant. En effet n'étoit-il pas à craindre que la première impétuosité & la force de ces troupes ne fussent émoussées & affoiblies par cette course, & que les soldats, ayant rompu leurs rangs, n'arrivassent tout hors d'haleine, épuisés, & en desordre, vers un ennemi qui les attendait de pié ferme & sans branler, devoit ce semble être plus en état de soutenir avantageusement leur choc ? C'est ce qui engagea Pompée, dans la bataille de Pharsale, à tenir ses troupes immobiles ; & à leur défendre de faire aucun mouvement jusqu'à ce que l'ennemi vînt les attaquer :^a mais César blâme sa conduite.

*Cas. in bello
Civil. lib. 3.*

*Plut. in Pomp.
pag. 656. et*

^a Quod nobis quidem | Pompeio videtur: propter-
nulla ratione factum à | ea quod est quidam in-729.

DARIUS. La raison qu'il en apporte , c'est que l'impétuosité de la course remplit d'un certain enthousiasme & d'une fureur martiale l'ame des combattans , qu'elle donne plus de force & de roideur aux coups qu'ils portent , & qu'elle enflamme le courage , qui est , si l'on peut parler ainsi , soufflé & animé par le mouvement rapide de tant de milliers d'hommes , comme la flamme par le vent. Je laisse aux gens du métier à décider entre ces deux grands Capitaines , & je reviens à mon sujet.

Le combat fut rude & opiniâtre. Miltiade avoit extrêmement fortifié ses deux aîles , mais avoit laissé le corps de bataille plus foible & plus dégarni : & la raison en paroît assez claire. N'ayant que dix mille hommes à opposer à une si grande multitude d'ennemis , il ne pouvoit ni faire un grand front , ni donner à ses troupes une égale profondeur. Il falloit donc opter ; & il crut que la victoire ne

ciatio atque alacritas naturaliter innata omnibus, quæ studio pugnae incenditur. Hanc non reprimere, sed augere imperatores debent. *Cæs.*

Κλειστέρι πάλιν δια-
μορφή θησί τῶν Πορ-

πίων, ἀγνοήσαντα τὴν
μετὰ δόξαν καὶ φοβερὰν
ἐκ ἀρχῆς γενομένην σύρρα-
ξιν, ὡς ἔνι ταῖς πλε-
γαῖς βίαν προτίθησι, καὶ
συνεχεῖς τὸν θυμὸν ἐκ
πάντων ἀναρριπίζουσιν.
Plut. in Cæs.

pouvoit venir que des efforts qu'il **DARIUS** feroit aux deux aîles pour enfoncer & dissiper les deux aîles des Perses: bien persuadé que quand ses deux aîles seroient victorieuses, elles prendroient en flanc le corps de bataille des ennemis, & acheveroient la victoire sans grand obstacle. C'est le même plan qu'Annibal se proposa à la bataille de Cannes, qui lui réussit si parfaitement, & qui ne peut guères manquer de réussir. Les barbares attaquèrent donc le corps de bataille des Grecs, & donnèrent sur tout de ce côté-là. Ils avoient entête Aristide & Thémistocle, qui les soutinrent longtemps avec un courage intrépide, mais qui furent enfin obligés de plier. Dans ce moment survinrent les deux aîles victorieuses, qui avoient défait & mis en fuite celles des Perses. Ce fut fort à propos pour le corps de bataille qui commençoit à se rompre, & étoit accablé par le nombre des combattans. Alors la déroute des Perses fut entière. Ils prirent tous la fuite, non vers leur camp, mais vers leurs vaisseaux pour s'y sauver. Les Athéniens les y poursuivirent, & mirent le feu à plusieurs de leurs vaisseaux. C'est dans

DARIUS. cette occasion que Cynégire, un soldat d'Athènes, qui se tenoit à un vaisseau pour y entrer avec les fuiards, aiant eu d'abord la main droite, puis la gauche, coupées à coups de hache, s'y attacha encore avec les dents sans vouloir quitter prise; tant il étoit acharné contre l'ennemi. Les Athéniens se rendirent maîtres de sept vaisseaux. Il périt de leur côté dans le combat près de deux cens hommes, & du côté des Perses plus de six mille, sans compter ceux qui tombèrent dans la mer en fuyant, ou qui furent consumés par le feu qu'on mit aux vaisseaux.

Hippias fut tué dans le combat. Cet ingrat & perfide citoyen, pour recouvrer l'injuste domination que Pisistrate son pere avoit usurpée sur les Athéniens, avoit eu la lâcheté de se rendre servilement le courtisan d'un roi barbare, & d'implorer son secours contre ses propres citoyens. Animé de haine & de vengeance, il lui avoit suggéré tous les moïens qu'il avoit pu imaginer pour mettre sa patrie dans les fers; & lui-même s'étoit mis à la tête de ses ennemis pour réduire en cendres la ville qui lui avoit donné le

jour , & à qui il ne pouvoit reprocher **DARIUS.**
de crimes que celui de ne vouloir point
le reconnoître pour son tyran. Une
mort honteuse , qui devoit être suivie
de l'exécration de tous les siècles , fut
la juste récompense d'une si noire per-
fidie.

Aussitôt après la bataille , un soldat *Plut. de glor*
Athénien , encore tout fumant du *Atheniens. p.*
sang des ennemis , se détacha de l'ar- *347.*
mée , & courut de toutes ses forces à
Athènes pour porter à ses concitoyens
l'heureuse nouvelle de la victoire.
Quand il fut arrivé à la maison des
Magistrats , il ne leur dit que deux
mots , *2 Réjouissez-vous , nous sommes*
vainqueurs , & tomba mort à leurs
piés.

Les Perses avoient tellement com- *Pausan. lib.*
pté sur la victoire , qu'ils avoient ap- *1. pag. 62.*
porté du marbre à Marathon ; pour y
ériger un trophée. Les Grecs se saisi-
rent de ce marbre , & en firent faire
par Phidias une statue à la déesse Né-
mésis * , qui avoit un temple près du
lieu où se donna le combat.

La flotte Persane , au lieu de prendre

2 χαίρειν , χαίρομεν. Je
n'ai pu rendre en françois
la vivacité du grec.

** C'étoit la déesse char-*
gée de venger les injustices.

DARIUS. le chemin des îles pour regagner l'Asie, doubla le cap de Sunium, dans le dessein de surprendre Athènes avant que les Athéniens pussent y être arrivés pour la secourir. Mais ceux-ci marchèrent au secours de leur patrie avec neuf Tribus, & ils firent tant de diligence qu'ils y arrivèrent le jour même. De Marathon à Athènes il y a environ quarante mille, c'est-à-dire plus de quinze lieues. C'étoit beaucoup pour une armée qui avoit essuié le fatigue d'un long & rude combat. Ainsi le dessein des Perses avorta.

Aristide, laissé seul à Marathon avec sa Tribu pour garder les prisonniers & le butin, ne trompa pas la bonne opinion qu'on avoit de lui. Car l'or & l'argent étant semés çà & là dans le camp ennemi, & toutes les tentes aussi bien que toutes les galères qu'on avoit prises, étant pleines d'habits & de meubles magnifiques, & de toutes sortes de richesses sans nombre, non seulement il ne fut pas tenté d'y toucher, mais il empêcha que les autres n'y touchassent.

Dès que le jour de la pleine lune fut passé, les Lacédémoniens se mirent en chemin avec deux mille hommes,

& aiant fait toute la diligence possible, ils arrivèrent dans l'Attique après une marche forcée de trois jours, où ils firent 1200 stades de chemin, c'est-à-dire 70 lieues. La bataille avoit été donnée la veille. Ils ne laissèrent pas d'aller jusqu'à Marathon, dont ils virent les campagnes couvertes de corps morts & de richesses. Après avoir félicité les Athéniens sur l'heureux succès de la bataille, ils retournèrent dans leur pays.

Une vaine & ridicule superstition les empêcha d'avoir part à l'action la plus glorieuse dont il soit parlé dans l'histoire. Car il est presque sans exemple qu'une petite poignée de gens, comme étoient les Athéniens, non seulement ait tenu tête à une armée aussi nombreuse que celle des Perses, mais l'ait entièrement dissipée & mise en fuite. On est étonné de voir une puissance si formidable venir échouer contre une petite ville, & l'on est presque tenté de refuser sa croiance à un événement qui paroît si peu vraisemblable, & qui est cependant très-certain. Cette bataille seule fait voir ce que peut l'habileté d'un Général qui sait prendre ses avantages, l'in-

DARIUS.

*Isocrat. in
Panegy. pag.
113.*

DARIUS. trépidité de soldats qui ne craignent point la mort, le zèle pour la patrie, l'amour de la liberté, la haine & la détestation de l'esclavage & de la tyrannie, sentimens naturels aux Athéniens, mais dont la vivacité étoit sans doute beaucoup augmentée en eux par la présence seule d'Hippias, qu'ils redoutoient d'avoir de nouveau pour maître après tout ce qui s'étoit passé.

In Menex. Platon, en plus d'un endroit, prend
p. 239. 240. à tâche de relever la journée de Ma-
Et lib. 3. de rathon, & il veut qu'on la regarde
leg. pag. 698. comme la source & la première cause
699. de toutes les victoires qui ont été remportées depuis. En effet, c'est elle qui ôta à la puissance Persane cette terreur, qui la rendoit si formidable, & qui faisoit tout plier devant elle; qui apprit aux Grecs à connoître leurs forces, & à ne pas trembler devant un ennemi qui n'avoit de terrible que le nom; qui leur fit comprendre que la victoire ne dépend point du nombre, mais du courage des troupes; qui mit dans tout son jour la gloire qu'il y a à sacrifier sa vie pour le salut de la patrie, & pour la conservation de la liberté; qui les remplit enfin, pendant toute la suite des siècles,

d'une noble émulation & d'un vif de- DARIVS.
 fir d'imiter leurs ancêtres, & de ne
 point dégénérer de leur vertu. Car,
 dans toutes les occasions importantes,
 on leur remettoit devant les yeux
 Miltiade & sa troupe invincible, c'est-
 à-dire une petite armée de héros,
 dont le courage intrépide avoit fait
 tant d'honneur à Athènes.

On rendit aux morts sur le champ *Pausan. in
Attic. p. 60.
& 61.*
 tout l'honneur qui leur étoit dû. On
 leur érigea à tous, dans le lieu même
 où la bataille s'étoit donnée, d'illu-
 stres monumens, où leurs noms, &
 celui de leurs Tribus, étoient mar-
 qués. On en construisit trois séparé-
 ment, l'un pour les Athéniens, l'au-
 tre pour les Platéens, & un troisième
 pour les esclaves qu'on avoit armés
 dans cette occasion. Dans la suite on
 y ajouta le tombeau de Miltiade.

Je ne dois pas omettre ici la réflexion de Cornélius Népos l'historien *Corn. Nep.
in Milt. c. 6.*
 sur ce que firent les Athéniens pour
 honorer la mémoire de leur Général.
 Autrefois, dit-il en parlant des Ro-
 mains, nos ancêtres récompensent
 la vertu par des marques de distin-
 ction peu fastueuses, mais qu'ils ac-
 cordoient rarement, & qui, par cette

DARIUS. raison-là même , étoient d'un grand prix , au lieu que maintenant qu'elles sont prodiguées , on n'en fait nul cas. Il en a été ainsi , ajoute-t-il , parmi les Athéniens. Tout l'honneur qu'on rendit à Miltiade , le libérateur d'Athènes & de toute la Grèce , fut que dans le tableau où les Athéniens firent peindre la bataille de Marathon, on le représenta à la tête des dix Chefs , exhortant les soldats , & leur donnant l'exemple. Mais ce même peuple , dans les siècles postérieurs , devenu plus puissant , & corrompu par les flateries de ses Orateurs , décerna trois cens statues à Démètre de Phalère.

*In prac. de
rep. ger. pag.
810.*

Plutarque fait la même réflexion , & il remarque sagement que ^a l'honneur qu'on rend aux grands hommes , ne doit pas être regardé comme la récompense de leurs belles actions , mais simplement comme la marque de l'estime qu'on en fait , dont on veut par là perpétuer le souvenir. Ce n'est donc pas la richesse ni la magnificence des monumens publics qui en fait le prix , ni qui les rend durables ,

^a Οὐ γὰρ μισθὸν εἶναι δεῖ | βολον, τὴν πρῶτην, ἵνα καὶ
τῆς πράξεως, ἀλλὰ σύμ- | διαμένην πολλὸν χρόνον.

mais la sincère reconnoissance de ceux **DARIUS** qui les érigent. Les trois cens statues de Démètre de Phalère furent toutes renversées de son vivant même, & le tableau où le courage de Miltiade étoit représenté, subsista plusieurs siècles après lui.

Ce tableau étoit placé à Athènes *Plin. lib. 34* dans une galerie, qui étoit ornée & *cap. 9.* enrichie de différentes peintures, toutes excellentes, & de la main des meilleurs maîtres, & qui, pour cette raison, fut appelée *Pécile*, d'un mot *Ποικίλη* grec qui signifie *variée*. Le célèbre Polygnote, qui étoit de l'île de Thasos, l'un des premiers peintres de son tems, avoit peint ce tableau, du moins pour la plus grande partie; & comme il se piquoit d'honneur, & étoit plus sensible à la gloire qu'à l'intérêt, il l'avoit fait gratuitement, & sans vouloir en tirer aucune récompense. Athènes le paia en une monnoie qui étoit de son goût, en lui décernant, par l'ordre des Amphictyons, un logement public dans la ville, où il pourroit demeurer tant qu'il lui plairoit.

La reconnoissance des Athéniens à l'égard de Miltiade ne fut pas de lon- *Herod. lib. 6. cap. 132-136.*

DARIUS. gue durée. Après la bataille de Marathon, il avoit demandé & obtenu une flote de soixante & dix vaisseaux, pour aller punir & soumettre les îles qui avoient favorisé les barbares. Il en subjuga plusieurs : mais aiant mal réussi dans l'île de Paros, & sur un faux bruit de l'arrivée de la flote ennemie, s'étant cru obligé de lever le siège qu'il avoit mis devant la principale ville, où il avoit reçu une blessure fort dangereuse, il revint à Athènes avec sa flote ; & il y fut appelé en jugement par un citoyen nommé Xanthippe, qui l'accusa d'avoir levé ce siège par trahison, & après avoir reçu de grandes sommes du Roi des Perses. Quelque peu de vraisemblance qu'eût cette accusation, elle prévalut contre le mérite & l'innocence de Miltiade. Il fut condamné à perdre la vie, & à être jetté dans le barathre, qui étoit le lieu où l'on précipitoit les coupables convaincus des plus grands crimes. Le Magistrats'opposa à l'exécution d'un jugement si inique. Toute la grace qu'on fit au Libérateur de la patrie, fut de commuer la sentence de mort en une amende de cinquante mille écus, qui étoit la somme où montoient

*Corn. Nep.
in Milt. cap.
7. 8.*

*Plat. in Gorg.
pag. 516.*

50. talens.

montoient les frais de la flotte qu'on DARTUS.
 avoit équipée sur ses remontrances &
 ses avis. Comme il étoit hors d'état
 de la paier, il fut mis en prison, & y
 mourut de la blessure qu'il avoit reçue
 à Paros. Cimon son fils, qui étoit alors
 fort jeune, signala en cette occasion
 sa pitié, comme nous verrons dans la
 suite qu'il signalera son courage. Il
 acheta la permission d'ensevelir le
 corps de son pere en paiant pour lui
 les cinquante mille écus auxquels il
 avoit été condamné, somme qu'il ra-
 massa du mieux qu'il put dans la bour-
 se de ses parens & de ses amis.

Cornélius Népos remarque que ce
 qui engagea principalement les Athé-
 niens à en user ainsi à l'égard de Mil-
 tiade, fut son mérite même & sa
 grande réputation, qui fit craindre au
 peuple, délivré assez récemment du
 joug de la servitude sous Pisistrate,
 que celui-ci, qui avoit été autrefois
 tyran dans la Chersonnèse, ne voulût
 le devenir à Athènes. ^a Ainsi il aima
 mieux punir un innocent, que d'avoir
 toujours devant les yeux un tel sujet
 de crainte. C'est ce même principe

^a Hæc populus respi- | xium pleâi, quàm se
 ciens, maluit cum inno- | diutius esse in timore.

DARIUS. qui établit l'Ostracisme à Athènes.

Manière d'étudier. Tome 3. pag. 407.

Val. Max. lib. 5. cap. 3.

J'ai rapporté ailleurs les raisons les plus plausibles sur lesquelles pouvoit être fondé l'Ostracisme. Mais il est difficile d'excuser pleinement une si étrange politique, à qui tout mérite devient suspect, & qui convertit la vertu même en crime. Heureuse République, s'écrie Valère Maxime en parlant de l'exil d'Aristide, qui a pu, après un si indigne traitement fait au plus homme de bien qu'elle ait jamais eu, trouver encore des citoyens attachés avec zèle & fidélité à son service! *Felices Athenas, quæ post illius exilium invenire aliquem aut virum bonum, aut amantem sui civem potuerunt; cum quo tunc ipsa sanctitas migravit!*

§. VIII. Darius songe à porter la guerre contre l'Egypte & contre la Grèce. Il est prévenu par la mort. Dispute entre deux de ses fils pour la roiauté. Xerxès est élu Roi.

Herod. lib. 7. cap. 1.

QUAND Darius apprit la défaite de son armée à Marathon, il entra dans une grande colère; & ce mauvais succès, loin de le décourager, & de le détourner de la guerre contre la Grèce, ne fit que l'animer à la

pour suivre & à la pousser avec plus de **DARIUS.**
 vigueur pour se venger en même
 tems & de l'incendie de Sardes, & de
 la honte reçue à Marathon. Ainsi, ré-
 solu de marcher en personne avec
 toutes ses forces, il envoya ordre à
 tous ses sujets dans toutes les provin-
 ces de son empire de s'armer pour
 cette expédition.

Après avoir employé trois ans à ces
 préparatifs, il eut à soutenir une nou-
 velle guerre par la révolte de l'Egy-
 pte. Il paroîtroit, par ce qu'on lit dans
 Diodore de Sicile, que Darius y alla
 lui-même pour l'appaiser, & en vint
 à bout. Cet Historien raconte que ce
 Prince voulant y faire mettre sa sta-
 tue avant celle de Sésostris, le Grand
 Prêtre des Egyptiens lui représenta
 qu'il n'avoit pas encore égalé la gloire
 de ce Conquérant, & que le Roi,
 loin d'être choqué de la liberté de
 l'Egyptien, répondit qu'il travaille-
 roit à la surpasser. Diodore ajoute que
 Darius, détestant la cruauté impie
 dont Cambyse son prédécesseur avoit
 usé en Egypte, témoigna beaucoup
 de respect pour les dieux & pour leurs
 temples, qu'il eut plusieurs entretiens
 avec les Prêtres Egyptiens sur ce qui

*Diod. lib. 1.
 p. 54. & 85.*

DARIUS. regarde la religion & le gouvernement, & qu'ayant appris d'eux avec quelle douceur leurs anciens Rois traitoient leurs sujets, il s'étoit appliqué, après son retour en Perse, à se former sur leur modèle. Mais Hérodote, plus digne de foi en cela que Diodore, marque seulement que ce Prince, résolu de punir tout à la fois ses sujets révoltés & de se venger de ses anciens ennemis, se détermina à leur faire la guerre en même tems; & à tomber lui-même en personne sur la Grèce avec le gros de ses troupes, pendant qu'il en emploieroit une autre partie pour réduire l'Egypte,

Herod. lib. 6. cap. 2. Selon un ancien usage des Perses, il n'étoit point permis à leur Roi d'aller à la guerre, sans avoir nommé celui qui devoit monter sur le trône après lui; coutume sagement établie pour ne point exposer l'Etat aux troubles qui accompagnent ordinairement l'incertitude du successeur, les inconvéniens de l'anarchie, & les cabales des divers prétendans. Darius, avant que de s'engager dans l'expédition contre la Grèce, se crut obligé de satisfaire à cette loi, d'autant plus qu'il étoit avancé en âge, & qu'il y avoit

une dispute entre deux de ses enfans **DARIUS.**
 au sujet de la succession à l'empire ,
 qui pourroit exciter une guerre civile
 après sa mort, s'il laissoit ce différent
 indécis. Darius avoit trois fils de sa
 première femme fille de Gobryas ,
 tous trois nés avant qu'il fût parvenu
 à la couronne ; & quatre autres d'A-
 tosse , fille de Cyrus , qui étoient nés
 depuis qu'on l'avoit choisi pour roi.
 Artabazane , appelé par Justin Ar-
 témène , étoit l'aîné des premiers ;
 & Xerxès , des seconds. Artabazane
 alléguoit en sa faveur , qu'étant l'aîné
 de tous ses freres , la coutume & l'u-
 sage de toutes les nations lui adjugeoit
 la succession préféablement à tout
 autre. Xerxès répliquoit , qu'il étoit
 fils de Darius par Atosse fille de Cyrus ,
 qui avoit fondé l'empire des Perses ;
 & qu'il étoit plus juste que la couron-
 ne de Cyrus tombât à un de ses des-
 cendans , qu'à un autre qui ne l'étoit
 pas. Démarate , roi de Lacédémone ,
 qui après avoir été déposé injuste-
 ment par ses sujets vivoit alors en exil
 à la Cour de Perse , lui suggéra secret-
 tement une autre raison : c'est qu'Ar-
 tabazane étoit à la vérité le fils aîné
 de Darius , mais que lui Xerxès étoit

DARIUS. le fils aîné du Roi; qu'ainsi Artabazane étant né lorsque son pere n'étoit encore qu'homme privé, il ne pouvoit prétendre par son droit d'aînesse qu'à ses biens propres: mais que pour lui, étant le fils aîné du Roi, le droit de succéder à la couronne lui appartenoit. Il appuia cette raison de l'exemple des Lacédémoniens, qui n'appelloient à la succession du royaume que les enfans qui étoient nés depuis que leur pere étoit Roi. La succession fut adjugée à Xerxès.

Justin. lib.

2. ap. 10.

Plat. de frat.

an. 489.

Justin. lib. 2. ap. 10. Plat. de frat. an. 489. Justin, aussi bien que Plutarque, place cette dispute après la mort de Darius. L'un & l'autre font remarquer la sage conduite de ces deux freres dans une conjoncture si délicate. Selon cette autre manière de rapporter le même fait, Artabazane étoit absent quand le Roi mourut. Xerxès prit aussitôt toutes les marques de la roiauté, & en exerça les fonctions. Dès que son frere fut arrivé, il quitta le diadème & la tiare qu'il portoit d'une manière qui ne convenoit qu'au Roi, alla au devant de lui, & le combla d'honnêtetés. Ils convinrent de prendre pour arbitre de leur différent Artabane leur oncle, & de s'en rapor-

ter sans appel à son jugement. ^a Pén- **DARIUS.**
 dant tout le tems que dura cette dis-
 pute, les deux freres se donnèrent ré-
 ciproquement toutes les marques
 d'une amitié véritablement frater-
 nelle, se faisant des présens, & se
 donnant même des repas, d'où l'esti-
 me & la confiance mutuelle écartoit
 de part & d'autre toute crainte &
 tout soupçon, & y faisoit regner une
 joie pure & une pleine sécurité. Spe-
 ctacle bien digne d'admiration, s'é-
 crie Justin, de voir que pendant que
 la plupart des freres les disputent pres-
 que à main armée un médiocre pa-
 trimoine, ceux-ci attendoient avec
 une modération si tranquille un ju-
 gement qui devoit décider du plus
 grand empire qui fût dans l'univers,
 Quand Artabane eut prononcé en fa-
 veur de Xerxès, dans le moment même
 son frere se prosterna devant lui le re-
 connoissant pour son maître, & le

a Adeo fraterna con-
 rentio fuit, ut nec victor
 insultaverit, nec victus
 doluerit; ipsoque litis
 tempore invicem munera
 miserint; jucunda quo-
 que inter se non solum,
 sed credula convivia ha-

buerint; judicium quo-
 que ipsum sine arbitris,
 sine convicio fuerit. Tan-
 to moderatius tum fra-
 tres inter se regna maxi-
 ma dividebant, quàm
 nunc exigua patrimonia
 partiuntur. *Justin.*

DARIUS. plaça de sa propre main sur le trône, montrant par cette conduite une grandeur d'ame véritablement roiale, & infiniment supérieure à toutes les grandeurs humaines. Ce prompt acquiescement à une sentence si préjudiciable à ses intérêts, n'étoit point l'effet d'une adroite politique, qui fait dissimuler dans l'occasion, & se faire honneur de ce qu'elle ne peut empêcher. C'étoit respect pour les loix, vraie affection pour un frere, & indifférence pour ce qui pique si vivement l'ambition des hommes, & arme souvent les plus proches les uns contre les autres. Pour lui, il demeura toujours attaché aux intérêts de Xerxès avec tant d'ardeur, qu'il perdit la vie à son service dans la bataille de Salamine.

*Herod. lib. 6.
cap. 4.*

En quelque tems que cette dispute doive être placée, il est constant que Darius ne put exécuter la double expédition qu'il méditoit, l'une contre l'Egypte, & l'autre contre la Grèce, & qu'il fut prévenu par la mort. Il avoit régné trente-six ans.

Ce Prince avoit d'excellentes qualités, mais qui étoient mêlées de plusieurs défauts, & l'empire se sentit

des unes & des autres : Car telle est la DARIUS.
condition des Rois : ils ne vivent & n'agissent point pour eux seuls. Tout ce qu'ils font, soit en bien soit en mal, ils le font pour leurs peuples, & leurs intérêts sont inséparables. On voioit en lui un fonds de douceur, d'équité, de clémence, de bonté pour les peuples : il aimoit la justice, & respectoit les loix : il estimoit le mérite, & le récompensoit : il n'étoit point jaloux de son rang ni de son autorité, jusqu'à exiger des respects forcés, & à se rendre presque inaccessible : quelque habile qu'il fut par lui-même, il écoutoit les avis, & favoit en profiter ; c'est de lui que l'Ecriture Sainte dit qu'il ne faisoit rien sans consulter les sages de sa Cour ; *Interrogavit sapientes . . . & illorum faciebat cuncta consilio* : il paioit de sa personne dans les combats, où il gardoit toujours son sang froid, & il disoit de lui-même que le danger le plus vif & le plus pressant ne servoit qu'à augmenter son courage & sa prudence : enfin il y a eu peu de Princes plus habiles que lui dans l'art de régner, &

Esth. 1. 13.

*P'ut. in
apophthegm.
pag. 172.*

ita nati estis, ut bona | pertinent. Tacit. lib. 4.
malaque vestra ad Remp. | cap. 8.

DARIUS. plus expérimentés dans la guerre. La gloire de Conquérant, si c'en est une véritable, ne lui manqua pas. Car, non seulement il rétablit & affermit entièrement l'empire de Cyrus, qui avoit été fort ébranlé par Cambyse & par le Mage : il y ajouta encore plusieurs grandes & riches provinces, & en particulier les Indes, la Thrace, la Macédoine, & les îles qui baignent les côtes de l'Ionie.

Mais quelquefois ces bonnes qualités faisoient place à des défauts tout opposés. Reconnoit-on la bonté & la douceur de Darius dans le traitement qu'il fit à ce pere infortuné, qui de trois fils qu'il avoit, le pria de lui en laisser un pendant que les autres le suivroient dans ses campagnes ? Y eut-il jamais occasion où le conseil fût plus nécessaire que dans le dessein qu'il forma de porter la guerre contre les Scythes ? & pouvoit-on lui en suggérer un plus sage que celui que lui donna son frere ? il ne l'écouta pas. Paroit-il dans toute cette expédition aucune marque de sagesse, ou de prudence ? & n'y voit-on pas par tout un Prince enivré de sa grandeur, qui croit que rien ne lui peut résister, &

DES PERSES ET DES GRECS. 179
en qui la folle ambition de se signaler **DARIUS**
par une conquête extraordinaire étou-
fe tout ce qu'il avoit montré jusques-
là de bon sens , de jugement , d'habi-
leté même dans la guerre ?

Ce qui fait la solide gloire de Da-
rius , c'est d'avoir été choisi de Dieu
même , aussi bien que Cyrus , pour
être l'instrument de ses miséricordes
sur son peuple , le protecteur déclaré
des Israélites , & le restaurateur du
temple de Jérusalem. On en peut voir
l'histoire dans Esdras , & dans les pro-
phètes Aggée & Zacharie.

CHAPITRE SECOND.

HISTOIRE DE XERXES, *jointe à celle des Grecs.*

LE règne de Xerxès n'a été que de
douze ans , mais il est rempli de
grands événemens.

§. I. *Xerxès , après avoir réduit l'Egypte ,
se prépare à porter la guerre contre les
Grecs. Il tient conseil. Sage discours
d'Artabane. La guerre est résolue.*

XERXES étant monté sur le trô- **XERXES.**
ne , employa la première année de AN. M. 3519.
son règne à continuer les préparatifs AV. J. C. 485-

XERXES.

*Herod. lib.
7. cap. 5.**Joseph An-
tiq. lib. 11.
cap. 5.*

que son pere avoit commencés pour la réduction de l'Egypte. Il confirma aux Juifs de Jérusalem tous les privilèges qui leur avoient été accordés par son pere, & particulièrement celui qui leur assignoit le tribut de Samarie pour se fournir de victimes dans le culte qu'ils rendoient à Dieu dans son temple.

*Herod. lib.
7. cap. 7.*

La seconde année de son règne, il marcha contre les Egyptiens; & après avoir vaincu & subjugué ces rebelles, il appesantit le joug de leur servitude: & aiant donné le gouvernement de cette province à son frere Achémène, il revint vers la fin de l'année à Suse.

*AN. M. 3520.
AV. J. C. 484.
Ani. Gel. lib.
15 cap. 23.*

Le fameux historien Hérodote naquit cette année à Halicarnasse en Carie. Car il avoit 53. ans lorsque la guerre du Péloponnèse commença.

*Herod. lib.
7. cap. 2-18.**Plut. in
Apophth. pag.
173.*

Xerxès, enflé du succès qu'il avoit eu contre les Egyptiens, résolut de faire la guerre aux Grecs. (Il ne prétendoit plus, disoit-il, qu'on achetât pour lui des figues de l'Attique qui étoient excellentes, & ne vouloit en manger que lorsque le pays lui appartien droit.) Avant que de s'engager dans une entreprise de cette importance, il crut devoit assembler son

Conseil, & prendre les avis de tout **DARIUS**,
 ce qu'il y avoit de plus grands & de
 plus illustres personnages à sa Cour.
 Il leur proposa le dessein qu'il avoit
 de porter la guerre contre la Grèce.
 Ses motifs étoient, le desir d'imiter
 ses prédécesseurs, qui tous avoient
 illustré leur nom & leur règne par de
 nobles entreprises ; l'obligation où il
 étoit de venger l'insolence des Athé-
 niens, qui avoient osé attaquer Sar-
 des, & l'avoient réduite en cendres ;
 la nécessité de réparer l'affront reçu à
 la bataille de Marathon ; l'espérance
 des grands avantages qu'on pourroit
 tirer de cette guerre, qui entraîneroit
 après elle la conquête de l'Europe, le
 plus riche & le plus fertile pays qui
 fût dans l'univers. Il ajoutoit que cette
 guerre avoit déjà été résolue par son
 pere Darius, dont il ne faisoit que
 suivre & exécuter les intentions ; & il
 finit en promettant de grandes ré-
 compenses à ceux qui s'y distingue-
 roient par leur valeur.

Mardonius, le même qui sous
 Darius avoit si mal réussi, mais que
 ses mauvais succès n'avoient pas ren-
 du plus sage ni moins ambitieux, &
 qui desiroit extrêmement d'avoir le

XERXES. commandement des troupes , parla le premier. Il commença par élever Xerxès au-dessus de tous les Rois qui l'avoient précédé , & de tous ceux qui devoient le suivre. Il montra l'indispensable nécessité de venger l'injure faite au nom Persan. Il décria les Grecs , comme des peuples lâches & timides , sans courage , sans force , sans expérience de la guerre. Il en apporta pour preuve la conquête que lui-même avoit faite de la Macédoine , qu'il exagéra avec des termes pleins de faste & de vanité , montrant qu'il n'avoit trouvé aucune résistance. Il ne craignoit pas d'assurer qu'aucun peuple de la Grèce n'oseroit venir à la rencontre de Xerxès , qui marchoit avec toutes les forces de l'Asie ; & que s'ils avoient la témérité de se présenter devant lui , ils apprendroient à leurs dépens que les Perses étoient les peuples de la terre les plus guerriers & les plus courageux.

Comme on s'aperçut que ce discours flateur plaisoit extrêmement au Roi , personne , dans le Conseil , n'osoit le contredire , & tous gardoient le silence. C'étoit une suite presque inévitable de la manière dont Xerxès

s'étoit expliqué. Un Prince sage, XERXES.
 quand il propose une affaire dans son
 Conseil, & qu'il desire sincèrement
 qu'on lui dise la vérité, a une extrême
 attention à cacher ses propres senti-
 mens, pour ne point gêner ceux des
 autres, & pour leur laisser une entière
 liberté. Xerxès au contraire avoit
 marqué ouvertement son penchant
 ou plutôt sa détermination pour la
 guerre. Quand cela est ainsi, les fla-
 teurs, qui sont artificieux, empressés
 à s'insinuer & à plaire, toujours prêts
 à entrer dans les passions de celui qui
 consulte, ne manquent pas d'appuyer
 son sentiment par des raisons spé-
 cieuses & plausibles; pendant que
 ceux qui seroient capables de donner
 de bons conseils, sont retenus par la
 crainte, y ayant peu de courtisans
 qui aiment assez le Prince, & qui
 soient assez courageux, pour oser lui
 déplaire en combattant son goût.

Les louanges excessives que Mar-
 donius donnoit à Xerxès, langage
 ordinaire des flatteurs, auroient dû
 le lui rendre suspect, & lui faire
 craindre que ce Seigneur, sous une
 apparence de zèle pour sa gloire, ne
 cachât son ambition, & le desir vio-

XERXES. lent qu'il avoit de commander l'armée. Mais ces paroles douces & flatteuses, qui se glissent comme un serpent sous les fleurs, loin de déplaire aux Princes, les charment & les entraînent. Ils ne savent pas qu'on ne les loue que parce qu'on les croit foibles, & assez vains pour se laisser tromper par des louanges disproportionnées à leurs mérites & à leurs actions.

Voilà ce qui ferma la bouche à tous ceux qui étoient dans le Conseil. Dans ce silence général, Artabane, oncle de Xerxès, Prince recommandable par son âge & par sa prudence, eut le courage de prendre la parole. » Grand » Roi, dit-il en s'adressant à Xerxès, » souffrez que je vous dise ici mon » sentiment avec la liberté qui convient à mon âge & à vos intérêts. » Quand Darius, votre pere & mon » frere, songea à porter la guerre » contre les Scythes, je fis tout mon » possible pour l'en détourner. Vous » savez ce que lui couta cette entreprise, & quel en fut le succès. Les » peuples que vous allez attaquer, » sont infiniment plus à craindre que » les Scythes. Les Grecs passent pour » être & sur mer & sur terre les meil-

leures troupes qu'il y ait. Si les « XERXES.
 Athéniens seuls ont pu défaire «
 l'armée nombreuse commandée par «
 Datis & par Artapherne, que faut-«
 il attendre de tous les peuples de la «
 Grèce réunis ensemble ? Vous son-«
 gez à passer d'Asie en Europe en «
 jettant un pont sur la mer. Et que «
 deviendrons-nous, si les Athéniens «
 vainqueurs font avancer leur flotte «
 vers ce pont, & le rompent ? Je «
 tremble encore, quand je pense «
 que dans l'expédition de Scythie on «
 fit dépendre la vie du Roi votre «
 pere & le salut de toute l'armée de «
 la bonne foi d'un seul homme, & «
 que si Hyftiée le Milésien eût, com-«
 me on l'y exhorta fortement, rom-«
 pu le pont qu'on avoit jetté sur le «
 Danube, c'en étoit fait de l'empire «
 Persan. Ne vous exposez point, «
 Seigneur, à un pareil danger, d'au-«
 tant plus que rien ne vous y oblige. «
 Prenez du tems pour y réfléchir. «
 Quand on a délibéré mûrement sur «
 une affaire, quel qu'en soit le suc-«
 cès, on n'a rien à se reprocher. La «
 précipitation, outre qu'elle est im-«
 prudente, est presque toujours «
 malheureuse, & suivie de funestes «

XERXES. » effets. Sur tout, Grand Prince, ne
 » vous laissez point éblouir ni par le
 » vain éclat d'une gloire imaginaire,
 » ni par le pompeux appareil de vos
 » troupes. Ce sont les arbres les plus
 » élevés qui ont le plus à craindre de
 » la foudre. ^a Comme Dieu seul est
 » grand, il est ennemi de l'orgueil, &
 » il se plaît à abaisser tout ce qui s'é-
 » leve; & souvent les plus nombreu-
 » ses armées fuient devant une poi-
 » gnée d'hommes, parce qu'il remplit
 » ceux-ci de courage, & jette la ter-
 » reur parmi les autres.

Après qu'Artabane eut ainsi parlé
 au Roi, il se tourna vers Mardonius,
 & lui reprocha le peu de sincérité ou
 de jugement qu'il avoit fait paroître,
 en donnant au Roi une idée des Grecs
 entièrement contraire à la vérité, &
 le tort extrême qu'il avoit de vouloir
 engager témérairement les Perses
 dans une guerre, qu'il ne souhaitoit
 que par des vûes d'ambition & d'in-
 térêt. » Au reste, ajouta-t-il, si l'on
 » conclud pour la guerre, que le Roi,
 » dont la vie nous est chere, demeure
 » en Perse : & pour vous, puisque

α. Φίλει ὁ θεὸς τοὺς ὑπερ- | οὐ γὰρ εἶα ἐργάζεσθαι ἄλλον
 μέγα ὁ θεός, ἢ ἐαυτόν.
 μέγαντα πάντας καλοῦσιν...

vous le desirez si fortement, mar- « **XERXES.**
 chez à la tête des armées les plus «
 nombreuses que vous aurez pu «
 amasser. Cependant qu'on mette «
 quelque part en dépôt vos enfans «
 & les miens, pour répondre du suc- «
 cès de la guerre. S'il est favorable, «
 je consens que mes * enfans soient «
 mis à mort : mais s'il est tel que je le «
 prévoi, je demande que vos en- «
 fans, & vous-même à votre retour, «
 soiez traités comme le mérite le té- «
 méraire conseil que vous donnez à «
 votre Maître. »

Xerxès, qui n'étoit pas accoutumé
 à se voir contredire de la sorte, entra
 en fureur. « Remerciez les dieux, «
 dit-il à Artabane, de ce que vous «
 êtes le frere de mon pere, sans quoi «
 vous porteriez dans le moment «
 même la juste peine de votre auda- «
 ce. Mais je vous en punirai autre- «
 ment, en vous laissant ici parmi les «
 femmes, à qui vous ressemblez par «
 votre lâche timidité, pendant qu'à «
 la tête de mes troupes je marcherai «
 où mon devoir & la gloire m'ap- «
 pellent. »

* Pourquoi falloit-il que | la fante de leurs peres ?
 les enfans fussent punis de

XERXES.

Le discours d'Artabane étoit très mesuré & très respectueux : cependant Xerxès en fut extrêmement choqué.^a C'est le malheur des Princes gâtés par la flatterie, de trouver sec & austère tout ce qui est sincère & ingénu, & de traiter de hardiesse séditieuse tout conseil libre & généreux. Ils ne font pas réflexion qu'un homme de bien même n'ose jamais leur dire tout ce qu'il pense, ni leur découvrir la vérité toute entière, sur tout dans les choses qui peuvent leur être désagréables; & que le plus pressant besoin qu'ils aient c'est de trouver un ami sincère & fidèle qui ne leur cache rien. Un Prince se doit croire trop heureux, quand il naît un seul homme sous son règne avec cette générosité, qui est le plus précieux trésor de l'Etat, & s'il étoit permis de s'exprimer ainsi,^b l'instrument de la roiauté le plus nécessaire & le plus rare.

Xerxès le reconnut dans l'occasion dont il s'agit. Quand son premier emportement de colère fut passé, & que

a Ita formatis Principum auribus, ut aspera quæ utilia, nec quicquam nisi jocundum & lætum accipiant. *Tacit. Hist. lib.*

3. cap. 56.

b Nullum majus boni imperii instrumentum, quam bonos amicos. *Tacit. Hist. lib. 4. cap. 7.*

la nuit lui eut laissé le loisir de faire **XERXES,**
 réflexion sur les deux différens avis
 qu'on lui avoit donnés, il reconnut
 qu'il avoit eu tort de maltraiter de
 paroles son oncle, & il ne rougit pas
 de réparer sa faute le lendemain en
 plein Conseil, avouant nettement que
 le feu de la jeunesse & son peu d'ex-
 périence l'avoient fait manquer à ce
 qu'il devoit à un Prince aussi res-
 pectable qu'étoit Artabane & par son
 âge, & par sa sagesse : qu'il se ran-
 geoit de son avis malgré un songe
 qu'il avoit eu la nuit, où un phan-
 tôme l'avoit vivement exhorté à en-
 treprendre cette guerre. Tous ceux
 qui composoient le Conseil furent
 ravis d'entendre ce discours, & té-
 moignèrent leur joie en se prosternant
 tous devant le Roi, & relevant à
 l'envi la gloire de cette démarche,
 sans que de telles louanges pussent
 être suspectes. ^a Car on discerne ai-
 sément si celles qu'on donne aux
 Princes partent du cœur & naissent de
 la vérité, ou si elles ne sont que sur
 les levres, & un pur effet de la flate-

^a Nec occultum est quan- | Imperatorum celebren-
 do ex veritate, quando | tur. Tacit. *Annal.* lib. 4,
 adumbrata læticia, facta | cap. 41.

XERXES. rie. Cet aveu , si sincère & si humiliant , loin de leur paroître une foiblesse dans Xerxès , fut regardé comme l'effort d'une grande ame , qui s'élève au-dessus de ses propres fautes , en les avouant avec courage pour les réparer. Ils admirèrent d'autant plus la noblesse de cette démarche , qu'ils favoient que les Princes , élevés comme Xerxès dans une vaine hauteur & une fausse gloire , ne veulent jamais avoir tort , & n'emploient pour l'ordinaire leur autorité qu'à soutenir avec fierté les fautes qu'ils ont faites par ignorance , ou par imprudence. On peut dire qu'il est plus glorieux de se relever ainsi , que de n'être jamais tombé. En effet rien n'est plus grand , ni en même tems plus rare , que de voir un Roi puissant , & dans le tems de sa plus grande prospérité , reconnoître ses fautes quand il lui arrive d'en faire , sans chercher ni prétextes ni excuses pour les couvrir ; rendre hommage à la vérité , lors même qu'elle le condamne ; & laisser à des Princes , faussement délicats sur la grandeur , la honte d'être toujours pleins de défauts , & de n'en jamais convenir.

La nuit suivante, le même phan- XERXES.
 tôme, si l'on en croit Hérodote, se
 montra encore au Roi, ajoutant au
 premier discours qu'il avoit tenu de
 nouvelles menaces. Xerxès en fit part
 à son oncle, & , pour reconnoître si
 ce songe venoit des dieux ou non, il le
 pressa vivement de se revêtir des ha-
 bits roiaux, de monter sur le trône,
 & de passer ensuite la nuit dans son lit
 à sa place. Artabane lui parla très sen-
 sément sur la vanité des songes, puis
 venant à ce qui le regardoit person-
 nellement : « * J'estime presque
 également, dit-il, de bien penser
 par soi-même, & de se rendre docile
 aux bons avis d'un autre. Vous
 avez ces deux qualités, Grand
 Prince; & si vous suiviez votre
 naturel, vous ne vous porteriez
 qu'à des sentimens de sagesse & de
 modération. Il n'y a que les dis-
 cours empoisonnés des flatteurs qui
 vous poussent à des partis violens,
 ** comme la mer, tranquille par

* Cette pensée est dans
Hésiode, Opera & dies,
v. 293. Cic, pour Cluenti-
n, 84. & Tit. Liv. lib. 22,
n. 19. Sæpe ego audi,
milites, eum primum esse
virum, qui ipse consulat
quid in rem sit: secun-

dum eum, qui bene mo-
nenti obediat: qui nec
ipse consulere, nec alteri
parere sciat, eum extre-
mi ingenii esse.

** Cette pensée est aussi
 dans *Tite-Live, Liv. 28,*
n. 27.

XERXES. « elle-même , n'est troublée que par
» une impression étrangère. Au reste
» ce qui m'a affligé dans le discours
» que vous avez tenu à mon égard ,
» n'a pas été mon injure person-
» nelle , mais le tort que vous vous
» faisiez à vous-même par votre
» mauvais choix entre deux conseils
» qu'on vous donnoit , rejetant ce-
» lui qui vous portoit à des sentimens
» de modération & d'équité , & em-
» brassant l'autre , qui ne tendoit au
» contraire qu'à nourrir l'orgueil &
» à irriter l'ambition.

Artabane , par complaisance , passa la nuit dans le lit du Roi , & y eut la même vision qu'avoit eu Xerxès , c'est-à-dire qu'en dormant il vit un homme qui lui faisoit de violens reproches , & qui le menaçoit des plus grands malheurs s'il continuoit de s'opposer au dessein du Roi. Il céda pour lors , & se rendit croiant qu'il y avoit en cela quelque chose de divin , & la guerre contre les Grecs fut résolue. Je raporte les choses telles que je les trouve dans Hérodote.

Xerxès soutint mal cette gloire dans la suite. Nous ne verrons en lui que de courtes lueurs de sagesse & de raison ;

raison , qui brillent un moment , & **XERXES.**
font place aux excès les plus condan-
nables. On peut juger par là qu'il
avoit un bon fonds & un naturel heu-
reux. Mais les qualités les plus excel-
lentes sont bientôt gâtées & corrom-
pues par le poison de la flatterie, & par
celui d'une puissance souveraine &
sans bornes : *vi dominationis convulsus.*

C'est un beau sentiment dans un **Tacit.**
Ministre, d'être moins touché de
l'affront qu'on lui fait , que du tort
qu'on faisoit à son Maître en lui don-
nant un funeste conseil.

Le conseil de Mardonius étoit fu-
neste , en ce que , comme le remarque
Artabane , il n'étoit propre qu'à nour-
rir & à augmenter dans le Prince une
pente à la hauteur & à la violence ,
qui ne lui étoit déjà que trop naturel-
le , *ἵβειν αὐξήσεως* ; & ^a en ce qu'il ac-
coutumoit son esprit à porter tou-
jours ses desirs au delà de sa fortune
présente , à vouloir toujours aller en
avant , & à ne mettre aucunes bornes
à son ambition. ^b C'est la passion de

^a ὁ δὲ καὶ ἐν διδοσ-
και τῇ ψυχῇ πλεονε-
κίει, καὶ αὐτὸς ἔχει τὴν
παιδείαν.

^b Nec hoc Alexandri

Tome III.

tantum vitium fuit ,
quem per Liberi Hercu-
lisque vestigia felix te-
meritas egit ; sed om-
nium , quos fortuna irri-

XERXES.

*Prædones
gentium. Je-
rem. 4. 7.*

ceux qu'on appelle Conquerans, & qu'on nommeroit à plus juste titre, avec l'Ecriture Sainte, brigands des nations. Parcourez, dit Sénèque, toute la suite des Rois de Perse, en trouverez-vous quelqu'un qui se soit arrêté de lui-même dans sa course, qui ait été content de ses premières conquêtes, & que la mort n'ait pas surpris formant encore quelque nouveau projet? Et cette disposition ne doit pas étonner, ajoute-t-il: car l'ambition est un gouffre & un abyme sans fond, où tout se perd, & où l'on entasse en vain des provinces & des royaumes, sans en pouvoir remplir le vuide.

§. II. *Xerxès se met en marche, & passe d'Asie en Europe en traversant le détroit de l'Helléspont sur un pont de bateaux.*

AN.M. 3523.
AV. J.C. 481.

LA GUERRE étant résolue, Xerxès, pour ne rien omettre de ce qui pou-

tavit implendo. Totum regni Persici stemma percense: quem invenies, cui modum imperii satietas fecerit? qui non vitam in aliqua ulterius procedendi cogitatione finierit? Nec id mirum

est. Quicquid cupiditati contigit, penitus hautilur & conditur: nec interest quantum eò, quod inexplabile est, congetas. *Senec. lib. 7. de Benef. cap. 3.*

voit faire réussir son dessein, entra en **XERXES.**
 confédération avec les Carthaginois, le plus puissant peuple qui fût alors
 en Occident, & convint avec eux que, pendant que les Perses attaqueroient
 la Grèce, les Carthaginois tomberoient sur les nations Grecques qui
 étoient en Sicile & en Italie, pour les empêcher de venir au secours des autres Grecs. Les Carthaginois élurent pour Général Amilcar, qui ne se contenta pas de lever autant de troupes qu'il put en Afrique, mais, avec l'argent que Xerxès lui avoit envoyé, engagea à son service un grand nombre de soldats tirés d'Espagne, de Gaule, & d'Italie; de sorte qu'il assembla une armée de trois cens mille hommes, & des vaisseaux à proportion, pour exécuter les projets de la Ligue.

*Died. lib. 17.
 pag. 1. & 2.*

Ainsi Xerxès, conformément à la prédiction de Daniel, *a* *ayant par sa puissance & par ses grandes richesses soulevé contre le royaume de la Grèce tous les peuples du monde alors connu, c'est-à-dire, tout l'occident sous le com-*

a Ecce adhuc reges stabunt in Perside; & quartus (id est Xerxès) dirabitur opibus nimis super omnes: & cum in-

valuerit divitiis suis, concitabit omnes adversum regnum Græciz.
Dan. cap. 11. v. 2.

XERXES. mandement d'Amilcar , & tout l'orient sous le sien propre , partit de Suse pour commencer la guerre l'année cinquième de son règne , qui étoit le dixième depuis la bataille de Marathon , & marcha vers Sardes , où étoit le rendez-vous de l'armée de terre , pendant que celle de mer s'avançoit aussi le long des côtes de l'Asie Mineure vers l'Hellespont.

Herod. lib. 7. cap. 16.
AN. M. 3524.
AV. J. C. 480.

Ibid. cap. 21.
24.

Il avoit donné ordre qu'on perçât le mont Athos. C'est une montagne de Macédoine , province de la Turquie en Europe , qui s'avance dans l'Archipel en forme de presqu'île. Elle ne tient à la terre que par un isthme d'une demie lieue. Nous avons déjà vû que la mer en cet endroit étoit fort orageuse , & que les naufrages y étoient fréquens. Ce fut là le prétexte de l'ordre qu'avoit donné Xerxès de couper cette montagne : mais la véritable raison étoit de se signaler par une entreprise extraordinaire , & d'une exécution difficile , comme Tacite le dit de Neron : *erat incredibilium cupitor*. Aussi Hérodote remarque-t-il que ce travail étoit plus fastueux que nécessaire , puisqu'il auroit pu , à moins de frais , faire transpor-

ter ses vaisseaux par dessus l'isthme, **XERXES.**
comme c'étoit l'usage de ce tems-là.

La fosse qu'il y fit creuser, étoit de largeur à y faire passer deux trirèmes de front, c'est-à-dire deux vaisseaux à trois rangs de rames. Ce Prince, qui Plut. de Ira. cohib. p. 415. avoit la folie de croire qu'il étoit le maître des élémens & de toute la nature, avoit en conséquence écrit une lettre au mont Athos en ces termes, pour lui intimer ses ordres : *Superbe Athos, qui portes ta tête jusqu'au ciel, ne sois pas si hardi que d'opposer à mes travailleurs des pierres & des roches qu'ils ne puissent couper. Autrement, je te couperai toi-même en entier, & te précipiterai dans la mer.* Il contraignoit en même tems Plut. de anim. trang. p. 470. ses travailleurs à force de coups de fouets à avancer l'ouvrage.

Un voyageur, qui vivoit du tems de François premier, & qui a composé en latin un livre touchant les faits singuliers, révoque celui-ci en doute, & marque qu'en passant auprès du mont Athos, il n'y a vû aucunes traces du travail dont il est parlé ici. Be Non. fragm. rer. observ. p. 78.

Nous avons déjà dit que Xerxès s'avançoit vers Sardes. Au sortir de la Cappadoce, aiant passé le fleuve Halys, il vint à Célène, ville de la Phry- Herod. lib. 7. cap. 26-29.

XERXÈS.

gie , près de laquelle le Méandre prend sa source. Pythius , Lydien , faisoit sa résidence dans cette ville : c'étoit le Prince le plus opulent qui fut alors , après Xerxès. Il le reçut , & toute son armée , avec une magnificence incroiable , & lui offrit tous ses biens pour fournir aux frais de son expédition. Xerxès surpris , & en même tems charmé d'une offre si généreuse , eut la curiosité d'apprendre à quoi montoient donc ses richesses. Ce Prince lui répondit que dans la vûe de les lui offrir il en avoit fait un compte exact , & qu'elles montoient , pour l'argent à deux mille talens , (c'est-à-dire six millions :) & pour l'or à quatre millions de Dariques moins sept mille ; (c'est-à-dire à quarante millions moins soixante & dix mille livres , en comptant le Darique sur le pié de dix livres.) Il lui offrit toutes ces sommes , ajoutant que ses revenus lui suffisoient pour l'entretien de sa maison. Xerxès lui marqua une vive reconnoissance , fit une amitié particulière avec lui , & , pour ne pas se laisser vaincre en générosité , au lieu d'accepter ses offres , il l'obligea de recevoir les sept mille Dari-

ques qui manquoient à sa somme **DARIUS.**
pour faire un compte rond.

Après un trait comme celui que je viens de rapporter, qui ne croiroit que la vertu particulière & le caractère personnel de * Pythius auroit été la générosité, & le mépris des biens? Cependant c'étoit le Prince du monde le plus ménager, & qui à une sordide avarice pour lui-même joignoit une dureté inhumaine à l'égard de ses sujets, qu'il occupoit sans cesse à des travaux pénibles & infructueux, en les obligeant de creuser pour lui des mines d'or & d'argent qui se trouvoient dans son domaine. Pendant son absence, fondant tous en larmes, ils portèrent leurs plaintes devant la Princesse épouse de Pythius, & implorèrent son secours. Elle employa un moyen fort extraordinaire pour faire sentir à son mari, & lui faire toucher au doigt l'injustice & le ridicule de sa conduite. A son retour, elle lui fit servir un repas, magnifique en apparence, mais qui n'étoit rien moins que repas. Entrée, service, roti, entremets, tout étoit d'or ou d'argent, & le Prince, au milieu de ces riches mets & de ces viandes en peinture,

* Il est appelé Pythis dans Plutarque.
Plus. de virt. mulier. pag. 262.

DARIUS. demeura affamé. Il devina facilement le sens de l'énigme, & comprit que la destination de l'or & de l'argent n'étoit pas le simple spectacle, mais l'usage; & que négliger, comme il faisoit, la culture des terres en occupant tous ses sujets au travail des mines, c'étoit réduire le pays & se réduire lui-même à la famine. Il se contenta donc dans la suite d'y en faire travailler seulement la cinquième partie. C'est Plutarque qui nous a conservé ce fait dans un traité, où il en ramasse beaucoup d'autres pour prouver l'habileté & l'industrie des Dames. La fable a voulu marquer le même caractère dans ce qu'elle raconte d'un Prince qui avoit régné dans le même pays, pour qui tout ce qu'il touchoit se changeoit sur le champ en or selon la demande qu'il en avoit faite aux dieux, & qui par là courut risque de périr de faim.

*Midas, roi
de Phrygie.*

*Herod. lib.
2. cap 38. 39.
Senec. de Ira.
lib. 3. cap. 17.*

Ce même Seigneur, qui avoit fait des offres si obligeantes à Xerxès, lui ayant demandé en grace quelque tems après que de cinq de ses fils qui servoient dans l'armée il voulût bien lui laisser l'aîné pour être l'appui & la consolation de sa vieillesse; le Roi,

outré jusqu'à la fureur d'une proposition si raisonnable ; fit égorger ce fils aîné sous les yeux de son pere, lui faisant entendre que c'étoit par grace qu'il lui laissoit la vie à lui & au reste de ses enfans ; & ayant fait couper le corps mort en deux parts qu'on plaça à droite & à gauche, il fit passer au milieu toute son armée, comme pour l'expier par un tel sacrifice. Quel monstre dans la nature qu'un Prince de cette sorte ! Quel fonds est-il possible de faire sur l'amitié des Grands, & sur les protestations les plus vives de services & de reconnoissance ?

De Phrygie Xerxès arriva à Sardes, où il passa l'hiver. De là il envoya des Hérauts à toutes les villes de la Grèce, excepté à Athènes & à Lacédémone, pour demander qu'on lui donnât l'eau & la terre, ce qui étoit la marque de soumission.

Dès que le printems fut venu, il partit de Sardes, & tourna sa marche vers l'Hellespont. Quand il y fut arrivé, il voulut se donner le plaisir de voir un combat naval. On lui avoit préparé un trône sur une hauteur. Voiant de là toute la mer chargée de ses vaisseaux, & toute la terre cou-

XERXES.

Hered. lib.
7, cap. 30-32.*Ibid. cap.*
44-46.

XERXES. verte de ses troupes , il sentit d'abord un mouvement secret de joie en mesurant ainsi de ses propres yeux toute l'étendue de sa puissance , & se regardant comme le plus fortuné de tous les mortels : mais faisant réflexion que de tant de milliers d'hommes il n'en resteroit pas un seul dans cent ans , il ne put refuser des larmes à l'instabilité des choses humaines. Un autre objet auroit mérité plus justement ses larmes , & il auroit dû se faire des reproches d'abrégér lui-même ce terme fatal à des millions d'hommes , que sa cruelle ambition alloit faire périr dans une guerre entreprise sans justice & sans nécessité.

Artabane , qui ne perdoit aucune occasion de se rendre utile au jeune Prince , & de lui inspirer des sentimens de bonté pour son peuple , profitant de ce moment où il le trouvoit touché & attendri , lui fit faire une autre réflexion sur les misères qui accompagnent la vie de la plupart des hommes , & qui la leur rendent si triste & si ennuyeuse ; & il lui fit sentir en même tems l'obligation d'un Prince , qui ne pouvant prolonger la vie à ses sujets , devoit au moins employer

tous les soins à leur en adoucir les **DARIUS**.
peines & les amertumes.

Dans la même conversation, Xerxès Herod. lib. 7. cap. 47-52. demanda à son oncle, s'il persévèroit encore dans son premier sentiment, qui étoit de ne point porter la guerre contre la Grèce, supposé qu'il n'eût pas vû les songes qui le lui avoient fait quitter. Celui-ci avoua qu'il n'étoit point sans crainte, & que deux choses l'effraioient. Hé quoi donc, reprit Xerxès? La terre & la mer, dit Artabane. La terre, car il n'y a point de pays qui puisse nourrir une si nombreuse armée : la mer, car il n'y a point de ports capables de contenir un si grand nombre de vaisseaux. Le Roi sentit bien la force de ce raisonnement, mais ne pouvant plus reculer, il dit que dans les grandes entreprises il ne falloit pas examiner de si près tous les inconvéniens : qu'autrement on n'entreprendroit jamais rien, & que si ses prédécesseurs avoient suivi une politique si scrupuleuse & si timide, l'empire de Perse ne seroit pas parvenu à ce point de grandeur où on le voioit.

Artabane lui donna encore un autre avis fort sage, mais qui ne fut pas

XERXES. plus suivi : c'étoit de ne point employer les Ioniens contre les Grecs dont ils tiroient leur origine, ce qui devoit les lui rendre suspects. Xerxès, après ces discours, lui fit beaucoup d'amitié, le combla de marques d'honneur, & le renvoia à Suse pour veiller en son absence à la garde de l'empire, en le rendant dépositaire de toute son autorité.

*Hærod. lib. 7.
cap. 23-36.*

XERXES avoit fait construire à grand frais un pont de bateaux sur la mer, pour faire passer les troupes d'Asie en Europe. L'espace qui sépare les deux continens, appelé autrefois l'Hellespont, & maintenant le détroit des Dardanelles ou de Gallipoli, depuis Abyde jusqu'à l'autre côté est de sept stades; c'est-à-dire de plus d'un quart de lieue. Une violente tempête survint tout à coup, & rompit le pont. Xerxès aiant appris à son arrivée cette nouvelle, fut transporté de colère; &, pour se venger d'un si cruel affront, il commanda qu'on jetât dans la mer deux paires de chaînes comme pour la mettre aux fers, & qu'on lui donnât trois cens coups de fouet, en l'apostrophant ainsi : « O » amer & malheureux élément; ton » Maître te punit ainsi pour l'avoir

outragé sans raison. Xerxès saura « **XERXES.**
 bien, soit que tu le veuilles ou non, «
 passer à travers tes flots. « Il ne s'en
 tint pas là, & rendant les entrepre-
 neurs responsables des événemens qui
 dépendent le moins de la puissance
 des hommes, il fit couper la tête à
 tous ceux qui avoient eu la conduite
 de l'ouvrage.

On construisit de nouveau deux *Herod. lib. 7. cap. 36.*
 ponts, l'un pour les troupes, l'autre
 pour le bagage & les bêtes de charge.
 Xerxès choisit des ouvriers plus ha-
 biles que les premiers, & voici com-
 me ils s'y prirent. Ils mirent en tra-
 vers trois cens soixante vaisseaux, les
 uns à trois rangs de rames, les autres
 à cinquante rames, dont les flancs re-
 gardoient le Pont Euxin; & du côté
 qui regarde la mer Egée, ils en mi-
 rent trois cens quatorze. Ensuite ils
 jettèrent dans l'eau de grosses ancres
 de part & d'autre, pour affermir tous
 ces vaisseaux contre la violence des
 vents, & contre le * courant de l'eau.
 Ils laissèrent, du côté de l'orient,
 trois passages entre les vaisseaux, par

* Polybe remarque qu'il y a un courant d'eau du Lac Meotis & du Pont Euxin dans la mer Egée, causé par les fleuves qui vont se rendre dans ces deux mers. Polyb. lib. 4. pag. 307. 308.

XERXES. où de petites barques pussent aller au Pont Euxin, & en revenir facilement. Après cela ils plantèrent des pieux en terre ferme avec de gros anneaux, & y attachèrent de part & d'autre six gros cables sur chacun des ponts, deux faits de chanvre, & quatre faits d'une sorte de roseaux, appelés βίβλος, dont on se servoit pour faire des cordages. Il falloit que ceux de chanvre fussent d'une force extraordinaire, puisque chaque cotidée pesoit un talent. * Les cables, placés sur la longueur des vaisseaux, alloient d'un côté de la mer à l'autre. Cet ouvrage étant achevé, ils rangèrent en travers sur la largeur des vaisseaux, & sur les cables dont il a été parlé, des troncs d'arbres coupés exprès pour cet usage, & mirent dessus des planches liées & jointes ensemble, pour tenir lieu de sol & de plancher : puis ils couvrirent le tout de terre, & ajoutèrent de côté & d'autre des barrières, (c'est ce que nous appellons *des gardes-fous*,) afin que les bêtes & les chevaux ne s'épouvantassent point en voiant la mer.

* Le talent pour le poids étoit de 60. mines, c'est-à-dire de 42. livres de notre poids ; & la mine de cent dragmes.

Telle fut la construction du fameux XERXES.
pont de Xerxès.

Quand l'ouvrage fut achevé , on marqua le jour du passage. Dès que les premiers raions du soleil commencèrent à paroître , on répandit sur l'un & l'autre pont des odeurs de toutes sortes , & l'on joncha les chemins de myrte. Xerxès en même tems versa des libations sur la mer , & se tournant vers le soleil , la principale divinité de l'Empire , il implora son secours pour l'entreprise qu'il commençoit , & le pria de lui continuer sa protection jusqu'à ce qu'il eût fait la conquête entière de l'Europe , & qu'il l'eût toute soumise à son empire : après quoi il jeta dans la mer le vase qui avoit servi aux libations , une autre coupe d'or , & un cimetière Persan. L'armée employa sept jours & sept nuits à passer le détroit , ceux qui étoient préposés pour cela faisant avancer les soldats à grands coups de fouets , selon l'usage de la nation , qui n'étoit à proprement parler qu'un assemblage d'esclaves.

XERXES. §. III. *Dénombrement de l'armée de Xerxès. Démarate marque librement sa pensée sur l'entreprise de ce Prince.*

XERXES, prenant sa marche au travers de la Chersonèse de Thrace ,
Herod. lib. 7. cap. 56-99. & 184-187. arriva à Dorisque , ville située à l'embouchure de l'Hébre dans la Thrace ; où aiant fait camper son armée , & ordonné à la flotte de le suivre le long du rivage , il fit la revûe de l'une & de l'autre.

Il trouva son armée de terre qu'il avoit amenée d'Asie , forte de dix-sept cens mille hommes de pié , & de quatre vingts mille chevaux , qui joints à vingt mille hommes qu'il faloit au moins pour la garde & la conduite des chariots & des chameaux , faisoient en tout dix-huit cens mille hommes. Quand il eut passé l'Helléspont , les nations qui se soumirent à lui fortifièrent son armée de trois cens mille hommes. Ce qui fait en tout pour l'armée de terre deux millions cent mille hommes.

Sa flotte, telle qu'elle étoit partie d'Asie, consistoit en douze cens sept vaisseaux de combat appellés trirèmes , c'est-à-dire à trois rangs de rames. Chaque vaisseau portoit deux cens hommes ori-

ginaires du pays qui les avoit fournis, **XERXES.**
 & outre cela trente Perses, ou Médes,
 ou Saces : ce qui faisoit en tout deux
 cens soixante & dix sept mille six cens
 dix hommes. Les peuples d'Europe au-
 gmentèrent sa flotte de six-vingts vais-
 seaux, dont chacun portoit deux cens
 hommes, ce qui en fait vingt-quatre
 mille ; & le tout ensemble trois cens
 un mille six cens dix hommes.

Outre la flotte composée de grands
 vaisseaux, les petites galères de tren-
 te & de cinquante rames, les vaisseaux
 de transport, ceux qui portoient les
 vivres, & autres sortes de bâtimens,
 montoient à trois mille. En mettant
 dans chacun, l'un portant l'autre,
 quatre-vingts hommes, cela en fai-
 soit en tout deux cens quarante mille.

Ainsi, quand Xerxès arriva aux
 Thermopyles, ses forces de terre &
 de mer faisoient ensemble le nombre
 de deux millions six cens quarante &
 un mille six cens & dix hommes, sans
 compter les valets, les eunuques, les
 femmes, les vivandiers, & ces autres
 sortes de gens qui suivent l'armée, &
 qui montoient à un nombre égal. De
 sorte que le total des personnes qui
 suivirent Xerxès dans cette expédi-

XERXES tion , étoit de cinq millions deux cens quatre-vingts trois mille deux cens vingt personnes. C'est le calcul que nous en donne Hérodote : Plutarque

Diod. lib. 11. pag. 3. & Isocrate s'accordent avec lui. *Plin. lib. 33. cap. 10.* Dio-
Adrian. lib. 13. cap. 3. dore de Sicile , Pline , Elie , & d'autres , rabatent beaucoup de ce nombre : en quoi ils paroissent moins croiables qu'Hérodote , qui a vécu dans le siècle même où se fit cette expédition , & qui rapporte une inscription mise , par l'ordre des Amphictyons , sur le tombeau de ces Grecs qui furent tués aux Thermopyles , laquelle marque qu'ils combattirent contre trois millions d'hommes.

Herod. lib. 7. cap. 187. Pour nourrir toutes ces personnes ; il falloit chaque jour , selon la supputation qu'en fait Hérodote , plus de cent dix mille trois cens quarante médimnes , mesure qui selon Budé vaut six de nos boisseaux , en comptant pour chaque tête un chœnix , qui étoit la portion journalière que les maîtres donnoient à leurs esclaves chez les Grecs. L'histoire ne fait mention d'aucune autre armée aussi nombreuse que celle-ci. De tant de millions d'hommes nul ne le disputoit à Xerxès pour la beauté du visage ; ni pour la

grandeur de la taille : foible louange **XERXES.**
pour un Prince, quand elle est seule. —

Aussi Justin, après le dénombrement de ces troupes, ajoute-t-il qu'une si grande armée manquoit de Chef :
Huic tanto agmini dux defuit.

On auroit peine à comprendre comment il étoit possible de trouver des vivres suffisamment pour un si grand nombre de personnes, si l'Historienne ne nous avoit avertis que Xerxès avoit employé quatre années entières à faire les préparatifs de cette guerre. Nous avons vû combien il y avoit de vaisseaux de charge, qui co-
toioient toujours l'armée de terre ; & il en arrivoit sans doute tous les jours de nouveaux, qui mettoient l'abondance dans le camp.

Hérodote marque la manière dont *Ibid. cap. 60.*
se fit le calcul de ces troupes, qui étoient presque innombrables. On assembla dix mille hommes, que l'on ferra le plus qu'il fut possible ; après quoi l'on décrivit un cercle autour d'eux, & l'on éleva sur ce cercle un petit mur à hauteur de la moitié du corps d'un homme ; on fit passer dans ce même intervalle toute l'armée, & l'on connut par là à quel nombre elle montoit.

XERXES.

Ibid. c. 61.
88.

Le même Hérodote marque en détail les différentes armures de toutes les nations qui composoient cette armée. Outre les Chefs de chaque nation, qui commandoient chacun les troupes de leur pays, l'armée de terre avoit six Généraux Persans : savoir, Mardonius fils de Gobryas ; Tirintéchme fils d'Artabane, & Smerdone fils d'Otane, tous deux proches parens du Roi ; Masiste fils de Darius & d'Atosse ; Gergis fils d'Ariaze ; & Mégabyze fils de Zopyre. Les dix mille Perses qu'on appelloit les Immortels, étoient commandés par Hydarne. La cavalerie avoit ses Commandans particuliers.

Hérod. lib.
7. cap. 89-99.

La flotte avoit aussi quatre Généraux Persans. On peut voir dans Hérodote le détail des nations qui la fournirent. * Artémise, reine d'Halicarnasse, qui depuis la mort de son mari gouvernoit pour son fils encore pupille, n'amena avec elle que cinq vaisseaux, mais c'étoient les mieux équipés & les plus lestes de toute la flotte, après ceux des Sidoniens. Elle se distingua

* Il ne faut pas confondre cette Princesse avec Artemise femme de Mausole, roi de Carie, qui vivoit plus de quatre-vingt-dix ans après cette bataille.

dans cette guerre par son courage, **XERXES.**
 & encore plus par sa prudence. Hérodote remarque qu'entre tous les Officiers de Xerxès aucun ne lui donna des conseils si sages que cette Reine : mais il ne sut pas en profiter.

Xerxès ayant fait le dénombrement de ses troupes de terre & de mer, demanda à Démarate s'il croioit que les Grecs osassent l'attendre. J'ai déjà dit que ce Démarate étoit un des deux Rois de Lacédémone, qui ayant été exilé par la faction de ses ennemis s'étoit réfugié en Perse, où il avoit été comblé de biens & d'honneurs. Comme on s'étonnoit un jour qu'un Roi se fût laissé exiler, & qu'on lui en demandoit la cause : *C'est*, dit-il, *qu'à Sparte la loi est plus forte que les rois.* Il fut fort considéré en Perse. Mais ni l'injustice de ses citoyens, ni les bons traitemens du Roi, ne purent lui faire oublier sa patrie. Dès qu'il fut que Xerxès travailloit aux préparatifs de la guerre, il en avoit donné avis aux Grecs par une voie secrète. Obligé dans cette occasion de s'expliquer ; il le fit avec une noblesse & une liberté dignes d'un Spartain, & d'un Roi de Sparte,

*Plut. in
 Apoph. Lacen.
 pag. 220.*

Amicior patriæ post fugam ; quam Regi post beneficia. Just.

XERXES.

Herod. lib.
7. c. 101-105.

Démarate, avant que de répondre à la question du Roi, lui avoit demandé si son intention étoit qu'il lui parlât selon la vérité, ou avec flatterie; & Xerxès aiant exigé de lui une grande sincérité: « Puisque vous me » l'ordonnez, Grand Prince, reprit » Démarate, la vérité va vous parler » par ma bouche. Il est vrai que de » tout tems la Grèce a été nourrie » dans la pauvreté: mais on a intro- » duit chez elle la vertu, que la sa- » gesse cultive, & que la vigueur des » loix maintient. C'est par l'usage que » la Grèce fait faire de cette vertu, » qu'elle se défend également des in- » commodités de la pauvreté, & du » joug de la domination. Mais, pour » ne vous parler que de mes Lacédé- » moniens, soiez sûr que nés & » nourris dans la liberté, ils ne préte- » ront jamais l'oreille à aucune pro- » position qui tende à la servitude. » Fussent-ils abandonnés par tous les » autres Grecs, & réduits à une troupe » de mille soldats, ou à un nombre » encore moindre, ils viendront au de- » vant de vous, & ne refuseront point » le combat. » Le Roi, entendant un tel discours, se mit à rire; & comme

il ne pouvoit comprendre que des **XERXES.**
 hommes libres & indépendans, tels
 qu'on lui dépeignoit les Lacédémoniens, qui n'avoient point de maître
 qui pût les contraindre, fussent capables de s'exposer ainsi aux dangers & à la mort : « Ils sont libres & indépendans de tout homme, répliqua Démarate ; mais ils ont au-dessus d'eux la loi qui les domine, & ils la craignent plus que vous-même n'êtes craint de vos sujets. Or cette Loi leur défend de fuir jamais dans le combat, quelque grand que soit le nombre des ennemis ; & elle leur commande, en demeurant fermes dans leur poste, ou de vaincre, ou de mourir. »

Herod. lib. 7. cap. 162. 146.

Xerxès ne fut point choqué de la liberté avec laquelle Démarate lui avoit parlé, & il continua sa marche.

§. IV. *Les Lacédémoniens & les Athéniens députent inutilement vers les alliés pour demander du secours. Commandement de la flotte accordé aux Lacédémoniens.*

LACÉDÉMONIE & Athènes, qui étoient les deux plus puissantes villes

Herod. lib. 7. cap. 145. 146.

XERXES.

de la Grèce, & celles à qui Xerxès en vouloit le plus, ne s'étoient pas endormies à l'approche d'un ennemi si redoutable. Averties depuis longtems des mouvemens de ce Prince, elles avoient envoyé des espions à Sardes, pour s'informer plus exactement du nombre & de la qualité de ses troupes. Ils furent arrêtés, & comme on étoit près de les faire mourir, Xerxès commanda au contraire qu'on les menât au travers de l'armée, & qu'on les renvoyât sans leur faire aucun mal. Leur retour apprit aux Grecs ce qu'ils avoient à craindre.

On envoya en même tems des Députés à Argos, en Sicile vers Gélon tyran de Syracuse, aux îles de Corcyre & de Crète, pour demander du secours, & faire une ligue contre l'ennemi commun.

*Mid. 148.
152.*

Les Argiens offrirent un secours considérable, à condition qu'ils partageroient par moitié l'autorité & le commandement avec les Lacédémoniens. Ceux-ci consentirent que le Roi d'Argos eût la même autorité que chacun des deux Rois de Lacédémone. C'étoit leur accorder beaucoup : mais que ne peut pas un point d'honneur

neur mal-entendu , & une vaine ja- XERXES.
lousie de commandement ! Les Ar-
giens ne se contentèrent point de
cette offre , & refusèrent de secourir
les Grecs ligués , sans penser que s'ils
les laissoient périr , la perte de la
Grèce entraîneroit infailliblement la
leur.

Les Députés passèrent d'Argos en *cap. 153-162.*
Sicile , & s'adressèrent à Gélon : c'é-
toit le plus puissant Prince qui fût
alors parmi les Grecs. Il promit de
fournir deux cens vaisseaux à trois
rangs de rames , vingt mille hommes
d'infanterie , deux mille de cavalerie ,
outre deux mille soldats armés à la
légère , autant d'archers & de fron-
deurs , & d'entretenir de vivres l'ar-
mée des Grecs pendant tout le tems
de la guerre , à condition qu'on l'éli-
roit Généralissime des troupes de
terre & de mer. Les Lacédémoniens
se récrièrent à une telle proposition.
Il se rabattit à demander qu'au moins
il eût le commandement ou de la flo-
te , ou de l'armée de terre. Les Athé-
niens s'y opposèrent fortement , en
répondant que le commandement de
la flotte leur appartenoit de droit , si
les Lacédémoniens y renonçoient.

XERXES. Gélon avoit une raison bien plus forte de ne pas dégarnir la Sicile de troupes , qui étoit l'approche de la formidable armée des Carthaginois , commandée par Amilcar , & qui montoit à trois cens mille hommes.

Hered. lib. 7. cap. 168. Ceux de Corcyre , appelée aujourd'hui Corfou , firent aux Députés une réponse favorable , & se mirent aussitôt en mer avec une flotte de soixante vaisseaux. Mais ils ne s'avancèrent pas au delà des côtes de la Laconie , apportant pour prétexte les vents contraires , mais en effet attendant quel seroit le succès du combat , pour se ranger ensuite du côté du vainqueur.

Ibid. c. 169. 171. Les Crétois , aiant consulté l'oracle de Delphes sur le parti qu'ils avoient à prendre , refusèrent absolument d'entrer dans la ligue.

Hered. lib. 7. cap. 132. Ainsi les Lacédémoniens & les Athéniens se trouvèrent réduits presque à eux seuls , tous les autres peuples s'étant soumis aux hérauts que Xerxès avoit envoyés pour demander l'eau & la terre , excepté ceux de *cap. 145.* Thespie & de Platée. Dans un danger si pressant , on songea avant tout à faire cesser toute discorde & toute division , & les Athéniens firent la paix

DES PERSES ET DES GRECS. 219
avec les Eginètes , contre qui ils **XERXES.**
étoient actuellement en guerre.

Un de leurs premiers soins fut de nommer un Général. Jamais il n'avoit été plus nécessaire d'en choisir un qui pût dignement remplir cette place que dans la conjoncture présente, où toute l'Asie étoit prête à fondre sur la Grèce. Les plus expérimentés & les plus habiles, effraïés de la grandeur du danger, avoient pris le parti de ne point se présenter. Il y avoit à Athènes un citoyen nommé Epicyde, qui avoit quelque talent pour la parole, mais d'ailleurs homme sans mérite, décrié pour son peu de courage, & encore plus pour son avarice. Cependant on appréhendoit que dans l'assemblée les suffrages ne lui fussent favorables. Thémistocle, qui savoit ^a que dans un grand calme tout marinier presque est propre à conduire un vaisseau, mais que dans un tems d'orage & de tempête les pilotes les plus habiles ne le sont pas encore assez, comprit que la République étoit perdue si l'on nommoit pour Général

*Plut. in
Themist. pag.
114.*

a Quilibet nautarum | est, ac turbato mari ra-
vectorumque tranquillo | pitur vento navis, tum
mari gubernare potest : | viro & gubernatore opus
ubi orta sœva tempestas | est. *Liv. lib. 24. n. 8.*

XERXES. Epicyde , dont l'ame vénale donnoit tout lieu de craindre qu'il ne fût point à l'épreuve de l'or des Perles. Il y a des occasions , où , pour agir sagement , & je dirois presque régulièrement , il faut s'élever au-dessus des règles. Thémistocle , qui sentoît bien que dans l'état où étoient les affaires , il étoit le seul capable de commander , ne fit point difficulté d'écarter son compétiteur à force de présens & de libéralités , & aiant ainsi trouvé moien de dédommager l'ambition d'Epicyde en satisfaisant son avarice , il se fit élire en sa place. Il me semble qu'on peut appliquer ici bien justement à Thémistocle ce que Tite-Live dit de Fabius dans une occasion toute pareille. Ce grand homme , voiant que dans le tems qu'Annibal étoit dans le cœur de l'Italie , on songeoit à nommer pour Consul un homme sans mérite , emploia tout son crédit , & celui de ses amis , pour se faire continuer dans le Consulat , sans se mettre en peine de tout ce qu'on pouvoit dire contre lui , & il en vint à bout. L'Historien ajoute : ^b » La

^a Χρήματα τὴν φιλοτιμίαν ἐξωκίστητο παρὰ τῷ ἐπιχειρῶντι.

^b Tempus ac necessitas belli , ac discrimen summum rerum , faciebant ne

conjoncture du tems, & l'extrême « XERXES, danger où se trouvoit la Républi-
que, firent que personne ne fut «
blessé d'une conduite qui pouvoit «
paroître contraire aux règles, & «
écartèrent des esprits tout soupçon «
qu'en cela Fabius eût agi par aucun «
motif d'intérêt ou d'ambition. On «
admiroit au contraire sa grandeur «
d'ame, en ce que sachant que la Ré- «
publique avoit besoin d'un Général «
accompli, & ne pouvant se dissimu- «
ler à lui-même qu'il étoit ce Génér- «
al, il avoit mieux aimé hazarder en «
quelque sorte sa réputation, & «
s'exposer peut-être aux traits de «
l'envie, que de manquer à ce qu'il «
devoit à sa patrie.»

Les Athéniens firent aussi un Décret, P'ut. in Arist. p. 322. 323.
qui rappelloit tous les bannis. Aristi-
de étoit de ce nombre. Thémistocle,
par ses intrigues & ses cabales, étoit
venu à bout de le faire exiler par le
peuple; & le jugement que l'on rendit
contre lui, fut accompagné d'une cir-

quis aut in exemplum ex-
quireret, aut suspectum
cupiditatis imperii Con-
sulem haberet. Quin lau-
dabant potius magnitu-
dinem animi, quod,
cum summo imperatore

esse opus reip. sciret, se-
que cum haud dubiè esse,
minoris invidiam suam,
si qua ex re oriretur,
quàm utilitatem reip. fe-
cisset. Liv. lib. 24. n. 9.

XERXES.

constance qui mérite d'avoir ici sa place. Dans cette sorte de jugement les citoyens donnoient leurs suffrages en écrivant le nom du particulier sur une coquille, appelée en grec *οστρακον*, d'où est venu le nom d'Ostracisme. Ici un payfan, qui ne savoit pas écrire, & qui ne connoissoit pas Aristide, s'adressa à lui-même pour le prier de mettre le nom d'Aristide sur sa coquille. Cet homme vous a-t-il fait quelque mal, lui dit Aristide, pour le condamner ainsi ? Non, répliqua l'autre, je ne le connois pas même : mais je suis fatigué & blessé de l'entendre par tout appeller *le Juste*. Aristide, sans répondre une seule parole, prit tranquillement la coquille, y écrivit son nom, & la lui rendit. Il partit pour son exil, en priant les dieux de ne pas permettre qu'il arrivât à sa patrie aucun malheur qui le fît regretter.

Ce cas arriva bientôt après. A l'approche de Xerxès, les Athéniens craignirent qu'Aristide ne se joignît à leurs ennemis, & n'en entraînat avec lui beaucoup d'autres dans le parti des barbares. Ils connoissoient bien peu leur citoyen, qui étoit infiniment éloi-

gné d'une telle perfidie. Quoiqu'il en soit, ils songèrent à le rappeler. XERXES.

Thémistocle, loin de s'opposer à ce Décret, l'appuya de tout son crédit. La haine & la division de ces grands hommes n'avoit rien d'implacable, d'amer, d'outré, comme chez les Romains des derniers tems de la République. Le salut de l'Etat les reconcilioit, sans qu'ils gardassent de jalousie, ni de rancune : & nous verrons bientôt qu'Aristide, loin de traverser secrètement son ancien rival, courut avec zèle au succès de ses entreprises, & à sa gloire.

L'allarme augmentoit dans la Grèce à mesure qu'on apprenoit que l'armée des ennemis étoit plus près. Si les Athéniens & les Lacédémoniens n'avoient eu que leurs troupes de terre à lui opposer, ç'en étoit fait de la Grèce. On sentit pour lors tout le prix de la sage prévoyance de Thémistocle, qui, sous un autre prétexte, avoit fait bâtir cent galères. Au lieu que le reste des Athéniens avoit regardé la journée de Marathon comme la fin de la guerre, lui au contraire la regarda comme le commencement & le signal de plus grands combats, auxquels il devoit

XERXES. préparer son peuple; & dès lors il songea à rendre sa patrie supérieure à Lacédémone, qui depuis longtemps dominoit sur toute la Grèce. Dans cette vûe il crut devoir tourner toutes les forces d'Athènes du côté de la mer, voyant bien que foible par terre comme elle étoit, elle n'avoit que ce seul moien de se rendre nécessaire aux alliés, & formidable aux ennemis. Son avis passa malgré les efforts de Miltiade, arrêté sans doute par le peu d'apparence qu'il y avoit qu'un peuple tout neuf aux combats de mer, & qui n'étoit en état d'armer que de petits vaisseaux, pût résister à une puissance aussi formidable que celle des Perses, qui avec une flotte de plus de mille vaisseaux, avoient encore une nombreuse armée de terre.

*Plut. in
Themist. pag.
113.*

Les Athéniens avoient accoutumé de distribuer entr'eux tous les revenus qu'ils tiroient des mines d'argent, qui étoient dans un lieu de l'Attique appelé Laurium. Thémistocle eut le courage de proposer au peuple d'abolir ces distributions, & d'employer cet argent à bâtir des vaisseaux à trois rangs de rames pour faire la guerre aux Eginètes, contre lesquels il ré-

veilla leur ancienne jalousie. Le peu-
 XERXES.
 ple ne sacrifie pas volontiers ses inté-
 rêts particuliers à l'utilité publique,
 & n'aime pas à acheter le bien de l'E-
 tat par ses propres pertes. Il le fit
 pourtant en cette occasion, & touché
 par les vives remontrances de Thé-
 mistocle, il consentit que l'argent qui
 revenoit des mines fût employé à bâ-
 tir cent galères. On doubla ce nombre
 à l'arrivée de Xerxès, & ce fut cette
 flotte qui sauva la Grèce.

Quand il fut question de nommer
 un Généralissime pour commander la
 flotte, les Athéniens, qui seuls en
 avoient fourni les deux tiers, préten-
 dirent que cet honneur leur apparte-
 noit, & rien n'étoit plus juste que leur
 prétention. Cependant tous les suffra-
 ges des alliés se réunirent en faveur
 d'Eurybiade Lacédémonien. Thémis-
 tocle, quoique fort avide de gloi-
 re, crut que dans cette occasion il
 devoit oublier ses propres intérêts
 pour le bien commun de la patrie; &
 ayant fait entendre aux Athéniens,
 que pourvû qu'ils se conduisissent en
 gens de courage, bientôt tous les
 Grecs leur déféreroient d'eux-mêmes
 le commandement, il leur persuada

*Herod. lib
 8. cap. 213*

XERXES. de céder , aussi bien que lui , aux Lacédémoniens. On peut dire encore que cette sage modération de Thémistocle sauva l'Etat. Car les alliés menaçoient de se séparer si l'on prenoit un autre parti , & c'en étoit fait de la Grèce si cela fût arrivé.

§. V. *Combat des Thermopyles. Mort de Léonide.*

IL NE s'agissoit plus que de savoir où l'on attendroit les Perses , pour leur disputer l'entrée de la Grèce. Les Thessaliens représentèrent qu'étant les premiers exposés à l'attaque des ennemis , il étoit juste qu'on pourvût à leur sûreté , qui faisoit aussi celle de la Grèce ; sans quoi ils seroient obligés de prendre d'autres mesures , qui seroient contre leur inclination , mais qu'un tel abandon rendroit absolument nécessaires. Il fut résolu qu'on enverroient dix mille hommes pour garder le passage qui sépare la Macédoine de la Thessalie , près du fleuve Pénée , entre les monts Olympe & Ossa. Mais Alexandre , fils d'Amyntas , roi de Macédoine , leur ayant fait savoir que s'ils attendoient en cet endroit les Perses , ils seroient infailli-

AN.M. 3524.

AV. J.C. 480.

Herod. lib.

7. cap. 172.

173.

blement accablés par leur nombre , XERXES. ils se retirèrent vers les Thermopyles. — Les Theſſaliens, ſe voyant ainſi abandonnés , ne délibérèrent plus , & ſe ſoumirent aux Perſes.

Les Thermopyles ſont un défilé ou paſſage du mont Œta entre la Theſſalie & la Phocide , qui n'a que vingt-cinq piés de largeur , qu'un petit nombre de troupes pouvoit défendre , & qui étoit l'unique endroit par où l'armée de terre des Perſes pouvoit entrer en Achaïe , & venir aſſiéger Athènes. Ce fut donc là que l'armée des Grecs s'arrêta. Elle avoit pour Chef Léonide l'un des deux Rois de Sparte.

Xerxès cependant étoit en marche. Il avoit ordonné à ſa flotte de le ſuivre le long de la côte , & de régler ſes mouvemens ſur ceux de l'armée de terre. Par tout il trouvoit des vivres & des rafraîchiſſemens qu'on avoit préparés de loin ſelon les ordres qu'il avoit envoiés , & chaque ville à ſon arrivée lui donnoit un magnifique ſoupé , qui coutoit des ſommes immenſes. C'eſt ce qui donna lieu à un aſſez bon mot d'un citoien d'Abdère ville de Thrace , qui , après qu'il

XERXES. fut parti, dit qu'il falloit rendre graces aux dieux de ce que Xerxès ne faisoit qu'un repas.

Herod. lib. 8. cap. 116. Il y eut, dans le même pays de Thrace, un Prince qui témoigna une grandeur d'ame extraordinaire : c'étoit le Roi des Bifaltes. Pendant que tous les autres couroient à la servitude, & se soumettoient bassément à Xerxès, il refusa fièrement de subir le joug, & d'obéir. Il n'étoit pas en état de résister à force ouverte : il se retira sur le haut du mont Rhodope, dans un lieu inaccessible, & défendit à ses enfans de porter les armes contre la Grèce : ils étoient au nombre de six. Soit crainte de Xerxès, soit curiosité de voir une telle guerre, ils le suivirent. A leur retour, leur pere, oubliant cette qualité, punit d'une manière bien cruelle la desobéissance de ses fils, en leur faisant crever les yeux à tous. Xerxès continua sa marche à travers la Thrace, la Macédoine, & la Thessalie. Tout plia devant lui jusqu'au défilé des Thermopyles.

Pausan. lib. 10 pag. 645. On ne peut voir sans étonnement combien étoit petit le nombre des troupes que la Grèce opposa à l'armée innombrable de Xerxès. On en trou-

ve le dénombrement dans Pausanias. **XERXES.**
 Toutes ces troupes, jointes ensemble, ne faisoient qu'onze mille deux cens hommes. On n'en plaça que quatre mille aux Thermopyles pour en défendre le passage. Mais tous ces soldats, ajoute l'Historien, étoient déterminés à vaincre, ou à mourir. Que ne pout point une telle armée.

Lorsque Xerxès fut arrivé près des Thermopyles, il fut étrangement surpris d'apprendre qu'on se préparoit à lui disputer le passage. Il s'étoit toujours flaté qu'au premier bruit de son arrivée les Grecs prendroient la fuite, & il n'avoit pu se mettre dans l'esprit ce que Démarate, dès le commencement de la guerre, lui avoit dit, qu'une poignée d'hommes arrêteroit tout court son armée au premier passage. Il envoya un espion pour reconnoître les ennemis. Cet espion rapporta qu'il avoit trouvé les Lacédémoniens hors des retranchemens qui se divertissoient aux exercices militaires, & qui peignoient leur chevelure: c'étoit leur manière de se préparer au combat.

Le Roi, ne perdant pas encore toute espérance, attendit quatre jours pour leur donner le tems de se reti-

Hered. lib.

7. cap. 107.

231. Diad. lib.

11. pag 5-10.

XERXES.

Plut. in La-
con. Apophth.
pag. 225.

Κετόγρυψι,
Μολών λάβε.

Herod. lib.
7. cap. 210.
239.

rer. Il essaya, pendant cet intervalle ; de gagner Léonide par de magnifiques promesses, en le faisant assurer qu'il le rendroit maître de toute la Grèce, s'il vouloit embrasser son parti : une telle proposition fut rejetée avec hauteur & indignation. Puis Xerxès lui aiant écrit qu'il eût à lui livrer ses armes ; Léonide lui répondit en deux mots, d'un style & d'une fierté véritablement Laconiques: *Vien les prendre toi-même.* Il ne fut plus question que de se préparer au combat contre les Lacédémoniens. Le Roi fit marcher d'abord contr'eux les Médes, avec ordre de les saisir tous vivans, & de les lui amener. Les Médes ne purent soutenir l'effort des Grecs, & aiant été honteusement mis en fuite, ^a ils montrèrent, dit Hérodote, que Xerxès avoit beaucoup d'hommes, mais peu de soldats. Ils furent relevés par les Perses surnommés les Immortels, qui formoient un corps de dix mille hommes : c'étoient les meilleures troupes de l'armée. Elles n'eurent pas un meilleur succès que les premières.

^a Ὅτι πολλοὶ ἄνθρωποι ἦσαν, ὀλίγοι δὲ εἰσθητοὶ. | Quod multi homines essent, pauci autem viri.

Xerxès , desespérant de pouvoir **XERXES.**
 forcer des troupes si déterminées à vaincre ou à mourir , étoit dans un grand embarras , & ne savoit quel parti prendre : lorsqu'un habitant du pays vint lui découvrir un * sentier détourné vers une éminence qui étoit au dessus des ennemis , & qui les commandoit. On y envoya un détachement , qui ayant marché toute la nuit , y arriva à la pointe du jour , & s'en empara.

Les Grecs en furent bientôt avertis. Léonide, voyant qu'il étoit impossible de résister aux ennemis , obligea le reste des alliés de se retirer , & demeura avec ses trois cens Lacédémoniens , résolus de mourir tous à l'exemple de leur Chef, qui ayant appris de l'oracle qu'il falloit que Lacédémone ou son Roi pérît , n'hésita pas à se sacrifier pour sa patrie. Ils étoient donc sans espérance de vaincre , ni de se sauver , & ils regardoient les Thermopyles comme leur tombeau. Le Roi les ayant exhortés à prendre de

* Quand les Gaulois , deux cens ans après , vinrent attaquer le Grece , ils s'emparèrent du défilé des Thermopyles par le même sentier , que les Grece avoient encore négligé de garder. Pausan. lib. 1. pag. 7. & 8.

XERXES.

la nourriture , en ajoutant qu'ils souperoit ensemble chez Pluton , ils jettèrent tous des cris de joie , comme si on les eût invités à un festin. Il les mena ensuite au combat pleins d'ardeur. Le choc fut très-rude , & très-sanglant. Léonide tomba mort des premiers. Les Lacédémoniens firent des efforts incroyables de courage pour défendre son corps mort. Enfin , accablés par le nombre plutôt que vaincus , ils périrent tous , excepté un seul , qui se sauva à Lacédémone , où il fut traité comme un lâche & comme un traître à sa patrie ; sans que personne voulût avoir commerce avec lui , ni lui parler. Mais peu de tems après il répara avantageusement sa faute dans la bataille de Platée , où il se distingua d'une manière particulière. Xerxès , outré de dépit contre Léonide qui avoit osé lui tenir tête , fit attacher son cadavre à une potence , & se couvrit lui-même de honte en voulant deshonorer son ennemi.

Ibid. cap. 338.

On éleva dans la suite par l'ordre des Amphi&yons un superbe monument tout près des Thermopyles à ces braves défenseurs de la Grèce avec deux inscriptions , dont l'une regar-

doit en général tous ceux qui étoient morts aux Thermopyles, & portoit que les Grecs du Péloponnèse, au nombre seulement de quatre mille, avoient tenu tête à l'armée des Perses composée de trois millions d'hommes. L'autre inscription étoit particulière aux Spartiates. La simplicité en est remarquable : elle étoit du poëte Simonide. La voici :

ἄνθρωποι, ἀγγεῖλον Λακεδαιμονίοισι, ὅτι
 τῶν δὲ
 Κείμιθσ , τοῖς κείνων πυθόμενοι νο-
 μίμοισι.

c'est-à-dire : *Passant , va annoncer à Lacédémone que nous sommes morts ici , pour obéir à ses saintes loix.* Quarante

Pausan. lib.
 3. pag. 185.

a Pari animo Lacedæ- | occiderunt , in quos Si-
 monii in Thermopylis | monides :

Dic , hospes , Spartæ nos te hîc vidisse jacentes.

Dum sanctis patriz legibus obsequimur. Cio.
 Pusc. Quæst. lib. I. n. 102.

XERXES. neur, & l'on y célébroit des Jeux, auxquels les Lacédémoniens seuls avoient droit d'assister, pour marquer qu'eux seuls avoient eu part à la gloire remportée aux Thermopyles.

Herod. lib. 8. c. 24. 25. Xerxès y avoit perdu plus de vingt mille hommes, du nombre desquels se trouvèrent deux freres du Roi. Il sentit bien qu'une si grande perte, qui étoit une preuve sensible du courage des ennemis, étoit capable de jeter l'allarme & le découragement dans ses troupes. Pour leur en dérober la connoissance, il fit enterrer dans de grandes fosses, que l'on couvrit après de terre & d'herbes, tous ceux de son parti qui avoient été tués dans le combat, excepté mille, dont il laissa les corps dans la campagne. Cette ruse lui réussit mal; & lorsque dans la suite ceux de la flotte, curieux de voir le champ de bataille, eurent obtenu la permission d'y venir, elle ne servit qu'à découvrir la petitesse de son esprit, & non à cacher le nombre des morts.

Herod. lib. 7. cap. 134-137. Effraïé d'une victoire qui lui avoit couté si cher, il demanda à Démarate si les Lacédémoniens avoient encore beaucoup de pareils soldats. Ce-

lui-ci lui répondit que la république **XERXES** de Lacédémone avoit un assez grand nombre de villes, dont tous les habitans étoient fort braves : mais que ceux de Lacédémone, qu'on appelloit proprement Spartiates, & qui montoient à peu près à huit mille, surpassoient tous les autres en bravoure, & étoient tels que ceux qui avoient combattu avec Léonide.

Je reviens encore un moment au combat des Thermopyles, dont l'issue, funeste en apparence, pourroit laisser dans les esprits une idée peu favorable aux Lacédémoniens, & faire regarder leur courage comme l'effet d'une témérité présomptueuse, & d'une hardiesse desespérée.

L'action de Léonide avec ses trois-cens Spartiates n'étoit pas un coup de desespoir, mais une conduite sage & généreuse, comme Diodore de Sicile a soin de le faire remarquer, en Diod. lib. 11. pag. 9. relevant par un éloge magnifique la gloire de cette fameuse journée, & lui attribuant le succès de toutes les campagnes suivantes. Sachant que Xerxès marchoit à la tête de toutes les forces de l'Orient pour accabler un petit pays par le nombre, il com-

XERXES. prit par une supériorité de lumière, que si l'on faisoit consister le succès de cette guerre à opposer la force à la force & le nombre au nombre, jamais tous les Grecs rassemblés ne pourroient égaler les Perses, ni leur disputer la victoire. Qu'il étoit donc nécessaire d'ouvrir à la Grèce allarmée une autre voie de salut. Qu'il falloit montrer à tout l'univers attentif ce que peut la grandeur d'ame contre la force du corps, le véritable courage contre une impétuosité aveugle, l'amour de la liberté contre une oppression tyrannique, une troupe aguerrie & disciplinée contre une multitude confuse. Ces braves Lacédémoniens crurent qu'il convenoit à l'élite du premier peuple de la Grèce de se dévouer à une mort certaine pour faire sentir aux Perses ce qu'il en coûte pour réduire des hommes libres en servitude, & pour apprendre aux Grecs à vaincre ou à périr comme eux.

Ce ne sont point ici des sentimens que je tire de mon propre fonds, & que je prête à Léonide: ils sont renfermés dans la courte réponse que fit ce digne Roi de Sparte à un Lacédé-

monien, lequel effraïé de la généreuse XERXES.
 se résolution où il le voioit, lui dit : —————

Quoi donc, Seigneur, est-ce que ^{Plut. in La-} vous songez à marcher avec une ^{con. apoph.} petite poignée de gens contre une ^{pag. 225,} armée innombrable ? S'il s'agit du nombre, répliqua Léonide, la Grèce entière n'y suffiroit pas, puisqu'elle n'égale qu'une petite partie de l'armée Persane : mais s'il s'agit de courage, ma petite troupe est plus que suffisante. »

La suite fit voir combien il pensoit juste. Cet exemple de courage étonna les Perses, & ranima les Grecs. La mort de ces braves soldats & de leur Chef fut utilement employée, & produisit un double effet, plus grand & plus durable qu'ils ne l'avoient espéré. D'un côté elle fut comme le premier germe des victoires suivantes, qui firent perdre aux Perses pour toujours la pensée de venir attaquer la Grèce ; & pendant les sept ou huit régnes suivans il ne se trouva aucun Prince qui osât en former le dessein, ni aucun flateur qui osât en donner le conseil. D'un autre côté cette hardiesse intrépide laissa une persuasion profondément gravée dans le cœur de

XERXES.

tous les Grecs, qu'ils pouvoient vaincre les Perses, & détruire leur vaste monarchie. Cimon en fit d'abord avec succès le premier essai. Agésilas poussa plus loin ce projet, & le porta jusqu'à faire trembler dans Suse le Grand-Roi. Et Alexandre enfin l'exécuta avec une facilité incroyable. Il ne douta jamais, non plus que les Macédoniens qu'il suivoient, ni que toute la Grèce qui l'avoit nommé son Chef pour cette expédition, qu'il ne pût avec trente mille hommes renverser l'empire des Perses, après que trois cens Spartiates avoient suffi pour en arrêter toutes les forces réunies.

§. VI. *Combat naval près d'Artémise.*

Herod. lib. 8. cap. 1-18. LE JOUR même de l'action des Thermopyles, il se donna aussi un grand combat sur mer. La flotte des Grecs, sans compter les petites galères & les barques, étoit composée de 271 vaisseaux. Elle s'étoit arrêtée à Artémise, promontoire de l'Eubée sur la côte septentrionale, vers le détroit. Celle des ennemis, beaucoup plus nombreuse, étoit tout près de là : mais elle venoit d'essuyer une rude tempête, qui avoit fait périr plus de

Diod. lib. 11. pag. 10.

11.

quatre cens vaisseaux. Cependant, **XERXES.** comme elle étoit encore infiniment supérieure à celle des Grecs qu'ils se préparoient à attaquer, ils détachèrent deux cens vaisseaux avec ordre de se tenir vers l'Eubée, afin qu'aucun des vaisseaux ennemis ne pût leur échaper. Les Grecs en aiant eu avis, mirent à la voile de nuit pour attaquer ce détachement à la pointe du jour. Ne l'ayant point rencontré, ils allèrent vers le soir attaquer le gros de la flotte ennemie. Elle fut fort maltraitée. La nuit étant survenue, il falut se séparer, & chacun se retira à son poste. Mais cette nuit même fut encore plus rude pour les Perses que le combat qui l'avoit précédée, à cause d'une violente tempête, accompagnée de pluies & de tonnères, qui les tint dans le mouvement & l'agitation jusqu'à la pointe du jour : & les deux cens vaisseaux qui avoient été détachés se brisèrent presque tous sur les côtes de l'Eubée ; les dieux, dit Hérodote, voulant que les deux flotes devinssent à peu près égales.

Un renfort de cinquante-trois vaisseaux étant survenu ce jour-là même aux Athéniens, & les Grecs aiant eu

XERXES.

avis du débri d'une partie de la flotte ennemie , ils attaquèrent encore à la même heure que la veille les vaisseaux des Ciliciens , & en coulèrent à fond un grand nombre. Les Perses , honteux de se voir ainsi insulter par un ennemi beaucoup inférieur en nombre , se mirent le lendemain les premiers en mer. Le combat fut fort opiniâtre , & le succès à peu près égal des deux côtés , si ce n'est que les Perses se trouvant embarrassés par la grandeur & le nombre de leurs vaisseaux , firent une bien plus grande perte. On se retira en bon ordre de part & d'autre.

Plut. in Themist. pag. 115-117.

Herod. lib. 8. cap. 11-31.

Toutes ces actions , qui se passèrent auprès d'Artémise , ne furent pas absolument décisives , mais elles servirent beaucoup à animer les Athéniens , en les convainquant par leur propre expérience que ni le grand nombre & les magnifiques décorations des vaisseaux , ni les cris insolens & les chants de victoire des barbares , n'ont rien de formidable pour des hommes qui savent en venir aux mains , & qui ont le courage de combattre de pied ferme ; & en leur faisant voir qu'il ne faut que mépriser toute cette vaine

ne montre , aller droit à l'ennemi , & XERXES l'attaquer vivement sans jamais lâcher prise.

Les Grecs , aiant pour lors appris ce qui s'étoit passé aux Thermopyles , ne délibérèrent plus sur le parti qu'ils avoient à prendre. Ils partirent d'Arémise , & s'avancant vers l'intérieur de la Grèce , ils s'arrêtèrent à Salamine , petite île tout près & vis-à-vis de l'Attique. Dans cette retraite, Thémistocle passant par les lieux où il falloit nécessairement que les ennemis abordassent pour s'y rafraîchir , & pour y faire de l'eau , grava en grosses lettres sur des pierres & des rochers ces mots qu'il adressoit aux Ioniens : *Peuples d'Ionie , rangez-vous de notre côté ; reprenez le parti de vos peres , qui n'exposent leur vie que pour le maintien de votre liberté : ou , si cela vous est impossible , au moins faites aux Perses dans la mêlée le plus de mal que vous pourrez , & jetez le desordre dans leur armée.* Par là il espéroit , ou attirer les Ioniens , ou les rendre suspects aux barbares. On voit que Thémistocle , toujours attentif à son but , ne négligeoit rien de ce qui pouvoit contribuer au succès de ses entreprises.

*Herod. lib.
8. cap. 40. 41.*

XERXES.

§. VII. *Les Athéniens abandonnent leur ville. Xerxès la prend & la brûle.*

CEPENDANT Xerxès étoit entré dans la Phocide par le haut de la Doride , brûlant & saccageant les villes des Phociens. Les peuples du Péloponnèse , ne songeant qu'à sauver leur pays , avoient résolu d'abandonner tout le reste , & d'assembler toutes les forces de la Grèce au dedans de l'Isthme , qu'on prétendoit fermer d'un grosse muraille depuis une mer jusqu'à l'autre : cet espace étoit de près de deux lieues. Les Athéniens , irrités d'une si lâche désertion , se voioient tout près de tomber entre les mains des Perses , & de porter tout le poids de leur colère & de leur vengeance. Ils avoient consulté quelque tems auparavant l'oracle de Delphes , qui leur avoit répondu que la ville ne trouveroit son salut que dans des murs de bois. Cette expression ambiguë partagea les esprits. Quelques-uns l'interprétoient de la citadelle, parce qu'autrefois elle avoit été environnée de palissades de bois. Thémistocle lui donnoit un autre sens bien plus naturel , l'entendant des vais-

Herod. lib.

7. cap. 139.

143.

seaux , & montrait que le seul parti qu'ils eussent à prendre étoit d'abandonner leur ville , & de s'embarquer. Mais c'est à quoi le peuple ne vouloit nullement entendre , comme ne se fouchant plus de vaincre , & ne voiant aucun moien de se sauver après avoir abandonné les temples de leurs dieux , & les tombeaux de leurs ancêtres. Thémistocle eut ici besoin de toute son adresse & de toute son éloquence pour ébranler le peuple. Après leur avoir représenté qu'Athènes ne consistoit ni dans les murs , ni dans les maisons , mais dans les citoyens , & que conserver ceux-ci c'étoit sauver la ville , il chercha à les toucher par le motif qui étoit le plus capable de faire impressiom sur eux dans l'état de malheur , d'affliction , & de danger où ils se trouvoient , je veux dire par le motif de l'autorité divine , leur faisant entendre par les paroles mêmes de l'oracle , & par les prodiges qui étoient arrivés , que la volonté des dieux étoit qu'ils s'éloignassent d'Athènes pour un tems.

On fit donc un Décret , par lequel , Herod. lib. 8. cap. 51-54. Plut. in Themist. pag. 117. pour adoucir ce qu'il y avoit de dur dans la résolution d'abandonner la

XERXES. ville, il étoit ordonné, „ Qu'on met-
 „ troit Athènes en dépôt entre les
 „ mains & sous la sauvegarde de Mi-
 „ nerve patronne des Athéniens; que
 „ tous ceux qui étoient en état de
 „ porter les armes, monteroient sur
 „ les vaisseaux; & que chacun pour-
 „ voiroit comme il pourroit au salut
 „ & à la sûreté de sa femme, de ses
 „ enfans, & de ses esclaves.

*Plut. in Cim.
 pag. 481.*

Une démarche singulière de Ci-
 mon, encore jeune pour lors, fut d'un
 grand poids dans cette occasion. On
 le vit, suivi de ses camarades, & avec
 un visage gai, monter le long de la
 rue du Céramique à la citadelle,
 pour y consacrer dans le temple de
 Minerve un mors de bride qu'il
 portoit à la main, voulant faire en-
 tendre par cette cérémonie religieu-
 se mais frappante, qu'il n'étoit plus
 question de troupes de terre, & qu'il
 falloit se tourner du côté de la mer.
 Après avoir fait l'offrande de ce
 mors, il prit un des boucliers qui
 étoient appendus aux parois du tem-
 ple, fit ses prières à la déesse, descen-
 dit sur le rivage, & fut le premier
 qui par son exemple inspira la con-
 fiance à la plupart des autres, & leur
 donna le courage de s'embarquer.

La plupart firent passer leurs peres **XERXES** & leurs meres qui étoient âgés , avec leurs femmes & leurs enfans , dans la ville de * Trézène , dont les habitans les reçurent avec beaucoup de générosité & d'humanité. Car ils firent ordonner qu'ils seroient nourris aux depens du public , & leur assignèrent à chacun deux oboles par jour , qui valoient à peu près trois sols & demi de notre monnoie. Il permirent outre cela aux enfans de prendre des fruits par tout ; & établirent encore un fonds pour le paiement des Maîtres qui les instruïroient. Il est beau de voir une ville , exposée comme celle-ci aux plus grands maux , étendre son attention & sa libéralité , au milieu de telles allarmes , jusqu'à l'éducation des enfans d'autrui !

Quand toute la ville vint à s'embarquer , ce spectacle , le plus triste & le plus touchant qui fut jamais , tiroit les larmes des yeux de tous les assistans , & excitoit en même tems des sentimens d'admiration pour la fermeté & le courage de ces hommes qui envoïoient ailleurs leurs pe-

* C'est une petite ville , dans la partie du Péloponnèse sur le bord de la mer | nése appelée l'Argolide.

XERXES. res & leurs meres , & qui , sans être ébranlés par leurs gémissemens , ni par les tendres embrassemens de leurs enfans & de leurs femmes , passoient avec tant de résolution à Salamine. Mais ce qui augmentoit infiniment la compassion , c'étoit un grand nombre de vieillards qu'on étoit forcé de laisser dans la ville à cause de leur âge & de leur foiblesse , & dont plusieurs même voulurent y rester par un motif de religion , entendant de la citadelle ce que l'oracle avoit dit des murailles de bois. Il n'y eut pas , (car l'histoire a jugé cette circonstance digne d'être rapportée) il n'y eut pas jusqu'aux animaux domestiques qui ne prissent part à ce deuil public , & l'on ne pouvoit s'empêcher d'être touché & attendri en les voyant courir avec des hurlemens après leurs maîtres qui s'embarquoient. Entre tous les autres on remarqua le chien de Xanthippe , pere de Périclés , qui ne pouvant supporter de se voir abandonné de son maître , se jeta à la mer , & nagea toujours près de son vaisseau , jusqu'à ce qu'il aborda presque sans force à Salamine , & mourut incontinent sur le rivage. On montroit en-

core dans le même lieu , du tems de XERXES. Plutarque , l'endroit où l'on prétend qu'il fut enterré , & que l'on appelloit *la sépulture du Chien*.

Pendant que Xerxès continuoit sa marche , quelques transfuges d'Arcadie vinrent se rendre dans son armée. Leur aiant demandé ce que faisoient alors les Grecs , il fut bien surpris d'apprendre qu'ils étoient occupés à regarder les jeux & les combats qui se célébroient à Olympie ; & il le fut encore plus , quand on lui eut dit que la récompense du vainqueur n'étoit autre qu'une couronne d'oliviers. Quels hommes , s'écria par admiration l'un des Seigneurs Persans , qui ne sont sensibles qu'à l'honneur , & point à l'argent !

Xerxès avoit fait un détachement assez considérable de son armée pour aller piller le temple de Delphes, où il savoit qu'il y avoit des richesses immenses, n'ayant pas intention de traiter Apollon plus favorablement que les autres dieux, dont il avoit saccagé les temples. Si l'on en croit Hérodote & Diodore de Sicile , à peine ce détachement s'étoit-il avancé jusqu'au temple de Minerve, surnom-

Herod. lib.

8. cap. 16.

Herod. lib.

8. c. 35-39.

Diod. l. 11.

pag. 12.

XERXES. mée la *Prévoiante*, que l'air s'obscurcit tout-à-coup, & qu'il s'éleva une furieuse tempête accompagnée de vents impétueux, de tonnées, d'éclairs, & de foudres; & deux gros rochers s'étant détachés de la montagne, écrasèrent la plupart de ces troupes.

Herod. lib. 3. cap. 50-54. Le reste de l'armée marcha vers la ville d'Athènes, que ses habitans avoient abandonnée, excepté un petit nombre de citoiens qui s'étoient retirés dans la citadelle, où ils se défendirent jusqu'à la mort avec un courage incroyable, sans vouloir entendre à aucun accommodement: Xerxès brûla entièrement la ville & tous les temples. *Lib. 10. pag. 679.* Pausanias nous apprend que dans la suite on en laissa exprès subsister quelques-uns dans l'état où les Perses les avoient mis, sans les rétablir, afin que ces ruines sacrées fussent des motifs toujours subsistans de la haine irréconciliable qui devoit être entre les Grecs & les Barbares. Xerxès dépêcha aussitôt un courier à Suse pour porter cette agréable nouvelle à Artabane son oncle; & il lui envoya en même tems un grand nombre de tableaux & de

statues. Celles d'Harmodius & d'Aristogiton, libérateurs d'Athènes, en faisoient partie. Un Antiochus, roi de Syrie, (je ne sai pas lequel, ni en quel tems) les renvoia aux Athéniens, ne croiant pas leur pouvoir faire un présent plus agréable.

XERXES.

Pausan. lib.
1. pag. 14.

§. VIII. *Bataille de Salamine. Retour précipité de Xerxès dans l'Asie. Eloge de Thémistocle & d'Aristide. Défaite des Carthaginois en Sicile.*

ALORS la division se mit dans la flotte des Grecs ; & les alliés, dans un Conseil de guerre qui se tint, se trouvèrent fort partagés pour déterminer l'endroit où se devoit donner le combat. Les uns, c'étoit le plus grand nombre, qui avoient pour eux Eurybiade Généralissime de la flotte, vouloient qu'on s'approchât de l'Isthme de Corinthe, pour être plus près de l'armée de terre qui gardoit cette entrée sous la conduite de Cléombrote frere de Léonide, & plus à portée de défendre le Péloponnèse. D'autres, & ils avoient Thémistocle à leur tête, prétendoient que c'étoit trahir la patrie que d'abandonner un poste aussi avantageux que ce-

Herod. lib.
8. cap. 56-65.
Plut. in
Thémist. pag.
117.

XERXES. lui de Salamine. Et comme celui-ci soutenoit son sentiment avec beaucoup de chaleur, Eurybiade leva la canne sur lui. L'Athénien, sans s'émouvoir, *Frappe*, dit-il, *mais écoute* ; & continuant de parler, il montra de qu'elle importance il étoit pour la flotte des Grecs, dont les vaisseaux étoient plus légers & beaucoup moins nombreux que ceux des Perses, de donner la bataille dans un détroit comme celui de Salamine, qui mettroit l'ennemi hors d'état de faire usage d'une grande partie de ses forces. Eurybiade, qui n'avoit pu voir sans surprise la modération de Thémistocle, se rendit à ses raisons, & sans doute encore plus à la crainte qu'il eut que les Athéniens, dont les vaisseaux faisoient plus de la moitié de la flotte, ne se séparassent des alliés, comme leur Général l'avoit laissé entrevoir.

Herod. lib.
8. c. 67-70. Du côté des Perses on avoit tenu aussi un Conseil de guerre, pour savoir s'il falloit hazarder un combat naval : Xerxès étoit venu à la flotte pour prendre avis de ses Capitaines. Tous furent pour donner la bataille, parcequ'ils savoient que le Roi pan-

choit de ce côté-là. Il n'y eut que la **XERXES.**
 reine Artémise qui s'apposât à ce
 dessein. Elle représenta qu'il étoit
 dangereux d'en venir aux mains avec
 des gens beaucoup plus expérimentés
 & plus habiles dans la marine que les
 Perses : que la perte d'une bataille
 sur mer seroit suivie de la ruine de
 l'armée de terre : qu'en traînant la
 guerre en longueur , & s'approchant
 du Péloponnèse , ils feroient naître ,
 ou plutôt augmenteroient parmi les
 ennemis la division qui y étoit déjà
 fort grande : que les alliés ne man-
 queroient pas de se séparer pour aller
 défendre chacun son propre pays ; &
 qu'alors le Roi se rendroit maître
 sans peine , & presque sans coup fé-
 rir , de toute la Grèce. Cet avis si
 sage ne fut point suivi , & l'on réso-
 lut de donner la bataille.

Comme Xerxès attribuoit à son
 absence le mauvais succès des pre-
 miers combats qu'on avoit donnés
 sur mer , il voulut être témoin de ce-
 lui-ci du haut d'une éminence où il
 fit placer son trône. Ce pouvoit être
 un moien d'animer les troupes. Mais
 il en est un autre plus sûr & plus ef-
 ficace , je veux dire la présence même

XERXÈS. & l'exemple du Prince , qui prend part au péril , & qui par là se montre digne d'être l'ame & le chef de tant de gens de cœur prêts à mourir pour lui. Quand un Prince n'a pas cette sorte de fermeté qui ne s'étonne de rien , & que le péril même réveille , il peut avoir d'ailleurs de bonnes qualités , mais il n'est pas propre à commander une armée. Dans un Général , rien ne peut suppléer le courage ; & plus il tâche d'en montrer l'apparence , quand il n'en a pas la réalité , plus il découvre sa peur. Il y a à la vérité une extrême différence entre un Général & un simple soldat. Xerxès ne devoit s'exposer que comme il convient à un Prince : comme la tête , & non comme la main : comme celui qui doit donner les ordres , & non comme ceux qui doivent les exécuter. Mais se tenir entièrement écarté du danger , & se réduire à la simple fonction de spectateur , c'est renoncer à la qualité de Général.

Herod. lib. Thémistocle sachant que dans la
8. c. 74-78. flotte Grecque on songeoit encore à

† a Quanto magis occul- | nitebantur , manifestius
 tare ac abdere pavorem | pavidis. *Tacit. Hist.*

aller vers l'Isthme , fit donner avis **XERXES.**
 sous main à Xerxés que les alliés
 Grecs étant réunis dans le même lieu ,
 il lui seroit facile de les vaincre & de
 les accabler tous ensemble ; au lieu
 que s'ils se séparoient , comme ils
 étoient près de le faire , il manque-
 roit pour toujours une si favorable
 occasion. Le Roi le crut , & par son
 ordre un grand nombre de vaisseaux
 environna de nuit Salamine , pour
 ôter aux Grecs tout moyen de sortir
 de ce poste.

Personne ne s'aperçut que l'armée
 fut ainsi enveloppée. Aristide vint la
 nuit même d'Egine où il comman-
 doit quelques troupes , & traversa
 avec un très-grand danger toute la
 flotte des ennemis. Quand il fut arri-
 vé à la tente de Thémistocle , il le
 tira à part , & lui parla ainsi : » Thé-
 mistocle , si nous sommes sages , «
 nous renoncerons désormais à cette «
 vaine & puerile dissension qui nous «
 a divisés jusqu'ici ; & par une plus «
 noble & plus salutaire émulation «
 nous combattons à l'envi à qui «
 servira mieux la patrie , vous en «
 commandant & en faisant le de- «
 voir d'un bon & sage capitaine , «

*Plut. in
 Arist. p. 323.
 Herod. lib.
 8. c. 78-82.*

XERXES, » & moi en vous obéissant , & en
» vous aidant de ma personne & de
» mes conseils. Il lui donna ensuite
avis que l'armée étoit envelopée par
les vaisseaux des Perses , & l'exhorta
fort à ne point différer de donner le
combat. Thémistocle, étonné jusqu'à
l'excès d'une telle grandeur d'ame &
d'une si noble franchise , eut quelque
honte de s'être laissé vaincre par son
rival , & ne rougissant point d'en faire
l'aveu , promit bien d'imiter sa géné-
rosité , & même, s'il le pouvoit , de la
surpasser par tout le reste de sa con-
duite. Puis , après lui avoir fait confi-
dence de la ruse qu'il avoit imaginée
pour tromper le Barbare , il le pria
d'aller trouver Eurybiade , pour lui
représenter qu'il n'y avoit d'autre sa-
lut pour eux que de combattre par
mer à Salamine : ce qu'il fit avec joie,
& avec succès ; car il avoit beaucoup
de crédit sur l'esprit de ce Général.

*Herod. lib.
8. c. 84-96.*

On se prépara donc de part & d'au-
tre au combat. La flotte des Grecs
étoit composée de trois cens quatre-
vingts voiles. Elle suivoit en tout
l'impression & les ordres de Thémis-
tocle. Comme rien n'échappoit à sa
prévoiance , & qu'en habile capitaine

il savoit profiter de tout, il attendit, XERXES.
pour engager l'action, qu'un vent
qui se levoit tous les jours réguliè-
ment à une certaine heure, & qui
étoit tout-à-fait contraire aux enne-
mis, commençât à souffler. Alors on
donna le signal. Les Perses, qui sa-
voient que le Roi avoit les yeux at-
tentifs sur eux, s'avancèrent avec une
impétuosité & un courage capables
de répandre par tout la terreur. Mais
ce premier feu se rallentit bientôt
quand on fut dans la mêlée. Tout
leur étoit contraire : le vent, qui leur
donnoit directement dans le visage ;
la hauteur & la pesanteur de leurs
vaisseaux, qui se remuoient difficile-
ment ; le grand nombre de ces vais-
seaux, qui loin de leur être utile, ne
servoit qu'à les embarrasser dans un
lieu étroit & serré : au lieu que du
côté des Grecs tout se faisoit avec
ordre & mesure, sans trouble & sans
confusion, parceque tout obéissoit à
un seul ordre. Les Ioniens, que Thé-
mistocle avoit avertis par des caracté-
res gravés sur des pierres le long des
côtes de l'Eubée de se souvenir d'où
ils tiroient leur origine, furent les
premiers qui prirent la fuite : & ils

XERXES.

Cinq mille
livres.

furent bientôt suivis du reste de la flote. Artémise se signala par des efforts incroyables de hardiesse, en sorte que Xerxès la voyant ainsi combattre, s'écria ^a que dans cette bataille les hommes avoient paru des femmes, & que les femmes avoient montré un courage d'hommes. Les Athéniens, iudignés de ce qu'une femme avoit osé venir porter les armes contre eux, avoient promis dix mille dragmes de récompense à quiconque la pourroit prendre en vie : mais elle échapa à leur poursuite. S'ils l'eussent prise, elle n'auroit mérité que d'être comblé de louanges & d'honneurs.

Tel fut le succès de la bataille de Salamine, l'une des plus mémorables dont il soit parlé dans l'histoire ancienne, & qui a rendu à jamais célèbre le nom & le courage des Grecs. Il y eut beaucoup de navires des Perses de pris, un plus grand nombre encore qui furent coulés à fond. Plusieurs des alliés, qui ne craignoient pas moins la cruauté du Roi que l'en-

a Οἱ ὑπὸ ἀνδρῶν, γυναικῶν
μοι γυναικας· αἱ δὲ γυ-
ναικας, ἀνδρῶν.

Artémisia inter primos
duces bellum acerrimè

ciebat. Quippe, ut in
viro muliebrem timo-
rem, ita in muliere vi-
rilem audaciam cerne-
res, Just. lib. 2, cap. 12,

nemi , se retirèrent dans leur pays. XERXES.

Thémistocle , dans un entretien secret qu'il eut avec Aristide , mit en délibération , pour le sonder & pour connoître ses véritables sentimens , s'il ne seroit pas utile d'envoyer des vaisseaux pour rompre le pont que Xerxès avoit fait bâtir ; afin , disoit-il , de prendre l'Asie dans l'Europe : il pensoit tout le contraire. Aristide lui fit de vives remontrances sur un tel projet , & lui exposa combien il étoit dangereux de réduire au desespoir un ennemi si puissant , dont on ne pouvoit être trop tôt délivré. Thémistocle parut céder à ses raisons , & pour hâter le départ du Roi , il le fit avertir secrètement que les Grecs songeoient à faire rompre le pont. Il paroît que le but de Thémistocle , dans cette fausse confidence , étoit de s'autoriser du sentiment d'Aristide , qui étoit d'un grand poids , contre celui des autres Généraux , s'ils songeoient à aller rompre le pont. Peut-être aussi cherchoit-il à se mettre à couvert de la mauvaise volonté de ses ennemis , qui pourroient un jour l'accuser de trahison devant le peuple , s'ils venoient jamais à savoir

Herod. lib.
8. c. 97-110.

XERXES. qu'il eût fait donner cet avis secret à Xerxès.

*Herod. lib.
8. c. 115-120.*

Ce Prince, effraïé d'une telle nouvelle, ne perdit point de tems, & partit de nuit, aiant laissé Mardonius avec une armée de trois cens mille hommes pour réduire la Grèce s'il le pouvoit. Les Grecs, qui s'attendoient que Xerxès donneroit le lendemain un nouveau combat, aiant appris sa fuite le poursuivirent, mais inutilement. Ils avoient détruit deux cens vaisseaux ennemis, sans compter ceux qu'ils prirent. Le reste de la flotte Persane, après avoir été fort maltraité en chemin par les vents, se retira vers la côte d'Asie, où elle entra dans le port de Cume ville d'Eolie, & y passa l'hiver, sans oser depuis revenir en Grèce.

*Herod. lib.
8. cap. 130.*

Xerxès emmena avec lui le reste de son armée, & prit le chemin de l'Hellespont. Comme il n'y avoit point de vivres préparés, elle souffrit infiniment pendant toute la marche, qui fut de quarante-cinq jours. Après avoir consumé tous les fruits qui se rencontrèrent, les soldats furent obligés de se nourrir d'herbes, & même de feuilles & d'écorces d'ar-

bres. La maladie se mit dans l'armée. XERXES.
La dyssenterie, & la peste, en firent
périr une grande partie.

Le Roi, impatient de se sauver, avoit pris les devans avec peu de monde, afin d'arriver plus promptement : mais il trouva le pont rompu par une rude tempête qui s'étoit élevée, & fut obligé de passer le trajet dans une barque de pêcheur. ^a C'étoit un spectacle bien propre à faire connoître l'instabilité des choses humaines, que de voir dans une petite barque, presque sans suite & sans équipage, un Prince, aux armées & aux vaisseaux duquel, peu de tems auparavant, à peine la terre & la mer avoient pu suffire. Tel fut le succès de l'expédition de Xerxès contre la Grèce.

En rapprochant Xerxès de lui-même en deux différens tems, on a peine à le reconnoître. Quand il s'agissoit de délibérer, rien de plus courageux, ni de plus intrépide que ce Prin-

a Erat res spectaculo digna, & æstimatione fortis humanæ, rerum varietate miranda, in exiguo latentem videre navigio, quem paulo antè vix æquor omne ca-

piebat; carentem etiam omni servorum ministerio, cujus exercitus, propter multitudinem, terris graves erant. *Just. lib. 2. cap. 13.*

XERXES. ce : il est surpris , & même indigné ; qu'on envisage dans l'avenir aucune difficulté , & qu'on témoigne aucune allarme. Mais lors que l'heure de l'exécution & du péril est venue , il fuit lâchement , & ne songe qu'à mettre sa vie en sûreté. On voit ici sensiblement la différence qu'il y a entre le véritable courage qui n'est jamais sans prudence , & la témérité qui est toujours aveugle & présomptueuse. Un Prince habile & sage pèse tout , examine tout , avant que de s'engager dans ^a une guerre , qu'il ne craint pas , mais qu'il ne souhaite pas aussi ; & , dans le tems de l'action , la vue du danger ne sert qu'à l'animer. La présomption change cet ordre. ^b Comme elle a mis la bravoure & la hardiesse où devoit être la sagesse & la circonspection , elle place l'épouvante & le désespoir où devoit être le courage & l'intrépidité.

Hered. lib. 8. c. 122. 125. Le premier soin des Grecs , après la bataille de Salamine , fut d'envoyer à Delphes les prémices du riche butin

^a Non times bella , non provocas. *Plin. de Traj.*

Fortissimus in ipso discrimine , qui ante discrimen quietissimus. *Tacit.*

Hist. lib. 1. cap. 84.

^b Ante discrimen feroces , in periculo pavidus. *Ibid. cap. 68.*

qu'ils avoient fait. Cimon, encore XERXES.
 tout jeune, se signala particulière-
 ment dans cette journée, & y fit des Plut. in Cim. pag. 481.
 actions d'une valeur distinguée, qui
 lui attirèrent une grande réputation,
 & le firent regarder dès lors comme
 un citoyen capable de rendre un jour
 d'importans services à sa patrie.

Mais Thémistocle eut presque tout Plut. in Themist. pag. 120.
 l'honneur de cette victoire, la plus
 signalée que les Grecs aient jamais
 remportée contre les Perses. La veri-
 té força ceux qui étoient les plus ja-
 lous de sa gloire à lui rendre ce té-
 moignage. C'étoit une coutume dans
 la Grèce qu'après un combat les Ca-
 pitaines déclarassent ceux qui s'y
 étoient le plus distingués, en mar-
 quant sur un billet le nom de celui
 qui avoit mérité le premier prix, &
 le nom de celui qui avoit mérité le se-
 cond. Ici, par un jugement qui mar-
 que la bonne opinion qu'il est naturel
 d'avoir de soi-même, chacun s'ajugea
 le premier rang, & accorda le second
 à Thémistocle; ce qui étoit le mettre
 réellement au-dessus de tous les au-
 tres.

Les Lacédémoniens l'ayant mené à
 Sparte pour lui rendre les honneurs

XERXES. qui lui étoient dûs, décernèrent à leur Général Eurybiade le prix de la valeur, & à Thémistocle celui de la sagesse, qui fut une couronne d'olivier pour l'un & pour l'autre. Ils firent aussi présent à Thémistocle du plus beau char qui fût dans la ville; & à son départ, ils le firent accompagner par trois cens jeunes hommes des plus considérables de la ville jusqu'aux frontières du pays: honneur que jusques-là ils n'avoient encore rendu à personne.

Mais ce qui lui causa un plaisir encore plus sensible, furent les acclamations publiques qu'il reçut aux premiers Jeux Olympiques qui se célébrèrent après la bataille de Salamine, où toute la Grèce étoit assemblée. Dès qu'il parut, tout le monde se leva pour lui faire honneur. Personne n'étoit attentif aux jeux ni aux combats, Thémistocle seul faisoit le Spectacle. Tous les yeux étoient tournés vers lui, & chacun s'empressoit de le montrer de la main aux étrangers qui ne le connoissoient pas. Il avoua depuis à ses amis qu'il regardoit ce jour comme le plus beau de sa vie; que jamais il n'avoit ressenti une joie si

douce ni si vive, & que cette récompense, juste fruit de ses travaux, passoit tous ses desirs. XERXES.

On a sans doute remarqué dans Thémistocle deux ou trois traits principaux, qui doivent lui donner rang parmi les plus grands hommes. Le dessein qu'il forma & qu'il exécuta, de tourner toutes les forces d'Athènes du côté de la mer, marquoit en lui un génie supérieur, capable des plus grandes vues, pénétrant dans l'avenir, & saisissant dans les affaires le point décisif. Il comprit qu'Athènes, ne possédant qu'un territoire stérile & peu étendu, n'avoit que ce seul moyen pour s'enrichir & s'aggrandir. On peut regarder ce projet comme la source & la cause de tous les grands événemens qui rendirent dans la suite la république d'Athènes si florissante.

Mais je mets encore infiniment au-dessus de cette sage prévoyance la rare modération qu'il fit paroître en deux occasions décisives, où c'en étoit fait de la Grèce, s'il eût écouté les conseils d'une ambition mal entendue, & qu'il se fût piqué d'un faux point d'honneur, comme il est si ordinaire aux personnes de sa profession & de

XERXES.

son âge. La première est, lorsque ; malgré l'injustice criante qu'on commettoit à l'égard de sa République & de sa propre personne, en-nommant pour Généralissime de la flotte un Lacédémonien, il porta les Athéniens à se désister de leur prétention quelque juste qu'elle fût, pour prévenir les funestes effets que la division entre les alliés n'auroit pas manqué d'avoir. Et combien est admirable sa présence d'esprit & son sang froid, lorsque ce même Eurybiade, avec un geste menaçant & des paroles piquantes, leva la canne sur lui ! Qu'on se souviene que Thémistocle n'étoit pas alors fort âgé ; qu'il étoit plein d'ardeur pour la gloire, qu'il commandoit une flotte nombreuse ; qu'il avoit pour lui la raison. Que feroient nos jeunes Officiers dans une pareille conjoncture ? Celui-ci souffrit : & la victoire de Salamine fut le fruit de sa patience.

J'aurai lieu dans la suite de parler avec plus d'étendue du mérite d'Aristide. C'étoit, à proprement parler, l'homme de la République. Pourvu qu'elle fut bien servie, il lui importoit peu par qui elle le fût. Le mérite
des

des autres , loin de le blesser , deve- XERXES.
 noit le sien propre par l'approbation
 qu'il lui donnoit. Nous l'avons vû
 traverser la flotte ennemie , non sans
 risque de sa vie , pour aller donner un
 avis salutaire à Thémistocle ; & ^a Plu-
 tarque observe que pendant tout le
 tems du commandement de ce der-
 nier , Aristide l'aïda en toute occasion
 de ses conseils & de son crédit, quoi-
 qu'il pût le regarder comme son rival,
 & même comme son ennemi. Qu'on
 compare cette noblesse & cette gran-
 deur d'ame avec la petitesse d'esprit
 & la bassesse de cœur de ces hommes
 pointilleux , délicats , & jaloux sur ce
 qui regarde le commandement ; in-
 compatibles avec leurs collègues ;
 uniquement attentifs à s'attirer la
 gloire de tout ; toujours prêts à sacri-
 fier les intérêts publics à leurs intérêts
 particuliers , & à laisser faire des fau-
 tes à leurs rivaux pour en tirer avan-
 tage.

LE JOUR même de l'action des *Herod. lib.*
7. cap. 165-
167.
 Thermopyles , la formidable armée
 des Carthaginois , composée de trois *Diod. lib. 11.*
pag. 16-22.

^a Πάντα συνέπραττε καὶ τὸν ἔχθιστον. *In vit. Arist.*
 συνέβηλιν, ἐνδοξότατον *pag. 323.*
 ἐπὶ σπονδρίᾳ καὶ ποταμῷ

Tome III.

M

XERXES. cens mille hommes, avoit été entièrement défaite par Gélon tyran de Syracuse. Hérodote place ce combat au jour que se donna celui de Salamine. J'en ai marqué les circonstances dans l'histoire des Carthaginois.

Tom. 2. pag.
254.

Hérod. lib. 8.

cap. 111. 112.

Plut. in

Thémist. pag.
122.

APRÈS la bataille de Salamine, les Grecs étant revenus de la poursuite des Perses, Thémistocle parcourut les îles qui avoient suivi leur parti, pour y faire des exactions, & pour en tirer de l'argent. Il commença par celle d'Andros, & demanda une somme considérable à ses habitants, leur aiant dit : *Je viens à vous accompagné de deux puissantes divinités, la Persuasion & la Force.* Ils répondirent : *Nous avons aussi de notre côté deux autres divinités ; qui ne sont pas moins puissantes que les vôtres, & qui ne nous permettent pas de donner l'argent que vous nous demandez, la Pauvreté & l'Impuissance.* Sur ce refus, il fit mine de les assiéger, & les menaça de ruiner entièrement leur ville. Il traita de la même sorte plusieurs autres îles, qui n'osèrent pas lui résister comme Andros, & il en tira de grosses sommes à l'incû des autres Capitaines : car il passoit pour aimer l'argent, & vouloir s'enrichir.

§. IX. *Bataille de Platée.*

XERXES.

MARDONIUS , qui étoit resté en Grèce avec un corps d'armée de trois cens mille hommes , fit passer l'hiver à ses troupes dans la Thessalie , & le printems suivant il les mena dans la Béotie. Il y avoit dans le pays un oracle fort célèbre , c'étoit celui de Lébadie , qu'il crut devoir consulter pour savoir quel seroit le succès de la guerre. Le Prêtre, dans l'enthousiasme dont il fut saisi , répondit en une langue que personne des assistans n'entendoit , comme pour insinuer que l'oracle ne daignoit pas s'expliquer à un Barbare. Il envoya dans le même tems Alexandre roi de Macédoine , avec plusieurs Seigneurs Persans à Athènes , & fit faire à ses habitans , de la part de son Maître , des offres très avantageuses , pour les détacher du reste des alliés. Il leur promettoit de rétablir entièrement leur ville qui avoit été brûlée , de leur fournir de grandes sommes d'argent , de leur permettre de vivre selon leurs loix , & de leur donner le commandement sur toute la Grèce. Alexandre les exhorta en son nom , & comme leur ancien

XERXES, ami, à profiter d'une occasion si favorable de rétablir leurs affaires, leur marquant qu'ils étoient hors d'état de tenir tête à une puissance aussi formidable que celle des Perses, & qui étoit tellement supérieure à celle des Grecs. Les Lacédémoniens, sur le premier bruit de cette ambassade, avoient aussi de leur côté envoyé des Députés à Athènes, pour en détourner l'effet. Ils assistoient à l'audience. Après qu'Alexandre se fut tû, ils prirent la parole en s'adressant aux Athéniens, les exhortèrent fortement à ne pas abandonner l'intérêt commun de la Grèce, & à ne se point séparer du corps des alliés, leur représentant que l'union, dans la conjoncture où se trouvoit la Grèce, faisoit toute leur force, & les rendroit invincibles. Ils ajoutèrent que la république de Sparte étoit fort sensible à la triste situation des Athéniens, qui étoient sans maisons & sans retraite, & dont les moissons avoient été ruinées deux années consécutives : qu'elle s'offroit à nourrir & à entretenir pendant tout le tems de la guerre leurs femmes, leurs enfans, leurs vieillards, & à pourvoir abondamment à tous leurs

bésoins. Ils finirent par ce qui regardoit Alexandre, dont ils dirent que le discours avoit été tel qu'on devoit l'attendre d'un tyran qui parloit en faveur d'un tyran : mais qu'il sembloit avoir oublié que le peuple auquel il s'adressoit, s'étoit montré en toute occasion le plus zélé défenseur de la liberté commune.

Aristide étoit pour lors en charge, c'est-à-dire le premier des Archontes. Il répondit qu'il pardonnoit aux Barbares, qui n'estimoient que l'or & l'argent, d'avoir espéré de pouvoir corrompre leur fidélité par de magnifiques promesses : mais qu'il ne pouvoit voir sans surprise & sans quelque forte d'indignation que les Lacédémoniens, n'envisageant que la pauvreté & la misère présente des Athéniens, & oubliant leur courage & leur grandeur d'ame, vinssent les exhorter à combattre généreusement pour le salut commun de la Grèce par la vûe de quelques récompenses & de quelques nourritures qu'ils leur offroient : Qu'ils déclarassent à leur République que tout l'or du monde n'étoit pas capable de tenter les Athéniens, ni de leur faire abandonner la

XERXES.

défense de la liberté commune: Qu'ils étoient sensibles, comme ils le devoient, aux offres obligeantes de Lacédémone; mais qu'ils feroient en sorte de n'être à charge à aucun de leurs alliés. Puis se tournant vers les Députés de Mardonius, & leur montrant de sa main le soleil: » Sachez, » leur dit-il, que tant que cet astre » continuera sa course, les Athéniens » seront mortels ennemis des Perses, » & qu'ils ne cesseront de venger sur » eux le ravage de leurs terres, & » l'incendie de leurs maisons & de » leurs temples. » Il pria le Roi de Macédoine, s'il vouloit être véritablement leur ami, de ne plus se rendre auprès d'eux le porteur de telles paroles, qui ne pouvoient que le deshonor, sans produire aucun fruit.

Aristide, ne se contenta pas d'une déclaration si forte & si précise. Pour inspirer encore plus d'horreur de semblables propositions, & pour interdire à jamais tout commerce avec les barbares par un motif de religion, il ordonna que les Prêtres maudissent & chargeassent d'anathèmes quiconque oseroit proposer de faire alliance avec les Perses, ou d'abandonner celle des Grecs.

Quand Mardonius eut appris par XERXES. la réponse des Athéniens, que ^a nul prix, nul avantage, ne pouvoit les porter à vendre leur liberté, il marcha avec toute son armée vers l'Attique, détruisant tout ce qu'il rencontroit dans son chemin. Les Athéniens, n'étant pas en état de résister à ce torrent, s'étoient retirés à Salamine, & avoient une seconde fois abandonné leur ville. Mardonius, ne perdant pas encore toute espérance d'accommodement avec eux, leur envoya un Député pour leur faire les mêmes propositions qu'auparavant. Un Athénien, nommé Lycidas, étant d'avis qu'on l'écoutât, fut lapidé sur le champ; & les femmes Athéniennes, courant en même tems à sa maison, lapidèrent aussi sa femme & ses enfans: tant la paix avec le Barbare paroissoit un crime détestable! On respecta néanmoins dans le Député le caractère dont il étoit revêtu, & on le renvoya sans lui faire aucun mauvais traitement. Mardonius connut alors qu'il n'y avoit point de paix à attendre. Il entra dans Athènes, brula

Herod. lib. 9. cap. 1-11. Plur. in Arist. p. 324. Dind lib. 11. pag 23.

^a Posteaquam nullo pretio libertatem his vi-

det venalem, &c. *Justin. lib. 2. cap. 14.*

XERXES. & démolit tout ce qui avoit échapé au faccagement de l'année précédente, & ne laissa rien sur pié.

Les Lacédémoniens, au lieu de conduire leurs troupes dans l'Attique comme ils s'y étoient engagés, songeoient à se renfermer dans le Péloponnése pour s'y défendre, & dans cette vûe avoient commencé à élever un mur sur l'Isthme pour en fermer l'entrée à l'ennemi, & par là ils comptoient qu'ils seroient en sûreté, & n'auroient plus besoin des Athéniens. Ceux-ci députèrent à Sparte, pour se plaindre de la lenteur & de la négligence de leurs alliés. Les Ephores ne parurent pas fort touchés de leurs remontrances; & comme ce jour étoit la fête * d'Hyacinthe, ils le passèrent en festins & en réjouissances, remettant leur réponse au lendemain. Et traînant l'affaire en longueur sous différens prétextes, ils gagnèrent dix jours, pendant lesquels la muraille

* Chez les Lacédémoniens, la fête d'Hyacinthe duroit trois jours. Le premier & le dernier étoient des jours de tristesse & de deuil pour la mort d'Hyacinthe, mais le second étoit un jour de réjouissance : il y avoit des festins, des jeux, des spectacles, & toutes sortes de divertissemens. Cette fête se célébroit toutes les années au mois d' Août, en l'honneur d'Apollon & d'Hyacinthe.

fut achevée. Ils étoient prêts de ren- **XER XES.**
 voier honteusement les Députés ,
 lorsqu'un particulier leur aiant repré-
 senté quelle indignité il y auroit à
 traiter ainsi les Athéniens après toutes
 les pertes volontaires qu'ils avoient
 souffertes si généreusement pour la
 défense commune de la liberté , &
 tous les services importans qu'ils
 avoient rendus à la Grèce , ils ouvri-
 rent les yeux , & eurent honte d'une
 si noire perfidie. La nuit même qui
 suivit , ils firent partir à l'insû des
 Athéniens , cinq mille Spartiates , qui
 avoient avec eux chacun sept Ilotes.
 Le lendemain matin , les Députés ré-
 nouvelant leurs plaintes avec beau-
 coup de vivacité , furent très surpris
 d'apprendre que le secours étoit en
 chemin , & s'approchoit de l'Attique.

Mardonius l'avoit quittée , pour
 reprendre le chemin de la Béotie. Il
 crut que ce pays étant ouvert & uni ,
 il lui convenoit mieux d'y combattre
 que dans l'Attique , pays rude & ra-
 boteux , plein de hauteurs & de défi-
 lés , qui par cette raison ne pourroit
 lui fournir de terrain propre à ranger
 en bataille sa nombreuse armée , ni
 donner lieu d'agir à sa cavalerie. Il

Herod. lib.
9. ca. 12. 76.
Plut. in
Arist. p. 325.
330.
Diod. l. IX.
pag. 24-26.

XERXES, campa à son retour sur la rivière d'Asope. Les Grecs l'y suivirent sous le commandement de Pausanias roi de Lacédémone, & d'Aristide Général des Athéniens. L'armée des Perses étoit, selon Hérodote, de trois cens mille hommes; ou, selon Diodore, de cinq cens mille. Celle des Grecs n'étoit que de soixante-six mille hommes. Il n'y avoit que cinq mille Spartiates: mais ils étoient accompagnés de trente cinq mille Ilotes, sept pour chaque Spartiate; ces derniers étoient des troupes armées à la légère: les Athéniens n'étoient qu'au nombre de huit mille. Tout le reste étoit des alliés. Les Spartiates commandoient l'aîle droite, & les Athéniens la gauche; honneur que les Tégéates leur disputèrent, mais inutilement.

*Plut. in
Aristid. pag.
3. 6.*

Pendant que la Grèce étoit en suspens dans l'attente d'une bataille qui alloit décider de son sort, un complot secret, formé au milieu du camp des Athéniens par quelques citoyens mécontents, qui songeoient à ruiner le gouvernement populaire, ou à livrer la Grèce aux Perses, jeta Aristide dans un grand embarras. Il eut besoin ici de toute sa prudence. Ne sachant pas au juste le

nombre de ceux qui pouvoient avoir XERXES.
 trempé dans cette conjuration , il se
 contenta d'en faire arrêter huit : &
 de ces huit , les deux seuls contre les-
 quels il fit faire des informations ,
 parcequ'ils étoient les plus chargés ,
 se sauvèrent du camp pendant qu'on
 faisoit leur procès ; Aristide sans dou-
 te favorisant leur fuite, de peur d'être
 obligé de les faire punir , & que leur
 punition ne causât quelque émeute.
 Pour les autres il les relâcha , leur
 laissant penser qu'on n'avoit rien
 trouvé contr'eux , & il leur dit que
 la bataille seroit le tribunal où ils
 pourroient se justifier pleinement ,
 & montrer qu'ils étoient bien éloi-
 gnés d'avoir songé à trahir leur pa-
 trie. Cette sage dissimulation , qui
 donnoit lieu au repentir , & qui évi-
 toit de pousser au desespoir les cou-
 pables , appaisa tout le mouvement.

Mardonius , pour tâter les Grecs ,
 envoya sa cavalerie escarmoucher
 contr'eux , en quoi il étoit le plus
 fort. Les Mégariens , qui étoient
 campés dans la plaine , en souffri-
 rent beaucoup ; & quelque vigoureu-
 se résistance qu'ils fissent , ils étoient
 prêts de plier, lorsqu'un détachement

XERXES.

de trois cens Athéniens, avec quelques gens de trait, s'avança pour les soutenir. Masistius, Général de la cavalerie des Perses, l'un des plus considérables seigneurs de la nation, les voyant venir à lui en bon ordre, tourna bride & poussa contre eux. Les Athéniens l'attendirent de pied ferme. Il y eut là un choc fort rude, les deux partis cherchant également à montrer par le succès de ce combat quel seroit celui de la bataille générale. La victoire fut longtemps disputée : mais enfin le cheval de Masistius aiant été blessé, jeta son maître par terre, qui fut tué sur le champ ; & aussitôt les Perses prirent la fuite. Quand on eut appris sa mort chez les barbares, la douleur fut extrême. Ils se coupèrent les cheveux, coupèrent les crins de leurs chevaux & de leurs mulets, & remplirent tout le camp de cris & de gémissemens, comme aiant perdu le plus brave homme de leur armée.

Après ce combat contre la cavalerie des Perses, les deux armées furent longtemps sans en venir aux mains, parceque les devins, sur l'inspection des entrailles des victimes, leur pré-

disoient également aux uns & aux XERXES. autres la victoire s'ils ne faisoient que se défendre, au lieu qu'ils les menaçoient également d'une défaite entière s'ils attaquoient.

Ils passèrent ainsi dix jours à se regarder. Mardonius, qui étoit d'un caractère vif & bouillant, souffroit avec peine un si long délai. D'ailleurs il ne lui restoit plus de vivres que pour peu de jours, & les Grecs se fortifioient de plus en plus par de nouvelles troupes qui leur arrivoient journellement; Il assembla donc son Conseil, pour délibérer si l'on donneroit la bataille. Artabaze, seigneur d'un rare mérite & d'une grande expérience, étoit d'avis qu'on ne hasardât point de bataille, mais qu'on se retirât sous les murs de Thèbes, où l'on auroit soin d'amasser des vivres & des fourages. Il représentoit que le seul délai étoit capable de ralentir beaucoup l'ardeur des alliés; qu'on travailleroit à en détacher plusieurs par l'or & l'argent qu'on répandroit parmi les Chefs, & parmi ceux qui avoient le plus de crédit dans chaque ville; & que par ce moyen ils pourroient plus facilement & plus sûrement se rendre.

XERXES. maîtres de la Grèce. Cet avis étoit fort sage , mais l'avis contraire l'emporta , parceque c'étoit celui de Mardonius , que personne n'osoit contredire. Il fut résolu qu'on donneroit la bataille le lendemain. Alexandre roi de Macédoine , qui étoit dans le cœur pour les Grecs , s'approcha secrètement de leur camp sur le minuit , & instruisit Aristide de tout ce qui s'étoit passé.

Aussitôt Pausanias donna ordre aux Officiers de se préparer au combat , & il communiqua à Aristide le dessein qu'il avoit formé de changer son ordre de bataille , en faisant passer les Athéniens de l'aîle gauche à l'aîle droite pour les opposer aux Perses , contre lesquels ils étoient accoutumés à combattre. Soit prudence , soit timidité qui lui eut fait proposer ce parti , les Athéniens l'acceptèrent avec joie. On n'entendoit parmi eux que des exhortations qu'ils se faisoient les uns aux autres de se montrer gens de cœur : que ni eux , ni leurs ennemis , n'étoient point changés depuis la bataille de Marathon , si ce n'est que la victoire avoit augmenté le courage des Athéniens , & abbatu ce-

lui des Perses. Nous ne combattons XERXES. pas , comme eux , disoient-ils , pour un pays & pour une ville seulement , mais pour les trophées érigés à Maráthou & à Salamine , afin qu'ils ne paroissent pas l'ouvrage de Miltiade & de la Fortune , mais l'ouvrage des Athéniens. En parlant ainsi , ils alloient gaiement changer de poste. Mais Mardonius , sur l'avis qu'il en eut , aiant pareillement changé son ordre de bataille , on remit les choses de part & d'autre dans leur premier état. Ainsi tout ce jour-là se passa sans rien faire.

Le soir on tint un Conseil parmi les Grecs , où il fut résolu qu'on décamperoit , & que l'on iroit chercher un lieu commode pour les eaux. La nuit étant venue , & les Capitaines commençant à s'avancer à la tête de leurs corps , vers le camp qu'on avoit marqué , il y eut beaucoup de confusion parmi les troupes , dont les unes alloient d'un côté , & les autres d'un autre , sans garder d'ordre dans leur marche. On s'arrêta près de la petite ville de Platée.

Au premier bruit du départ des Grecs , Mardonius mit toute son armée en bataille , & s'avança contre

XERXES. l'ennemi avec de grands cris & d'horribles heurlemens des barbares , qui pensoient marcher bien moins pour combattre , que pour dépouiller des fuiards ; & leur Général, se tenant sur de la victoire , insultoit fièrement à la timide & lâche prudence d'Artabaze , & à la fausse idée qu'il avoit conçue des Lacédémoniens , que l'on prétendoit ne prendre jamais la fuite devant l'ennemi ; & cependant on voioit ici le contraire. Il sentit bientôt que cette idée n'étoit pas fausse. Il tomba sur les Lacédémoniens qui étoient seuls , & séparés du corps de l'armée , au nombre de cinquante mille hommes , avec trois mille Tégéates. Le choc fut des plus rudes : de part & d'autre on montra un courage de lions , & les barbares connurent qu'ils avoient affaire à des soldats déterminés à vaincre ou à mourir. Les Athéniens , vers qui Pausanias avoit dépêché un Officier , s'étoient mis en marche pour l'aller secourir : mais les Grecs qui tenoient le parti des Perses , au nombre de cinquante mille hommes , vinrent à leur rencontre , & les empêchèrent de passer outre. Aristide, avec sa pe-

tite troupe , soutint de pié ferme leur attaque , & leur fit voir que le grand nombre ne peut rien contre le courage & la bravoure.

XERXES.

La bataille étant ainsi partagée en deux endroits , les Lacédémoniens furent les premiers qui rompirent les Perses , & les mirent en déroute. Mardonius leur Chef étant tombé mort d'une blessure qu'il reçut , toute l'armée prit la fuite , & les Grecs qui combattoient contre Aristide , en firent autant , dès qu'ils eurent appris la défaite des barbares. Ceux-ci s'étoient refugiés dans leur premier camp , & s'y étoient enfermés d'une enceinte de bois. Les Lacédémoniens les y avoient poursuivis , & ils attaquoient le retranchement , mais avec foiblesse & nonchalance , comme des gens peu accoutumés à faire des sièges , & à forcer des murailles. Les Athéniens , qui en eurent avis , cessant de poursuivre les Grecs , marchèrent vers le camp , l'emportèrent après plusieurs assauts , & firent un grand carnage.

Artabaze , qui avoit prévu ce malheur sur la mauvaise manœuvre qu'il voioit faire à Mardonius , après avoir

XERXES. donné dans le combat toutes les marques possibles de courage & d'intrépidité, se sauva de bonne heure avec quarante mille hommes qu'il commandoit, & prévenant par sa prompte marche le bruit de sa défaite, arriva en sûreté à Byzance, & passa de là en Asie : de tout le reste de l'armée il n'y en eut pas quatre mille qui échappèrent au carnage de cette journée : tous furent tués & taillés en pièces par les Grecs, qui se délivrèrent par là une bonne fois des invasions de ces peuples, aucune armée Persane ne s'étant plus fait voir depuis ce tems-là en deçà de l'Hellespont.

AN. M. 3525. Cette bataille fut donnée le quatre
Av. J. C. 479. du mois * Boédromion, selon la ma-
** Ce jour se* nière de compter des Athéniens. Aussi-
pond au 19. de tôt après, les Alliés, pour marquer
notre mois de leur reconnoissance, firent faire à frais
Septembre. communs une statue de Jupiter, qu'ils
Pausan. lib. posèrent dans son temple d'Olym-
5. pag. 332. pie. Les noms de tous les peuples de la
 Grèce qui s'étoient trouvés au combat, étoient gravés sur le côté droit du piédestal de la statue, les Lacédémoniens à la tête, les Athéniens après eux, & tous les autres de suite.

Hered. lib. Un des premiers citoyens d'Egine
9. c. 77. 78.

vint trouver Pausanias, & l'exhorta XERXES.
à venger l'affront que Mardonius &
Xerxès avoient fait à Léonide, dont
le corps mort avoit été attaché par
leur ordre à une potence, & le pressa
de traiter de la même sorte le corps
de Mardonius. Pour l'y porter plus
fortement, il ajoutoit que satisfaire
ainsi aux mânes de ceux qui avoient
été tués aux Thermopyles, c'étoit un
moien sûr d'immortaliser son nom
parmi tous les Grecs, & pendant la
durée de tous les siècles. » Portez
ailleurs vos lâches conseils, lui ré-
pliqua Pausanias. Il faut que vous
vous entendiez bien mal en vraie
gloire, de penser que j'en doive
beaucoup acquérir en me rendant
semblable aux barbares. S'il faut
agir ainsi pour plaire à ceux d'Egi-
ne, j'aime mieux me conserver l'e-
stime des Lacédémoniens, chez qui
l'on ne met point en comparaison
le bas & indigne plaisir de la ven-
geance, avec celui de montrer de
la clémence & de la modération à
l'égard de nos ennemis, & sur tout
après leur mort. Pour ce qui regar-
de les mânes des Spartiates, ils sont
suffisamment vengés par la mort

XERXES. » de tant de milliers de Perses qui
» sont demeurés sur la place dans le
» dernier combat. /

*Plat. in
Arist. p. 331.*

Une contestation qui s'éleva entre les Athéniens & les Lacédémoniens, pour savoir auquel des deux peuples on assigneroit le prix de la valeur, & lequel poseroit un trophée, pensa souiller la gloire & troubler la joie de la victoire qu'on venoit de remporter. Ils alloient décider ce différent par les armes, & se porter aux dernières extrémités, si Aristide, par ses bonnes raisons, ne leur eût persuadé de remettre au jugement des Grecs la décision de cette affaire. La proposition fut acceptée. Les Grecs étant donc assemblés dans ce lieu-là même pour juger ce différent, Théogiton de Mégare dit dans son avis, qu'il ne falloit ajuger ce prix de la valeur ni à Athènes, ni à Sparte, mais à une troisième ville, s'ils ne vouloient allumer une guerre civile, plus funeste que la guerre qu'ils venoient de terminer. Après lui Cléocrite de Corinthe s'étant levé pour parler, personne ne douta qu'il n'allât demander cet honneur pour sa patrie; car Corinthe étoit la première ville

de la Grèce en puissance & en dignité **XERXES.**
après celles d'Athènes & de Sparte. —

Mais on fut agréablement trompé, quand on vit que son discours étoit tout entier à la louange des Platéens, & qu'il conclut que, pour éteindre cette contention si dangereuse, il fa- loit leur décerner à eux seuls ce prix, dont ni les uns ni les autres des con- tendans ne pourroient être jaloux ni fâchés. Ce discours fut reçu de tou- te l'assemblée avec applaudissement. Aristide se rangea le premier à cet avis pour les Athéniens, & après lui Pausanias pour les Lacédémoniens.

Etant ainsi tous d'accord, avant que de partager le butin, ils mirent à part quatre-vingts talens pour les Platéens, qui les emploierent à bâtir un temple à Minerve, à lui élever une statue, & à enrichir ce temple de beaux ta- bleaux, qui duroient encore du tems de Plutarque, c'est-à-dire plus de six cens ans après, & qui étoient aussi frais que s'ils fussent sortis des mains du peintre. Pour ce qui est du tro- phée, les Lacédémoniens en érigèrent un en leur particulier, & les Athé- niens un autre.

Le butin fut immense. On trouva

*Herod. lib.
9. c. 79-80.*

*Quatre-
vingts mille
éus.*

XERXES. dans le camp de Mardonius des sommes infinies d'or & d'argent monnoies ; des coupes , des vases , des lits , des tables , des colliers , des bracelets d'or & d'argent sans nombre & sans prix. Un ^a historien remarque que ces dépouilles devinrent funestes à la Grèce , & commencèrent à y jeter l'amour des richesses , & le goût du luxe. On commença , selon la religieuse coutume des Grecs , par mettre à part la dixme de tout le butin pour les dieux : le reste fut partagé également entre les villes & les peuples qui avoient fourni des troupes ; & les Chefs qui s'étoient distingués dans le combat , le furent aussi dans cette distribution. On envoya un trépié d'or à Delphes. Pausanias avoit marqué dans l'inscription , *Qu'il avoit défait les barbares à Platée , & qu'en reconnoissance de cette victoire il avoit fait ce présent à Apollon.* Cette inscription fastueuse , où il s'attribuoit à lui seul & la victoire & l'offrande , blessa les Lacédémoniens ; & pour punir son orgueil par l'endroit même

*Cornel. Nep.
in Pausan. c.
2.*

^a Victo Mardonio ,
castra referta regalis opul-
lentiae capta ; unde primi-
mum Græcos , diviso in-
ter se antro Persico , divi-
tiarum luxuria cepit *Just.
tin. lib. 2. cap. 14.*

par lequel il prétendoit s'élever, & XERXES.
 pour rendre en même tems justice aux
 alliés, ils firent effacer son nom, &
 mirent à sa place celui des villes qui
 avoient contribué à la victoire. Un
 desir de gloire trop ardent lui laissoit
 ignorer qu'on ne perd rien par une
 sage modestie qui évite de faire trop
 valoir les services, & qu'en mettant
 à couvert de l'envie, elle ne sert
 qu'à augmenter la réputation.

Pausanias avoit fait paroître da- *Herod. lib.*
9. cap. 81.
 vantage l'esprit & le goût Spartain
 dans un double repas qu'il fit pré-
 parer peu de jours après le combat,
 l'un superbe & magnifique, où l'on
 avoit étalé tout ce qui servoit à parer
 la table de Mardonius; l'autre simple
 & frugal, à la manière des Spartia-
 tes. Puis, les comparant ensemble,
 & en faisant remarquer la différen-
 ce à ses Officiers qu'il avoit mandés
 exprès: « Quelle folie, leur dit-il,
 à Mardonius accoutumé à de tels
 repas, de venir attaquer des gens
 qui savent, comme nous, se passer
 de tout. »

Les Grecs envoièrent en commun *Plat. in*
Ar. R. p. 331.
322.
 à Delphes consulter l'oracle sur le sa-

a Ipsa dissimulatione famæ famam auxit. Tacit.

XERXES. crifice qu'ils devoient faire. Le dieu
leur répondit, Qu'ils élevassent un
autel à Jupiter libérateur, mais qu'ils
se gardassent bien d'y offrir aucun
sacrifice avant que d'avoir éteint tout
le feu qui étoit dans le pays, parce-
qu'il avoit été pollué & profané par
les barbares, & qu'ils vinssent pren-
dre à Delphes même un feu pur sur
l'autel appelé l'autel commun.

Cet oracle aiant été rapporté aux
Grecs, les Généraux allèrent d'abord
dans tout le pays, & firent éteindre
tous le feux; & Euchidas de la ville
de Platée, s'étant chargé d'apporter
avec toute la diligence possible le feu
du dieu, alla à Delphes. Il se purifia
d'abord, s'aspergea d'eau sacrée, se
couronna de laurier, s'approcha de
l'autel, y prit avec révérence le feu
sacré, & reprit le chemin de Platée,
où il arriva avant le coucher du So-
leil, aiant fait ce jour-là mille stades,
(cinquante lieues.) En arrivant il
salua ses concitoyens, leur remit le
feu, tomba à leurs piés, & un mo-
ment après il rendit l'esprit. Les Pla-
téens l'emportèrent, & l'enterrèrent
dans le temple de Diane surnommée
Eucleia, (de la bonne renommée) & mi-
rent

rent sur son tombeau cette épitaphe XERXES.
 en un seul vers : *Ci git Euehidax , qui*
fit une course à Delphes , & revint ici
le même jour.

Dans la première assemblée générale de la Grèce , qui se tint quelque tems après , Aristide proposa ce Décret , Que chaque année toutes les villes de Grèce enveroient à Platée leurs députés , pour faire des sacrifices à Jupiter Libérateur & aux dieux de la ville , (cette assemblée se tenoit encore régulièrement du tems de Plutarque ;) que de cinq ans en cinq ans ou y célébreroit des jeux , qu'on appelleroit les jeux de la liberté ; qu'on leveroit par toute la Grèce dix mille hommes de pié , & mille chevaux ; qu'on équiperait une flotte de cent vaisseaux , qui seroient entretenus pour faire la guerre aux barbares ; & que les Platéens , dévoués uniquement au service de dieu , seroient regardés comme sacrés & inviolables , n'ayant d'autre fonction que d'offrir des prières & des sacrifices pour le salut des Grecs.

Tous ces articles étant approuvés & passés , les Platéens se chargèrent de faire tous les ans l'anniversaire

XERXES. de ceux qui avoient été tués à cette bataille : & voici l'ordre & la manière de ce sacrifice. Le * seizième jour du mois de Maimactérion, (qui répond à notre mois de Décembre) on fait à la pointe du jour une procession , précédée par un Trompette qui sonne la charge. Après ce Trompette marchent plusieurs chariots , pleins de couronnes & de branches du myrte. Ces chariots sont suivis d'un taureau noir : après le taureau marchent de jeunes gens , qui portent des cruches pleines de vin & de lait , effusions ordinaires qu'on fait aux morts, & des phioles d'huile & d'essence. Tous ces jeunes gens sont de condition libre , car il n'est permis à aucun esclave de se mêler dans cette cérémonie , qu'on fait pour des hommes qui sont morts pour la liberté. Enfin cette pompe est fermée par l'Archonte , ou le premier Magistrat des Platéens , à qui , en tout autre tems , il est défendu de toucher seulement le fer , & de porter d'autre vêtement qu'un vêtement blanc. Mais , ce jour-

* Trois mois après celui où la bataille de Platée s'étoit donnée. Apparemment qu'on ne fit ces funérailles pour la première fois , qu'après que les ennemis furent entièrement retirés , & que le pays fut libre.

là , revêtu d'une robe de pourpre , **XERXES.**
 ceint d'une épée , & tenant dans ses
 mains une urne qu'il a prise dans le
 Greffe public , il s'avance au travers
 de la ville vers le lieu où sont les
 tombeaux. Dès qu'il y est arrivé , il
 puise de l'eau avec son urne dans la
 fontaine , lave lui-même les petites
 colonnes qui sont à ces tombeaux ,
 les frotte d'essence , & égorge ensuite
 le taureau sur un bucher qu'on a pré-
 paré. Après avoir fait des prières à
 * Jupiter & à Mercure terrestres , il
 invite ces vaillans hommes à ce festin
 funébre & à ces effusions mortuaires ,
 & remplissant de vin une coupe , il la
 verse , & dit à haute voix : *Je présente
 cette coupe à ces vaillans hommes , qui
 sont morts pour la liberté des Grecs.*
 Voila les cérémonies qui s'obser-
 voient encore du tems de Plutarque.

Diodore ajoute que les Athéniens Lib. II. p.
26.
 en particulier décorèrent avec ma-
 gnificence les tombeaux de ceux qui
 étoient morts dans la guerre contre
 les Perses , instituèrent en leur hon-
 neur des jeux funébres , & établirent

* Jupiter terrestre n'est | restre , à cause de son em-
 autre que Pluton : & Mer- | ploi de conduire les ombres
 cure étoit aussi appelé tex- | dans les enfers.

XERXES. un panégyrique solennel qui se répéteroit apparemment tous les ans,

On sent assez, sans que je sois obligé de le faire remarquer, combien ces témoignages solennels & perpétuels d'honneur, d'estime, de reconnaissance envers ces soldats morts pour la défense de la liberté, contribuoient à relever le mérite de la valeur & des services rendus à la patrie, & à inspirer du courage aux spectateurs; & combien tout cela étoit propre à perpétuer la bravoure dans un peuple, & à former des troupes invincibles.

On n'aura pas été moins frappé sans doute de l'attention merveilleuse de ces peuples à s'acquitter en tout des devoirs de religion. L'événement que je viens de rapporter, c'est - à-dire la bataille de Platée, en fournit des preuves bien éclatantes, dans le sacrifice annuel & perpétuel à Jupiter Libérateur; qui continuoît encore du tems de Plutarque; dans le soin de consacrer aux dieux la dixme de tout le butin; dans le décret proposé par Aristide d'établir à perpétuité tous les ans une fête solennelle. Il est beau, ce me semble, de voir des peu-

ples idolâtres protester ainsi publiquement qu'ils attendent tout de la divinité ; qu'il se croient obligés de lui rapporter tout ; qu'ils la regardent comme la source des succès & des victoires , comme l'arbitre souverain des Etats & des Empires ; comme donnant les conseils salutaires , & inspirant la prudence & le courage ; comme digne , par tous ces titres , d'avoir la première part au butin , & méritant une reconnaissance éternelle pour des bienfaits si importans.

XERXES.

§. X. *Combat près de Mycale. Défaite des Perses.*

LE MEME jour que les Grecs combattirent à Platée , leur armée navale remporta en Asie une mémorable victoire sur les restes de la flotte des Perses. Car pendant que celle des Grecs étoit à Egine sous le commandement de Léotychide roi de Lacédémone , & de Xanthippe l'Athénien , il leur vint des ambassadeurs de la part des Ioniens pour les inviter à venir en Asie délivrer les villes Grecques de la servitude des barbares. Sur cet avis , ils firent voile pour l'Asie , & prirent leur route par Dé-

Hérod. lib.

9. c. 89-105.

Diod. l. 214

pag. 262287

XERXES. los. Pendant qu'ils y étoient, d'autres ambassadeurs vinrent de Samos les y trouver, & leur apprirent que la flotte des Perses qui avoit passé l'hiver à Cumes, étoit alors à Samos, & pouvoit y être facilement défaire & détruite, les priant instamment de ne point négliger une occasion si favorable. Les Grecs firent donc voile vers Samos. Mais les Perses, aiant eu avis de leur approche, se retirèrent à Mycale promontoire du continent d'Asie, où campoit leur armée de terre, forte de cent mille hommes, qui étoit le reste de ceux que Xerxès avoit raménés de Grèce l'année précédente. Ils tirèrent là leurs vaisseaux à terre, ce qui étoit ordinaire aux anciens, & les environnèrent d'un fort rempart. Les Grecs les aiant suivis jusques-là, défirent, par le secours des Ioniens, leur armée de terre, forcèrent leur rempart, & brûlèrent tous leurs vaisseaux.

La bataille de Platée fut donnée le matin, & celle de Mycale l'après-midi du même jour. Cependant tous les Ecrivains Grecs rapportent qu'on apprit à Mycale la victoire de Platée avant le commencement du combat,

quoi qu'il y eût entre-deux toute la mer Egée, qu'on ne pouvoit traverser qu'en plusieurs jours de navigation. Mais Diodore de Sicile nous explique ce mystère. Il nous apprend que Léotychide remarquant que ses soldats étoient fort troublés par la crainte que leurs compatriotes ne succombassent à Platée sous la nombreuse armée de Mardonius, imagina un stratagème pour relever leur courage ; & que sur le point qu'il devoit donner le premier assaut, il * fit répandre le bruit parmi ses troupes que les Perses avoient été défaits, quoi qu'il n'en eût aucune connoissance.

Xerxès aiant appris ces deux grandes défaites, abandonna Sardes avec la même précipitation qu'il avoit fait Athènes après la bataille de Salamine, & se retira précipitamment en Perse, pour se mettre le plus loin qu'il étoit possible hors de la portée de ses ennemis victorieux. Mais avant que de partir, il donna ordre de brûler & de démolir tous les temples

XERXES.

Diod. l. 11.

pag. 28.

Strab. l. 14.

pag. 634.

* Ce qu'on dit aussi de la victoire de Paul Emile sur les Macédoniens, qui fut suë à Rome le jour même qu'elle avoit été gagnée, arriva sans doute de la même sorte. Plut in Paul. Æmil pag. 268. & Liv. lib. 45. n. 3.

XERXES. des villes Grecques d'Asie : ce qui fut
exécuté , n'y aiant eu d'épargné que
le temple de Diane à Ephèse. Il en
Cic. lib. 2.
de leg. n. 29. usa ainsi à l'instigation des Mages, en-
nemis déclarés des temples & des si-
mulacres. Le second Zoroastre l'avoit
instruit à fond de leur religion, & l'en
Plin. lib. 30.
cap. 3. avoit rendu un ardent défenseur. Pline
nous apprend qu'Ostane , le Chef des
Mages, & le Patriarche de cette secte,
qui en soutenoit les maximes & les
intérêts jusqu'à la fureur , accompa-
gna Xerxès dans son expédition con-
tre la Grèce. Ce Prince, passant par
Arrian. lib.
7. Babylone dans son retour à Suse , y
détruisit aussi tous les temples ,
comme il avoit fait dans la Grèce &
dans l'Asie Mineure , par le même
principe sans doute , & en haine de la
secte des Sabéens , qui adoroient Dieu
par des images , culte que les Mages
détestoient souverainement. Peut-être
aussi que le desir de se dédommager
des frais que lui avoit coûté son ex-
pédition contre la Grèce le porta à
piller & à détruire ces temples , pour
profiter de leurs dépouilles : car il y
trouva des richesses immenses , que
la superstition des peuples & des
Princes y avoit amassées pendant une
longue suite de siècles.

La flotte Grecque , après la bataille de Mycale, fit voile vers l'Hellespont, pour se saisir des ponts que Xerxès avoit fait jetter sur ce détroit , les croiant encore dans leur entier. Mais les aiant trouvé rompus par la tem-
pête , Léotychide , & ceux du Pélo-
ponnèse , reprirent le chemin de leur pays. Pour Xanthippe , il resta avec les Athéniens & les confédérés d'Io-
nie , & ils se rendirent maîtres de Seste & de la Chersonnèse de Thrace, où ils firent un grand butin & un grand nombre de prisonniers. Après quoi , aux approches de l'hiver , ils retournèrent chacun dans leurs villes.

*Herod. lib.
9. c. 113-120.*

Depuis ce tems-là toutes les villes d'Ionie se révoltèrent contre les Per-
ses ; & étant entrés en confédération avec les Grecs , elles conservèrent la plupart leur liberté pendant tout le tems que cet empire subsista.

§. XI. *Inhumaine & barbare vengeance
d'Améstris , femme de Xerxès.*

PENDANT que Xerxès étoit à Sar-
des , il y avoit conçu une violente
passion pour la femme de Masiste son
frere , Prince d'un rare mérite , qui
l'avoit toujours servi avec zèle , & ne

*AN. M. 3525.
AV. J. C. 479.
Herod. lib.
9. c. 107, 112.*

XERXES. lui avoit jamais donné aucun sujet de mécontentement. La vertu de cette Dame, sa fidélité & sa tendresse pour son mari, l'avoient rendu inébranlable à toutes les sollicitations du Roi. Il espéra la pouvoir gagner en la comblant de bienfaits ; & entre autres graces qu'il lui accorda, il fit épouser à Darius son fils aîné, qu'il destinoit pour son successeur, Artainte fille de cette Princesse, & dès qu'il fut arrivé à Suse, il voulut que le mariage fût consommé. Mais Xerxès, malgré toutes ces avances, ne la trouvant pas moins inaccessible à ses attaques, changea tout-à-coup d'objet, & devint passionné à l'excès pour la fille, qui n'imita pas la sage & vertueuse fermeté de sa mere. Pendant toutes ces intrigues, Amestris, femme de Xerxès, lui fit présent d'une riche & magnifique robe qu'elle avoit faite elle-même. Xerxès trouvant cette robe fort à son gré, la prit la première fois qu'il rendit visite à Artainte. Dans la conversation il la pressa de marquer ce qu'elle désiroit de lui, avec promesse, & même serment, de lui accorder tout ce qu'elle voudroit. Artainte lui demanda la robe qu'il

portoit. Xerxès , qui prévoioit les **XERXES.** malheurs que ce présent entraîneroit après soi , fit tout ce qu'il put pour en détourner l'effet , offrant toute autre chose en la place. Mais ne pouvant la persuader , & se croiant lié par l'engagement imprudent de sa promesse & de son serment , il lui donna sa robe. Cette femme ne l'eut pas plutôt reçue , qu'elle la porta publiquement par manière de trophée.

Cette action aiant confirmé Amestris dans ses soupçons , elle en fut irritée au dernier point. Mais , au lieu de porter sa vengeance sur la fille qui étoit la seule coupable , elle résolut de la faire tomber sur la mere , à qui elle attribuoit toute cette intrigue , quoiqu'elle en fût entièrement innocente. Elle attendit le tems de la grande Fête , qui se célébroit tous les ans le jour de la naissance du Roi , & qui n'étoit pas loin ; dans laquelle le Roi , selon la coutume établie , devoit lui accorder tout ce qu'elle demanderoit. Le jour donc étant venu , elle lui demanda que la femme de Mafiste lui fût livrée. Xerxès , qui comprit le dessein de la Reine , & qui en frémit d'horreur , tant par consi-

XERXES.

dération pour son frere, qu'à cause de l'innocence de cette Dame, contre laquelle il voioit que sa femme étoit violemment irritée, lui refusa d'abord sa demande, & fit tout ce qu'il put pour l'en détourner. Mais n'ayant pu ni la gagner, ni prendre sur soi d'agir avec fermeté, il céda par une complaisance également foible & cruelle, préférant aux devoirs inviolables de la justice & de l'humanité, les droits arbitraires d'une coutume, établie uniquement pour donner lieu à la libéralité & à la bonté.

Cette Dame fut donc saisie par les gardes du Roi, & livrée à Amestris, qui lui fit couper les mammelles, la langue, le nez, les oreilles, & les lèvres; les fit jetter aux chiens en sa présence; & la renvoia ainsi mutilée en la maison de son mari. Cependant Xerxès l'avoit mandé, pour le préparer à cette triste nouvelle. Il lui témoigna qu'il desiroit qu'il se séparât de sa femme, & qu'il lui donneroit en la place une de ses filles en mariage. Masiste, qui avoit un attachement extrême pour sa femme, ne put se résoudre à l'abandonner: ce qui fit que Xerxès lui dit tout en co-

DES PERSES ET DES GRECS. 301
lère , que puisqu'il refusoit sa fille , il **XERXES.**
n'auroit ni elle ni sa femme , & qu'il
apprendroit à ne pas rejeter les of-
fres de son maître : & il le renvoia
avec cette inhumaine réponse.

Un tel procédé aiant jetté Masiste
dans un grand trouble , & lui faisant
tout craindre , il se hâta de retourner
chez lui , pour voir ce qui s'y passoit.
Il y trouva sa femme dans le déplo-
rable état que nous venons de mar-
quer. En étant irrité au point que l'on
peut s'imaginer , il assembla toute sa
famille , les domestiques , & tous
ceux qui étoient dans sa dépendance ;
& fit toute la diligence possible pour
gagner la Bactriane dont il étoit
Gouverneur , résolu , dès qu'il y se-
roit arrivé , de lever une armée , & de
faire la guerre au Roi , pour se ven-
ger de ce traitement babare. Mais
Xerxès , informé de son départ préci-
pité , & soupçonnant par là ce qu'il
avoit dessein de faire , le fit suivre par
un parti de cavalerie , qui l'aïant at-
teint le mit en pièces avec ses enfans ,
& tous ceux qui étoient avec lui. Je
ne sai si l'histoire fournit un exemple
plus tragique de vengeance que celui
que je viens de rapporter.

XERXES. On rapporte d'Amestris une autre action, non moins cruelle ni moins impie. Elle fit brûler vifs quatorze enfans des meilleures maisons de Perse, en sacrifice aux dieux infernaux; pour obéir à une coutume superstitieuse usitée chez les Perses.

*Herod. lib.
7. cap. 114.*

*Diod. l. 11.
pag. 53.* Masiste étant mort, Xerxès donna le gouvernement de la Bactriane à Hytaspes son second fils, qui se trouvant par là obligé de vivre loin de la Cour, fournit à Artaxerxe, son plus jeune frère, l'occasion de monter à son préjudice sur le trône après la mort de leur père, comme on le verra ci-après. Ici finit l'histoire d'Hérodote, c'est-à-dire à la bataille de Mycale, & au siège de la ville de Seste par les Athéniens.

§. XII. *Les Athéniens rétablissent les murs de leur ville malgré l'opposition des Lacédémoniens.*

LA GUERRE, appelée vulgairement la guerre de Médie, qui n'avoit duré que deux ans, aiant été terminée comme on l'a vû, les Athéniens de retour dans leur patrie y firent revenir leurs femmes & leurs enfans qu'ils avoient mis en dépôt ailleurs pendant

*AN. M. 3526.
AV. J. C. 478.
Thucyd. lib.
1. pag. 59-62.
Diod. lib. 11.
pag. 30. 31.
Justin. lib.
2. cap. 15.*

la guerre , & ils songèrent à rétablir **XERXES.**
leur ville qui avoit été presque entièrement détruite par les Perses , & à l'environner de bonnes murailles pour la mettre hors d'insulte. Les Lacédémoniens en aiant eu avis , entrèrent en jalousie , & commencèrent à craindre , qu'Athènes , déjà trop puissante sur mer , venant à se fortifier de jour en jour , n'entreprît de leur faire la loi , & de leur enlever l'autorité & la prééminence qu'ils avoient toujours eue jusques-là dans la Grèce. Ils députent donc vers les Athéniens , pour leur représenter que l'intérêt commun de la Grèce demandoit qu'on ne laissât hors du Péloponnèse aucune ville fortifiée , de peur , qu'en cas d'une seconde irruption , elle ne servît de place d'armes aux Perses , qui ne manqueroient pas de s'y établir , comme ils avoient fait auparavant à Thèbe , & qui de là infesteroient tout le pays , & s'en rendroient bientôt maîtres. Thémistocle , qui depuis la bataille de Salamine avoit un grand crédit à Athènes , pénétra sans peine dans le véritable dessein des Lacédémoniens , caché sous le faux prétexte du bien public : mais , comme ils

XERXES. étoient en état, en se joignant aux alliés, d'empêcher par la force l'ouvrage commencé, si on leur donnoit une réponse absolue & négative, il conseilla au Sénat d'user de ruse aussi bien qu'eux. La réponse fut donc qu'on enverroient des Députés à Lacédémone, pour satisfaire la République sur les craintes & les soupçons qu'elle avoit. Il se fit nommer parmi les Députés, & avertit le Sénat de ne pas faire partir ses Collègues avec lui, ni tous ensemble, afin de gagner du tems, & d'avancer l'ouvrage. La chose fut ainsi exécutée. Il arriva le premier à Lacédémone, mais laissa passer plusieurs jours sans rendre visite aux Magistrats, & sans se transporter au Sénat. Et sur ce qu'on le pressoit de le faire, & qu'on lui demandoit les raisons d'un si long délai, il répondit qu'il attendoit que tous ses Collègues fussent arrivés, pour se rendre conjointement avec eux dans le Sénat, & témoigna beaucoup de surprise de ce qu'ils étoient si lontems à venir. Ils arrivoient successivement les uns après les autres. Pendant tout ce tems-là on pressoit extrêmement l'ouvrage à Athènes. Les femmes,

les enfans, les étrangers, les esclaves, XERXES, tous en un mot étoient occupés à ce travail, & l'on ne se donnoit de repos ni jour ni nuit. On ne l'ignoroit pas à Lacédémone, & l'on en fit de grandes plaintes à Thémistocle, qui nia absolument le fait, & pressa les Lacédémoniens d'envoyer à Athènes de nouveaux Députés pour s'assurer par eux-mêmes de ce qui en étoit, & de ne point s'arrêter à des bruits vagues & confus, qui étoient sans fondement. Il fit donner avis sous main à Athènes d'y retenir les Députés jusqu'à leur retour comme autant d'otages, craignant avec sujet qu'on ne l'arrêtât lui & ses Collègues à Lacédémone. Pour lors, quand tous ses Collègues furent arrivés, il demanda audience, & déclara en plein Sénat qu'il étoit vrai que les Athéniens avoient résolu d'envirer & de fortifier leur ville de bonnes murailles, que l'ouvrage étoit presque fini, qu'ils l'avoient jugé d'une nécessité absolue & pour leur propre sûreté, & pour le bien commun des alliés, qu'après tout ce qui s'étoit passé on ne pouvoit pas les soupçonner de manquer de zèle pour l'intérêt commun; mais que la con-

XERXES.

dition de tous les alliés devant être égale , il étoit juste que les Athéniens pussent , comme tous les autres , pourvoir à leur propre sûreté par tous les moyens qu'ils jugeroient nécessaires ; qu'ils l'avoient fait , & qu'ils étoient en état de défendre leur ville contre quiconque oseroit l'attaquer :^a qu'au reste les Lacédémoniens avoient fort mauvaise grace de vouloir établir leur pouvoir non sur leurs propres forces & leur courage , mais sur la foiblesse de leurs alliés. Ce discours déplut beaucoup aux Lacédémoniens : mais , soit par un sentiment d'estime & de reconnoissance pour les Athéniens qui avoient rendu de si grands services à la patrie , soit par impuissance de s'opposer à leur entreprise , ils dissimulèrent , & les Députés , renvoies de part & d'autre avec honneur , retournèrent dans leur ville.

*Thucyd. pag.
62. 63.*

Diod. lib.

11. v. 32. 33.

Thémistocle , toujours attentif à augmenter la puissance & la gloire de la République , ne s'en tint pas aux murs de la ville : il s'appliqua avec la même ardeur à achever de bâtir & de

^a Graviter castigat eos, | potentiam quærent. quod , non virtute , sed | *Justin. lib. 2. cap. 15.* imbecillitate sociorum ,

fortifier le Pirée , car dès le tems qu'il **XERXES.**
 entra en charge , il avoit commencé
 ce grand ouvrage. Avant lui , Phalère *Pausan. lib.*
 étoit l'unique port d'Athènes , peu *1. pag. 1.*
 spacieux & peu commode , & qui ne
 convenoit point aux grands desseins
 qu'avoit Thémistocle. Il tourna donc
 ses vûes du côté du Pirée , qui sem-
 bloit l'inviter par sa situation avan-
 tageuse , & par la commodité de ses
 trois grands ports , où il pouvoit te-
 nir plus de quatre cens vaisseaux. On
 y travailla avec un empressement &
 une vivacité qui avança l'ouvrage
 considérablement en assez peu de
 tems. Thémistocle fit ordonner aussi
 que tous les ans on bâtiroit vingt
 vaisseaux pour augmenter la flotte ; &
 afin d'attirer un grand nombre d'ou-
 vriers & de matelots dans la ville , il
 leur fit accorder des immunités par-
 ticulières. Son dessein étoit , comme
 je l'ai déjà remarqué ailleurs , de tour-
 ner toutes les forces d'Athènes du
 côté de la mer ; en quoi il suivit une
 politique toute contraire à celle des
 anciens rois d'Athènes , qui ne cher-
 chant qu'à éloigner de la marine & de
 la guerre leurs citoyens , & à les em-
 ployer uniquement à la culture de la

XERXES. terre, & à la paix, publièrent cette fable : Que Minerve, plaidant un jour contre Neptune pour savoir qui d'elle ou de lui seroit déclaré patron de l'Attique, & donneroit son nom à la ville nouvellement bâtie, gagna sa cause en montrant à ses Juges le rameau d'olivier qu'elle avoit planté, heureux symbole de la paix & de l'abondance, au lieu que Neptune avoit fait sortir de la terre un cheval fougueux, image du trouble & de la guerre.

§. XIII. *Noir dessein de Thémistocle ; rejeté d'un commun accord par le peuple d'Athènes. Condescendence d'Aristide pour ce peuple.*

Plut. in Themist. pag. 121. 122. In Arist. p. 331. **THEMISTOCLE**, qui avoit formé en lui-même le dessein de supplanter les Lacédémoniens, & de substituer les Athéniens à leur place dans le gouvernement de la Grèce, ne perdoit point de vue ce grand projet. Peu délicat sur le choix des moïens, il trouvoit bonne & légitime toute voie qui pouvoit le conduire à ce but. Un jour donc il déclara en pleine assemblée qu'il avoit conçu un dessein important, mais qu'il ne pouvoit le com-

muniquer au peuple, parce que pour le faire réussir il avoit besoin d'un profond secret; & il demanda qu'on lui nommât quelqu'un avec qui il pût s'en expliquer. Tous nommèrent Aristide, & s'en rapportèrent entièrement à son avis, tant ils comptoient sur sa probité & sur sa prudence. Thémistocle l'ayant tiré à part, lui dit qu'il songeoit à bruler la flotte des Grecs qui étoit dans un port voisin; & que par là Athènes deviendrait certainement maîtresse de toute la Grèce. Aristide retourna à l'assemblée, & déclara simplement que rien ne pouvoit être plus utile que le projet de Thémistocle, mais qu'en même tems rien n'étoit plus injuste. Tout le peuple, d'une commune voix, défendit à Thémistocle de passer outre.

Je ne sai si dans toute l'histoire il y a un fait plus digne d'admiration que celui-ci. Ce ne sont point des philosophes, à qui il ne coûte rien d'établir dans leurs écoles de belles maximes & de sublimes règles de morale, qui décident que jamais l'utile ne doit l'emporter sur l'honnête. C'est un peuple entier, intéressé dans la proposition qu'on lui fait, qui la regarde

XERXES.

XERXES. comme très importante pour le bien de l'Etat ; & qui néanmoins , sans hésiter un moment , la rejette d'un commun accord par cette unique raison , qu'elle est contraire à la justice. Quelle noirceur au contraire & quelle perfidie dans le dessein que Thémistocle propose , de bruler en pleine paix la flotte des Grecs pour accroître la puissance des Athéniens ! Eût-il encore cent fois plus de mérite qu'on ne lui en donne , cette action suffiroit seule pour ternir tout l'éclat de sa gloire. Car c'est le cœur , c'est-à-dire la probité & la droiture , qui décide du vrai mérite.

Je suis fâché que Plutarque , qui pour l'ordinaire juge fort sainement des choses , semble ici ne pas condamner Thémistocle. Après avoir parlé des travaux qu'il fit dans le Pyrée , il passe ainsi à l'action dont il s'agit : *Thémistocle imagina encore quelque chose de plus grand pour augmenter ses forces de mer.*

μῆζόν τι
διενοήθη.

Plut. in
Themist. pag.
121.

Les Lacédémoniens aiant proposé dans le conseil des Amphictyons, que toutes les villes qui n'avoient pas pris les armes contre Xerxès fussent exclues de cette assemblée, Thémisto-

cle qui craignoit que si les Theſſaliens, **XERXES.**
 les Argiens, & les Thébains n'y
 étoient plus reçus, les Lacédémoniens
 ne fuſſent les maîtres des ſuffrages,
 & ne diſpoſaſſent de tout à leur gré,
 parla pour les villes qu'ils vouloient
 exclure, & fit changer de ſentiment
 aux Députés, en leur remontrant qu'il
 n'y avoit que trente & une villes qui
 fuſſent entrées dans la ligue, dont la
 plupart étoient fort petites & fort peu
 conſidérables. Que ce ſeroit donc une
 choſe fort étrange, & même très dan-
 gereuſe, que le reſte de la Grèce ve-
 nant à être banni de cette aſſemblée,
 cet auguſte Conſeil des Amphictyons
 tombât en la diſpoſition de deux ou
 trois villes les plus puiffantes, qui par
 cette excluſion donneroient la loi à
 toutes les autres, & aboliroient l'é-
 galité, que l'on regardoit avec raiſon
 comme l'ame de toutes les républi-
 ques. L'ouverture de cet avis lui attira
 la haine des Lacédémoniens, qui ſe
 déclarèrent ouvertement contre lui.

Il s'étoit mis mal auſſi avec les alliés,
 par la manière dure & avare avec la-
 quelle il avoit exigé d'eux des contri-
 butions.

Quand la ville d'Athènes fut entié-

*Plut. in
 Ariſt. p. 332.*

XERXES. rement rétablie, le peuple, se voyant
tranquille & paisible, chercha par
toutes sortes de voies à s'emparer du
gouvernement, & à le rendre absolu-
ment populaire. Cette trame, quoi-
que secrète, n'échapa point à la vi-
gilance d'Aristide, & il en vit toutes
les suites. Mais faisant réflexion, d'un
côté, que ce peuple méritoit quelque
considération à cause de la valeur
qu'il avoit témoignée dans toutes les
batailles qu'on venoit de gagner; &
de l'autre, qu'il n'étoit pas aisé de
réduire & de contenir ce même peup-
le, qui avoit les armes à la main,
& qui étoit devenu plus fier que ja-
mais par ses victoires, il crut devoir
le ménager, & user de tempérament.
Il fit donc un Décret, qui portoit que
le gouvernement seroit commun à
tous les citoyens, & que les Archon-
tes, qui étoient les premiers Magi-
strats de la République, & qu'on ne
choisissoit que parmi les plus riches
de la République, & parmi ceux qui
tiroient au moins de leurs terres cinq
cens médimnes, seroient choisis dé-
formais indifféremment & sans di-
stinction parmi tous les Athéniens;
En relâchant ainsi quelque chose au
peuple,

peuple, il prévint de funestes dissensions, qui auroient pu causer la ruine d'Athènes & de toute la Grèce. XERXES.

§. XIV. *La fierté de Pausanias fait perdre le commandement aux Lacédémoniens.*

LES GRECS, animés par l'heureux succès qu'avoient eu par tout leurs armes victorieuses, envoièrent une flotte pour délivrer du joug leurs alliés qui étoient encore sous le pouvoir des Perses. Elle étoit commandée pour les Lacédémoniens par Pausanias : Aristide & Cimon fils de Miltiade y commandoient pour les Athéniens. Elle fit d'abord voile vers l'île de Chypre, & mit toutes ses villes en liberté : puis, tournant sa route vers l'Hellespont, elle attaqua & prit la ville de Byzance, où l'on fit un grand nombre de prisonniers, dont plusieurs étoient des plus riches & des plus considérables Seigneurs de Perse. AN. M. 3528. AV. J. C. 476. Thucyd. lib. 1. pag. 63. & 84-85.

Pausanias, qui dès lors songeoit à trahir sa patrie, crut devoir profiter de cette occasion pour gagner les bonnes grâces de Xerxès. Il fit courir le bruit dans l'armée que ces Seigneurs Persans, qu'il avoit confiés à

XERXES.

la garde d'un de ses Officiers , s'étoient échapés de nuit , & avoient disparu. Il les avoit lui-même renvoies à ce Prince avec une lettre où il s'engageoit à lui livrer la ville de Sparte & toute la Grèce , à condition qu'il lui donneroit sa fille en mariage. Le Roi ne manqua pas de lui faire une réponse favorable , & il lui fit tenir de grosses sommes d'argent , pour gagner ceux des Grecs qu'il verroit disposés à entrer dans ses vûes. Il chargea Artabaze de toute cette négociation , & afin de le mettre à portée de la suivre plus facilement & plus sûrement , il lui donna le gouvernement des côtes maritimes de l'Asie Mineure.

*Plut. in
Arist. p. 332.
383.*

Pausanias, déjà enivré de sa grandeur future , changea dès ce moment de conduite. La vie pauvre , frugale , & modeste de Sparte , & l'assujettissement à des loix dures & austères , qui n'épargnoient & ne ménageoient personne , & qui étoient également inexorables pour les grands , comme pour les petits & les pauvres ; tout cela lui devint insupportable. Il craignit , en retournant à Sparte après les souverains commandemens qu'il

avoit eus, de rentrer dans une égalité qui le confondroit avec les derniers des citoyens ; & c'est ce qui le porta à traiter avec les barbares. Il quitta donc absolument les manières & les mœurs de son pays, prit l'habillement & la fierté des Perses, imita leur somptuosité & leur magnificence. Il traitoit les alliés avec une dureté insupportable ; ne parloit aux Officiers qu'avec hauteur & menaces ; se faisoit rendre des honneurs extraordinaires, & par cette conduite rendoit odieux à tous les alliés le gouvernement des Lacédémoniens. Les manières douces, honnêtes, & prévenantes d'Aristide & de Cimon ; un éloignement infini de tout air impérieux & fier, qui n'est propre qu'à révolter les esprits ; une bonté & une affabilité qui ne se démentoit en rien, & par laquelle ils savoient tempérer l'autorité du commandement, & le rendre aimable ; l'humanité & la justice qui paroissoient dans toutes leurs actions ; l'attention qu'ils avoient à n'offenser personne, & à faire du bien à tout le monde : tout cela nuisoit infiniment à Pausanias par le contraste, & augmentoit le mécontentement.

Oij

XERXES.

XERXES. Enfin ce mécontentement éclata , & tous les alliés passèrent sous le commandement des Athéniens , & se mirent sous leur protection. Ainsi , dit Plutarque , Aristide en opposant à la dureté & à la hauteur de Pausanias beaucoup de douceur & d'humanité , & inspirant à Cimon son collègue les mêmes sentimens , détacha des Lacédémoniens insensiblement & sans qu'ils s'en aperçussent l'esprit des alliés , & leur enleva enfin le commandement , non de vive force en employant des armées & des flotes , & encore moins en usant de ruse & de perfidie ; mais en rendant aimable par une conduite sage & douce le gouvernement des Athéniens.

Les Lacédémoniens , dans cette occasion, firent paroître une grandeur d'ame & une modération qu'on ne peut assez admirer. Car s'apercevant que la trop grande autorité rendoit leurs Capitaines fiers & insolens , ils renoncèrent de bon cœur à la supériorité qu'ils avoient eue jusques-là sur les autres Grecs , & cessèrent d'envoyer de leurs Chefs pour avoir le commandement des armées , aimant mieux , ajoute l'Historien , avoir des

citoyens sages, modestes, & parfaitement soumis à la discipline & aux loix du pais, que de conserver la prééminence sur tous les autres Grecs. XERXIS.

§. XV. *Traîne secrète de Pausanias avec les Perses. Sa mort.*

CEPENDANT, sur les plaintes qu'ils recevoient de tous côtés au sujet de Pausanias, ils le rappellèrent à Lacédémone, pour lui faire rendre compte de sa conduite. Ils ne purent encore le convaincre d'entretenir des intelligences avec Xerxès. S'étant tiré avec avantage de ce premier jugement, il retourna de son autorité particulière, & sans l'aveu de la République, à Byzance; & de là il continuoit ses pratiques secrètes avec Artabaze. Comme il y exerçoit encore beaucoup de violences & d'injustices, les Athéniens l'obligèrent d'en sortir. Il se retira à Colone, petite ville de la Troade. Là il reçut ordre des Ephores de se rendre à Sparte, sous peine d'être déclaré, en cas de désobéissance, ennemi public & traître à sa patrie. Il s'y rendit, dans l'espérance de se tirer encore de ce jugement à force d'argent. On commença par le mettre en

AN. M. 3519.
AV. J. C. 475.
Thucyd. lib.
1. p. 86. 87.
Diod. lib.
11. pag. 34.
36.
Corn. Nep.
in Pausan.

XERXES.

prison : puis il fut produit devant les Juges. On avoit contre lui de violens soupçons , & de forts préjugés. Plusieurs de ses esclaves avoient que Pausanias leur avoit promis la liberté , s'ils vouloient entrer dans tous ses desseins , & le servir avec zèle dans l'exécution de ses projets. Mais , comme les Ephores étoient accoutumés à ne point prononcer peine de mort contre un Spartiate sans une entière évidence , ces preuves ne leur paroissoient point suffisantes , sur tout contre un homme de la famille royale , & qui étoit actuellement en charge : car Pausanias remplissoit les fonctions de la roiauté comme tuteur & le plus proche parent de Plistarque , fils de Léonide , encore enfant. Il fut donc élargi.

Pendant que les Ephores étoient dans cette incertitude & dans cet embarras , un esclave , nommé l'Argilien , les vint trouver , & leur remit en mains une lettre de Pausanias au Roi des Perses dont il étoit porteur ; & qu'il devoit rendre à Artabaze. Celui-ci & le Lacédémonien étoient convenus ensemble de ne laisser survivre à leur message aucun des cou-

riers qu'ils s'envoieroient récipro- XERXES.
quement, pour ôter toute trace de

leur commerce. L'Argilien, qui ne voioit revenir aucun de ses camarades, eut quelque soupçon; & quand son rang fut venu, il ouvrit la lettre dont il étoit chargé, qui marquoit effectivement à Artabaze de le faire mourir dès qu'il la lui auroit rendue. C'est cette lettre qui fut portée aux Ephores. Ils ne se contentèrent pas encore de cette preuve, & voulurent la fortifier par le témoignage même de Pausanias. L'esclave, de concert avec eux, se retira à Ténare dans le temple de Neptune, comme dans un asyle où il seroit en sûreté. On y avoit ménagé secrètement deux petites loges, où des Ephores & quelques Spartiates se cachèrent. Dès que Pausanias eut appris que l'Argilien s'étoit réfugié dans ce temple, il y courut aussitôt pour en savoir la raison. L'esclave avoua qu'il avoit ouvert sa lettre, & que la crainte de la mort dont il y étoit menacé lui avoit fait prendre le parti de se refugier dans ce temple. Pausanias ne pouvant nier le fait, s'excusa du mieux qu'il put, lui fit de grandes promesses, & tira de lui

XERXES.

parole qu'il tiendrait la chose secrète. Ils se séparèrent de la sorte.

Le crime de Pausanias n'étoit plus douteux. Dès qu'il fut rentré dans la ville, les Ephores se mirent en devoir de l'arrêter. Il reconnut à l'air du visage de l'un d'eux qu'on avoit pris quelque fâcheuse résolution contre lui, & courut de toutes ses forces dans le temple de Pallas surnommée *Chalcioecos* qui étoit voisin, & où il arriva avant qu'on eût pu l'atteindre. L'entrée en fut fermée sur le champ, avec de grosses pierres, & l'on dit que la mere du coupable fut la première à y en porter. On découvrit aussi le toit de la chapelle. Les Ephores, n'osant pas l'en tirer de force, de peur de violer la sainteté de cet asyle sacré, prirent le parti de l'y laisser mourir de faim & de misère, exposé comme il étoit aux injures de l'air. Son corps fut enterré dans un lieu voisin. Mais l'oracle de Delphes, qu'ils consultèrent bientôt après, déclara que pour appaiser la colère de la déesse justement irritée par le violement de son temple, il falloit y ériger deux statues en l'honneur de Pausanias : ce qui fut exécuté.

Telle fut la fin de Pausanias, en XERXES. —
 qui une folle ambition étouffa tous les
 sentimens de probité, d'honneur, d'a-
 mour de la patrie, de zèle pour la li-
 berté, de haine & d'aversion contre
 les barbares : sentimens naturels en
 quelque sorte aux Grecs, & sur tout
 aux Lacédémoniens.

§. XVI. *Thémistocle, poursuivi par les
 Athéniens & les Lacédémoniens com-
 me complice de la conjuration de Pau-
 sanias, se réfugie chez Admète.*

THEMISTOCLE se trouva aussi en-
 velopé dans l'accusation qu'on forma
 contre Pausanias. Il étoit pour lors en
 exil. Une violente passion pour la
 gloire, accompagnée d'un vif desir
 de dominer seul, l'avoit rendu fort
 odieux aux citoiens. Il avoit bâti tout
 près de sa maison un temple à Diane,
 sous le nom de *Diane Aristobule*, c'est-
 à-dire *du bon conseil*, comme pour
 avertir les Athéniens qu'il avoit don-
 né de bons conseils à leur ville & à
 toute la Grèce ; & il n'avoit pas ou-
 blié d'y mettre sa statue, qu'on y
 voioit encore du tems de Plutarque.
 Elle montroit, dit-il, qu'il avoit la
 physionomie aussi héroïque que le

Thucyd. lib. 2.

1. pag. 89-90.

Plut. in

Themist. cap.

123. 124.

Corn. Nep.

in Themist. c.

8.

XERXES. courage. Voiant qu'on prêtoit volontiers l'oreille à toutes les calomnies que ses ennemis répandoient contre lui, il ne cessoit, pour leur fermer la bouche, de parler dans toutes les assemblées des services qu'il avoit rendus à sa patrie. Et comme on étoit las de l'entendre toujours rebattre les mêmes choses : *Hé ! vous lassez-vous*, leur disoit-il, *de recevoir souvent du bien des mêmes personnes ?* Il ne faisoit pas réflexion que ^a leur remettre si souvent ses bienfaits devant les yeux, étoit presque leur reprocher qu'ils les avoient oubliés, ce qui n'est point obligeant ; & il paroissoit ignorer que le moien sûr d'être loué, c'est de laisser ce soin aux autres, & de ne songer qu'à faire des choses louables ; & qu'une fréquente mention de ses propres vertus & de ses grandes actions, loin de calmer l'envie, n'est propre qu'à l'irriter.

*Plut. in
Themist. pag.
112.*

Thémistocle, banni d'Athènes par l'Ostracisme, se retira à Argos. C'est pendant qu'il y demeueroit que Pausanias fut poursuivi comme

^a Hoc molestum est. | est immemoris benefici.
Nam ista et commemo- | Terent. in Andr.
ratio quasi exprobratio

un traître qui avoit conjuré contre **XERXES.**
 sa patrie. Il avoit d'abord caché sa
 trame à Thémistocle, quoiqu'il fût
 un de ses meilleurs amis : mais, dès
 qu'il le vit chassé, & plein de ressentiment pour cette injure, il lui communiqua ses projets, & le pressa d'y entrer. Pour l'y engager, il lui fit voir les lettres que lui écrivoit le Roi de Perse, & tâcha de l'animer contre les Athéniens en lui exagérant leur injustice & leur ingratitude. Thémistocle rejetta bien loin la proposition de Pausanias, & refusa absolument de prendre aucune part à ses desseins : mais il lui garda le secret, & ne découvrit à personne les discours qu'il lui avoit tenus, ni l'entreprise qu'il avoit faite, soit qu'il espérât qu'il y renonceroit de lui-même, ou qu'il ne doutât pas qu'il ne fût bientôt découvert par quelque autre voie ; une entreprise aussi hasardeuse & aussi mal concertée que celle-là ne pouvant jamais avoir une bonne issue.

Pausanias aiant été mis à mort, on trouva parmi ses papiers des lettres & d'autres écrits qui donnoient beaucoup de soupçon contre Thémistocle. Les Lacédémoniens envoient des

XERXES. Députés à Athènes pour l'accuser, & le faire condamner à mort; & les envieux qu'il avoit parmi ses citoyens se joignirent à ces accusateurs. Aristide avoit alors une belle occasion de se venger des mauvais traitemens qu'il avoit reçus de son rival, s'il eût été sensible à ce cruel plaisir. Mais il refusa constamment d'entrer dans un si noir complot, aussi éloigné de jouir avec une secrète joie de l'infortune de son adversaire, qu'il l'avoit été auparavant de s'affliger de ses heureux succès. Thémistocle répondoit par lettres à toutes les calomnies dont il étoit chargé, & représentoit aux Athéniens, qu'ayant toujours cherché à dominer, & n'étant pas d'humeur à se laisser maitriser par d'autres, il n'y avoit aucune apparence qu'il eût voulu se livrer lui-même, & livrer la Grèce entière à des ennemis & à des barbares.

Cependant le peuple, persuadé par ses accusateurs, envoya des gens pour se saisir de sa personne, & pour l'amener, afin qu'il fût jugé par le Conseil de la Grèce. Thémistocle, qui en fut averti assez à tems, passa dans l'île de Corcyre, à laquelle il avoit

rendu autrefois quelque service : XERXES.
 mais , ne s'y trouvant pas en sûreté ,
 il s'enfuit en Epire ; & se voiant en-
 core poursuivi par les Athéniens &
 par les Lacédémoniens , il prit , par
 un coup de desespoir , un parti fort
 hazardeux , en se réfugiant chez Ad-
 mète roi des Molosses. Ce Prince
 aiant autrefois demandé quelque se-
 cours aux Athéniens , & aiant été
 honteusement refusé par Thémistocle
 qui avoit alors la principale autorité ,
 en avoit conservé un vif ressentiment ,
 & témoigné qu'il s'en vengeroit s'il
 en trouvoit une occasion favorable.
 Mais Thémistocle , qui jugea que dans
 l'état où il se trouvoit , l'envie encore
 toute récente de ses citoiens étoit plus
 à craindre pour lui que l'ancienne
 haine de ce Roi , voulut bien en cou-
 rir le risque. Quand il arriva dans son
 palais , aiant appris qu'il étoit ab-
 sent , il s'adressa à la Reine , qui le
 reçut avec bonté , & lui enseigna la
 manière dont il devoit faire sa sup-
 plique. Au retour d'Admète , Thémis-
 tocle prend entre ses bras le fils du
 Roi , s'assied au milieu de son foier
 entre ses dieux domestiques ; & là ,
 déclarant qui il étoit , & pour quel

XERXES.

— sujet il s'étoit réfugié chez lui, il implore sa clémence, reconnoit que sa vie & sa mort sont entre ses mains, l'exhorte à oublier le passé, & lui représente que rien n'est plus digne d'un grand Roi que d'user de clémence. Admète, surpris & touché de voir à ses piés, dans une posture si humiliante, le plus grand homme de la Grèce, & le vainqueur de l'Asie, le releva aussitôt, & lui promit toute sa protection. En effet, les Athéniens & les Lacédémoniens étant venus le redemander, il refusa absolument de leur livrer un suppliant & un hôte, qui s'étoit réfugié dans son palais dans l'espérance d'y trouver un asyle sacré & inviolable.

Pendant qu'il étoit à la Cour de ce Prince, un de ses amis trouva moyen d'enlever d'Athènes sa femme & ses enfans, qu'il lui envoya; & pour cet enlèvement, il fut traduit en justice quelque tems après, & condamné à mort. Pour ce qui est de ses biens, ses amis en sauvèrent la plus grande partie, qu'ils lui firent tenir dans la suite au lieu de sa retraite: mais tout ce qu'on en put découvrir, qui montoit à cent talens, fut porté au trésor public.

*Cent mille
talens.*

Il ne possédoit pas la valeur de trois ta- XERXES.
lens, lorsqu'il entra dans le gouverne-
ment de la République. Je laisse quel-
que tems cet illustre banni chez Admé-
te, pour reprendre la suite de l'histoire.

§. XVII. *Desintéressement d'Aristide
dans le maniement des deniers publics.*

Sa mort. Son éloge.

J'AI DIT auparavant que le com- *Plut. in*
mandement de la Grèce avoit passé de *Arist. p. 333.*
Sparte à Athènes. Jusques-là les 334.
villes & les peuples de la Grèce *Diod. lib.*
avoient bien contribué de quelques 11. pag. 36.
sommés d'argent pour fournir aux
frais de la guerre contre les barbares :
mais cette répartition avoit toujours
causé de grands mécontentemens,
parce qu'elle ne se faisoit pas avec
assez d'égalité. On jugea à propos,
sous le nouveau gouvernement, de
placer dans l'île de Délos le trésor
public & commun de la Grèce, d'é-
tablir un nouvel ordre pour les finan-
ces, & de fixer une taxe qui se-
roit réglée sur le revenu de chaque
ville & de chaque peuple, afin que
les charges étant également répar-
ties sur tous les membres qui com-
posaient le Corps des alliés, personne

XERXES. n'eût un juste sujet de se plaindre. Il s'agissoit de trouver un homme capable de s'acquitter dignement d'une fonction si importante pour le bien public, si délicate, & si pleine de dangers & d'inconvéniens. Tous les alliés jettèrent les yeux sur Aristide. Ils lui donnèrent un plein pouvoir, & s'en rapportèrent entièrement à sa prudence & à sa justice pour imposer à chacun sa taxe.

On n'eut pas lieu de se repentir d'un tel choix.^a Il administra les finances avec la fidélité & le desintéressement d'un homme qui regarde comme un crime capital de toucher au bien d'autrui ; avec l'attention & l'activité d'un pere de famille qui gouverne son propre revenu ; avec la réserve & la religion d'une personne qui respecte les deniers publics comme sacrés. Enfin, ce qui est aussi difficile que rare, il vint à bout de se faire aimer dans un emploi, où c'est beaucoup que de ne se pas rendre odieux. C'est le glorieux témoignage que Sénèque

^a Tu quidem orbis terrarum rationes administras tam abstinenter quam alias, tam diligenter quam tuas, tam

religiosè quam publicas. In officio amorem conserquis, in quo odium vitare difficile est. *Senec. lib. de brev. vit. cap. 18.*

rend à une personne chargée à peu XERXES.
 près d'un pareil emploi, & le plus
 bel éloge que l'on puisse faire d'un
 Surintendant ou Contrôleur Général
 des Finances. On y reconnoit le por-
 trait d'Aristide. Il montra tant d'é-
 quité & de sagesse dans l'exercice de
 ce ministère, que personne ne se plai-
 gnit : & dans la suite on regarda tou-
 jours ce tems comme le siècle d'or,
 c'est-à-dire comme le bon & l'heureux
 tems de la Grèce. En effet, la taxe
 qu'il avoit fixée en tout à quatre cens
 soixante talens, fut portée par Péri-
 clès à six cens, & bientôt après jusqu'à
 treize cens talens : non que les frais
 de la guerre montassent plus haut,
 mais parce qu'on faisoit beaucoup de
 dépenses inutiles en distributions ma-
 nuelles au peuple d'Athènes, en célé-
 brations de jeux & de fêtes, en con-
 structions de temples & d'édifices pu-
 blics ; & que d'ailleurs les mains de
 ceux qui touchoient les deniers pu-
 blics, n'étoient pas toujours si pures
 ni si nettes que celles d'Aristide. Cette
 conduite si sage & si équitable lui
 assura le glorieux surnom de Juste.

*Le talent
 vaut mille
 écus.*

Plutarque néanmoins rapporte une
 action d'Aristide, qui fait voir que les

XERXES. Grecs , & il en faut dire autant des Romains , avoient une idée très limitée & très imparfaite de la justice. Ils en bornoient l'usage à l'intérieur de la société civile , & convenoient que de particulier à particulier on étoit tenu d'en garder rigoureusement toutes les règles. Mais quant à la patrie , à la république , qui étoit leur grande idole à laquelle ils raportoient tout , ils pensoient tout autrement , & croioient par principe devoir lui sacrifier non seulement leurs biens & leur vie , mais la religion même & les engagements les plus sacrés , au mépris des sermens les plus solennels. C'est ce qui paroît clairement dans le fait que je vais exposer.

Ibid. p. 333.
334.

Après la répartition des tributs dont je viens de parler, Aristide aiant réglé tous les articles de l'alliance , il fit jurer les alliés qu'ils les observeroient de point en point , & il jura lui-même pour les Athéniens ; & en prononçant les malédictions qui accompagnoient les sermens , il jeta dans la mer , selon la coutume , des masses de fer toutes ardentes. Mais dans la suite les affaires forçant les Athéniens à violer quelques-uns de ces articles , & à

gouverner un peu plus despotique-XERXES.
 ment, il les exhorta à rejeter sur lui ces malédictions, & à se décharger par là de la peine due à un parjure, que la nécessité de leurs affaires exigeoit nécessairement. En général, (c'est toujours Plutarque qui parle) Théophraste écrit que cet homme, qui dans tout ce qui le regardoit en particulier, & dans toutes les affaires de ses citoiens, se piquoit d'une exacte & rigoureuse justice, faisoit dans le gouvernement de la République plusieurs choses selon l'exigence des cas, & selon qu'il étoit expédient à la patrie, qui, selon lui, avoit quelquefois besoin de recourir à l'injustice pour se soutenir; & il en rapporte un exemple. Un jour, comme on délibéroit dans le Conseil de faire porter à Athènes, contre le traité, les trésors communs de la Grèce qui étoient en dépôt à Délos, les Samiens en ayant ouvert l'avis; quand ce fut à lui à parler, il dit que cela étoit injuste mais utile, & fit prévaloir l'avis. Ce fait nous montre de quelles ténèbres la prétendue sagesse des payens étoit accompagnée.

Pour ce qui regarde le mépris des

XERXES. richesses, il est difficile de le porter plus loin qu'il le fit. Thémistocle, à qui les louanges d'autrui ne faisoient pas plaisir, voyant qu'on relevoit avec beaucoup d'admiration le noble désintéressement d'Aristide dans l'administration des finances, ne fit que s'en moquer, faisant entendre que les louanges qu'on lui donnoit sur cela, ne marquoient en lui que le mérite d'un coffre fort, qui garde fidèlement l'argent qu'on lui confie sans en rien retenir. Cette froide raillerie étoit une puérile vengeance d'un mot qui l'avoit fort piqué. Car Thémistocle disant un jour qu'il estimoit que la plus grande qualité d'un Général d'armée étoit de savoir pressentir & prévoir les desseins des ennemis ;
» Cette qualité est nécessaire, repartit
» Aristide : mais il en est une autre
» véritablement belle & digne d'un
» Général, c'est d'avoir les mains
» nettes, & de ne se laisser pas domi-
» ner par l'argent. « Aristide étoit en droit de lui parler ainsi, lui qui après avoir passé par des emplois si lucratifs pour les autres, étoit réellement pauvre. Il paroissoit aimer la pauvreté par goût & par estime ; & loin d'en

rougir , il n'en tiroit pas moins de XERXES. gloire que de tous ses trophées , & de toutes les victoires qu'il avoit remportées. L'histoire nous en fournit une preuve très éclatante.

Callias , très proche parent d'Aristide , & le plus opulent citoyen d'Athènes , fut appelé en jugement. Son accusateur , insistant peu sur le fond de la cause , lui faisoit sur tout un crime de ce que riche comme il étoit , il n'avoit pas de honte de laisser dans l'indigence Aristide , aussi bien que sa femme , & ses enfans. Callias , voiant que ces reproches faisoient beaucoup d'impression sur l'esprit des Juges , somma Aristide de venir déclarer devant eux s'il n'étoit pas vrai qu'il lui avoit plusieurs fois présenté de grosses sommes d'argent , & l'avoit pressé avec instance de vouloir les accepter , & s'il ne les avoit pas toujours constamment refusées , en lui répondant qu'il se pouvoit vanter à meilleur titre de sa pauvreté , que lui de son opulence : Que l'on pouvoit trouver assez de gens qui usoient bien de leurs richesses , mais qu'on en rencontroit peu qui portassent la pauvreté avec courage , & même avec joie ; & qu'il

XERXES. n'y avoit que ceux qui étoient pauvres malgré eux, ou par leur faute, pour avoir été paresseux, intempérans, prodigues, dérégles, qui pussent en rougir. Aristide avoua que tout ce que son parent venoit de dire

*Plut. in com-
par. Arist. &
Caton. p. 355.*

étoit vrai, & il ajouta qu'une disposition d'ame qui retranche tout desir des choses superflues, & qui resserre les besoins de la vie dans les bornes les plus étroites, outre qu'elle délivre de milles soins importuns, & laisse une liberté entière de ne s'occuper que des affaires publiques, approche en quelque sorte l'homme vertueux de la divinité même, qui est sans soins & sans besoins. Il n'y eut personne dans l'assemblée qui n'en sortît avec cette pensée & ce sentiment intérieur, qu'il eût mieux aimé être Aristide avec sa pauvreté, que Callias avec toutes ses richesses.

Plutarque rapporte ici en abrégé un témoignage bien glorieux que Platon rend à la vertu d'Aristide, pour laquelle il le préfère infiniment à tous les autres grands hommes qui ont vécu de son tems. Car, dit-il, Thémistocle, Cimon, & Périclès, ont rempli leur ville de superbes bâti-

mens , de portiques , de statues , de richesses , d'ornemens , & d'autres vaines superfluités de ce genre : mais Aristide a travaillé à la remplir de vertu. Or , pour procurer à une ville un véritable bonheur, il faut la rendre vertueuse , & non pas riche.

XERXES.

Le même Plutarque observe encore un autre trait de la vie d'Aristide, qui, tout simple qu'il est , lui fait beaucoup d'honneur , & peut être d'une grande instruction. C'est dans le beau traité où il examine si les vieillards doivent continuer à se mêler du gouvernement , & où il montre d'une manière admirable les différens services qu'ils peuvent encore rendre à l'Etat , quoique dans un âge avancé. Il ne faut pas s'imaginer , dit-il , que pour rendre service à ses citoyens, il soit nécessaire de se donner beaucoup de mouvemens , de haranguer le peuple , d'occuper les premières places , de commander les armées. Un sage vieillard, sans même sortir de sa maison , peut y exercer une sorte de magistrature , obscure & secrète à la vérité , mais qui n'en est pas moins importante , en formant la jeunesse par ses conseils , & lui traçant la route qu'elle

Pag. 795.

797.

XERXES.

doit tenir dans le maniement des affaires. Aristide, ajoute Plutarque, ne fut pas toujours en charge; mais il fut toujours utile à sa patrie. Sa maison étoit une école publique de vertu, de sagesse, de politique. Elle étoit ouverte à tous les jeunes gens d'Athènes qui avoient bonne volonté, & qui alloient le consulter comme un oracle. Il les recevoit avec bonté, il les écoutoit avec patience, il les instruisoit familièrement, & s'appliquoit sur tout à leur relever le courage, & à leur inspirer de la confiance. On marque en particulier qu'il rendit cet important service à Cimon, dont le nom depuis devint si célèbre.

Plutarque* partageoit en trois âges la vie des hommes d'Etat, des hommes destinés à gouverner. Il vouloit que dans le premier ils s'instruisissent des principes du gouvernement, que dans le second ils les mîssent en pratique, & que dans le dernier ils en instruisissent les autres.

L'histoire ne nous dit rien de positif

Plut. in
Arist. p. 3; 4.
335.

* Il applique à cette occasion ce qui se pratiquoit à Rome, où les Vestales passoient les dix premières années à apprendre leurs fonctions, dans une espèce de noviciat, les dix suivantes à les exercer, & les dix autres à les enseigner aux jeunes Novices.

ni sur le tems , ni sur le lieu de la mort d'Aristide : mais elle rend à sa mémoire un témoignage bien glorieux , en marquant que ce grand homme , qui avoit eu les premières charges de la République , & qui avoit manié les finances avec une autorité absolue , mourut pauvre , & ne laissa pas même de quoi se faire enterrer. Il falut que l'Etat fît les frais de ses funérailles , & se chargeât de faire subsister sa famille. Ses filles furent mariées , & Lyfimaque son fils entretenu aux dépens du Prytanée , qui assigna aussi à la fille de ce dernier après sa mort le même entretien qu'on donnoit à ceux qui avoient vaincu aux Jeux Olympiques. Plutarque rapporte à cette occasion ce que firent les Athéniens en faveur de la postérité d'Aristogiton leur Libérateur , tombée dans la pauvreté , & il ajoute que de son tems encore , c'est-à-dire près de six cens ans après , ils faisoient paroître la même bonté & la même libéralité. Grand éloge pour une ville , de s'être conservée si longtems généreuse & reconnoissante ; & puissant motif pour enflammer le courage des particuliers , qui se voioient assurés de laisser à leurs en-

XERXES.

Voiez, Tome
2. de l'Hist.
Anc. p. 535.

XERXES.

_____ sans les récompenses que la mort les auroit empêché de recevoir eux-mêmes! Il étoit beau de voir les arrières-neveux des Libérateurs & des défenseurs de la République, qui n'avoient reçu de leurs peres d'autre héritage que la gloire de leurs belles actions, entretenus encore lontems après aux dépens du public en considération des services que leur famille avoit rendus à l'Etat. Ils subsistoient de la sorte bien plus honorablement, & rappelloient avec bien plus d'éclat la mémoire de leurs ancêtres, qu'une infinité d'autres citoiens, à qui leurs peres n'avoient songé à laisser que de grandes richesses, lesquelles pour l'ordinaire ne survivent pas de beaucoup à ceux qui les ont acquises, & ne laissent souvent à leur postérité que l'odieuse mémoire des injustices dont elles sont le fruit.

Le plus grand honneur que l'antiquité ait fait à Aristide, est de l'avoir surnommé *le Juste*. Ce ne fut point quelque occasion particulière, mais le gros de sa conduite & le corps de ses actions qui lui valut ce titre illustre. Plutarque fait ici une réflexion bien remarquable, & que je ne croi pas devoir omettre.

De toutes les vertus d'Aristide, dit XERXES.
cet Auteur sensé, la plus connue, & Plut. in vit. Arist. p. 321.
celle qui se fit le plus sentir, fut sa justice, parce que c'est la vertu dont l'usage est le plus continuel, dont les fruits se répandent sur un plus grand nombre de personnes, & qui est comme le fondement & l'ame de tout emploi & de toute administration publique. De là vint que quoique pauvre, & du simple peuple, il mérita le surnom de *Juste*; surnom, dit Plutarque, véritablement royal, ou, pour mieux dire, véritablement divin, mais que les Princes & les Grands n'ambitionnent guères, parce qu'ils n'en connoissent pas la beauté & l'excellence. Ils aiment mieux qu'on les appelle des preneurs de villes, des foudres de guerre, des vainqueurs & des conquérans; quelquefois même des aigles, & des lions: préférant ainsi le vain honneur de ces titres fastueux, qui n'annoncent que violence & ravage, à la solide gloire de ceux qui marquent la bonté & la vertu. Ils ignorent, continue toujours Plutarque, que des trois principaux attributs de la Divinité, dont les Rois se font honneur d'être l'image; je veux

*Peliorcetes,
Cerauni.
Nicanores.*

XERXES. dire l'immortalité, la puissance, la justice ; que de ces trois attributs, dont le premier excite notre admiration & nos desirs, le second nous remplit de crainte & de fraieur, le troisième nous inspire l'amour & le respect, le dernier est le seul qui soit véritablement & personnellement communiqué à l'homme, & le seul qui puisse le conduire aux deux autres, l'homme ne pouvant devenir véritablement immortel & puissant, qu'en devenant juste.

Avant que de reprendre la suite de l'histoire, il n'est pas hors de propos de remarquer, que c'est à-peu-près dans le tems dont nous parlons ici, que la réputation de la Grèce, plus célèbre encore par la sagesse de son gouvernement que par l'éclat de ses victoires, porta les Romains à avoir recours à ses lumières. Rome, formée sous les Rois, manquoit des loix nécessaires à la bonne constitution d'une République. ^a Elle envoya des

AN.M. 352.
DE ROM. 302.

a *Missi legati Athenas, jussique inclinas leges Solonis describere, & aliarum Græciæ civitatum instituta, mores, juraque noscere. . . . Decem tabularum leges perlatae sunt: (quibus a ijectæ po-*

stea duæ) qui nunc quoque in hoc immenso aliarum super alias privatarum legum cumulo, fons omnis publici privatique est juris. Liv. lib. 3. n. 31. & 34.

Députés pour rechercher les loix des XERXES. villes de la Grèce, & sur tout celles d'Athènes, plus conformes au gouvernement populaire qui avoit été établi depuis l'expulsion des Rois. Sur ce modèle, dix Magistrats qu'on créa sous le nom de Décemvirs avec une autorité absolue, rédigèrent les loix des XII. Tables, qui sont le fondement & la source du Droit Romain.

§. XVIII. *Mort de Xerxès, tué par Artabane. Son caractère.

LES MAUVAIS succès qu'avoit eus Xerxès dans son expédition contre la Grèce, & qui avoient continué depuis, lui abbattirent enfin le courage. Renonçant à tout projet de guerre & de conquête, il se livra entièrement au luxe & à la mollesse, & ne pensa plus qu'à ses plaisirs. * Artabane, Hyrcanien de naissance, Capitaine de ses gardes, & depuis longtemps un de ses premiers favoris, s'aperçut que cette conduite lui avoit attiré le mépris de ses sujets; & crut que c'étoit une occasion favorable de conspirer contre son Maître, & il porta ses vûes ambitieuses jusqu'à se flater de remplir sa place, & de monter sur

AN.M. 3551

AV. J. C. 473

Ctes. cap. 2.

Diod. lib.

11. pag. 52.

Justin. l. 3.

cap. 1.

* Ce n'est pas

Artabane on-

cle de Xerxès

Aristot. Po-

litic. l. 5. cap.

10. pag. 404.

XERXES. son trône. Une autre raison put bien aussi le porter à ce crime. Xerxès lui avoit ordonné de faire mourir Darius l'aîné de ses fils, l'histoire ne nous apprend point pour quelle raison. Comme cet ordre avoit été donné au milieu d'un repas, & dans la chaleur du vin, il crut que Xerxès l'oublieroit, & il ne se hâta pas de l'exécuter. Mais il se trompa : le Roi se plaignit de n'avoir point été obéi. Artabane craignit donc son ressentiment, & crut devoir le prévenir. Il engagea dans son complot Mithridate l'un des Eunuques du palais, & grand Chambellan du Roi ; & par son moyen il entra dans la chambre où couchoit le Prince, & le tua pendant qu'il dormoit. De là il alla trouver Artaxerxe troisième fils de Xerxès. Il lui apprit le meurtre de son pere, & en chargea Darius son frere aîné, comme si l'impatience de régner l'eût porté à commettre ce parricide. Il ajoutoit que pour se mettre pleinement en sûreté, son dessein étoit de se défaire encore de lui, qu'ainsi il étoit nécessaire qu'il se tint sur ses gardes. Ces discours aiant fait sur Artaxerxe encore jeune toute l'impression que souhaitoit Ar-

tabane, il alla sur le champ dans l'appartement de son frere, & soutenu par Artabane & par ses gardes il l'égorgea. Hystaspe, second fils de Xerxès, étoit celui à qui la couronne appartenoit après Darius, mais comme il se trouvoit alors dans la Bactriane dont il étoit Gouverneur, Artabane mit Artaxerxe sur le trône, dans l'intention de ne l'y laisser que jusques à ce qu'il eût formé un parti assez fort pour l'en chasser, & y monter lui-même. La grande autorité dont il avoit joui, lui avoit acquis un grand nombre de créatures. Il avoit outre cela sept fils, tous grands de taille, bienfaits, pleins de force & de courage, & élevés aux plus grandes dignités de l'Empire. Le secours qu'il s'en promettoit, étoit principalement ce qui l'avoit porté à ce dessein ambitieux. Mais, pendant qu'il se hâtoit de l'amener à sa fin, Artaxerxe aiant découvert ce complot par le moyen de Mégabyze qui avoit épousé une de ses sœurs, travailla à le prévenir, & le tua avant qu'il eût pu exécuter sa trahison. Par sa mort ce Prince s'affermir dans la possession du royaume.

XERXES.

Nous venons de voir périr Xerxès , un des Princes les plus puissans qui aient jamais été. Je n'ai pas besoin de prévenir le Lecteur sur le jugement qu'il en faut porter. On voit autour de lui tout ce qu'il y a de plus grand & de plus éclatant selon les hommes : le plus vaste empire qui fût alors sur la terre , des richesses immenses , des armées de terre & de mer dont le nombre paroît incroiable. Tout cela est autour de lui , non en lui , & n'ajoute rien à ses qualités naturelles. Mais , par un aveuglement trop ordinaire aux Grands & aux Princes , né dans l'abondance de tous les biens avec une puissance sans bornes , dans une gloire qui ne lui avoit rien coûté , il s'étoit accoutumé à juger de ses talens & de son mérite personnel par les dehors de sa place & de son rang. Il méprise les sages conseils d'Artabane son oncle & de Démarate , qui seuls ont le courage de lui dire la vérité ; & il se livre à des courtisans adorateurs de sa fortune , & uniquement occupés à le flater dans ses passions. Il mesure & prétend régler le succès de ses entreprises sur l'étendue de son pouvoir. La soumission servile de tant de

peuples ne pique plus son ambition , XERXES.
 & dégoûté d'une obéissance trop
 prompte & trop facile , il se plaît à
 exercer sa domination sur les élé-
 mens , à percer les montagnes & à les
 rendre navigables , à châtier la mer
 pour avoir rompu son pont , à entre-
 prendre follement d'en captiver les
 flots par des chaînes qu'il y fait jeter.
 Plein d'une vanité puérile & d'un or-
 gueil ridicule , il se regarde comme le
 maître de la nature : il croit qu'aucun
 peuple n'osera attendre son arrivée :
 il compte avec une présomptueuse &
 folle assurance sur les millions d'hom-
 mes & de vaisseaux qu'il traîne après
 lui. Mais, quand après la bataille de
 Salamine il vit les tristes restes & les
 honteux débris de ses troupes innom-
 brables répandus dans toute la Grèce ,
 a il comprit quelle différence il y avoit
 entre une armée & une foule d'hom-
 mes. En un mot , pour bien juger de
 Xerxès , il ne faut que le mettre à
 côté d'un simple bourgeois d'Athé-
 nes , d'un Miltiade , d'un Thémistocle ,
 d'un Aristide. D'un côté est tout le

a Stratusque per totam exercitu turba distaret.
 passim Græciam Xerxes | Senec. de benef. lib. 6.
 intellexit , quantum ab | cap. 132.

XERXES. bon sens, la prudence, l'habileté dans le métier de la guerre, le courage, la grandeur d'ame : de l'autre on ne voit que vanité, orgueil, entêtement, une bassesse de sentimens qui fait pitié, & quelquefois même une brutalité & une barbarie qui font horreur.



LIVRE SEPTIÈME.

*Suite de l'histoire des Perses & des Grecs,
sous le regne d'Artaxerxe Longue-
Main.*

CHAPITRE PREMIER.

ARTAXERXE LONGUE-MAIN. **C**E CHAPITRE renferme l'histoire des Perses & des Grecs depuis le commencement du regne d'Artaxerxe jusqu'à la guerre du Péloponnèse, qui commença la 42. année du regne de ce Prince.

§. I. *Artaxerxe détruit le parti d'Artabane, & celui d'Hystaspe son frere aîné.*

AN. M. 3131.

AV. J. C. 473.

Lib. 15 pag.

735.

LES HISTORIENS Grecs donnent à ce Prince le surnom de *Longue-main* : selon Strabon, à cause que ses mains étoient si longues, qu'étant tout droit, il en pouvoit toucher ses genoux ; selon Plutarque, parce qu'il avoit la main droite plus longue que l'autre.

In Artax.
pag. 1011.

A cela près, il passoit pour le plus bel homme de son tems : mais on van-
 toit encore plus sa bonté & sa générosité. Il régna près de quarante neuf ans.

ARTAXERXES
 LONGUE-MAIN.

Quoiqu'Artaxerxe se vît delivré, par la mort d'Artabane, d'un dangereux compétiteur, il lui restoit encore deux obstacles à vaincre, avant que d'être paisible possesseur de la couronne : l'un dans son frere Hytaspes Gouverneur de la Bactriane, l'autre dans le parti d'Artabane. Il commen-
 ça par le dernier.

Ctes. cap. 30.

Artabane avoit laissé sept fils, & un grand nombre de partisans, qui ne tardèrent pas à s'assembler pour venger sa mort. Il y eut entr'eux & ceux qui tenoient pour Artaxerxe une sanglante bataille, dans laquelle un grand nombre de nobles Persans perdirent la vie. Artaxerxe aiant pris enfin le dessus, il extermina tous ceux qui étoient entrés dans cette conjuration. Il tira sur tout une vengeance exemplaire de ceux qui avoient eu part au meurtre de son pere, & particulièrement de l'eunuque Mithridate qui l'avoit trahi. Il le fit mourir du supplice des Auges ; ce qui se faisoit de cette manière. On mettoit le cri-

Plut. in
 Artax. pag.
 1019.

ARTAXERXE

minel à la renverse dans une auge, & après l'avoir fortement attaché aux quatre coins, on le couvroit d'une autre auge, à la réserve de la tête, des piés, & des mains, qui sortoient par des trous faits exprès. Dans cette posture incommode on lui présentoit la nourriture nécessaire, qu'on le forçoit de prendre malgré lui: pour boisson, on lui donnoit du miel détrempe dans du lait, & on lui en frotoit tout le visage, ce qui attiroit sur lui une quantité incroiable de mouches, d'autant plus qu'il étoit toujours exposé aux rayons ardens du soleil. Les vers, engendrés de ses excréments, lui rongeoient les entrailles au-dedans. Ce supplice duroit ordinairement quinze ou vingt jours, pendant lesquels le patient souffroit des tourmens indicibles.

Cies cap. 31.

Artaxerxe aiant dissipé le parti d'Artabane, se trouva en état d'envoyer une armée dans la Bactriane qui soutenoit le parti de son frere; mais il n'y eut pas le même succès. Les deux armées en étant venues aux mains, Hytaspes conserva si bien son terrain, que s'il ne remporta pas la victoire, il n'eut aussi aucun desavantage; de sorte que les deux armées se séparèrent.

avec un succès égal, & se retirèrent **LONGUE-**
 chacune de son côté pour se préparer **MAIN.**
 à un second combat. Artaxerxe aiant
 assemblé une plus grande armée que
 son frere, & aiant d'ailleurs tout
 l'Empire pour lui, le défit dans une
 seconde bataille, & ruina entièrement
 son parti. Cette victoire le rendit pai-
 sible possesseur de l'Empire.

Pour se maintenir, il déposa tous ^{Diod. lib.}
 les Gouverneurs des villes & des pro- ^{II. pag. 54.}
 vinces qu'il soupçonnoit avoir eu
 quelque liaison avec l'un ou l'autre
 des partis qu'il venoit d'exterminer,
 & il leur en substitua d'autres en qui
 il avoit une parfaite confiance. Il
 s'appliqua ensuite à réformer les abus
 & les desordres qui s'étoient intro-
 duits dans le gouvernement. Par une
 conduite si pleine de sagesse & de zèle
 pour le bien public, il s'acquit bien-
 tôt une grande réputation & une
 grande autorité, & il s'attira l'amour
 de ses sujets, qui est le principal sou-
 tien du pouvoir des Souverains.

§. II. *Thémistocle se réfugie vers
 Artaxerxe.*

CE FUT vers ce Prince, que Thé- ^{AN. M. 353.}
 mistocle se réfugia, selon Thucydide,

ARTA- & au commencement de son règne :
XERXE car d'autres Auteurs, comme Strabon, Plutarque, Diodore, placent cet événement sous Xerxès son prédécesseur. M. Prideaux se range de leur côté ; & il croit aussi que l'Artaxerxe dont nous parlons est le prince que l'Ecriture appelle Assuerus, & dont Esther fut l'épouse : au lieu que nous supposons, avec le savant Ussérius, que ce fut Darius fils d'Hyftaspe que cette illustre Juive épousa. J'ai déjà déclaré bien des fois que je n'entrois point dans ces sortes de disputes. Je m'en tiens donc sur la retraite de Thémistocle en Perse, aussi bien que sur l'histoire d'Esther, au sentiment d'Ussérius mon guide ordinaire.

Thucyd. lib. 1. pag. 90. Nous avons vu que Thémistocle s'étoit retiré chez Admète roi des Molosses, qui l'avoit fort bien reçu.
Plut. in Themist. pag. 125-127. Les Athéniens & les Lacédémoniens ne l'y laissèrent pas en repos, & le redemandèrent à ce Prince, avec menaces, s'il le refusoit, de porter la guerre dans son pays. Admète, qui ne vouloit point s'attirer sur les bras de si formidables ennemis, & encore moins trahir son hôte, l'avertit du danger où il étoit, & favorisa sa fuite.
Diod. lib. 11. 42-44.
Cornel. Nep. in Themist. cap. 8-10.

Thémistocle arriva par terre à Pydne, Longue-ville de la Macédoine, & là il s'em-
barqua sur un vaisseau marchand qui
alloit en Ionie. Il n'étoit point connu
des passagers. Ce vaisseau aiant été por-
té par la tempête près de l'île de Naxe
qui étoit alors assiégée par les Athé-
niens, le pressant danger où il se vit l'o-
bligea de déclarer qui il étoit au maî-
tre du vaisseau & au pilote, & tant par
prières que par menaces il les força de
passer outre, & de tenir la route d'Asie.

Thémistocle put se souvenir alors
d'un mot que son pere lui avoit dit
lorsqu'il étoit encore fort jeune, pour
l'avertir de ne pas compter beaucoup
sur la faveur du peuple. Ils se prome-
noient ensemble le long du port. En
lui montrant de vieilles galères jettées
& abandonnées sur le rivage : *Voiez-
vous, mon fils, lui dit-il ? Voilà comment
le peuple en use à l'égard de ses conducteurs,
quand il n'en tire plus aucun service.*

*Plut. in
Themist. page
112.*

Il arriva donc à Cumes, ville d'Eo-
lie dans l'Asie Mineure. Le Roi de Per-
se avoit mis sa tête à prix, & promis
deux cens talens à qui la lui livreroit.
Toute la côte étoit pleine de gens qui
l'observoient pour le prendre. Il s'en-
fuit à Æges, petite ville d'Eolie, où il

*Deux cens
mille écus.*

ARTAXERXES

n'étoit connu de personne que de son hôte Nicogène, le plus riche du pays, & qui avoit de grandes relations avec tous les Seigneurs de la Cour de Perse. Il demeura quelques jours caché chez lui, jusqu'à ce qu'il le fit conduire en sûreté & avec bonne escorte à Susse dans un de ces chariots couverts, dans lesquels les Perses, qui étoient fort jaloux, avoient accoutumé de mener leurs femmes; ceux qui le conduisoient publiaient qu'ils menaient à un grand Seigneur de la Cour une jeune Dame Grecque.

Quand il fut arrivé à la Cour de Perse, il s'adressa au Capitaine des Gardes, & lui dit qu'il étoit Grec de nation, & qu'il venoit pour parler au Roi d'affaires importantes qui regardoient son service. L'Officier l'avertit d'une cérémonie, dont il savoit que quelques Grecs étoient blessés, mais qui étoit absolument nécessaire pour parler au Prince en personne: c'étoit de se prosterner profondément devant lui. » Car, dit-il, notre loi nous ordonne » d'honorer ainsi le Roi, & de l'adorer » comme une image vivante du Dieu » immortel qui entretient & conserve » toutes choses ». Thémistocle y con-

sentit. Quand on l'eut admis à l'au- LONGUE-
 dience, il se prosterna profondément MAIN.
 devant le Roi, & l'adora ; puis se rele-
 vant : « Grand * Roi, dit-il par un
 truchement, je suis Thémistocle A-
 thénien, qui aiant été banni par les
 Grecs, viens ici chercher un asyle.
 J'ai fait à la vérité beaucoup de
 maux aux Perses, mais je ne leur ai
 pas fait moins de bien par les salutai-
 res avis que je leur ai fait donner plus
 d'une fois ; & je suis en état de leur
 rendre encore de plus grands servi-
 ces que jamais. Mon sort est entre
 vos mains. Vous pouvez montrer ici
 ou votre clémence, ou votre colére.
 Par l'une vous sauverez votre sup-
 pliant, par l'autre vous perdrez le
 plus grand ennemi de la Grèce. »

Le Roi ne lui répondit rien sur l'heu-
 re, quoiqu'il fût rempli d'admiration
 pour son grand sens & pour sa har-
 dieffe : mais on dit qu'avec ses amis il
 se félicita de cette aventure comme
 d'un très-grand bonheur, qu'il pria son
 dieu Arimanius d'envoier toujours à
 ses ennemis de semblables pensées, &

* *Thucydide lui fait dire* | *avait écrite au Roi avant*
à peu près les mêmes choses, | *que de lui parler.*
mais dans une lettre qu'il

ARTAXERXE de les porter à se défaire ainsi de leurs plus grands personnages. On ajoute que s'étant couché, l'excès de sa joie fit qu'il s'écria trois fois tout endormi, *J'ai Thémistocle l'Athénien.*

Le lendemain, dès la pointe du jour, il manda les plus grands Seigneurs de sa Cour, & fit appeller Thémistocle, qui ne s'attendoit à rien que de triste, sur tout depuis que l'un des Gardes, après qu'il eut entendu son nom, lui eut dit la veille dans la salle même du Roi qu'il venoit de quitter : *Serpent de Grèce, plein de ruse & de malice, la fortune du Roi t'amène ici.* Mais la sérénité qui paroissoit sur le visage du Roi, ne lui annonçoit rien que d'heureux. En effet, il lui fit un accueil très favorable, & lui dit qu'il commençoit par lui donner deux cens

Deux cens mille écus.

talens, somme qu'il avoit promise à quiconque le lui livreroit, & qui par cette raison lui étoit dûe, puisqu'il avoit apporté lui-même sa tête en se livrant à lui. Il lui ordonna ensuite de lui parler des affaires de la Grèce. Mais Thémistocle ne pouvant s'expliquer que par le moyen d'un Interprete, pria le Roi de lui permettre d'apprendre la langue Persane, espé-

rant qu'alors il pourroit être en état LONGUE-
d'expliquer mieux lui-même ce qu'il MAI N.
avoit à lui communiquer, qu'il ne le

pouvoit faire par le moien d'un autre. Il en est, dit-il, du discours de l'homme, comme d'une tapisserie à personnages, qui a besoin d'être déployée & développée pour faire voir ce qu'elle renferme. Cette grace lui ayant été accordée, Thémistocle, dans l'espace d'un an, apprit si bien la langue du pays, qu'il parvint à parler le Persan plus élégamment que les Perses mêmes, & il fut en état dans la suite de s'entretenir avec le Roi sans truchement. Ce Prince lui marqua une estime & une considération extraordinaire. Il lui fit épouser une Dame des plus nobles familles de Perse : il lui donna une maison & un équipage convenable, & lui assigna les revenus nécessaires pour s'entretenir honorablement. Il le menoit avec lui à la chasse, le mettoit de tous ses plaisirs & de tous ses divertissemens, & s'entretenoit souvent avec lui en particulier, jusqu'à donner de la jalousie & de l'inquiétude aux grands Seigneurs de sa Cour. Il le présenta même aux Princesses, qui l'honorèrent de leur affe-

AR T A-étion , & lui donna les entrées chez
X E R X E. elles. On raporte comme une marque
particulière de faveur , que par son
ordre spécial il fut admis à entendre
les leçons & les discours des Mages,
& instruit par eux dans tous les se-
crets de leur philosophie.

On cite encore une autre preuve de
son crédit. Démarate de Sparte , qui
étoit dans ce même tems à la Cour ,
aiant eu ordre du Roi de lui deman-
der un présent , il le supplia de lui
permettre de faire son entrée à che-
val dans la ville de Sardes avec la tiare
roiale sur la tête. Vanité ridicule ,
également indigne de la noblesse d'un
Grec , & de la simplicité d'un Lacé-
démonien ! Le Roi , choqué de l'in-
solence de cette demande , témoigna
son mécontentement d'une manière
fort vive , & parut ne vouloir jamais
lui pardonner : mais Thémistocle
aiant intercédé pour lui, le remit dans
ses bonnes graces.

Enfin , le credit de Thémistocle fut
si grand , que sous les régnes suivans ,
où les affaires des Perses furent enco-
re plus mêlées avec celles des Grecs ,
lorsque les Rois vouloient attirer
quelque Grec à leur service , ils lui

écrivoient & lui promettoient en **LONGUE**
 propres termes , qu'il seroit plus **MAI N.**
 grand auprès d'eux, que Thémistocle
 ne l'avoit été auprès du Roi Artaxerxe.

On dit aussi que Thémistocle , parvenu à ce haut degré de faveur , honoré & recherché de tout le monde qui s'empressoit à lui faire la cour , dit un jour à ses enfans , voiant sa table magnifiquement servie : *Mes enfans , nous périssions , si nous n'eussions péri.*

Mais enfin , comme on crut que l'intérêt du Roi demandoit que Thémistocle fît son séjour dans quelque une des villes de l'Asie Mineure , pour y être à portée de lui rendre service dans l'occasion , on l'envoia à Magnésie située sur le Méandre , & on lui assigna pour son entretien , outre tous le revenus de cette ville qui étoient de cinquante talens par an , *Cinquante mille écus.* ceux de Myunte & de Lampsaque. L'une de ces villes devoit lui fournir son pain , l'autre son vin , la troisième sa viande. Quelques auteurs en ajoutent deux autres , pour ses meubles & pour ses habits. Telle étoit la coutume des anciens Rois d'Orient : au lieu de

ARTAXERXES. pensions, ils donnoient à ceux qu'ils vouloient gratifier, des villes & quelquefois même des provinces, qui, sous le nom de pain, de vin, &c. devoient leur fournir abondamment tout ce qui étoit nécessaire pour entretenir leur maison & leur train avec magnificence. Thémistocle passa quelques années à Magnésie dans l'abondance & dans la splendeur, jusques à ce qu'il y finit ses jours de la manière que l'on verra dans la suite.

§. III. *Cimon commence à paroître à Athènes. Ses premiers exploits. Double victoire remportée contre les Perses près du fleuve Eurymédon.*

AN. M. 3534.

AV. J. C. 470.

Diod. lib.

11. pag. 45.

Plut. in Cim.

p. 482. 483.

ATHENES, qui venoit de perdre un de ses plus considérables citoyens & de ses meilleurs Généraux par la retraite de Thémistocle, chercha à réparer cette perte en confiant le commandement des armées à Cimon, qui ne lui étoit point inférieur en mérite.

Ses premières années ne lui avoient pas fait d'honneur, ni donné de lui une grande idée. L'exemple de cet illustre Athénien, dont la jeunesse fut fort décriée, & qui dans la suite se fit un si grand nom, montre que les

Plut. in Cim.

pag. 480.

dérangemens de cet âge ne doivent LONGUE-
 pas faire desespérer d'un jeune hom- M A I N.
 me, sur tout lorsqu'on y remarque un
 fonds d'esprit, un bon cœur, des in-
 clinations droites, & de l'estime pour
 les personnes de mérite. Or tel étoit
 le caractère de Cimon. Sa mauvaise
 réputation aiant indisposé le peuple
 contre lui, il en fut d'abord très mal
 reçu; & rebuté d'un si fâcheux ac-
 cueil, il songeoit à renoncer absolu-
 ment aux affaires publiques. Aristide,
 découvrant en lui de grandes qualités
 à travers ses défauts, le consola, lui
 rendit l'espérance, le remit dans la
 voie, s'appliqua particulièrement à
 le former, & ne contribua pas peu,
 par les instructions qu'il lui donna,
 & par l'affection qu'il ne cessa de lui
 témoigner, à le rendre tel qu'on le vit
 dans la suite : service des plus im-
 portans qu'il pût rendre à sa patrie !

Plutarque observe, qu'après ces *Ibid. p. 481.*
 premiers écarts, il n'y eut rien dans
 les mœurs de Cimon que de grand &
 de noble : qu'il ne céda ni à Miltiade
 en courage & en hardiesse, ni à Thé-
 mistocle en prudence & en bon sens,
 mais qu'il fut plus juste & plus hom-
 me de bien que ni l'un ni l'autre ; &

A R T A- que ne leur étant en rien inférieur
X E R X E. dans les vertus militaires , il les sur-
 ——— passa de beaucoup tous deux dans les
 vertus morales.

Ce seroit un grand avantage pour un Etat , que ceux qui excellent dans chaque profession se fissent un plaisir & un devoir d'instruire & de former les jeunes gens en qui ils connoissent de bonnes dispositions. Par là ils trouveroient le moien de continuer à la patrie leurs services même après leur mort , & d'y perpétuer par leurs Eleves le goût du vrai mérite , & la pratique des bonnes régles.

Peu de tems après la retraite de Thémistocle , les Athéniens aiant mis en mer une flotte sous le commandement de Cimon fils de Miltiade , conquirent Eione sur le Strymon , Amphipolis , & d'autres endroits de la Thrace : & comme ce pays étoit très fertile , Cimon y établit une colonie , & y fit passer dix mille Athéniens.

*Herod. lib.
 7. cap. 107.
 Plut. p. 482.*

Le sort d'Eione est trop singulier ; pour n'être pas rapporté ici. Bogès en étoit gouverneur pour le Roi de Perse. Il témoigna à son maître un attachement & une fidélité qui a peu d'exemples. Assiégé par Cimon & par les Athéniens ,

Athéniens, il pouvoit faire une capi- LONGUE-
tulation honorable, & se retirer en MAIN.

Asie avec tous ses effets & toute sa famille. Il ne crut pas qu'en honneur il le pût faire, & résolut de périr plutôt que de se rendre. Il essuia de rudes attaques, & se défendit toujours avec un courage incroyable. Quand il vit que les vivres lui manquoient absolument, il jeta du haut des murs dans le fleuve Strymon tout l'or & l'argent qui étoit dans la ville; puis il fit allumer un bucher, & aiant égorgé sa femme, ses enfans, & tous ceux qui composoient sa maison, il les fit jeter au milieu des flammes, & s'y précipita lui-même. Xerxès ne cessoit d'admirer & de déplorer en même tems une si merveilleuse générosité. Les paiens pouvoient l'appeller ainsi: mais c'est plutôt férocité & barbarie.

Cimon se rendit maître aussi de l'île de Scyros: où il trouva les os de Thésée fils d'Egée, qui s'enfuiant d'Athènes s'étoit retiré dans cette ville, & y étoit mort. Un oracle avoit ordonné qu'on en fit la recherche. Il les fit charger dans sa galère, les orna magnifiquement, & les porta ainsi dans sa patrie près de huit cens ans

ARTAXERXES depuis que Thésée en étoit parti. Le peuple les reçut avec de grandes marques de joie, & pour conserver la mémoire de cet événement, il établit une dispute de poëtes tragiques qui fut très célèbre, & qui contribua beaucoup à perfectionner le théâtre, par l'émulation extraordinaire qu'elle jeta entre les écrivains dont les tragédies y étoient représentées. Car Sophocle, encore jeune, aiant fait jouer alors sa première pièce, l'Archonte qui présidoit à ces Jeux, voyant parmi les spectateurs de grandes brigues & de grandes partialités, engagea Cimon & les autres Généraux les collègues, qui tous étoient au nombre de dix, un de chaque Tribu, à faire la fonction de Juges. Le prix fut adjugé à Sophocle ; ce qui causa un si grand chagrin & une si grande douleur à Eschyle, qui jusques-là avoit primé sur le théâtre, qu'il ne put plus souffrir le séjour d'Athènes. Il en partit, se retira en Sicile, & y mourut.

Les alliés avoient fait quantité de prisonniers sur les barbares dans les villes de Seste & de Byfance, & pour faire honneur à Cimon, ils le prièrent de faire le partage du butin. Cimon mit d'un côté les prisonniers tout

nuds , & de l'autre tous leurs ornemens & toute leur dépouille. Les alliés se plaignirent d'abord de ce partage, comme y trouvant trop d'inégalité; mais Cimon leur donna le choix. Ils prirent sans hésiter les ornemens des Perses, & laissèrent les prisonniers aux Athéniens. Cimon partit donc avec le lot qui étoit resté, passant pour un homme fort mal habile & mal entendu à faire des partages. Car les alliés emportoient beaucoup de chaînes, de colliers, & de bracelets d'or, quantité de riches vêtemens & de beaux manteaux de pourpre ; & les Athéniens n'avoient pour leur part que des corps tout nuds, & qui étoient peu propres au travail. Mais bientôt après on vit arriver de la Phrygie & de la Lydie les parens & les amis de ces prisonniers, qui les rachetèrent jusqu'au dernier avec de grosses sommes d'argent ; de sorte que des deniers provenus de cette rançon, Cimon eut de quoi entretenir sa flotte quatre mois, & qu'il y eut encore beaucoup d'or de reste pour le trésor public, sans compter ce qui lui en revint à lui-même. Il prenoit plaisir dans la suite à racon-

LONGUE
MAIN.

ARTA-ter lui-même cette aventure à ses
XERXES. amis , & il la raportoît toujours avec
 ————— une sorte de complaisance.

Plut. in Cim. pag. 484. Il faisoit de ses biens un usage que
Cornel. Nep. in Cim. c. 4. le rhéteur Gorgias marque en peu de
Athen. lib. 32. pag. 533. mots ; mais d'une manière vive & élé-
 gante. *a Cimon* , dit-il , *amassoit des ri-*
chesses pour s'en servir , & il s'en servoit
pour se faire estimer & honorer. On peut
 voir ici , en passant , quel étoit le but ,
 quelle étoit l'ame des plus belles
 actions du paganisme , & combien
 Tertullien avoit raison de définir un
 païen , quelque parfait qu'il parût , un
 animal vain & glorieux : *animal gloriae.*
 Cimon vouloit que ses vergers & ses
 jardins fussent ouverts en tout tems
 aux citoiens , afin qu'ils pussent y
 prendre les fruits qui leur convien-
 droient. Il avoit tous les jours une ta-
 ble servie frugalement , mais honnê-
 tement. Elle ne ressembloit en rien à
 ces tables somptueuses & délicates ,
 où l'on n'admet que des personnes de
 distinction & en petit nombre , uni-
 quement pour faire parade de sa ma-
 gnificence ou de son bon goût. La
 sienne étoit simple , mais abondante ,

a Θυσί τὸν Κίμωνος τοῖς | χροῖτο , χρῆνται δὲ οἱ
 χρήματα κτείνονται μὴ οἷς | τιμῶν.

& tous les pauvres bourgeois de la **LONGUE**
ville y étoient indifféremment reçus. **MAIN.**
En bannissant ainsi de ses repas tout
ce qui sentoit le fasté, le luxe, les
délices, il se ménageoit un fonds iné-
puisable, non seulement pour les
dépenses nécessaires de sa maison,
mais pour les besoins de ses amis,
de ses domestiques, & d'un très grand
nombre de citoyens : montrant par
là qu'il connoissoit bien mieux que la
plupart des riches la destination na-
turelle des richesses, & leur véritable
usage.

Il se faisoit toujours suivre de quel-
ques domestiques, qui avoient ordre
de glisser secrètement quelque pièce
d'argent dans la main des pauvres
qu'on rencontroit, & de donner des
habits à ceux qui en manquoient.
Souvent aussi il pourvut à la sépulture
de ceux qui étoient morts sans avoir
laissé de quoi se faire inhumer. Et ce
qui est admirable, & que Plutarque ne
manque pas d'observer, c'est qu'il ne
faisoit point tout cela pour se rendre
puissant parmi le peuple, ni pour
acheter ses suffrages ; puisqu'en toute
occasion on le vit toujours déclaré
pour la faction contraire, c'est-à-dire

ARTABAZATE pour celle des citoiens les plus considérables par leurs richesses & par leur crédit.

*Plut. in Cim.
pag. 485.*

Quoiqu'il vît tous les autres Gouverneurs de son tems enrichis par les concussions & par les voleries qu'ils faisoient sur le public, il se maintint pourtant toujours incorruptible, conserva ses mains pures non seulement de toute concussion, mais encore de tout présent, & continua jusqu'à la fin de sa vie de faire & de dire gratuitement & sans aucune vûe d'intérêt tout ce qui étoit utile & expédient pour la République.

Cimon joignoit à beaucoup d'autres excellentes qualités un grand sens, une rare prudence, & une profonde connoissance du génie & du caractère des hommes. Outre les sommes d'argent auxquelles chacun des alliés étoit taxé, ils devoient encore fournir un certain nombre d'hommes & de vaisseaux. Plusieurs d'entr'eux, qui depuis la retraite de Xerxès ne respiroient plus que le repos, & ne songeoient plus qu'à cultiver leurs terres, pour se délivrer des fatigues & des dangers de la guerre aimoient mieux fournir de l'argent que des

hommes, & laissoient aux Athéniens LONGUE-
MAIN.
le soin de remplir de soldats & de rameurs les vaisseaux qu'ils étoient obligés de donner. Les autres Généraux, sans prévoyance & sans vûe pour l'avenir, les chagrinèrent d'abord, & voulurent les réduire à l'exécution littérale du traité. Cimon, quand il fut en place, garda une conduite toute opposée. Il les laissa jouir tranquillement de la paix, sentant bien que les alliés, de braves guerriers qu'ils étoient auparavant, ne seroient plus propres qu'au labourage & au trafic; pendant que les Athéniens, qui auroient toujours la rame ou les armes à la main, s'aguerriroient de plus en plus, & deviendroient de jour en jour plus puissans. Ce qu'il avoit prévu, ne manqua pas d'arriver, & ce furent ces peuples mêmes qui à leurs propres frais & dépens se donnèrent des maîtres, & de compagnons & d'alliés qu'ils étoient, devinrent en quelque sorte sujets & tributaires des Athéniens.

Il n'y eut jamais de Capitaine Grec *Plut. in Cim.*
qui rabaisât la fierté & la puissance *P. 485-487.*
du grand Roi de Perse, comme le fit *Thucyd. lib.*
Cimon. Après que les barbares eurent *1. p. 66.*
Diod. lib. 11.
P. 45-47.

ARTAXERXE rent été chassés de la Grèce, il ne leur
laissa pas le tems de respirer, mais il

les poursuivit vivement avec une
flote de plus de deux cens voiles,
leur enleva leurs plus fortes places,
& leur débaucha tous leurs alliés,
en sorte qu'il ne demeura pas un
homme de guerre pour le Roi de
Perse dans toute l'Asie depuis le pays
d'Ionie jusqu'en Pamphylie. Poussant
toujours sa pointe, il eut la har-
dieuse d'aller attaquer la flote enne-
mie, quoique beaucoup plus nom-
breuse que la sienne. Elle étoit près
de l'embouchure du fleuve Eurymé-
don, composée de trois cens cinquan-
te voiles, & soutenue de l'armée de
terre campée sur le rivage. Elle fut
bientôt mise en déroute. On prit plus
de deux cens vaisseaux, sans compter
ceux qui furent coulés à fond. Plus-
ieurs des Perses s'étoient jettés hors
de leurs vaisseaux pour aller joindre
leur armée de terre qui étoit sur le
rivage. C'étoit une entreprise très
hazardieuse que de tenter une descen-
te en présence de l'ennemi, & de me-
ner des troupes déjà fatiguées par un
long combat contre des troupes fraî-
ches & supérieures en nombre. Mais

Cimon, voyant que toute l'armée de- LONGUE
MAIN.
mandoit d'aller contre les barbares,
crut devoir profiter de l'ardeur de ses
soldats, que ce premier succès avoit
extrêmement animés. Il les mit donc
à * terre, & il les mena droit contre
les barbares, qui les attendirent de
pié ferme, & soutinrent le premier
choc avec beaucoup de valeur. Mais
enfin, obligés de plier, ils prirent la
fuite. Le carnage fut grand : on fit
un nombre infini de prisonniers, &
un butin immense. Cimon aiant, dans
un seul jour, remporté deux victoi-
res, qui égaloient presque la gloire
des deux journées de Salamine & de
Platée, alla, pour y mettre le comble,
au devant d'un renfort de quatre-
vingts vaisseaux Phéniciens qui ve-
noient de Cypre pour joindre la flotte
des Perses, & ne savoient rien de ce
qui s'étoit passé. Ils furent tous pris
ou coulés à fond, & presque tous les
soldats tués ou noyés.

Cimon, après ces glorieux exploits,
retourna triomphant à Athènes, &
emploia une partie des dépouilles à

* On ne voit pas que les
anciens se servissent de cha-
loupes pour faire leurs des-
centes, apparemment parce
que leurs galères étant pla-
tes, abordèrent sans peine.

ARTAXERXE

fortifier le port, & à embellir la ville. Digne usage des richesses qu'un Général amasse dans ses campagnes, & qui lui fait sans comparaison beaucoup plus d'honneur que s'il les employoit à se bâtir à lui-même de magnifiques palais, qui tôt ou tard passeroient à des étrangers, au lieu que ces ouvrages, construits pour l'utilité publique, lui appartiennent en quelque manière pour toujours, & font passer son nom jusqu'à la postérité la plus reculée. De tels embellissemens dans une ville plaisent infiniment au peuple, toujours sensible, comme on le fait, à ces sortes de décorations; & c'est, comme Plutarque l'observe en parlant de Cimon, un des moïens les plus sûrs & en même tems les plus légitimes, de gagner son amitié, & de s'en faire estimer.

L'année suivante, ce Général fit voile vers l'Hellespont, & aiant chassé les Perses de la Chersonnèse de Thrace dont ils s'étoient emparés, il soumit aux Athéniens ce pays-là, quoiqu'il y eût lui-même plus de droit du chef de Miltiade son pere, qui en avoit eu la souveraineté. Il attaqua ensuite ceux de l'île de Tha-

Plut. in Cim. pag. 487.
Thucyd. lib. 2. p. 66. 67.
Diod. l. 11. pag. 53.

se , qui s'étoient révoltés contre les Longue-
 Athéniens , & défit leur flotte. Ils sou- MAIN.
 tinrent leur révolte avec un achar- Polyan. Str.
lib. 2.
 nement qui a peu d'exemples. Com-
 me s'ils avoient à faire à des ennemis
 cruels & barbares , dont ils eussent eu
 les dernières extrémités à craindre ,
 ils décernèrent peine de mort contre
 le premier qui parleroit de traiter
 avec les Athéniens. Le siège dura
 trois ans , & fit souffrir à ces mal-
 heureux citoiens tous les plus cruels
 maux de la guerre , sans pouvoir vain- Polyan. lib. 2.
 cre leur opiniâtreté. Les femmes se-
 condèrent leurs efforts avec la même
 ardeur ; & comme on manquoit de
 cordes pour les machines , elles cou-
 pèrent toutes de bon cœur leurs che-
 velures , & les employèrent à cet usa-
 ge. La famine étant devenue extrê-
 me dans la ville , enlevoit tous les
 jours un grand nombre d'habitans.
 Hégétoride Thiasien , voyant avec dou-
 leur périr ses concitoyens , n'hésita
 point à sacrifier sa vie pour le salut de
 sa ville. Il se mit la corde au cou , &
 se présentant à l'assemblée , » Mes
 compatriotes , dit-il , faites de moi
 ce qu'il vous plaira , & ne m'épar-
 gnez pas si vous le jugez à propos : «

ARTA- » mais sauvez le reste du peuple par
XERXE » ma mort, en abolissant la loi meur-
» trière que vous avez publiée contre
» votre propre intérêt. Les Thasiens,
touchés de ce discours, abolirent la
loi, & n'eurent garde de souffrir qu'il
en courût la vie à un si généreux ci-
toien. Ils se rendirent aux Athéniens,
qui leur laissèrent la vie sauve, & se
contentèrent de démanteler leur ville.

Après que Cimon eut débarqué ses
troupes sur le rivage opposé de la
Thrace, il se saisit de toutes les mi-
nes d'or de ces côtés-là, & soumit
tout ce pays jusques en Macédoine.
Il auroit pu en tenter la conquête, &
il paroît qu'il ne lui auroit pas été
difficile de se rendre maître d'une
partie de ce royaume, s'il eût voulu
profiter de l'occasion. Aussi, pour
l'avoir négligée, fut-il, à son retour
à Athènes, appelé en jugement, com-
me s'il se fût laissé corrompre par
l'argent des Macédoniens & d'Ale-
xandre leur roi. Il étoit bien éloigné
d'une telle prévarication, & il se justi-
fia pleinement,

§. IV. Révolte de l'Egypte contre les Perses, soutenue par les Athéniens. LONGUE.
MAIN.
Mort de Thémistocle.

CEPENDANT les Egyptiens, pour se délivrer du joug des étrangers qu'ils ne portoient qu'avec une extrême impatience, se révoltèrent contre Artaxerxe, & prirent Inare prince des Libyens pour leur roi. Ils appellèrent à leur secours les Athéniens, qui aiant alors une flotte de deux cens vaisseaux à l'île de Cypre, répondirent avec plaisir à cette invitation, & firent voile aussitôt vers l'Egypte, jugeant cette occasion très favorable pour affoiblir la puissance des Perses en les chassant d'un si beau royaume.

A la nouvelle de cette révolte, Artaxerxe assembla une armée de trois cens mille hommes, résolu de marcher lui-même contre les rebelles. Ses amis lui aiant conseillé de ne point hazarder sa personne, il confia le soin de cette expédition à Achéménide l'un de ses freres. Quand celui-ci fut arrivé en Egypte, il campa avec sa nombreuse armée sur les bords du Nil. Dans ces entrefaites,

AN.M. 3544.

AV.J.C. 460.

Thucyd. lib.

1. pag. 68. &

71. 72.

Ctes-cap 32.

35.

Diod. l. 11.

p. 5459.

A R T A - les Athéniens aiant défait en mer la
X E R X E flotte des Perses, & détruit ou pris
cinquante de leurs vaisseaux, remon-
tèrent ce fleuve, mirent leurs troupes
à terre sous le commandement de
Charitimis leur Général, & s'étant
 joints à Inare & à ses Egyptiens, ils
fondirent tous ensemble sur Aché-
ménide, & le défirent dans un grand
combat, où ce Général Persan & cent
mille de ses soldats perdirent la vie.
Ceux qui échapèrent se sauvèrent à
Memphis. Les vainqueurs les y pour-
suivirent, & se rendirent maîtres d'a-
bord de deux parties de la ville. Mais
les Perses s'étant fortifiés dans la troi-
sième, appelée la *Muraille blanche*,
qui étoit la plus grande & la plus for-
te des trois, ils y soutinrent un siège
de près de trois ans, pendant lequel
ils se défendirent vaillamment, jus-
ques à ce qu'ils furent délivrés par
ceux qu'on envoya à leurs secours.

Artaxerxe aiant appris la défaite de
son armée, & la part que les Athé-
niens y avoient eue; pour faire diver-
sion de leurs forces, & les empêcher
d'agir contre lui, envoya des ambassa-
deurs aux Lacédémoniens avec une
grande somme d'argent, pour les por-

ter à faire la guerre aux Athéniens. **LONGUE**
 Les Lacédémoniens n'y aiant point **MAIN.**
 voulu entendre, il prit le parti, pour
 parvenir à son but, d'envoier Thémistocle dans l'Attique à la tête d'une
 armée, ne doutant pas que les Athé-
 niens, dans un si grand danger, ne
 rappellassent leurs troupes, dont ils
 auroient besoin pour leur propre dé-
 fense. Pour cet effet, il envoya ordre à
 Thémistocle de se préparer pour cette
 expédition. Il fit assembler en même
 tems une armée de terre, & une flotte
 sur les côtes d'Ionie, dont il préten-
 doit donner le commandement à ce
 Général.

Thémistocle se trouva dans un
 grand embarras. D'un côté, la vûe
 des bienfaits & des faveurs dont le
 Roi l'avoit comblé, la parole posi-
 tive qu'il lui avoit donnée de le ser-
 vir avec zèle dans l'occasion, l'ordre
 pressant du Roi qui le sommoit de sa
 promesse, ne lui laissoient pas la li-
 berté de refuser cette commission.
 D'un autre côté, l'amour de la patrie
 que les mauvais traitemens & l'in-
 justice de ses citoyens n'avoient pu
 étoufer en lui, la peine qu'il avoit à
 flétrir la gloire de ses grandes actions

ARTAXERXES & de ses anciens trophées par une si honteuse démarche, peut-être aussi la crainte de ne pas réussir dans une guerre où il auroit en tête d'excellens Généraux, & sur tout Cimon, qui jusques-là avoit toujours été aussi heureux que brave: toutes ces pensées ne lui permettoient pas de se déclarer contre sa patrie dans une entreprise, dont le succès, quel qu'il fût, ne pouvoit tourner qu'à sa honte.

Pour se délivrer de ce cruel embarras, il résolut de mettre * fin à sa vie, ne trouvant que cet unique moien de ne point manquer ni à ce qu'il devoit à sa patrie, ni à ce que le Prince avoit droit d'exiger de lui. Il fit donc un sacrifice solennel, auquel il invita tous ses amis; & après les avoir embrassés, & leur avoir dit les derniers adieux, il but du sang du taureau, ou, selon d'autres, il avala un poison fort prompt, & mourut ainsi à Magnésie, âgé de soixante-cinq ans, dont il avoit passé la plus grande partie dans le gouvernement de la République, & dans le commandement des ar-

Cic. de Senectute. Le Roi aiant appris la cause
nest. n. 72.

* Les plus sages du pa- | qu'il fût permis de se don-
 ganisme ne croioient pas | ner la mort à soi-même.

& la manière de sa mort, l'estima & LONGUE
l'admira encore davantage, & con- MAIN.
tinua de traiter favorablement ses
amis & ses domestiques. Les Magné-
siens lui élevèrent dans la place pu-
blique un magnifique tombeau, &
accordèrent à ses descendants des pri-
vilèges & des honneurs particuliers.
Ils en jouissoient encore du tems de
Plutarque, c'est-à-dire depuis près de
six cens ans, & le tombeau subsistoit
encore.

Atticus, dans le beau dialogue de Brut, n. 42.
Cicéron intitulé Brutus, réfute avec^{43.}
esprit & agrément la manière tragi-
que dont, après quelques Ecrivains,
je viens de raconter la mort de Thé-
mistocle, prétendant que c'étoit une
pure fiction, inventée par des Rhé-
teurs, lesquels sur le simple bruit qui
avoit couru que ce grand homme
étoit mort de poison, avoient fourni
le reste de leur propre fonds pour
embellir ce récit, qui sans cela n'au-
roit eu rien d'intéressant ni de pi-
quant. Il s'en tient au sentiment de
Thucydide, Historien sensé, qui étoit
d'Athènes même, & presque contem-
porain. Cet Auteur ne dissimule pas
à la vérité le bruit qui avoit couru du

A R T A-poison, mais il croit qu'il mourut sim-
X E R X Eplement de maladie, & que ses amis
 ——— transportèrent secrètement ses os à
Lib. 1. pag. 1. Athènes, où, du tems de Pausanias,
 on voioit encore son tombeau près du
 grand port. Ce récit paroît bien plus
 vraisemblable.

Thémistocle a été certainement un
 des plus grands hommes qui aient
 paru dans la Grèce. Il avoit l'ame
 grande ; un courage invincible, &
 que le danger même rendoit plus fer-
 me ; une ardeur incroyable pour la
 gloire, que l'amour du bien public
 fut pourtant quelquefois lui faire mo-
 dérer, mais qui le porta aussi quelque-
 fois trop loin ; une présence d'esprit,
 qui lui monroit dans l'instant même
 le parti qu'il falloit prendre ; enfin
 une pénétration dans l'avenir, qui lui
 découvroit clairement les desseins les
 plus cachés des ennemis, qui lui fai-
 soit prendre de loin des mesures justes
 pour les déconcerter, & qui lui ins-
 piroit des vûes nobles, grandes, har-
 dies, étendues, pour l'honneur de sa
 patrie. Les qualités du cœur, qui sont

a De instantibus, ut ris callidissimè conjicie-
 ait Thucydides, verissi- bat. *Corn. Nep. in The-*
 mè judicabat, & de futu- *mist. cap. 1.*

les essentielles, lui manquoient : je veux dire la probité, la sincérité, la droiture, la bonne foi. Il ne fut pas aussi exempt de soupçons d'avarice, ce qui est une grande tache dans la vie d'un homme d'Etat.

On raporte de lui néanmoins une belle action & une belle parole, qui marquent un sentiment noble & désintéressé. ^{Plut. in Themist. pag. 121.} Sa fille étant recherchée en mariage, il préféra un honnête homme pauvre à un riche dont la réputation étoit suspecte, & il dit que dans le choix d'un gendre, *Il aimoit mieux du mérite sans bien, que du bien sans mérite.*

Mégabyse & Artabaze, qu'Artaxerxe avoit chargés du commandement des troupes pour la guerre d'Egypte, avoient formé en Cilicie & en Phénicie une armée de trois cens mille hommes. Il falut attendre que la flotte fût prête, ce qui traîna jusqu'à l'année suivante. Alors Artabaze en prit le commandement, & fit voile vers le Nil, pendant que Mé-

a Themistocles, cum consuleretur utrum bono viro pauperi, an minus probato diviti filiam collocaret : Ego vero, in-

quit, MALO VIRUM QUI PECUNIA EGAT, QUAM PECUNIAM QUÆ VIRO.
Cic. de Offic. lib. 2. c. 71.

ARTAXERXE.

gabyze , avec l'armée de terre , prit la route de Memphis. Il en fit lever le siège , & livra bataille ensuite à Inarus. Toutes les troupes de part & d'autre se trouvèrent à cette action. Inarus y fut entièrement défait : le carnage , qui fut grand , tomba principalement sur les Egyptiens révoltés. Après cette défaite, Inarus , quoique blessé par Mégabyze , fit sa retraite avec les Athéniens & ceux des Egyptiens qui voulurent le joindre ; & gagna Byblos, ville située dans l'île de Prosopitis , qui est fermée par deux bras du Nil tous deux navigables. Les Athéniens mirent leur flotte dans un de ces bras, où elle étoit à couvert des insultes de l'ennemi , & soutinrent dans cette île un siège d'un an & demi.

Après la bataille , tout le reste de l'Egypte s'étoit soumis au vainqueur , & remis sous l'empire du roi Artaxerxe , excepté Amyrtée , qui avoit encore un petit parti dans les marais , où il se maintint longtemps par la difficulté que trouvèrent les Perses à pénétrer jusqu'à lui pour le réduire.

Le siège continuoit toujours à Prosopitis. Les Perses voyant qu'ils n'a-

vançoient rien par la méthode ordinaire , parçè qu'ils avoient affaire à des gens qui ne manquoient ni de cœur ni d'adresse à se bien défendre , eurent recours à un expédient extraordinaire , qui fit bientôt ce que la force n'avoit pu faire. Ils saignèrent par divers canaux le bras du Nil dans lequel étoit la flotte Athéniène , & la mirent à sec ; & ouvrirent par là un passage à toute leur armée pour entrer dans l'île. Inarus se voiant perdu , composa avec Mégabyze pour lui , pour tous ses Egyptiens , & pour environ cinquante Athéniens : & se rendit à condition qu'on leur laisseroit la vie sauve. Le reste des troupes auxiliaires , qui faisoit un corps de six mille hommes , prit le parti de se défendre encore : & pour cet effet ils mirent le feu à leurs vaisseaux , & se rangèrent en bataille , résolus de périr l'épée à la main , & de vendre bien cher leur vie à l'imitation des Lacédémoniens qui s'étoient fait tuer aux Thermopyles. Les Perses , qui virent cette résolution desespérée , ne jugèrent pas à propos de les charger. On leur fit offrir la paix , en leur promettant qu'on leur accorderoit de sortir

A R T A- d'Egypte, & qu'on leur laisseroit un
X E R X E passage libre pour retourner dans leur
pays, soit par mer soit par terre. Ils
acceptèrent ces conditions, mirent
les vainqueurs en possession de By-
blos & de toute l'île, & s'en allèrent
par terre à Cyrène, où ils s'embar-
quèrent pour la Grèce. Mais la plu-
part des troupes qui avoient été em-
ployées dans cette expédition y péri-
rent.

Ce ne fut pas encore tout ce que les
Athéniens y perdirent. Une autre flotte
de cinquante voiles qu'ils envoioient
au secours de leurs gens assiégés, en-
tra dans une des bouches du Nil fort
peu de tems après que la place eut été
rendue, dans le dessein d'aller les dé-
gager, ne sachant encore rien de ce
qui étoit arrivé. A peine y étoit-elle
entrée, que la flotte de Perse qui tenoit
la mer, vint l'y attaquer par derrière,
pendant que l'armée lui faisoit des
décharges de traits de dessus les bords
de la rivière. Il n'en échapa que quel-
ques vaisseaux qui percèrent au tra-
vers de la flotte ennemie, & tout le
reste y périt. Ainsi finit la funeste
guerre que les Athéniens firent en
Egypte, & qui dura six ans. Après

cela l'Egypte retourna sous le joug LONGUE-
 des Perses, & y demeura pendant tout MAIN.
 le reste du règne d'Artaxerxe. C'en
 étoit pour lors la vingtième année. AN.M. 3550.
 Mais le sort des prisonniers qu'on avoit AV.J.C. 454.
 fait dans cette guerre fut bien triste.

§. V. *Inarus livré à la mere du Roi contre
 la foi du traité. Douleur de Mégabyze.
 Sa revolte.*

ARTAXERXE, après avoir résisté AN.M. 3556.
 pendant cinq ans aux vives sollicita- AV.J.C. 448.
 tions & aux importunités continuelles Ctes. cap. 35.
 de sa mere, qui lui demandoit Inarus
 & les Athéniens qui avoient été pris
 avec lui en Egypte, pour les sacrifier
 aux manes de son fils Achéménide,
 les lui accorda enfin. Aveuglé &
 cruelle foiblesse d'un Prince, qui se
 rend perfide, pour être complaisant,
 & qui, malgré les remords de sa
 conscience, viole son serment & le
 droit des gens, de peur d'affliger une
 mere injuste ! Cette Princesse inhu-
 maine, sans aucun égard pour la foi Thucyd. libe
 donnée, fit crucifier Inarus, & tran- 1. P. 72.
 cher la tête à tout le reste. Mégabyze
 en fut au desespoir. Comme il leur
 avoit donné sa parole qu'il ne leur
 feroit fait aucun mal, l'affront re-

AR T A- tomboit principalement sur lui. Il
X E R X E quitta la Cour, & se retira en Syrie
dont il étoit Gouverneur; & son mé-
contentement alla jusqu'à lever une
armée, & à se révolter ouvertement.

Le Roi envoya contre lui Osiris
avec une armée de deux cens mille
hommes. Cet Osiris étoit un des
grands Seigneurs de sa Cour. Mégabyze lui livra bataille, le blessa, le fit
prisonnier, & mit en fuite son armée.
Artaxerxe le fit redemander; & Mégabyze le lui renvoia généreusement
dès qu'il fut guéri.

L'année suivante le Roi envoya
contre lui une autre armée, dont il
donna le commandement à Ménostane
fils d'Artarius, frere du Roi, &
Gouverneur de Babylone. Ce Général
ne fut pas plus heureux que l'autre. Il
fut aussi battu, & mis en fuite: &
cette victoire de Mégabyze ne fut
pas moindre que la précédente.

Artaxerxe voyant qu'il ne le pou-
voit réduire par la force, lui envoya
son frere Artarius, & sa sœur Amytis,
qui étoit femme de Mégabyse, avec
plusieurs autres personnes de la pre-
mière qualité, pour le porter à ren-
trer dans son devoir. Leur négocia-
tion

tion réussit : le Roi lui pardonna, & LONGUE-
il revint à la Cour. MAIN.

Un jour qu'ils étoient à la chasse, un lion s'étant levé sur ses jambes de derrière prêt à se lancer sur le Roi, Mégabyze effraïé du danger où il le voioit, par affection & par zèle pour lui, lança un dard, & tua le lion. Artaxerxe, sous prétexte qu'il avoit manqué de respect pour son Prince en frappant la bête avant lui, ordonna qu'on lui tranchât la tête. Sa sœur Amytis, & sa mere Amestris, eurent bien de la peine à obtenir que cette sentence fût mitigée, & changée en un exil perpétuel. Il fut envoyé à Cyrta, ville située sur la mer rouge, & condamné à y finir ses jours. Mais, au bout de cinq ans, il se sauva déguisé en lépreux, & revint chez lui à Suse, où, par le moien de sa femme & de sa belle-mere, il rentra encore en grace, & même en faveur. Il s'y conserva jusqu'à sa mort, qui arriva quelques années après dans sa soixante & seizième année. Il fut extrêmement regretté du Roi & de toute la Cour. C'étoit le plus habile homme du royaume, aussi bien que le meilleur Capitaine. Artaxerxe lui devoit

ARTAXERXE

& la couronne, & la vie : ^a mais il est bien dangereux à un sujet que son Maître lui ait de trop grandes obligations. Ce fut ce qui causa tous les malheurs qui arrivèrent à celui-ci.

On est surpris de voir qu'un Prince d'un esprit aussi solide qu'étoit Artaxerxe, ait été capable de prendre jalousie contre un Seigneur de sa Cour, parce que dans une partie de chasse il avoit frappé le premier la bête qu'on poursuivoit. Y a-t-il une foiblesse pareille à celle-là, & est-ce là placer en Roi le point d'honneur ? Cependant l'histoire nous en fournit plusieurs exemples. Un mot de Plutarque me feroit croire qu'Artaxerxe eut honte de l'excès furieux où cette fausse délicatesse de gloire l'avoit porté, & qu'il en fit une espèce de réparation publique. Car, selon cet Auteur, il déclara par une Ordonnance qu'il seroit permis à quiconque assisteroit à la chasse avec le Prince de lancer le premier un trait contre la bête s'il le pouvoit ; & il fut le premier, dit Plutarque, qui donna cette permission.

*Plut. in
Apophthegm.
pag. 173.*

a Beneficia eò usque
Ista sunt, dum videtur | antevertere, pro gratia
exolvi possit: ubi multum | odium redditur. *Tacit.
Annal. lib. 4. cap. 18.*

§. VI. *Artaxerxe envoie à Jérusalem* LONGUE-
d'abord Esdras, puis Néhémie. MAIN.

AVANT QUE de continuer ce qui regarde l'histoire des Perses & des Grecs, je rapporterai en peu de mots ce qui arriva pendant les vingt premières années d'Artaxerxe chez le peuple de Dieu : c'est une partie essentielle de l'histoire de ce Prince.

La septième année d'Artaxerxe, AN. M. 3517.
 Esdras obtint du Roi & de ses sept AV. J. C. 467.
 Conseillers une ample commission, ESDR. c. 7. & c.
 pour retourner à Jérusalem avec tous ceux de sa nation qui voudroient l'y suivre, pour y rétablir l'Etat & la Religion des Juifs, & régler l'un & l'autre selon leurs propres loix. Esdras étoit des descendans de Saràia, qui étoit Souverain Pontife lors de la destruction de Jérusalem par Nabucodonosor, & qui fut tué par son ordre. Il n'étoit pas moins savant que pieux. Ce qui le distinguoit particulièrement des autres Juifs, étoit d'être fort versé dans la connoissance des saintes Ecritures : c'est pourquoi il est qualifié de *Docteur bien exercé dans la loi du Dieu du ciel.* Il partit de Babylone avec les dons & les offrandes dont le Roi, &

ARTAXER-
XE

ceux de sa Cour, & sous ceux d'Israel qui étoient restés à Babylone, l'avoient chargé pour le temple, & qu'il remit exactement entre les mains des sacrificateurs, dès qu'il fut arrivé à Jérusalem. Il paroît par la commission que lui donna Artaxerxe, que ce Prince avoit beaucoup de respect pour le Dieu d'Israel, puisqu'en ordonnant à ses Officiers de fournir exactement aux Juifs tout ce qui sera nécessaire pour le culte de leur Dieu, il ajoute, *de peur que sa colère ne s'allume contre le royaume du Roi & de ses enfans.* Cette commission l'autorisoit, comme je l'ai déjà dit, à régler la Religion & l'Etat des Juifs selon la loi de Moÿse, à rétablir des Magistrats & des Juges pour punir les réfractaires, non seulement par emprisonnement & par confiscation de biens, mais encore par l'exil, & même par la peine de mort, selon la nature des crimes dont ils seroient trouvés coupables. Tel fut le pouvoir dont Esdras fut revêtu, & qu'il exerça fidèlement pendant treize ans, jusques à ce que Néhémie arriva de la Cour de Perse avec une nouvelle commission.

AN.M.3550.
AV.J.C.454.

Nehem. cap.
1. & 2.

Néhémie étoit Juif aussi, d'une

piété & d'un mérite distingué, & grand Echanfon du roi Artaxerxe. Cette charge étoit très confidérable à la Cour de Perfe, à caufe du privilège qu'elle donnoit d'approcher fouvent de la perfonne du Prince, & de lui parler dans les momens les plus favorables. Ni l'éclat de cette charge, ni l'établiffement fixe de fa famille dans ce pays de captivité, ne lui firent oublier la patrie de fes ancêtres, ni leur religion : fon amour pour l'une, & fon zèle pour l'autre, ne fe refroidirent point ; & fon cœur étoit toujours à Sion. Quelques Juifs, venus de Jérufalem, lui aiant représenté le trifte état où fe trouvoit cette ville ; fes murailles détruites, fes portes confumées par le feu, les habitans expofés par là aux infultes de leurs ennemis & au mépris de tous leurs voifins : le danger & l'affliction de fes freres firent fur fon cœur toute l'impreffion qu'on pouvoit attendre de fa piété. Un jour, qu'il faisoit les fonctions de fa charge, le Roi lui aiant remarqué un air de triftelfe qu'il n'avoit pas accoutumé d'avoir, lui en demanda la caufe ; ce qui marque dans ce Prince un fonds

A R T A-de bonté, rare dans les personnes de
X E R X E son rang, & néanmoins beaucoup
plus estimable que les qualités les
plus brillantes. Néhémie saisit cette
occasion pour lui parler du triste état
où se trouvoit son pays; lui avoua
que c'étoit là le sujet de son affliction;
& le supplia de lui permettre d'aller à
Jérusalem, pour en réparer les forti-
fications. Les Rois de Perse ses pré-
décesseurs avoient permis aux Juifs
de rebâtir le temple, mais non pas de
relever les murs de Jérusalem. Artaxerxe sur le champ fit dresser un Dé-
cret, portant ordre de rebâtir les mu-
railles & les portes de Jérusalem.
Néhémie, en qualité de Gouverneur
de Judée, étoit chargé du Décret &
de l'exécution. Pour lui faire encore
plus d'honneur, le Roi lui donna une
escorte de cavalerie, commandée par
un Officier considérable, pour le me-
ner sûrement. Il écrivit aussi à tous les
Gouverneurs des provinces de deçà
l'Euphrate, de l'assister de tout leur
pouvoir dans l'ouvrage pour lequel il
étoit envoyé. Ce pieux Juif s'acquitta
de sa commission avec un zèle & une
activité incroyable.

C'est de ce Décret, donné par Ar-

taxerxe la vingtième année de son LONGUE-
règne pour rebâtir les murs de Jérusalem, que se prend le commence-

ment des soixante-dix semaines d'années de la célèbre prophétie de Daniel, après lesquelles le Messie devoit paroître, & être mis à mort. Je la rapporterai ici toute entière, mais sans en donner l'explication, que l'on peut trouver ailleurs, & qui ne fait point partie de l'histoire.

*Dan. cap. 9.
v. 24-27.*

« Soyez attentif à ce que je vais « vous dire, & comprenez cette vision. Dieu a abrégé & fixé le tems à soixante & dix semaines en faveur de votre peuple & de votre ville sainte, afin que ses prévarications soient abolies ; que le péché trouve sa fin ; que l'iniquité soit effacée ; que la justice éternelle vienne sur la terre ; que les visions & les prophéties soient accomplies ; & que le Saint des Saints soit oint de l'huile sacrée. Sachez donc ceci, & gravez-le dans votre esprit : DEPUIS L'ORDRE QUI SERA DONNÉ POUR REBÂTIR JERUSALEM jusqu'au Christ chef de mon peuple, il y aura sept semaines & soixante & deux semaines ; & les places & les murailles de »

*Dan. cap. 9.
v. 23-26.*

A R T A- » la ville seront bâties de nouveau
X E R X E » parmi les tems fâcheux & difficiles.

» Et après soixante & deux semaines,
» le Christ sera mis à mort ; & le peu-
» ple qui le doit renoncer ne sera
» point son peuple. Un peuple , avec
» son chef qui doit venir , détruira
» la ville & le sanctuaire ; elle finira
» par une ruine entière , & la déso-
» lation qui lui a été prédite arrivera
» après la fin de la guerre. Il confirme-
» ra son alliance avec plusieurs dans
» une semaine , & à la moitié de la
» semaine les hosties & les sacrifices
» seront abolis , l'abomination de la
» désolation sera dans le temple , &
» la désolation durera jusqu'à la con-
» sommation & jusqu'à la fin.

*M. Biffnet,
Hist. univ.*

Lors qu'Esdras étoit en autorité ,
comme son principal but étoit de ré-
tablir la religion dans son ancienne
pureté , il mit en ordre les Livres
saints, dont il fit une exacte révision,
& ramassa les anciens mémoires du
peuple de Dieu pour en composer
les deux livres de Paralipomènes ou
Chroniques , auxquels il ajouta l'hi-
stoire de son tems , qui fut achevée
par Néhémie. C'est par leurs livres
que se termine cette longue histoire

que Moyse avoit commencée, & que **LONGUE-**
 les Auteurs suivans continuèrent sans **MAIN.**
 interruption jusqu'au rétablissement
 de Jérusalem. Le reste de l'Histoire
 sainte n'est pas écrit dans la même
 suite. Pendant qu'Esdras & Néhémie
 faisoient la dernière partie de ce grand
 ouvrage, Hérodote, que les Auteurs
 profanes appellent le pere de l'histoi-
 re, commençoit à écrire. Ainsi les
 derniers Auteurs de l'histoire sainte se
 rencontrent avec le premier Auteur
 de l'histoire Grecque; & quand elle
 commence, celle du peuple de
 Dieu, à la prendre seulement depuis
 Abraham, enfermoit déjà quinze
 siècles. Hérodote n'avoit garde de
 parler des Juifs dans l'histoire qu'il
 nous a laissée; & les Grecs n'avoient
 besoin d'être informés que des peu-
 ples que la guerre, le commerce, ou
 un grand éclat leur faisoit connoître.
 La Judée, qui commençoit à peine à
 se relever de sa ruine, n'attiroit pas
 alors les regards.



ARTAXERXES

§. VII. *Caractère de Périclès. Moïens qu'il emploie pour gagner le peuple.*

JE REVIENS à la Grèce. Depuis la retraite de Thémistocle , & la mort d'Aristide dont le tems précis n'est point marqué , deux citoyens partagèrent le crédit & l'autorité à Athènes , Cimon & Périclès. Le dernier étoit beaucoup plus jeune que l'autre , & d'un caractère bien différent. Comme il jouera un grand rôle dans l'histoire qui va suivre , il est important de bien connoître qui il étoit , comment il avoit été élevé , quel plan & quelle route il suivit dans le gouvernement.

Plut. in vit. Pericl. p. 153-155.

Périclès, des deux côtés, descendoit des premières maisons & des plus illustres familles d'Athènes. Son pere Xanthippe, qui battit à Mycale les Lieutenans du Roi de Perse , épousa Agariste , nièce de Clisthène , qui chassa les Pisistratides , & établit à Athènes le gouvernement populaire. Périclès s'étoit préparé de loin au dessein qu'il avoit d'entrer dans le maniement des affaires publiques.

Il eut pour maîtres les plus savans hommes de son tems , & sur tout

Anaxagore de Clazoméne, surnom- LONGUE-
 mé *l'Intelligence*, parce qu'il fut, dit- MAIN.
 on, le premier qui attribua les évé-
 nemens humains, aussi bien que la
 formation & le gouvernement de l'u-
 nivers, non au hazard, comme quel-
 ques-uns, ni à une fatale nécessité,
 mais à une intelligence supérieure qui
 régloit & conduisoit tout avec sa-
 gesse. Ce dogme, ce sentiment, étoit
 bien plus ancien que lui : peut-être
 qu'il le mit dans un plus grand jour
 que tous les autres, & l'enseigna avec
 méthode & par principes. Anaxagore
 instruisit à fond son disciple de cette
 partie de la philosophie qui regarde
 les choses naturelles, & qui pour cette
 raison est appelée * physique. Cette
 étude lui donna une force & une
 grandeur d'ame qui l'éleva au-dessus
 d'une infinité de préjugés populaires,
 & de vaines observances générale-
 ment établies de son tems, qui, dans
 les affaires de l'Etat & dans les entre-
 prises de la guerre, rompoient sou-
 vent les mesures les plus sages & les
 plus nécessaires, ou les faisoient

* Les anciens, sous ce nom, comprenoient ce que nous appellons Physique & Métaphysique : c'est-à-dire

la science des choses spiri- tuelles, Dieu & les esprits, & celle des corps.
--

A R T A-échouer par de scrupuleux délais, au-
X E R X Etorisés & couverts du voile de la religion. Tantôt c'étoit des songes ou des augures ; tantôt d'effraians phénomènes, comme des éclipses de soleil ou de lune ; d'autres fois des présages & des pressentimens, sans parler des folies de l'astrologie judiciaire. La connoissance des choses naturelles, dégagée des basses & timides superstitions qu'engendre l'ignorance, lui inspira, dit Plutarque, une piété solide à l'égard des dieux, accompagnée d'une fermeté d'ame inébranlable, & d'une tranquille espérance des biens qu'on doit attendre d'eux. Quelque attrait qu'eût pour lui cette étude, il ne s'y livra pas en philosophe, mais s'y appliqua en politique ; & il fut, chose fort difficile, se prescrire des bornes dans la carrière de la science.

Mais le talent qu'il cultiva avec le plus de soin, parce qu'il le regardoit comme l'instrument le plus nécessaire à quiconque veut conduire & manier le peuple, fut celui de la parole. En effet, c'est par là que dans une République comme celle d'Athènes, on dominoit dans les assemblées, qu'on

entraînoit les suffrages, qu'on se ren- LONGUE-
 doit maître des affaires, & qu'on MAIN.
 exerçoit sur les esprits & sur les cœurs
 un empire absolu. Il tourna donc toutes
 ses vûes de ce côté-là; il raporta
 & fit servir à ce but toutes ses autres
 connoissances; & tout ce qu'il avoit
 appris d'Anaxagore, ^a mettant, pour
 me servir de l'expression même de
 Plutarque, l'étude de la philosophie
 à la teinture de la rhétorique: c'est-
 à-dire que pour orner & embellir son
 discours, il prétoit à la force & à la
 solidité du raisonnement les couleurs
 & les graces de l'éloquence.

Il n'eut pas lieu de se repentir du
 tems qu'il avoit donné à cette étude:
 car le succès passa toutes ses espéran-
 ces. ^b Les poëtes de son tems disoient
 de lui qu'il foudroioit, qu'il tonnoit,
 qu'il mettoit toute la Grèce en mou-
 vement, tant il excelloit dans le talent
 de la parole. ^c Il avoit de ces traits vifs

^a Βαφῆ τῇ ῥητορικῇ τῇ
 φιλοσοφίᾳ ὑποχρεῖται.

^b Ab Aristophane poeta
 fulgurare, tonare, per-
 miscere Græciam dictus
 est. *Cic. in Orat. n. 29.*

^c Quid Pericles? De
 ejus dicendi copia sic
 accepimus, ut, cum

contra voluntatem Athe-
 nienfium loqueretur pro
 salute patriæ, severius
 tamen id ipsum, quod
 ille contra populares ho-
 mines diceret, populare
 omnibus & jucundum
 videretur: ejus in labris
 veteres comici.... lepo-

A R T A- & perçans qui touchent & qui péné-
 X E R X E trent, & son discours laissoit toujours
 dans l'esprit des auditeurs comme
 une pointe & un éguillon. Il savoit
 joindre l'agrément à la force, & Ci-
 céron remarque que dans le tems
 même qu'il combattoit avec le plus
 de fermeté le goût & les desirs des
 Athéniens, il avoit l'art de rendre po-
 pulaire la sévérité même & l'espece
 de dureté avec laquelle il parloit con-
 tre les flatteurs du peuple. On ne pou-
 voit se défendre de la solidité de ses
 raisonnemens, ni de la douceur de ses
 paroles; ce qui faisoit dire que la
 déesse de la persuasion avec toutes ses
 graces résidoit sur ses levres. Aussi,

* Ce n'est pas l'historien. comme un jour on demandoit à *
 Thucydide, son adversaire & son ri-
 val, qui de lui ou de Périclès lutoit le
 mieux: » Quand je l'ai renversé par
 » terre en lutant, repliqua-t-il, il as-
 » sure le contraire avec tant de force,
 » qu'il persuade en effet à tous les
 » assistans, contre le témoignage de
 » leurs propres yeux, qu'il n'est point
 » tombé ». Il n'étoit pas moins pu-
 rem habitasse dixerunt: quasi aculeos quosdam
 tantamque vim in eo relinqueret. Cic. lib. 3. de
 fuisset, ut in eorum men- Orat. n. 138.
 tibus, qui audissent,

dent & réservé dans ses discours, que LONGUE-
 fort & véhément ; & l'on a remarqué MAIN.
 qu'il ne parla jamais en public sans
 avoir prié les dieux de ne pas permet-
 tre qu'il lui échapât aucune expression
 qui ne fût propre à son sujet, ou qui
 pût choquer le peuple. Quand il de-
 voit paroître dans l'assemblée, avant
 que de sortir, il se disoit à lui-même :
*Songebien, Périclès, que tu vas parler à
 des hommes libres, à des Grecs, à des
 Athéniens.*

*Plut. in
 Symp. lib. 2.
 pag. 620.*

Ce que les historiens rapportent du
 soin qu'eut Périclès de cultiver son
 esprit par l'étude des sciences, & de
 s'exercer dans le talent de la parole,
 est une grande leçon pour les person-
 nes destinées aux places importantes
 de l'Etat ; & une juste condamnation
 de ^a ceux, qui, faisant peu de cas de
 tout ce qui s'appelle étude & science,
 ne portent dans ces places, où elles
 entrent sans lumières & sans connois-
 sances comme sans vocation, qu'une
 folle estime d'eux-mêmes, & une
 téméraire hardiesse de décider. Plutar-
 que, dans un traité où il montre que

Pag. 777.

^a Nunc contrà plerique ad honores adipiscendos, & ad remp. gerendam, nudi veniunt | & inermes, nulla cognitione rerum, nulla scientia ornati. *Cic. lib. 3. de Orat. n. 136.*

A R T A- c'est aux hommes d'Etat qu'un Philo-
X E R X E sophe doit s'attacher préféablement
 à tous les autres, parce qu'en les for-
 mant il forme des villes & des répu-
 bliques entières, cite en exemples les
 plus grands hommes soit de la Grèce,
 soit de l'Italie, qui ont tiré ce secours
 de la philosophie : Périclès, dont il
 s'agit ici, qui fut instruit par Anaxa-
 gore ; Dion de Syracuse, par Platon ;
 plusieurs Princes d'Italie, par Pytha-
 gore ; Caton, le célèbre Censeur,
 qui fit exprès un voiage pour aller
 trouver Athénodore ; enfin le fameux
 Scipion, destructeur de Carthage,
 qui eut toujours auprès de lui le phi-
 losophe Panétius.

Un des premiers soins de Périclès
 fut aussi d'étudier à fond le génie des
 Athéniens, afin de connoître les res-
 sorts secrets qu'il falloit mettre en
 mouvement pour les faire agir, & la
 manière dont il falloit se conduire à
 leur égard pour gagner leur confian-
 ce.^a Car c'est en cela sur tout qu'an-
 ciennement ces grands hommes fai-

^a Olim noscenda vulgi | mè perdidicerant, callidi
 natura, & quibus modis | temporum & sapientes
 temperanter haberetur ; | habebantur. Tacit. An-
 Senatusque & optima- | nal. lib. 4. cap. 33.
 tium ingenia, qui maxi-

ient consister leur habileté & leur LONGUE-
MAIN.
olitique. Il reconnut, par les réflexions qu'il faisoit sur tout ce qui s'étoit passé de son tems, que ce qui dominoit dans ce peuple, étoit une haine souveraine de la tyrannie, & un amour violent de la liberté, qui lui inspiroient des sentimens de crainte, de jalousie, & de défiance à l'égard des citoyens qui étoient trop distingués par leur naissance, par leur mérite personnel, par leur propre crédit, ou par celui de leurs amis. Outre qu'il ressembloit fort à Pisistrate par la douceur de sa voix, & par sa grande facilité à parler, il avoit aussi beaucoup de son air & des traits de son visage; & il remarqua que les plus vieux de la ville, qui avoient pu voir le Tyran, étoient extrêmement frappés de cette ressemblance. D'ailleurs il étoit fort riche, d'une naissance illustre, & avoit beaucoup d'amis très-puissans. Afin donc de ne se point rendre suspect au peuple, & pour ne point réveiller sa jalousie, il évita d'abord de se mêler des affaires publiques qui demandoient une résidence assidue à la ville, & ne songea à se distinguer qu'à la guerre & dans les dangers.

Mais voyant Aristide mort, Thémistocle chassé, & Cimon retenu la plupart du tems hors de la Grèce par des guerres étrangères, il commença à se produire en public avec plus de hardiesse, & se tourna entièrement du côté du peuple, non par goût ni par inclination, car son caractère n'étoit nullement populaire, mais pour écarter de soi tout soupçon qu'il songeât à la tyrannie, & encore plus pour se faire un ferme rempart contre le crédit & l'autorité de Cimon, qui étoit déclaré pour le parti des Nobles.

En même tems il changea toutes ses façons de faire, & sa manière de vivre, & prit en tout le caractère & la conduite d'un homme d'Etat, tout occupé des affaires, tout consacré au public. Jamais il ne paroissoit dans les rues que pour aller à l'assemblée du peuple, ou au Conseil. Il renonça tout d'un coup à tous les festins, aux assemblées, & aux autres plaisirs de cette nature, auxquels il étoit accoutumé; & pendant tout le tems qu'il gouverna la République, qui fut assez long, on ne le vit jamais aller souper chez ses amis, qu'une seule fois aux noces d'un de ses plus proches parens.

Il a savoît que le peuple , naturel- LONGUE-
MAIN.

lement léger & inconstant, se dégou- Plus. de sui-
lande. p. 541.

te ordinairement de ceux qui sont
toujours sous ses yeux , & qu'un trop
grand empressement à lui plaire le
lasse & l'importune : & l'on remar-
que que cette conduite nuit beau-
coup à Thémistocle. Pour éviter cet
inconvenient , il alloit rarement aux
assemblées , & ne se présentoit de-
vant le peuple que par intervalles ,
afin de s'en faire désirer , & de con-
server auprès de lui un crédit tou-
jours nouveau , & qui ne fût point
usé & comme flétri par une trop
grande assiduité ; se réservant avec
prudence pour les grandes & impor-
tantes occasions. C'est ce qui fit dire Plus. de ger-
rep. pag. 821.
qu'il imitoit Jupiter , lequel , selon le
sentiment de quelques philosophes ,
ne s'occupoit dans le gouvernement
du monde que des grands événe-
mens , & laissoit le soin du détail à
des divinités subalternes. En effet,
pour ce qui regardoit toutes les af-
faires de peu d'importance , Périclès
les faisoit par l'entremise de ses amis ,

a Ista nostra assiduitas, | tictatis . . . Utrique no-
Servi, nescis quantum in- | strum desiderium nihil
terdum afferat homini- | obfuisse. Cic. pro Mur.
bus fastidii, quantum sa- | n. 21.

ARTAXERXES & par quelques orateurs qu'il avoit en sa disposition, du nombre desquels étoit Ephialte.

Plut. in Pericli pag. 156.

Il mit toute son application & toute son industrie à se concilier la faveur du peuple, pour contrebalancer le crédit & la gloire de Cimon. Mais il ne pouvoit égaler la magnifique & généreuse libéralité de son rival, qui par ses richesses immenses se trouvoit en état de faire des largesses, qui à peine nous paroissent croiables, tant elles sont éloignées de nos mœurs. Ne pouvant l'égaliser de ce côté-là, il employa un autre moien, non moins efficace peut-être, mais certainement moins légitime & moins honorable, pour gagner la populace. Il fut le premier qui fit partager aux citoyens les terres conquises, qui leur fit distribuer pour leurs jeux & pour leurs spectacles les deniers publics, & qui leur attribua des salaires pour toutes leurs fonctions publiques; de sorte qu'on leur donnoit régulièrement de certaines sommes, tant pour leur place aux jeux, que pour leur assistance aux Tribunaux & au jugement des affaires. On ne peut dire combien cette malheureuse politique devint funeste

la République, & combien elle en- LONGUE
raîna de maux après elle. Car ces MAIN.
nouveaux établissemens, outre qu'ils
épuisoient le trésor public, rendirent
le peuple somptueux & dissolu, au
lieu qu'auparavant il étoit sobre &
modeste, & se contentoit de gagner
par son travail & à la sueur de son
corps de quoi subsister.

Mais Périclès ne s'en tint pas là. *Plut. in Pericl. p. 157.*
Il entreprit d'affoiblir & d'abaisser le *In Cim. pag. 488.*
Tribunal de l'Aréopage, dont il n'é-
toit pas, parceque le sort ne lui étoit
jamais échu d'être ni * Archonte, ni
Thesmothète, ni Roi des sacrifices, ni
Polémarque. C'étoient différentes
charges de la République, qui de
toute ancienneté se donnoient par
sort; & il n'y avoit que ceux qui y
avoient bien servi qui pussent mon-
ter à l'Aréopage. Périclès, profitant
de l'absence de Cimon, fit agir sous
main Ephialte, qui lui étoit entière-

* Après quelques chan-
gemens dans la forme du
gouvernement d'Athènes,
on confia enfin l'autorité à
neuf Magistrats, apellés
Archontes; & elle ne duroit
qu'un an. L'un s'appelloit
Roi; un autre Polémarque;
un troisième, Archonte,

& c'étoit lui proprement
qui étoit à la tête des au-
tres, & qui donnoit son
nom à l'année; & six
Thesmothètes, qui avoient
une intendance particuliè-
re sur les loix & sur les dé-
crets.

ARTAXERXES - ment dévoué, & vint à bout d'humilier cette illustre Compagnie, qui faisoit la principale force des Nobles. Le peuple, enhardi & soutenu par une si puissante faction, bouleversa tout l'ancien ordre du gouvernement, renversa toutes les loix fondamentales & les anciennes coutumes, ôta au Sénat de l'Aréopage la connoissance de la plupart des causes qui alloient devant lui, ne lui laissant que les plus communes & en très petit nombre, & se rendit maître absolu de tous les tribunaux.

Quand Cimon fut de retour à Athènes, il vit avec douleur la dignité du Sénat foulée aux piés, & tâcha par toutes sortes de moyens de le faire rentrer en possession de son autorité, & de remettre sur pié l'Aristocratie, telle qu'elle avoit été établie du tems de Clisthène. Mais ses ennemis se mirent à crier, & à exciter contre lui le peuple, en lui reprochant, outre beaucoup d'autres choses, le grand attachement qu'il avoit pour les Lacédémoniens. Il avoit donné lieu en quelque sorte à ce reproche, en ne ménageant pas assez la délicatesse des Athéniens. Car, en leur parlant, il

ne cessoit à tout propos d'exalter La-Longue-
cédémone ; & lorsqu'il blamoit en MAIN.
quelque chose leur conduite , il avoit
toujours coutume de leur dire , *Ce
n'est pas là ce que font les Spartiates.*
De tels discours lui attirèrent l'envie
& la haine de ses citoiens. Mais un
événement , auquel pourtant il n'a-
voit point eu de part, y mit le comble.

§. VIII. *Tremblement de terre à Sparte.
Sédition des Ilotes. Semences de divi-
sion entre Athènes & Sparte. Cimon
est banni.*

LA QUATRIÈME année du règne Plut. in Cim.
p. 488. 479.
d'Archidamus , il y eut à Sparte le
plus terrible tremblement de terre
dont ont eût jamais oui parler. En
plusieurs endroits le pays fut englou-
ti dans des abîmes , le Taygète & les
autres monts furent ébranlés jusques
dans leurs fondemens , plusieurs de
leurs sommets détachés de leur place
s'écroulèrent , toute la ville fut bou-
levercée , excepté cinq maisons qui
restèrent seules au milieu de cette dé-
solation épouvantable. Pour comble
de malheur , les Ilotes , qui étoient
les esclaves des Lacédémoniens , ju-
geant que c'étoit une occasion favo-

ARTAXERXES

able de se remettre en liberté, accoururent de toutes parts pour exterminer ceux que le tremblement de terre avoit épargnés. Mais les aiant trouvé armés & en bataille par la sage prévoyance d'Archidamus qui les avoit assemblés autour de lui, ils se retirèrent dans les villes voisines, & commencèrent dès ce jour-là à leur faire une guerre ouverte, aiant attiré dans leur ligue plusieurs de leurs voisins, & se sentant fortifiés par les Messéniens, qui étoient alors actuellement en guerre avec les Spartiates.

Dans cette extrémité, les Lacédémoniens envoièrent à Athènes demander du secours. Ephialte s'y opposoit, & protestoit qu'on ne devoit point les secourir, ni relever une ville rivale d'Athènes, mais qu'il falloit la laisser ensevelir dans ses abymes, & tenir ainsi l'orgueil de Sparte humilié. Une telle politique fit horreur à Cimon. Il n'hésita pas un moment à préférer l'utilité des Lacédémoniens à l'aggrandissement de sa patrie, & représentant avec vivacité qu'il ne convenoit pas de *laisser la Grèce boiteuse, ni Athènes sans contrepoids*, il entraîna le peuple dans son sentiment, & fit

& fit ordonner du secours. Sparte & Longue-
Athènes pouvoient être regardées en MAIN.
effet comme les deux soutiens, les

deux appuis de la Grèce : ainsi, l'une venant à périr, la Grèce demeurait comme boiteuse. Il est certain encore que le peuple d'Athènes, enflé de sa grandeur, étoit devenu si fier & si entreprenant, qu'il avoit besoin d'un frein pour modérer sa fougue ; & il n'y en avoit pas de meilleur que Sparte, seule capable de servir de contrepoids à l'emportement des Athéniens. Cimon marcha donc au secours des Lacédémoniens avec quatre mille hommes.

On voit ici ce que peut dans une République, dans un État, un homme de tête & de bon conseil, quand il joint à un grand fonds de mérite une réputation bien établie de probité, de désintéressement, d'amour du bien public. Cimon vient à bout, sans beaucoup de peine, d'inspirer aux Athéniens des sentimens nobles & magnanimes contre leurs intérêts apparens, & malgré les sollicitations d'une jalousie secrète, qui ne manque pas de se faire sentir vivement dans de telles occasions. Par le crédit

ARTAXERXES & l'ascendant que sa vertu lui donne , il les élève au dessus d'une politique lâche & injuste , mais assez ordinaire , qui fait regarder les malheurs des voisins comme un avantage , dont l'intérêt de l'Etat permet & ordonne même de profiter. Les conseils de Cimon étoient pleins de sagesse & d'équité ; mais il est étonnant qu'il ait pu les faire goûter à tout un peuple : c'est tout ce que l'on pourroit espérer d'une assemblée de sages & de graves Sénateurs.

*Plut. lib.
Thucyd lib. 1,
p. 67, & 68.*

Quelque tems après les Lacédémoniens appellèrent encore les Athéniens à leur secours contre les Méséniens & les Ilotes, qui s'étoient emparés d'Ithome. Mais quand ces troupes furent arrivées sous la conduite de Cimon, ils commencèrent à craindre leur audace , leur puissance , & leur grande réputation ; & leur firent l'affront de les renvoyer comme suspects de mauvais desseins , & capables de tourner leurs armes contre eux.

Les Athéniens s'en étant retournés pleins de colère & de ressentiment, se déclarèrent , dès ce jour-là , ennemis de tous ceux qui prenoient les inté-

rêts de Lacédémone ; & à la première occasion qu'ils en trouvèrent , ils bannirent Cimon par la voie de l'OSTRACISME. Voilà la première occasion où parut d'une manière fort marquée la mesintelligence entre ces deux peuples , qui s'entretint & se fortifia depuis par divers mécontentemens réciproques. Elle fut néanmoins suspendue pendant quelques années par des traités & des trêves qui en arrêtoient les suites ; mais elle éclata enfin sans ménagement par la guerre du Péloponnèse.

Ceux qui étoient enfermés dans Ithome , après s'y être défendus pendant dix ans , se rendirent aux Lacédémoniens , qui leur laissèrent la vie sauve , à condition qu'ils ne rentroient jamais dans le Péloponnèse. Les Athéniens , en haine de Lacédémone , les reçurent avec leurs femmes & leurs enfans , & les établirent à Naupaëte dont ils venoient de se rendre maîtres. Les Mégariens en même tems quittèrent le parti de Sparte , pour embrasser celui des Athéniens. Il se forma ainsi plusieurs ligues des deux côtés : il se donna plusieurs combats , dont le plus célèbre fut ce-

LONGUE-
MAIN.

Thucyd. lib.
1. pag. 69-71.
Diod. lib. 11.
pag. 59-65.

A R T A- lui de Tanagre en Béotie , que Dio-
X E R X E égale à ceux de Marathon &
 — de Platée , & où Myronide Chef des
 Athéniens vainquit les Spartiates qui
 étoient venus au secours des Thé-
 bains.

*Plut. in Cim.
 pag. 489.*

C'est dans cette occasion que Ci-
 mon , se croiant dispensé de garder
 son ban , se rendit avec ses armes
 dans sa tribu pour servir sa patrie ,
 & pour combattre avec ses compa-
 triotes contre les Lacédémoniens. Ses
 ennemis lui firent donner un ordre de
 se retirer. Avant que de partir , il ex-
 horta ses compagnons , qu'on soup-
 connoit aussi bien que lui d'être fa-
 vorables à Lacédémone , de combat-
 tre de toutes leurs forces & sans se
 ménager, afin que cette journée servît
 de preuve à leur innocence , & effaçât
 de l'esprit de leurs citoiens un soupçon
 qui leur étoit à tous si injurieux. Ces
 braves soldats , qui étoient au nom-
 bre de cent , animés par ces paroles,
 lui demandèrent son armure complè-
 te , qu'ils placèrent au milieu de leur
 petit bataillon , afin de l'avoir comme
 présent & sous leurs yeux. Ils combat-
 tirent avec tant de valeur & d'achar-
 nement, qu'ils se firent tous tuer, laif-

font aux Athéniens un regret infini de LONGUE leur perte, & un grand repentir de les MAIN. avoir accusés si injustement.

Je passe sous silence plusieurs événemens qui sont peu considérables.

§. IX. *Cimon est rappelé. Il rétablit la paix entre les deux villes. Il remporte plusieurs victoires qui obligent Artaxerxe de conclure un traité fort glorieux pour les Grecs. Mort de Cimon.*

LES ATHÉNIENS, qui sentoient le Plut. in Cimi. pag. 490. besoin qu'ils avoient de Cimon, le rappellèrent de son bannissement, où il avoit passé cinq ans. Ce fut Périclès même qui en proposa & en dressa le Décret, tant, dit Plutarque, les querelles & les animosités étoient alors modérées, & prêtes à s'appaiser dès que l'utilité publique le demandoit ; & tant l'ambition, qui est une des plus vives & des plus fortes passions, cédoit aux tems, & se conformoit aux besoins de la patrie !

Dès que Cimon fut de retour, il AN.M. 3554. Av. J.C. 450. Plut. ibid. Diod. lib. 12. p. 73. 74. étouffa promptement la guerre qui commençoit à s'allumer entre les Grecs, réconcilia les deux villes, & leur fit conclure une trêve de cinq ans. Et pour ôter aux Athéniens,

ARTAXERXE enflés par tant d'heureux succès, l'envie & l'occasion d'attaquer leurs voisins & leurs alliés, il jugea nécessaire de les mener au loin contre l'ennemi commun, cherchant par cette voie d'honneur à aguerrir en même tems & à enrichir ses citoyens. Il mit donc en mer une flotte de deux cens vaisseaux. Il en envoya soixante en Egypte au secours d'Amyrtée, & alla avec le reste contre l'île de Cypre. Artabaze étoit alors dans ces mers-là avec une flotte de trois cens voiles; & Mégabyze, l'autre Général d'Artaxerxe, avec une armée de trois cens mille hommes sur les côtes de la Cilicie. Dès que l'escadre que Cimon avoit envoyée en Egypte eut rejoint sa flotte, il alla attaquer Artabaze, & lui prit cent de ses vaisseaux. Il en coula à fond plusieurs autres, & poursuivit le reste jusques sur les côtes de Phénicie. Comme si cette première victoire n'eût été qu'une préparation à une seconde, il fit en revenant une descente en Cilicie, chargea Mégabyze, le défit, & lui tua un nombre prodigieux d'hommes. Après cela il retourna en Cypre avec ce double triomphe, &

forma le siège de Citium, qui étoit LONGUE-
MAIN.
une place très forte & très importante. Son dessein étoit, après qu'il auroit achevé la conquête de cette île, de passer en Egypte, & d'y susciter de nouvelles affaires aux barbares. Car il n'avoit point de médiocres vûes, & il ne pensoit à rien moins qu'à ruiner & détruire absolument l'empire du grand Roi de Perse. Le bruit qui couroit que Thémistocle devoit commander son armée, ajoutoit un nouvel éguillon à son courage, & presque sûr du succès il étoit ravi de mesurer ses forces avec lui. Mais nous avons déjà vû que dans ce tems-là même Thémistocle se donna la mort.

Artaxerxe, las d'une guerre où il venoit de faire de si grandes pertes, *Diod. pag. 74.*
75. résolut, de l'avis de son Conseil, d'y mettre fin par un accommodement. Il envoya ordre à ses Généraux ne faire la paix avec les Athéniens, & d'en tirer les meilleures conditions qu'ils pourroient. Mégabyze & Artabaze envoièrent des ambassadeurs en faire l'ouverture à Athènes. On choisit de part & d'autre des Plenipotentiaires : Callias étoit à la tête de ceux

ARTAXERXES d'Athènes. Voici quelles furent les conditions du traité. 1. Que toutes les villes Grecques d'Asie auroient la liberté, & le choix des loix & du gouvernement sous lequel elles voudroient vivre. 2. Qu'aucun vaisseau de guerre Persan n'entreiroit dans les mers qui sont depuis les îles Cyanées jusqu'aux Chélidoniennes ; c'est-à-dire depuis le Pont Euxin jusques aux côtes de la Pamphylie. 3. Qu'aucun Commandant Persan n'approcheroit de ces mers avec des troupes à la distance de trois jours de marche. 4. Que les Athéniens n'attaqueroient plus aucune des terres des Etats du Roi. Ces articles furent ratifiés & jurés de part & d'autre, & la paix proclamée.

AN.M. 3555. Ainsi finit cette guerre, qui, depuis
AV.J.C. 449. que les Athéniens eurent brûlé Sardes, avoit duré cinquante & un ans entiers, & qui avoit coûté la vie à une infinité d'hommes tant du côté des Perses, que de celui des Grecs.

Plut. in Cim. Pendant qu'on travailloit à la conclusion du traité, Cimon mourut, soit de maladie, soit d'une blessure qu'il avoit reçue au siège de Citium. Se voyant près de mourir, il commanda

à les Officiers de remener promptement la flotte à Athènes en cachant soigneusement sa mort. Ce qui fut exécuté avec tant de secret, que ni les ennemis, ni même les alliés, n'en eurent aucune connoissance ; & ils retournèrent chez eux en toute sûreté sous la conduite encore & sous les auspices de Cimon, quoique mort depuis plus de trente jours.

Cimon fut généralement regretté, ^a ce qui n'est pas étonnant à l'égard d'un homme qui réunissoit en lui seul tant d'excellentes qualités : fils plein de tendresse, ami fidèle, citoyen zélé pour sa patrie, grand politique, Général accompli, modeste au milieu des plus grands emplois & des honneurs les plus éclatans, bienfaisant & libéral jusqu'à la magnificence, & presque jusqu'à la prodigalité, simple & éloigné de tout faste dans le sein même de l'abondance & des richesses, enfin amateur des pauvres citoyens, jusqu'à partager avec eux tous ses biens, & à ne point rougir de leur pauvreté. L'histoire ne parle point

^a Sic se gerendo, minimè est mirandum, si & mors acerba. *Cornel. Nep. in Cim. cap. 4.*
& vita ejus fuit secura,

A R T A- de statues ou de monumens érigés
X E R X E en son honneur, ni d'obseques magnifiques célébrés après sa mort. Les regrets du peuple en firent sans doute le plus bel ornement. ^a Et ce sont là des statues permanentes & stables, qui ne sont point sujettes à l'injure des tems, & qui rendent la mémoire des grands hommes respectable à jamais. Car les monumens les plus superbes, les ouvrages de marbre & de bronze qu'on élève à la gloire des Grands, sont méprisés par la postérité comme des sépulcres qui ne renferment que des ossemens de morts, quand elle condamne leur mémoire.

La suite fit encore mieux connoître quelle perte la Grèce avoit faite. Après Cimon, il n'y eut presque plus aucun des Généraux Grecs qui fit rien de considérable ni d'éclatant contre les barbares. Animés par les orateurs, qui se rendoient maîtres du peuple, & qui répandoient dans les assemblées un esprit de trouble & de division, ils se tournèrent les uns con-

^a Hæ pulcherrimæ effigies & mansuræ. Nam, quæ saxo struantur, si judicium posterorum in

odium vertit, pro sepulcris spernuntur. Tacit. *Annal. lib. 4. cap. 32.*

tre les autres , & en vinrent enfin à LONGUE-
 une guerre ouverte, fans que perfon- MAIN.
 ne fongeât à en arrêter les suites fu-
 neftes : ce qui fut un répi bien utile
 pour les affaires du Roi , & la ruine
 de celles des Grecs.

§. X. *On oppose Thucydide à Périclès.
 Envie contre celui-ci. Il se justifie , &
 vient à bout de faire bannir Thucy-
 dide.*

A ATHENES , la Noblesse voiant Plut. in Pé-
 ricl. pag. 158-
 161.
 Périclès au plus haut degré de la puis-
 sance , & fort au dessus de tous les au-
 tres citoiens , chercha à lui opposer
 un homme , qui pût en quelque façon
 lui tenir tête , & empêcher que cette
 grande autorité ne dégénéraît en mo-
 narchie. Elle lui opposa donc Thucy-
 dide , beau-frere de Cimon , homme
 d'une sagesse éprouvée , qui n'avoit
 pas à la vérité les grandes qualités de
 Périclès pour la guerre , mais qui n'é-
 toit pas moins propre que lui à con-
 duire & à manier à son gré les assem-
 blées du peuple , & qui ne sortant ja-
 mais de la ville , & s'attachant tou-
 jours à combattre & à contredire Pé-
 riclès , eut bientôt rétabli l'équilibre.
 Celui-ci , de son côté , cherchant à

ARTAXERXES

plaire en tout au peuple, lui lâcha encore plus la bride qu'il n'avoit fait jusques-là. Il étoit attentif à lui procurer le plus souvent qu'il lui étoit possible, des spectacles, des festins, des fêtes, ou d'autres divertissemens.

Il trouvoit moien de soudoier pendant huit mois de l'année un grand nombre de pauvres citoiens, en les faisant monter sur une flotte de soixante vaisseaux qu'il équipoit tous les ans; & par là il rendoit en même tems un service important à l'Etat, en formant pour sa défense de bons hommes de mer. De plus, il établit plusieurs colonies dans la Chersonnèse, à Naxe, à Andros, dans le pays des Bisaltes en Thrace. Il en envoya une fort nombreuse dans l'Italie dont nous parlerons bientôt, & qui bâtit Thurium. Il avoit plusieurs vûes dans l'établissement de ces colonies, sans parler du dessein particulier qu'il pouvoit avoir de gagner par là le peuple. Il le faisoit pour décharger la ville d'une multitude oisive de fainéans toujours prêts à troubler dans un Etat; pour subvenir aux nécessités du menu peuple, qui n'avoit pas d'ailleurs de quoi subsister; enfin pour re-

tenir les alliés dans la crainte & dans le respect, en établissant chez eux de véritables Athéniens comme autant de garnisons, qui les empêcheroient de songer à rien entreprendre. Les Romains furent bien profiter de cet exemple, & l'on peut dire que cette sage politique fut un des moïens les plus efficaces dont ils se servirent pour affermir le repos & la sûreté de l'Etat.

LONGUE-
MAIN.

Mais ce qui fit le plus d'honneur à Périclès dans l'esprit du peuple, fut la magnificence des bâtimens & des ouvrages dont il orna & embellit la ville, qui jettoit les étrangers dans l'admiration & le ravissement, & leur donnoit une grande idée de la puissance des Athéniens. C'est une chose étonnante de voir en combien peu de tems furent achevés tant de divers ouvrages d'architecture, de sculpture, de gravure, de peinture; & comment néanmoins ils furent tout d'un coup portés au plus haut point de perfection. Car ordinairement les ouvrages achevés avec tant de facilité & de promptitude, n'ont point une grace solide & durable, ni l'exactitude régulière d'une beauté parfaite. Il n'y

ARTAXERXES a, pour l'ordinaire, que la longueur du tems, jointe à l'assiduité du travail, qui leur donne une force capable de les conserver, & de les faire triompher des siècles. Et c'est ce qui rend plus admirables les ouvrages de Périclès, qui furent achevés si rapidement, & qui ont pourtant duré si longtemps. Car chacun de ces ouvrages, dans le moment même qu'il fut achevé, avoit une beauté qui sentoit déjà l'antique : & aujourd'hui encore, dit Plutarque plus de cinq cens ans après, ils ont une certaine fraîcheur de jeunesse, comme s'ils ne venoient que de sortir des mains de l'ouvrier ; tant ils conservent encore une fleur de grace & de nouveauté, qui empêche que le tems n'en amortisse l'éclat, comme si un esprit toujours rajeunissant & une ame exemte de vieillesse étoit répandue dans tous ces ouvrages.

Ce qui faisoit l'admiration de toute la terre, excita la jalousie contre Périclès. Ses ennemis ne cessoient de crier dans les assemblées, que le peuple se deshonoroit en s'appropriant l'argent comptant de toute la Grèce, qu'il avoit fait venir de Délos où il

étoit en dépôt : que les Alliés ne pou- LONGUE-
 voient regarder une telle entreprise MAIN.
 que comme une tyrannie manifeste ,
 en voyant que les deniers qu'ils
 avoient fournis par force pour la
 guerre , étoient employés par les
 Athéniens à dorer & à embellir leur
 ville , à faire des statues magnifiques,
 & à élever des temples qui coutoient
 des millions. On n'exagéroit point ,
 quand on parloit ainsi : car en effet
 le temple de Minerve , appelé *le Par-*
thénone , avoit couté trois millions de
 livres.

Périclès , au contraire , remontoit
 aux Athéniens qu'ils n'étoient pas
 obligés de rendre compte à leurs
 alliés de l'argent qu'ils en avoient
 reçu : que c'étoit assez qu'ils les dé-
 fendissent , & qu'ils éloignassent les
 barbares , pendant que les alliés ne
 fournissoient ni soldats , ni chevaux ,
 ni navires , & qu'ils en étoient quit-
 tes pour quelques sommes d'argent ,
 qui , dès qu'elles sont délivrées , n'ap-
 partiennent plus à ceux qui les ont
 données , mais sont à ceux qui les ont
 reçues , pourvu qu'ils exécutent les
 conditions dont ils sont convenus , &
 pour lesquelles ils les ont touchées. II

ajoutoit, qu'Athènes étant suffisamment pourvûe de tout ce qui étoit nécessaire pour la guerre, il étoit convenable d'employer le reste de ses richesses à des ouvrages, qui étant achevés produiroient à cette ville une gloire immortelle; & qui, dans le tems qu'on y travailloit, répandoient par tout l'abondance, & faisoient subsister un nombre infini de citoyens: Qu'ils avoient toutes sortes de matériaux, le bois, la pierre, l'airain, l'ivoire, l'or, l'ébène, & le cyprès; & toutes sortes d'ouvriers capables de mettre tous ces matériaux en œuvre, des charpentiers, des maçons, des forgerons, des tailleurs de pierre, des teinturiers, des orfèvres, des ébénistes, des peintres, des brodeurs, des tourneurs; des gens propres à les amener & à les conduire par mer, comme des marchands, des matelots, des pilotes expérimentés; & d'autres gens pour faciliter le transport par terre, des charrons, voituriers, chartiers, cordiers, tireurs de pierre, paveurs, fouilleurs de mines: Qu'il étoit avantageux pour l'Etat de mettre en mouvement tous ces travailleurs & ces manœuvres, qui,

comme autant de corps séparés, for- LONGUE-
moient tous ensemble une espece MAIN.
d'armée domestique & pacifique, —————
dont les différentes fonctions se-
moient & répandoient le gain sur
toutes sortes de gens de tout âge &
de tout sexe : Qu'enfin, pendant que
les gens robustes, & en âge de porter
les armes, les matelots, les soldats,
& ceux qui étoient en garnison dans
les places, étoient soudoyés des de-
niers publics, il étoit juste que les au-
tres citoyens qui demeuroient dans la
ville le fussent aussi à leur manière,
& qu'appartenant tous à la même Ré-
publique, ils en tirassent tous les mê-
mes avantages, en lui rendant des
services différens à la vérité, mais qui
contribuoient tous ou à sa sûreté, ou
à sa décoration.

Un jour, comme les plaintes s'é-
chauffoient, Périclès s'offrit de pren-
dre tous les frais sur lui, pourvu que
les inscriptions publiques marquas-
sent que lui seul avoit fait cette dé-
pense. A ces paroles, le peuple, soit
qu'il admirât sa magnanimité, ou
que piqué d'émulation il ne voulût
pas lui céder cette gloire, s'écria qu'il
pouvoit prendre au trésor de quoi

A R T A-fournir à tous les frais nécessaires sans
X E R X E. rien épargner.

Phidias, ce célèbre Sculpteur, pré-
fidoit à tout le travail, & en avoit
l'intendance générale. Ce fut lui qui
fit en particulier la statue d'or de Pal-
las, si estimée dans l'antiquité par les
connoisseurs. Il y avoit parmi les ou-
vriers une ardeur & une émulation
incroyable. Tous s'efforçoient à l'en-
vie de se surpasser les uns les autres, &
d'immortaliser leur nom par des chef-
d'œuvres de l'art.

L'Odeon, ou Théâtre de la musi-
que, qui avoit en dedans plusieurs
rangs de sièges & de colonnes, &
dont le comble s'étrécissoit peu à peu
en s'élevant, & finissoit en pointe,
fut bâti, dit-on, sur le modèle du pa-
villon du roi Xerxès, & ce fut Périclès
même qui donna l'idée de se régler
sur ce modèle. Ce fut alors qu'il pro-
posa avec beaucoup d'empressement
un Décret, par lequel il étoit ordonné
qu'on célébreroit des Jeux de musi-
que à la fête des Panathénées; & aiant
été élu Juge & distributeur des prix,
il régla la manière dont les musiciens
devoient jouer de la flûte & de la lyre,
& chanter. Les Jeux de musique fu-

rent toujours faits dans ce Théâtre LONGUE-
depuis ce tems-là. MAIN.

J'ai déjà fait remarquer que plus ces ouvrages frapoient par leur beauté & leur éclat , plus ils excitoient l'envie & les plaintes contre Périclès. Les orateurs, qui étoient de la faction opposée , ne cessoient de se déchaîner & de crier contre lui , l'accusant de dissiper les finances , & d'employer mal-à-propos les revenus de l'Etat pour des bâtimens d'une vaine magnificence. Enfin il en vint avec Thucydide à une rupture si ouverte , qu'il falloit que l'un ou l'autre subît le ban de l'Ostracisme. Il l'emporta sur Thucydide , vint à bout de le chasser , dissipa par ce moien la faction qui lui étoit opposée , & se rendit maître absolu de la ville & de toutes les affaires des Athéniens. Il dispoisoit à son gré des finances , des troupes , & des vaisseaux. Les îles & la mer lui étoient soumises , & il régnoit seul dans cette vaste Seigneurie qui s'étendoit , non seulement sur les Grecs , mais sur les Barbares , & qui étoit cimentée & fortifiée par l'obéissance & par la fidélité des nations soumises , par l'amitié des Rois , & par des traités faits avec plusieurs Princes.

ARTAXERXES Les historiens vantent beaucoup les ouvrages magnifiques dont Périclès embellit Athènes, & j'ai rapporté fidèlement leur témoignage : mais je ne sai si les plaintes qu'on formoit contre lui étoient si mal fondées. Etoit-il raisonnable en effet d'employer en bâtimens superflus, & en vaines décorations, des sommes immenses, qui étoient destinées pour les fonds de la guerre; & n'auroit-il pas mieux valu soulager les alliés d'une partie des contributions, qui sous le gouvernement de Périclès furent portées à près d'un tiers de plus qu'elles n'étoient auparavant? Cicéron ne trouve d'ouvrages & de bâtimens véritablement dignes d'admiration, que ceux qui ont pour but l'utilité publique : des aqueducs, des murailles de villes, des citadelles, des arsenaux, des ports de mer; & il faut ranger parmi ce nombre ce que fit Périclès pour joindre Athènes au port de Pirée. Mais Cicéron ne manque pas de remarquer que le même Périclès fut blâmé d'avoir épuisé le trésor public, pour enrichir sa ville d'ornemens superflus. Platon, qui jugeoit des choses selon la vérité & non se-

* Elles montoient à plus de dix millions.

Lib. 2. Offic.
n. 60.

In Gorg. pag. 515.

In Alcib. 1.
pag. 119.

Ion l'éclat extérieur, fait observer en LONGUE-
 plus d'un endroit après Socrate son MAIN.
 maître, que Périclès, avec tous ses
 beaux ouvrages, n'avoit point contri-
 bué à rendre un seul de ses citoyens
 meilleur, mais plutôt à corrompre la
 pureté & la simplicité de leurs mœurs
 anciennes.

§. XI. *Périclès change de conduite à
 l'égard du peuple. Son extrême autorité:
 son desintéressement.*

LORSQUE Périclès se vit ainsi revê- Plut. in Pericle
 tu de toute l'autorité, il commença à PAG. 161.
 changer de manières, à ne plus se
 montrer si doux & si traitable, à ne
 plus céder ni s'abandonner aux ca-
 prices & aux fantaisies du peuple,
 comme à toutes sortes de vents; mais,
 dit Plutarque, tirant les rênes de ce
 gouvernement populaire trop mou
 & trop complaisant, comme on ban-
 de les cordes d'un instrument qui sont
 trop lâches, il le convertit en un gou-
 vernement aristocratique, ou plutôt
 en une espèce de roiauté, sans néan-
 moins s'écarter jamais de l'utilité pu-
 blique. Allant donc toujours droit à
 ce qui étoit le meilleur, & se rendant
 irrépréhensible en toutes choses, il

A R T A- vint si bien à bout du peuple, qu'il le
X E R X E tournoit à son gré. Tantôt, par ses
seuls avis & par la voie de la persuasion, il le conduisoit doucement à ses fins, tirant de lui un consentement volontaire : tantôt, quand il trouvoit en lui de la résistance & de l'opposition, il l'entraînoit comme par force & malgré lui à ce qui étoit le plus expédient ; imitant en cela un sage médecin, qui dans une maladie longue & opiniâtre, fait prendre son tems pour accorder à son malade des choses innocentes qui lui font plaisir, & pour lui donner ensuite des remèdes plus forts, qui le tourmentent à la vérité, mais qui sont seuls capables de lui rendre la santé.

En effet, on comprend aisément, combien il falloit d'art & d'habileté pour régir & manier une multitude fière de sa puissance, & pleine de caprices : & c'est en quoi Périclès excelloit merveilleusement. Il employoit, selon les différentes conjonctures, tantôt la crainte, tantôt l'espérance, comme un double gouvernail, soit pour arrêter les fougues & les emportemens du peuple, soit pour le relever de son abbattement & de sa

langueur. Il fit voir par cette conduite LONGUE-
 que l'éloquence, comme le dit Platon, MAIN.
 n'est autre chose que l'art de manier
 les esprits ; & que le chef-d'œuvre de
 cet art, est d'émouvoir à propos les di-
 verses passions soit douces, soit vio-
 lentes, lesquelles étant à l'ame ce que
 sont les cordes à un instrument, n'ont
 besoin, pour produire leur effet, que
 d'être touchées par une main adroite
 & habile.

Il faut pourtant avouer, que ce
 qui donna à Périclès cette grande au-
 torité, ne fut pas seulement la force
 de son éloquence, mais, comme dit
 Thucydide, la gloire & la réputation
 de sa vie, & sa grande probité.

Plutarque fait remarquer en lui Plus. in praes.
de rep. ger. p.
812.
 une qualité bien essentielle à un hom-
 me d'Etat, bien propre à attirer l'es-
 time & la confiance du public, & qui
 suppose une grande supériorité d'es-
 prit : c'est de ne vouloir pas tout faire
 par soi-même, de ne se pas croire ca-
 pable de tout, d'associer à ses travaux
 & à ses soins des hommes de mérite ;
 de les employer chacun selon leurs ta-
 lens, & de se décharger sur eux d'un
 détail qui consume le tems & la li-
 berté d'esprit nécessaires pour les

A R T A- grandes choses. Cette conduite , dit
X. E R X E Plutarque , produit deux grands biens.

— Premièrement , elle éteint ou du moins elle amortit l'envie & la jalousie , en partageant en quelque sorte une puissance , qui blesse & choque l'amour propre quand on la voit réunie & concentrée dans un seul homme , comme s'il avoit lui seul le mérite de tous les autres. En second lieu , elle avance & facilite l'exécution des affaires , & les fait réussir avec plus de sûreté. Plutarque , pour mieux expliquer sa pensée , emploie une comparaison fort naturelle & fort belle. La main , dit-il , pour être partagée en cinq doigts , loin d'être plus foible , en est au contraire plus forte , plus agile , plus propre au mouvement. Il en est de même d'un homme d'Etat , qui fait partager à propos ses fonctions , & qui par là rend son autorité plus prompte , plus agissante , plus étendue , plus décisive : au lieu que l'empressement indiscret d'un petit esprit , à qui tout fait ombrage , & qui veut seul tout embrasser , ne sert qu'à mettre en évidence sa foiblesse & son incapacité , & à ruiner le succès des affaires. Périclès , dit Plutarque , n'en ufoit

uſoit pas ainſi. Semblable à un habile **LONGUE**
pilote , qui demeurant preſque im- **MAIN.**
mobile met tout en mouvement , &
qui veut bien quelquefois faire aſſeoir
au gouvernail des Officiers ſubalter-
nes ; il étoit l'ame de l'Etat , & pa-
roiffant ne rien faire par lui-même, il
remuoit & gouvernoit tout , mettant
en œuvre l'éloquence de l'un , le cré-
dit de l'autre , la prudence de celui-ci,
la bravoure & le courage de celui-là.

A ce que je viens de rapporter, ajou- *Plut. in vit.*
tez une autre qualité non moins rare *Pericl. p. 161.*
ni moins eſtimable , je veux dire l'é- *162.*
lévation d'une ame noble & deſinté-
reſſée. Périclès avoit tant d'éloigne-
ment pour les préſens , il mépriſoit ſi
fort les richesses , & il étoit tellement
au-deſſus de toute cupidité & de toute
avarice , que quoi qu'il eût rendu ſa
ville riche & opulente au point que
nous l'avons vû , qu'il eût ſurpaſſé en
puiffance pluſieurs tyrans & pluſieurs
rois , qu'il eût manié lontems avec un
ſouverain pouvoir les finances de la
Grèce , il n'augmenta pourtant pas
d'une ſeule dragme le bien que ſon
pere lui avoit laiffé. Telle fut la ſour-
ce & la cauſe véritable du crédit ſu-
prême de Périclès dans la Républi-

ARTAXERXES que, digne fruit de sa droiture & de son parfait desintéressement.

Ce ne fut pas pour quelques momens rapides seulement, ni pendant la première vivacité d'une faveur naissante, dont la fleur & la grace sont pour l'ordinaire d'une courte durée, qu'il conserva cette autorité. Il la maintint pendant quarante ans entiers, & cela malgré les Cimons, les Tolmides, les Thucydides, & beaucoup d'autres, tous déclarés contre lui; & de ces quarante années, il passa les quinze dernières sans rival depuis l'exil de Thucydide, & maître absolu des affaires. Cependant, au milieu de ce pouvoir suprême, qu'il avoit rendu perpétuel & sans bornes en sa personne, il se conserva toujours invincible & insurmontable aux richesses, quoique d'ailleurs il ne manquât pas d'application à faire valoir son bien. Car il ne ressembloit pas à ces Seigneurs, qui malgré leurs revenus immenses, soit par négligence & défaut d'économie, soit par de fastueuses & de folles dépenses, sont toujours pauvres au milieu de leurs richesses, hors d'état & sans volonté de faire le moindre plaisir à de vertueux amis ou à de fi-

dèles & zélés domestiques, & meurent
 enfin accablés de dettes, laissant leur
 nom & leur mémoire en exécration à
 de malheureux créanciers dont ils ont
 causé la ruine. Je ne parle point d'un
 autre excès où cette négligence & ce
 défaut d'économie conduisent assez
 ordinairement, je veux dire la rapine,
 l'amour des présens, les concussions.
 Carici, aussi bien que pour les finan-
 ces de l'Etat, la maxime de Tacite a
 lieu : ^a Quand on a dissipé son bien,
 on ne songe qu'à en réparer la perte
 & à en remplir le vuide par toutes
 sortes de voies, même les plus cri-
 minelles.

LONGUE-
 MAIN.

Périclès connoissoit bien mieux l'u-
 sage qu'un homme d'Etat & employé
 dans le gouvernement doit faire des
 richesses. Il savoit qu'il devoit les de-
 stiner à servir utilement le public,
 pour s'attacher d'habiles coopérateurs
 dans son ministère, pour aider de bons
 Officiers dépourvus souvent des biens
 de la fortune, pour récompenser &
 animer le mérite de quelque genre
 qu'il soit, & pour mille autres emplois
 pareils, auxquels sans doute, soit pour

^a Si ambitione ærarium } supplendum erit. Tacit.
 exhausserimus, per scelera } *Annal. lib. 2. cap. 38.*

A' R T-A-
X E R X E

l'intime joie, soit pour la solide gloire qui en reviennent, personne n'oseroit comparer les excessives dépenses de la table, du jeu, des équipages. C'est dans cette vûe que Périclès ménageoit son bien avec une extrême économie, aiant formé lui-même un ancien domestique pour gouverner ses affaires, se faisant rendre régulièrement dans des tems marqués un compte exact de la recepte & de la dépense, se renfermant lui & sa famille dans un honnête nécessaire proportionné à son revenu & à son état, mais dont il écartoit sévèrement toute vaine & ambitieuse superfluité. Il est vrai que cette manière de vivre ne plaisoit point du tout à ses enfans lorsqu'ils furent en âge, & encore moins à sa femme. Ils trouvoient que la dépense pour leur entretien n'étoit pas suffisante, & ils se plaignoient de cette économie, basse & sordide à leur jugement, & qui ne laissoit voir aucune trace de l'abondance qui régné ordinairement dans les maisons où les richesses & l'autorité sont réunies. Périclès faisoit peu de cas de ces plaintes, & se conduisoit par des vûes bien supérieures.

Je croi pouvoir appliquer ici une

réflexion fort solide de Plutarque dans le parallèle qu'il fait d'Aristide & de Caton. Après avoir dit que la vertu politique, c'est-à-dire l'art de gouverner les villes & les royaumes, est la plus grande & la plus parfaite que l'homme puisse acquérir, il ajoute que *l'économie* n'est pas une des moindres parties de cette vertu. En effet, les richesses étant un des moyens qui peuvent le plus contribuer au salut ou à la perte des Etats, l'art qui enseigne à les régir & à en faire un bon usage, & qui est celui qu'on appelle *économique*, est sans contredit une partie de l'art de la politique; & il n'en est pas une des moindres parties, puisqu'il ne faut pas une médiocre prudence pour tenir sur cela le juste milieu, & pour bannir d'un Etat la pauvreté & la trop grande opulence. C'est cet art, qui écartant avec soin les dépenses inutiles & frivoles, empêche qu'on ne soit forcé de surcharger les peuples, & tient toujours en réserve dans les coffres publics des fonds considérables, pour fournir aux nécessités imprévues, & aux guerres qui peuvent survenir. Or ce qu'on dit d'un royaume, d'une ville, il faut le dire des particuliers. Car la

LONGUE-
MAIN,

A R T A-ville, qui est un assemblage de maisons,
X E R X E & qui fait un tout de plusieurs parties
 ramassées, n'est forte & puissante dans
 son total, qu'autant que sont forts &
 puissans tous les membres qui la com-
 posent. Périclès a réussi certainement
 dans cette science pour le gouverne-
 ment de sa maison : je ne sai si l'on en
 peut dire autant pour le maniement
 des deniers publics.

§. XII. *Jalousie & différens entre les
 Athéniens & les Lacédémoniens. Trai-
 té de paix pour trente ans.*

*Plut. in Pe-
 ricl. p. 162.*

T E L L E étoit la conduite de Péri-
 clès dans l'intérieur de sa maison :
 celle qu'il tenoit au dehors & pour les
 affaires publiques n'étoit pas moins
 admirable. Sur ce que les Lacédémo-
 niens commençoient à être jaloux de
 l'accroissement des Athéniens, & à le
 supporter avec peine, Périclès, pour
 inspirer encore plus de grandeur d'a-
 me & de courage à ses citoiens, fit un
 Décret, par lequel il ordonna qu'on
 avertiroit tous les Grecs en quelque
 partie de l'Europe & de l'Asie qu'ils
 habitassent, & toutes les villes gran-
 des ou petites, d'envoyer incessam-
 ment à Athènes leurs députés, pour

délibérer sur les moïens de relever les temples qui avoient été brûlés par les barbares, & de s'acquitter des sacrifices qu'on s'étoit engagé de faire pour le salut de la Grèce lorsqu'on étoit en guerre contr'eux ; comme aussi sur les expédiens qu'il falloit prendre pour mettre un si bon ordre aux affaires de la marine, qu'ils pussent tous naviger sûrement, & vivre en paix les uns avec les autres.

On choisit donc pour cette ambassade vingt personnages, qui avoient chacun plus de cinquante ans. On en envoya cinq vers les Ioniens & les Doriens d'Asie, & les Insulaires jusqu'à Lesbos & à Rhode ; cinq vers les contrées de l'Helléspont & de Thrace jusques à Byzance. Cinq eurent ordre d'aller dans la Béotie, la Phocide, & le Peloponnèse, & de remonter de là par le pays des Locriens dans le continent supérieur, & de le parcourir jusques à l'Acarnanie & à Ambracie. Les cinq derniers furent chargés de traverser l'Eubée, & d'aller vers les habitans du mont Æta, & ceux du golfe de Malée, & chez les Phthiotes, les Achéens, & les Thessaliens ; pour leur persuader à

A R T A- tous de se rendre à l'assemblée convo-
X E R X Equée à Athènes, & d'assister aux dé-
libérations qui s'y prendroient pour
la paix, & pour les affaires générales
de la Grèce. J'ai cru devoir entrer
dans ce détail, qui m'a paru fort pro-
pre à faire connoître l'étendue de la
domination des Grecs, & l'autorité
des Athéniens parmi eux.

Toutes ces sollicitations furent inu-
tiles : les villes n'envoient point de
députés, parce, dit-on, que les Lacé-
démoniens s'y opposèrent. Et il ne
faut pas s'en étonner. Ils sentirent
bien que le dessein de Périclès étoit
de faire reconnoître Athènes comme
la maîtresse & la souveraine de toutes
les autres villes Grecques ; & Lacé-
démone n'avoit garde de lui céder cet
honneur. Un secret levain de dissen-
sion & de discorde avoit commencé
depuis quelques années à troubler le
repos de la Grèce, & nous verrons
que dans la suite les esprits ne feront
que s'aigrir de plus en plus.

Périclès s'étoit acquis beaucoup de
réputation par la sagesse avec laquelle
il formoit ses entreprises. Les trou-
pes avoient une pleine confiance en
lui, & le suivoient avec une entière

assurance. Sa grande maxime dans la **LONGUE-**
 guerre étoit de ne point hazarder un **MAIN.**
 combat sans être presque assuré du
 succès , & de ménager le sang des ci-
 toiens. Il avoit coutume de dire, que
 s'il ne tenoit qu'à lui, ils seroient im-
 mortels : que les arbres coupés & ab-
 battus revenoient en peu de tems ,
 mais que les hommes morts étoient
 perdus pour toujours. Une victoire,
 qui n'auroit été l'effet que d'une heu-
 reuse témérité, lui paroissoit peu di-
 gne de louange, quoique souvent elle
 fût fort admirée.

Son expédition dans la Cherfonné-
 se de Thrace lui fit beaucoup d'hon-
 neur, & fut très salutaire à tous les
 Grecs de ce pays-là. Car, non seule-
 ment il fortifia les villes Grecques de
 cette presqu'île par les colonies d'A-
 théniens qu'il y mena, mais il ferma
 encore l'Isthme par une bonne mu-
 raille avec des forts de distance en
 distance, depuis une mer jusqu'à l'au-
 tre, mettant par là tout le pays à cou-
 vert des incursions continuelles des
 Thraces, qui en étoient fort voisins.

Il fit aussi une course autour du Pélo-
 ponnése avec cent vaisseaux, & porta
 par tout la terreur des armes Athénien-

A R T A-nes, sans qu'aucun accident fâcheux
X E R X E en interrompît l'heureux succès.

Il pénétra jusqu'au royaume de Pont avec une flotte très nombreuse, & très magnifiquement équipée, & accorda aux villes Grecques toutes les graces qu'elles lui demandèrent. En même tems il étala aux yeux des nations barbares qui habitoient aux environs, à leurs Rois & à leurs Princes, la grandeur de la puissance des Athéniens, & leur fit voir par l'assurance avec laquelle il navigeoit par tout, qu'ils étoient en possession de l'empire de la mer sans concurrens.

Ibid. p. 184. Une fortune si brillante & si constante éblouit les Athéniens. Enivrés de l'idée de leur puissance & de leur grandeur, ils ne se repaissoient plus que de hardis & magnifiques projets. Ils parloient sans cesse de faire de nouvelles tentatives sur l'Egypte, d'attaquer les provinces maritimes du grand Roi, de porter leurs armes dans la Sicile, (fatal & malheureux desir, qui pour lors n'eut point de suite, mais qui se ralluma bientôt après ;) & de pousser leurs conquêtes d'un côté jusqu'à l'Etrurie, & de l'autre jusqu'à Carthage. Périclès étoit bien éloigné de se prêter

à de si folles pensées, ou de les appuyer de son crédit & de son approbation. Il n'étoit occupé au contraire qu'à arrêter cette ardeur inquiète, & à réfréner une ambition qui ne connoissoit plus ni bornes ni mesures. Selon lui, les Athéniens devoient n'employer leurs forces désormais qu'à garder & à assurer ce qu'ils avoient acquis, & il trouvoit que c'étoit beaucoup faire que de réprimer les Lacédémoniens, dont il songeoit toujours à abaisser la puissance; ce qui parut particulièrement dans la guerre sacrée.

LONGUE-
MAIN.

On appella ainsi la guerre excitée au sujet de Delphes. Les Lacédémoniens étant entrés en armes dans le pays où est situé ce temple, avoient dépouillé les peuples de la Phocide de l'intendance du temple, & l'avoient donnée aux Delphiens. Dès qu'ils se furent retirés, Périclès y alla avec une armée, & rétablit les Phociens.

*Plut. in Pericl. pag. 164.
Thucyd. lib. 1. pag. 73.*

Dans le même tems l'Eubée s'étant revoltée, Périclès fut obligé d'y marcher avec une armée. Il n'y fut pas plutôtarivé, qu'il reçut des nouvelles que ceux de Mégare avoient pris les armes, & que les Lacédémoniens, sous la conduite de leur roi Plistonax,

ARTAXERXES étoient sur les frontières de l'Attique. Il fut donc obligé de quitter l'Eubée, & d'aller avec une extrême diligence au secours de sa patrie. Quand l'armée des Lacédémoniens se fut retirée, il retourna contre les rebelles, & remit toutes les villes de l'Eubée sous l'obéissance d'Athènes.

AN.M. 3558.
AV. J. C. 446.
Thucyd. l. 1.
pag. 75.
Diod. p. 87. Au retour de cette expédition, il y eut entre les Athéniens & les Lacédémoniens une trêve de trente ans. Ce traité rétablit le calme pour le présent : mais comme il n'alloit point jusqu'à la source du mal, & ne guérissoit pas la jalousie & l'inimitié des deux peuples, ce calme ne fut pas de longue durée.

§. XIII. Nouveaux sujets de plainte & de brouillerie entre les deux peuples, par le siège de Samos que firent les Athéniens, par le secours qu'ils accordèrent à ceux de Corcyre, par le siège qu'ils mirent devant Potidée. Rupture ouverte.

AN.M. 3564.
AV. J. C. 440.
Thucyd. lib. 1.
p. 76.
Diod. lib. 12.
pag. 83, 84.
Plut. in Peric. pag. 165.
167. SIX ANS après, les Athéniens se déclarèrent contre Samos en faveur de Milet. Ces deux villes étoient en dispute au sujet de celle de Priène, que chacune soutenoit lui appartenir. On prétend que Périclès alluma cette

guerre pour faire plaisir à une célèbre **LONGUE-**
 courtisane à laquelle il étoit fort at- **MAIN.**
 taché: elle se nommoit Aspasia, &
 elle étoit de Milet. Après plusieurs
 événemens, après plusieurs combats
 qui se donnèrent de part & d'autre,
 Périclès assiégea la ville capitale de
 l'île de Samos. On dit qu'il se servit
 alors pour la première fois de machi-
 nes de guerre, savoir de béliers & de
 tortues, inventées par l'Ingénieur
 Artémon, qui étoit boiteux, & qui se
 faisoit porter en chaise à ses batteries,
 d'où lui vint le surnom de *PéripHORÉTE*.
 L'usage de pareilles machines étoit
 connu depuis lontems en Orient. Au
 bout de neuf mois les Samiens se ren-
 dirent. Périclès rasa leurs murailles,
 leur ôta leurs vaisseaux, & exigea d'eux
 pour les frais de la guerre des sommes
 immenses, dont ils paierent une par-
 tie comptant, prirent un certain tems
 pour le reste, & donnèrent des ôtages
 pour la sûreté du paiement.

Après la réduction de Samos, Péri-
 clès de retour à Athènes fit des obsè-
 ques magnifiques à ceux qui étoient
 morts à cette guerre, & prononça lui-
 même leur oraison funèbre sur leur
 tombeau. Cette coutume se pratiqua

ART A- régulièrement dans la suite. C'étoit
 X E R X E toujours le Sénat de l'Aréopage qui
 — nommoit l'Orateur dans ces occasions. Il fut encore choisi dix ans après
 pour une pareille cérémonie au commencement de la guerre du Pélopon-
 nèse.

AN. M. 3572. Périclès, qui prévoioit que la ru-
 AV. J. C. 432. pture entre les deux peuples d'Athé-
Thucyd. lib. nes & de Lacédémone ne tarderoit
 1. p. 17-37. pas lontems à éclater, conseilla aux
Diod. lib. 12. Athéniens d'envoyer du secours à ceux
 pag. 90-93. de Corcyre attaqués par les Corin-
Plut. in Pe- thiens, & d'attirer dans leur parti
 vis. pag. 167. cette île très puissante sur mer, leur
 prédisant qu'ils alloient avoir sur les
 bras les peuples du Péloponnèse. Voi-
 ci ce qui donna lieu à la querelle de
 Corcyre & de Corinthe, laquelle en-
 traîna après elle la guerre du Pélopon-
 nèse, qui est un des événemens les plus
 considérables de l'histoire des Grecs.

* C'est la
 même ville
 qui dans la
 suite fut nom-
 mée Dyrra-
 chium.

Epidamne, * ville maritime de
 Macédoine chez les Taulantiens,
 étoit une colonie de Corcyréens,
 dont Phalie de Corinthe fut le fonda-
 teur. Cette ville étant devenue avec
 le tems fort peuplée & fort puissante,
 la discorde s'y mit, & le peuple en
 chassa les plus riches habitans, qui se

joignirent aux nations voisines, & l'infestèrent beaucoup par leurs courses. Dans cette extrémité elle eut recours d'abord aux Corcyréens, & à leur refus aux Corinthiens, qui la prirent sous leur protection, y envoièrent du secours, & y établirent de nouveaux habitans. Ils n'y furent pas lontems en repos. Les Corcyréens, avec une flotte nombreuse, vinrent y mettre le siège. Ceux de Corinthe accoururent pour la secourir, mais aiant été battus sur mer, & aiant reçu un échec considérable, la ville se rendit le jour même, à condition que les étrangers seroient esclaves, & les Corinthiens prisonniers jusqu'à nouvel ordre. Les Corcyréens dressèrent un trophée, égorgèrent leurs prisonniers à la réserve des Corinthiens, & firent un grand dégât dans tout le pays.

LONGUE-
MAIN.

L'année d'après la bataille, les Corinthiens mirent sur pié une nouvelle armée plus nombreuse que la première, & équipèrent une nouvelle flotte. Ceux de Corcyre, qui se voioient hors d'état de résister seuls à des ennemis si puissans, envoièrent rechercher l'alliance d'Athènes. Le traité de paix conclu entre les peuples de la

ARTAXERXES Grèce, laissoit aux villes Grecques qui n'avoient point pris de parti, la liberté de prendre celui qui leur plairoit. C'est l'état où se trouvoit pour lors Corcyre, qui avoit cru ne devoir se ranger d'aucun côté, & étoit demeurée jusques-là sans alliés. Elle envoya donc pour ce sujet à Athènes. Les Corinthiens l'ayant appris, y députèrent aussi de leur côté. L'affaire fut discutée avec chaleur en présence du peuple, qui écouta les raisons de part & d'autre, & elle fut mise en délibération par deux fois dans l'assemblée. Les Athéniens opinèrent la première fois en faveur de ceux de Corinthe : mais changeant d'avis à la seconde, sans doute sur les remontrances de Périclès, ils reçurent les Corcyréens dans leur alliance. Elle n'alla pas pourtant jusqu'à faire ligue offensive & défensive ; car ils ne pouvoient faire la guerre aux Corinthiens, sans rompre avec tout le Péloponnèse : mais à se secourir réciproquement si on les attaquoit, soit en leurs personnes, ou en celles de leurs alliés. Leur véritable dessein étoit de mettre aux mains ces deux peuples très puissans sur mer, & de les laisser affoiblir l'un par l'autre.

dans une longue guerre, pour triom- LONGUE;
 pher ensuite du plus foible. Car il n'y MAIN.
 avoit dans la Grèce alors que trois
 Etats qui eussent de puissantes flotes;
 Athènes, Corinthe, & Corcyre. Ils
 avoient aussi en vûe les affaires d'Ita-
 lie & de Sicile, à quoi l'île de Corcy-
 re étoit fort commode.

Sur ce plan, ils reçurent les Cor-
 cyréens dans leur alliance, & leur
 envoièrent dix galères, avec ordre
 de ne point combattre contre les Co-
 rinthiens, s'ils n'attaquoient l'île de
 Corcyre, ou quelque autre place de
 leurs alliés : ce qu'ils ajoutoient, pour
 ne point rompre la trêve.

Il étoit difficile de s'en tenir à ces
 termes. La bataille se donna entre les
 Corcyréens & les Corinthiens vers
 l'île de Sibote, vis-à-vis de Corcyre :
 c'est une des plus considérables qui se
 soient données entre les Grecs pour
 le nombre des vaisseaux. L'avantage
 fut à peu près égal de part & d'autre.
 Vers la fin du combat, lorsqu'il fai-
 soit déjà nuit, arrivèrent vingt galé-
 res Athéniennes. Avec ce nouveau
 renfort les Corcyréens firent voile le
 lendemain dès la pointe du jour vers
 le port de Sibote où les Corinthiens

A R T A-s'étoient retirés , pour voir s'ils vou-
X E R X Edroient tenter encore une fois la for-
 tune. Mais ceux-ci se contentèrent de
 sortir en bataille, sans en venir aux
 mains. Les deux partis dressèrent un
 trophée dans l'île de Sibote : car cha-
 cun s'attribuoit la victoire.

Thucyd. lib. De cette guerre en nâquit une au-
1. p. 37. 42. tre, qui donna lieu à la rupture ou-
Diod. l. 12. verte entré les Athéniens & les Co-
p. 93. 94. rinthiens , & ensuite à la guerre du
 Péloponnèse. Potidée, ville de Ma-
 cédoine, étoit une colonie de Corin-
 the, qui y envoioit tous les ans des
 Magistrats : mais elle dépendoit pour
 lors d'Athènes, & lui paioit contribu-
 tion. Les Athéniens, dans la crainte
 que cette ville ne vînt à se révolter,
 & n'entraînât dans sa revolte le reste
 de leurs alliés de la Thrace, ordonnè-
 rent aux habitans de démolir leurs
 murailles du côté de Pallène, de leur
 mettre en main des otages pour être
 garands de leur fidélité, & de ren-
 voier les Magistrats que Corinthe
 leur avoit donnés. Des demandes si
 injustes avancèrent la revolte. Poti-
 dée se déclara contre les Athéniens ;
 & plusieurs villes voisines suivirent
 son exemple. Athènes & Corinthe

armèrent chacune de leur côté, & y Longue-
envoierent des troupes. Il y eut une MAIN.
action entre les deux armées près de

Potidée. Celle des Athéniens rem-
porta l'avantage. Alcibiade encore *Plut. in Con-*
tout jeune, & Socrate son maître, *viv. p. 219.*

s'y distinguèrent d'une manière par-
ticulière. C'est une chose assez cu-
rieuse de voir un philosophe endosser *Plut. in Al-*
cib. pag. 194.

la cuirasse, & d'examiner comment
il se tire d'un combat. Il n'y avoit
personne dans toute l'armée qui por-
tât les travaux, & soutînt les fatigues
de la guerre comme Socrate. La faim,
la soif, le froid, étoient des ennemis
qu'il s'étoit accoutumé de longue
main à mépriser & à vaincre sans
peine. La Thrace, où se passoit cette
expédition, est un pays de glace &
de frimâts. Pendant que les autres
soldats, revetus de bons habits & de
peaux très chaudes, se tenoient dans
leurs tentes bien clos & couverts n'o-
sant paroître à l'air, il sortoit sans
être plus vêtu qu'à l'ordinaire, &
marchoit piés nus. C'étoit lui qui
faisoit la joie de la table par sa gaieté
& par ses bons mots, & qui invitoit
les autres à boire par son exemple,
mais sans prendre jamais de vin avec

ARTAXERXES

excès. Quand on en vint à l'action, ce fut là qu'il fit merveilleusement son devoir. Alcibiade aiant été blessé & porté par terre, Socrate se mit au devant de lui, le défendit courageusement, & à la vûe de toute l'armée il empêcha les ennemis de le prendre, & de se rendre maîtres de ses armes. Le prix de la valeur étoit donc dû justement à Socrate : mais les Généraux paroissant disposés à le donner à Alcibiade à cause de sa naissance, Socrate, qui ne cherchoit qu'à allumer encore davantage en lui le desir de la vraie gloire, contribua plus que tout autre, par le témoignage avantageux qu'il rendit à son courage, à lui faire adjuger la couronne & l'armure complete, qui étoit le prix d'honneur.

L'échec qu'avoient reçu les Corinthiens dans le combat, ne fit point changer de sentiment à ceux de Potidée. Ils persistèrent constamment à refuser d'obéir aux ordres qu'on leur avoit donnés. La ville fut donc assiégée. Les Corinthiens, craignant de perdre une place de cette conséquence, sollicitèrent fortement leurs alliés, & tous députèrent conjointe-

*Thucyd. lib.
II. pag. 43-59.*

ment à Lacédémone, pour se plaindre des Athéniens comme infraçteurs de la paix. Les Lacédémoniens leur donnèrent audience dans une de leurs assemblées ordinaires. Les Eginètes, quoique très mécontents d'Athènes, n'osèrent y envoyer publiquement, de peur d'irriter une République, sous la puissance de laquelle ils étoient : mais sous main ils agirent comme les autres. Ceux de Mégare se plainquirent amèrement de ce que, contre le droit des gens, & au préjudice de l'accord fait entre les Grecs, les Athéniens, par un décret public, leur avoient interdit l'entrée de leurs foires & de leurs marchés, & fermé tous les ports qui étoient de leur dépendance. Par ce Décret, * selon Plutarque, les Athéniens declaroient à Mégare une haine immortelle & irrconciliable, & ordonnoient que tous

LONGUE-
MAIN.

Plut. in Per-
icl. pag. 168.

* Plutarque dit que quelques-uns prétendoient que c'étoit Périclès qui avoit fait donner ce Décret, pour venger l'injure particulière d'Aspasie, de chez qui les Mégariens avoient enlevé deux courtisanes; & il cite les vers d'Aristophane, qui, dans une Comédie intitulée les Acharnenses,

fait se reproche à Périclès. Mais Thucydide, auteur contemporain, & qui étoit bien informé de ce qui se passoit à Athènes, ne dit pas un mot de cet enlèvement; & il est plus digne de foi qu'un Poëte qui faisoit profession de médisance & de Satyre.

ARTAXERXES

les Mégariens qui mettroient le pié dans Athènes seroient punis de mort ; & que tous les Généraux Athéniens , en prêtant le serment solennel , jure-roient expressement qu'ils envoie-roient tous les ans ravager deux fois le territoire de cette ville ennemie.

Les principales plaintes furent de la part du Député des Corinthiens. Il parla avec une grande force & une grande liberté. Il représenta aux La-cédémoniens que la bonne foi dont ils ne se départoient jamais dans les affaires soit publiques , soit particu-lières , les rendoit plus difficiles à croire la mauvaise foi des autres ; & que leur modération les empêchoit de découvrir l'ambition de leurs en-nemis. Qu'au lieu d'aller , par une prompte activité , au devant des maux & des dangers ; ils attendoient , pour y remédier , qu'ils en fussent acca-blés. Que par leur nonchalance & leur inaction , ils avoient laissé croî-tre insensiblement les Athéniens , & parvenir à ce point de grandeur & de puissance où on les voioit. Qu'il n'en étoit pas ainsi des Athéniens. » Actifs , vigilans , attentifs à tout , » infatigables , ils ne demeurent ja-

mais en repos , & n'y laissent point « **LONGUE.**
 les autres. Uniquement occupés de « **MAIN.**
 leurs projets , & ils n'en forment «
 que de grands & de hardis, ils dé- «
 libèrent promptement , & exécutent «
 de même. Une première entreprise «
 leur sert de degré pour une secon- «
 de. Bons & mauvais succès, ils met- «
 tent tout à profit , ne s'arrêtant & «
 ne se rebutant jamais. Mais vous , «
 aiant en tête de tels ennemis , vous «
 vous endormez dans une funeste «
 tranquillité , & vous ne songez pas «
 que pour vivre en repos , ce n'est «
 pas assez de ne faire tort à person- «
 ne , qu'il faut empêcher qu'on ne «
 nous en fasse ; & que la justice ne «
 consiste pas seulement à ne point «
 faire de mal , mais aussi à venger «
 celui qu'on nous fait. Oserai-je le «
 dire ? Votre probité est trop à l'an- «
 tique pour les conjonctures où nous «
 nous trouvons. Il faut dans la po- «
 litique , comme dans tout le reste , «
 se conformer aux tems & aux be- «
 soins. Quand on est dans la tran- «
 quillité , on peut garder ses ancien- «
 nes maximes : mais quand on a plu- «
 sieurs affaires sur les bras , il faut «
 tenter de nouveaux moïens, & tout

ARTAXERXES » mettre en œuvre pour s'en tirer.
» C'est par là que les Athéniens ont
» si fort accru leur puissance. Si vous
» aviez imité leur activité, ils ne nous
» auroient pas enlevé Corcyre, &
» n'assiégeroient pas actuellement Po-
» tidée. Suivez au moins à présent leur
» exemple, en secourant les Potidéens
» & vos autres alliés, comme votre
» devoir vous y oblige; & ne forcez
» pas vos amis & vos voisins, en les
» abandonnant, à recourir par desef-
» poir à d'autres qu'à vous.

L'ambassadeur d'Athènes, qui étoit
venu à Sparte pour d'autres affaires,
& qui étoit entré dans l'assemblée, ne
crut pas devoir laisser ce discours sans
réponse. Il fit souvenir les Lacédé-
moniens des services encore récents
que sa République avoit rendus à la
Grèce, qui méritoient bien qu'on eût
pour elle quelque considération, &
non qu'on lui portât envie, & qu'on
cherchât à la rabaisser. Qu'on ne pou-
voit pas accuser les Athéniens d'avoir
usurpé l'empire sur la Grèce, puisque
ce n'étoit qu'à la prière des alliés, &
en quelque sorte du consentement de
Sparte, qu'ils avoient été contraints
de prendre le timon abandonné. Que
ceux

ceux qui se plaignoient, le faisoient sans sujet, & seulement par la difficulté qu'ont tous les hommes de souffrir la dépendence & l'assujettissement, même le plus doux & le plus équitable. Qu'il les exhortoit à prendre du tems pour délibérer avant que de rompre; & de ne pas s'engager légèrement eux & toute la Grèce dans une guerre qui pouvoit avoir de terribles suites. Qu'il y avoit des voies de douceur & d'accommodement pour vider les différens qui surviennent entre des alliés, sans se porter tout d'un coup à une violence ouverte. Qu'au reste les Athéniens, si on les attaquoit, sauroient bien opposer la force à la force, & qu'ils se prépareroient à une vigoureuse défense après avoir invoqué contre Sparte les dieux vengeurs du parjure & du viollement des traités.

Les députés s'étant retirés, & l'affaire aiant été mise en délibération, le plus grand nombre des voix alloit à déclarer la guerre. Avant que la conclusion fût formée, Archidamus roi de Sparte, se mettant au dessus des passions qui entraînoient les autres, & portant ses vûes dans l'avenir, prit

ARTAXERXES

la parole , exposa les suites funestes de la guerre où l'on étoit prêt de s'engager , montra quelles étoient les forces & les ressources des Athéniens , exhorta à tenter d'abord les voies de douceur dont eux-mêmes sembloient faire l'ouverture , à travailler cependant aux préparatifs nécessaires pour une entreprise si importante , sans craindre qu'on taxât de timide lâcheté leur modération & leur délai , soupçon dont leurs actions passées les mettoient assez à couvert.

Malgré de si sages remontrances , la guerre fut conclue. Le peuple fit rentrer les alliés , & leur déclara qu'il jugeoit que les Athéniens avoient tort ; mais qu'il falloit auparavant assembler tous ceux du parti , pour faire la paix ou la guerre d'un commun consentement. Ce Décret de Lacédémone fut fait la quatorzième année de la trêve , & ne fut pas tant un effet des plaintes des alliés , que de la jalousie de la grandeur des Athéniens , qui avoient déjà assujetti une bonne partie de la Grèce.

*Thucyd. lib.
II. p. 77-84.
• 91.*

On assemble donc une seconde fois les alliés. Ils donnèrent tous leurs suffrages par ordre depuis la

plus grande ville jusqu'à la plus petite, & la guerre fut résolue d'un commun consentement. Mais comme on n'avoit rien de prêt, on fut d'avis de travailler promptement aux préparatifs, & cependant, pour gagner du tems, & paroître garder toutes les formalités, d'envoier des ambassadeurs à Athènes avec ordre de se plaindre de l'infraction du Traité.

LONGUE-
MAIN.

Les premiers qu'on y envoya, réveillant une ancienne plainte, demandèrent qu'on chassât d'Athènes les descendans de ceux qui avoient profané le temple de Minerve dans l'affaire de * Cylon. Comme Périclès étoit de cette famille du côté de sa mere, la vûe des Lacédémoniens dans cette demande étoit, ou de le faire bannir, ou de diminuer son crédit. Ils n'y réussirent pas. Les seconds demandèrent qu'on levât le siège de Potidée; qu'on mît en liberté ceux d'Egine, & sur tout qu'on révoquât

* Ce Cylon s'étoit emparé de la Citadelle d'Athènes il y avoit plus de cent ans. Ceux qui l'accompagnoient y étant assiégés, & réduits à une extrême famine, se réfugièrent dans le temple de Minerve comme dans

un asyle; d'où on les tira, & ils furent égorgez. Les auteurs de ce meurtre furent déclarés coupables d'impieété & de sacrilège, & comme tels bannis. Quelque tems après on les rappella,

ARTAXERXES le Décret donné contre ceux de Mégare, sans quoi il ne pouvoit y avoir d'accommodement. Enfin il vint une troisième ambassade, qui ne disoit rien de tout cela, mais seulement que les Lacédémoniens vouloient la paix; & qu'il ne pouvoit y en avoir, si les Athéniens ne laissoient la Grèce en liberté.

§. XIV. *Affaires suscitées contre Périclès. Il détermine le peuple d'Athènes à soutenir la guerre contre les Lacédémoniens.*

Plut. in Péricl. pag. 168.
169.

PÉRICLÈS s'opposa fortement à toutes ces demandes, & sur tout à celle qui regardoit les Mégariens. Il avoit un grand crédit à Athènes, mais il y avoit aussi beaucoup d'ennemis. N'osant pas d'abord l'attaquer dans sa propre personne, ils firent appeller en jugement devant le peuple les personnes qui lui étoient le plus attachées; Phidias, Aspasia, Anaxagore: & leur dessein étoit de pressentir par là les dispositions du peuple à l'égard de Périclès même.

On accusoit Phidias d'avoir volé des sommes considérables dans la construction de la statue d'or de Mi-

nerve, qui étoit son bel ouvrage. La poursuite de cette affaire aiant été faite juridiquement dans l'assemblée, on n'y produisit aucune preuve des prétendus vols de Phidias. Car dès le commencement, par le conseil de Périclès, il avoit employé l'or de la statue de manière qu'on pouvoit l'ôter entièrement, & le peser; ce que Périclès ordonna aux accusateurs de faire devant tout le monde. Mais Phidias avoit contre lui des témoins dont il ne pouvoit contester la vérité, ni étoufer la voix: c'étoient la beauté & la réputation de ses ouvrages, causes toujours subsistantes de l'envie qu'on lui portoit. Sur tout on ne lui pardonnoit point de ce que dans la bataille des Amazones, gravée sur le bouclier de la déesse, il s'y étoit représenté lui-même au naturel, aussi bien que Périclès: &, par un art imperceptible, il avoit tellement lié & incorporé ces figures avec tout l'ouvrage, qu'il étoit impossible de les en ôter sans défigurer & mettre en pièces la statue entière. Phidias fut donc traîné en prison, où il mourut soit de maladie, soit de poison. D'autres auteurs disent qu'il fut seulement

LONGUE-
MAIN.

*Aristot. in
tractat. de
mund. p. 623.*

ARTAXERXES - exilé , & que depuis ce tems-là il fit la célèbre statue de Jupiter qui étoit à Olympie. Il n'est pas possible d'excufer en aucune sorte , ni l'ingratitude des Athéniens , de paier ainsi par la prison ou par la mort le chef-d'œuvre de l'art ; ni leur délicatesse outrée , de prendre au criminel & de punir comme une faute capitale une action qui paroît innocente en elle-même , ou qui n'est tout au plus qu'une vanité , bien pardonnable dans un ouvrier.

Aspasie fut accusée d'impiété & de mauvaise conduite. Périclès ne la sauva qu'à peine par ses prières , & par la compassion qu'il fit aux Juges en versant , pendant qu'on plaidoit sa cause , beaucoup de larmes , peu honorables à son caractère , & au rang de Chef du plus puissant Etat de la Grèce.

On avoit fait un Décret, par lequel il étoit ordonné qu'on dénonceroit à tous ceux qui n'admettoient point

α τὰ θεία μὴ νομίζοντες, ἢ λόγους περὶ τῶν μετεώρων διδάσκοντες. *Anaxagore , enseignant que l'Intelligence divine donnoit seule un mouvement réglé à toutes les parties de la nature , & prési-*

doit au gouvernement de l'univers , détruisoit par ce système la pluralité des dieux , leurs pouvoirs , & toutes les fonctions particulières qu'il leur étoient assignées.

te qu'on attribuoit au ministère des LONGUE-
 dieux, ou qui tenoient école & don- MAIN.
 noient des leçons sur ce qui se passe
 dans les airs & dans le mouvement des
 cieux, matières qu'on regardoit com-
 me injurieufes à la religion établie.
 Le but de ce Décret étoit de faire
 tomber le foupçon sur Périclès, à
 caufe d'Anaxagore fon maître. Ce
 Philofophe enfeignoit qu'une feule
 Intelligence avoit débrouillé le chaos,
 & rangé le monde dans le bel ordre
 où nous le voions : ce qui n'étoit au-
 tre chofe que décréditer les dieux du
 paganifme. Périclès, defefpérant de le
 pouvoir fauver, le fit fortir de la ville,
 & le mit en fûreté.

Quand les ennemis de Périclès vi-
 rent que le peuple approuvoit & re-
 cevoit avec plaifir toutes ces dénon-
 ciations, ils l'accufèrent lui-même en
 perfonne, comme s'il avoit volé le
 public pendant fon gouvernement.
 On fit un Décret, par lequel il étoit
 porté que Périclès rendroit au plutôt
 fes comptes, que l'affaire feroit jugée
 par quinze cens Juges, & que l'action
 feroit appellée de rapine & de concuf-
 fion. Il n'avoit rien à craindre dans le
 fonds, parce que dans le maniement

ARTAXERXES des affaires publiques sa conduite
XERXES avoit toujours été irréprochable, sur
— tout du côté de l'intérêt : mais la
mauvaise volonté du peuple, dont il
connoissoit la légèreté & l'inconstan-
ce, ne laissoit pas de l'inquiéter. Un
jour qu'Alcibiade, encore très jeune
alors, alla à son logis pour le voir ;
on lui dit qu'il ne pouvoit pas lui par-
ler, parce qu'il étoit actuellement
occupé à de grandes affaires. S'étant
informé quelles étoient donc ces af-
faires si importantes, on lui répon-
dit que Périclès songeoit à rendre ses
comptes. *Il devoit bien plutôt, repar-*
tir le jeune homme, songer à ne les
rendre pas. En effet c'est à quoi Pé-
riclès se détermina. Pour conjurer
l'orage, il prit le parti de ne plus
s'opposer au panchant qu'avoit le
peuple pour la guerre du Pélopon-
nèse qui depuis longtemps se prépa-
roit, persuadé que par là les plain-
tes qu'on faisoit se dissiperoient bien-
tôt, que l'envie céderoit à un motif
plus fort, & que dans un danger si
pressant la ville ne manqueroit ja-
mais de se jeter entre ses bras, &
de s'abandonner à sa conduite, à
cause de sa puissance & de sa grande
réputation.

C'est ce qu'ont rapporté quelques *Longue* historiens ; & les Poëtes Comiques , *MAIN.* du vivant & sous les yeux de Périclès même ; ne manquèrent pas de répandre ce bruit dans le public , pour donner atteinte , s'ils pouvoient , à sa réputation & à son mérite , qui lui attiroit beaucoup d'envieux & d'ennemis. Plutarque , à ce sujet , fait une réflexion , qui pourroit être d'un grand usage , non seulement pour ceux qui sont chargés du gouvernement , mais pour toutes sortes de personnes , & pour le commerce ordinaire de la vie. Il trouve étrange , lorsque les actions sont bonnes en elles-mêmes , & n'ont rien que de louable au dehors , que , pour décrier les grands hommes , on aille fouiller dans leur cœur , & que par une lâche & noire malignité on leur prête des vûes & des intentions qu'ils n'ont peut-être jamais eues. Il souhaiteroit au contraire , quand le motif est obscur , & qu'une même action peut avoir deux faces , qu'on la regardât toujours du bon côté , & qu'on panchât à en juger favorablement. Il applique ce principe aux bruits qu'on avoit répandus sur Périclès , comme s'il n'eût allumé la

Plut. de
Herod. mali-
gn. pag. 355.
356.

A R T A- guerre du Péloponnèse que par des
X E R X E. vûes particulières & intéressées , au
 lieu que toute sa conduite passée de-
 voit faire juger que c'étoit par des
 raisons d'Etat & pour le bien public,
 qu'il s'étoit enfin rendu à un senti-
 ment , auquel jusques-la il avoit cru
 devoir s'opposer.

Thucyd. lib. Pendant que cette affaire étoit en
1. p. 93-99. mouvement à Athènes , les Lacédé-
Diod lib. 12. moniens firent faire coup sur coup à
p. 95-97. Athènes par plusieurs ambassades les
 diverses demandes dont il a été parlé.
 L'affaire fut donc mise en délibéra-
 tion dans l'assemblée du peuple ; & il
 y fut résolu qu'on opineroit conjoint-
 tement sur tous les chefs , avant que
 de donner une réponse positive. Les
 avis furent partagés , comme c'est
 l'ordinaire ; & quelques-uns conclu-
 rent à abolir le Décret fait contre
 Mégare , qui paroissoit le principal
 obstacle à la paix.

Périclès parla en cette occasion avec
 une éloquence , que la vûe du bien
 public & de l'honneur de sa patrie ,
 rendit plus véhémence encore & plus
 triomphante qu'elle ne l'avoit jamais
 paru. Il fit voir d'abord que le Décret
 de Mégare , sur lequel on insistoit le

plus, n'étoit pas une chose aussi in- LONGUE-
différente qu'on se l'imaginoit. Que MAIN.
la demande des Lacédémoniens à cet
égard, n'étoit qu'une tentative pour
sonder la disposition des Athéniens,
& connoître si on pouvoit les entamer
en les intimidant. Que de reculer dans
cette occasion, c'étoit montrer de la
crainte & avouer sa foiblesse. Qu'il
ne s'agissoit de rien moins que de cé-
der aux Lacédémoniens l'empire dont
les Athéniens s'étoient mis en posses-
sion depuis plusieurs années par leur
courage & leur fermeté. Que si on se
relâchoit sur ce point, on leur im-
poseroit aussitôt de nouvelles loix,
comme à des gens qui ont peur : au
lieu qu'en résistant vigoureusement,
on seroit contraint de les traiter au
moins comme égaux. Que sur les
contestations présentes on pouvoit
prendre des arbitres, pour les termi-
ner à l'amiable : mais qu'il ne conve-
noit point aux Lacédémoniens d'or-
donner à Athènes d'un ton de maîtres
qu'elle eût à quitter Potidée, à affran-
chir Egine, à révoquer le Décret de
Mégare. Que cette conduite impé-
rieuse étoit directement contraire
au traité, qui portoit en termes for-

ARTAMELS, *Que s'il arrivoit quelque différend entre les alliés, on le videroit par des voies pacifiques, SANS SE DÉSSAISIR DE CE QU'ON POSSEDOIT.* Qu'au reste le moien le plus sûr de n'être pas toujours en peine de contester ce qu'on possède, c'est de prendre les armes en main, & de disputer ses droits à la pointe de l'épée. Que les Athéniens avoient de ce côté-là tout lieu d'espérer gain de cause; & pour leur en donner une plus vive idée, il fit une description magnifique de l'état présent des affaires d'Athènes, marquant en détail jusqu'où montoient ses fonds, ses revenus, ses flotes, ses troupes de terre & de mer, & celles de ses alliés; & comparant tout cela à la pauvreté de Lacédémone, déstituée absolument de finances, qui sont pourtant le nerf de la guerre, & extrêmement foible du côté de la marine, qui en fait le principal succès. En effet il se trouvoit dans le trésor public, qu'on avoit transporté de Délos à Athènes, neuf mille six cents talens qui font près de vingt huit millions. Les contributions des alliés pour chaque année étoient de quatre cents soixante talens, (c'est-à-dire

*Diod. lib.
12. p. 96. 97.*

près de quatorze cens mille livres.) LONGUE
 En cas de nécessité on pouvoit trou- MAIN.
 ver des ressources infinies dans les or-
 nemens des temples, puisque ceux de
 la statue seule de Minerve montoient
 à cinquante talens d'or, (c'est-à-dire
 à quinze cens mille francs) que l'on
 pouvoit ôter de la statue, sans la dé-
 truire, & les remettre ensuite dans de
 meilleurs tems. Pour les troupes de
 terre, elles montoient à peu près à
 trente mille hommes, & la flotte à
 trois cens galères. Il les avertit sur
 tout de ne point hazarder de combat
 dans leur pays contre les Péloponné-
 siens, qui avoient plus de troupes
 qu'eux : de ne compter pour rien le
 ravage de leurs terres qui pouvoit ai-
 sément se réparer, mais de compter
 pour tout la perte des hommes qui
 étoit irréparable : de faire consister
 toute leur politique à garder leur vil-
 le, & à se conserver l'empire de la
 mer, qui tôt ou tard les rendroit maî-
 tres de leurs ennemis. Il régla le plan
 de la guerre, non pour une seule
 campagne, mais pour tout le tems
 qu'elle dureroit, leur faisant entre-
 voir les maux qu'ils avoient à crain-
 dre s'ils s'écartoient de ce système.

ARTAXERXES Périclès, après avoir ajouté d'autres considérations, tirées du caractère & du gouvernement intérieur des deux Républiques : l'une incertaine & flottante dans ses délibérations, plus lente encore dans l'exécution parce qu'elle est assujettie à attendre le consentement des alliés ; l'autre prompte, décidée, indépendante, & maîtresse des résolutions, ce qui n'est pas indifférent pour le succès des entreprises : Périclès, dis-je, termina son discours, & forma son avis. » Il ne reste plus, » dit-il, que de renvoyer les ambassadeurs, & de leur répondre, que » nous permettrons le commerce d'Athènes à ceux de Mégare, pourvu » que les Lacédémoniens n'interdisent le leur, ni à nous, ni à nos alliés. » Pour les villes de la Grèce, nous » laisserons libres celles qui l'étoient » lors de notre accord, à condition » qu'ils en feront autant à l'égard de » celles qui sont dans leur dépendance. Nous ne refusons point de nous » en rapporter à des arbitres pour tout » ce qui fait le sujet de nos disputes, » & nous ne commencerons point les » premiers la guerre : mais nous nous » défendrons fortement, si l'on nous » attaque.

On répondit aux ambassadeurs, **LONGUE**
 suivant l'avis de Périclès. Ils s'en re- **MAIN.**
 tournèrent, & ne revinrent plus de-
 puis. Bientôt après commença la
 guerre du Péloponnèse.

CHAPITRE SECOND.

*Affaires des Grecs tant en Sicile qu'en
 Italie.*

COMME la guerre du Péloponnèse
 est un grand événement qui oc-
 cupera un tems considérable, avant
 que d'y entrer je croi devoir exposer
 en peu de mots ce qui s'étoit passé de
 plus important jusqu'au tems où nous
 sommes dans la grande Grèce, soit en
 Sicile, soit en Italie.

§. I. *Défaite des Carthaginois dans la
 Sicile. Théron, tyran d'Agrigente.
 Règne de Gélon à Syracuse, & de ses
 deux freres. Rétablissement de la liberté.*

I. GELON.

Nous avons vû que Xerxès, qui
 ne le proposoit rien moins que d'ex-
 terminer entièrement les Grecs,
 avoit engagé les Carthaginois à por-
 ter la guerre contre ceux qui habi-

AN.M. 3520.
 AV.J.C. 484.
 Diod. lib.
 11. pag. 1. &
 16-22.

A R T A-toient dans la Sicile. Ils y passèrent
X E R X E avec une armée de terre de plus de
 ——— trois cens mille hommes , & une flote
 composée de deux mille vaisseaux ,
 & de plus de trois mille petits bâti-
 mens de charge. Amilcar , le plus ha-
 bile Capitaine qui fût alors à Cartha-
 ge , fut chargé de cette expédition. Le
 succès ne répondit pas à un si formi-
 dable appareil. L'armée des Cartha-
 ginois fut entièrement défaite par
 Gélon qui avoit alors la principale
 autorité dans Syracuse.

Herod. lib. Ce Gélon étoit d'une ville de Sicile
7.6.153-167. située sur la côte méridionale entre
 Agrigente & Camarine, appelée Gé-
 la , d'où peut-être il tira son nom. Il
 s'étoit fort distingué dans les guerres
 qu'Hippocrate , tyran de Géle , eut à
 soutenir contre ses voisins , qu'il sub-
 jugua presque tous, & peu s'en falut
 qu'il ne se rendît maître de Syracuse.
 Après la mort d'Hippocrate , Gélon ,
 sous prétexte de défendre les intérêts
 & les droits des enfans du Tyran, prit
 les armes contre ses propres citoyens,
 & les aiant vaincus dans un combat ,
 s'empara de l'autorité pour lui-même.
 Quelque tems après il se rendit maî-
 tre aussi de Syracuse par le moyen de

quelques bannis qu'il y avoit fait ren- LONGUE
 trer , & qui engagèrent la populace à MAIN.
 lui en ouvrir les portes. Pour lors il

abandonna Gèle à son frere Hiéron ,
 & s'appliqua à étendre les limites de
 l'empire de Syracuse , & se rendit
 très puissant en fort peu de tems. On

en peut juger par * les troupes consi- * Il promet-
toit de fournir
deux cens
vaisseaux, &
trente mille
hommes de
troupes.
 dérables qu'il offrit aux ambassadeurs
 des Grecs qui venoient implorer son
 secours contre le Roi des Perses , &
 par la demande qu'il fit d'être déclaré

le Généralissime de leur armée , ce
 qu'on n'eut garde de lui accorder. La
 crainte où il étoit pour lors de se voir
 bientôt attaqué par les Carthaginois,
 l'empêcha sur tout de donner du se-
 cours aux Grecs. Il agit au reste en
 rusé politique , & quand il fut que
 Xerxès avoit passé l'Hellespont , il
 envoya un homme affidé avec de
 grands présens , & lui donna ordre
 d'observer quel seroit le succès du
 premier combat , & en cas qu'il fût
 favorable à Xerxès , de lui faire les
 soumissions de sa part ; sinon , de ra-
 porter son argent. Il faut revenir aux
 * Carthaginois.

Ils étoient venus en Sicile sur les
 vives sollicitations de Térillus , au-

A R T A-trefois tyran d'Himère , mais dé-
X E R X E pouillé par Théron , autre tyran qui
 régnoit à Agrigente. Ce dernier étoit
 d'une des plus illustres familles de
 toute la Grèce , descendant en droite
 ligne de Cadmus. Il s'allia avec la
 maison qui régnoit alors à Syracuse ,
 & qui étoit composée de quatre fre-
 res , Gélon , Hiéron , Polyzéle , &
 Thrasylbule. Il maria sa fille au pre-
 mier , & il épousa la fille du troisié-
 me.

Amilcar aiant débarqué à Panorme ,
 commença par mettre le siège devant
 Himère. Gélon accourut au secours
 de son beau-pere avec une armée
 nombreuse ; & tous deux ensemble
 défirent les Carthaginois. Cette vi-
 ctoire est peutêtre la plus complete
 qui ait jamais été remportée.

Le combat se donna le jour même
 de l'action des * Thermopyles. J'en
 Tom. 1. p. 254. ai rapporté les circonstances dans l'hi-

* Hérodote dit que cette
 bataille fut donnée le même
 jour que celle de Salamine :
 ce qui paroît moins vrai-
 semblable. Car les Grecs ,
 instruits du succès de Gé-
 lon , le prièrent de venir à
 leur secours contre Xerxès ,
 ce qu'ils n'auroient pas fait

après la bataille de Sala-
 mine , qui leur enfla telle-
 ment le courage , que de-
 puis ce tems-là ils se cru-
 rent assez forts pour résister
 à leurs ennemis , & finir
 cette guerre à leur avan-
 tage sans le secours d'au-
 trui.

toire des Carthaginois. Il est remarquable qu'entre les conditions de paix que Gélon imposa aux vaincus, une des principales fut qu'ils cesseroient d'immoler leurs enfans au dieu Saturne. Ce qui marque en même tems & la cruauté des Carthaginois, & la piété de Gélon.

Les dépouilles furent immenses, & montoient à un prix infini. Gélon en destina la plus grande partie pour orner les temples de Syracuse. Le nombre des prisonniers fut aussi incroiable. Il en fit le partage avec une grande équité entre tous les alliés, qui les emploierent à cultiver leurs terres, & à construire de magnifiques édifices tant pour la décoration que pour l'utilité des villes, en prenant la précaution de leur mettre des fers aux piés. Plusieurs citoyens d'Agri-gente en avoient chacun jusqu'à cinq cens.

Gélon, après une victoire si glorieuse, loin d'en devenir plus fier & plus orgueilleux, se montra encore plus doux, plus affable, plus humain que jamais à l'égard des citoyens & des alliés. Au retour de cette campagne, il convoqua l'assemblée des Syracu-

AN.M. 35256
AV.J.C. 4796

LONGUE
MAIN.
*Plut. in,
Apophth. pag.
175.*

ARTAXERXE

sains, qui eurent ordre d'y venir armés. Pour lui, il s'y rendit sans armes : exposa à l'assemblée quelle avoit été sa conduite, à quoi il avoit employé les sommes qu'on lui avoit confiées, & quel usage il avoit fait de son autorité, ajoutant que si l'on avoit quelque plainte à former contre lui, sa personne & sa vie étoient entre leurs mains. Tout le peuple, touché d'un discours si peu attendu, & encore plus de la confiance avec laquelle il s'abandonnoit à lui, répondit par une acclamation générale de joie, de louange, & de reconnaissance ; & sur le champ, d'un commun accord, lui déféra l'autorité souveraine avec le titre de Roi. Et pour conserver à jamais la mémoire de l'action mémorable de Gélon qui étoit venu dans l'assemblée se mettre à la discrétion des Syracusains, ils lui érigèrent une statue, où il étoit représenté avec un simple habit de citoyen, sans ceinture & sans armes. Cette statue eut dans la suite un sort bien singulier, & digne des motifs qui la lui avoient fait ériger. Timoléon, plus de cent trente ans après, aiant rétabli la liberté à Syracuse, jugea

Plut. in Timol. pag. 247.
Eliau. lib. 43. cap. 37.

à propos, pour n'y laisser aucune tra- LONGUE-
ce du gouvernement tyrannique, & MAIN.

en même tems pour subvenir aux be-
soins du peuple, de faire vendre à
l'encan toutes les statues des Princes
& des Tyrans qui l'avoient gouver-
née jusques-là. Mais auparavant il
leur fit faire leur procès en forme,
comme on le fait à des criminels,
écoutant sur chacune les témoins &
les dépositions. Elles furent toutes
condamnées d'un commun suffrage,
excepté celle de Gélon dont je parle
ici, laquelle trouva un éloquent avo-
cat dans la vive & sincère reconnois-
sance des citoiens pour ce grand hom-
me, dont ils respectoient encore la
vertu comme s'il eût été vivant.

Les Syracusains n'eurent pas lieu
de se repentir d'avoir confié une en-
tière autorité à Gélon. Elle n'ajouta
rien au zèle qu'il avoit eu jusques-là
pour leurs intérêts, mais le mit seu-
lement en état de leur être plus utile.

Car, par un changement jusques-là Died. l. 174
inouï, & dont ^a Tacite n'a vû depuis pag. 551
d'exemple que dans Vespasien, il fut
le premier que la puissance souverai-

^a Solus omnium ante | muratus est. *Hist. lib. 1.*
se principum in melius | *cap. 50.*

ne ait rendu meilleur. Il donna le droit de bourgeoisie à plus de dix mille étrangers qui avoient servi sous lui. Ses vûes étoient de peupler la capitale, de rendre l'Etat plus puissant, de récompenser les services de ces braves & fidèles soldats, & de les attacher plus fortement à Syracuse par le souvenir d'un établissement si avantageux qu'elle leur avoit procuré en les adoptant au nombre de ses citoyens.

*Plut. in
Apophth. pag.
375.*

Il se piquoit sur tout d'une sincérité, d'une vérité, d'une bonne foi à garder sa parole, qui étoit à l'épreuve de tout : qualité essentielle dans un Prince, seule capable de lui attirer la confiance de ses sujets & des étrangers, & qui doit être regardée comme la base de toute bonne politique, & de tout bon gouvernement. Aiant besoin d'argent pour une expédition qu'il méditoit, (il y a apparence que c'étoit avant la victoire remportée contre les Carthaginois) il s'adressa au peuple pour en tirer cette contribution. Mais voiant que les Syracusains avoient peine à se résoudre à prendre sur eux cette dépense, il dit que ce qu'il leur demandoit n'étoit

qu'un emprunt, & qu'il s'engageoit à le leur rendre aussitôt après la guerre. Les sommes lui furent fournies, & il les rendit exactement au tems marqué. Quelle ressource pour l'Etat qu'une telle équité ! Quel malheur & quel aveuglement d'y donner la plus légère atteinte !

LONGU-
MAIN.

Une de ses principales attentions (& en cela il fut imité par son successeur) étoit de mettre en honneur le labourage & la culture des terres. On fait combien la Sicile étoit un pays fertile en blé, & quel immense revenu on pouvoit tirer d'un fonds si riche en le cultivant avec soin. Il animoit le travail par sa présence, & se faisoit un plaisir de paroître quelquefois à la tête des laboureurs, comme dans d'autres occasions on l'avoit vû marcher à la tête des troupes. Son dessein n'étoit pas seulement, dit Plutarque, de fertiliser & d'enrichir le pays, mais encore d'exercer ses sujets, de les accoutumer & de les endurcir au travail, & de les préserver par ce moien de mille désordres qui sont la suite inévitable d'une vie molle & oisive. Il est peu de maximes, en matière de politi-

Plut. *ibide*

A R T A- que, sur lesquelles les anciens aient
X E R X E plus insisté que sur celle qui regarde
 la culture des terres, ce qui est une
 preuve de leur grande sagesse, & de la
 profonde connoissance qu'ils avoient
 des solides appuis & des véritables
 ressources d'un Etat. Xénophon, dans
 un dialogue qui a pour titre Hiéron,
 & qui traite du Gouvernement, mon-
 tre quel avantage ce seroit pour un
 Etat, si le Prince étoit attentif à ré-
 compenser ceux qui excelleroient
 dans le labourage & dans la culture
 des terres. Il en dit autant de la
 guerre, du commerce, & de tous les
 arts, où l'honneur qu'on rendroit à
 ceux qui s'y distingueroient, met-
 troit tout en mouvement, exciteroit
 une noble & louable émulation par-
 mi les citoyens, & feroit inventer
 mille moyens pour conduire ces arts
 à leur perfection.

Il ne paroît pas que Gélon eût été
 élevé comme l'étoient chez les Grecs
 les enfans des riches, à qui l'on ap-
 prenoit avec grand soin la musique
 & l'art de toucher les instrumens.
 Peut-être fut-ce un effet de son peu
 de naissance, ou plutôt du peu de
 cas qu'il faisoit de ces sortes d'exer-
 cices.

cices. Un jour qu'on présenta après le repas, comme c'étoit la coutume, une lyre à tous les convivès, quand le rang de Gélon fut venu, au lieu de toucher cet instrument comme avoient fait tous les autres, il se fit amener son cheval, monta dessus avec une légèreté & une grace admirable, & fit voir qu'il avoit appris quelque chose de meilleur que de jouer de la lyre.

LONGUE-
MAIN.

Plut. in
Apophth. pag.
175.

Depuis la défaite des Carthaginois en Sicile, toutes les villes y jouissoient d'un profond repos, & Syracuse sur tout goutoit avec joie toutes les douceurs de la paix sous le sage gouvernement de Gélon. Il n'étoit pas de Syracuse, & cependant tous les Syracusains, si jaloux de leur liberté, s'étoient empressés de le faire leur roi. Quoiqu'étranger, la souveraineté le vint chercher, sans autre brigue de sa part que celle du mérite, Il en connut tous les devoirs : il en sentit le poids. Il ne l'accepta que pour l'avantage des peuples. Il ne se crut roi que pour défendre l'Etat, que pour maintenir le bon ordre, que pour protéger l'innocence & la justice, que pour donner à tous ses

Diod. lib.
11. p. 29. 30.

A R T A- sujets par sa vie simple , modeste ,
X E R X E. réglée , appliquée , le modèle de toutes les vertus civiles. Il ne prit pour lui de la roiauté que les peines & les soins , que le zèle pour le bien public , que la satisfaction sensible de procurer par ses veilles la tranquillité & le repos à des millions d'hommes : en un mot , il ne regarda la roiauté que comme un engagement & comme un moien de rendre plus d'hommes heureux. Il en bannit la pompe , le faste , la licence , & l'impunité de faire le mal. Il ne voulut point paroître régner , mais il se contenta de faire régner les loix. Il ne fit jamais sentir à ses inférieurs qu'il étoit le maître : il leur fit seulement comprendre qu'eux & lui devoient céder à la raison & à la justice. Pour se faire obéir , il aimoit à n'employer que la persuasion & le bon exemple , qui sont les armes de la vertu , & qui produisent seuls une obéissance sincère & constante.

Une vieillesse respectée , un nom chéri & révééré par tous ses sujets , une réputation également répandue au dedans & au dehors , ont été le fruit de cette sagesse conservée sur le trône

jusqu'au dernier soupir. Son règne fut LONGUE-
court, & ne fit que le montrer à la Si- MAIN.
cile, pour donner dans sa personne le
modèle d'un bon & d'un véritable roi.

Après avoir régné seulement sept ans,
il mourut, infiniment regretté de tous
ses sujets. Chaque famille croioit
avoir perdu son meilleur ami, son
protecteur, son pere. Le peuple lui
érigea hors de la ville, dans l'endroit
où sa femme Démarète avoit été en-
sevelie, un superbe monument, envi-
ronné de neuf tours d'une hauteur &
d'une magnificence extraordinaire,
& lui décerna les honneurs qu'on ren-
doit alors aux demi-dieux, appelés
autrement les Héros. Les Carthagi-
nois dans la fuite abbattirent ce mo-
nument, & Agathocle ces tours : mais,
dit l'Historien, ni la violence, ni l'en-
vie, ni le tems qui ruine tout, n'ont
pu détruire la gloire de son nom, ni
abolir la mémoire de ses grandes ver-
tus & de ses belles actions, gravées
par l'amour & par la reconnoissance
dans le cœur des Siciliens.

II. H I E' R O N.

Après la mort de Gélon, le sce- AN. M. 3532.
ptre demeura encore dans sa famille AV. J. C. 472.

A R T A-près de douze ans. Hiéron, l'aîné de
X E R X E ses freres, lui succéda.

Il faut, pour concilier les Auteurs au sujet de ce Prince, dont les uns le donnent pour un bon roi, d'autres pour un tyran odieux ; il faut, dis-je, supposer que dans les premières années de son règne, retenu par l'exemple encore récent d'un frere généralement aimé & respecté de ses sujets, il se conduisit avec sagesse & modération : & que dans la suite, abandonné à son mauvais naturel, & corrompu par les flateries des courtisans, il dégénéra de sa première vertu, comme cela n'est que trop ordinaire, & se laissa de marcher dans la route que son prédécesseur venoit de lui marquer, & dont il s'étoit si bien trouvé.

*In Apophth.
 pag. 175.*

Plutarque rapporte de lui une parole qui marque une disposition excellente dans un Prince. Il disoit que sa maison & ses oreilles seroient toujours ouvertes à quiconque voudroit lui dire la vérité, & qui la lui diroit avec franchise & sans ménagement.

Il paroît en effet qu'il donnoit cette liberté à ses amis. Une santé d'abord assez infirme, & éprouvée par

*Ælian. lib.
 4. cap. 15.*

de fréquentes maladies , lui laissa le LONGUE
 tems de faire des réflexions , & lui MAIN.
 fit naître la pensée d'appeller auprès
 de lui des personnes savantes , capa-
 bles de l'entretenir agréablement ,
 & de lui donner d'utiles instructions.
 Les plus célèbres poètes de son tems
 se rendirent à sa Cour ; Simonide ,
 Pindare , Bacchylide , Epicharme ;
 & l'on prétend que la douceur & les
 charmes de leur conversation ne con-
 tribuèrent pas peu à adoucir l'humeur
 dure & sauvage d'Hiéron. Ces poètes
 n'excelloient pas seulement dans la
 poésie , mais avoient d'ailleurs un
 grand fonds d'érudition , & étoient
 regardés & consultés comme les Sa-
 ges de leur tems. C'est ce que ^a Cicé-
 ron dit en particulier de Simonide.

Quelque tems après qu'il fut mon- *Diod. lib.*
 té sur le trône , il conçut de violens 11. pag. 36.
 soupçons contre son frere Polyzéle ,
 dont le grand crédit qu'il avoit dans
 la ville , lui fit craindre qu'il ne son-
 geât à le détrôner. Pour se défaire
 sans bruit d'un ennemi , selon lui , fort
 dangereux , il voulut le mettre à la

a Simonides, non poeta | sapiensque traditur. *Lib.*
 solum suavis , verum | I. de Nat. deor. n. 60.
 etiam ceteroqui doctus

A R T A - tête de quelques troupes qu'il en-
X E R X E voioit au secours des Sibarites con-
 tre les Crotoniars, espérant qu'il
 périroit dans cette expédition. Le re-
 fus que fit son frere d'accepter ce
 commandement, l'aigrit encore da-
 vantage contre lui. Théron, qui avoit
 épousé la fille de Polyzéle, prit le
 parti de son beau-pere. Il y eut à ce
 sujet de grands & de longs différens
 entre le Roi de Syracuse & celui d'A-
 grigente : mais à la fin ils s'accom-
 modèrent par la sage entremise du
 poëte Simonide ; & pour rendre leur
 accommodement durable, ils le ci-
 mentèrent par une nouvelle alliance.
 Hiéron épousa la sœur de Théron.
 Depuis ce tems-là les deux Rois vé-
 curent en bonne intelligence.

*Schol. in
Pind.*

On voit par ce que je viens de dire
 que Simonide avoit beaucoup de cré-
 dit sur l'esprit du Roi, & il s'en fer-
 voit pour le porter à la vertu.

*Cic. lib. 1.
de Nat. deor.
n. 60.*

Leurs entretiens rouloient assez
 souvent sur des matières de philoso-
 phie. Dans une de ces conversations,
 Hiéron demanda à Simonide ce qu'il
 pensoit sur la nature & sur les attri-
 buts de la divinité. Celui-ci demanda
 un jour pour y réfléchir : le lende-

main il en demanda deux, & alla **LONGUE:**
 toujours ainsi en augmentant. Pressé **MAIN.**
 par le Prince de rendre raison de ces
 délais, il avoua que la matière étoit
 au dessus de ses forces, & que plus il
 y pensoit, plus il y trouvoit d'obscu-
 rité.

Nous avons un excellent traité de
 Xénophon sur la manière de bien
 gouverner, qui a pour titre *Hiéron*,
 & qui est un dialogue entre ce Prince
 & Simonide. Hiéron entreprend de
 prouver au Poëte que les Tyrans, les
 Rois, ne sont pas si heureux qu'on se
 l'imagine. Entre un grand nombre de
 preuves qu'il en apporte, il insiste
 principalement sur le malheur qu'ils
 ont d'être privés du plus grand bien
 & de la plus grande douceur de la vie,
 c'est-à-dire d'un véritable ami, dans
 le sein duquel on puisse déposer sûre-
 ment ses chagrins, ses inquiétudes,
 ses secrets; qui partage avec nous nos
 joies & nos douleurs; en un mot qui
 soit un autre nous-même, & qui ne
 fasse avec nous qu'un cœur & qu'une
 ame. Simonide de son côté lui donne
 d'admirables instructions sur les de-
 voirs de la roiauté. Il lui représente
 qu'un Roi ne l'est pas pour lui, mais

A R T A- pour les autres : Que sa grandeur con-
X E R X E siste, non à se bâtir de superbes palais,
 — mais à construire des temples, à for-
 tifier & à embellir ses villes : Que sa
 gloire est, non qu'on le craigne, mais
 qu'on craigne pour lui : Qu'un soin
 véritablement roial, n'est pas d'en-
 trer en lice avec le premier-venu dans
 les Jeux Olympiques, (c'étoit la
 passion des Princes de ce tems-là, &
 en particulier * d'Hiéron) mais de
 disputer avec le Rois voisins à qui
 réussira le mieux à répandre l'abon-
 dance dans ses Etats, & à rendre ses
 peuples heureux.

Un autre poète, c'est Pindare, loue
 néanmoins ce même Hiéron sur la
 victoire qu'il avoit remportée à la
 course Equestre. » Ce Prince, dit-il
 » dans son ode, qui gouverne avec
 » équité les peuples de l'opulente
 » Sicile, a cueilli la plus pure fleur de
 » toutes les vertus. Il se fait un noble
 » plaisir de ce que la poésie & la mu-
 » sique ont de plus exquis, Il aime les

* On dit que Thémistocle le voyant arriver aux Jeux Olympiques avec un grand équipage, fut d'avis qu'on ne l'y admit pas, parce qu'il n'avoit point secouru les Grecs contre l'ennemi commun, non plus que son frere Gilon ; & cet avis fit honneur au Général Athénien. Alian. lib. 9. c. 5.

airs mélodieux, tels que nous avons « **LONGUE:**
 coutume d'en jouer à la table des « **MAIN.**
 personnes qui nous sont cheres. «
 Courage donc, prend ta lyre, & «
 monte-¹ sur le ton Dorien. Si tu te «
 sens animé d'un beau feu en faveur «
 de * Pise & de Phérénice; s'ils ont «
 fait naître en toi les plus doux transf- «
 ports, lorsque ce généreux Cour- «
 sier, sans être piqué de l'éperon, «
 voloit sur les bords de l'Alphée, & «
 portoit son maître au sein de la vi- «
 etoire; chante le Roi de Syracuse, «
 l'ornement de nos courses éque- «
 stres. «

On peut voir l'ode entière traduite par feu M^r. Maffieu, dans le 6^e Tome des Mémoires de l'Académie des Inscriptions & Belles-Lettres, d'où j'ai extrait le peu que j'en ai rapporté. J'ai été bien aise de faire connoître Pin-dare au Lecteur par ce petit échantillon.

Cette ode est suivie immédiatement d'une autre, composée en l'honneur de Théron roi d'Agrigente, vainqueur à la course des Chars. Plus

* Pise étoit la ville, près | nice- le nom du Courfier
 de laquelle se célébroient les | d'Hiéron, qui signifie, Rem-
 Jeux Olympiques: Phéri- | porteur de victoires.

ARTAXERXES la regardent comme le chef-d'œuvre de Pindare, tant l'expression leur en paroît sublime, les sentimens nobles, la morale pure.

Je ne sais pas jusqu'à quel point il faut compter sur les autres louanges que Pindare donne à Hiéron; car les poètes ne se piquent pas toujours d'une grande sincérité dans celles qu'ils accordent aux Princes: mais au moins il est certain qu'il avoit fait de sa Cour le rendez-vous des beaux esprits, & qu'il avoit sù les y attirer par ses manières honnêtes & engageantes, & encore plus par ses libéralités, ce qui n'est pas un petit mérite pour un Roi.

On ne peut donner à la Cour d'Hiéron l'éloge que donne^a Horace à celle de Mécène, où régnoit un caractère, rare parmi les savans, mais infiniment plus estimable que toute leur science. On ne connoissoit point dit Horace, dans cette aimable Cour, les bas sentimens de l'envie & de la jalousie, & l'on y voioit, dans ceux

^a Non isto vivimus illic,
Quo tu rere, modo. Domus hac nec purior ulla est,
Nec magis his aliena malis. Nil mi officit unquam,
Ditior hic aures quia doctior. Est locus uni-
Cuique suus. *Horat. Lib. 1. Satyr. 10.*

qui partageoient la faveur du maître, **LONGUE-**
un mérite ou un crédit supérieur, sans **MAIN.**
en prendre ombrage. Il n'en étoit pas

ainsi chez Hiéron, ni chez Théron. Scholast.
Pind.

On dit que Simonide, & son neveu
Bachylide, tâchoient par toutes sor-
tes de critiques d'affoiblir l'estime que
ces Princes témoignent pour les ou-
vrages de Pindare. Celui-ci, par droit
de représailles, les rabaisse étrange-
ment dans l'ode de Théron, en les
comparant *à des corbeaux qui croassent
inutilement contre le divin oiseau de Jupi-
ter.* La vertu de Pindare n'étoit pas la
modestie.

Hiéron, ayant chassé de Catane & Died. lib. 11.
pag. 37.
de Naxe les anciens habitans, y éta-
blit une nombreuse colonie, compo-
sée de dix mille hommes; dont cinq
mille étoient Syracusains, & les cinq
autres mille venus du Péloponnèse.
C'est ce qui engagea les habitans de
ces deux villes à lui décerner après sa
mort les honneurs qu'on rendoit aux
Héros ou demi-dieux, parce qu'ils le
regardoient comme leur fondateur.

Il témoigna beaucoup de bonté aux Ibid. pag. 38.
enfans d'Anaxilaüs, qui avoit été ty-
ran de Zancle, & grand ami de Gélon
son frere. Comme ils étoient parve-

ARTANUS à l'âge viril, il les exhorta à
XERXE. prendre en main les rênes du gouver-
nement, après s'être fait rendre compte par leur tuteur, qui s'appelloit Micythe. Celui-ci, aiant assemblé les plus proches parens & les meilleurs amis des jeunes Princes, rendit en leur présence un si bon compte de sa tutéle, que tous, ravis en admiration, donnèrent des louanges extraordinaires à sa prudence, à sa bonne foi, & à sa justice. La chose alla si loin, que les jeunes Princes même le pressèrent très vivement de vouloir bien continuer à se charger du gouvernement comme il avoit fait jusques-là. Mais le sage Tuteur, préférant la douceur du repos à l'éclat du commandement, & d'ailleurs persuadé que l'intérêt de l'Etat demandoit que les jeunes Princes gouvernassent par eux-mêmes, prit le parti de la retraite.

La fin du règne d'Hiéron ne répondit pas aux commencemens, où nous n'avons presque rien vû que de louable. Il étoit, selon Diodore, avare, violent, injuste, & ne songeoit qu'à satisfaire ses passions, sans se mettre en peine de s'attirer l'estime & l'affection

*Diod. lib.
31. pag. 51.*

des peuples , qui de leur côté avoient LONGUE-
 une extrême haine pour un Prince , MAIN.
 qu'ils regardoient plutôt comme un ———
 tyran que comme un roi. Il n'y eut que
 le respect pour la mémoire de Gélon
 qui les empêcha d'éclater. Hiéron
 mourut , après avoir régné onze ans.

III. THRASYBULE.

Son frère Thrasybule lui succé- Diod. lib.
 da ; & , comme s'il eût pris à tâche de 11. p. 51. 52.
 le faire regretter , il enchérit encore
 sur tous ses vices. Plein d'orgueil , &
 d'une fierté brutale , il comptoit pour
 rien les hommes , croiant qu'ils n'é-
 toient faits que pour lui , & qu'il étoit
 d'une autre nature qu'eux. Il se livra
 entièrement au conseil flateur des
 jeunes insensés qui l'environnoient.
 Il traitoit tous ses sujets avec la der-
 nière dureté , bannissant les uns , con-
 fîsquant le bien des autres , & en fai-
 sant mourir un grand nombre. Les
 Syracusains ne purent souffrir lon-
 tems une si dure servitude. Ils appel-
 lèrent à leur secours les villes voisi-
 nes , intéressées comme eux à secouer
 le joug de la tyrannie. Thrasybule fut
 assiégé dans Syracuse même , dont il
 avoit retenu une partie sous sa domi-

ARTAXERXES nation, savoir l'Achradine, & l'île, qui étoit très fortifiée; le troisième quartier de la ville, nommé Tyque, étoit entre les mains de ses ennemis. Après une assez foible résistance, aiant demandé à capituler, il quitta la ville, & se retira en exil chez les Locriens. Il n'avoit été sur le trône qu'un an. Syracuse rentra ainsi en liberté. Elle délivra aussi les autres villes de Sicile de la tyrannie, établit par tout le gouvernement populaire, & s'y maintint elle-même pendant soixante ans jusqu'au tems de Denys le Tyran, qui l'asservit de nouveau.

AN.M. 3544.

AV.J.C. 460.

Diod. lib.

11. p. 55. &c.

DEPUIS que la Sicile eut été délivrée de la domination des Tyrans, & que la liberté eut été rendue à toutes les villes, comme le pays par lui-même étoit extrêmement fertile, & que la paix dont on jouissoit par tout laissoit tout le loisir de s'appliquer à la culture des terres, & à la nourriture des troupeaux, les peuples de cette île devinrent fort puissans, & amassèrent de grandes richesses. Pour conserver à jamais la mémoire de l'heureux jour où ils avoient secoué le joug de la servitude par l'exil de Thrasymbule, ils ordonnèrent dans l'assem-

blée générale de la nation , que l'on érigerait une statue colossale à Jupiter Libérateur ; que tous les ans, dans ce jour-là , on célébrerait une fête solennelle en action de grâces du rétablissement de la liberté , & qu'on immoleroit aux dieux quatre cens cinquante taureaux, qui serviroient aussi à traiter le peuple dans un festin commun.

LONGUE-
MAIN.

Il resta toujours néanmoins dans l'esprit de plusieurs particuliers je ne sai quel levain secret de tyrannie, qui troubla souvent la douceur de cette paix , & causa dans la Sicile divers mouvemens, dans le détail desquels je ne croi pas devoir descendre. Pour en prévenir l'effet, on établit à Syracuse le Pétalisme, qui étoit à peu près la même chose que l'Ostracisme à Athènes , & qu'on appella ainsi du mot grec πέταλον qui signifie une feuille , parce qu'on donnoit son suffrage sur une feuille d'olivier. Ce jugement s'exerçoit contre les citoyens dont la puissance donnoit lieu de craindre qu'ils ne songeassent à se faire tyrans, & les bannissoit pour dix ans : mais il ne subsista pas longtems, & fut bientôt aboli, parce que la crainte d'y

Ibid. pag. 65.

A R T A- succomber aiant porté les plus gens
X E R X E de bien à se retirer, & à renoncer au
gouvernement, les premières places
n'étoient plus remplies que par ceux
des citoiens qui avoient le moins de
mérite.

*Diod. p. 67-
70.*

DEUCETIUS, selon Diodore, étoit
Chef des peuples appelés propre-
ment Siciliens. Les aiant tous réunis
en un seul corps, excepté ceux d'Hy-
bla, il devint fort puissant, & forma
plusieurs grandes entreprises. Ce fut
lui qui bâtit la ville *Palica*, près du
temple des dieux nommés *Palici*. Ce
temple étoit fort célèbre par quel-
ques merveilles qu'on en raconte, &
encore plus par la sainteté & la reli-
gion des sermens qu'on y pretoit,
dont on dit que le violement étoit
toujours suivi d'une punition prompte
& exemplaire. C'étoit un asyle assuré
pour tous ceux qu'une puissance supé-
rieure accabloit, & sur tout pour les
esclaves vécés injustement par leurs
maîtres, ou traités par eux trop cruel-
lement. Ils y demeuroient en sûreté,
jusqu'à ce que des arbitres & des mé-
diateurs eussent fait leur paix; & il n'y
avoit point d'exemple que jamais au-
cun maître eût manqué à la parole.

qu'il avoit donnée de pardonner à ses esclaves, tant les dieux qui présidoient à ce temple étoient en réputation de venger sévèrement le parjure. LONGUE
MAIN.

Ce Deucétius, après plusieurs succès fort heureux, & plusieurs actions où il avoit remporté de grands avantages sur les ennemis, & en particulier sur les Syracusains, vit tout d'un coup changer sa fortune par la perte d'une bataille, & fut abandonné de presque toutes ses troupes. Dans la consternation & l'abbattement où le jeta une désertion si subite & si générale, il prit une résolution que le désespoir seul pouvoit lui inspirer. Il se retira sur le soir & de nuit à Syracuse, avança jusques dans la place publique; & là, humble suppliant prosterné aux piés des autels, il abandonna sa vie & ses Etats à la merci des Syracusains, c'est-à-dire de ses ennemis déclarés. La singularité du spectacle attira un grand concours du peuple. Les Magistrats aussitôt convoquèrent l'assemblée, & mirent l'affaire en délibération. On commença par entendre les Orateurs, chargés ordinairement de haranguer le peuple, qui l'animèrent extrême-

ARTAXERXES contre Deucétius, comme con-
 XERXES tre un ennemi public, que la Provi-
 — dence elle-même sembloit leur pré-
 senter, pour venger & punir par sa
 mort tous les torts qu'il avoit faits à
 la République. Un tel discours fit
 horreur à tout ce qu'il y avoit de gens
 de bien dans l'assemblée. Les plus sa-
 ges & les plus anciens d'entre les Sé-
 nateurs représentèrent, » Qu'il ne
 » falloit pas considérer ici ce que mé-
 » ritoit Deucétius, mais ce qui con-
 » venoit aux Syracusains : Qu'ils ne
 » devoient plus envisager en lui un
 » ennemi, mais un suppliant, quali-
 » té qui rendoit sa personne sacrée
 » & inviolable : Qu'il y avoit une
 » déesse (elle s'appelloit Némésis)
 » vengeresse des crimes, sur tout de
 » la cruauté & de l'impiété, laquelle
 » sans doute ne laisseroit pas celle-ci
 » impunie : Qu'outre qu'il y a de la
 » bassesse & de l'inhumanité d'in-
 » sulter à l'infortune des malheu-
 » reux, & de vouloir écraser ceux
 » qu'on trouve déjà abbatu sous ses
 » piés ; il étoit de la grandeur & du
 » bon naturel des Syracusains de faire
 » paroître de la bonté & de la clé-
 » mence à l'égard de ceux même qui

» en sont le moins dignes. « Tout le LONGUE-
 peuple se rendit à cet avis, & d'un MAIN.
 commun consentement conserva la
 vie à Deucétius. La ville de Corinthe,
 métropole & fondatrice de Syracuse,
 lui fut marquée pour lieu de sa retrai-
 te, & les Syracusains s'engagèrent à
 lui fournir tout ce qui lui étoit né-
 cessaire pour y vivre honorablement.
 Qui ne comprend pas, en comparant
 ces deux avis, de quel côté est le beau
 & le grand ?

§. II. *De quelques personnes & de quel-
 ques villes célèbres dans la grande
 Grèce. Pythagore, Charondas, Za-
 leucus, Milon l'Athlète: Crotone, Sy-
 baris, Thurium.*

1. Pythagore.

EN TRAITANT de ce qui regarde
 la Grande Grèce en Italie, je ne dois
 pas omettre Pythagore, qui en a fait
 l'honneur. Il étoit de Samos. Après
 avoir parcouru beaucoup de pays, &
 s'être enrichi l'esprit d'un grand nom-
 bre de rares connoissances, il revint
 dans sa patrie, où il ne fit pas un long
 séjour à cause du gouvernement ty-
 rannique qu'il y trouva établi par

*Diog. Laert.
 in vit. Pythag.
 AN.M. 3480.
 AV. J.C. 524.*

A R T A- Polycrate, qui avoit néanmoins pour
X E R X E lui tous les égards possibles, & qui
 faisoit de son mérite le cas qu'il devoit. Mais l'étude des sciences, & sur tout de la philosophie, ne peut guères s'accorder avec la servitude, même la plus douce & la plus honorable. Il passa donc en Italie, & fit sa demeure ordinaire à Crotone, à Métapont, à Héraclée, à Tarente. Servius Tullius, ou Tarquin le superbe, régnoit pour lors à Rome: ce qui détruit absolument l'opinion de ceux qui croient que Numa Pompilius, second roi des Romains, qui vivoit plus de cent ans auparavant, avoit été disciple de Pythagore; opinion fondée apparemment sur la ressemblance de leurs mœurs, de leur caractère, & de leurs principes.

*Liv. lib. 1.
 n. 18.*

^a Tout le pays se ressentit bientôt de la présence de ce grave Philosophe. Le goût de l'étude, & l'amour de la sagesse, s'y répandirent presque généralement en fort peu de tems. On accouroit de toutes les villes voisines pour voir Pythagore, pour l'entendre,

^a Pythagoras, cum in Italiam venisset, exornavit eam Græciam, quæ magna dicta est, & pri-

vatim & publicè, præstantissimis & institutis, & artibus. Cic. Tuscul. Quæst. lib. 5. n. 10.

& pour profiter de ses salutaires avis. **LONGUE-
MAIN.**

Tous les Princes du pays se faisoient un plaisir & un honneur de l'avoir chez eux, de s'entretenir avec lui, & de prendre de ses leçons sur la manière de gouverner sagement les peuples. Son école devint la plus célèbre qui eût encore été. Il n'avoit pas moins de quatre ou cinq cens disciples. Avant que de les admettre dans ce rang, il les éprouvoit dans une espèce de noviciat qui duroit cinq ans, & pendant tout ce tems-là il les condamnoit à un rigoureux silence, parce qu'il vouloit qu'ils fussent instruits avant que de parler. J'exposerai quels étoient ses dogmes & ses sentimens, lorsque je parlerai des différentes sectes des Philosophes : tout le monde sait que la métempsychose en étoit un des principaux. Ses disciples avoient un grand respect pour tout ce qui sortoit de sa bouche, & sans autre examen, il suffisoit qu'il eût parlé pour se faire croire ; & pour assurer que quelque chose étoit vrai, ils avoient coutume de s'exprimer ainsi : *Le Maître l'a dit.* C'étoit porter trop loin la déférence & la docilité, que de renoncer ainsi à tout examen, & de

Avant d'aller

A R T A- faire le sacrifice absolu de sa raison &
 X E R X E de ses lumières ; sacrifice qui n'est dû
 ————— qu'à la seule autorité divine , infini-
 ment supérieure à toute notre raison
 & à toutes nos lumières , & qui a
 droit par conséquent de leur imposer
 la loi, & de leur parler en souverain.

Il sortit de l'école de Pythagore un
 grand nombre d'illustres disciples,
 qui firent un honneur infini à leur
 maître : de sages Législateurs , de
 grands Politiques , des personnes ha-
 biles dans toutes les sciences , des
 hommes capables de gouverner les
 Etats , & d'être les Ministres des plus
 grands Princes. ^a Lontems après sa
 mort , cette partie de l'Italie qu'il
 avoit cultivée & instruite par ses le-
 çons , étoit encore regardée comme
 la pépinière & le séjour des savans en
 tout genre , & elle se maintint pen-
 dant plusieurs siècles dans cette glo-
 rieuse possession. Il falloit qu'à Rome
 on eût une grande idée du mérite &
 de la vertu de Pythagore, puisque l'o-
 racle de Delphes aiant ordonné aux

Plin. l. 34.
cap. 6.

^a Pythagoras tenuit
 magnam illam Græciam
 cum honore, & discipli-
 na, tum etiam auctori-
 tate, multaque secula po-

stea sic vixit Pythago-
 reorum nomen, ut nulli
 alii docti viderentur.
Tuscul. Quest. L. I. n. 32.

Romains pendant la guerre des Samnites d'ériger deux statues dans l'endroit le plus célèbre de la ville, l'une au plus sage, l'autre au plus courageux des Grecs, ils les érigèrent dans le lieu des Comices à Pythagore & à Thémistocle. On ne fait rien de certain sur le lieu ni sur le tems de la mort de Pythagore.

2. *Crotone. Sybaris. Thurium.*

Crotone fut fondée par Myscellus chef des Achéens la troisième année de la xvii. Olympiade. Ce Myscellus étant allé à Delphes pour consulter l'oracle d'Apollon sur le lieu où il bâtiroit sa ville, y trouva Archias le Corinthien, qu'un semblable dessein y avoit amené. Le Dieu les écouta favorablement, & après les avoir déterminés sur le lieu le plus convenable à leurs nouveaux établissemens, il leur proposa différens avantages, & leur laissa entre autres le choix des richesses ou de la santé. Les richesses touchèrent Archias, Myscellus demanda la santé; &, si l'on en croit l'histoire, Apollon fut fidèle à tous les deux. Archias fonda Syracuse, qui devint en peu de tems la plus opulen-

AN. M. 3295.

Av. J. C. 709.

Strab. l. 6.

pag. 262. &

269.

Dionys. Ha-

licarn. Antiq.

Rom. l. 2. p.

121. a

A R T A-te ville de la Grèce. Myſcellus fonda
X E R X E Crotone, ſi fameuſe par la longue vie
 & par la force naturelle de ſes habi-
 tans, qu'elle étoit paſſée en proverbe
 pour ſignifier un lieu fort ſain, & où
 l'air étoit d'une extrême pureté. Elle
 ſe ſignala par un grand nombre de vi-
 ctoires dans les Jeux de la Grèce,
 & Strabon dit que dans une même
 Olympiade ſept Crotoniates furent
 couronnés aux Jeux Olympiques, &
 remportèrent tous les prix du Stade.

*Κροτωνή
 ἱστίαρι.*

Strab. l. 6. *Sybaris* étoit ſituée à dix lieues de
pag. 263. Crotone, (200 ſtades) & avoit été
Athen. lib. fondée auſſi par les Achéens, mais
12. pag. 518. avant l'autre. Cette ville dans la ſuite
520. devint fort puiffante. Elle avoit ſous
 ſa dépendance quatre peuples voiſins
 & vingt-cinq villes, de ſorte qu'elle
 ſeule pouvoit mettre ſur pié trois cens
 mille hommes. Cette richeſſe & cette
 opulence furent bientôt ſuivies d'un
 luxe & d'un dérèglement de mœurs
 qu'on a peine à croire. Les citoiens
 n'étoient occupés que de feſtins, de
 jeux, de ſpectacles, de parties de plaifir
 & de débauches. Il y avoit des récom-
 penſes publiques & des marques de
 diſtinction pour ceux qui donnoient de
 plus magnifiques repas, & même pour
 les

les cuisiniers qui réussissoient le mieux dans l'art important de faire de nouvelles découvertes pour la bonne chère, & d'inventer de nouveaux raffinemens pour satisfaire le goût. La délicatesse & la mollesse étoient portées si loin, qu'on écartoit sévèrement de la ville tous les ouvriers qui faisoient trop de bruit en travaillant, & qu'on n'y souffroit point de cocqs, de peur que leur chant aigu & perçant ne troublât la douceur du sommeil.

A tous ces maux se joignirent la dissension & la discorde, ce qui causa leur ruine. Cinq cens des plus riches de la ville en aiant été chassés par la faction d'un particulier nommé Téllys, se réfugièrent à Crotonse. Téllys les fit redemander, & sur le refus que firent les Crotoniates de les livrer, déterminés à cette généreuse résolution par l'avis de Pythagore qui étoit alors chez eux, la guerre fut déclarée. Les Sybarites se mirent en campagne avec trois cens mille hommes, les Crotoniates avec cent mille seulement, mais ils avoient à leur tête Milon, ce fameux Athlète, dont il sera bientôt parlé, qui étoit couvert

AN.M. 3474.

AV.J.C. 520.

Diod. lib.

12. p. 76-85.

ARTAXERXE

d'une peau de lion, & armé d'une massue, comme un autre Hercule. Ceux-ci remportèrent une victoire complète, & firent main basse sur tous les fuiards, de sorte qu'il ne s'en sauva qu'un petit nombre, & leur ville demeura déserte. Environ soixante ans après, des Thessaliens vinrent s'y établir : mais ils n'y demeurèrent pas longtems en repos, & en furent chassés par les Crotoniates. Réduits à cette facheuse extrémité, ils implorèrent le secours de Sparte & d'Athènes. Les Athéniens, touchés de compassion pour le pitoiable état où ils étoient réduits, après avoir fait proclamer dans le Péloponnèse que ceux qui voudroient se joindre à cette colonie pouvoient le faire librement, envoièrent aux Sybarites une flotte de dix vaisseaux, sous la conduite de Lampon & de Xénocrate.

AN.M 3560.
AV. J.C. 444.

ILS BATIRENT une ville près de l'ancienne Sybaris, qu'ils appellèrent *Thurium*. Deux Savans illustres, l'un orateur, l'autre historien, se joignirent à cette colonie. Le premier étoit Lyfias, âgé pour lors seulement de quinze ans. Il demeura à *Thurium* jusqu'au malheur arrivé aux Athé-

Dionys. H.
licarn. in vit.
Lys. pag. 82.

niens dans la Sicile, & passa pour lors à Athènes. Le second étoit Hérodote. LONGUE-
MAIN.

Quoiqu'il fût natif d'Halicarnasse ville de Carie, il fut pourtant censé être de Thurium, parce qu'il s'y établit avec cette colonie. J'en parlerai ailleurs plus au long. Strab. l. 14.
pag. 656.

La division se mit bientôt dans la ville, à l'occasion des nouveaux habitans, que les autres vouloient priver de toutes les charges & de tous les privilèges. Mais comme ils étoient en bien plus grand nombre, ils chassèrent tous les anciens Sybarites, & demeurèrent seuls maîtres de la ville. Soutenus par l'alliance qu'ils firent avec les Crotoniates, ils devinrent en peu de tems fort puissans; & aiant établi dans leur ville le gouvernement populaire, ils en distribuèrent les citoyens en dix Tribus, auxquelles ils donnèrent le nom des différens peuples d'où ils étoient sortis.

3. Charondas Législateur.

ALORS ils ne songèrent plus qu'à affermir leur gouvernement par de sages loix, & pour cet effet choisirent entr'eux Charondas élevé dans l'école.

ARTAXERXES de Pythagore, qu'ils chargèrent du soin de les dresser. J'en rapporterai ici quelques-unes.

1^{ment}. Il donna exclusion du Sénat & de toute dignité publique à quiconque passeroit à de secondes noces après avoir eu des enfans d'un premier lit : persuadé qu'un homme si peu attentif aux intérêts de ses enfans, ne le seroit pas davantage à ceux de la patrie ; & que s'étant montré mauvais pere, il seroit mauvais magistrat.

2. Il condamna les calomniateurs à être conduits par toute la ville couronnés de bruière, comme les plus méchans de tous les hommes ; ignominie à laquelle le plus souvent ils ne pouvoient survivre. La ville, délivrée de cette peste, recouvra le repos & la tranquillité. Les ^a calomniateurs sont en effet la source la plus ordinaire des troubles publics & particuliers, & selon la remarque de Tacite, trop épargnés, dans la plupart des Etats.

3. Il établit une loi toute nouvelle contre une autre sorte de peste & de

^a Delatores, genus hominum publico exitio repperitum, & pœnis quidem nunquam satis coercitum. Tacit. *Annal. lib. 4. cap. 30.*

contagion, qui est, dans une république, la cause ordinaire de la corruption des mœurs ; en donnant action contre ceux qui se lieroient d'amitié & de commerce avec les méchans, & les condannant à une amende considérable.

LONGUE-
MAIN.

4. Il voulut que tous les enfans des citoyens fussent instruits dans les belles lettres, dont l'effet propre est de polir & de civiliser les esprits, d'inspirer des mœurs douces, & de porter à la vertu ; ce qui fait le bonheur d'un Etat, & est également nécessaire à tous les citoyens. Dans cette vûe, il stipendia des maîtres publics, afin que l'instruction étant gratuite, pût devenir générale. Il regardoit l'ignorance comme le plus grand des maux, & la source de tous les vices.

5. Il fit une loi à l'égard des orphelins, qui paroît assez sensée : en confiant le soin de leur éducation aux parens du côté maternel, de qui il n'y avoit rien à craindre contre leur vie ; & l'administration de leurs biens aux parens du côté paternel, qui avoient intérêt de les conserver, pouvant en devenir les héritiers par la mort des pupilles.

**A R T A-
X E R X E** 6. Au lieu de punir de mort les dé-
serteurs, & ceux qui quittoient leur
rang & fuioient dans le combat, il se
contenta de les condamner à paroître
pendant trois jours dans la ville revê-
tus d'un habit de femme : espérant
que la crainte d'une telle honte ne
produiroit pas moins d'effet que celle
de la mort, & d'ailleurs voulant don-
ner lieu à ces lâches citoiens de répa-
rer & de couvrir leur faute dans la
première occasion.

7. Pour empêcher que ses loix ne
fussent abrogées avec trop de facilité
& de témérité, il imposa une condi-
tion bien dure & bien hazardeuse à
ceux qui proposeroient d'y faire
quelque changement. Ils devoient
paroître dans l'assemblée publique
avec une corde au cou, & si le chan-
gement proposé ne passoit point, être
étranglés sur le champ. Dans toute la
suite du tems il n'arriva que trois fois
de proposer de tels changemens ; &
ils furent acceptés.

Charondas ne survécut pas lontems
à ses loix. Revenant un jour de pour-
suivre des voleurs, & trouvant la
ville en tumulte, il entra tout armé
dans l'assemblée, ce qu'il avoit dé-

fendu par une loi expresse. Un parti- LONGUE
 culier lui reprocha qu'il violoit lui- MAIN.
 même ses loix. *Non*, dit-il, *je ne les*
viole point, *mais je les scellerai de mon*
sang ; & sur le champ il se tua de son
 épée.

Zaleucus , autre Législateur.

DANS le même tems , & dans la même contrée, il y eut un autre Législateur célèbre , nommé ZALEUCUS, disciple de Pythagore aussi bien que Charondas. Il ne nous reste presque qu'une espece de préambule qu'il avoit mis à la tête de ses loix , qui en donne une grande idée. Il demande de ses citoyens avant tout , qu'ils croient & soient fortement persuadés qu'il y a des dieux ; & il ajoute qu'il ne faut que lever les yeux vers le ciel, & en considérer l'ordre & la beauté , pour se convaincre qu'un ouvrage si merveilleux ne peut point être l'effet du hazard ni de l'industrie humaine. Par une conséquence & une suite naturelle de cette persuasion , il les exhorte à honorer & à respecter les dieux , comme auteurs de tout ce qu'il y a de bon , de juste , & d'honnête parmi les mortels ; & de les ho-

ARTAXERXES, non simplement par des sacrifices & par de magnifiques présens, — mais par une sage conduite, & par des mœurs pures & chastes, qui plaisent aux dieux infiniment plus que tous les sacrifices.

Après cet exorde si plein de religion & de piété, où il montre la Divinité comme la source primitive des loix, comme la principale autorité qui en commande l'observation, comme le plus puissant motif pour y être fidèle, & comme le parfait modèle auquel on doit se conformer, il passe au détail des devoirs que les hommes ont les uns à l'égard des autres, & leur donne un précepte fort propre à conserver dans le commerce de la vie la paix & l'union, en commandant de ne pas rendre éternelles les haines & les dissensions, ce qui marqueroit un esprit féroce & indomtable ; mais d'en user à l'égard de leurs ennemis, comme devant bientôt les avoir pour amis. Il ne faut pas attendre du paganisme une plus haute perfection.

Quant à ce qui regarde les Juges & les Magistrats, après leur avoir représenté qu'en prononçant les jugemens ils ne doivent se laisser préve-

nir ni par l'amitié, ni par la haine, ni par aucune autre passion ; il se contente de les exhorter à éviter avec soin toute hauteur & toute dureté à l'égard des parties, qui sont assez à plaindre d'avoir à essuier les peines & les fatigues qu'entraîne après elle la poursuite d'un procès. Leur place en effet, quelque laborieuse qu'elle soit, ne leur donne aucun droit de faire sentir leur mauvaise humeur aux parties. Ils leur doivent la justice par état & par la qualité même de Juges ; & lorsqu'ils la leur rendent, même avec douceur & avec humanité, ce n'est qu'une dette dont ils s'acquittent, & non une grace qu'ils leur accordent.

Pour écarter de sa République le luxe, qu'il regardoit comme la ruine certaine d'un État, il ne suivit pas la pratique établie parmi quelques nations, où l'on croit qu'il suffit, pour le réprimer, de punir les contraventions à la loi par des amendes pécuniaires. Il s'y prit, dit l'historien, d'une manière plus adroite & plus ingénieuse, & en même tems plus efficace. Il défendit aux femmes de porter des étofes riches & précieuses, des habits brodés, des pierreries, des pen-

A R T A — dans d'oreilles, des colliers, des bracelets, des anneaux d'or, & d'autres ornemens de cette sorte, n'exceptant de cette loi que les femmes prostituées. Il fit, à l'égard des hommes, un règlement semblable à proportion, n'en exceptant pareillement que ceux qui consentiroient à passer pour débauchés & pour infames. Par cette voie il détourna facilement & sans violence les citoyens de tout ce qui sentoit le luxe & la mollesse. ^a Car il ne se trouva personne qui eût assez renoncé à tout sentiment d'honneur, pour vouloir porter aux yeux de toute une ville les marques de sa honte, s'attirer par là le mépris & la risée publique, & deshonorer pour toujours sa famille.

5. *Milon l'Athlète.*

Nous l'avons vû à la tête d'une armée remporter une fort grande victoire. Mais il étoit encore plus célèbre par sa force athlétique, que par son courage guerrier. On le surnommoit *le Crotoniate*, du nom de Crotone sa patrie. C'est celui dont nous avons

^a More inter veteres in ipsa professione flagitii recepto, qui satis poenarum adversus impudicas credebant. Tacit. *Annal.* lib. 2. cap. 85.

dit que Démocède , ce fameux médecin, qui étoit son compatriote, avoit épousé la fille, après s'être sauvé de la Cour de Darius pour revenir dans la Grèce.

LONGUE-
MAIN.

AN.M. 3484.
AV.J.C. 520.

Pausanias dit que Milon fut sept fois victorieux aux Jeux Pythiens, une fois étant enfant ; qu'il remporta six victoires aux Jeux Olympiques, toutes à la lutte, l'une desquelles lui fut ajugée aussi pendant son enfance ; & que s'étant présenté une septième fois à Olympie pour la lutte, il ne put y combattre faute d'antagoniste. Il empoignoit une grenade de manière, que, sans l'écraser, il la serroit suffisamment pour la retenir malgré les efforts de ceux qui tâchoient de la lui arracher. Il se tenoit si ferme sur un * disque qu'on avoit huilé pour le rendre plus glissant, qu'il étoit impossible de l'y ébranler. Il ceignoit sa tête d'une corde, comme d'un diadème ; après quoi, retenant fortement son haleine, les veines de sa tête s'enfloient jusqu'au point de rompre la corde. Lorsqu'appuyant son coude sur son côté il présentait la main droite ouverte, les doigts serrés l'un contre l'autre à l'exception du

Lib. 6. pag.
369. 370.

* Le disque
étoit une espèce
de palet, de
forme plate &
ronde.

A R T A- pouce qu'il élevoit, il n'y avoit force
X E R X E d'homme qui pût lui écarter le petit
doigt des trois autres.

*Strab. lib. 6.
pag. 263.*

Tout cela n'étoit dans Milon qu'une vaine & puérile ostentation de ses forces : le hazard lui fournit une occasion d'en faire un usage bien plus louable. Un jour qu'il écoutoit les leçons de Pythagore, (car il étoit l'un de ses disciples les plus assidus) la colonne qui soutenoit le plafond de la sale où l'auditoire étoit assemblé, aiant été tout d'un coup ébranlée par je ne sai quel accident, il la soutint lui seul, donna le tems aux auditeurs de se retirer, & après avoir mis les autres en sûreté, il se sauva lui-même.

Ce qu'on raconte de la voracité des

*Athen. lib.
30. pag. 410.*

Athlètes, est presque incroyable. Celle de Milon étoit à peine rassasiée de vingt mines (ou livres) de viande,

** Trente livres, ou quinze pintes.*

d'autant de pain, & de trois * conges de vin en un jour. Athénée raporte qu'une fois aiant parcouru toute la longueur du stade portant sur ses épaules un taureau de quatre ans, il l'affomma d'un coup de poing, & le mangea tout entier dans la journée. Je passe volontiers le reste à Milon &

mais y a-t-ill la moindre vraisemblance LONGUE-
qu'un homme puisse manger seul un MAIN.
beuf entier en un jour ?

On dit que Milon, dans son extrême Cic. de Senect. num. 27.
vieillesse, voiant les autres Athlètes s'exercer à la lutte, & considérant ses bras autrefois si robustes, mais que l'âge avoit extrêmement affoiblis, s'écria en pleurant : *Ab ! maintenant ces bras sont morts.*

Cependant il oublia, ou se dissimula à lui-même son affoiblissement ; & Pausan. lib. 6, pag. 370.
la confiance en ses forces, qu'il conserva jusqu'à la fin, lui devint fatale. Aiant trouvé en son chemin un vieux chêne entr'ouvert par quelques coins qu'on y avoit enfoncés à force, il entreprit d'achever de le fendre avec ses mains. Mais comme l'effort qu'il fit pour cela eut dégagé les coins, les mains se trouvèrent prises & serrées par le ressort des deux parties de l'arbre qui se rejoignirent : de manière que ne pouvant se débarasser, il fut dévoré par les loups.

Un Auteur remarque sensément Alien. lib. 2. cap. 24.
que cet Athlète si robuste, & si fier des forces de son corps, étoit le plus foible des hommes par raport à une passion qui souvent terrasse & asservit

ARTAXERXES les plus forts, & qu'il fut souverainement maitrisé par une courtisane, qui lui faisoit faire tout ce qu'elle vouloit.

CHAPITRE TROISIÈME.

Guerre du Péloponnèse.

AN.M. 3573.
AV. J. C. 431.

LA GUERRE du Péloponnèse, dont j'entreprends de parler, commença vers la fin de la première année de l'Olympiade LXXXVII, & dura 27 ans; Thucydide en a écrit l'histoire jusqu'à la 21^e année inclusivement. Il marque avec beaucoup d'exactitude tout ce qui s'est passé chaque année, qu'il divise en campagnes & en quartiers d'hiver. Je n'entrerai pas dans un si grand détail, & je me contenterai d'en extraire ce qui me paroîtra de plus curieux & de plus intéressant. Plutarque & Diodore de Sicile me feront aussi d'un grand secours, & me fourniront beaucoup de lumières.



§. I. *Siège de Platée par les Thébains. Ravages mutuels de l'Attique & du Péloponnèse. Honneurs rendus aux Athéniens morts dans la première campagne. Première année de la guerre.*

LONGUE-
MAIN.

LE PREMIER acte d'hostilité qui commença la guerre, vint de la part des Thébains, qui attaquèrent Platée, ville de Béotie, & alliée d'Athènes. Ils y furent introduits par trahison : mais les citoyens les aiant attaqué de nuit, les tuèrent tous, excepté près de deux cens qu'on fit prisonniers, & qui, peu de tems après, furent mis à mort. Les Athéniens, avertis de ce qui s'étoit passé à Platée, y envoièrent aussitôt du secours, y firent porter des vivres, & en firent sortir toutes les bouches inutiles.

*Thucyd. lib.
2. p. 99-122.
Diod. l. 12.
pag. 97-100.
Plut. in Pe-
ricl. pag. 170.*

La trêve étant manifestement rompue, on se prépara de part & d'autre ouvertement à la guerre, & l'on dépêcha par tout des ambassadeurs, pour se fortifier de l'alliance des Grecs & des Barbares. Tout étoit en mouvement dans la Grèce, hormis quelques peuples, & quelques villes, qui demeurèrent dans la neutralité en attendant l'événement. Le grand nom-

A R T A-bre inclinoit vers les Lacédémoniens,
X E R X E comme vers les libérateurs de la Grèce, & l'on se portoit avec chaleur pour leur parti, parce que les Athéniens, oubliant que la modération & la douceur du commandement leur avoit d'abord attaché beaucoup d'alliés, les avoient ensuite presque tous aliénés par leur fierté, & par la dureté de leur gouvernement, & s'étoient fait haïr, non seulement de ceux qui étoient déjà sous leur puissance, mais de ceux qui appréhendoient d'y tomber. Telle étoit la disposition des esprits. Voici quels étoient les alliés de chacun des deux peuples.

Les Lacédémoniens avoient tout le Péloponnèse pour eux, à la réserve d'Argos qui étoit neutre. Les Achéens le furent aussi d'abord, excepté les Pelléniens : mais ils s'embarquèrent peu à peu dans cette guerre. Hors du Péloponnèse, ils avoient les Mégariens, les Locriens, les Béotiens, les Phociens, les Ambraciotes, les Leucadiens, & les Anaëtoriens.

Les alliés d'Athènes étoient Chio, Lesbos, Platée, les Messéniens de Naupacte, la plupart des Acarnaniens, les Corcyréens, les Céphaléniens, & les

Zacynthiens ; sans parler de tous les pays tributaires, comme la Carie maritime, la Dorie qui en est proche, l'Ionie, l'Hellespont, & les villes de la Thrace, excepté Chalcide & Potidée ; routes les îles qui sont entre la Crète & le Péloponnèse en tirant vers l'orient, & les Cyclades, hormis Mélos & Thère.

LONGUE-
MAIN.

Aussitôt après l'entreprise formée sur Platée, les Lacédémoniens avoient ordonné des levées dedans & dehors le Péloponnèse, & avoient fait préparer tout ce qui étoit nécessaire pour entrer dans le pays ennemi. Quand tout fut prêt, les deux tiers des troupes se rendirent à l'isthme de Corinthe, & l'autre demeura pour la garde du pays. Alors Archidamus roi de Lacédémone, qui commandoit l'armée, assembla les Généraux & les principaux Officiers, & leur remettant devant les yeux les grandes actions de leurs ancêtres, & celles qu'ils avoient faites eux-mêmes, ou dont ils avoient été les témoins, il les exhorta à soutenir courageusement l'ancienne gloire de leurs villes, aussi bien que leur propre gloire. Il leur représenta que toute la Grèce avoit les yeux attentifs sur

ARTAXERXES

eux, & que dans l'attente du succès d'une guerre qui alloit décider de son sort, elle ne cessoit de faire des vœux au ciel pour un peuple qui lui étoit aussi cher, que les Athéniens lui-étoient devenus odieux. Qu'au reste il ne pouvoit leur dissimuler qu'ils marcheroient contre un ennemi, beaucoup inférieur à la vérité en nombre & en forces, mais d'ailleurs puissant, aguerri, entreprenant, & dont le courage sans doute s'augmenteroit encore par la vûe du danger, & par le ravage de ses terres.^a Qu'ainsi il falloit faire des efforts extraordinaires pour jeter d'abord la terreur dans le pays où ils alloient entrer, & pour inspirer aux alliés une grande confiance. Tous répondirent par des cris de joie, & par des assurances réitérées de bien faire leur devoir.

L'assemblée s'étant séparée, Archidamus, toujours plein de zèle pour le salut de la Grèce, & attentif à ne rien négliger pour prévenir une rupture dont il prévoioit les funestes suites, envoya un Spartiate à Athènes, afin d'essayer, avant qu'on passât outre, de porter les Athéniens à se relâcher par

^a Gnarus primis even- | ciam gigni. Tacit. *Annal.*
tibus metum aut fidu- | lib. 13. cap. 37.

la vûe d'une armée prête à entrer dans l'Attique. Mais bien loin de lui donner audience, & d'écouter ses raisons, ils ne lui voulurent pas seulement permettre l'entrée dans leur ville. Car Périclès avoit obtenu qu'on ne recevroit ni héraut ni ambassadeur de la part des Lacédémoniens, qu'ils n'eussent mis bas les armes. On lui fit donc commandement de se retirer du pays dans le jour même, & on lui donna des gens pour l'accompagner jusques sur la frontière, & pour l'empêcher de parler à personne dans le chemin. En prenant congé d'eux, il leur dit que ce jour-là seroit le commencement de grands maux pour toute la Grèce. Archidamus, ne voyant plus aucune espérance d'accommodement, se mit en marche vers l'Attique avec une armée de soixante mille hommes, composée de troupes choisies.

Avant qu'il y entrât, Périclès déclara aux Athéniens que si Archidamus, en ravageant leurs terres, épargnoit celles qui lui appartenoient en propre, soit à cause du droit d'hospitalité qui étoit entre eux, ou pour donner occasion à ses ennemis & à ses envieux de le calomnier comme s'il étoit d'in-

LONGUE
MAIN.

ARTAXERXES

telligence avec lui, il donnoit dès ce jour-là à la ville d'Athènes ses terres & ses maisons. Il leur fit entendre que le salut de l'Etat consistoit à consumer les forces des ennemis en traînant la guerre en longueur; & que pour cela il falloit retirer en diligence des champs tous leurs effets, & se renfermer dans la ville, sans jamais en venir à une bataille. En effet, leurs troupes n'étoient pas assez nombreuses pour entrer en campagne, & pour tenir tête à l'ennemi. Ils avoient, sans les garnisons, treize mille soldats pesamment armés, & seize mille habitans, jeunes & vieux, bourgeois & autres, destinés pour la garde de la place; outre cela, douze cens chevaux en comptant les archers à cheval, & seize cens archers à pié. Voilà à quoi montoit l'armée des Athéniens. Mais leur principale force consistoit dans une flotte de trois cens galères; dont une partie étoit destinée à ravager le pays ennemi, & l'autre à contenir dans le devoir les alliés dont on tiroit des contributions, sans lesquelles on ne pouvoit pas fournir aux frais de la guerre.

Les Athéniens, encouragés par les vives exhortations de Périclès, emme-

nérent de la campagne leurs femmes, LONGUE-
leurs enfans, leurs meubles, & tous MAIN.
leurs effets, jusqu'à démolir leurs mai-
sons, & en emporter le bois. Pour le

bétail & les bêtes de somme, ils les
passèrent dans l'île d'Eubée, & dans
les îles voisines. Cette triste & préci-
pitée transmigration ne laissa pas de
les affliger sensiblement, & leur causa
bien des larmes. Depuis la retraite
des Perses, c'est-à-dire depuis près de
cinquante ans, ils avoient joui d'un
paisible repos, uniquement occupés de
la culture de leurs terres & de la nour-
riture de leurs troupeaux. Il falloit
maintenant tout abandonner, & re-
noncer généralement à tout. Ils le fi-
rent, & se logèrent dans la ville du
mieux qu'ils purent, se retirant chez
leurs parens ou chez leurs amis, quel-
ques-uns même dans les temples &
dans les autres lieux publics.

Cependant les Lacédémoniens s'é-
tant mis en marche, entrèrent dans le
pays, & vinrent camper à Énoé, qui
est la première place forte du côté de
la Béotie. Ils furent lontems à se pré-
parer à l'attaque, & à dresser des bat-
teries ; ce qui faisoit murmurer con-
tre Archidamus, comme s'il eût fait
la guerre négligemment, à cause qu'il

ARTAXERXES

n'avoit pas été d'avis de l'entreprendre. On lui reprochoit sa marche trop lente, & son séjour trop long près de Corinthe. On se plaignoit encore de ce qu'il avoit un peu tardé à assembler l'armée, comme s'il eût voulu donner le loisir aux Athéniens d'enlever ce qu'ils avoient à la campagne ; au lieu qu'en y entrant brusquement, tout eût été saccagé. Mais son dessein avoit été d'attirer les Athéniens par ces délais à un accommodement, & de prévenir une rupture, dont il prévoyoit que les suites seroient pernicieuses à toute la Grèce. Voiant qu'après plusieurs assauts il n'avoit pu prendre la place, il leva le siège, & entra dans l'Attique au milieu de la moisson. Après avoir ravagé toute la contrée, il s'avança jusqu'à Acharnes, l'un des plus grands bourgs d'Athènes, & qui n'étoit qu'à quinze cens pas de la ville. Il y campa, dans l'espérance que les Athéniens, indignés de le voir si près d'eux, sortiroient pour défendre leur pays, & lui donneroient occasion de les attirer à une bataille.

Ils eurent effectivement beaucoup de peine, fiers & impétueux comme ils étoient, à soutenir cette sorte de bravade & d'insulte de la part d'un enne-

mi, à qui ils ne se croioient pas inférieurs en courage. Ils voioient de leurs yeux le ravage de leurs terres, & l'incendie de leurs maisons & de leurs fermes. Ils ne pouvoient supporter plus longtems ce triste spectacle, & demandoient, qu'à quelque prix que ce fût, on les fît combattre. Périclès vit bien que c'étoit tout hazarder, & exposer la ville à une perte certaine, que d'aller livrer bataille devant ses murailles à une armée de soixante mille combattans, & composée des meilleures troupes qu'il y eût dans la Béotie & dans le Péloponnèse. D'ailleurs sa grande maxime étoit d'épargner le sang des citoiens, dont la perte étoit irréparable. Ainsi toujours ferme dans son plan, & uniquement attentif à calmer cette impatience & cette fougue des Athéniens, il se donna bien de garde d'assembler ni le Sénat, ni le peuple, de peur qu'on n'y prît malgré lui quelque fâcheuse résolution. Ses amis faisoient tous leurs efforts pour le fléchir par leurs prières. D'un autre côté ses ennemis n'oublioient rien pour l'ébranler par leurs menaces & par leurs mauvais discours. Ils tâchoient de le piquer par des chansons & par des satyres, en décrivant sa conduite

LONGUE
MAIN.

ARTAXERXES

* C'est le même Cléon qu'Aristophane a si fort décrié dans plusieurs de ses Comédies.

comme celle d'un homme lâche & insensible, qui laissoit tout en proie à leurs ennemis. * Cléon fut celui qui montra le plus d'acharnement contre lui. Il étoit fils de Corroieur, & Corroieur lui-même. Il s'étoit élevé par la brigade, & apparemment par une sorte de mérite tel qu'il le faisoit pour réussir dans une République. Il avoit une voix terrible & imposante, avec un art merveilleux de gagner le peuple, & de le mettre dans ses intérêts. Ce fut lui qui établit qu'on donneroît trois oboles à chacun des six mille Juges, au lieu de deux qu'on donnoit auparavant. Son caractère propre étoit une estime demesurée de lui-même, une folle confiance dans son mérite, & une hardiesse dans ses discours poussée jusqu'à l'impudence & l'effronterie, & qui n'épargnoit personne. Tous ces mouvemens n'émuèrent point Périclès. * Son caractère propre étoit une force d'ame invincible, qui le mettoit au dessus des bruits & des clameurs. Comme un bon pilote dans une violente tempête, après avoir donné ses ordres, & pris tous les soins nécessaires, ne songe plus

a Sprenendis rumoribus validus. Tacit.

qu'à

qu'à faire usage de son art , sans se **LONGUE-**
laisser attendrir par les prières ni par **MAIN.**

les larmes de ceux à qui la crainte du danger ôte ou trouble la raison : lui de même , après avoir pourvû à la sûreté de la ville , & posé par tout des gardes pour n'être pas surpris , suivait les conseils que lui suggéroit sa prudence , se mettant peu en peine des plaintes , des railleries , & des emportemens de ses citoiens , & persuadé qu'il savoit mieux qu'eux comment il falloit les gouverner. Il parut bien pour lors , dit Plutarque , que Périclès étoit véritablement maître des esprits , étant venu à bout , dans une telle circonstance , ^a d'empêcher les Athéniens de sortir de la ville , comme s'il eût tenu dans ses mains les clés des portes , & qu'il eût apposé sur leurs armes le sceau de son autorité , pour leur en interdire l'usage. Ce qu'il avoit prévu , arriva. Les ennemis , voyant que les Athéniens ne sortoient point de la ville , & apprenant que la flotte ennemie ravageoit leurs terres , décampèrent , & , après avoir fait le dégât dans tout le pays

*Plut. An Se-
niger. sit resp.
pag. 784.*

^a Διεικάλυσεν, μοιότην | κλεῖς τῶν πυλῶν ἀπέσπασεν
τὰ ἔπλα τῆ δῆμ. καὶ ταῖς | βραχιστάμιαις.

Tome III.

Z.

ARTAXERXES qui se trouva sur leur route, ils rentrèrent dans le Péloponnèse, & se retirèrent chacun chez eux.

On peut demander pourquoi Périclès garde ici une conduite entièrement opposée à celle qu'avoit gardé Thémistocle environ cinquante ans auparavant, l'orsqu'à l'approche de Xerxès il détermina les Athéniens à quitter leur ville, & à l'abandonner aux ennemis. Il est aisé de voir que les circonstances sont fort différentes. Thémistocle, attaqué par toutes les forces de l'Orient, crut avec raison ne pouvoir soutenir dans une seule ville ce déluge de barbares qui l'auroit inondée, & qui lui auroit fait perdre toute espérance d'être secourue de ses alliés. C'est la raison qu'en apporte Cicéron : *Fluctum enim totius barbaria ferre urbs una non poterat*. Il étoit donc de la sagesse de céder pour un tems, & de laisser à cette multitude confuse de barbares le loisir de se détruire elle-même, & de se dissiper. Périclès n'avoit pas à soutenir une guerre si accablante. Elle se faisoit à forces presque égales, & il prévoioit qu'elle lui donneroit des intervalles pour respirer. Ainsi, en homme de

tête & en habile politique, il se ren- LONGUE-
ferma constamment dans la ville, sans MAIN.

se laisser ébranler ni par les remon-
trances ni par les plaintes des citoiens.

Cicéron, en écrivant à son ami Atti-
cus, condamne absolument le parti Lib. 7. Epist.
qu'avoit pris Pompée d'abandonner 11.

Rome à César, au lieu, qu'à l'exem-
ple de Périclès, il auroit dû s'y ren-
fermer avec le Sénat, les Magistrats,
& la fleur des citoiens qui étoient
pour lui.

Après que les Lacédémoniens se
furent retirés, les Athéniens distri-
buèrent des troupes pour garder tous
les postes importants sur terre & sur
mer, selon le plan qu'ils prétendoient
suivre tant que dureroit la guerre.
On résolut aussi de tenir toujours
en réserve mille talens, & cent galé- Trois millions
res, pour n'en faire usage qu'au cas
que les ennemis attaquaissent l'Atti-
que par mer, avec peine de mort con-
tre ceux qui proposeroient de les em-
ployer ailleurs.

Les galères qu'on avoit envoyées
contre le Péloponnèse, y firent de
grands ravages, & consolèrent un
peu les Athéniens des pertes qu'ils
avoient souffertes. Un jour qu'on fit

ARTAXERXES l'embarquement , & que Périclès montoit sur son vaisseau , tout d'un coup le soleil vint à s'éclipser entièrement , & la terre fut couverte de ténébres. Ce phénomène jeta l'épouvante & la consternation dans l'esprit des Athéniens , qui étoient accoutumés par superstition , & par l'ignorance des causes naturelles , à regarder ces sortes d'événemens comme des présages funestes. Périclès voyant donc son pilote étonné & incertain de ce qu'il devoit faire , lui jeta son manteau sur le visage , & lui demanda s'il voioit. Le pilote lui ayant répondu que le manteau l'en empêchoit , Périclès lui fit comprendre qu'une pareille cause , c'est-à-dire le vaste corps de la lune interposé entre ses yeux & le soleil , l'empêchoit d'en voir la clarté.

Thucyd. lib. 2. p. 122-130. La première année de la guerre du Péloponnèse étant ainsi révolue , les Athéniens , pendant l'hiver , firent des funérailles publiques , selon l'ancienne coutume , si conforme à l'humanité & à la reconnoissance , à ceux qui avoient été tués dans cette campagne ; & ils pratiquèrent toujours depuis cette cérémonie , tant que la

guerre dura. Pour cela on dressoit, LONGUE-
trois jours auparavant, une tente, où MAIN.
l'on exposoit les ossemens des morts,

& chacun jettoit dessus des fleurs, de l'encens, des parfums, & autres choses semblables. Puis on les chargeoit sur des chariots dans des cercueils de cyprès, chaque Tribu aiant son cercueil & son chariot séparé : mais il y en avoit un qui portoit un grand cercueil * vuide pour ceux dont on n'a-
voit pu trouver les corps. La marche
se faisoit avec une pompe grave, majestueuse, & pleine de religion. Un grand nombre d'habitans, soit citoyens, soit étrangers, assistoit à cette lugubre cérémonie. Les parentes des défunts se trouvoient au sépulcre pour pleurer. On portoit ces ossemens dans un monument public au plus beau faux-bourg de la ville, appelé *le Céramique*, où l'on a renfermé de tout tems ceux qui sont morts à la guerre, excepté ceux de Marathon, qui pour leur rare valeur furent enterrés au champ de bataille. Ensuite on les couvroit de terre, & l'un des citoyens les plus considérables de la ville faisoit leur oraison funèbre. Ici Périclès fut choisi pour remplir

* C'est ce
qu'on appelle
Cénotaphe.

A R T A- cette honorable fonction. Quand la
X E R X E cérémonie fut achevée, il passa du
 ———— sépulcre sur la Tribune pour être
 mieux entendu de tout le monde,
 & prononça son discours. Thucy-
 dide nous l'a conservé tout entier.
 Soit qu'il soit effectivement de Pé-
 riclès, ou qu'il faille l'attribuer à son
 historien, on peut dire qu'il est véri-
 tablement digne de la réputation de
 ces deux grands hommes par la noble
 simplicité du stile, la solide beauté des
 pensées, & la grandeur des sentimens
 qui y régissent par tout. Après qu'on
 avoit ainsi payé solennellement ce
 double tribut de pleurs & de louan-
 ges à la mémoire des braves soldats
 qui avoient sacrifié leur vie pour la
 défense de la liberté commune, le
 public, qui ne borroit pas sa recon-
 noissance à des cérémonies ni à des
 larmes stériles, prenoit soin de la
 subsistance de leurs veuves, & des
 orphelins qui étoient restés en bas
 âge. Puissant^a éguillon pour exciter
 le courage parmi les citoyens. Car les
 grands hommes se forment, où le
 mérite est le mieux récompensé.

Thucyd. pag.
130.

^a Ἀθλα γὰρ οἷς καὶ ταῖς καὶ αἰδοῖς ἀριστεὰ πολι-
 ἀριτῆς μέγιστα, πρὸς δὲ τὴν ἑστ.

Vers la fin de la même campagne, **LONGUE-**
 les Athéniens firent alliance avec Si- **MAIN.**
 talcès roi des Odrysiens dans la
 Thrace, & en conséquence de ce
 traité reçurent son fils au nombre
 des citoiens d'Athènes. Ils se récon-
 cilièrent aussi avec Perdiccas roi de
 Macédoine, en lui rendant la ville de
 Thermes; après quoi il se joignit à
 eux pour faire la guerre ensemble
 dans la Calcide.

§. II. *L'Attique ravagée par la peste.*
Le commandement ôté à Périclès : son
rétablissement : sa mort.

II. & III. année de la guerre.

AU COMMENCEMENT de la secon- AN. M. 3574.
AV. J. C. 450.
Thucyd. lib.
2. pag. 130-
142.
Diod. pag.
101. 102.
Plut. in Pe-
ricl. p. 171.
 de campagne, l'ennemi entra dans le
 pays comme auparavant, & y fit le
 dégât. Mais la contagion en fit un
 bien plus grand dans Athènes : on
 n'en avoit jamais vû de semblable.
 On dit qu'elle avoit commencé en
 Ethiopie, d'où elle descendit en
 Egypte, & de là gagna la Libye, &
 une grande partie de la Perse, puis
 vint fondre tout-à-coup dans Athé-
 nes. Thucydide, qui fut lui-même
 attaqué de cette maladie, en décrit
 toutes les circonstances & tous les

ARTAXERXES symptômes , dans un grand détail , afin , dit-il , qu'une relation exacte pût servir d'instruction à la postérité , si un pareil malheur arrivoit une seconde fois. Hippocrate , qui fut employé à la cure des malades , en a fait aussi la description en Médecin ; & Lucrèce en Poète. Le mal étoit au-dessus de tous les remèdes. Les corps les plus robustes n'avoient pas la force d'y résister. Les soins & l'habileté des medecins étoient pour eux une foible ressource. Dès qu'on étoit attaqué , le desespoir saisissoit les malades , & les empêchoit de rien faire pour leur guérison. Le secours qu'on tâchoit de leur donner leur étoit inutile , & devenoit mortel pour ceux de leurs proches ou de leurs amis qui avoient le courage d'en approcher. La quantité de bagage qu'on avoit transporté des champs dans la ville , y caufoit une grande incommodité. La plupart , faute de logis , demeuroient sous de petites cabanes , où l'on ne pouvoit respirer pendant l'ardeur de l'été ; de sorte qu'on les voioit entassés confusément les uns sur les autres tant les morts que les mourans , ou se traînant dans les

rues, ou couchés autour des fontaines LONGUE-
 dont ils s'étoient approchés pour sou- MAIN.
 lager la soif brulante qui les consu-
 moit. Les temples mêmes étoient
 remplis de cadavres, & la ville n'of-
 froit par tout qu'une affreuse image
 de la mort, sans remede pour le pré-
 sent, & sans espérance pour l'avenir.

La peste, avant que de passer en At- *Hippocrate*
in Epig.
 tique, avoit déjà fait de grands rava-
 ges dans la Perse. Dès qu'elle s'y fit
 sentir, Artaxerxe, qui avoit entendu
 parler de la grande réputation d'Hip-
 pocrate de Cos, le plus célèbre méde-
 cin qui fût alors, & qui ait été de-
 puis, lui fit écrire par ses Gouver-
 neurs, pour l'engager à venir dans ses
 Etats traiter ceux qui étoient attaqués
 de cette maladie. Il lui faisoit les of-
 fres les plus avantageuses, ne mettant
 du côté de l'intérêt aucunes bornes
 aux récompenses dont il prétendoit
 le combler, & du côté de l'honneur
 promettant de l'égalier à ce qu'il y
 avoit de personnes plus considérables
 dans sa Cour. Nous avons déjà vu
 combien en Perse on faisoit de cas des
 médecins de Grèce. Et peut-on payer
 trop cher des services si importants ?
 Mais tout l'éclat de l'or & des di-

ARTAXERXE

gnités qu'on fit briller aux yeux d'Hippocrate, ne fut point capable de le tenter, & ne put étouffer dans son esprit le sentiment d'aversion & de haine qui étoit devenu naturel aux Grecs à l'égard des Perses depuis que ceux-ci étoient venus les attaquer. Sa réponse fut donc qu'il étoit sans besoins & sans desirs: qu'il devoit ses soins à ses concitoyens & à ses compatriotes, & qu'il ne devoit rien aux barbares, ennemis déclarés des Grecs. Les Rois ne sont pas accoutumés au refus. Artaxerxe, outré de dépit, envoya sommer la ville de Cos, patrie d'Hippocrate, & où il étoit actuellement, de lui livrer cet insolent pour le punir comme il l'avoit mérité, menaçant, en cas de désobéissance, de détruire tellement la ville & l'île, qu'il n'en resteroit pas de traces. Ceux de Cos ne furent point intimidés. Ils répondirent que les menaces de Darius & de Xerxès n'avoient pû autrefois les porter à leur donner l'eau & la terre, ni à suivre leurs ordres: que celles d'Artaxerxe n'auroient pas plus d'effet: que quoiqu'il pût leur arriver, ils ne livreroient point leur concitoyen, &

qu'ils comptoient sur la protection LONGUE-
MAIN.
des dieux.

Hippocrate avoit écrit qu'il se devoit à ses compatriotes. En effet, dès qu'il fut mandé à Athènes, il s'y rendit, & ne sortit point de la ville, que la peste ne fût cessée. Il se consacra tout entier au service des malades; & pour se multiplier en quelque sorte, il envoya plusieurs de ses Elèves dans tout le pays, après les avoir instruits de la manière dont ils devoient traiter les pestiferés. Un zèle si généreux pénétra les Athéniens de la reconnoissance la plus vive. Ils ordonnèrent par un Décret public, qu'Hippocrate seroit initié aux grands Mystères de la même manière que l'avoit été Hercule le fils de Jupiter; qu'on lui donneroit une couronne d'or de la valeur de mille * staters, ce qui montoit à cinq cens pistoles de notre monnoie; & que le Décret qui la lui accordoit seroit lû à haute voix par un Héraut dans les Jeux publics à la grande fête des Panathénées: qu'il auroit le droit de bourgeoisie, & seroit nourri dans le Prytanée pen-

* Le stater Attique étoit | de deux dragmes. L'origi-
nale monnoie d'or du poids | nal porte χρυσος χαλκός.

dant toute sa vie, s'il le vouloit, aux dépens de l'Etat : enfin, que les enfans de ceux de Cos, dont la ville avoit porté un si grand homme, pourroient être nourris & élevés à Athènes, comme s'ils y étoient nés.

Cependant l'armée ennemie étant entrée dans l'Attique, descendit vers la côte, & s'avancant toujours, ravagea tout le pais. Périclès, demeurant ferme dans le plan qu'il s'étoit fait de ne point exposer le salut de l'Etat au hazard d'un combat, ne permit point à ses troupes de sortir de la ville : mais avant que les ennemis quittassent le plat pays, il fit voile contre le Péloponnèse avec cent galères, pour hâter leur retraite par une puissante diversion ; & après avoir fait le dégât comme la première année, il revint dans la ville. La contagion y continuoit toujours, aussi bien que dans la flotte, & elle se communiqua aux troupes qui assiégeoient Potidée.

La campagne s'étant terminée de la sorte, les Athéniens, qui voioient leur pays ravagé en même tems par deux grands fleaux, la guerre & la peste, commencerent à perdre cou-

rage, & à murmurer contre Périclès, LONGUE-
qu'ils regardoient comme l'auteur de MAIN.

tous leurs maux, parce qu'il les avoit engagés dans cette funeste guerre. Ils enverroient donc à Lacédémone, pour tenter quelque voie d'accommodement, déterminés à céder ce qu'on leur demanderoit : mais les ambassadeurs revinrent sans avoir pu rien obtenir. Alors les plaintes & les murmures recommencèrent de nouveau, & toute la ville étoit dans un trouble & dans une confusion qui faisoit tout craindre. Périclès, dans une consternation si générale, ne put s'empêcher d'assembler le peuple, & il essaya de l'adoucir & de le rassurer en se justifiant lui-même. » Les raisons, dit-il, qui vous ont déterminés à entreprendre la guerre, & que vous avez tous approuvées dans le tems, sont toujours les mêmes, & n'ont point changé par le changement des conjonctures, qu'il ne m'étoit pas possible, non plus qu'à vous, de prévoir. S'il vous eût été libre de choisir entre la paix & la guerre, le premier parti certainement eût été préférable : mais ne pouvant conserver votre liberté que par la voie »

ARTAXERXES des armes, pouviez-vous délibérer ? Si nous sommes de véritables
 ————— » citoyens, nos disgraces particulié-
 » res doivent-elles nous faire négli-
 » ger l'intérêt commun de l'Etat ?
 » Chacun sent son mal, parce qu'il
 » est présent ; & nul ne sent le bien
 » qui en reviendra, parce qu'il ne pa-
 » roît pas encore. Avez-vous oublié
 » quelle est la force & la grandeur
 » de votre empire ? Des deux parties
 » du monde, la terre & la mer, vous
 » possédez celle-ci absolument, & il
 » n'y a ni roi, ni puissance, qui puisse
 » résister à vos armées navales. Il s'a-
 » git maintenant de conserver cette
 » gloire & cet empire, ou d'y renon-
 » cer pour toujours. Ne vous affligez
 » donc point pour être privés de la
 » jouissance de quelques jardins & de
 » quelques lieux de plaisance, qui
 » ne doivent être estimés que comme
 » la bordure du tableau, quoique
 » vous en vouliez faire le principal.
 » Considérez qu'en conservant la li-
 » berté, vous les recouvrirez aisé-
 » ment ; & qu'en la perdant, vous
 » perdrez tout avec elle. Ne vous
 » montrez pas moins généreux que
 » vos peres, qui pour la conserver

abandonnèrent même leur ville ; « LONGUE-
 & qui n'ayant pas reçu cette gran- « MAIN.
 deur de leurs ancêtres , ont tout «
 souffert & tout entrepris pour vous «
 l'acquérir. J'avoue que les maux «
 qui vous sont survenus sont extrê- «
 mes , & j'en suis touché & attendri «
 comme je le dois. Mais est-il rai- «
 sonnable de vous emporter de co- «
 lere contre votre Chef pour un ac- «
 cident qui surpasse toute prudence «
 humaine , & de le rendre responsa- «
 ble d'un événement où il n'a nulle «
 part ? Il faut souffrir patiemment «
 les maux que le ciel nous envoie , «
 & résister vigoureusement à ceux «
 que nous font les hommes. Quant «
 à ce qui regarde la haine & la ja- «
 lousie qui accompagnent votre for- «
 tune , c'est le partage ordinaire de «
 tous ceux qui se sont estimé di- «
 gnes de commander. Mais la hai- «
 ne & l'envie ne dureront pas tou- «
 jours , au lieu que la gloire qui suit «
 les belles actions est immortelle. «
 Représentez-vous donc sans cesse «
 combien il est honteux de céder à «
 ses ennemis , & quel honneur il y «
 a de l'emporter sur eux ; & animés «
 par cette double vûe , portez-vous «

ARTAXERXES » aux dangers avec joie & courage ;
 » sans rechercher lâchement & inu-
 » tilement les Lacédémoniens com-
 » me vous faites ; & songez que ceux
 » qui témoignent le plus de cœur &
 » de résolution dans les dangers, rem-
 » portent le plus d'estime & de louan-
 » ge.

Les motifs de gloire & d'honneur , le souvenir des belles actions de leurs ancêtres , le titre flatteur de maîtres de la Grèce , & sur tout la jalousie contre Sparte ancienne & perpétuelle rivale d'Athènes , étoient les moyens ordinaires qu'emploioit Périclès pour remuer & animer les Athéniens , & ils lui avoient toujours réussi. Mais ici le sentiment des maux présens l'emportoit sur tout le reste , & étouffoit toute autre pensée. Ils ne songèrent plus à la vérité à envoyer vers les Lacédémoniens pour parler de paix , mais la présence seule & la vûe de Périclès les révoltoit. Ils lui ôtèrent sa charge de Général , & le condamnèrent à une amende qui montoit , selon les uns , à quinze talens , selon d'autres à cinquante.

Quinze ou
 cinquante
 mille écus.

Cette disgrâce publique de Périclès ne devoit pas durer longtems. La co-

lère du peuple fut satisfaite par ce premier coup, & épuisée par ce mauvais traitement, comme l'abeille laisse son éguillon dans la plaie. Il n'en fut pas de même de ses maux domestiques. Car, outre qu'il avoit perdu par la peste un grand nombre de ses parens & de ses amis, la division régnoit depuis longtems dans sa famille. Xanthippe, son fils aîné, qui aimoit naturellement la dépense, & qui avoit épousé une jeune femme, qui ne l'aimoit pas moins, ne pouvoit supporter l'exacte économie de son pere, qui ne fournissoit que bien petitement à ses plaisirs. Il envoya donc emprunter quelque argent sous le nom de son pere. Quand celui qui l'avoit prêté voulut le redemander, non seulement Périclès refusa de le paier, mais il l'appella en Justice. Xanthippe, outré de dépit, s'emporta extrêmement contre son pere, & il le décrioit par tout, se moquant ouvertement des assemblées qu'il tenoit dans sa maison, & des conversations qu'il avoit avec les Sophistes. Il ne savoit pas qu'un fils, quand même il seroit maltraité injustement, ce qui n'étoit point ici, doit souffrir avec patience.

LONGUE-
MAIN.

ARTAXERXES les injustices de son pere , comme un citoyen est obligé de souffrir celles de sa patrie.

Xanthippe mourut de la peste. Périclès perdit en même tems sa sœur , avec plusieurs de ses parens , & de ses amis les plus considérables , & qui lui étoient les plus nécessaires pour le gouvernement. Cependant il ne succomba point sous ces malheurs : la fermeté de son ame n'en fut point ébranlée , & on ne le vit ni pleurer , ni donner les marques ordinaires de douleur sur le tombeau d'aucun de ses proches , jusqu'à la mort de Paralus , qui étoit le dernier de ses enfans légitimes. Alors , étonné & ébranlé par un si rude coup , il fit tous ses efforts pour se maintenir dans son assiette naturelle , & pour ne laisser entrevoir aucune marque de trouble. Mais quand il voulut mettre la couronne de fleurs sur la tête du mort , il ne put soutenir cette cruelle vûe , ni être le maître de sa douleur , qui éclata par des cris , par des sanglots , & par un torrent de larmes.

Périclès , séduit par les principes d'une mauvaise philosophie , s'imagi-

noit que pleurer la mort de ses pro- LONGUE-
ches & de ses enfans, seroit une foi- MAIN.
blessé qui répondroit mal à la gran-
deur d'ame qu'il avoit toujours fait

paroître , & qu'ici la sensibilité de
pere terniroit la gloire du conquérant.
Erreur grossiere , illusion puérile !
qui fait consister l'héroïsme dans une
dureté féroce & barbare ; ou qui ,
laissant dans le fond du cœur la même
douleur & le même trouble , fait
parade d'un vain dehors de force &
de courage pour se donner en specta-
clé. Est-ce donc que la vertu guerri-
ère éteint la nature ? N'a-t-on plus de
sentiment , parce qu'on est un hom-
me important dans la République ?
L'Empereur Antonin pensoit bien
plus sensément , lorsqu'à l'occasion
de Marc Aurèle , qui pleuroit la mort
de celui qui l'avoit élevé , il disoit :
*Permettez-lui d'être homme , car ni la
philosophie , ni la souveraineté ne rend
point insensible.*

L'inconstance étoit le caractère do-
minant du peuple d'Athènes ; & com-
me elle le portoit subitement aux plus

a Permitte illi ut homo | tollit affectus. *Jul. Capi-*
sit : neque enim vel phi- | *tol. in vit. Antonini Pii.*
losophia vel imperium

ARTAXERXES. grands excès , elle le ramenoit aussi bientôt à la modération & à la douceur. Il ne fut pas longtemps sans se repentir du mauvais traitement qu'il avoit fait à Périclès, & il désira ardemment de le revoir dans ses assemblées. Les Athéniens , à force de souffrir , commençoient à s'endurcir peu à peu aux malheurs particuliers , & à devenir de jour en jour plus sensibles à la gloire de l'Etat ; & dans le desir qu'ils avoient d'en rétablir les affaires , ils ne voioient personne qui en fût plus capable que lui. Il se tenoit alors renfermé dans sa maison , accablé de douleur pour la perte qu'il venoit de faire. Alcibiade & ses autres amis lui persuadèrent de sortir , & de se montrer. Le peuple lui demanda pardon de son ingratitude , & Périclès , touché de ses prières , & persuadé qu'un bon citoyen ne doit jamais conserver de ressentiment contre sa patrie , reprit le gouvernement.

II^e. année.

La première chose qu'il fit après avoir été élu de nouveau Général , ce fut de proposer qu'on cassât la loi que lui-même avoit fait donner autrefois contre les bâtards , lorsqu'il se voioit des fils légitimes. Elle portoit

qu'on ne tiendrait pour Athéniens LONGUE-
naturels & véritables que ceux qui MAIN.
feroient nés de pere & de mere Athé-
niens ; & elle avoit été exécutée dans
le moment avec beaucoup de rigueur.
Car le * Roi d'Egypte aiant envoyé à
Athènes un present de quarante mille
mesures de blé pour être distribuées
au peuple , on fit à tous les bâtards ,
sur les termes de la nouvelle Ordon-
nance , mille procès & mille difficul-
tés , qui jusques-là n'avoient point eu
lieu , & auxquelles on n'avoit point
pensé. On en compta près de cinq
mille qui furent condamnés , & ven-
dus comme esclaves ; il y eut quatorze
mille quarante citoyens qui furent
confirmés dans leurs privilèges , &
reconnus pour véritables Athéniens.
Il paroissoit fort étrange que l'auteur
même & le promoteur de cette loi en
demandât la cassation. Mais les cala-
mités domestiques de Périclès tou-
cherent de compassion les Athéniens ,
& ils lui permirent de faire inscrire
son bâtard dans les régîtres des ci-

* Plutarque ne nomme
point ce Roi. Peut-être que
c'est Inarus, fils de Psammé-
tique, Roi de Libye, qui a-
voit fait révolter une par-
tie de l'Egypte contre Ar-

taxerxe, & à qui les Athé-
niens, environ trente ans
auparavant, avoient en-
voié du secours contre les
Perses. Thucyd. lib. 1.
pag. 68.

ARTATOIENS de la Tribu, & de lui faire porter son nom.

Peu de tems après il tomba malade de la peste. Comme il étoit à l'extrémité, & sur le point de rendre l'ame, les principaux citoiens, & les amis qui lui restoient, s'entretenant ensemble dans sa chambre de son rare mérite, parcouroient ses exploits, & comptoient le nombre de ses victoires : car, étant Général des Athéniens il avoit érigé à la gloire de sa ville neuf trophées, pour autant de batailles qu'il avoit gagnées. Ils ne croioient pas être entendus du malade, qui paroissoit n'avoir plus de connoissance : mais il ne lui étoit pas échappé une seule parole de tout ce qu'ils avoient dit, & rompant tout d'un coup le silence. » Je m'étonne, dit-il, que » vous conserviez si bien dans votre » mémoire, & que vous releviez si » fort des choses auxquelles la fortune a tant de part, & qui me sont » communes avec tant d'autres Capitaines, pendant que vous oubliez » ce qui est de plus grand dans ma vie, » & de plus glorieux pour moi. C'est, » ajouta-t il, *qu'il n'y a pas un seul citoyen à qui j'aie fait prendre le deuil.*

Belle parole , & que bien peu de ceux qui sont dans les premières places peuvent dire avec vérité ! Il est aisé de juger combien Athènes regretta un tel citoien.

LONGUE-
MAIN.

On a remarqué sans doute dans ce qui a été dit de Périclès , qu'il réunissoit en lui seul presque toutes les sortes de mérites qui peuvent former les grands hommes : d'Amiral , par son habileté dans la marine : d'excellent Capitaine , par ses conquêtes & ses victoires ; de Surintendant des finances , par le bon ordre qu'il y mit ; de grand Politique , par l'étendue & la justesse de ses vûes , par son éloquence dans les délibérations publiques , & par sa dextérité dans le maniement des affaires ; de Ministre d'Etat , par les moïens qu'il sut employer pour faire fleurir le commerce & tous les arts ; enfin de Pere de la patrie , par le bonheur dont il fit jouir tous les membres de la République , & qu'il se proposa toujours comme le véritable but de son gouvernement.

Mais je ne dois pas omettre ici un autre caractère , qui lui est propre uniquement. Il se conduisit avec tant de sagesse , de modération , de desin-

ARTAXERXES

téressément, de zèle pour le bien public ; il montra en tout une si grande supériorité de talens , & il donna une si haute idée de son expérience , de sa capacité , & de sa droiture , qu'il gagna généralement la confiance de tous les Athéniens , & fixa en sa faveur leur inconstance naturelle pendant un gouvernement de quarante ans. Il désarma la jalousie , qu'une délicatesse excessive pour la liberté leur faisoit concevoir contre tous les citoyens qui se distinguoient par leur mérite & par l'autorité du commandement. Et , ce qui est plus merveilleux , il fit tout cela par persuasion , sans contrainte , sans bas artifices , & sans aucun de ces moïens qu'une politique ordinaire se pardonne sous le spécieux prétexte de la nécessité des affaires , & des intérêts de l'Etat.

Plut. in Pericl. pag. 162.

Anaxagore mourut la même année que Périclès. Plutarque rapporte de lui un fait , arrivé quelque tems auparavant , qui ne doit pas être omis. On dit que ce Philosophe , qui s'étoit réduit volontairement à une extrême pauvreté pour mieux s'appliquer à l'étude , se voyant dans sa vieillesse négligé par Périclès , lequel , accablé d'affaires ,

d'affaires , n'avoit pas toujours le
 tems de penser à lui, se coucha la tête LONGUE-
MAIN.

* couverte de son manteau, dans la
 résolution de se laisser mourir de
 faim. Périclès, en aiant été averti par
 hazard, courut à sa maison avec une
 extrême diligence tout éperdu & dé-
 solé. Il emploia les prières les plus
 tendres & les plus touchantes pour le
 porter à vivre, ajoutant que ce n'étoit
 pas lui qu'il pleuroit, mais qu'il se
 pleuroit lui-même, s'il étoit assez
 malheureux pour perdre un ami si
 sage, si fidèle, & si capable de lui
 donner de bons conseils dans les pres-
 sans besoins de la République. Alors
 Anaxagore, se découvrant un peu la
 tête, lui dit : *Périclès, ceux qui ont af-
 faire de la lumière d'une lampe, ont soin
 d'y verser de l'huile.* Le reproche étoit
 doux, mais vif & pénétrant. Périclès
 auroit dû le prévenir. Bien des lampes
 s'éteignent ainsi dans un Etat par la
 faute & la négligence de ceux qui de-
 vroient les entretenir.

* C'étoit la coutume de se | se espoir, & qu'en renonçoit
 couvrir la tête lorsqu'on | à la vie.
 étoit dans le dernier dé-

ARTAXERXES

§. III. *Lacédémone a recours aux Perses. Prise de Potidée par les Athéniens. Siège de Platée par les Lacédémoniens. Siège & prise de Mitylène par les Athéniens. Platée se rend, La peste recommence à Athènes.*

IV. & V. années de la guerre.

*Thucyd. lib.
2. pag. 144.*

VERS LA FIN de la seconde campagne, il étoit parti de Lacédémone des ambassadeurs chargés d'aller rechercher l'alliance du Roi des Perses, & de l'engager à fournir de l'argent pour l'entretien de la flotte : démarche honteuse pour des Lacédémoniens, qui se donnoient pour les libérateurs de la Grèce, & qui par là rétractoient ou ternissoient tout ce qu'ils avoient fait de glorieux pour elle contre les Perses ! Ils prirent leur chemin par la Thrace, dans le dessein de retirer Sitalcès de l'alliance des Athéniens, & de le porter à secourir Potidée. Ils rencontrèrent là des ambassadeurs d'Athènes, qui les firent arrêter comme perturbateurs du repos public, & les firent conduire à Athènes, où l'on les fit mourir le même jour sans vouloir leur donner audience, & l'on jeta leurs corps à la voirie,

pour ufer de représailles à l'égard des Lacédémoniens, qui faisoient le même traitement à ceux qui n'étoient pas de leur parti. On a peine à comprendre comment deux villes, unies peu de tems auparavant par une liaison si étroite, & qui devoient toutes deux se piquer de politesse & de douceur à l'égard l'une de l'autre, sont capables d'en venir à une haine si envenimée & à une violence si cruelle, qui viole toutes les loix de la guerre, de l'humanité, & du droit des gens, & qui se porte à de plus grands excès entre Grecs, qu'ils n'avoient jamais fait contre les barbares.

LONGUE
MAIN.

POTIDE'E étoit assiégée depuis près de trois ans. Les habitans, réduits à l'extrémité, & manquant de vivres, jusques-là que quelques-uns vécutent de chair humaine, & n'espérant aucun secours du Péloponnèse, dont les efforts dans l'Attique avoient été vains, se rendirent & furent reçus à composition. Ce qui porta les Athéniens à ufer de douceur à leur égard, fut d'un côté les maux extrêmes que la rigueur de l'hiver faisoit souffrir aux assiégeans, & de l'autre la dépense excessive de ce siège qui avoit déjà

Pag. 1461

ARTAXERXES couté deux * mille talens. Ils sortirent donc avec leurs femmes & leurs enfans, tant citoiens qu'étrangers, sans avoir chacun plus d'un habit, & les femmes deux, & sans emporter autre chose que quelque peu d'argent pour leur retraite. Les Athéniens blâmèrent leurs Généraux d'avoir fait cet accommodement sans leur ordre ; parce que la ville, étant réduite à l'extrémité, se seroit rendue à discrétion. On y envoya une colonie.

AN. M. 3576. **AV. J. C. 428.** **Thucyd. l. 2.** **p. 147-151.** **Diod. l. 22.** **p. 102-109.** CE QU'IL y eut de plus mémorable dans les années suivantes, fut le siège que les Lacédémoniens mirent devant Platée, l'un des plus célèbres de l'antiquité par la grandeur des travaux de part & d'autre, mais sur tout par la généreuse résistance des assiégés, & par l'industriel & hardi stratagème à la faveur duquel plusieurs d'entre eux sortirent de la ville, & se déroberent à la fureur des ennemis. Les Lacédémoniens formèrent ce siège au commencement de la troi-

* L'armée qui assiégeoit Potidée étoit de trois mille hommes, sans compter les seize cens qui avoient été envoyés sous la conduite de Rhymion. Les soldats recevoient chacun par jour deux dragmes (vingt sols) pour maître & valet ; & ceux des galères étoient payés de même. Thucyd. l. 3. p. 182.

fième campagne. Dès qu'ils se furent campés devant la ville pour faire le dégât aux environs, les Platéens envoièrent représenter à Archidamus qui commandoit, Qu'il ne pouvoit justement les attaquer, parce qu'après la célèbre bataille de Platée; Pausanias, Général des Grecs, sacrifiant dans leur ville à Jupiter le Libérateur en présence de tous les alliés, les avoit affranchis pour récompense de leur valeur & de leur zèle, & qu'ainsi l'on devoit les laisser jouir de la liberté qu'un Lacédémonien leur avoit accordée. Archidamus répondit que leur demande feroit raisonnable, s'ils ne s'étoient pas joints aux Athéniens, les ennemis déclarés de la liberté des Grecs; que s'ils vouloient quitter leur parti, ou du moins demeurer neutres, on leur laisseroit la parfaite jouissance de leurs privilèges. Les députés repartirent qu'il leur étoit impossible de rien conclure sans la participation d'Athènes où étoient leurs femmes & leurs enfans. On leur permit d'y envoyer. Sur l'assurance que leur donnèrent les Athéniens de les secourir de tout leur pouvoir, les Platéens ré-

A R T A. solurent de souffrir les dernières ex-
X E R X E trémities plutôt que de se rendre, &
ils firent savoir aux Lacédémoniens
de dessus leurs murailles, qu'ils ne
pouvoient faire ce qu'on desiroit.

Alors Archidamus, après avoir
pris les dieux à témoin qu'il ne
violoit pas le premier l'alliance, &
qu'il n'étoit pas coupable de tous les
maux qui arriveroient aux Platéens,
pour avoir refusé les conditions ju-
stes & raisonnables qu'on leur of-
froit, se prépara au siège. Il renfer-
ma la ville d'une contrevallation
d'arbres étendus tout de leur long,
& près à près, avec toutes leurs
branches entrelassées les unes dans
les autres, & tournées du côté de la
ville, pour empêcher que personne
n'en sortît. Ensuite il fit élever une
plate-forme ou cavalier pour dresser
les batteries, dans l'espérance d'em-
porter bientôt la place à cause du
grand nombre des travailleurs. Il
fit donc couper des arbres sur la
montagne de Cithéron, & les en-
trelassa de fascines, pour soutenir la
terrasse de part & d'autre: puis il
fit jetter dedans du bois, de la terre,
& des pierres, en un mot tout ce

qui pouvoit servir à la remplir. LONGUE-
MAIN.
Toute l'armée y travailla jour & nuit sans interruption l'espace de soixante & dix jours , la moitié se reposant tandis que l'autre travailloit.

Comme les assiégés virent que l'ouvrage commençoit à s'élever , ils dressèrent un mur de bois sur les murailles de la ville vis-à-vis de la plate-forme , afin de se conserver toujours la supériorité au dessus des assiégeans , & remplirent le creux de cette muraille de bois de briques prises des démolitions des maisons voisines , en sorte que les pièces de bois servoient comme de liaison & de défense pour empêcher que le mur ne s'éboulât en venant à s'élever. Il étoit garni par dehors de peaux & de cuirs pour mettre à couvert le travail & les travailleurs contre les feux qu'on lançoit. A mesure qu'il s'élevoit , on haussait la plate-forme , qui devint ainsi fort haute. Mais les assiégés percèrent la muraille vis-à-vis , pour enlever la terre qui soutenoit la plate-forme : ce que les assiégeans aiant aperçu , ils mirent des paniers de jonc remplis

ARTAXERXE de mortier en la place de la terre que l'on avoit enlevée, parce qu'on ne pouvoit pas les emporter si aisément. Les assiégés donc, voyant leur première ruse éventée, minèrent sous terre jusqu'à la plate-forme, pour travailler à couvert, & pour en tirer les terres & les autres matériaux dont elle étoit composée, qu'ils se donnoient de main en main jusques dans la ville. Les assiégeans furent lontems sans s'en apercevoir, jusqu'à ce qu'ils virent que leur ouvrage n'avançoit point, & que la terre s'affoissoit à mesure qu'on en mettoit de nouvelle. Mais les assiégés, qui jugeoient que le plus grand nombre l'emporteroit à la fin, sans plus s'amuser à ce travail, ni à élever davantage le mur du côté de la batterie, se contentèrent d'en construire un autre en dedans en forme de croissant, qui tenoit des deux côtés à la muraille, pour servir de retraite quand le premier mur seroit forcé, & pour obliger l'ennemi à un second travail.

Cependant les assiégeans aiant dressé leurs machines, sans doute après avoir comblé le fossé, quoi-

que Thucydide n'en parle point, don- LONGUE
 nèrent de violentes secousses au mur MAIN.
 de la ville, ce qui alarma fort les as-
 siégés, mais ne les découragea point.
 Il n'y eut point d'inventions qu'ils
 ne missent en œuvre contre les batte-
 ries des ennemis. Ils rompoient l'ef-
 fort du bélier avec des * cordes qui
 en détournoient le coup. Ils usoient
 encore d'un autre artifice, attachant
 par les deux bouts une grosse poutre
 avec de longues chaines de fer, qui
 tenoient de part & d'autre à deux
 grandes pièces de bois, lesquelles s'é-
 tendoient de côté & étoient appuyées
 sur la muraille : & lorsque la machine
 des ennemis venoit à jouer, ils le-
 voient cette poutre, & la laissoient
 tomber de travers sur la pointe du
 bélier, ce qui en émoussoit toute la
 force, & le rendoit sans effet.

Les assiégeans voyant que l'atta-
 que ne leur réussissoit pas, & qu'on
 opposoit un nouveau mur à leur
 plate-forme, desespérèrent de for-
 cer la place, & se résolurent à la

* Le bout d'en bas de ces cordes formoit plusieurs branches en lacs courans, avec lesquels on saisissoit la tête du bélier, qu'on éle-
 voit en haut par le moyen de la machine.

ARTAXERXES bloquer. Mais ils essayèrent auparavant d'y mettre le feu, croiant la pouvoir brûler aisément à cause de sa petitesse, en prenant l'occasion de quelque grand vent : car ils tenoient tous les moiens imaginables pour s'en rendre maîtres promptement & sans dépense. Ils jettèrent donc des fascines dans l'espace qui se trouvoit entre les murs de la ville & les retranchemens dont ils les avoient environnés, & remplirent en très peu de tems cet intervalle à cause de la multitude de leurs gens, afin de mettre le feu en même tems dans différens quartiers. Puis ils l'allumèrent avec de la poix & du souffre ; ce qui causa tout-à-coup un si grand embrasement, qu'il ne s'en est jamais vû de semblable. Cette invention faillit à perdre la ville, qui avoit résisté à toutes les autres. Car on ne pouvoit aborder en plusieurs quartiers, & si le tems eût été favorable, comme l'espéroient les ennemis, c'étoit fait de la place : mais il survint en un instant, à ce que l'on dit, une grosse pluie qui éteignit le feu.

Ce dernier effort des assiégeans aiant

été rendu inutile , comme tous les précédens, ils convertirent le siège en blocus, & environnèrent la ville d'un mur de brique , revêtu en dedans & en dehors d'un fossé profond. Ce travail fut partagé entre toutes les troupes : & lorsqu'il fut fait, ils laissèrent des gens pour en garder la moitié : car les Béotiens s'offrirent à garder l'autre ; & ils se retirèrent chacun chez soi, vers le mois d'Octobre. Au reste, il n'y avoit dans la ville que quatre cens habitans, & quatre-vingts Athéniens, avec cent dix femmes , pour leur apprêter à manger, sans aucune autre personne soit libre ou esclave, le reste aiant été envoié à Athènes avant le siège.

IL Y EUT pendant la campagne quelques actions entre les deux partis tant par terre que par mer, que je passe sous silence, parce qu'elles ne sont pas importantes.

L'E'TE' suivant, qui étoit la quatrième année de la guerre, les habitans de Lesbos, à la réserve de ceux de Méthymne, résolurent de quitter l'alliance des Athéniens. Ils avoient eu dessein de se soulever avant que la guerre fût déclarée, mais les La-

Thucyd. lib

3.p.174-207

Died. lib

12. pag. 108

109.

ARTAXERXES

— cédémoniens ne voulurent pas alors les recevoir : ceux de Méthymne en donnèrent avis aux Athéniens, & leur firent dire que si l'on ne se hâtoit, l'île étoit perdue. Dans l'abattement où les maux causés par la peste & la guerre avoient jetté les Athéniens, ce fut pour eux un surcroît d'affliction d'apprendre la révolte d'une île si considérable, dont les forces qui n'avoient point été affoiblies jusques-là alloient passer aux ennemis, & les fortifieroient tout d'un coup d'une puissante armée navale. Ils firent donc partir sur le champ quarante galères destinées pour le Péloponnèse, qui firent voile vers Mitylène. Les habitans, extrêmement surpris parce qu'ils n'avoient encore rien de prêt, ne laissèrent pas, pour imposer à l'ennemi par une bonne contenance, de sortir du port avec leurs vaisseaux : mais aiant été repoussés, ils parlèrent d'accommodement, & les Athéniens y prêtèrent l'oreille, dans l'appréhension de n'être pas assez forts pour faire rentrer l'île dans son devoir. On fit donc une suspension d'armes, pendant laquelle les Mitylé-

néens envoierent des députés à Athènes. La crainte de ne pouvoir obtenir leur demande, leur en fit dépecher en même tems d'autres à Lacédémone pour demander du secours. Leur prevoiance n'avoit pas été vaine. La réponse qu'on raporta d'Athènes fut peu favorable.

Les ambassadeurs de Mitylène étant arrivés à Lacédémone après une dangereuse navigation, on remit à leur donner audience aux Jeux Olympiques, afin que les alliés pussent entendre leurs plaintes. Je rapporterai en entier le discours qu'ils y tinrent, qui peut donner en même tems une juste idée & du stile de Thucydide, & de la disposition des peuples à l'égard des Athéniens & des Lacédémoniens. « Messieurs, dirent-ils, nous « savons que c'est la coutume de trai- « ter favorablement d'abord les trans- « fuges à cause du service qu'on en ti- « re, mais de les mépriser après com- « me des traîtres qui ont abandonné « leur parti. Ce sentiment n'est pas « injuste lorsque rien ne les oblige à « changer, & que de part & d'autre « c'est toujours même union & mê- « mes secours réciproques. Les cho- »

ARTAXERXES n'en font pas là entre les Athé-

niens & nous, & nous vous prions

» de ne point vous prévenir contre
» notre démarche, sur ce qu'après
» en avoir été traités favorablement
» pendant la paix, nous nous retirons
» de leur alliance dans le tems de
» leur disgrâce. Car paroissant ici
» pour vous demander de nous rece-
» voir au nombre de vos alliés & de
» vos amis, c'est sur l'équité & la
» nécessité de cette démarche que
» nous devons commencer à nous
» justifier, ne pouvant y avoir ni de
» véritable amitié entre les particu-
» liers, ni de solide alliance entre les
» villes, si l'une & l'autre n'est fon-
» dée sur la vertu, & sur l'uniformi-
» té de principes & de sentimens.

» Pour entrer donc en matière ;
» le traité que nous fîmes avec les
» Athéniens ne fut pas pour assujettir
» la Grèce, mais pour l'affranchir du
» joug des barbares : & il fut conclu
» après la retraite des Perses, lorsque
» vous abandonnâtes le commande-
» ment. Nous l'avons entretenu de
» bon cœur, tandis qu'ils n'ont eu
» que de justes desseins : mais quand
» nous avons vû qu'ils quittoient les

ennemis pour faire la guerre aux « LONGUE-
alliés, nous sommes entrés en dé- « MAIN.
fiance de leur conduite. Et comme «
il étoit difficile, dans une si grande «
diversité d'intérêts & de sentimens, «
de demeurer tous bien unis ensem- «
ble ; & encore plus difficile de se «
soutenir contre eux étant seuls & «
séparés : ils ont assujetti peu à peu «
tous les alliés, excepté ceux de «
Chio & nous ; & ils se sont servi «
pour cela de nos forces. Car nous «
laissant la liberté en apparence, ils «
nous ont contraints de les suivre, «
quoique nous ne pussions plus nous «
assurer sur leur parole, & que nous «
eussions grand sujet d'appréhen- «
der pour nous le même traitement. «
En effet quelle apparence y a-t-il «
qu'ayant mis tous les autres sous «
le joug, nous soyons les seuls qu'ils «
respectent, & qu'ils souffrent de «
nous voir leurs égaux, pouvant de- «
venir nos maîtres ; sur tout leur «
puissance croissant tous les jours, «
& la nôtre s'affoiblissant à propor- «
tion ? La crainte mutuelle que des «
alliés ont les uns des autres, est un «
puissant lien pour rendre une alian- «
ce ferme, & empêcher des entre- «

ARTAXERXES

„ prises injustes & violentes, en tenant tout dans l'équilibre. S'ils
„ nous ont donc laissé la liberté, ce
„ n'a été que parce qu'ils ne pou-
„ voient pas encore se rendre maî-
„ tres des affaires par la force ou-
„ verte, mais seulement par cette
„ équité & cette douceur apparente
„ qu'ils ont montrée à notre égard.
„ Premièrement, ils prétendoient
„ prouver par la conduite modérée
„ qu'ils tenoient envers nous, que
„ libres comme nous l'étions, nous
„ n'eussions pas marché avec eux
„ contre les autres alliés, s'ils ne
„ leur eussent donné un juste sujet
„ de plainte. En second lieu, n'atta-
„ quant d'abord que les plus foibles,
„ & les domtant l'un après l'autre,
„ ils se mettoient en état par la ruine
„ des premiers de subjuguier sans pei-
„ ne les plus puissans, qui se trouve-
„ roient à la fin seuls & sans appui:
„ au lieu que s'ils eussent commencé
„ par nous dans le tems que les alliés
„ avoient encore toutes leurs forces,
„ & pouvoient former un parti, ils
„ n'eussent pas trouvé tant de facilité
„ dans l'exécution de leurs desseins.
„ D'ailleurs, notre flotte qui étoit

très nombreuse , & capable de for- « **LONGUE-**
 tifier considérablement le parti de « **MAIN.**
 ceux à qui nous nous joindrions, «
 le tenoit en bride. Ajoutez à cela, «
 que le soin que nous avons tou- «
 jours eu de ménager leur Républi- «
 que , & de nous concilier ceux qui «
 commandoient, a reculé notre rui- «
 ne. Mais c'en étoit fait de nous, si «
 cette guerre ne fût survenue ; & le «
 sort des autres ne nous laisse pas «
 lieu d'en douter. »

Quelle amitié donc & quelle al- «
 liance durable peut-il y avoir entre «
 des gens qui ne demeurent amis «
 & alliés que par force ? Car s'ils «
 étoient obligés de nous caresser »
 durant la guerre , pour nous em- «
 pêcher de nous joindre à leurs en- «
 nemis ; nous étions contraints d'en «
 faire autant durant la paix , pour «
 les empêcher de nous attaquer. Ce «
 que l'affection fait ailleurs , la «
 crainte le faisoit ici. C'est ce qui a «
 fait durer quelque tems une allian- «
 ce , qui de part & d'autre , pour «
 être rompue , n'attendoit qu'une «
 occasion favorable. Que personne «
 donc ne nous impute de les avoir «
 prévenus. Nous n'avions pas tou- «

A R T A- » jours le moien de nous sauver,
X E R X E » comme ils avoient celui de nous
» perdre. Il a falu ménager l'occasion,
» avant que d'éclater ouvertement.

» Voila , Messieurs , les raisons qui
» nous obligent maintenant à recher-
» cher votre alliance : raisons , dont
» l'équité & la justice , à ce qu'il nous
» semble , est frapante , & qui ont dû
» nous porter à chercher notre sûre-
» té. Nous nous serions mis plutôt
» sous votre protection, si vous aviez
» voulu plutôt nous recevoir : car ,
» avant même que la guerre éclatât ,
» nous nous offrîmes à vous. Mainte-
» nant , nous sommes venus à la per-
» suasion des Béotiens vos alliés ,
» pour nous détacher des oppresseurs
» de la Grèce , & prêter nos armes à
» ses défenseurs ; & afin de pour-
» voir en même tems à notre sûreté ,
» qui est dans un péril éminent. S'il y
» a quelque chose à dire à notre con-
» duite, c'est d'avoir éclaté trop tôt ,
» avec plus de générosité que de pru-
» dence , & sans avoir aucuns prépa-
» ratifs. Mais cela vous doit porter
» aussi à nous secourir plus promte-
» ment , pour ne pas perdre l'occasion
» de protéger les opprimés , & de

vous venger de vos ennemis. Jamais « **LONGUE-**
 elle ne fut plus favorable que dans « **MAIN.**
 la conjoncture présente , où la peste «
 & la guerre ont consumé leurs for- «
 ces , & épuisé leurs revenus : ou- «
 tre que leur armée navale est par- «
 tagée , & ils ne seront point en état «
 de vous résister , si vous les attaquez «
 en même tems par mer & par terre. «
 Car , ou ils nous quitteront pour «
 aller à vous , & nous laisseront la «
 liberté de vous secourir ; ou ils nous «
 entreprendront tous ensemble , & «
 par ce moien vous n'aurez affaire «
 qu'à la moitié de leurs forces.

« Du reste, que personne ne s'ima- «
 gine que vous vous mettiez en dan- «
 ger pour des gens qui ne vous peu- «
 vent rendre de service. Il est vrai «
 que notre Etat est reculé , mais no- «
 tre secours est proche : Car la guerre «
 fera , non dans l'Attique , comme «
 on se l'imagine , mais dans le pays «
 qui fait subsister l'Attique par ses «
 revenus ; & nous n'en sommes pas «
 loin. Faites aussi réflexion qu'en «
 nous abandonnant , vous augmen- «
 terez leur puissance de la nôtre , & «
 que personne n'osera plus se décl- «
 rer contre eux. Mais en nous assi- «

A R T A - » stant , vous vous fortifierez d'une
X E R X E . » armée navale qui vous manque ;
» vous donnerez lieu à plusieurs de
» se ranger de votre côté à notre
» exemple ; & vous éviterez le repro-
» che qu'on vous fait d'abandonner
» ceux qui ont recours à votre pro-
» tection , ce qui ne sera pas pour
» vous d'un médiocre avantage pour
» le succès de la guerre.

» Nous vous prions donc , Mes-
» sieurs , au nom de Jupiter Olym-
» pien , dans le temple duquel nous
» sommes , de ne pas frustrer l'espé-
» rance des Grecs , & de ne pas rejet-
» ter des supplians , dont la conser-
» vation peut vous être fort utile , &
» la ruine infiniment pernicieuse.
» Montrez - vous ici tels que le de-
» mande , & l'idée qu'on a conçue de
» votre générosité , & l'extrémité du
» danger où nous nous trouvons ,
» c'est-à-dire les protecteurs des affli-
» gés , & les libérateurs de la Grèce.

Les alliés , touchés de ces raisons ,
les recurent dans l'alliance du Pélo-
ponnèse. Aussitôt il fut résolu qu'on
entreroit promptement dans le pays
ennemi , & que les alliés se trouve-
roient à Corinthe avec les deux tiers.

de leurs forces. Les Lacédémoniens s'y rendirent les premiers, & préparèrent là des machines pour transporter les vaisseaux du golphe de Corinthe en la mer d'Athènes, afin d'attaquer l'Attique par terre & par mer. L'ardeur fut grande de leur côté : mais les alliés, occupés à leur moisson, & commençant déjà à se lasser de la guerre, furent lontems à s'assembler.

Cependant les Athéniens, qui voioient que tous ces préparatifs se faisoient contr'eux par l'opinion qu'on avoit de leur foiblesse, pour détromper les esprits, & faire voir qu'ils étoient en état d'entretenir une armée navale sans toucher à celle de Lesbos, mirent en mer une flotte de cent voiles, qu'ils remplirent tant de citoyens que d'étrangers, sans exemter aucun des citoyens, sinon ceux qui étoient obligés de servir à cheval, ou qui avoient de revenu cinq cens mesures de blé. Aiant paru à la hauteur de l'isthme de Corinthe pour faire parade de leur puissance, ils descendirent où ils voulurent dans le Péloponnèse.

Jamais ils n'avoient eu une plus belle armée navale. Ils gardoient leur pays, & les côtes d'Eubée & de Salamine

AR T A-avec une flotte de cent voiles : ils vo-
XE R X E guoient autour du Péloponnèse avec
une autre de pareil nombre , sans
compter les navires qui étoient de-
vant Lesbos, & ailleurs. Le tout mon-
roit à plus de deux cens cinquante ga-
lères. La dépense de ce puissant ar-
mement acheva de consumer leurs trés-
ors , qui avoient déjà été fort dimi-
nués par celle du siège de Potidée.

Les Lacédémoniens , fort surpris
d'un si terrible appareil auquel ils ne
s'étoient pas attendus , revinrent
promptement dans leur pays , & se
contentèrent d'ordonner quarante
galères pour le secours de Mitylène.
Les Athéniens y avoient envoyé un
renfort de troupes de mille soldats
pesamment armés , par le secours des-
quels on fit une contre - vallation ,
avec des forts aux endroits les plus
commodes ; de sorte qu'elle se trouva
bloquée par mer & par terre au com-
mencement de l'hiver. Dans le besoin
pressant où se trouvèrent les Athé-
niens d'avoir de l'argent pour pousser
ce siège , ils se virent contraints de
se cortiser eux-mêmes, ce qu'ils n'a-
voient point encore fait , & y firent
tenir deux cens talents.

Deux cens
mille écus.

Les Mitylénéens manquant de tout, LONGUE
 & aiant inutilement attendu le se- MAIN,
 cours que les Lacédémoniens leur
 avoient fait espérer, se rendirent à
 condition qu'on ne feroit mourir ni
 emprisonner personne jusqu'au re-
 tour des Députés qu'on enverroient à
 Athènes, & que cependant on laisse-
 roit entrer les troupes dans la ville.
 Quand les Athéniens en furent maî-
 tres, les factieux, qui d'abord avoient
 eu recours à la franchise des autels,
 furent conduits à Ténédos, & quel-
 ques tems après menés à Athènes. On
 y mit en délibération l'affaire des ci-
 toiens de Mitylène. Comme leur re-
 volte avoit extrêmement aigri le peu-
 ple, parce qu'elle n'avoit été précé-
 dée d'aucun mauvais traitement, &
 qu'elle paroissoit n'avoir été l'effet
 que de leur haine contre les Athé-
 niens, dans le premier mouvement
 de colére on conclut à faire mourir
 sans distinction tous les habitans, &
 à réduire les femmes & les enfans en
 servitude; & l'on fit partir sur le
 champ une galère pour mettre le Dé-
 cret à exécution.

La nuit donna lieu aux réflexions.
 La sévérité parut excessive, & poussa

lée au delà des justes bornes. On se représenta le sort de cette malheureuse ville, abandonnée toute entière au carnage, & l'on se repentit d'avoir confondu les innocens & les coupables. Ce changement subit des esprits donna quelque lueur d'espérance aux Députés de Mitylène, & ils obtinrent des Magistrats qu'on remît de nouveau l'affaire en délibération. Cléon, auteur du premier Décret, homme violent, & d'une grande autorité parmi le peuple, soutint son sentiment avec beaucoup de force & de chaleur. Il montra combien il étoit indigne d'un sage gouvernement de changer ainsi à tout vent, & de casser le matin ce qu'on avoit ordonné la veille, & de quelle importance il étoit pour les suites d'arrêter par une punition exemplaire les revoltes prêtes à éclater par tout.

Diodore, qui avoit déjà contredit Cléon dans la première assemblée, le fit encore ici plus vivement. Après avoir décrit d'une manière touchante & pathétique le déplorable état de Mitylène, livrée aux troubles & aux tourmens d'une cruelle inquiétude dans l'attente d'une sentence qui devoit

voit décider de leur vie ou de leur mort, il fit ressouvenir les Athéniens de la réputation de bonté, de douceur, & de clémence, qui leur avoit fait jusques-là tant d'honneur, & qui les avoit distingués si glorieusement entre tous les autres peuples. Il leur fit remarquer que le peuple de Mitylène n'avoit été entraîné dans la revolte que malgré lui, & la preuve en étoit qu'il leur avoit livré la ville sitôt qu'il en avoit été le maître: c'étoit donc leurs bienfaiteurs qu'ils égorgeoient par leurs suffrages, se montrant ingrats & injustes en même tems, puisqu'ils punissoient également les innocens & les coupables. Il ajoutoit, que quand même ils seroient tous criminels, leur propre intérêt demandoit qu'on dissimulât, pour ne point irriter le reste des alliés par la rigueur du châtiment; & que le moien d'appaiser le mal étoit de laisser une porte au repentir, & non de jeter les hommes dans le desespoir par un refus absolu & irrévocable du pardon. Son avis fut donc d'examiner avec maturité la cause des factieux qu'on avoit amenés à Athé-

LONGUE-
MAIN.

A R T A- nes, & d'accorder le pardon au reste
X E R X E des habitans.

Les opinions furent partagées, & l'avis de Diodote ne l'emporta que de quelques voix. On fit partir sur l'heure même une seconde galère. Elle fut pourvue de tout ce qui pouvoit hâter la course, & les Députés de Mitylène promirent une grande récompense à ceux qui la conduisoient, si elle arrivoit à tems. Les rameurs firent des efforts extraordinaires. Ils ne quittèrent point leurs rames pour prendre leur nourriture, mais ils mangeoient & buvoient en ramant, & dormoient tour à tour; & heureusement le vent leur étoit favorable. La première galère avoit eu un jour & une nuit d'avance: mais comme elle portoit une triste nouvelle, elle ne s'étoit pas fort hâtée. Son arrivée dans la ville y avoit répandu la consternation. Elle augmenta infiniment, quand on eut lu en pleine assemblée l'arrêt de mort prononcé contre tous les citoiens. Ce ne furent que cris & hurlemens dans toute la ville. Dans le moment qu'on se préparoit à exécuter l'arrêt, on apprit qu'il étoit arrivé une seconde

galère. Tout fut suspendu. On con-
voqua de nouveau l'assemblée, & la
lecture de l'arrêt qui accordoit la
grace fut écoutée avec un silence &
une joie, qu'il est plus aisé de conce-
voir que d'exprimer.

LONGUE-
MAIN.

Pour les factieux que l'on avoit pris,
ils furent tous exécutés, quoiqu'ils
fussent au nombre de plus de mille. La
ville ensuite fut démantelée, les vais-
seaux livrés, & toute l'île, excepté la
ville de Méthymne, partagée en trois
mille parts, dont on consacra trois
cens au service des dieux; le reste fut
distribué au sort à des habitans d'A-
thènes qu'on y envoya, à qui ceux
du pays donnèrent deux * mines de
revenu pour chaque part, moiennant
quoi ils demeurèrent possesseurs de
l'île, quoiqu'ils n'en fussent plus les
propriétaires. Les villes qui apparte-
noient aux Mitylénéens sur la côte
d'Asie, furent réduites à l'obéissance
d'Athènes.

* La mine
Attique va-
loit cent dra-
gmes, c'est-à-
dire cinquante
livres.

PENDANT l'hiver de la campagne
précédente, ceux de Platée se voiant
sans espérance de secours, & man-
quant de vivres, firent dessein de se
sauver à travers les troupes des enne-
mis: mais la moitié, étonnés de la

Thucyd. lib.
3. p. 185-186.

ART A-
XERXES

grandeur du péril & de la hardiesse de l'entreprise, perdirent courage lorsqu'il la falut exécuter ; le reste, qui montoit environ à deux cens vingt soldats ; persista dans sa résolution, & se sauva de la manière que je vais dire.

Avant que d'en commencer la description , je dois avertir en quel sens je prends certaines expressions que j'y emploierai. A proprement parler , la ligne ou fortification qu'on dresse autour d'une ville assiégée pour en empêcher les sorties , s'appelle *contre-vallation* ; & celle qu'on dresse pour empêcher le secours de dehors , se nomme *circonvallation*. L'une & l'autre se trouvent ici : mais pour abrégé , je me servirai du premier terme.

La contre-vallation étoit composée de deux murs , à seize piés de distance. L'espace d'entre les deux murs étant en manière de plate-forme ou de terrasse , ne paroissoit qu'un seul bâtiment , & formoit un corps de casernes , où logeoient les soldats dans les chambres , qui y étoient pratiquées. On y avoit bâti de hautes tours d'espace en espace qui s'éten-

doient d'un mur à l'autre, pour se LONGUE-
 pouvoir défendre en même tems con- MAIN.
 tre ceux du dedans, & contre ceux
 du dehors. On ne pouvoit passer d'une
 chambre à une autre qu'en traversant
 ces tours, & le haut de la muraille
 étoit bordé des deux côtés d'un para-
 pet, où l'on faisoit garde ordinaire-
 ment : mais durant la pluie, les sol-
 dats se mettoient à couvert dans les
 tours, qui servoient comme de corps
 de garde. Voila l'état de la contre-
 vallation, qui avoit un fossé de part
 & d'autre, dont la terre avoit servi
 à faire la brique du mur.

Les assiégés commencèrent par
 prendre la hauteur du mur, en com-
 ptant les rangs de brique dont il étoit
 composé, ce qui se fit à plusieurs
 fois, & par diverses personnes, pour
 ne se pas abuser au compte. Il fut
 d'autant plus facile de s'en assurer,
 que le mur n'étant pas fort éloigné,
 on le découvroit tout à plein. On fit
 donc les échelles à proportion.

Lorsque tout fut prêt pour l'exé-
 cution du dessein, les assiégés forti-
 rent pendant une nuit qui étoit sans
 lune, & où il faisoit une grande pluie
 & un grand vent. Après avoir passé

A R T A- le premier fossé, ils s'approchèrent
X E R X E de la muraille sans être découverts,
à cause de l'obscurité de la nuit ;
outre que le vent & la pluie empê-
choient qu'on ne pût rien entendre.
Ils marchoient un peu éloignés , afin
de ne point s'entre-choquer avec
leurs armes , qui étoient légères pour
les rendre plus agiles ; & ils n'avoient
des chausses qu'à un pié , pour ne
pas glisser si facilement dans la boue.
Ceux qui portoient les échelles les
posoient dans l'espace qui étoit entre
les tours , où ils savoient qu'il n'y
avoit personne en garde à cause de la
pluie. A l'instant montèrent douze
hommes , sans autres armes que la
cuirasse & le poignard ; & marché-
rent aussitôt vers les tours , six d'un
côté, & six de l'autre. Ils furent sui-
vis par des soldats armés seulement
de javelots , pour monter plus aisé-
ment ; & l'on portoit après eux leurs
boucliers , afin qu'ils pussent s'en fer-
vir dans la mêlée.

Comme la plupart de ceux-ci
étoient au haut du mur , ils furent
découverts par le moien d'une tuile ,
que l'un d'eux fit tomber en montant ,
pour avoir empoigné le parapet afin

de se tenir plus ferme. Incontinent **LONGUE-**
on jette un cri du haut des tours , & **MAIN.**
tout le camp s'approche du mur sans
savoir ce que c'étoit , à cause de l'o-
rage & de la nuit. D'ailleurs, ceux
qui étoient restés dans la ville donnè-
rent l'alarme en même tems d'un au-
tre côté pour faire diversion ; de sorte
que l'ennemi en suspens n'osoit quit-
ter son poste. Mais un corps de ré-
serve de trois cens hommes , destiné
pour les accidens inopinés , sortit de
la contre-vallation pour courre au
bruit , & l'on leva des flambeaux du
côté de Thèbes , pour montrer que
c'étoit de ce côté-là qu'il falloit cou-
rir. Ceux de la ville, pour rendre ce
signal inutile en levèrent d'autres en
même tems de divers endroits ; car
ils les tenoient tout prêts sur la mu-
raille pour cet effet.

Cependant, les premiers qui étoient
montés s'étant saisis des deux tours
qui flanquoient l'intervalle où étoient
plantées les échelles , & aiant tué
ceux qui les gardoient , s'y postèrent
pour en défendre le passage , & pour
empêcher qu'on ne vînt à eux. Alors
posant des échelles du haut de la mu-
raille contre les deux tours, ils y firent

ARTABASERXES monter un bon nombre de leurs gens, pour en défendre l'approche à coups de trait tant contre ceux qui accouroient au pié du mur , que contre ceux qui venoient des tours prochaines. Pendant ce tems-là ont eut le loisir de planter plusieurs échelles , & d'abattre le parapet , pour faire monter le reste plus aisement. A mesure qu'ils montoient , ils descendoient de l'autre côté , & se rangeoient sur le bord du fossé qui étoit en dehors , pour tirer contre ceux qui se présentoient. Après qu'ils furent passés , ceux qui étoient dans les tours descendirent les derniers , & coururent au fossé , pour passer comme les autres.

Dans ce moment arriva la garde des trois cens avec des flambeaux. Toute fois , comme on les voioit mieux à la clarté des flambeaux , qu'on n'en étoit vû , on tiroit contr'eux plus juste , de sorte que les derniers passèrent le fossé , sans être attaquées au passage : mais ce ne fut pas sans peine , parce que le fossé étoit gelé , & que la glace ne portoit pas à cause du dégel & de la pluie. La violence de l'orage fut pour eux d'un grand secours.

Lorsqu'ils furent tous passés, ils prirent le chemin de Thèbes, pour couvrir mieux leur retraite, parce qu'il n'y avoit pas d'apparence qu'ils se dussent sauver vers une ville ennemie. Aussi virent-ils les assiégeans avec des flambeaux qui les cherchoient sur le chemin d'Athènes. Après avoir suivi celui de Thèbes pendant six ou sept stades, ils tournèrent tout court vers la montagne, & reprirent la route d'Athènes, où deux cens douze se sauvèrent de deux cens vingt qui étoient sortis, le reste aiant rebroussé chemin faute de cœur, à la réserve d'un archer qui fut pris sur le bord du fossé de la contre-vallation. Les assigéans, après les avoir poursuivis en vain, retournèrent à leur camp.

LONGUE:
MAIN.

*Plus d'un
quart de lieue.*

Cependant, ceux qui étoient dans la ville croiant que leurs compagnons avoient tous été tués, parce que ceux qui étoient de retour le disoient pour se justifier, envoièrent un héraut pour redemander les corps : mais aiant appris la vérité, il se retira.

VERS la fin de la campagne suivante, qui est celle où Mitylène fut prise, ceux de Platée manquant de

*Thucyd. lib.
3. p. 208-220.
Diod. lib.
12. pag. 107.*

ARTAXERXES

vivres & de tout moyen de se défendre, se rendirent à condition qu'on ne les puniroit qu'avec connoissance de cause, & par les formes de la justice. Il vint pour cet effet cinq Commissaires de Lacédémone, qui, sans les charger d'aucun crime, leur demandèrent simplement s'ils avoient rendu quelque service dans cette guerre à Lacédémone & aux alliés. Cette demande les surprit & les embarrassa. Ils sentirent bien qu'elle venoit des Thébains, leurs ennemis déclarés, qui avoient juré leur perte. Ils firent ressouvenir les Lacédémoniens des services qu'ils avoient rendus à la Grèce en général, tant à la bataille d'Artémise, qu'à celle de Platée; & en particulier à Lacédémone lors du tremblement de terre, qui fut suivi de la revolte de leurs esclaves. Que si depuis ils avoient embrassé le parti des Athéniens, ce n'avoit été que pour se défendre de la violence des Thébains, contre lesquels ils avoient imploré inutilement le secours de Lacédémone. Que si on leur faisoit un crime de ce qui avoit été leur malheur, ce crime au moins ne devoit pas effacer entière-

ment le souvenir de leurs anciens services, « Jetez les yeux, leur di-
rent-ils, sur les tombeaux de vos ancêtres que vous voyez ici, à qui nous rendons chaque année tous les honneurs qu'on peut rendre à la mémoire des morts. Vous avez voulu que nous fussions les dépositaires de leurs corps, aussi bien que les témoins de leur valeur? & vous voudriez maintenant livrer leurs dépouilles à leurs meurtriers, en nous abandonnant aux Thébains, qui combattoient contre eux à la bataille de Platée? Asservirez-vous une province, où la Grèce a recouvré sa liberté? Détruirez-vous les temples des dieux, à qui vous devez la victoire? Abolirez-vous la mémoire de leurs fondateurs, qui ont tant contribué à votre salut? Ici, nous osons le dire, nos intérêts sont joints à votre gloire, & vous ne pouvez livrer vos anciens amis & vos bienfaiteurs à l'injuste haine des Thébains, sans vous couvrir vous-mêmes d'une éternelle infamie. »

De si justes remontrances paroissent devoir faire quelque impres-

ARTAXERXES sur l'esprit des Lacédémoniens : mais ils furent plus sensibles à la réplique que firent les Thébains, qui étoit pleine d'amertume & de fiel contre ceux de Platée ; & d'ailleurs ils avoient apporté leurs ordres de Lacédémone. Ils persistèrent donc dans leur première demande , *Si les Platéens leur avoient rendu quelque service depuis la guerre ;* & les faisant passer l'un après l'autre , à mesure qu'ils répondoient , *Non*, on les égorgeoit sans pardonner à pas un. Il en mourut environ deux cens de la sorte , avec vingt-cinq Athéniens , qui se trouvant parmi eux subirent le même sort. Leurs femmes qui avoient été prises , furent réduites en captivité. Ensuite les Thébains peuplèrent la ville de quelques bannis de Mégare & de Platée : mais l'année d'après ils la rasèrent entièrement. C'est ainsi que les Lacédémoniens , dans l'espérance de tirer de grands avantages des Thébains , sacrifièrent Platée à leur animosité , quatre-vingts-treize ans après qu'elle étoit entrée dans l'alliance des Athéniens.

DES PERSES ET DES GRECS. 589
du Péloponnèse la peste recommença LONGUE
à Athènes, & y emporta encore bien MAIN.
du monde.

§. IV. *Les Athéniens prennent Pyle, puis y sont assiégés. Lacédémoniens enfermés dans la petite île de Sphalérie. Cléon s'en rend maître. Mort d'Artaxerxe.*

Sixième & septième année de la guerre.

J'OMETS plusieurs événemens particuliers des campagnes suivantes, qui se passoient toujours de la même sorte, les Lacédémoniens faisant régulièrement chaque année des courses dans l'Attique, & les Athéniens dans le Péloponnèse, outre quelques attaques de places de part & d'autre en différens endroits. Celle de Pyle, pe-

AN. M. 3579.

AV. J. C. 425.

Thucyd. lib.

4. pag. 253-

280.

Diod. l. 12.

p. 112-114.

Vingt lieues.

petite ville de Messénie, éloignée seulement de * quatre cens stades de Lacédémone, fut une des plus considérables. Les Athéniens, sous la conduite de Démosthène, s'en étoient rendu maîtres, & s'y étoient extrêmement fortifiés : c'étoit la septième année de la guerre. Les Lacédémoniens abandonnèrent aussitôt l'Attique, pour reprendre cette place, & ils l'atta-

A R T A-quèrent par terre & par mer. **Brafi-**
X E R X Edas, l'un de leurs Chefs, s'y distingua
par des actions de bravoure extraor-
dinaires. Il y avoit vis-à-vis de la
ville une petite île, nommée Spha-
ctérie, qui pouvoit incommoder ex-
trêmement les assiégés, & fermer
l'entrée du port. Ils y jettèrent un
corps de troupes, qui étoit l'élite
des Lacédémoniens : ils étoient au
nombre de quatre cens vingt, sans
compter les Ilotes. Il se donna un
combat sur mer, où les Athéniens
eurent l'avantage, & ils dressèrent
un trophée. Ensuite ils environné-
rent l'île, & firent garde tout au tour,
pour empêcher & que ceux qui y
étoient n'en sortissent, & qu'on n'y
fît entrer des vivres.

La nouvelle de la défaite étant
venue à Sparte, le Magistrat crut
l'affaire de telle conséquence, qu'il
se transporta sur le lieu pour voir
de plus près ce qu'il falloit faire ; &
jugéant qu'il étoit impossible de
sauver ceux qui étoient dans l'île,
& qu'on les prendroit à la fin soit par
famine ou autrement, il fit propo-
ser un accord. On consentit à une
suspension d'armes, pour donner le

tems aux Lacédémoniens d'envoyer LONGUE-
à Athènes, à la charge qu'ils livre- MAIN.
roient cependant toutes leurs galé-
res, & qu'ils ne pourroient attaquer
la place ni par mer ni par terre
jusqu'au retour des députés : qu'en
satisfaisant à ces conditions, les
Athéniens souffriroient qu'on por-
tât des vivres à ceux qui étoient
dans l'île à * raison de tant pour
le maître, & de moitié pour le va-
let, le tout publiquement à la vûe
des deux armées. Que les Athéniens
de leur côté pourroient faire garde
autour de l'île, pour empêcher que
rien n'y entrât ou n'en sortît, sans
faire pourtant aucune attaque. Qu'au
cas qu'il y eût la moindre contraven-
tion à cet accord, la trêve seroit rom-
pue : sinon, qu'elle dureroit jusqu'au
retour des députés, que les Athé-
niens s'obligeoient de mener & de
ramener ; & qu'alors on rendroit
aux Lacédémoniens leurs navires en
l'état qu'ils les auroient donnés. Tels
furent les articles du traité. Les La-
cédémoniens commencèrent à l'exé-

* Pour les maitres deux | deux Cotyles de vin, c'est-
Chanix Attiques de sari- | à dire une grande chopine ;
ne, qui montent à peu près | & un morceau de viande :
à quatre livres & demie, | & la moitié pour les valets.

A R T A-cuter, en livrant environ soixante
X E R X E vaisseaux , & envoièrent à Athènes
— leurs députés.

Quand ils furent admis à l'audience du peuple , ils avouèrent d'abord qu'ils venoient demander aux Athéniens la paix , qu'ils avoient été peu de tems auparavant en état de leur accorder. Qu'il ne tenoit qu'à eux de se procurer la gloire d'avoir pacifié toute la Grèce , puisqu'ils vouloient bien les prendre pour arbitres du traité. Que le danger de leurs citoyens , enfermés dans l'île , les avoit déterminés à une démarche qui devoit sans doute couter beaucoup à des Lacédémoniens. Qu'il n'y avoit pourtant encore rien de désespéré pour eux , & qu'ainsi c'étoit le tems d'établir entre les deux peuples une amitié ferme & solide , parce que de part & d'autre les choses étoient encore en balance , & que la fortune ne s'étoit point encore absolument déclarée. Que souvent les dieux abandonnent ceux à qui leurs heureux succès font un sujet de fierté , en faisant succéder à leurs plus grandes faveurs les disgrâces les plus complètes.

Qu'ils se souvinssent que les armes LONGUE-
 sont journalières, & que le moien MAIN.
 d'établir une ferme paix, n'est pas
 de triompher de son ennemi en l'ac-
 cablant, mais de se réconcilier avec
 lui à des conditions justes & raison-
 nables. Car alors, vaincu par la gé-
 nérosité & non par la force, & oc-
 cupé désormais non du desir de la
 vengeance, mais des sentimens de
 gratitude, il se fait un devoir & un
 plaisir de garder les conventions
 avec une fidélité inviolable.

Les Athéniens avoient une belle
 occasion de terminer la guerre par
 une paix qui n'auroit pas été moins
 glorieuse pour eux, qu'utile & salu-
 taire à toute la Grèce. Mais Cléon,
 qui avoit une grande autorité parmi
 le peuple, empêcha un si grand bien.
 Ils répondirent donc, par son avis,
 qu'il falloit auparavant que ceux qui
 étoient dans l'île se rendissent à dis-
 crétion, & qu'ils fussent conduits à
 Athènes, à la charge de les renvoyer
 lorsque les Lacédémoniens auroient
 rendu les places qu'on avoit été con-
 traint d'abandonner par le dernier
 traité, & qu'après cela on feroit une

A R T A-paix ferme & stable. Les Lacédémoniens demandèrent qu'on nommât des députés, & que l'on convînt de s'en tenir à ce qu'ils accorderoient ensemble. Mais Cléon s'emporta contre cette proposition, & dit qu'on voioit bien qu'ils n'agissoient pas de bonne foi, puisqu'ils ne vouloient pas traiter avec le peuple, mais avec des particuliers qu'ils pourroient corrompre; & que s'ils avoient quelque chose à dire, ils le fissent sur le champ. Les Lacédémoniens, voiant qu'il ne leur étoit pas possible de traiter avec le peuple sans la participation de leurs alliés, & que s'ils avoient accordé quelque chose à leur préjudice ils en seroient responsables, se retirèrent sans rien faire, persuadés qu'on ne pouvoit rien attendre d'équitable de la part des Athéniens dans l'état & la disposition où les avoit mis leur prospérité.

Sitôt qu'ils furent de retour à Pyle, la suspension cessa. Mais comme ils redemandèrent leurs vaisseaux, on refusa de les rendre sous prétexte de quelques infractions du traité en des choses de peu d'importance. Les Lacédémoniens se récrièrent fort sur ce

refus , comme sur une perfidie ma- LONGUE-
nifeste , & l'on se prépara à la guerre MAIN.
avec plus de vigueur & d'animosité

qu'auparavant. La fierté dans les succès , & la mauvaise foi dans l'observation des traités , attirent tôt ou tard sur un peuple de grands malheurs. La suite nous fera connoître ce qui en fera.

Les Athéniens faisoient une garde exacte autour de l'île pur n'y laisser rien entrer , & espéroient réduire bientôt les ennemis par la famine. Mais ceux de Lacédémone engagèrent tout le pays à les secourir par l'appas du gain , en taxant fort haut le prix des vivres , & donnant la liberté aux esclaves qui venoient à bout d'y en porter. On en amenoit donc , au péril de la vie , de tous les endroits du Péloponnèse. Il y avoit même des plongeurs qui passaient de la côte dans l'île vis-à-vis du port , & traînoient après eux des peaux de bouc où il y avoit de la graine de lin pilée , & de celle de pavot détremmée avec du miel.

Ceux qui étoient assiégés dans Pyle ne souffroient guères moins de leur côté , manquant & d'eau & de vivres.

ARTAXERXES

Quand on eut appris à Athènes, que bien loin d'affamer les ennemis, ils étoient affamés eux-mêmes, on craignit que la flotte ne pouvant subsister pendant l'hiver le long d'une côte déserte & ennemie, ni demeurer à l'ancre dans une rade mal assurée, la garde de l'île ne vînt à se relâcher, & que les prisonniers ne se sauvassent. Mais ce que l'on appréhendoit le plus, c'étoit que les Lacédémoniens, voyant leurs gens hors de danger, ne voulussent plus entendre à la paix; & l'on commença à se repentir de ne l'avoir pas acceptée.

Cléon sentoît bien que toutes ces plaintes retomboient sur lui. Il commença par traiter de faux rapports tous les bruits qui couroient sur la disette où étoient les Athéniens tant au dedans de Pyle, qu'au dehors. Ensuite il déclara devant le peuple la lenteur & la nonchalance des Chefs qui assiégeoient l'île, prétendant qu'avec un peu de vigueur & de courage on pouvoit aisément s'en rendre maître, & que s'il étoit en leur place il en viendroit bientôt à bout. On le nomma pour Chef de cette expédition, Nicias, qui devoit y commander, lui

ayant cédé volontiers cet honneur, soit par foiblesse, car il étoit naturellement timide; soit par politique, pour le décréditer auprès du peuple par le mauvais succès qu'on comptoit qu'il auroit dans cette entreprise. Cléon fut surpris & embarrassé, car il ne s'attendoit pas qu'on dût le prendre au mot, étant plus habile discoureur que brave guerrier, & se servant mieux de la langue que de l'épée. Il se défendit quelque tems, & s'excusa le mieux qu'il put sous divers prétextes. Mais voiant que plus il reculoit, plus il étoit pressé, il changea de ton, & substituant la rodomontade au courage, il déclara en pleine assemblée, avec un air ferme & assuré, qu'il rameneroit dans vingt jours ceux de l'île prisonniers, ou qu'il y périroit. Toute l'assemblée se mit à rire, car on le connoissoit.

Cependant, contre toute apparence, la chose arriva comme il l'avoit promis. Lui & Démosthène, qui étoit l'autre Chef, entrèrent dans l'île, attaquèrent vivement l'ennemi, le poussèrent de poste en poste, & gagnant toujours du terrain l'acculé-
rent enfin dans le fond de l'île. Les

A R T A- Lacédémoniens avoient gagné un
X E R X E fort qui paroissoit inaccessible. Là
ils se rangèrent en bataille , firent
face du côté seul où l'on pouvoit
les attaquer , & s'y défendirent avec
un courage de lions. Comme le com-
bat avoit duré une grande partie du
jour , & qu'ils étoient tous abbattus
de chaud , de soif , & de lassitude, le
Général des Messéniens , s'adressant à
Cléon & à Démosthène , leur dit que
tout ce qu'ils faisoient étoit inutile ,
si l'on ne prenoit l'ennemi en queue ,
& promit , que si on vouloit lui don-
ner quelques gens de trait , il tour-
neroit tant qu'il trouveroit un passa-
ge. En effet il grimpa avec sa troupe
par des lieux escarpés qu'on ne gar-
doit point , & se coulant dans le fort
sans être aperçu , parut tout-à-
coup au dos des Lacédémoniens , ce
qui abbattit leur courage , & acheva
leur défaite. Ils ne se défendoient
donc presque plus , & vaincus par le
nombre , attaqués de toutes parts , &
abbattus de langueur & de desespoir,
ils commencèrent à reculer : mais les
Athéniens se saisirent de tous les pas-
sages , pour leur empêcher la retrai-
te. Alors Cléon & Démosthène ,

voiant que si on les pressoit davan- **LONGUE-**
 tage, il n'en échaperoit pas un, & **MAIN.**
 étant bien aises de les emmener vifs
 à Athènes, arrêterent leurs gens, &
 firent crier par un Héraut qu'ils mis-
 sent bas les armes, & qu'ils se rendis-
 sent à discrétion. A ces mots, la plu-
 part baissèrent leurs boucliers, & frap-
 pèrent des mains en signe d'approba-
 tion. Il se fit une espece de suspen-
 sion d'armes, & leur Commandant
 demanda qu'il lui fût permis d'en-
 voier au camp, pour savoir la résolu-
 tion des Chefs. On ne le voulut pas
 souffrir, mais on appella des Hérauts
 de dessus la côte, & après quelques-
 allées & venues un Lacédémonien
 vint dire tout haut, Qu'on leur per-
 mettoit de traiter, pourvû qu'ils ne
 fissent rien contre leur honneur. Sur
 cette parole, aiant délibéré entre
 eux, ils se rendirent à discrétion; &
 on les garda jusqu'au lendemain.
 Alors les Athéniens, aiant dressé un
 trophée, & rendu aux Lacédémoniens
 leurs morts, s'embarquèrent pour le
 départ, après avoir distribué les pri-
 sonniers dans les vaisseaux, & en-
 avoir confié la garde aux Capitaines
 des galères.

ARTAXERXE Il mourut dans le combat cent vingt huit Lacédémoniens , de quatre cens vingt qu'ils étoient : ainsi il en resta un peu moins de trois cens ; dont il y avoit six vingts Spartiates , c'est-à-dire habitans de Spartemême. Le siège de l'Isle , à compter dès le commencement , y compris le tems de la trêve , avoit duré soixante & douze jours. Chacun se retira de devant Pyle , & la promesse de Cléon , route vaine & téméraire qu'elle étoit se trouva accomplie à la lettre. Mais ce qui surprit le plus , fut l'accord même qui venoit de se faire : car on croioit que les Lacédémoniens , au lieu de rendre les armes , mourroient tous l'épée à la main.

Lorsqu'ils furent arrivés à Athènes, on ordonna qu'ils demeureroient prisonniers jusqu'à la paix , pourvu que les Lacédémoniens n'entrassent point dans le pays ; mais que s'ils y entroient , on les feroit tous mourir. On laissa garnison dans Pyle. Les Messéniens de Naupacte , qui l'avoient possédée autrefois , y envoierent de leur plus brave jeunesse , laquelle incommoda fort par ses courses les Lacédémoniens ; & comme ces

tes Messéniens parloient le langage LONGUE.
 du pays , ils attirèrent dans leur parti MAIN.
 un grand nombre d'esclaves. Les La-
 cédémoniens , dans la crainte d'un
 plus grand mal , députèrent plusieurs
 fois à Athènes , sans pouvoir ja-
 mais rien obtenir de la prospérité or-
 gueilleuse des Athéniens , à qui un si
 grand succès donnoit de plus hautes
 espérances.

LA SEPTIÈME année de la guerre *Thucyd. lib.*
 du Péloponnèse , Artaxerxe envoya 4. pag. 285.
 aux Lacédémoniens un ambassadeur
 nommé Artapherne , chargé d'une
 lettre de sa part écrite en Assyrien ,
 où il leur marquoit qu'il lui étoit ve-
 nu plusieurs ambassadeurs de leur
 part , qui lui avoient exposé des cho-
 ses si différentes , qu'il ne comprenoit
 point du tout ce qu'ils souhaitoient de
 lui : que dans cette incertitude il avoit
 pris le parti de leur envoyer ce Persan ,
 pour leur faire savoir que s'ils avoient
 quelque chose à lui proposer , ils n'a-
 voient qu'à faire partir avec lui un
 homme de confiance , qui pût l'infor-
 mer précisément de ce qu'ils dési-
 roient. Cet ambassadeur , en arrivant à
 Eione sur la rivière de Strymon dans
 la Thrace , y fut pris vers la fin de

ARTAXERXE - cette année par un des Amiraux de la flotte Athénienne, qui l'envoya à Athènes. Il y fut traité avec toutes les honnêtetés & tout le respect possible, parce que les Athéniens cherchoient à se remettre dans les bonnes grâces du Roi son maître.

L'année suivante, dès que la saison permit de se mettre en mer, ils le renvoierent dans un vaisseau de l'Etat aux dépens du public, & nommèrent quelques-uns de leurs citoiens pour aller avec lui à la Cour de Perse en qualité d'ambassadeurs. En débarquant à Ephese, ils apprirent la mort d'Artaxerxe. Les ambassadeurs ne jugeant pas à propos d'aller plus loin après cette nouvelle, prirent congé d'Artapherne, & s'en retournèrent à Athènes.





LIVRE HUITIEME.

*Suite de l'Histoire des Perses & des Grecs,
& de la guerre du Péloponnèse, sous les
régnes de Xerxès II. de Sogdien, & de
Darius Nothus.*

CHAPITRE PREMIER.

CE CHAPITRE renferme l'histoire de treize années de la guerre du Péloponnèse, jusqu'à la dix-neuvième inclusivement.

**XERXES
II.**

§. I. *Régnes fort courts de Xerxès & de Sogdien. Darius Nothus leur succede. Il appaise la revolte de l'Egypte, & celle de Médie. Il donne à Cyrus le plus jeune de ses fils, le commandement en chef de toute l'Asie Mineure.*

ARTAXERXE mourut vers le commencement de la quarante-neuvième année de son règne. Xerxès, qui lui succéda, étoit le seul fils qu'il eût de la Reine sa femme. Mais il en avoit dix-sept autres de ses concubines ; & entre'autres Sogdien, que Ctésias appelle Sécondien ; Ochus , & Arsite. Sogdien , de concert avec Pharnacias

AN.M. 3579.
AV. J.C. 425.
Ctes. cap. 47-51.
Diod. lib. 12.
pag. 115.

XERXES un des Eunuques de Xerxès, vint un jour surprendre le nouveau Roi, qui, après s'être enivré un jour de fête, s'étoit retiré dans sa chambre pour y cuver son vin. Il le tua aisément dans cet état, au bout d'un règne de quarante-cinq jours, & fut déclaré roi à sa place.

II.

SOGDIEN

A peine étoit-il sur le trône, qu'il fit mourir Bagoraze le plus fidèle des Eunuques de son pere. C'étoit cet Eunuque qui avoit été chargé des funérailles d'Artaxerxe, & de la Reine mere de Xerxès, morte le même jour que son mari. Après avoir conduit ces deux corps en Perse dans le tombeau ordinaire des Rois, il trouva à son retour Sogdien sur le trône, qui le reçut assez mal, à cause de quelque différent qu'ils avoient eu du vivant de son pere. Le nouveau Roi ne s'en tint pas à ces premieres marques de mécontentement : il ne fut pas longtemps sans lui chercher querelle sur je ne sai quoi qui regardoit les funérailles de son pere, & il le fit lapider.

Par ces deux meurtres, celui de son frere Xerxès, & celui de Bagoraze, il devint l'horreur de l'armée, & de la Noblesse ; & il ne se crut pas beaucoup en sûreté sur un trône, dont

l'acquisition lui avoit coûté de si grands crimes. Il soupçonna ses freres d'un dessein pareil au sien ; & ses soupçons tomberent principalement sur Ochus , à qui son pere avoit laissé le gouvernement d'Hyrkanie. Il le manda , pour se défaire de lui quand il seroit arrivé. Mais Ochus , qui pénétra son dessein , trouva divers prétextes pour se dispenser de ce voyage ; & différa tant , qu'enfin , quand il vint , ce fut à la tête d'une bonne armée , dont il déclara ouvertement qu'il se serviroit pour venger la mort de son frere Xerxès. Cette déclaration lui attira quantité de gens de qualité , & plusieurs Gouverneurs de provinces , que la cruauté & la mauvaise conduite de Sogdien firent passer dans le parti d'Ochus. On lui mit sur la tête la Tiare , marque de la roiauté , & on le proclama Roi. Sogdien , se voyant ainsi abandonné , fit voir autant de lâcheté à défendre sa couronne , qu'il avoit montré d'injustice & de cruauté à l'usurper. Contre l'avis de ses meilleurs amis , & des plus sages de ceux qui demeuroient encore attachés à lui , il entra en traité avec son frere ; qui s'étant rendu maître de sa person-

SOGDIEN ne, le fit jetter dans la cendre, où il mourut d'une mort cruelle. C'étoit un supplice particulier à la Perse, & dont on ne se servoit que pour de grands criminels. On remplissoit de cendre, jusqu'à une certaine hauteur, une tour des plus hautes. Du haut de cette tour on jettoit le criminel dedans, la tête la premiere : & ensuite encore, avec une roue, on remuoit sans cesse cette cendre autour de lui, jusqu'à ce qu'enfin elle l'étoufât. Ce fut ainsi que ce Prince scélérat perdit la vie avec l'empire, dont il ne jouit que six mois & quinze jours.

DARIUS PAR LA MORT de Sogdien, Ochus **NOTHUS.** se trouva maître de l'empire. Il ne s'y vit pas plutôt bien établi, qu'il changea son nom d'Ochus en celui de Darius. Pour le distinguer, les historiens y ajoutent l'épithète de *Nothus*, qui en grec veut dire le bâtard. Son règne dura dix-neuf ans.

Artabaze, voyant comment Sogdien avoit supplanté Xerxès, & avoit été détrôné lui-même par Ochus, voulut en faire autant à ce dernier. Quoiqu'il fut son frere de mere aussi bien que de pere, il se révolta ouvertement contre lui, & fut soutenu dans sa ré-

volte par Artyphius fils de Mégabyse. **DARIUS**
Ochus, que nous ne nommerons plus **NOTHUS**
 désormais que Darius, envoya Artas-
 syras un de ses Généraux, contre Ar-
 typhius, & marcha en personne, à la
 tête d'une autre armée, contre Arsi-
 te. Artyphius, avec des troupes grec-
 ques qu'il avoit à sa solde, battit deux
 fois le Général qu'on lui avoit oppo-
 sé. Mais dans une troisième bataille,
 on les lui débaucha, & il fut battu
 lui-même, & se vit réduit à la né-
 cessité de se rendre sur quelques es-
 pérances de pardon qu'on lui donna.
 Le Roi vouloit le faire mourir, mais
 la Reine Parysatis, sœur & femme de
 Darius, l'en détourna. Elle étoit aussi
 fille d'Artaxerxe, mais d'une autre
 mere que Darius. C'étoit une femme
 habile, intrigante, & rusée, dont le
 Roi son mari suivoit presque en tout
 les avis. Celui qu'elle lui donna en
 cette occasion, étoit d'une profonde
 perfidie. Elle lui conseilla d'user de
 clémence envers Artyphius, & de le
 bien traiter, afin de faire espérer à
 son frere, lorsqu'il verroit sa généro-
 sité pour un serviteur rebelle, de
 trouver lui-même un traitement pour
 le moins aussi favorable, & l'engager

DARIUS par là à se soumettre. Elle ajouta , que quand il seroit une fois maître de la personne de ce Prince , il seroit à l'un & à l'autre ce qu'il jugeroit à propos. Darius suivit son conseil , & il lui réussit. Artice , informé de la douceur dont on usoit à l'égard d'Artyphius , conclut que lui , qui étoit frere du Roi , seroit traité encore plus favorablement ; & sur cette espérance il traita avec son frere , & se rendit. Darius panchoit beaucoup à lui sauver la vie : mais Parysatis , à force de lui représenter que la punition de ce rebelle étoit nécessaire pour sa sûreté , le déterminà à s'en défaire , en le faisant périr misérablement dans la cendre avec Artyphius. Ce ne fut pourtant pas sans se faire une grande violence qu'il consentit à ce sacrifice ; car il aimoit tendrement ce frere. Il fit encore quelques autres exécutions , qui ne lui procurèrent pas la tranquillité qu'il en attendoit : car son règne dans la suite , fut troublé par de violentes agitations , qui ne lui laissèrent pas beaucoup de repos.

Ces cap. 51. UNE DES PLUS dangereuses , fut celle que lui suscita la rébellion de Pisuthne , qui étant Gouverneur de

Lydie voulut secouer le joug de l'em- **NOTHUS.**
 pire des Perses , & se rendre souve-
 rain dans sa province. Ce qui lui fit
 espérer d'y réussir , fut le corps de
 troupes Grecques qu'il avoit ramas-
 sées & prises à son service , sous le
 commandement de Lycon Athénien.
 Darius envoya Tissapherne contre ce
 rebelle , & lui donna , avec une bon-
 ne armée , la commission de Gouver-
 neur de Lydie , dont il falloit dépossé-
 der l'autre. Tissapherne , qui étoit
 un homme plein de ruse , & capable
 de jouer toutes sortes de personna-
 ges , trouva le moien de parler aux
 Grecs de Pisuthne , & à force de pré-
 sens & de promesses il gagna & les
 troupes & le Général , qui se donnè-
 rent à lui. Le rebelle , trop affoibli
 par cette désertion pour soutenir la
 démarche qu'il avoit faite , se rendit
 dans l'espérance d'obtenir sa grace ,
 comme on l'en avoit flaté ; & dès qu'on
 l'eut amené devant le Roi , il fut con-
 damné à être étouffé dans la cendre ,
 & eut le même sort que les rebelles
 qui l'avoient précédé. Sa mort n'ap-
 paisa pas entièrement tous les trou-
 bles. Amorgas son fils , avec le reste
 de son armée , se maintint encore

Thucyd. lib.

3. pag. 554.

567. 568.

DARIUS contre Tissapherne ; & pendant deux ans il ravagea les provinces maritimes de l'Asie Mineure , jusqu'à ce qu'enfin il fut pris par les Grecs du Péloponnèse à Jase ville d'Ionie , & livré par eux à Tissapherne , qui le fit mourir.

611. cap. 52. Un autre grand embarras où se trouva Darius , fut celui où le jetta l'un de ses Eunuques. Ces sortes d'Officiers s'étoient depuis longtemps rendu tout puissans dans la Cour des Rois de Perse , & la suite de l'histoire nous fera voir qu'ils y dominèrent toujours absolument. On peut connoître & leur caractère , & le danger dont ils sont pour les Princes , par le portrait que Dioclétien , après s'être réduit à une condition privée , faisoit des Affranchis , qui s'étoient de même rendu maîtres des Empereurs Romains. » Il ne faut , disoit-il , que » quatre ou cinq personnes bien » unies entre elles , & bien déterminées à tromper le Prince , pour » y réussir. Ils ne lui montrent jamais les choses que par le seul côté qui peut les lui faire approuver. » Ils lui cachent tout ce qui contribueroit à l'éclairer : & comme ils

*Vopis. in
vit. Aurelian.
Imper.*

l'obsèdent seuls, il ne peut être in- « **NOTHUS.**
 struit que par leur canal, & il ne fait «
 que ce qu'il leur plaît de lui dire. «
 Ainsi il accorde les magistratures à «
 qui il les faudroit refuser : il desti- «
 tue au contraire de leurs emplois «
 ceux qui en font les plus dignes. En «
 un mot, le meilleur Prince sou- «
 vent est vendu par eux malgré sa vi- «
 gilarice, & malgré même ses défian- «
 ces & ses soupçons. *Quid multa? Ut* «
Diocletianus ipse dicebat, bonus, cautus,
optimus venditur Imperator.

Voilà comment étoit gouvernée la Cour de Darius. Trois Eunuques s'y étoient emparé de toute la puissance : a marque certaine d'un mauvais gouvernement, & d'un Prince sans mérite. Mais parmi ces trois Eunuques, il y en avoit un qui dominoit sur les autres, & qui en étoit le Chef : il se nommoit Artoxare. Il avoit su observer le foible de Darius, pour gagner sa confiance. Il avoit étudié toutes les passions pour les favoriser, & le gouverner par elles. Il ne l'occupoit que de plaisirs & d'amusemens, pour s'attirer toute l'autorité.

a Scis præcipuum esse Principis, magnos liber-
 indicium non magni, tos. *Plin. ad Trajan.*

DARIUS

Enfin , sous le nom & sous la protection de la reine Parisatis , des volontés de laquelle il se montroit fidèle esclave , il dispoſoit de toutes les affaires de l'empire , & tout se régloit par ses ordres. Enivré par l'autorité souveraine que lui donnoit la faveur de son Maître , il se mit en tête de se rendre Souverain au lieu de premier Ministre qu'il étoit , & forma le dessein de se défaire de Darius , & de monter sur son trône. Mais sa trame aiant été découverte , il fut arrêté , & mis entre les mains de Parisatis , qui lui fit souffrir les plus cruels & les plus honteux supplices.

*Euseb. in
Chron.*

LE PLUS GRAND des malheurs qui arrivèrent à Darius pendant tout le cours de son règne , fut la revolte de l'Egypte. Ce coup terrible éclata dans la même année que la revolte de Pisuthne. Darius ne put réduire l'Egypte , comme il réduisit ce rebelle. Les Egyptiens , las de la domination des Perses , accoururent de toutes parts auprès d'Amyrtée Saïte , qui étoit enfin sorti des marais où il s'étoit toujours maintenu , depuis que la revolte d'Inarus avoit été étouffée. Les Perses furent chassés , & Amyr,

*Thucyd. lib.
2. pag. 72. 73.*

tée déclaré roi d'Egypte , & il y régna **NOTHUS** six ans.

• Après s'être bien affermi sur le trône , & avoir entièrement chassé d'Egypte les Perses , il se préparoit à les poursuivre jusques dans la Phénicie , & avoit déjà pris des mesures avec les Arabes pour les y attaquer. L'avis qu'en eut le Roi de Perse lui fit rappeler la flotte qu'il avoit promise aux Lacédémoniens , pour l'employer à garder ses propres Etats.

Pendant que Darius faisoit la guerre en Egypte & en Arabie , les Médes se souleverent : mais ils furent battus , & ramenés à leur devoir par la force. Pour châtier cette rébellion , on appesantit leur joug , qui avoit été assez doux jusques-là. C'est ce qui ne manque jamais d'arriver à des Sujets rebelles , quand la puissance à laquelle ils avoient voulu se soustraire reprend le dessus.

Les armes de Darius semblent avoir eu le même succès contre les Egyptiens. Amyrtée étant mort après avoir régné six ans , (peut-être même fut-il tué dans quelque action) Hérodote remarque que ce fut par la faveur des Perses que son fils Pausiris

*Herod. lib. 2.
cap. 15.*

DARIUS lui succéda. Il falloit donc pour cela qu'ils fussent maîtres de l'Egypte, ou du moins que leur parti y fût le plus fort.

AN.M. 3596. APRE's être venu à bout des re-
 AV.J.C. 407. belles en Médie, & avoir rétabli les affaires d'Egypte, Darius donna à Cyrus, le plus jeune de ses fils, le gouvernement en Chef de toutes les provinces de l'Asie Mineure : commission importante, qui soumettoit à ses ordres tous les Gouverneurs particuliers de cette partie de l'empire.

J'ai cru devoir anticiper les tems, & mettre tout de suite ces faits qui regardent les Rois de Perse, pour n'être point obligé d'interrompre si souvent l'histoire des Grecs, à laquelle il est tems de revenir.

§. II. *Les Athéniens se rendent maîtres de l'île de Cythère. Expéditions de Brasidas dans la Thrace. Il prend Amphipolis. Exil de Thucydide l'historien. Combat près de Délie, où les Athéniens sont vaincus.*

Huitième année de la guerre.

DANS les trois ou quatre campagnes qui suivirent la réduction de

la petite île Spactérie, il ne se passa **NOTHUS.**
guères d'évenemens considerables.

Les Athéniens sous la conduite de AN.M. 3580.
AV.J.C. 424.
Thucyd. lib.
4. pag. 286. Nicias, se rendirent maîtres de l'île
de Cythère, qui est sur la côte de La-
cédémone près du cap de Malée, & de
là ils infestoient tout le pays.

D'un autre côté, Brasidas marcha Thucyd. lib.
4. p. 304. 311
Diod. lib. 12
p. 117. 118. vers la Thrace. Les Lacédémoniens
étoient portés à cette expédition par
plus d'un motif. Ils comptoient faire
une diversion des forces d'Athènes
qui leur étoient tombées sur les bras
dans leur pays. Les peuples de cette
contrée les y appelloient, & s'of-
froient à payer l'armée. Enfin, ils
étoient bien aises de profiter de cer-
te occasion pour se défaire des Ilo-
tes, dont ils appréhendoient un soule-
vement depuis la prise de Pyle. Ils s'é-
toient déjà défait de deux mille d'en-
tre eux, par une voie qui fait hor-
reur. Sous le spécieux prétexte de ré-
compenser le mérite jusques dans les
esclaves même, mais en effet pour se
délivrer de ceux dont ils redoutoient
plus le courage, ils firent proclamer
par un Edit public, que ceux des Ilo-
tes qui auroient le mieux servi l'Etat

DARIUS dans les dernières campagnes, vinssent inscrire leurs noms dans le régître public, pour être délivrés de la servitude. Deux mille se présentèrent. On les promena par les temples avec des chapeaux de fleurs, comme si l'on eût eu envie en effet de leur accorder la liberté. Après cette cérémonie ils disparurent tous, sans qu'on ait jamais su depuis ce qu'ils étoient devenus. On voit ici comment une politique ombrageuse, & une domination jalouse & pleine de défiance, porte aux plus noires perfidies, & ne craint point de faire servir à l'exécution de ses desseins criminels la sainteté même de la religion, & l'autorité des dieux.

Ils envoièrent donc encore sept cens Ilotes avec Brasidas qu'ils avoient choisi pour cette entreprise. Ce Général engagea plusieurs villes dans son parti, soit par force, soit par intelligence, & encore plus par sa sagesse & sa modération. Les principales furent Acanthe & Stagyre, qui étoient deux colonies d'Andros. Il marcha aussi dans la suite vers Amphipolis, colonie d'Athènes, sur le fleuve Stry-

mon. Les habitans dépêchèrent en **NOTHUS**,
hâte vers * Thucydide Général des

Athéniens, qui étoit alors à Thase, * C'est celui
qui a écrit l'his-
toire de la
guerre du Pé-
loponnèse.
petite île de la mer Egée, à demi-
journée d'Amphipolis. Il partit aussi-
tôt avec sept navires qui se trouvè-

rent près de lui, pour rassurer la place
avant que Brasidas s'en pût saisir, ou
en tout cas pour se jeter dans Eione,
qui étoit fort près d'Amphipolis.
Brasidas qui l'appréhendoit à cause du
crédit qu'il avoit dans tout ce pays-
là, où il possédoit des mines d'or, se
hâta de prévenir son arrivée, & il
offrit des conditions si avantageuses
aux assiégés qui n'espéroient pas sitôt
du secours, qu'ils se rendirent. Thu-
cydide arriva le soir même à Eione ;
& s'il eût manqué à s'y rendre ce jour-
là, Brasidas s'en seroit rendu maître
le lendemain dès le point du jour.
Quoique Thucydide eût fait toute la
diligence possible, cependant les
Athéniens lui imputèrent la prise
d'Amphipolis, & le condamnèrent à
l'exil.

La perte de cette place leur fut fort
sensible, tant parce qu'ils en tiroient
de grands revenus & du bois à faire
des navires, que parce que c'étoit une

DARIUS

porte pour entrer dans la Thrace. Ils craignoient une revolte générale des alliés qu'ils avoient dans ce quartier-là, d'autant plus que Brasidas témoignoit beaucoup de modération & d'équité, & ne cessoit de publier qu'il venoit pour affranchir le pays. Il déclaroit aux peuples qu'à son départ de Sparte il avoit prêté serment devant les Magistrats de laisser libres tous ceux qui entreroient dans leur alliance, & qu'il mériteroit d'être regardé comme le dernier des hommes, s'il se servoit de la religion du serment pour tendre un piège à leur crédulité.

» Car, selon lui, une tromperie pal-
» liée d'un prétexte spécieux desho-
» nore infiniment plus les personnes
» constituées en dignité, qu'une vio-
» lence ouverte: parce que l'une est
» l'effet de la puissance que la fortune
» nous a mise en main, & l'autre
» n'est fondée que sur la trahison &
» la perfidie, qui sont les pestes de la
» société humaine. Or je rendrois,
» disoit-il, un bien mauvais service à
» ma patrie, outre que je la deshono-
» rerois pour toujours, si en lui pro-
» curant d'abord quelques légers
» avantages, je lui faisois perdre la

réputation de justice & de fidélité à « **NOTHUS.**
garder sa parole, qui la rend beau-
coup plus puissante que toutes ses «
forces réunies ensemble, parce «
qu'elle lui attire l'estime & la con- «
fiance des peuples. « C'est sur ces prin-
cipes d'honneur & d'équité que Brasi-
das régla toujours sa conduite, per-
suadé que le rempart le plus sûr d'un
Etat, est la justice, la modération, la
bonne foi, & l'assurance où sont les
voisins & les alliés qu'on est incapable
d'usurper leurs terres, ou de les vou-
loir dépouiller de leur liberté. Par cet-
te conduite il enleva aux ennemis un
grand nombre de leurs alliés.

Les Athéniens, commandés par Dé- *Thucyd. lib.*
mosthène & Hippocrate, étoient en- *4. pag. 211.*
trés en Beotie, dans l'espérance que *319.*
plusieurs villes embrasseroient leur
parti dès qu'ils se montreroient. Les
Thebains marchèrent à leur rencon-
tre près de Délie. Il s'y donna un com-
bat assez considérable. Les Athéniens
furent défaits, & mis en fuite. Socra-
te se trouva à cette action, & Lachès *Plat. in La-*
qui l'y accompagna, lui rend ce té- *chet. p. 181.*
moignage dans Platon, que si tous les *In conviv. p.*
autres avoient fait leur devoir comme *221.*
lui, Athènes n'auroit pas reçu cet *Plut. in*
Alcib. p. 295.

DARIUS

échec à Délie. Il fut entraîné dans la fuite avec les autres : il étoit à pié. Alcibiade l'ayant aperçu de dessus son cheval, s'approcha de lui, & ne le quitta plus, le défendant avec courage contre les ennemis qui le poursuivoient.

Après la bataille les vainqueurs assiégèrent la ville. Entre les autres machines qu'ils dressèrent pour la battre, ils en emploierent une fort extraordinaire. C'étoit une longue pièce de bois coupée en deux, puis creusée & rejointe, de sorte qu'elle ressembloit assez à une flute. A l'un des bouts étoit attaché un long tuyau de fer où pendoit une chaudière, si bien qu'en soufflant avec de grands soufflets à l'autre bout de la pièce de bois, le vent porté de là dans le tuyau allumoit un grand brasier qui étoit dans la chaudière avec de la poix & du soufre. Cette machine, apportée sur des chariots jusqu'au rempart, à l'endroit où il étoit revêtu de pieux & de fascines, causa un si grand embrasement, que le rempart étant aussi-tôt abandonné, & la palissade consumée, il fut aisé de prendre la ville.

§. III. *Trêve d'un an entre les deux peuples. Mort de Cléon & de Brasidas. Traité de paix conclu entre les Athéniens & les Lacédémoniens pour cinquante ans.* NOTHUS.

IX. & X. années de la guerre.

IL Y AVOIT à peu près égalité de pertes & d'avantages de côté & d'autre, & les deux peuples commençoient à se lasser d'une guerre qui leur cou-
toit de grands frais, & ne leur procuroit aucun bien réel. Il se fit donc une trêve d'un an entre les Athéniens & les Lacédémoniens. Les premiers s'y résolurent pour arrêter les progrès de Brasidas, pour donner ordre à la sûreté de leurs places, & pour passer de là à une paix générale si la chose leur étoit avantageuse. Les autres s'y portèrent pour leur en faire naître l'envie par la douceur du repos, & pour retirer d'entre leurs mains ceux de leurs citoyens que les Athéniens avoient fait prisonniers dans l'île de Sphaétérie; ce qu'ils ne pouvoient espérer absolument, si Brasidas poussoit plus loin ses conquêtes. Ce Général n'apprit qu'avec une extrême douleur la nouvelle d'un accommodement.

Thucyd. lib.

4. pag. 328.

333. Diad. lib.

12. pag. 120.

AN. M. 3587.

AV. J. C. 423.

DARIUS

ment qui l'arrêtoit au milieu de sa course , & qui déconcertoit tous ses projets. Il ne put même se résoudre à abandonner la ville de Scione , qu'il avoit prise deux jours après le traité , mais sans en avoir connoissance. Il alla encore plus loin , & ne fit point difficulté de recevoir Mende , petite ville voisine de Scione , qui se rendit à lui à l'exemple de la première , ce qui étoit contrevenir manifestement au traité : mais il prétendoit avoir d'autres contraventions à reprocher aux Athéniens.

On juge bien que ceux-ci ne souffrirent pas tranquillement une telle conduite. Cléon , dans toutes les assemblées animoit les esprits , & souffloit le feu de la guerre. L'heureux succès de l'expédition contre Sphactérie avoit infiniment augmenté son crédit parmi le peuple , & lui avoit inspiré une fierté insupportable , & une audace que l'on ne pouvoit plus réprimer. Il avoit une sorte d'éloquence véhémence , impétueuse , emportée , qui entraînoit les esprits , moins par la force des raisons , que par la hardiesse & la violence de son stile & de sa déclamation. Ce fut lui

*Plut. in vit.
Nicias. p. 528.*

qui le premier donna l'exemple de **NOTHUS** : crier à pleine tête dans les assemblées, — où jusques-là on avoit gardé beaucoup de décence & de modération, de rejeter son vêtement en arrière pour donner plus de liberté à son geste, de se fraper les cuisses, d'aller & de venir sur la tribune en haranguant. En un mot, il introduisit parmi les Orateurs, & parmi tous ceux qui se mêloient du gouvernement, une licence effrénée, & un mépris de toutes les bienséances : licence & mépris qui produisirent bientôt un bouleversement général & une horrible confusion dans les affaires.

Ainsi deux hommes de part & d'autre, s'opposoient à la paix de la Grèce, & y mettoient un obstacle insurmontable, mais par des voies bien différentes : c'étoient Cléon & Brasidas. Le premier, parce que la guerre couvroit ses vices & sa méchanceté ; le second, parce qu'elle donnoit un nouveau lustre à sa vertu. Car, en effet, elle fournissoit à l'un des occasions de commettre de grandes injustices, & à l'autre celles de faire de grandes & de belles actions. Leur mort, qui suivit de près, donna lieu à un nouvel accommodement,

DARIUS

Les Athéniens avoient mis Cléon à la tête des troupes pour aller contre Brasidas, & pour réduire les villes qui s'étoient révoltées. Amphipolis étoit celle qui leur tenoit le plus au cœur : Brasidas s'y jeta pour la défendre. Cléon avoit mandé à Perdicas roi de Macédoine, & au Roi des Odomantes de lui amener des troupes le plutôt, & dans le plus grand nombre qu'ils pourroient. Il les attendoit, & avoit résolu de ne pas marcher d'abord à l'ennemi. Mais comme il vit ses soldats, qui l'avoient suivi à regret & malgré eux, se lasser de demeurer si longtems oisifs, & comparer sa lâcheté & son peu d'expérience avec la valeur & l'habileté de Brasidas, il ne put souffrir ni leur mépris, ni leurs plaintes, & s'estimant grand Capitaine par la prise de Spactérie, où il avoit si bien réussi, il crut qu'il en arriveroit de même d'Amphipolis. Il s'en approcha donc, simplement, disoit-il, pour reconnoître la place, en attendant que toutes ses forces fussent arrivées; non qu'il crut en avoir besoin pour la prendre, ou qu'il se défiât de l'événement, car il se tenoit assuré que per-

sonne

*Thucyd. lib.**5. pag. 342.**251.**Diod. lib. 12.**7. 121, 122.*

sonne n'oseroit lui tenir tête, mais **NOTHUS.**

pour être en état de l'investir de tous côtés, & d'y faire donner l'assaut. Il se vint donc camper devant la place, considérant à loisir sa situation, & persuadé qu'il pourroit se retirer quand il voudroit sans combat. Car personne ne sortoit, ni ne paroissoit sur les murailles, & toutes les portes de la ville étoient fermées, de sorte qu'il commençoit à se repentir de n'avoir pas amené les machines, croiant qu'il ne lui manquoit que cela pour s'en rendre maître. Brasidas, qui connoissoit parfaitement son caractère, affectoit exprès une sorte de réserve & de crainte, pour amorcer sa témérité, & augmenter la bonne opinion qu'il avoit de lui-même : d'ailleurs il savoit que Cléon avoit amené avec lui l'élite des troupes d'Athènes, & la fleur de celles de Lemnos & d'Imbros. En effet, Cléon, plein de mépris pour un ennemi qui n'osoit paroître devant lui, & se tenoit lâchement renfermé dans sa place, alloit de côté & d'autre la tête levée, sans prendre aucune précaution, & sans garder aucune discipline parmi ses troupes. Brasidas, dont la vûe

DARIUS. étoit de l'attaquer à l'improviste avant que toutes ses forces fussent arrivées, crut que le moment en étoit venu. Il avoit pris toutes les mesures & donné tous les ordres nécessaires. Il fit donc brusquement une sortie, qui étonna & déconcerta les Athéniens. L'aîle gauche se détacha aussitôt du gros pour se sauver à la course. Brasidas tourna toutes ses forces contre l'aîle droite, où il trouva beaucoup de résistance. Aiant été blessé, & mis hors de combat, ses gens l'emportèrent, sans que les Athéniens s'en aperçussent. Pour Cléon, comme il n'avoit pas résolu de combattre, il prit la fuite, & fut tué par un soldat qui le rencontra. Les troupes qu'il commandoit se défendirent pendant quelque tems, & soutinrent deux ou trois attaques sans lâcher le pié, mais enfin elles furent mises en déroute, & tout plia. Brasidas fut porté dans la ville, où il ne survécut que de quelques momens à sa victoire.

Toute l'armée de retour de la poursuite, après avoir dépouillé les morts, dressa un trophée. Ensuite tous les alliés en armes firent des funérailles publiques à Brasidas, & les habitans

d'Amphipolis lui rendirent depuis **NOTHUS**.
 chaque année des honneurs funébres
 comme à un Héros, avec des jeux,
 des combats, & des sacrifices. Ils le
 confidéroient comme leur fondateur,
 & pour lui en mieux assurer le titre,
 ils démolirent tous les monumens de
 celui qui l'avoit été en effet, pour ne
 pas paroître devoir leur établisse-
 ment à un Athénien, & pour faire
 mieux leur cour à Lacédémone, d'où
 ils attendoient tout leur salut. Les
 Athéniens, après avoir emporté leurs
 morts du consentement du vainqueur,
 retournèrent à Athènes, tandis que
 les autres donnèrent ordre aux affai-
 res d'Amphipolis.

*Agnou;
Athenien.*

On raporte une parole de la mere
 de Brasidas, qui marque bien le ca-
 ractère Spartain. Comme on louoit
 en sa présence les grandes qualités
 & les grandes actions de son fils, &
 qu'on l'élevoit sans exception & sans
 comparaison au dessus de tous les
 autres: *Vous vous trompez*, dit-elle,
mon fils étoit brave, mais Sparte a plu-
sieurs citoyens qui le sont encore plus
que lui. Cette générosité d'une mere
 qui préfère la gloire de l'Etat à celle
 de son fils, fut admirée, & ne demeu-

Diad. p. 122.

DARIUS. ra point sans récompense. Les Ephores lui rendirent des honneurs publics.

Thucyd. lib. 5. pag. 351-354. Après cette dernière action, où les deux hommes qui étoient le plus grand obstacle à la paix moururent, les esprits se trouvèrent disposés à un accommodement, & la guerre fut comme suspendue de part & d'autre. Les Athéniens, depuis la perte des deux batailles de Délie & d'Amphipolis, avoient beaucoup rabatu de leur fierté, & étoient détrompés de la haute opinion qu'ils avoient conçue de leurs forces, qui leur avoit fait refuser les offres avantageuses de leurs ennemis. D'ailleurs, ils appréhendoient la revolte de leurs alliés, qui découragés par leurs pertes pourroient les abandonner, comme plusieurs avoient déjà fait. Ces réflexions leur inspirèrent un vif repentir de n'avoir pas traité après les avantages de Pyle. Les Lacédémoniens de leur côté ne se flatoient plus de l'espérance de les pouvoir ruiner en ravageant leur pays, & ils étoient abbattus & effraïés de la perte qu'ils avoient soufferte dans l'Île, la plus grande qu'ils eussent faite jusqu'a-

lors. Ils considéroient encore, que **NOTHUS.**
 leur pays étoit ravagé par les gar-
 nisons de Pyle & de Cythère; que
 leurs esclaves désertoient, & qu'ils
 avoient à appréhender une plus gran-
 de revolte; & que la trêve qu'ils
 avoient faite avec ceux d'Argos étant
 près d'expirer, ils avoient lieu de
 craindre d'être abandonnés de quel-
 ques alliés du Péloponnèse, comme
 ils le furent en effet. Tous ces mo-
 tifs, joints au desir de recouvrer leurs
 prisonniers, dont la plupart étoient
 des plus considérables citoiens de La-
 cédémone, leur faisoient souhaiter la
 paix.

Ceux qui s'y portèrent avec le plus
 d'empressement, & qui y avoient le
 plus d'intérêt, étoient les deux prin-
 cipaux des deux Etats, Plistonax Roi
 de Lacédémone, & Nicias Général
 des Athéniens. Le premier étoit re-
 venu depuis peu de son exil, où il
 avoit été condamné parce qu'on le
 soupçonnoit d'avoir reçu de l'argent
 pour retirer ses troupes du pays d'A-
 thènes; & l'on imputoit à cette re-
 traite précipitée plusieurs malheurs
 dont elle avoit été suivie. On l'accu-
 soit aussi d'avoir corrompu à force

DARIUS de présens la Prêtresse de Delphes, qui avoit ordonné de la part du Dieu de le rappeler d'exil. Il desiroit donc la paix pour éviter tous ces reproches, que les maux continuels de la guerre renouvelloient chaque jour. Pour Nicias, le plus heureux Capitaine de son tems, il craignoit de ternir sa gloire par quelque infortune, & il étoit bien aise de jouir en repos des fruits de la paix, & d'en faire jouir son pays.

Thucyd. lib. 5. pag. 354. Plut. in Nic. pag. 528. 529. Les deux peuples commencèrent d'abord par faire une suspension d'armes d'un an, pendant laquelle se trouvant tous les jours les uns avec les autres, & goûtant les douceurs de la sûreté & du repos, & les charmes de pouvoir être en commerce avec leurs amis & avec les étrangers, ils desiroient avec passion de mener une vie douce & tranquille, loin des allarmes de la guerre, & des horreurs du carnage & du sang. Ils entendoient avec de grandes démonstrations de joie les Chœurs de leurs Tragédies chanter, *Que les araignées fassent désormais leurs toiles sur nos lances & sur nos boucliers !* Et ils se ressouvenoient avec plaisir de celui qui a dit, *Que ceux qui s'en-*

dorment dans le sein de la paix , ne sont NÔTHUS, point réveillés en sursaut par le son des trompettes , & que leur sommeil n'est dissipé que par le paisible chant du coq.

Tout l'hiver se passa en pour-par- Diod. lib. 12. pag. 122.
 lers & en entrevûes , dans lesquelles
 chacun proposoit ses droits , & fai-
 soit valoir ses prétentions. Enfin la
 paix fut conclue & signée pour cin-
 quante ans , & l'un des principaux
 articles fut qu'on se rendroit réci-
 proquement les villes & les prison-
 niers. Ce traité fut fait dix ans entiers
 & quelques jours depuis la première
 déclaration de la guerre. Les Béo-
 tiens & les Corinthiens en furent fort
 mécontents , & firent tout ce qu'ils
 purent pour exciter de nouveaux
 troubles. Mais Nicias persuada aux Thucyd. lib. 5. pag. 358.
 Athéniens & aux Lacédémoniens d'a-
 jouter comme un dernier sceau & un
 dernier lien à cette paix , en faisant
 ensemble une ligue offensive & dé-
 fensive , qui les rendroit plus redou-
 tables à ceux qui voudroient se sépa-
 rer d'eux , & plus sûrs les uns des au-
 tres. En conséquence de ce traité , les
 Athéniens rendirent enfin les prison-
 niers qu'ils avoient fait dans l'île de
 Sphactérie.

DARIUS

§. IV. *Alcibiade commence à paroître. Son caractère. Opposé en tout à Nicias, il fait rompre le traité que Nicias avoit conclu. L'exil d'Hyperbolus met fin à l'Ostracisme.*

*In Alcib. p.
892-194.*

ALCIBIADE commençoit alors à se pousser dans le gouvernement, & à paroître dans les assemblées. Socrate s'étoit attaché à lui depuis plusieurs années, & avoit enrichi son esprit d'une infinité de belles connoissances.

La liaison intime d'Alcibiade avec Socrate, est une des particularités de sa vie les plus remarquables. Ce Philosophe découvrant en lui d'excellentes qualités, que l'éclat de sa beauté rendoit encore plus aimables, s'appliqua avec un soin incroiable à cultiver une plante si précieuse, dans la crainte qu'étant négligée, elle ne se flétrît, & ne dégénéraât absolument. En effet, tout étoit danger pour lui : la noblesse de sa naissance, la grandeur de ses richesses, la considération où étoit sa famille, le crédit de ses tuteurs, ses qualités personnelles, sa rare beauté, & plus que tout cela encore les flateris & les complaisan-

ces de tous ceux qui l'approchoient. **NOTHUS.**

Il semble, dit Plutarque, que la fortune l'avoit environné & investi de tous ces prétendus avantages comme d'autant de barrières & de remparts, pour le rendre inaccessible & invulnérable aux traits de la philosophie, à ces traits salutaires qui pénètrent jusqu'au vif, & qui laissent dans le cœur l'éguillon de la vertu & de la solide gloire. Mais ce furent ces obstacles même qui redoublèrent le zèle de Socrate.

Quelques efforts qu'on fit pour détourner le jeune Athénien d'un commerce qui seul pouvoit l'arracher à tant de pièges, il s'y livra pleinement. Comme il avoit beaucoup d'esprit, il sentit tout le mérite de Socrate, & ne put résister aux attraits & aux charmes de son éloquence douce & insinuante, qui l'emportèrent pour lors sur ceux de la volupté. Disciple zélé d'un si habile maître, il le suivoit par tout, prenoit un singulier plaisir à sa conversation, goutoit extrêmement ses principes, recevoit ses leçons & même ses réprimandes avec une docilité merveilleuse, & étoit touché & attendri de ses dis-

DARIUS cours jusqu'à verser des larmes , & à ne pouvoir plus se souffrir lui-même , tant la force de la vérité étoit grande dans la bouche de Socrate , & tant elle lui faisoit apercevoir de difformité & de laideur dans les vices auxquels il s'abandonnoit.

Alcibiade , dans ces momens où il écoutoit Socrate , étoit tout autre , & l'on ne l'eût pas reconnu. Mais son caractère vif & fougueux , & son penchant naturel pour le plaisir , irrités encore & enflammés par les discours des jeunes gens , le replongeient bientôt dans ses premiers desordres , & l'arrachoit à son maître , qui ensuite étoit obligé de courir après lui comme après un esclave fugitif qui lui étoit échapé. Cette alternative de fuites & de retours , de bonnes résolutions & de rechutes dans ses vices , dura fort longtems , Socrate ne se rebutant point de sa légèreté , & se flattant toujours de l'espérance de le ramener à son devoir. Et ce fut là sans doute la source de ce mélange de bien & de mal qui parut toujours dans sa conduite , les instructions qu'il avoit reçues de son maître prenant quelquefois le dessus , & d'autres fois la

fougue de ses passions l'entraînant **NOTHUS.**
comme malgré lui dans des partis tout
opposés.

Cette liaison dura autant que leur vie, & ne fut pas exemte de soupçons. D'habiles * gens prétendent que ces soupçons, lorsqu'on les approfondit, disparoissent, & doivent être regardés comme l'effet de la malignité des ennemis de l'un & de l'autre. Nous avons dans un des dialogues de Platon un entretien de Socrate avec Alcibiade, fort propre à faire connoître le génie & le caractère de ce dernier, qui aura désormais une grande part dans les affaires de la république d'Athènes, & y jouera un grand rôle. J'en donnerai ici un extrait fort abrégé, & j'espère qu'on ne m'en saura pas mauvais gré.

Socrate, dans ce dialogue, s'en- *Plat. in Alcib. 1.*
tretien avec Alcibiade, qui étoit
actuellement sous la tutelle de Périclès. Il étoit encore tout jeune, & avoit été élevé de la manière dont l'étoient tous les Athéniens, c'est-à-dire qu'on l'avoit instruit dans les let-

* M. l'Abbé Fraguier | l'Académie des Belles-Lettres.
justifie Socrate dans une de ses dissertations. *Mém. de* | *trcs. Tom. 4. pag. 372.*

DARIUS

très, qu'on lui avoit appris à jouer des instrumens, & qu'on l'avoit formé à la lute, & aux autres exercices du corps. Il ne paroît pas que Périclès eût pris jusques-là beaucoup de soin de son éducation, (faute assez ordinaire aux plus grands hommes,) puisqu'il lui donna pour Gouverneur Zopyre, Thrace de nation, déjà fort vieux, celui de tous les esclaves de Périclès qui étoit le moins en état, & par son âge, & par son caractère, de former ce jeune Athénien. Aussi Socrate dit-il à Alcibiade, que s'il se comparoit avec les jeunes gens de Lacédémone, en qui l'on voioit un courage, une grandeur d'ame, un vif desir de la gloire, un amour du travail, accompagnés de douceur, de modestie, de tempérance, & d'un parfait assujettissement à la discipline de Sparte, il paroîtroit comme un enfant à leur égard. Cependant sa naissance, ses grands biens, ses alliances, le crédit de son tuteur, tout cela lui avoit extrêmement enflé l'esprit. Il étoit plein d'estime pour lui-même, & de mépris pour tous les autres. Il se préparoit à entrer dans le maniement des affaires publiques, &, à l'enten-

de parler , il ne se promettoit rien **NOTHUS.**
 moins que d'effacer la gloire & la ré-
 putation de Périclès même , & d'aller
 attaquer le Roi des Perses jusques sur
 son trône. Socrate le voiant donc tout
 près de monter dans la tribune aux
 harangues , pour donner conseil au
 peuple sur les affaires de l'Etat , lui
 démontre par plusieurs interroga-
 tions qu'il lui fait , & par ses propres
 réponses , qu'il ignore absolument
 les affaires dont il entreprend de par-
 ler, puisqu'il n'a pu les connoître par
 lui-même , & qu'il ne s'en est point
 fait instruire par d'autres. Après cet
 aveu tiré de sa propre bouche , il lui
 peint avec de vives couleurs le ridicu-
 le de sa conduite , & lui en fait tou-
 cher au doigt l'absurdité. Que pense-
 roit Amestris , dit Socrate , (c'étoit
 la mere d'Artaxerxe qui régnoit
 actuellement en Perse) si on lui disoit
 qu'il y a à Athènes un homme qui
 songe à déclarer la guerre à son fils ,
 & même à le détrôner. Elle s'imagi-
 nerait sans doute qu'on lui parle de
 quelque vieux Général , homme d'un
 courage intrépide , d'une rare sagesse,
 d'une expérience consommée , qui est
 maître d'assembler une armée nom-

DARIUS breuse pour la faire marcher à ses ordres, & qui de loin a pris toutes les mesures nécessaires pour un si grand dessein. Mais si elle apprenoit qu'il n'y a rien de tout cela, & qu'il s'agit d'un jeune homme qui à peine a atteint l'âge de vingt ans, qui est sans aucune connoissance des affaires publiques, sans aucun usage de la guerre, sans aucune autorité dans sa ville, & sans aucun crédit chez les alliés, pourroit-elle s'empêcher de rire de la folie & de l'extravagance d'une telle entreprise? Voila pourtant votre état & votre portrait, dit Socrate en s'adressant à Alcibiade; & malheureusement c'est celui de la plupart de ceux qui s'ingèrent dans le gouvernement. Il excepte néanmoins de ce nombre Périclès, dont le solide mérite & la grande réputation étoient le fruit de l'étude sérieuse qu'il avoit faite pendant un fort longtems de tout ce qui étoit capable de lui former l'esprit, & de le disposer au maniement des affaires publiques. Alcibiade ne put disconvenir que ce ne fût là son état: il en eut honte, & rougissant de se voir si pauvre & si dépourvu de mérite, il demanda ce qu'il falloit faire

pour en acquérir. Socrate, qui ne vouloit pas le décourager, lui dit, qu'à NOTHUS.
l'âge où il étoit, le mal n'étoit point
sans remède, & ne cessa dans la suite
de lui donner de sages conseils. Il eut
tout le loisir d'en profiter, puisqu'en-
tre le tems de cet entretien, & celui
où il commença à être employé dans
le gouvernement, il s'étoit passé plus
de vingt années.

Alcibiade avoit un caractère sou-
ple & flexible, propre à prendre tou-
tes les impressions que demandoit la
différente conjoncture des tems, se
portant avec la même facilité & la
même ardeur au bien & au mal, &
passant d'un excès à un autre tout
contraire presque sans intervalle, de
sorte qu'on lui appliquoit ce que dit
Homère du terroir d'Egypte, *Qu'il*
portoit beaucoup de drogues médecinales
très excellentes, & aussi beaucoup de
poisons. On pourroit dire de lui que ce
n'étoit point un homme seul, mais, *Quemvis ho-*
minem secum
attulit ad nos.
Juvenal.
si l'on osoit s'exprimer ainsi, un com-
posé de plusieurs hommes: sérieux,
enjoué: austère, affable; maître, im-
périeux & plein de hauteur, esclave
rampant & plein de bassesse; ami de
la vertu & des vertueux, livré au vice

DARIUS & aux méchans ; capable des plus pénibles fatigues & de la vie la plus dure , insatiable de délices & de volupté.

*Plus. in Alcibi.
pag. 195.*

On parloit beaucoup de ses desordres & de ses dérèglemens dans la ville , & il auroit fort souhaité faire cesser ces bruits , mais sans changer de vie , comme un mot de lui le fait entendre. Il avoit un chien d'une taille extraordinaire & d'une grande beauté , qu'il avoit acheté soixante & dix mines , * c'est-à-dire trois mille cinq cens livres. On voit que le goût pour les chiens est de vieille date. Il lui fit couper la queue , qui étoit justement ce qu'il avoit de plus beau. Ses amis lui en firent de grands reproches , & lui dirent que toute la ville murmuroit contre lui , & le blâmoit extrêmement d'avoir gâté un si beau chien. *Voilà ce que je demande* , reprit Alcibiade en riant. *Je veux que les Athéniens s'entretiennent du traitement que j'ai fait à mon chien , afin qu'ils ne parlent pas d'autre chose , & qu'ils ne disent pas pis de moi.*

*Τὸ φιλέω-
πον, & τὸ φιλέ-
ωτον.*

De toutes les passions qui paroif-

* La mine Attique valoit cent dragmes , & la dragme dix sels de nostre monnoie.

soient en lui, la plus marquée & la **NOTHUS.**
 plus vive étoit un esprit de domina-
 tion qui vouloit tout emporter de
 hauteur, & qui ne pouvoit souffrir ni
 supérieur ni égal. Quoique sa naissan-
 ce, & ses rares talens, lui ouvrirent
 une grande porte au gouvernement
 de la République, cependant il n'y
 avoit rien à quoi il aimât mieux de-
 voir le crédit & l'autorité qu'il desi-
 roit d'acquérir sur le peuple, qu'à la
 force de son éloquence, & à la grace
 persuasive de ses discours. C'est en
 quoi son intime liaison avec Socrate
 put lui être d'un grand secours.

*Plut. in Alcib. pag. 195.
196.*

Alcibiade, qui, du caractère dont
 nous venons de le marquer, n'étoit
 pas né pour le repos, avoit fait tous
 ses efforts pour traverser le traité qui
 venoit de se conclure entre les deux
 peuples : mais n'ayant pu y réussir, il
 travailla à en empêcher l'effet. Il étoit
 piqué contre les Lacédémoniens de
 ce qu'ils ne s'adressoient qu'à Nicias
 dont ils avoient une très grande opi-
 nion, & qu'au contraire ils paroïs-
 soient ne faire aucun cas de lui, quoi-
 que ses ancêtres eussent eu droit
 d'hospitalité avec eux.

Thucyd. lib. 5. pag. 368-378.

*Plut. in Alcib. pag. 197.
198.*

La première chose qu'il fit pour

DARIUS rompre la paix, c'est qu'ayant su que ceux d'Argos ne cherchoient qu'une occasion de se séparer des Spartiates, qu'ils craignoient autant qu'ils les haïssoient, il les flata secrètement de l'espérance que les Athéniens leur donneroient du secours, en leur faisant entendre qu'ils étoient prêts de rompre une paix qui leur étoit désavantageuse.

En effet les Lacédémoniens n'étoient pas fort attentifs à en observer religieusement les conditions, ayant fait alliance avec les peuples de la Béotie contre l'esprit & la teneur du traité, & n'ayant rendu aux Athéniens le fort de Panacte que démoli, & non pas fortifié & dans l'état où il étoit lors de la conclusion du traité, comme ils s'y étoient engagés. Alcibiade, qui vit les Athéniens extrêmement indignés de cette mauvaise foi, n'oublia rien pour les irriter davantage, & profitant de cette conjoncture pour pousser à bout Nicias, il souleva contre lui le peuple, en le rendant suspect de trop d'attachement aux Lacédémoniens, & formant contre lui des accusations qui ne manquoient pas tout-à-fait de vraisemblance,

quoique dans le fond elles fussent NOTHUS.
déstituées de vérité.

Cette nouvelle attaque déconcerta Nicias. Heureusement il arriva dans le moment même des ambassadeurs de Lacédémone avec plein pouvoir de terminer tous les différens. Aiant été introduits dans la Conseil, c'est-à-dire dans le Sénat, ils déduisirent leurs plaintes, & firent leurs demandes; & il n'y eut personne qui ne les trouvât très justes & très raisonnables. Le peuple devoit leur donner audience le lendemain. Alcibiade, qui craignoit le succès de cette assemblée, mit tout en œuvre pour obliger les ambassadeurs à entrer avec lui en conférence. Il leur représenta que le Conseil traitoit toujours avec beaucoup de modération & d'humanité ceux qui s'adressoient à lui, mais que le peuple étoit hautain & excessif dans ses prétentions. Que s'ils parloient de pleins pouvoirs, il ne manqueroit pas de s'en prévaloir, & les forceroit de lui accorder tout ce qui lui viendrait en tête. Au reste il leur promit de les aider de tout son crédit, pour leur faire rendre Pyle, pour empêcher l'alliance d'Argos, & pour

DARIUS faire renouveler la leur ; & il
 ——— confirma ces promesses par serment.
 Les ambassadeurs sortirent de cette
 conférence très contents , & pleins
 d'admiration pour la profonde politi-
 que & l'extrême habileté d'Alcibia-
 de , qu'ils regardoient comme un
 homme extraordinaire. Et en cela ils
 ne se trompoient point.

Le lendemain , le peuple étant as-
 semblé , les ambassadeurs furent in-
 troduits. Alcibiade leur demanda
 avec beaucoup de douceur le sujet
 de leur ambassade , & la nature de
 leurs pouvoirs. Ils répondirent d'a-
 bord qu'ils venoient proposer quel-
 que voie d'accommodement , mais
 qu'ils n'avoient pas le pouvoir de
 rien conclure. Sur cela Alcibiade s'é-
 leve & crie contr'eux , les traite de
 fourbes & de perfides , appelle le
 Conseil à témoin du discours qu'ils
 avoient tenu la veille , & exhorte le
 peuple à ne croire ni écouter des
 hommes qui mentoient si impudem-
 ment , & qui sur le même sujet di-
 soient aujourd'hui une chose , & de-
 main une autre.

On ne sauroit exprimer la surpri-
 se & le trouble des ambassadeurs, qui

se regardant l'un l'autre ne pouvoient **NOTHUS.**
 en croire ni leurs yeux ni leurs oreil-
 les sur ce qu'ils voioient & enten-
 doient. Nicias , qui ignoroit la ruse
 & la tromperie d'Alcibiade , ne pou-
 voit concevoir un changement si
 étrange , & se donnoit la torture
 pour en chercher la raison. Le peu-
 ple sur l'heure se mettoit en devoir
 de faire venir les ambassadeurs d'Ar-
 gos , pour conclure avec eux la ligue :
 mais , dans ce moment , un grand
 tremblement de terre vint au secours
 de Nicias , & rompit l'assemblée. Il
 obtint avec beaucoup de peine dans
 celle du lendemain une surseance ,
 jusqu'à ce qu'on eût envoyé des dé-
 putés à Lacédémone. Il fut mis à leur
 tête : mais il revint sans avoir rien
 fait. Les Athéniens se repentirent
 fort alors d'avoir renvoyé à sa per-
 suasion les prisonniers de l'Ile qui
 tenoient aux plus puissantes maisons
 de Sparte. Cependant , quelque gran-
 de que fût leur colére , ils ne se por-
 tèrent à aucun excès contre lui : ils
 élurent seulement Alcibiade pour
 Général , firent une ligue avec les
 Mantinéens & les Eléens qui avoient
 quitté le parti de Lacédémone , y joi-

DARIUS gnirent les Argiens, & envoièrent des troupes à Pyle faire le dégât dans la Laconie. Ainsi ils se replongèrent dans la guerre qu'ils avoient voulu éviter.

In Alcib. p.
198.

Plutarque, après le récit de l'intrigue d'Alcibiade, ajoute : » Per-
» sonne ne sauroit approuver le
» moien dont il se servit pour arriver
» à son but ; mais ce fut pourtant un
» coup de partie d'avoir désuni &
» ébranlé presque tout le Péloponné-
» se , & suscité en un seul jour tant
» d'ennemis aux Lacédémoniens. Il
me semble que c'est condamner bien
foiblement une fourberie & une per-
fidie aussi noires que celles-ci , dont
le succès le plus heureux ne peut cou-
vrir l'horreur, & qui ne peuvent être
assez détestées.

Plut. in Al-
cib. pag. 196.
197.

In Nic. pag.
530. 531.

Il y avoit à Athènes un citoyen ,
nommé Hyperbolus , fort méchant
homme , & que les poètes comiques
prenoient ordinairement pour l'objet
de leurs railleries & de leurs investi-
ves. Il s'étoit endurci à la mauvaise
réputation , & étoit devenu insensi-
ble à l'infamie par une extinction
entière de tout sentiment d'honneur,
qui ne peut être que l'effet d'une ame

desespérément livrée au vice. Cet **NOTHUS.**
 homme ne plaisoit à personne, mais
 le peuple ne laissoit pas de s'en ser-
 vir pour humilier ceux qui étoient
 élevés en dignité, & pour leur susci-
 ter des affaires. Deux citoyens parta-
 geoient alors à Athènes toute l'auto-
 rité, Nicias & Alcibiade. La vie peu
 réglée de celui-ci bleissoit les Athé-
 niens, outre qu'ils redoutoient son
 audace & sa fierté. D'un autre côté
 Nicias, en s'opposant toujours sans
 ménagement à leurs injustes desirs,
 & en les obligeant toujours de pren-
 dre les partis les plus utiles, leur étoit
 devenu très odieux. Il paroissoit, dans
 cette aliénation des esprits, que l'O-
 stracisme auroit lieu à l'égard de l'un
 ou de l'autre. Des deux partis qui do-
 minoient alors dans la ville, l'un des
 jeunes gens qui vouloient la guerre,
 l'autre des vieillards qui souhaitoient
 la paix, le premier s'efforçoit de faire
 tomber le ban sur Nicias, & l'autre
 de le détourner sur Alcibiade. Hy-
 perbolus, dont l'audace faisoit tout
 le mérite, dans l'espérance de succé-
 der au crédit de celui qui seroit chassé,
 se déclara contre eux, & il ne cessoit
 d'irriter le peuple contre l'un & con-

DARIUS

tre l'autre. Mais les deux faëtions s'é-
tant réunies, il fut lui-même banni,
& mit fin par son exil à l'Ostracisme,
qui parut avoir été flétri & deshonoré
en tombant sur un sujet si indigne : car
jusques-là il y avoit eu une sorte
d'honneur & de dignité dans cette
punition. Hyperbolus fut donc le
dernier qui fut condamné à ce ban,
comme Hipparque, proche parent
du Tyran Pisistrate, l'avoit souffert le
premier.

§. V. *Alcibiade engage les Athéniens
dans la guerre de Sicile.*

*Thucyd. lib.
8. pag. 350-
609.*

JE PASSE sous silence plusieurs évé-
nemens peu considérables, pour venir
au plus important de tous, qui est la
guerre de Sicile, à laquelle Alcibiade
sur tout déterminâ les Athéniens.

*Plut. in Al-
cib. pag. 198-
200.*

*In Nic. pag.
631.*

Il avoit pris un ascendant merveil-
leux sur les esprits, quoique pour-
tant il fût bien connu pour ce qu'il
étoit. Car ses grandes qualités étoient
jointes à des vices encore plus grands,
qu'il ne se mettoit point en peine de
dissimuler. Il vivoit plongé dans un
luxu prodigieux & dans une mollesse
qui deshonoroit la ville. Ce n'étoient
tous les jours que festins, que ré-
jouissance,

jouissances, que parties de plaisirs & de débauches. Il montrait peu de respect pour les coutumes du pays, & encore moins pour la religion & pour les dieux. Les gens sages & sensés, outre l'aversion que leur inspiroient tous ces dérèglements, craignoient extrêmement les suites de cette audace, de cette profusion, & de ce profond mépris des loix, qu'ils regardoient comme autant de moiens & de degrés pour arriver à la tyrannie.

Aristophane, dans une de ses comédies, marque admirablement par un seul vers la disposition du peuple à son égard : *Il le hait, dit-il, & ne se peut passer de lui.* En effet, les largesses dont Alcibiade combloit le peuple, la somptuosité des Jeux & des Spectacles qu'il lui donnoit, la magnificence des présens qu'il faisoit à la ville qui passé tout ce qu'on peut dire, la grace & la beauté de toute sa personne, son éloquence, sa force de corps, jointe au courage & à l'expérience, en un mot toutes ses grandes qualités faisoient que les Athéniens lui pardonnoient ses défauts, & les supportoient patiemment, tâchant toujours de les diminuer & de les couvrir sous des

NOTHUS.

Les Grenouilles.
les Act. 5.
Scene. 4.

DARIUS noms doux & favorables : car ils les appelloient des jeux, des gentillesſes, & des marques d'humanité & de bon naturel.

Timon le Miſanthrope , tout ſavage qu'il étoit, en jugea plus ſainement. L'ayant rencontré un jour comme il ſortoit de l'aſſemblée, très content d'avoir obtenu tout ce qu'il avoit demandé, & de ſe voir généralement honoré par le peuple qui le reconduiſoit en foule ; loin de l'éviter comme il évitoit tout le monde , il alla au devant de lui, & lui tendant amiablement la main, *Courage , mon fils , lui dit-il , tu fais fort bien de t'aggrandir & de t'élever : car c'eſt pour la ruine de tout ce peuple. La guerre de Sicile prouvera que Timon ne ſe trompoit pas.*

Dès le tems de Périclès , les Athéniens ſ'étoient mis en tête de conquérir la Sicile. Ce ſage conducteur fut toujours attentif a réfréner par ſa prudence cette folle ambition. Il leur répétoit ſouvent qu'en ſe tenant en repos, en ſ'appliquant avec ſoin à la marine , en ſe contentant de conſerver leurs conquêtes , & en ne précipitant point leur ville dans des entre-

prises hasardeuses, ils rendroient leur **NOTHUS.**

République florissante, & seroient
toujours au dessus de leurs ennemis.

L'autorité qu'il avoit prise sur les esprits fut bien capable de les empêcher pour lors de passer en Sicile, mais elle ne leur en fit pas perdre le desir, & ils tournèrent toujours les yeux de ce côté-là.

Quelque tems après la mort de Périclès, les Léontins, attaqués par ceux de Syracuse, avoient député à Athènes pour demander du secours. Ils étoient originaires de Cal-

*Diod. l. 12.
pag. 99.*

cide, colonie d'Athènes. Les Députés avoient à leur tête Gorgias, célèbre Rhéteur, qui passoit pour le plus éloquent homme de son tems. Son discours élégant, fleuri, & plein de figures brillantes qu'il mit le premier en usage, enleva les Athéniens, extrêmement sensibles aux beautés & aux charmes de l'éloquence. L'alliance fut conclue, & ils envoièrent des vaisseaux à Rhége pour secourir les Léontins. L'année suivante ils en envoièrent d'autres en plus grand nombre. Deux ans après ils envoièrent une nouvelle flotte un peu plus forte : mais les Siciliens aiant renoncé à leurs divisions par les conseils d'Her-

DARIUS mocrate, la flotte fut renvoyée, & les
Athéniens ne pouvant pardonner à
leurs Généraux de n'avoir pas con-
quis la Sicile, en exilèrent deux, Py-
thodore & Sophocle, & condanné-
rent le troisiéme, qui étoit Eurymé-
don, à une grosse amende, tant leur
prospérité les avoit aveuglés, en leur
persuadant que rien n'étoit capable
de leur résister. Ils firent encore de-
puis plusieurs tentatives, & sous pré-
texte d'envoyer de tems en tems des
secours d'armes & de troupes aux
villes opprimées ou maltraitées par
les Syracusains, ils s'ouvroient un
chemin pour les attaquer avec de plus
grandes forces.

Mais celui qui alluma le plus cette
ardeur, fut Alcibiade, en repaissant
le peuple de magnifiques espérances,
dont lui-même étoit sans cesse occu-
pé, ou, pour mieux dire, enivré.
Toutes les nuits dans ses songes il
prenoit Carthage, soumettoit l'Afri-
que, passoit de là en Italie, & se
rendoit maître du Péloponnèse en-
tier, regardant la Sicile, non com-
me le but & la fin de cette guerre,
mais comme le commencement & le
premier degré des exploits qu'il mé-

dit. Il avoit pour lui tous les citoyens, qui, sans rien approfondir, étoient enchantés des grandes espérances qu'il leur donnoit. On ne parloit plus par tout que de cette expédition. Les jeunes gens dans les lieux d'exercice, & les vieillards dans leurs boutiques & dans les endroits où ils s'assembloient pour causer, ne s'occupoient qu'à tracer la figure de la Sicile, & qu'à s'entretenir de la nature & de la qualité de la mer dont cette île est environnée, de la bonté de ses ports, & des plages qu'elle a du côté d'Afrique. Car, infatués par les discours d'Alcibiade, ils comptoient, comme lui, ne faire de la Sicile que leur place d'armes & leur arsenal, d'où ils partiroient pour aller conquérir Carthage, & se rendre maîtres de toute l'Afrique & de la mer jusqu'aux colonnes d'Hercule.

On dit que Socrate & Méthon l'astronome, ne se promettoient rien de bon de cette entreprise : l'un, inspiré, comme il vouloit le faire croire, par son esprit familier, qui ne manquoit jamais de l'avertir des malheurs dont il étoit menacé ; & l'autre, conduit par sa raison & son bon sens, qui lui

*Plut. in Alcibi. pag. 194.
In Nic. pag. 532.*

DARIUS montrant dans l'avenir ce qu'il avoit à craindre, le porta à contrefaire le fou, & à demander que, vû l'état malheureux où il se trouvoit, on lui laissât son fils, & qu'on le dispensât de porter les armes.

§. VI. Dénombrement des peuples qui ont habitè la Sicile.

AVANT que d'entrer dans la description de la guerre de Sicile, il ne sera pas hors de propos de tracer un plan du pays, & des peuples qui l'habitent : c'est par où Thucydide commence.

*Thucyd. lib.
6. p. 410-413.*

Les Lestrygons & les Cyclopes l'ont habitée les premiers*, mais on n'en connoit que ce qu'en disent les poètes. Les plus anciens après eux sont les Sicanien, qui se disoient naturels du pays, mais qu'on croit y être venus d'Espagne, des environs d'un fleuve de même nom, qu'ils donnèrent à la Sicile, appelée auparavant Trinacrie : ils furent depuis réduits à l'occident de l'Ile. Quelques Troiens, après l'embrasement de Troie, s'y vinrent établir près d'eux, & bâtirent Eryx, & * Egeste, prenant tous ensemble le nom d'Elymes ; & quelques habitans de la Phocide, au retour du

* Elle est appelée Ségeste par les Latins.

siège de Troie , se joignirent à eux. **NOTHUS.**
 Ceux qu'on nomme proprement Siciliens , vinrent d'Italie en grand nombre , & aiant remporté une grande victoire sur les Sicanien, les renfermèrent en un coin de l'Île environ trois cens ans avant la venue des Grecs ; & du tems de Thucydide ils habitoient encore le milieu des terres & le côté septentrional. C'est d'eux que l'île fut appelée la Sicile. Les Phéniciens se répandirent aussi le long de la côte pour la commodité du commerce , & dans les petites îles qui la bordent : mais depuis que les Grecs commencèrent à s'y établir, ils se retirèrent dans la contrée des Elymes pour être plus voisins de Carthage , & abandonnèrent le reste. C'est ainsi que les barbares se sont établis en Sicile.

Pour les Grecs, les premiers qui y AN. M. 3204.
AV. J. C. 710. passèrent , furent les Calcidiens de l'Eubée , sous la conduite de Théoclès qui fonda Naxe. L'année d'après, qui selon Denys d'Halicarnasse étoit la 3^e de la xvii^e Olympiade , Archias Corinthien fonda Syracuse. Au bout de sept ans les Calcidiens établirent Léonte & Catane, après avoir chassé

Pag. 121.

DARIUS

les habitans du pays , qui étoient les Siciliens. D'autres Grecs , partis de Mégare ville d'Achaïe à peu près dans le même tems , fondèrent Mégare appelée Hybléenne , ou simplement Hybla , du nom d'Hyblon un roi de Sicile , qui leur avoit donné retraite dans ses terres. On fait combien le miel d'Hybla étoit renommé chez les anciens. Les habitans de cette ville cent ans après bâtirent Sélinonte. Gèle , bâtie sur un fleuve du même nom quarante cinq ans après la fondation de Syracuse, fonda elle-même Agrigente environ cent huit ans depuis. Zancle , nommée depuis *Messana* ou *Messène* par Anaxilas tyran de Rhéges qui étoit de Messène ville du Péloponnèse , eut divers fondateurs , & en différens tems. Les Zancliens bâtirent la ville d'Himère ; les Syracusains , Acre , Casmène , & Camarine. Voila à peu près toutes les nations , tant grecques que barbares , qui ont pris des établissemens en Sicile.



§. VII. *Les Egestains implorent le secours d'Athènes. Nicias s'oppose en vain à la guerre de Sicile: Alcibiade l'emporte sur lui. Ils sont nommés tous deux Généraux avec Lamachus.* NOTHUS.

ATHÈNES étoit dans la disposition que nous avons marquée ci-dessus, lorsqu'il y arriva des ambassadeurs des Egestains, lesquels en qualité de leurs alliés, venoient implorer leur secours contre ceux de Sélinonte que Syracuse soutenoit. C'étoit la seizième année de la guerre du Péloponnèse. Ils représentoient entre autres choses, que, si on les abandonnoit, les Syracusains, après s'être emparé de leur ville, comme ils avoient fait de celle de Léonte, se rendroient maîtres de toute la Sicile, & ne manqueroient pas de secourir les Péloponnésiens qui étoient leurs fondateurs; & afin de leur être moins à charge, ils offroient de paier les troupes qu'on y enverroit. Les Athéniens, qui depuis longtemps n'attendoient qu'une occasion favorable pour se déclarer, dépêchèrent à Egeste pour s'informer de l'état des choses, & pour voir s'il y avoit assez d'ar-

AN. M. 3588.
AV. J. C. 416.
Thucyd. lib.
6. pag. 413.
415.
Diod. lib.
12. pag. 129.
130.
Plut. in Alcib. pag. 200.
In Nic. pag. 531.

DARIUS

gent dans l'épargne pour soutenir une si grande guerre. Les habitans de cette ville avoient eu l'adresse d'emprunter aux peuples voisins un grand nombre de vases d'or & d'argent, qui montoient à des sommes immenses, & ils en firent parade quand les Athéniens furent arrivés. Ces députés revinrent avec ceux d'Egeste, qui apportoiient soixante talens en lingots, pour le paiement d'un mois de soixante galères qu'ils demandoient, avec assurance de plus grandes sommes, qui étoient toutes prêtes, à ce qu'ils disoient, tant dans le trésor public, que dans les temples. Le peuple, touché de ces belles apparences, dont il ne se laissa point le tems d'approfondir la vérité, & séduit par le raport avantageux que lui firent ses députés dans la vûe de lui plaire, accorda sur le champ aux Egestains leur demande, & nomma Alcibiade, Nicias, & Larmachus pour commander la flotte, avec plein pouvoir, non seulement de secourir Egeste, & de rétablir Léonte, mais d'ordonner des affaires de la Sicile conformément aux intérêts de la République.

Nicias fut nommé un des Géné-

raux malgré lui : car, sans compter **NOTHUS.**
 les autres raisons qui lui faisoient
 craindre cet emploi, il le fuioit à cau-
 se d'Alcibiade qu'on lui donnoit pour
 collègue. Mais les Athéniens se pro-
 mettoient un plus heureux succès de
 cette guerre, s'ils n'en abandonnoient
 pas la conduite à Alcibiade seul, &
 s'ils tempéroient son ardeur & son
 audace par la sagesse & le phlegme de
 Nicias.

Cinq jours après, pour hâter l'exécution du Décret, & pourvoir à tout ce qui étoit nécessaire, il se tint une seconde assemblée. Nicias, qui avoit eu tout le loisir de faire de mûres réflexions sur l'affaire proposée, & qui en sentoît de plus en plus les dangers & les inconvéniens, se crut obligé en cette occasion de parler avec quelque force contre un projet, dont il prévoioit que les suites pouvoient être très funestes pour la République. « Il dit qu'il étoit étonnant qu'une affaire de l'importance dont étoit celle-ci, eût été pres- que aussitôt décidée, que mise en délibération. Que sans rien examiner, ni rien approfondir, on en croioit sur leur parole des étran- »

Thucyd. lib.
6. pag. 415-
418.

DARIUS

„ gers, à qui les promesses les plus
„ magnifiques ne coutoient rien, &
„ qui avoient intérêt de tout promettre pour se tirer du péril où ils
„ étoient. Quelle utilité après tout
„ peut-il en revenir à la République? Est-ce que nous n'avons pas
„ assez d'ennemis près de nous, sans
„ en aller chercher au loin? Est-il de
„ votre sagesse de hasarder ce que
„ vous possédez, sur l'espérance d'un
„ avantage incertain? de songer à
„ faire de nouvelles conquêtes, avant
„ que d'avoir assuré les anciennes?
„ de ne vous occuper que de votre
„ aggrandissement, & de négliger absolument le soin de votre propre
„ sûreté? Pouvez-vous compter sur
„ une trêve, que vous savez ne tenir
„ à rien, à laquelle vous ne pouvez
„ vous dissimuler qu'on a déjà donné
„ plusieurs atteintes, & que le moindre échec reçu de notre part peut
„ changer tout d'un coup en une guerre déclarée? Vous n'ignorez pas
„ quelle a toujours été & quelle est encore la disposition des Lacédémoniens à notre égard. Ils abhorrent notre gouvernement comme contraire au leur, ils voient avec

douleur & dépit l'empire de la Gré- « **NOTHUS.**
 ce entre nos mains , ils regardent «
 notre gloire comme un sujet de «
 honte & de confusion pour eux , «
 & il n'y a rien qu'ils ne soient prêts «
 de faire pour humilier & abaisser «
 une puissance qui leur fait ombrage , «
 & les tient toujours dans la crainte. Voila
 quels sont nos véritables ennemis , voila
 contre qui nous devons être en garde. Sera-
 t-il tems de faire ces réflexions ,
 lorsqu'après avoir partagé nos troupes ,
 & pendant que nous serons occupés
 ailleurs , & hors d'état de leur résister ,
 toutes les forces du Péloponnèse
 viendront fondre sur nous ? A peine
 commençons-nous à respirer des maux
 finis que la guerre & la peste nous
 ont causés , & voila que sans nécessité
 nous nous jettons nous-mêmes dans un
 péril encore plus grand. Si nous
 voulons porter nos armes au loin ,
 ne seroit-il pas plus expédient d'aller
 réduire les rebelles de Thrace ,
 & d'autres encore qui sont chancelans
 & mal assurés dans leur devoir ,
 que de courir au secours des Egé-
 stains qui nous doivent être

DARIUS

» assez indifférens ? & nous convient-
» il d'entreprendre la vengeance de
» leurs injures , tandis que nous ne
» témoignons aucun ressentiment des
» nôtres ? Laissons les Siciliens dans
» leur île vuider entr'eux leurs que-
» relles , sans nous y embarrasser.
» Que les Egestains se tirent sans
» nous d'une guerre , qu'ils ont en-
» treprise sans nous. Que si quel-
» qu'un de vos Généraux vous con-
» seille cette entreprise par ambition
» ou par intérêt , pour faire parade
» de ses magnifiques équipages , ou
» pour trouver dequoi fournir à ses
» dépenses , ne soyez pas assez im-
» prudens pour sacrifier les intérêts
» de la République aux siens , ou
» pour souffrir qu'il la ruine en se
» ruinant lui-même. Cette entreprise
» est trop grande , pour la remettre à
» la conduite d'un jeune homme.
» Souvenez-vous que c'est la pru-
» dence qui fait réussir les affaires ,
» & non la passion. Enfin il conclut
» en déclarant que son avis étoit de
» remettre de nouveau l'affaire en
» délibération , pour prévenir les
» suites funestes d'un conseil précipi-
» té.

Il étoit bien clair qu'il en vouloit **NOTHUS** à Alcibiade, & que c'étoit son luxe énorme qu'il avoit attaqué. En effet il le pouffoit à un excès incroyable, & faisoit des dépenses infinies, tant en chevaux qu'en meubles & en équipages, sans parler de la délicatesse & de la somptuosité de sa table. Il disputa le prix aux Jeux Olympiques avec sept attelages de chariots, ce qu'aucun particulier n'avoit jamais fait avant lui; & il y fut couronné plus d'une fois. Il avoit besoin de ressources extraordinaires pour soutenir un tel luxe; & comme l'avarice en est souvent une pour l'ambition, ce n'étoit point sans fondement qu'on le soupçonnoit de chercher dans la conquête de la Sicile, & dans celle de Carthage qu'il prétendoit lui faire succéder, autant à enrichir sa famille, qu'à la couvrir de gloire. On juge bien qu'il ne laissa pas le discours de Nicias sans réplique.

Ce n'est pas d'aujourd'hui, dit-il, « que le mérite a excité la jalousie, « & que la gloire a fait des envieux. « On me fait un crime, j'ose le dire, « de ce qui fait honneur à ma patrie, « & de ce qui devoit m'attirer des «

DARIUS

» louanges. L'éclat dans lequel je
» vis, les dépenses que je fais, sur
» tout dans les assemblées publiques,
» outre qu'elles sont justes & légitimes,
» relevent la gloire d'Athènes
» dans l'esprit des étrangers, & font
» voir qu'elle n'est point épuisée d'argent,
» comme nos ennemis se l'imaginent.
» Mais ce n'est point de quoi il s'agit maintenant.
» Qu'on juge de moi par mes actions, & non par
» d'injurieux préjugés. Est-ce un petit service
» que celui que j'ai rendu à la République,
» en faisant entrer dans son alliance en un seul jour
» les Eléens, les Mantinéens, les Argiens,
» c'est-à-dire les principales forces du Péloponnèse ?
» Servez-vous donc de la jeunesse & de la folie
» d'Alcibiade, puisque ses ennemis la nomment ainsi,
» aussi bien que de la sagesse & de l'expérience
» de Nicias, pour l'aggrandissement de votre empire,
» sans vous repentir, sur de vaines craintes,
» d'une entreprise publiquement résolue,
» qui peut vous être d'une gloire & d'une utilité infinies.
» Les villes de Sicile, lassées du gouvernement injuste
» & cruel de leurs Princes, &

encore plus de l'autorité tyrannique que Syracuse exerce sur elles, " **NOTHUS.**
 n'attendent qu'un moment favorable pour éclater, & sont prêtes
 d'ouvrir leurs portes à quiconque
 s'offrira pour rompre le joug sous
 lequel elles gémissent depuis lon-
 tems. Quand les Egestains, comme
 vos alliés, n'auroient pas droit à
 votre protection, la gloire d'Athé-
 nes devrait vous engager à les sou-
 tenir. C'est en secourant les oppri-
 més que les Etats s'aggrandissent,
 & non en demeurant oisifs. Dans
 la conjoncture où vous vous trou-
 vez, harceler les uns, arrêter les
 autres, donner de l'occupation à
 tous, & porter au loin vos armes,
 c'est l'unique moien d'abbattre le
 courage de vos ennemis, & de mon-
 trer que vous ne les craignez point.
 Athènes n'est point née pour le re-
 pos, & ce n'est point par cette voie
 que nos ancêtres l'ont portée au
 point de grandeur où nous la
 voions. Au reste que hazardez-vous
 dans l'entreprise dont il s'agit? Si
 elle réussit, elle vous rendra maî-
 tres de toute la Grèce: & si le suc-
 cès ne repond pas à vos desirs, vo-

DARIUS » tre flote vous laissera la liberté de
 » vous retirer quand il vous plaira. Il
 » est vrai que les Lacédémoniens peu-
 » vent entrer dans notre pays : mais,
 » outre que nous ne saurions l'empê-
 » cher quand nous n'irions pas en Si-
 » cile, nous demeurons toujours, maî-
 » gré eux, maîtres de la mer ; & c'est
 » ce qui ôte à nos ennemis toute espé-
 » rance de pouvoir jamais nous vain-
 » cre. Que les raisons de Nicias ne
 » vous touchent donc point. Elles ne
 » tendent qu'à semer de la division en-
 » tre les jeunes gens & les vieillards ,
 » qui ne peuvent rien les uns sans les
 » autres : puisque c'est de la prudence
 » & du courage, du conseil & de l'exé-
 » cution , que dépend le succès de
 » toutes les entreprises. Celle-ci ne
 » peut tourner qu'à votre gloire &
 » à votre avantage.

Les Athéniens , qui se trouvoient agréablement flatés par le discours d'Alcibiade , persistèrent dans leur premier avis. Nicias , de son côté , n'en changea pas non plus , mais il n'osa point insister davantage. Son caractère étoit naturellement doux & timide. Il n'avoit point , comme Périclès , cette éloquence vive & vé-

*Plut. in prac.
 de ger. rep. p.
 820.*

hémente, qui abbat, qui renverse, **NOTHUS**, qui entraîne tout. Aussi celui-ci, en plusieurs occasions & à différentes reprises, étoit toujours venu à bout d'arrêter la fougue du peuple qui avoit dès lors en tête l'expédition de Sicile, parce qu'il tint toujours ferme, & ne relâcha jamais les rênes de cette autorité & de cette espèce d'empire qu'il avoit su prendre sur les esprits : au lieu que ^a Nicias, parce qu'il agissoit & parloit mollement, loin d'attirer à lui le peuple, se laissa entraîner lui-même, par force à la vérité & malgré lui, mais enfin il se rendit, & accepta le commandement dans une guerre dont il prévoioit toutes les suites funestes.

C'est Plutarque qui fait cette réflexion dans le beau traité où, parlant des qualités que doit avoir un homme d'Etat, & qui est appelé au gouvernement, il montre combien le talent de la parole & de la fermeté d'ame lui sont nécessaires.

Nicias n'osant donc plus combattre de front Alcibiade, essaya de le faire par une voie indirecte, en y

^a Καθ' ἡμῶν λέγει χαλκὸν ἀποτρέπον τὴν δῆμον, ἐν
 λιγυρῶν τῶν λόγων περιώμῳ. — κατὰ χιτῶνα.

DARIUS

opposant beaucoup de difficultés ; tirées sur tout de la grandeur des dépenses nécessaires pour cette expédition. Il représenta , que puisqu'on étoit déterminé à la guerre , il faloit la faire d'une manière qui répondît à la haute réputation d'Athènes. Qu'une armée de mer ne suffisoit pas contre une puissance aussi formidable que celle des Syracusains & de leurs alliés : qu'il en faloit une de terre , composée d'une bonne infanterie & d'une bonne cavalerie , si l'on vouloit agir d'une manière digne d'un si grand dessein. Qu'outre la flotte, qui devoit les rendre maîtres de la mer , il faloit avoir un grand nombre de vaisseaux , pour porter continuellement des vivres à l'armée , qui ne pouvoit subsister autrement dans un pays ennemi. Qu'il étoit nécessaire de porter avec soi beaucoup d'argent, sans s'attendre à celui des Egestains, qui peut-être n'étoit prêt qu'en paroles , & pourroit bien leur manquer. Qu'il faloit faire réflexion sur la différence qui se trouveroit entre eux & leurs ennemis pour les commodités & les besoins de l'armée, les Syracusains étant dans leur pays , au milieu d'alliés puissans,

disposés par leur inclination & engagés par leur intérêt à les aider d'hommes, d'armes, de chevaux, de vivres ; au lieu que les Athéniens feroient la guerre dans un pays éloigné & ennemi, d'où en hiver ils ne pourroient recevoir des nouvelles qu'au bout de quatre mois, où tout leur seroit contraire, & où ils ne pourroient rien avoir qu'à la pointe de l'épée. Qu'il seroit honteux aux Athéniens d'être obligés de quitter leur entreprise, & de s'exposer au mépris & à la risée des ennemis, faute d'avoir pris d'abord les précautions que demandoit un projet si important. Que pour lui, il étoit déterminé à ne point partir, s'il n'étoit muni de tout ce qui étoit nécessaire, parce que de là dépendoit le salut de toute l'armée, & qu'il ne vouloit point le faire dépendre du caprice ou de la mauvaise foi des alliés.

Il avoit prétendu par ce discours rallentir l'ardeur du peuple : il ne fit que l'augmenter. On décerna sur le champ plein pouvoir aux Généraux *Diod. lib. 13. pag. 134.* de lever autant de troupes & d'équiper autant de galères qu'ils le jugeroient à propos ; & l'on travailla aussitôt à l'exécution tant à Athènes

DARIUS qu'ailleurs, avec une activité & un empressement qui ne se peut exprimer.

§. VIII. *On se prépare au départ. Sinistres présages. Mutilation des statues de Mercure. Alcibiade accusé ne peut obtenir qu'on juge l'affaire. Départ triomphant de la flotte.*

AN. M. 3589.

AV. J. C. 415.

Thucyd. lib.

6. pag. 428.

Plut. in Alcibi.

pag. 200.

201.

QUAND tout fut prêt pour le départ, & qu'on appareilloit déjà pour faire voile, il arriva plusieurs signes tristes & de mauvais augure, qui jettèrent du trouble & de l'inquiétude dans les esprits. ^a Les femmes célébroient alors les fêtes d'Adonis, pendant lesquelles toute la ville étoit en deuil, pleine d'images de morts & de convois funébres, & retentissoit des cris & des gémissemens des femmes qui les suivoient en se lamentant : ce qui fit craindre que cet armement si brillant & si magnifique ne perdît bientôt tout cet éclat, & ne ^{*} se flétrît comme une fleur.

^a Cette superstition avoit pénétré jusqu'au peuple de Dieu. Et ecce ibi mulieres sedebant, plangentes Adonidem. Ezech. 8. 14.

^{*} L'historien fait allusion

aux plantes & aux fleurs qu'on portoit dans cette cérémonie, & que l'on apelloit les jardins d'Adonis.

L'inquiétude fut encore augmen- NOTHUS.
 tée par un autre accident. Toutes les
 statues de Mercure, qu'on voioit de
 forme quarrée à l'entrée des maisons
 & des temples, se trouvèrent muti-
 lées en une nuit, & particulièrement
 au visage, sans qu'on pût decouvrir
 l'auteur de ce coup hardi, quoiqu'on
 promît de grandes récompenses à
 quiconque le dénonceroit. On ne
 put s'empêcher de prendre un évé-
 nement si extraordinaire, non seule-
 ment pour un sinistre présage, mais
 encore pour un complot de factieux
 qui avoient de mauvais desseins. De
 jeunes gens furent accusés d'avoir
 déjà fait quelque chose de semblable
 dans une partie de débauche, & d'a-
 voir contrefait en particulier les my-
 stères de Cérès & de Proserpine, aiant
 à leur tête Alcibiade, qui représen-
 toit le Grand-Prêtre. Il est d'une
 grande importance pour tous ceux
 qui sont en place & en autorité, de
 s'observer en tout, & de ne donner
 aucune prise sur eux à la critique la
 plus maligne. Ils doivent se souve-
 nir, dit Plutarque, que tous les yeux
 sont ouverts sur leur conduite, &
 toujours très clairoyans en ce point :

*Plut. in prac.
 de rep. p. 300.*

DARIUS

qu'on n'examine pas seulement leurs actions extérieures, mais qu'on pénétre jusques dans l'intérieur & dans les réduits les plus reculés de leur maison, pour y observer leurs conversations, leurs repas, leurs divertissemens, & ce qui s'y passe de plus secret & de plus caché. C'est cette crainte des yeux perçans du peuple qui tenoit Thémistocle & Périclès dans une circonspection continuelle, & qui les obligeoit à s'interdire la plupart des plaisirs que les autres s'accordoient.

Pour Alcibiade, il ne savoit ce que c'étoit que de se contraindre. Aussi, comme on le connoissoit, on n'eut pas de peine à croire qu'il pouvoit bien avoir eu quelque part à ce qui venoit d'arriver. Son luxe, son libertinage, son irréligion donnoient beaucoup de vraisemblance à cette accusation, & son dénonciateur ne craignit point de se nommer. La constance d'Alcibiade ne laissa pas d'être ébranlée par ce coup : mais voyant que les soldats & les matelots déclaroient qu'ils n'alloient à cette guerre si éloignée & à cette expédition d'outre-mer que pour l'amour d'Alcibiade,

d'Alcibiade, & que si on lui faisoit NOTHUS.
le moindre tort ils se retireroient sur
l'heure même, il reprit courage, &
se présenta à jour nommé pour se dé-
fendre. Ses ennemis, sous prétexte
que le départ de la flotte pressoit, fi-
rent sur seoir le jugement. Il eut beau
demander qu'on lui fît son procès s'il
étoit coupable, sans attendre qu'il
fût absent pour le perdre; & repré-
senter qu'il y avoit une dureté & une
injustice criante à l'obliger de partir
pour une guerre si importante sans
éclaircir des accusations & des calom-
nies si atroces, qui le tiendroient dans
des inquiétudes & dans des craintes
continuelles: il ne put rien obtenir
du peuple, & le départ fut ordonné.

L'armée se prépara donc à mettre
à la voile, après avoir donné le ren-
dez-vous à Corcyre à la plupart des
alliés & des vaisseaux qui portoient
les vivres & les équipages. Tout ce
qu'il y avoit de citoyens ou d'étran-
gers à Athènes se rendit dès le point
du jour au port de Pyrée. Les pre-
miers conduisoient leurs enfans, leurs
parens, leurs amis, leurs camarades,
avec une joie mêlée de quelque tri-
stesse; voyant partir pour une expé-

Thucyd. p.

430-432.

Diod. l. 13.

pag. 135.

DARIUS

dition éloignée & pleine de périls ce qu'ils avoient de plus cher au monde, sans savoir si jamais ils les reverroient ; mais cependant pleins d'espérance que cette expédition auroit un succès heureux. Les étrangers étoient accourus pour jouir d'un spectacle bien digne de leur curiosité. Car jamais appareil de guerre d'une seule ville n'avoit approché de celui-ci. Les armées navales qu'on envoya contre Epidaure & contre Potidée, étoient bien aussi grandes pour le nombre des soldats & des navires : mais elles n'étoient pas si magnifiques, ni le voiage si grand, ni l'entreprise si importante. On voioit ici deux armées, l'une de terre & l'autre de mer, équipées avec grand soin, aux dépens des particuliers & du public, de tout ce qui leur étoit nécessaire, à cause de la longueur du chemin, & de la durée de la guerre. Il y avoit cent galères que la ville fournissoit vuides, savoir soixante légères, & quarante pour porter les soldats pesamment armés. Chaque homme de mer recevoit par jour une dragme de paye, c'est-à-dire dix sols, sans ce que les Capitaines

de navires donnoient en particulier **NOTHUS.**
 aux * rameurs du premier rang. Ajoutez à cela la pompe & la magnificence de l'appareil, où ils avoient essayé à l'envi de se surpasser les uns les autres, & le soin que chacun avoit pris de rendre son vaisseau le plus léger aussi bien que le plus lesté. Je ne parle point du choix des soldats qui étoient l'élite d'Athènes, ni de leur émulation pour ce qui concernoit la beauté des armes & de l'équipage, non plus que de celle des Officiers qui avoient fait une dépense considérable pour se distinguer des autres, & se faire valoir dans l'esprit des étrangers: de sorte que ce spectacle ressembloit plutôt à un tournoi où l'on étale tout ce qu'il y a de plus magnifique, qu'à une expédition de guerre & à un appareil militaire. Mais la hardiesse & la grandeur du dessein en surpassoient encore les frais & la pompe.

Quand les vaisseaux furent chargés, & les troupes embarquées, la trompette aiant sonné, on fit des

* On les appelloit *Θεσπιοί*. Ils avoient des rames plus longues, & par conséquent plus de peine à ramer que les autres.

DARIUS

vœux solennels pour le départ ; on emplit par tout des coupes d'or & d'argent, on fit les effusions accoutumées, avec les acclamations du peuple qui bordoit le rivage, & qui levoit les mains vers le ciel pour souhaiter à leurs concitoyens un voyage heureux & un succès favorable. Après l'hymne chantée, & les cérémonies achevées, les vaisseaux défilèrent l'un après l'autre du port, puis essayèrent à l'envi de se dévan- cer, jusqu'à ce que toute la flotte se réunit à Egine. De là on tira vers Corcyre, où l'armée des alliées s'assembloit avec le reste des navires.

§. IX. *Allarme de Syracuse. La flotte Athénienne arrive en Sicile.*

Thucyd. lib.
6. pag. 432.
445.
Diod. lib. 13.
pag. 135. 136.

CETTE nouvelle aiant été portée de tous côtés à Syracuse, on n'en voulut rien croire d'abord, tant la chose paroissoit hors de toute vraisemblance. Mais comme elle se confirmoit de jour à autre, on songea sérieusement aux préparatifs de la guerre, & l'on dépêcha par toute l'île pour demander du secours aux uns, & en porter aux autres. On mit aussi garnison dans les châteaux &

dans les forts qui étoient à la campagne, on fit la revûe tant des chevaux que des soldats, on examina ce qu'il y avoit d'armes dans les magazins, & l'on donna ordre à tout, comme si l'ennemi eût été présent.

Cependant la flotte, partagée en trois escadres chacune sous son Général, mit à la voile. Elle étoit composée de cent trente six vaisseaux, dont cent étoient d'Athènes, & le reste des alliés. Il y avoit sur ces vaisseaux cinq mille soldats pesamment armés, dont deux mille deux cents étoient citoyens d'Athènes, savoir quinze cents du nombre de ceux qui avoient des biens en fonds, & sept cents * qui n'en avoient point, mais qui étoient également citoyens : les alliés composoient le reste. Pour l'infanterie légère, il y avoit quatre-vingts archers de Crète avec quatre cents autres, sept cents frondeurs de Rhode, & six-vingts bannis de Mégare. Il n'y avoit qu'une compagnie de cavalerie de trente maîtres, qui s'étoit embarquée sur un vaisseau propre à porter des chevaux. La flotte & les troupes furent beaucoup augmentées dans la suite. Trente vais-

* On les appelle *thètes*.

DARIUS

seaux menoient les vivres & ceux qui avoient le soin de les apprêter, avec des maçons & des charpentiers, & leurs outils; le tout suivi de cent barques pour le service, sans compter les vaisseaux marchands qui étoient en grand nombre. Tout cela partit ensemble de Corcyre. Aiant été assez mal reçus par ceux de Tarente & de Locres, ils cinglèrent vers Rhége; où ils s'arrêtèrent quelque tems. Les Athéniens pressoient ceux de Rhége de secourir les Léontins, originaires comme eux de Calcide. Mais ils répondirent qu'ils demeureroient neutres, & n'agiroyent que de concert avec le reste de l'Italie. Là on délibéra sur la manière dont il falloit conduire cette guerre, & l'on y attendit les vaisseaux qu'on avoit envoyés à la découverte pour savoir où l'on pourroit aborder, & si l'argent des Egétiens étoit prêt. Etant de retour, ils raportèrent qu'il n'y avoit que trente talens dans l'épargne. Nicias l'avoit bien prévu, mais il avoit trouvé les oreilles fermées à tous les salutaires conseils.

*Plut. in Nic.
pag. 532.*

Il ne manqua pas, sur cette nouvelle, de faire valoir ses anciens rai-

sonnemens, de montrer le tort qu'on **NOTHUS.**
 avoit eu de s'embarquer dans cette
 guerre, & d'exagérer les suites fune-
 stes qu'on en devoit attendre : en
 quoi il se conduisoit en homme peu
 sage & peu sensé. Il avoit eu grande
 raison de s'y opposer d'abord, & de
 faire tous ses efforts pour rompre ce
 malheureux projet. Mais la chose
 aiant été résolue, & lui-même aiant
 été contraint d'accepter le comman-
 dement, il ne convenoit point de
 tourner toujours la tête en arrière,
 en répétant sans cesse que cette guer-
 re avoit été entreprise contre toutes
 les règles de prudence, & de refroi-
 dir par là les deux autres Généraux,
 d'abbattre le courage des troupes, &
 d'émousser cette pointe de confiance
 & d'ardeur qui assure le succès des
 grandes actions. Il falloit marcher
 avec courage contre l'ennemi, le
 presser vivement, & jeter par tout
 l'épouvante par une attaque subite
 & inopinée.

Mais il fit tout le contraire. Son
 avis, dans le conseil de guerre, fut
 qu'on devoit tirer vers Sélinonte, qui
 étoit le premier sujet du voiage ; &
 si les Egestains s'acquittoient de leur

DARIUS

promesse, & paioient une montre à l'armée, passer outre; sinon les obliger à fournir la subsistance de soixante galères qu'ils avoient demandées, & demeurer là jusqu'à ce qu'on eût fait leur accord avec les Sélinontins, soit par force ou autrement. Il disoit qu'ensuite on retourneroit à Athènes, après avoir fait montre de leurs forces, & de l'assistance qu'on donnoit à ses alliés, si ce n'étoit qu'il se présentât une occasion de faire quelque chose pour les Léontins, ou d'attirer quelque ville à leur parti.

Alcibiade répliqua, qu'il seroit honteux, après un si grand armement, de s'en retourner sans rien faire, & qu'il falloit essayer auparavant de gagner l'alliance des Grecs & des Barbares pour les détacher de Syracuse, & en tirer des troupes & des vivres; & sur tout députer à Messine, qui étoit comme la clé de la Sicile, & dont le port étoit capable de contenir toute la flotte. Il disoit, qu'après avoir reconnu les amis & les ennemis, & s'être fortifié d'un nouveau secours, on attaqueroit Sélinonte ou Syracuse, si l'une ne vouloit s'accommoder avec Egeste, &

l'autre souffrir le rétablissement de NOTHUS.
Léonte.

Lamachus ouvrit un troisiéme avis, qui n'étoit peutêtre pas le moins sage : c'étoit d'aller droit à Syracuse, sans lui donner le loisir de revenir de l'étonnement où elle étoit, ni de se préparer à la défense. Il disoit, que le premier abord d'une armée étoit toujours le plus terrible, & qu'en laissant à l'ennemi le tems de se reconnoître, on lui donnoit aussi celui de se rassurer ; au lieu qu'en l'attaquant brusquement, & pendant qu'il étoit encore déconcerté, on étoit presque sûr de la victoire : Que s'étant rendu maîtres du plat pays, ils ne manqueroient de rien, & contraindroient les Siciliens à prendre parti : Qu'enfin ils s'établissent à Mégare, qui étoit déserte & voisine de Syracuse, & y mettroient leur flotte en sûreté. Mais, son avis n'étant pas suivi, il revint à celui d'Alcibiade. Ainsi l'on fit voile pour la Sicile, où Alcibiade se rendit maître de Catane par surprise.



DARIUS

§. X. *Alcibiade est rappelé. Il se sauve, & est condamné à mort par contumace. Il se retire à Sparte. Souplesse de son génie.*

Thucyd. lib.

6. pag. 546.

410.

Plut. in Alcibi.

pag. 201.

CE FUT LA le premier & le dernier exploit qu'il fit dans cette expédition, aiant été d'abord rappelé par les Athéniens pour être jugé sur l'accusation qu'on avoit intentée contre lui. Car, depuis le départ de l'armée, ses ennemis, qui se soucioient peu du bien & du salut de la patrie, & qui, sous prétexte de zèle de religion, qui couvre souvent les plus noirs attentats, ne songeoient qu'à satisfaire leur haine & leur vengeance; ses ennemis, dis-je, profitant de son absence, avoient poussé l'affaire plus vivement que jamais. Tous ceux qu'on dénonça, furent mis en prison, sans qu'on daignât seulement les entendre, & sur la déposition des citoyens les plus décriés pour leurs mœurs, comme si, dit Thucydide, il y eût eu moins de mal à punir les innocens, qu'à laisser échaper les coupables. Un des délateurs fut convaincu de faux par ses propres paroles, aiant assuré qu'il avoit reconnu un

des accusés au clair de la lune, lorsqu'il n'y en avoit point. Cette fausseté ne rallentit point la fureur du peuple. Le souvenir de la tyrannie des Pisistratides lui en faisoit appréhender une pareille, & prévenu de cette crainte il n'écoutoit rien.

NOTHUS.

Il envoya donc enfin le * vaisseau de Salamine, avec ordre au Commandant de ne point emmener par force Alcibiade, de peur de quelque tumulte dans l'armée, mais de lui ordonner seulement qu'il se vînt présenter à Athènes pour adoucir le peuple. Alcibiade obéit sur le champ, & partit sur sa galère : mais dès qu'il fut arrivé à Thurium, & qu'il eut mis pié à terre, il disparut, & éluda toutes les poursuites de ceux qui le cherchèrent. Comme on lui demandoit s'il ne se fioit pas à sa patrie sur le jugement qu'elle devoit rendre à son sujet : Je « ne me fierois pas à ma mère même, » dit-il, dans la crainte que par mégarde elle ne prît * * une fève noire « pour une blanche. » La galère de Salamine revint seule, le Commandant

* C'étoit un vaisseau sacré, destiné pour emmener les coupables.

de fèves pour donner leur suffrage, & la noire marquoit qu'ils condamnoient.

* * Les Juges se servoient

DARIUS étant tout honteux d'avoir laissé ainsi échaper sa proie. Alcibiade fut condamné à mort par contumace. Tous les biens furent confisqués, & il fut enjoint à tous les Prêtres & à toutes les Prêtresses de le maudire. Parmi ces dernières il s'en trouva une, nommée Théano, qui eut seule le courage de s'opposer à ce Décret, ^a disant qu'elle étoit Prêtresse pour benir, & non pas pour maudire. Quelque tems après, comme on lui porta la nouvelle que les Athéniens l'avoient condamné à mort; *Je leur ferai bien voir, dit-il, que je suis en vie.*

Joseph. contr.
App.

Diod. l. 13.
pag. 137.

Ce fut à peu près dans ce tems-là qu'arriva à Athènes l'affaire de Diagore le Mélien. Il étoit venu s'établir dans cette ville, & il se mit à y enseigner l'Athéisme. On lui intenta procès sur sa mauvaise doctrine. Il se sauva par la fuite, & évita le supplice : mais il ne put éviter la flétrissure de la Sentence qui le condannoit à mort. Les Athéniens eurent tant d'horreur pour les principes impies qu'il débitoit, qu'ils allèrent jusqu'à mettre sa tête à prix, & à promettre un talent de récompense pour celui qui le leur livreroit mort ou vif.

a ὁ δὲ Θεάνω ἐκ τῶν ἐν τῇ πόλει ἱερῶν ἱερέων ἀντιτάσσεται τῷ δήμῳ.

Environ vingt ans auparavant, on **NOTHUS**.
 avoit déjà fait une affaire toute pa-
 reille à Protagore, pour avoir sim- *Diog. Laert.*
 plement traité la matière de problé- *in Protag.*
 matique. Il avoit dit au commence- *Josephi. contr.*
 ment d'un de ses livres : « Si les dieux *App.*
 existent ou n'existent pas, c'est une *Cic. lib. 1.*
 question où je ne sai si je dois pren- *de nat. deor.*
 dre l'affirmative ou la négative. « *n. 62.*
 Pour éclaircir une question si épi-
 neuse, notre entendement est trop
 aveugle, & la vie humaine trop
 courte. « Les Athéniens ne purent
 souffrir qu'on mît en doute une cho-
 se de cette nature. Ils firent procla-
 mer par le Crieur public, que tous
 ceux qui avoient des exemplaires de
 cet ouvrage les apportassent au Ma-
 gistrat. On les fit brûler comme in-
 fames & impies, & l'Auteur fut ban-
 ni de l'Etat à perpétuité.

Diagore & Protagore avoient été
 disciples de Démocrite, l'inventeur
 de la philosophie des Atomes. J'en
 parlerai ailleurs.

Depuis le départ d'Alcibiade, toute *Timocyd. pag.*
 l'autorité se trouva entre les mains *452. 453.*
 de Nicias : car Lamachus son collé- *Plut. in Nic.*
 gue, quoiqu'homme de courage & *pag. 533.*
 d'expérience, étoit sans crédit à cau-

DARIUS

se de son extrême-pauvreté, qui le rendit méprisable aux troupes. Les Atheniens n'avoient pas toujours pensé de la sorte, & nous avons vu qu'Aristide, tout pauvre qu'il étoit, n'en fut ni moins estimé, ni moins respecté : mais dans cette dernière expédition, un goût de luxe & de magnificence avoit saisi tous les esprits, & l'estime des richesses en est une suite naturelle. Comme donc Nicias se trouva seul-maître, tout se ressentit de son caractère de timidité & de lenteur, & il laissa tout languir, tantôt en se tenant en repos sans rien entreprendre, tantôt en ne faisant que tourner çà & là le long des côtes, tantôt en perdant le tems à consulter & à délibérer ; ce qui dissipa bientôt d'un côté l'ardeur & la confiance que ses troupes avoient d'abord témoignées, & de l'autre la crainte & la fraieur dont les ennemis avoient été saisis à la première vue d'un armement si formidable. Il mit le siège devant Hybla qui n'étoit qu'une petite ville, & l'ayant levé peu de jours après, il tomba lui-même dans un très grand mépris. Enfin il se retira à Catane, sans avoir fait d'autre ex-

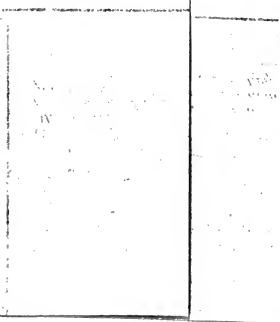
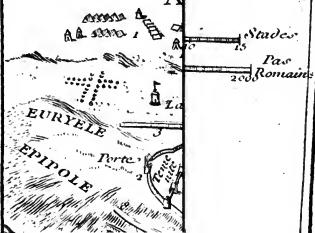
plait que de ruiner Hyccara, petit NOTHUS.
 bourg des barbares, d'où l'on dit
 qu'étoit la courtisane Laïs, qui fort
 jeune encore alors fut vendue parmi
 les autres prisonniers, & menée dans
 le Péloponnèse.

Cependant Alcibiade, étant parti *Plut. in Alcib. pag. 203.*
 de Thurium, arriva à Argos; & com-
 me il renonçoit entièrement à l'es-
 pérance d'être rappelé dans sa pa-
 trie, il envoya demander aux Spar-
 tiates la permission de demeurer chez
 eux en toute sûreté sous leur prote-
 ction & sauve-garde. Il leur donnoit
 sa foi & sa parole, que s'ils vouloient
 le regarder comme leur ami, il leur
 rendroit plus de services, qu'il ne
 leur avoit causé de dommage pen-
 dant qu'il avoit été leur ennemi. Les
 Spartiates le reçurent à bras ouverts.
 Quand il fut arrivé à Sparte, il y eut
 bientôt gagné l'estime & l'affection
 de tous les habitans. Il les charma
 tous & les enchantait, en se confor-
 mant en tout à leur manière de vi-
 vre. Ceux qui voioient qu'il se rasoit
 jusqu'à la peau, qu'il se baignoit dans
 l'eau froide, qu'il mangeoit d'un ga-
 teau fort pesant & fort grossier dont
 l'usage étoit très-commun parmi eux,

DARIUS & qu'il s'accommodoit à merveilles de leur sauce noire, ne pouvoient s'imaginer que ce même homme eût jamais eu chez lui de cuisinier, qu'il eût connu de parfumeur, qu'il eût porté des fines étofes de Milet, en un mot qu'il eût vécu jusques-là dans les délices & dans la bonne chère. Cette souplesse étoit le caractère dominant d'Alcibiade. Véritable caméléon, il ne lui coutoit rien de prendre toutes sortes de couleurs & de formes, pour se concilier ceux avec qui il avoit à vivre. Il faisoit d'abord toutes leurs manières; il entroit dans tous leurs goûts, comme s'ils lui eussent été naturels; & quoique dans le fonds il y sentît en lui-même une très grande répugnance, il savoit la couvrir par un air aisé, simple, & qui paroissoit sans contrainte. Avec les uns il avoit toutes les graces & tout l'enjouement de la jeunesse la plus gaie, avec d'autres tout le sérieux de l'âge le plus grave. A Sparte, il étoit laborieux, frugal, & austère: en Ionie, il n'aimoit que la joie, la paresse, & la volupté: en Thrace, il étoit toujours à cheval, ou passoit les journées à boire: & lorsqu'il étoit avec la Satrape

PLAN DUSE

A



Tissapherne, il surpassoit en luxe & NOTHUS. en dépense toute la magnificence des Perses.

Il ne se contenta pas de l'estime des Lacédémoniens. Il fut si bien gagner les bonnes grâces de Timée, femme du roi Agis, qu'il en eut un fils, qu'on appelloit en public Léotychide, mais que sa mère en particulier, parmi ses femmes & ses amies, ne rougissoit point d'appeler Alcibiade; tant sa passion pour cet Athénien étoit violente. Agis n'ignora pas ce commerce, & il refusa de reconnoître Léotychide pour son fils: ce qui fut cause que dans la suite ce fils fut exclus du trône.

§. XI. *Description de Syracuse.*

COMME le siège de Syracuse est un des plus considérables dont il soit parlé dans l'histoire des Grecs, & dont j'ai cru, par cette raison, devoir marquer toutes les circonstances particulières, pour donner une idée de la manière dont les anciens faisoient les sièges; il m'a paru nécessaire, avant que d'entrer dans ce détail, de présenter ici aux yeux du Lecteur une description & un plan de la ville

DARIUS de Syracuse, où il trouvera aussi les différens travaux dont il est parlé dans ce siège, tant de la part des Athéniens, que de celle des assiégés.

SYRACUSE étoit située sur la côte orientale de Sicile. Sa vaste étendue, sa situation avantageuse, la commodité de son double port, ses fortifications construites avec grand soin; la multitude & la richesse de ses citoiens, la rendirent une des plus grandes, des plus belles, & des plus puissantes villes Grecques. ^a On dit que l'air y étoit si pur & si net, qu'il n'y avoit point de jour dans l'année, quelque nébuleux qu'il fût, où le soleil n'y parût.

Elle fut fondée par Archias le Corinthien, un an après que le furent Naxe & Mégare sur la même côte.

Lorsque les Athéniens en formèrent le siège, elle étoit composée de trois parties, qui sont l'Ile, l'Achradine, Tyque. Thucydide ne parle que de ces trois parties. On y en

a Urbem Syracusas elegat, cujus hic situs atque hæc natura esse loci cœlique dicitur, ut nullus unquam dies tam magna turbulentaque tempestate fuerit, quin aliquo tempore solem ejus diei homines viderent.

Cic. Verr. 7. n. 26.

AN. M. 3295.

AV. J. C. 709.

Strab. l. 6.

p. 269.

ajouta deux autres dans la suite : **NOTHUS**.
 savoir, Néapolis & Epipole.

L'ILE, située au midi, étoit appelée *Nafos*, qui est le mot grec qui signifie *Ile*, mais prononcé selon le dialecte Dorique ; & *Ortygie*. Elle étoit jointe au continent par un pont. C'est dans cette Ile qu'on bâtit dans la suite le palais des Rois & la citadelle. Cette partie de la ville étoit très importante, parce qu'elle pouvoit rendre ceux qui la possédoient maîtres des deux ports qui l'entourent. C'est pour cela que les Romains, quand ils eurent pris Syracuse, ne permirent plus à aucun Syracusain de demeurer dans l'Ile. Cic. Verr. 7.
n. 97.

Il y avoit dans cette Ile une fontaine fort célèbre, qu'on nommoit *Aréthuse*. Les anciens, ou plutôt les Poètes, fondés sur des raisons qui sont sans aucune vraisemblance, ont supposé que l'Alphée, fleuve d'Elide dans le Péloponnèse, conduisoit ses eaux à travers ou sous les flots de la mer, sans jamais s'y mêler, jusqu'à la fontaine d'Aréthuse. C'est ce qui a donné lieu à ces vers de Virgile : Strab. lib. 6.
pag. 270.
Senec. Nat.
Quaest. lib. 3. c.
26.

DARIUS

Extremum hunc, Arethusa, mihi concede
laborem.

Virg. Eclog.
10.

Sic tibi, cum fluctus subterlabere Sicanos,
Doris amara suam non intermisceat undam.

ACHRADINE, située entièrement sur le bord de la mer, & tournée vers l'orient, étoit de tous les quartiers de la ville le plus spacieux, le plus beau, & le plus fortifié.

TYQUE, ainsi appelée du temple de la Fortune (Τύχη) qui ornoit cette partie, s'étendoit le long de l'Achradine au couchant depuis le septentrion vers le midi. Elle étoit fort habitée. Elle avoit une porte célèbre nommée *Hexapyle*, qui conduisoit dans la campagne, & elle étoit située au septentrion de la ville.

EPIPOLE, étoit une hauteur, hors de la ville, & qui la commandoit. Elle étoit située entre *Hexapyle* & la pointe d'Euryele, vers le septentrion & le couchant. Elle étoit en plusieurs endroits fort escarpée, & par cette raison d'un accès fort difficile. Lors du siège dont nous parlons; elle n'étoit point fermée de murailles: les Syracusains la gardoient avec un

Corps de troupes contre les attaques des ennemis. *Euryele* étoit l'entrée & le passage qui conduisoit à *Epipole*. Sur la même hauteur d'*Epipole* étoit un fort, nommé *Labdale*. NOTHUS.

Ce ne fut que lontems après, sous Denys le Tyran, qu'*Epipole* fut environnée de murs, & enfermée dans la ville, dont elle fit une cinquième partie, mais qui étoit peu habitée. On y en avoit déjà ajouté une quatrième, appelée *NE'APOLIS*, c'est-à-dire *Ville-neuve*, qui couvroit *Tyque*.

La rivière *Anape* couloit à une petite demie lieue de la ville. L'espace qui les séparoit, étoit une belle & grande prairie, terminé par deux marais, l'un appelé *Syraco*, qui avoit donné son nom à la ville; & l'autre, *Lyfimélie*. Cette rivière alloit se rendre dans le grand port. Près de l'embouchure vers le midi, étoit une espèce de chateau, appelé *Olympie*, à cause du temple de Jupiter Olympien, qui y étoit, & où il y avoit de grandes richesses. Il étoit à cinq cens pas de la ville. Plut. in Dia-
n. vit. pag.
970.

Syracuse avoit deux Ports, tout près l'un de l'autre, & qui n'étoient

DARIUS séparés que par l'île : le Grand, & le Petit appelé autrement *Laccus*. Selon^a la description qu'en fait l'Orateur Romain, ils étoient l'un & l'autre environnés des édifices de la ville.

Le Grand avoit de circuit un peu plus de * cinq mille pas, ou de deux lieues. Il avoit un golfe appelé *Dafcon*. L'entrée de ce port n'avoit que cinq cens pas de large. Elle étoit formée d'un côté par la pointe de l'île Ortygie, & de l'autre par la petite île & par le cap de *Plemmyrie*, qui étoit commandé par un château de même nom.

Au dessus de l'Achradine étoit un troisième port, nommé *le Port de Trogile*.

^a Portus habet prope in ædificatione aspectuque urbis inclusos. Cic. Verr. 6, n. 117.

* Strabon lui donne de circuits 80 stades, qui se-

roient le double de ce qu'il a actuellement d'étendue : preuve certaine qu'il y a faute dans le texte de Strabon. Cluvier pag. 167.



§. XII. *Nicias , après quelques actions , forme le siège de Syracuse. Lamachus est tué dans un combat. La ville est réduite à l'extrémité.*

SUR LA FIN de l'été Nicias eut nouvelles que les Syracusains , ayant repris courage , se dispoient à venir l'attaquer les premiers. Déjà leur cavalerie s'avançoit avec insolence pour l'insulter jusques dans son camp, & lui demandoit avec de grandes risées s'il étoit donc venu en Sicile pour s'établir à Catane. De si piquans reproches le réveillèrent un peu : il résolut de faire voile vers Syracuse. L'entreprise étoit hardie & périlleuse. Il ne pouvoit , sans un extrême danger , tenter le débarquement en présence d'un ennemi qui les attendroit de pié ferme , & qui ne manqueroit pas de les attaquer à la descente avec toutes ses forces. Il n'y avoit pas plus de sûreté à faire avancer ses troupes par terre , parce que n'ayant point de cavalerie , celle des Syracusains qui étoit nombreuse , au premier bruit de leur marche leur tomberoit sur les bras , & les accableroit.

Pour se tirer d'embarras , & se met-

*Thucyd. lib. 6. pag. 453-461.
Plut. in Nic. pag. 533-534
Diod. lib. 13. p. 137. 138.*

DARIUS

tre en état de s'emparer sans obstacle d'un poste avantageux qui lui avoit été désigné par un banni de Syracuse, Nicias usa de stratagème. Il fit donner un faux avis aux ennemis, que moiennant un complot qui devoit éclater un certain jour, ils pourroient s'emparer de son camp, & se rendre maîtres de toutes les armes & de tout le bagage. Les Syracusains, sur cette assurance, marchèrent vers Catane, & se vinrent camper sur les terres de Léonte. Dès que les Athéniens en eurent avis ils s'embarquèrent avec toutes leurs munitions & toutes leurs troupes, & tirèrent sur le soir vers Syracuse. Ils arrivèrent au point du jour dans le grand port, & prirent terre près d'Olympie, à l'endroit qu'on leur avoit enseigné, & s'y retranchèrent. Les ennemis, se voyant honteusement trompés, s'en-retournèrent tout court à Syracuse; & pleins de dépit, ils se mirent en bataille quelques jours après devant les murailles de la ville. Nicias sortit de ses retranchemens, & l'on en vint aux mains. La victoire fut longtemps en balance: mais une grande pluie, accompagnée d'éclairs & de tonnerres,

res, étant survenue, les Syracusains qui étoient sans expérience. & dont la plupart faisoient alors le premier essai de leurs armes, furent étonnés & intimidés de cet orage, tandis que les autres s'en moquoient comme d'un effet de la saison, & ne considéroient autre chose que l'ennemi, qui étoit bien plus à craindre que l'orage. Après une longue & vigoureuse résistance, les Syracusains furent obligés de plier. On ne put pas les poursuivre fort loin, à cause que leur cavalerie qui étoit entière, & n'avoit point été battue, couvrit leur retraite. Ils rentrèrent en bon ordre dans la ville, après avoir jetté des troupes dans le temple d'Olympie, pour en empêcher le pillage.

Ce temple étoit assez près du camp des Athéniens, qui auroient bien voulu s'en rendre maîtres, parce qu'il étoit plein d'offrandes d'or & d'argent, que la religion des rois & des peuples y avoit consacrées. Nicias, aiant différé d'y envoyer des troupes pour s'en saisir, en perdit l'occasion, & donna le tems aux Syracusains d'y faire passer, comme on vient de le dire, un détachement pour le défen-

DARIUS

dre. On croit qu'il le fit à dessein, & par respect pour les dieux, parce que les soldats venant à piller ce temple, le public n'en auroit tiré aucun profit, & le sacrilège seroit retombé sur lui seul.

Après le combat, les Athéniens, qui ne se trouvoient pas encore en état d'attaquer Syracuse, se retirèrent sur leur flotte à Naxe & à Catane pour y prendre leurs quartiers d'hiver, dans le dessein de revenir au commencement du printemps pour former le siège. Ils avoient besoin pour cela d'argent, de vivres, & sur tout de cavalerie qui leur manquoit absolument. Ils comptoient tirer une partie de ces secours des peuples de Sicile, qu'ils esperoient que la nouvelle de leur victoire feroit bientôt passer dans leur parti; & ils envoierent en même tems à Athènes pour y solliciter les mêmes secours. Ils rechercherent aussi l'alliance de Carthage, & députèrent vers quelques villes d'Italie situées sur les côtes de la mer de Toscane, qui leur avoient promis de les secourir,

A Syracuse, on ne perdit point espérance. Hermocrate, celui de leurs

Chefs, qui se distinguoit le plus par sa **NOTHUS.**
 valeur, son bon sens, & son expérience, leur représenta, pour rassurer les
 esprits, qu'on n'avoit pas manqué de
 courage, mais de conduite; que l'en-
 nemi, quoique brave, devoit plutôt
 sa victoire à son bonheur, qu'à son
 mérite; que la multitude des Chefs,
 qui est toujours suivie de peu d'ordre
 & d'obéissance, leur avoit nui, (ils
 étoient au nombre de quinze;) qu'il
 falloit choisir des Généraux expéri-
 mentés pour contenir le reste dans la
 discipline, & bien exercer les trou-
 pes pendant tout l'hiver. Cet avis
 aiant été suivi, il fut élu Général avec
 deux autres: après quoi l'on dépêcha
 à Corinthe & à Lacédémone, tant
 pour renouveler l'alliance, que pour
 les engager à faire diversion, afin d'o-
 bliger les Athéniens, s'il se pouvoit,
 de rappeler leurs troupes de Sicile,
 ou de les empêcher au moins d'y en-
 voyer du renfort. Leur principale ap-
 plication fut de fortifier Syracuse.
 Ils enfermèrent dans la ville par un
 mur tout le terrain qui regarde Epi-
 pole, depuis l'extrémité Septentrio-
 nale de Tyque en descendant du
 côté de l'Occident vers la partie

DARIUS

appelée depuis Néapolis, afin d'éloigner davantage l'ennemi, & de lui rendre la contre-vallation plus difficile, en l'obligeant de lui donner plus d'étendue. Cet endroit avoit apparemment été négligé, parce qu'il paroissoit se défendre soi-même par sa situation inégale & escarpée. Ils mirent aussi garnison dans Mégare & dans Olympie, & planterent des pieux sur le bord de la mer par tout où la descente paroissoit facile. Ensuite aiant su que les Athéniens étoient à Naxe, ils allèrent bruler le camp de Catane, & se retirèrent après avoir fait le dégât aux environs.

Thucyd. lib. 6. pag. 471. Les ambassadeurs de Syracuse étant arrivés chez les Corinthiens, leur demandèrent du secours comme à leurs fondateurs, qui leur fut aussitôt accordé, avec une ambassade vers les Lacédémoniens, pour les faire déclarer en leur faveur. Alcibiade appuya leur demande de tout son crédit & de toute son éloquence, à laquelle son ressentiment contre Athènes ajoutoit une nouvelle force. Il conseilla & persuada aux Lacédémoniens d'envoyer Gylippe pour Général en Sicile,

Plut. in Al. cib pag. 203.

In Nic. pag.

514. 535.

Diod. lib. 13.

pag. 138.

& d'attaquer de leur côté les Athé- NOTHUS
 niens, pour faire une puissante diver-
 sion. En troisième lieu il les porta à
 fortifier Décélie dans l'Attique, ce
 qui acheva de perdre & de ruiner la
 ville d'Athènes, qui ne put jamais
 s'en relever. Car ce fort rendit les La-
 cédémoniens maîtres de la campagne,
 de sorte que les Athéniens ne pou-
 voient plus jouir de leurs mines d'ar-
 gent de Laurium, ni des revenus de
 leurs terres, ni être secourus par leurs
 voisins, Décélie étant devenue l'asyle
 de tous les mécontents, & de tous les
 partisans de Sparte.

Nicias avoit reçu quelque secours AN. M. 3590.
 d'Athènes. Il consistoit en deux cens AV. J. C. 414.
 cinquante cavaliers, à qui l'on avoit
 supposé que la Sicile fourniroit des
 chevaux: ils en avoient simplement
 apporté l'équipage; & en trente ar-
 chers à cheval, avec trois cens talens,
 c'est-à-dire trois cens mille écus. Il
 commença donc à se mettre en mou-
 vement. On l'accusoit de manquer
 souvent l'occasion d'agir en perdant
 le tems à force de raisonner, de dif-
 férer, & de se précautionner: mais
 quand il entroit en action, il étoit
 aussi vif & aussi ardent à exécuter.

DARIUS qu'il avoit été timide & lent à entreprendre, comme il le fit voir ici.

Ceux de Syracuse aiant appris qu'étoit arrivé de la cavalerie aux Athéniens, & qu'ils viendroient bien assiéger leur ville; & sachant qu'ils n'en pouvoient approcher, ni faire de contre-vallation, s'ils ne se rendoient maîtres de la hauteur d'Epipole qui commandoit Syracuse, résolurent d'en garder l'avenue, qui étoit le seul passage par où l'on pût arriver, tout le reste étant escarpé & inaccessible. Etant donc descendus dans la prairie qui borde la rivière d'Anape, & y aiant fait la revue de leurs troupes, ils choisirent sept cents hommes d'infanterie sous le commandement de Diomile, pour garder ce poste important, avec ordre de s'y rendre au premier signal qu'on leur en donneroit. Nicias ne leur en laissa pas le loisir, tant il conduisit son dessein avec prudence, promptitude, & secret. Il partit de Catane avec toute sa flotte, sans que les ennemis en eussent le moindre soupçon. Etant arrivé au port de Tragil près de Léonte, qui n'est éloigné d'Epipole que d'un bon quart de lieu

(six ou sept stades,) il fit mettre à NOTHUS, terre ses troupes de débarquement, puis se retira avec sa flotte à Thapse, petite péninsule près de Syracuse, dont il ferma l'entrée avec une estacade.

Les troupes de terre coururent se saisir d'Epipole en montant par Euryele, avant que les ennemis qui étoient dans la prairie d'Anape, éloignée de plus d'une lieue, eussent rien appris de leur arrivée. Au premier bruit, les sept cens hommes de Diomile accoururent en desordre, & furent aisément battus : il en demeura trois cens sur la place avec leur Chef. Les Athéniens, après avoir érigé un trophée, bâtirent un fort à Labdale sur le sommet d'Epipole, pour y renfermer & y mettre en sûreté leur bagage & ce qu'ils avoient de plus précieux, lorsqu'il faudroit en venir aux mains, ou travailler à la contrevallation.

Peu de tems après les habitans d'Egeste envoierent aux Athéniens trois cens cavaliers, & quelques alliés de Sicile y en ajouterent cent autres : ce qui, avec les deux cens cinquante qu'Athènes avoit envoiés auparavant,

DARIUS & qui s'étoient fournis de chevaux dans le pays, faisoit six cens cinquante hommes de cavalerie.

Le plan de Nicias , pour prendre Syracuse, étoit d'environner toute ville du côté de la terre d'une bonne contre-vallation , qui couperoit aux assiégés toute communication avec les troupes de dehors, esperant sans doute être ensuite en état d'empêcher par le moyen de sa flotte qu'on ne pût y faire entrer par mer ni secours, ni vivres.

Aiant laissé une garnison à Labdale il descendit de la hauteur, s'avança vers l'extrémité Septentrionale de Tyque, & s'y étant arrêté, il employa toute l'armée à construire un mur de contre-vallation pour enfermer la ville du côté du Nord depuis Tyque jusqu'à Trogile, situé sur le bord de la mer. L'ouvrage avança avec une rapidité qui effraia les Syracusains. Ils crurent devoir s'y opposer, & firent quelques sorties & quelques attaques, qui leur réussirent toujours mal : leur cavalerie même fut mise en déroute. Le lendemain de l'action, la contre-vallation du côté du Nord fut continuée par une partie de l'ar-

mée, pendant que l'autre portoit des Nothus.
pierres & des matériaux vers Trogile —
pour l'achever.

Les assiégés, sur l'avis d'Hermocrate, jugèrent à propos de ne plus hasarder de combat contre les Athéniens, & ne songerent qu'à empêcher, ou du moins à rendre inutiles leurs ouvrages, en construisant eux-mêmes de leur côté un mur qui coupât le terrain par où les Athéniens devoient conduire le leur. Ils jugeoient que si on ne troubloit point leur travail, & qu'on leur laissât achever le mur, les Athéniens ne pourroient pas passer outre : ou que s'ils venoient pour les empêcher, il suffiroit aux Syracusains de leur opposer une partie de leurs troupes, après avoir pris la précaution de fermer les avenues les plus accessibles par de bonnes palissades ; & que les Athéniens au contraire seroient obligés de faire venir toutes leurs forces, & d'abandonner absolument le travail.

Ils sortirent donc, & travaillant avec toute l'ardeur possible, ils commencerent à construire un mur ; & pour en faciliter le travail, ils le

DARIUS

couvrirent par une bonne palissade & le flanquèrent de tours de bois de pice en espace afin de le pouvoir fendre. Les Athéniens les laisser travailler tranquillement sans les troubler, parce que s'ils n'avoient mené contre eux qu'une partie de leurs troupes, ils auroient été trop foibles; que pour les y mener toutes, il auroit fallu interrompre leurs travaux, qu'ils ne vouloient pas faire. L'ouvrage étant achevé, les Syracusains laissèrent un corps de troupes pour défendre la palissade, & garder le mur après quoi ils rentrèrent dans la ville.

Cependant les Athéniens coupèrent les canaux qui conduisoient de l'eau dans la ville, & voyant que les soldats Syracusains qui avoient été laissés pour garder le mur s'acquittoient assez mal de leur devoir, les uns restant sur le midi dans la place où étaient leurs tentes, & les autres faisant très-mauvaise garde; ils détachèrent pour l'attaque de ce poste trois cents soldats choisis, & quelque infanterie légère pendant que le reste de l'armée marchait vers la ville pour empêcher le secours. Les trois cents soldats ayant forcé la palissade, poursuivirent ceux

qui la gardoient jusques à la porte du **NOTHUS**, mur de la ville, qui couvroit le Témenite ; où étant entrés pêle-mêle avec eux, ils furent repoussés par les habitans avec perte. Toute l'armée ensuite démolit le mur, arracha les palissades du retranchement, & les emporta.

Après cet heureux succès qui laissoit les Athéniens maîtres du côté du Nord, ils entreprirent dès le lendemain un nouveau travail encore plus important, & qui devoit achever la cloture de la ville : c'étoit de conduire du côté du couchant un mur depuis les hauteurs d'Epipole à travers la plaine & le marais jusqu'au grand port. Pour l'empêcher, les assiégés recommençant la même manœuvre qu'ils venoient de faire de l'autre côté, tirèrent de la ville au travers du marais un fossé revêtu de palissades, pour empêcher les Athéniens de pousser leur contre-vallation jusqu'à la mer. Mais ceux-ci, après avoir achevé la première partie du mur sur la hauteur d'Epipole, prirent la résolution de faire l'attaque du fossé revêtu. Pour cet effet ils donnent ordre à leur flotte de se rendre de Thapse au grand

DARIUS

port de Syracuse : car jusques-là étoit toujours restée dans cette petite rade, & les assiégés avoient toujours mer libre, ce qui obligeoit les assiégés à faire venir leurs convois par terre. Les Athéniens descendirent donc d'Epipole dans la plaine avant la pointe du jour, jettant des ais & des portes à l'endroit où le marais étoit simplement boueux & plus ferme qu'ailleurs, & emporterent incontinent après la plus grande partie du fossé revêtu de palissades, & le reste ensuite, après avoir eu l'avantage du combat. Mais les ennemis lâcherent le pied, & se retirèrent, ceux de la droite vers la ville, & les autres du côté de la rivière. Trois cents Athéniens d'élite voulant couper à ceux-ci le passage, coururent vers le pont : mais la cavalerie ennemie qui y étoit en bataille pour la plus grande partie les repoussa, & vint fondre ensuite sur l'aîle droite des Athéniens, & mit les premiers bataillons en desordre. Ce que Lamachus ayant aperçu de l'aîle gauche qu'il commandoit, il y accourut avec les Argiens & quelques archers : mais ayant franchi un fossé, & se trouva

abandonné de ses troupes , il fut tué **NOTHUS** avec cinq ou six qui l'avoient suivi. —
 Les ennemis transporterent aussitôt leurs corps au-delà de la rivière , & voyant venir le reste de l'armée se retirèrent.

Dans le même tems leur aîle droite qui étoit retournée vers la ville , reprit courage par ce succès , & se vint mettre en bataille devant les Athéniens , après avoir détaché quelques troupes pour attaquer le fort bâti sur la hauteur d'Epipole , qui servoit de dépôt aux ennemis , & qu'on croioit sans défense. Elles forcerent un retranchement qui couvroit le fort : mais Nicias le sauva. Il étoit resté malade dans ce fort , & étoit actuellement dans son lit , sans avoir auprès de lui que ses domestiques. Animé par le danger même & par la présence de l'ennemi , il fait un effort , il se leve , & ordonne à ses gens de mettre promptement le feu à tout le bois qui étoit entre le retranchement & le fort pour les machines , & aux machines mêmes. Cet incendie inopiné arrêta les Syracusains , sauva Nicias , le fort , & toutes les richesses des Athéniens. Car ceux-ci accoururent d'en bas au

DARIUS

secours. Dans le même tems on vint entrer la flotte dans le grand port comme l'ordre en avoit été donné. C'est que les Syracusains aiant apperçu d'en haut, & craignant d'être pris par derrière, & accablés par les troupes & le débarquement, ils se retirèrent, & rentrèrent dans la place avec toutes leurs forces, désespérant, après la perte qu'ils venoient de faire de leur fossé revêtu de palissades, de pouvoir empêcher que la contre-vallation ne fût poussée jusqu'à la mer.

Cependant les Athéniens, qui s'étoient contentés de construire un simple mur dans les hauteurs d'Epipole & au travers des endroits escarpés & de difficile accès, étant descendus dans la plaine, commencerent à élever au pied des hauteurs un double mur, qui devoit être prolongé jusqu'à la mer, savoir un mur de contre-vallation contre les assiégés, & un autre mur de circonvallation contre les troupes Syracusaines du dehors, & contre celles des alliés qui pouvoient venir au secours de la ville.

Depuis ce jour Nicias, qui étoit resté seul Général, conçut de grandes espérances. Car plusieurs peuples de

Sicile, qui jusques-là n'avoient point **NOTHUS.** encore pris de parti, vinrent se joindre à lui, & de tous côtés il lui arrivoit des vaisseaux chargés de provisions pour son armée, chacun s'empressant de se déclarer en sa faveur, parce que ses affaires avoient pris le dessus, & qu'il avoit eu en tout un bonheur extraordinaire. Déjà même les Syracusains, se trouvant bloqués par terre & par mer, & n'espérant plus de pouvoir défendre leur ville, lui faisoient des propositions d'accommodement. Gylippe, qui venoit de Lacédémone à leur secours, aiant appris en chemin l'extrémité où ils étoient réduits, & croiant toute l'île perdue, continua sa route, non plus dans le dessein de défendre la Sicile, mais pour conserver aux peuples d'Italie les villes qu'ils y avoient s'il en étoit encore tems, & si cela étoit possible. Car la renommée avoit répandu de tous côtés que les Athéniens étoient déjà maîtres de tout, & qu'ils avoient à leur tête un Capitaine, que sa prudence & son bonheur rendoient invincible. Nicias lui-même, devenu, contre son naturel, plein de confiance en ses forces, & enflé par ses heu-

DARIUS reux succès ; persuadé d'ailleurs par les nouvelles secrètes qu'il avoit toutes les jours de Syracuse, & par les gens qu'on lui envoioit, qu'incessamment il alloit avoir la ville par composition, ne fit aucun compte de l'approche de Gylippe, & ne prit aucunes précautions pour l'empêcher d'aborder, sur tout depuis qu'il eut appris qu'il avoit fort peu de vaisseaux avec lui ; & il le traitoit de corsaire & de pirate, qui ne méritoit pas qu'on s'en mît en peine. Un bon Général doit bien se donner de garde de relâcher ses soins & sa vigilance dans les bons succès, la moindre négligence étant capable de tout ruiner. Que Nicias eût envoyé le plus petit détachement pour s'opposer à l'approche de Gylippe, il étoit maître de Syracuse, & tout étoit fini



6. XIII. *Syracuse songe à capituler. L'arrivée de Gylippe change la face des choses. Nicias, forcé par ses Collègues, donne un combat sur mer, & est vaincu. Ses troupes de terre sont aussi battues.*

LES OUVRAGES des Athéniens étoient presque entièrement achevés, & ils avoient tiré un double mur de la longueur de près d'une demi lieue le long de la plaine & du marais vers le grand port, & il s'en faloit peu qu'ils n'y fussent arrivés. Il ne restoit plus aussi du côté de Trogile qu'une petite partie du mur à achever. Syracuse étoit donc près de sa ruine, & se voioit sans ressource, n'étant point en état de résister par elle-même aux ennemis, & n'espérant plus de secours. Ainsi l'on résolut de se rendre. On convoqua l'assemblée pour regler les articles de la capitulation qu'on devoit présenter à Nicias; & plusieurs étoient d'avis qu'on hâtât la conclusion de cette affaire, avant que la ville fût entièrement enfermée.

C'est dans ce moment-là même, & dans l'extrémité la plus pressante,

AN M. 3591.
Av. J. C. 413.
Thucyd. lib.
7. pag. 485.
489.
Plut. in Nic.
p. 535. 536.
Diod. l. 13.
p. 138. 139.

DARIUS

qu'un Officier , nommé Gongyle ,
rive de Corinthe sur une galère
trois rangs de rames. A son arriv
toute la ville s'assemble en foule
tour de lui. Il déclare à haute vo
que Gylippe arrive incessamment ,
qu'il est suivi de plusieurs autres
leres qui viennent à leur secours. L
Syracusains étonnés ou plutôt étou
dis de cette nouvelle , n'osent y ajo
ter foi. Pendant qu'ils étoient ai
florans & incertains , survient
courier de Gylippe , qui leur anno
ce sa venue , & leur ordonne
sortir avec toutes leurs troupes a
devant de lui. Lui-même apr
avoir pris en passant un * fort , ma
cha en bataille droit à Epipole ,
étant monté par Euryèle , com
avoient fait les Athéniens , il se m
en état de les attaquer par dehors
pendant que les Syracusains les a
taqueroient de leur côté avec l
forces de Syracuse & les sienne
Les Athéniens , surpris de sa venu
plus qu'on ne le peut dire , se ran
gerent en bataille sous leurs mu
à la hâte & avec peu d'ordre. Pou
lui , mettant bas les armes quan
il fut proche , il leur envoya dire p

* *Jéges.*

un héraut , Qu'il leur donnoit cinq **NOTHUS.**
 jours pour sortir de la Sicile. Ni-
 cias ne daigna pas faire la moindre
 réponse à une telle proposition.
 Quelques-uns des soldats , se met-
 tant à rire , demanderent au héraut ,
si la présence d'une cappe Lacédémonien-
ne & d'un méchant bâton pouvoit ap-
porter quelque changement à l'état pré-
sent de la ville. On se prépara donc
 au combat de part & d'autre.

Gylippe emporta d'assaut le fort de
 Labdale , où il fit main basse sur tout
 ce qui y étoit. Le même jour une ga-
 lere Athénienne fut prise en entrant
 dans le port. Ensuite les assiégés ti-
 rerent un mur en montant de la ville
 vers Epipole , pour couper le mur
 simple des Athéniens vers l'extrémi-
 té , & leur ôter toute communication
 avec les troupes postées dans les re-
 tranchemens qui environnoient la
 ville du côté du Nord vers Tyque &
 vers Trogyle. Les Athéniens , après
 avoir achevé le mur qui alloit jus-
 qu'à la mer vers le grand port , étoient
 remontés sur les hauteurs. Gylippe ,
 aiant remarqué que dans le mur sim-
 ple bâti par les Athéniens sur les hau-
 teurs d'Epipole , il y avoit un endroit

DARIUS plus foible & plus bas que les autres y marcha de nuit avec ses troupes mais ayant été découvert par les Athéniens qui campoient dehors, il fut contraint de se retirer, les voyant venir droit à lui. Ils rehaussèrent le mur, se chargerent de le garder eux-mêmes, après avoir distribué leurs alliés dans les postes du reste du retranchement.

Nicias, de son côté, trouva à propos de fortifier le cap de Plemmyre qui s'avancant dans la mer, étroit soit l'embouchure du grand port ; son dessein étoit de faciliter les convois de vivres & des autres choses nécessaires ; parce que les Athéniens en occupant ce poste, s'approchoient du petit port où étoient les principales forces navales des Syracusains & se mettoient en état d'en mieux observer tous les mouvemens ; & que d'ailleurs ayant toute la liberté de la mer, ils ne seroient pas réduits à tirer toute leur subsistance du fond du grand port, comme cela arriveroit nécessairement, si les ennemis se rendant maîtres de l'entrée les forçoient à se tenir renfermés dans le port, de la même manière qu'ils l'é-

toient actuellement. Car , depuis **NOTHUS.**
 l'arrivée de Gylippe , Nicias n'avoit
 plus d'espérance que du côté de la
 mer. Faisant donc passer là sa flotte
 & une partie de ses troupes , il y
 bâtit trois forts , à la faveur desquels
 les bâtimens demeuroient à l'an-
 cre : de sorte qu'il y renferma une
 grande partie du bagage & des mu-
 nitions. Ce fut alors que les gens
 de mer souffrirent beaucoup. Car ,
 comme il falloit aller loin au bois &
 à l'eau , ils étoient investis par la ca-
 valerie des ennemis , dont le tiers
 étoit posté à Olympie pour empê-
 cher la garnison de Plemmyre de
 sortir , & étoit maître de la campa-
 gne. Nicias , aiant appris que la flotte
 de Corinthe arrivoit , envoya contre
 elle vingt galères , avec ordre d'ob-
 server les ennemis du côté de Locres
 & de Rhége , & des autres avenues de
 la Sicile.

Cependant Gylippe , se servant des
 pierres mêmes que les Athéniens
 avoient amassées pour leur usage ,
 continuoit de bâtir le mur que les
 Syracusains avoient commencé de
 conduire au travers d'Epipole , & se
 mettoit tous les jours devant en ba-

DARIUS

taille , comme les Athéniens le faisoient aussi de leur côté. Lorsqu'il vit le temps propre pour donner , il commença le combat dans l'espace qui étoit entre les deux murailles. La situation étroite du lieu , ayant rendu sa cavalerie & ses gens de trait inutiles , il eut du desavantage. Les Athéniens dressèrent un trophée. Gylippe, pour ranimer ses troupes en leur rendant justice, eut le courage de prendre sur lui le reproche du mauvais succès , & de leur déclarer hautement que sa défaite n'étoit pas arrivée par leur faute, mais par la sienne ; parce qu'il les avoit fait combattre dans un lieu trop serré. Il leur promit de leur donner bientôt occasion de rétablir leur honneur & le sien ; & en effet le lendemain , après les avoir exhortés à bien soutenir leur ancienne réputation , il les mena contre l'ennemi. Nicias , voyant que quand il n'auroit pas envie de donner bataille , il faudroit nécessairement empêcher les ennemis de continuer leur marche au delà de la contrevallation , dont ils étoient déjà fort proches , parce qu'autrement c'étoit leur accorder une victoire certaine , il marcha contre

les Syracusains. Gylippe fit avancer NOTHUS.
 ses troupes au delà de l'endroit où de
 part & d'autre finissoient les murs ,
 afin d'avoir plus d'espace pour s'é-
 tendre : & chargeant l'aîle gauche
 des ennemis avec sa cavalerie , il la
 mit en fuite , & bientôt après ren-
 versa l'aîle droite. On voit ici ce
 que peut l'expérience & l'habileté
 d'un grand Capitaine. Car Gylippe ,
 avec les mêmes hommes , les mêmes
 armes , les mêmes chevaux , les mê-
 mes lieux , en changeant seulement
 son ordonnance de bataille , défit les
 Athéniens , & les mena battant jus-
 ques dans leur camp. La nuit sui-
 vante , les vainqueurs poussèrent leur
 mur au delà de la contrevallation des
 Athéniens , & par là leur ôtèrent tou-
 te espérance de pouvoir les enfer-
 mer.

Après cet heureux succès , les Sy-
 racusains , à qui la flotte de Corinthe
 étoit arrivée sans avoir été aperçue
 de celle d'Athènes , reprirent coura-
 ge , armèrent plusieurs galères , &
 sortant en campagne avec leur ca-
 valerie & d'autres troupes , firent
 beaucoup de prisonniers. Ils députè-
 rent à Lacédémone & à Corinthe ;

Thucyd. lib.

7. pag. 490-

494.

Plut. in Nic.

pag. 536.

Diod. l. 13.

pag. 139.

DARIUS.

pour faire venir du renfort. Gylippe alla lui-même par toutes les villes de Sicile pour les solliciter de se joindre à lui, & il engagea la plus grande partie, qui lui donnèrent de puissans secours. Nicias, voyant que ses forces diminuoient tous les jours, & que celles des ennemis augmentoient, recommença à perdre courage; & non content d'envoyer aux Athéniens des gens pour leur représenter l'état des choses, il leur écrivit lui-même très fortement. Je rapporterai ici sa lettre en entier, parce qu'elle expose très nettement l'état où étoient les affaires à Syracuse, & que d'ailleurs elle peut servir de modèle pour ces sortes de relations.

» Messieurs, je vous ai déjà infor-
» més par plusieurs dépêches de ce
» qui se passoit ici : mais il est né-
» cessaire que vous sachiez l'état pre-
» sent des affaires, pour y donner or-
» dre. Après que nous avons rempor-
» té l'avantage dans plusieurs com-
» bats, & que nous avons presque
» achevé notre contrevallation, Gy-
» lippe est entré dans Syracuse avec
» des troupes de Lacédémone & de
Sicile

Sicile, & aiant été battû la pre- « **NOTHUS.**
 mière fois, a été victorieux la se- «
 conde par le moyen de sa cavalerie «
 & de ses gens de trait. Nous de- «
 meurons donc renfermés dans nos «
 retranchemens, sans oser rien en- «
 treprendre, ni pouvoir achever no- «
 tre contrevallation, à cause des for- «
 ces supérieures des ennemis : car «
 une partie de nos soldats sont oc- «
 cupés à garder nos forts ; de sorte «
 que nous ne pouvons pas nous ser- «
 vir de toutes nos troupes dans un «
 combat. D'ailleurs, comme les Sy- «
 racusains ont coupé nos lignes par «
 un mur à l'endroit où elles n'é- «
 toient pas achevées, nous ne pou- «
 vons plus envelopper la place, à «
 moins que nous ne forcions leurs «
 retranchemens, & d'assiégeans nous «
 sommes devenus assiégés, sans oser «
 nous écarter dans la crainte de leur «
 cavalerie. «

Non contents de ces avantages, «
 ils font venir de nouveaux secours «
 du Péloponnèse, & ont envoyé Gy- «
 lippe pour obliger les villes neutres «
 de la Sicile à se déclarer, & les au- «
 tres à leur envoyer des hommes & «
 des vaisseaux, pour nous attaquer «

DARIUS » par mer & par terre. Je dis par mer,
 » ce qui peut paroître étonnant, mais
 » qui n'est que trop vrai. Car notre
 » flotte, considérable auparavant par
 » le bon état des galères, & par celui
 » des équipages, manque maintenant
 » par ces deux endroits-là même, &
 » est infiniment affoiblie.

» Les galères sont eau de tous cô-
 » tés, parce qu'on ne peut les retirer
 » à sec pour les radoubes, à cause de
 » la crainte où nous sommes que cel-
 » les des ennemis, qui sont en plus
 » grand nombre & en meilleur état
 » que les nôtres, ne viennent tout
 » d'un coup nous attaquer, comme
 » elles paroissent à chaque moment
 » disposées à le faire. D'ailleurs nous
 » nous trouvons dans une indispensa-
 » ble nécessité d'en envoyer plusieurs
 » de côté & d'autre pour escorter les
 » convois, qu'il faut faire venir de
 » bien loin, & faire passer à la vue
 » des ennemis, de sorte que pour peu
 » qu'on se relâchât de ces soins, nous
 » affamerions notre armée.

» Pour l'équipage, il dépérit tous
 » les jours à vue d'œil, parce que plu-
 » sieurs s'écartant pour la maraude,
 » ou pour aller chercher du bois & de

l'eau , sont surpris & tués par la ca- « **NOTHUS.**
 valerie. Les esclaves, tentés par le «
 voisinage du camp des ennemis, «
 désertent, & s'y rendent en grand «
 nombre. Les étrangers qu'on a le- «
 vés par force se dissipent, & ceux «
 qu'on a enrôlés pour de l'argent, «
 qui pensoient venir au pillage plu- «
 tôt qu'au combat, trouvant tout le «
 contraire, vont se rendre aux enne- «
 mis qui sont proches, ou se cachent «
 dans la Sicile, ce qu'ils peuvent «
 faire aisément parce que l'île est «
 fort grande. Beaucoup de citoyens, «
 exercés depuis lontems & habiles «
 dans la manœuvre, aiant gagné les «
 Capitaines des galères, ont substi- &
 tué à leur place des hommes qui «
 sont sans expérience, & incapables «
 de servir; & par là ont ruiné toute «
 la discipline. J'écris à des person- «
 nes qui connoissent la marine, & «
 qui savent que quand le bon ordre «
 est ainsi négligé, tout va en dépe- «
 rissant, & que la flotte se ruine. «

Mais ce qu'il y a de plus fâcheux, «
 c'est qu'avec toute mon autorité de «
 Général je ne puis empêcher ce dé- «
 sordre. Car vous savez, Messieurs, «
 que vous êtes d'un caractère à ne «

Hh ij

DARIUS

» vous pas laisser aisément gouver-
 » ner ; & d'ailleurs je ne sai où pren-
 » dre des matelots , au lieu qu'il en
 » vient de tous côtés à nos ennemis.
 » Nos alliés de Sicile sont hors d'état
 » de nous aider ; & si les villes d'Ita-
 » lie , d'où nous tirons notre subsi-
 » stance , apprenant l'extrémité où
 » nous sommes réduits , & que vous
 » ne songez point à nous envoyer de
 » secours , se joignent aux Syracu-
 » fains , nous sommes absolument
 » perdus , sans que l'ennemi ait be-
 » soin de nous livrer aucun com-
 » bat.

» Je pourrois vous mander des cho-
 » ses plus agréables , mais non plus
 » utiles , ni plus propres à vous met-
 » tre au fait des affaires présentes sur
 » lesquelles vous avez à délibérer.
 » Je sai que vous aimez à n'entendre
 » que des nouvelles qui vous fassent
 » plaisir : mais je sai aussi que lors-
 » que les affaires tournent autrement
 » que vous ne l'avez espéré , vous
 » vous en prenez à ceux qui vous
 » ont trompés ; & c'est ce qui m'a dé-
 » terminé à vous écrire avec la der-
 » nière sincérité , & sans vous rien
 » dissimuler. Du reste , vous n'avez

jusqu'ici aucun sujet de vous plain- « **NOTHUS?**
 dre ni des Officiers ni des troupes , «
 qui se sont fort bien acquittés de «
 leur devoir. «

Mais maintenant que la Sicile «
 réunit toutes les forces contre «
 nous , & qu'elle attend du Pélo- «
 ponnése une nouvelle armée , po- «
 sez pour fondement de vos déli- «
 bérations que les troupes que nous «
 avons ne sont point suffisantes ; & «
 qu'ainsi il faut, ou nous rappeler , «
 ou envoyer ici une armée de terre «
 & de mer aussi nombreuse que la «
 première , & de l'argent à propor- «
 tion. Il faut se disposer aussi à m'en- «
 voyer un successeur , ne pouvant «
 plus porter le poids du comman- «
 dement à cause de ma néphrétique. «
 Je croi avoir mérité cette grace «
 par les bons services que je vous «
 ai souvent rendus , tant que la santé «
 me l'a permis , dans tous les com- «
 mandemens que j'ai eus. «

Au reste, quelque résolution que «
 vous preniez , ce que je vous de- «
 mande , Messieurs , c'est que vous «
 l'exécutiez promptement , sans dé- «
 lai , & dès le commencement du «
 printems. Les ressources que nos «

DARIUS » ennemis trouvent dans la Sicile,
 » sont toutes prêtes : celles qu'ils at-
 » tendent du Péloponnèse, peuvent
 » tarder davantage. Mais songez
 » que, si vous ne vous évertuez, les
 » Lacédémoniens ne manqueront
 » pas, comme cela est déjà arrivé,
 » de vous surprendre, & de vous
 » prévenir.

La lecture de cette lettre toucha ex-
 trêmement les Athéniens, & fit sur
 eux toute l'impression que Nicias en
 pouvoit attendre. On ne jugea pas à
 propos de lui nommer un successeur :
 on lui donna seulement deux des
 Officiers qui étoient avec lui, savoir
 Ménandre & Euthydème, pour le
 soulager en attendant qu'on envoiât
 d'autres Généraux. Eurymédon &
 Démosthène furent choisis pour rem-
 placer Lamachus & Alcibiade. Le
 premier partit sur le champ avec dix
 320 talens. galères & quelque argent environ le
 solstice d'hiver, pour assurer Nicias
 d'un prompt secours, tandis que l'au-
 tre levoit des troupes & des contri-
 butions pour faire voile au commen-
 cement du printems.

Thucyd. lib.

7. pag. 494-

496. & 502-

504.

Diod. lib. 13.

pag. 140.

D'un autre côté, les Lacédémoniens, soutenus par ceux de Corin-

the, faisoient de grands préparatifs NOTHUS.
 pour envoyer des renforts en Sicile,
 & pour entrer dans l'Attique, afin
 d'empêcher la flotte d'Athènes de faire
 voile vers cette île. Ils entrèrent donc
 de bonne heure dans l'Attique sous
 le commandement du roi Agis, &
 après avoir ravagé la campagne, ils
 fortifièrent Décélie, aiant partagé
 l'ouvrage entre toutes les troupes
 pour l'achever plus promptement. Ce
 poste est environ à six-vingts stades
 d'Athènes, c'est-à-dire près de six
 lieues, & à même distance de la Bé-
 otië. Alcibiade ne s'étoit point donné
 de repos, jusqu'à ce qu'enfin il eût
 obtenu qu'on y travaillât. C'est ce
 qui nuisit le plus aux Athéniens. Car,
 au lieu qu'auparavant l'ennemi se re-
 tirant après avoir fait le dégât, on
 étoit libre le reste de l'année; depuis
 que Décélie eut été fortifiée, la gar-
 nison qu'on y laissoit ne cessoit de
 faire des courses, & de tenir toujours
 les Athéniens en inquiétude, Athé-
 nès étant devenue comme une place
 de guerre. Car de jour on faisoit garde
 tout au tour aux portes, & de nuit
 toute la ville étoit sur les murailles
 ou sous les armes. Les vaisseaux qui

DARIUS apportoit de l'île d'Eubée des vivres, & dont auparavant la route par Décélie étoit beaucoup plus courte, étoient contraints de prendre un grand tour pour doubler le cap de Sunium, ce qui rendoit les vivres plus chers. Il en étoit de même de toutes les marchandises qui venoient de dehors. Pour surcroît de malheur, plus de vingt mille esclaves, dont la plupart étoient artisans, passèrent chez les ennemis, pour se dérober à l'extrême misère qui désoloit la ville. Tout le bétail périt avec les bêtes de voiture. La plupart des chevaux demeurèrent estropiés, parce qu'ils étoient toujours en garde ou en course. Tout étant ainsi ravagé, & les Athéniens se trouvant privés des revenus de la campagne, la disette d'argent devint fort grande, & ils furent obligés de prendre le vingtième de tout ce qui venoit par mer, pour remplacer la perte des revenus ordinaires.

Thucyd. lib. 7. pag. 497-500. Cependant Gylippe, qui avoit fait le tour de la Sicile, amena le plus de gens qu'il avoit pu rassembler dans toute l'île, & porta ceux de Syracuse à équiper une flotte la plus

nombreuse qu'ils pourroient, & à **NOTHUS** hazarder un combat naval, sur l'espérance d'un succès digne d'une si grande entreprise. Cet avis fut fortement appuié par Hermocrate, qui exhorta les Syracusains à ne pas céder à leurs ennemis la gloire de la marine. Il leur représenta que les Athéniens eux-mêmes ne l'avoient pas reçue de leurs ancêtres, & ne l'avoient pas toujours possédée. Que c'étoit la guerre des Perses qui les avoit comme forcés à se rendre habiles sur mer, malgré l'opposition qu'ils y avoient & par leur inclination naturelle, & par la situation même de leur ville, assez éloignée de la mer. Qu'ils s'étoient rendu terribles aux autres peuples, moins par leurs forces, que par leur courage & leur hardiesse. Qu'il falloit profiter de leur exemple, & contre des ennemis toujours prêts à tout entreprendre, devenir aussi entreprenant qu'eux.

Cet avis fût goûté & suivi. On équipa une flotte nombreuse. Gylippe fit sortir de nuit toutes ses troupes de terre pour attaquer les forts de Plemmyre. Trente-cinq galères des Syracusains qui étoient dans le grand

DARIUS port, & quarante-cinq dans le petit, où il y avoit un arsenal pour les navires, eurent ordre de s'avancer vers Plemmyre, pour étonner les Athéniens qui se verroient attaqués en même tems & par terre & par mer. Sur ces nouvelles les Athéniens s'embarquèrent aussi, & avec vingt-cinq voiles voguèrent contre les trente-cinq de Syracuse qui venoient contre eux du grand port, & en opposèrent trente-cinq autres aux quarante-cinq des ennemis qui étoient parties du petit port. Le combat fut vif à l'embouchure du grand port, les uns s'efforçant d'entrer, & les autres de leur défendre l'entrée.

Ceux qui gardoient les forts de Plemmyre étant accourus au rivage pour voir le combat, Gylippe attaqua les forts à l'improviste dès le point du jour, & aiant emporté d'assaut le plus grand, donna une telle épouvante aux deux autres, qu'ils furent en un instant abandonnés. Cet avantage fut suivi aussitôt après d'une perte considérable du côté des Syracusains. Car les vaisseaux de Syracuse qui combattoient à l'entrée du port après avoir forcé les Athéniens,

s'entrechoquèrent rudement en y entrant en desordre, & livrèrent par ce NOTHUS
 moien la victoire à leurs ennemis ;
 qui ne se contentèrent pas de les pour-
 suivre , mais donnèrent encore la
 chasse à ceux qui étoient victorieux
 dans le grand port. Onze galères de
 Syracuse furent coulées à fond , &
 plusieurs de ceux qui étoient dessus
 tués. On en prit trois : mais les Athé-
 niens en perdirent aussi trois de leur
 côté , & après avoir remorqué celles
 des ennemis , ils dressèrent un tro-
 phée dans une petite île qui étoit de-
 vant Plemmyre , & se retirèrent dans
 l'enceinte de leur camp.

Les Syracusains dressèrent aussi
 trois trophées pour la prise des trois
 forts , & aiant rasé l'un des petits ,
 rétablirent les fortifications des deux
 autres , & y mirent garnison. Plusieurs
 Athéniens y avoient été tués , ou faits
 prisonniers , & l'on prit quantité d'ar-
 gent qui y étoit , tant du public , que
 des marchands , & des Capitaines de
 galères , outre une grande quantité de
 munitions , parce que c'étoit comme
 le magasin de toute l'armée. On y
 perdit aussi l'équipement & les agrès
 de quarante galères , avec trois vais-

DARIUS.

seaux qui étoient retirés à sec. Mais, ce qui est plus considérable encore, Gy-lippe ôta par là à Nicias la facilité des convois. Car, pendant que celui-ci tenoit Plemmyre, le transport des vivres étoit sûr & prompt; au lieu qu'après l'avoir perdu, il étoit difficile & dangereux, parce qu'il ne pouvoit se faire sans combat, les ennemis étant à l'ancre devant ce Fort. Ainsi les Athéniens ne pouvoient plus avoir de vivres qu'à la pointe de l'épée; ce qui abbatit le courage des soldats, & mit l'armée dans une grande consternation.

Thucyd. lib.
7. pag. 500.
501.

Il y eut ensuite quelque escarmouche pour la défense d'une estacade que les habitans avoient faite dans la mer à l'entrée du vieux havre pour mettre en sûreté leurs navires. Les Athéniens aiant dressé destours & des parapêts sur un gros bâtiment, l'avancèrent le plus près qu'ils purent de l'estacade, pour servir comme de rempart à des barques qui portoient des machines, avec lesquelles on arrachoit les pieux à l'aide des poulies & des cordages, outre ceux que l'on scioit par le moien des plongeurs; les assiégés se défendant de leur havre,

& les autres de leur tour. Les pieux qu'on avoit enfoncés à fleur d'eau, pour faire échouer les vaisseaux qui en approchoient, donnèrent le plus de peine. Les plongeurs en vinrent encore à bout pour de l'argent, & la plupart furent arrachés : mais on en remit d'autres aussitôt en leur place. Il n'y eut point de tentatives ni d'efforts qu'on ne fît de part & d'autre pour l'attaque & pour la défense.

Ce qui paroissoit de capital aux assiégés, fut de tenter un second combat tant sur terre que sur mer avant l'arrivée du secours & de la flotte des Athéniens. Ils avoient pris de nouvelles mesures pour le combat naval; en profitant de ce qu'ils avoient reconnu avoir manqué au dernier. Le changement qu'ils firent dans leurs galères, consistoit en ce qu'ils rendirent les proues plus courtes qu'auparavant; & en même tems plus fermes & plus solides. Pour cela, ils y mirent de grosses pièces de bois en saillie de chaque côté des proues; & à ces pièces de bois ils joignirent encore des solives en forme d'étais. Ces solives s'étendoient jusqu'à six coudées sur les deux côtés du vaisseau en de-

NOTHUS.

Thucyd. lib.

7. pag. 509-513.

Plut. in Nic.

pag. 536.

Diod. pag.

140. 141.

DARIUS

— dans & en dehors. Ils espéroient par la remporter l'avantage sur les galères Atheniennes, qui n'osoient pas, à cause de la foiblesse de leurs proues, prendre l'ennemi de front, mais seulement en flanc : outre que le combat se faisant dans le port, elles n'auroient pas la liberté de s'étendre, ni de couler entre deux galères, en quoi consistoit leur adresse, ni de revirer de bord, après qu'elles auroient été repoussées, pour revenir à la charge, au lieu que les Syracusains étant maîtres de toute l'étendue du port, auroient tous ces avantages, & pourroient s'entresécourir les uns les autres. Voila sur quoi ces derniers fondoient l'espérance de la victoire.

Gylippe fit donc sortir du camp premièrement toute l'infanterie, & s'avança vers la contrevallation des Athéniens du côté qui regardoit la ville, pendant que les troupes de l'Olympie s'approchoient de l'autre, & que leurs galères mettoient à la voile.

Nicias ne vouloit point tenter la fortune d'un second combat, disant que dans le tems qu'ils attendoient à toute heure une nouvelle flotte & un grand renfort que Démosthène leur

amenoit en diligence, c'étoit une fo- NOTHUS.
 lie, avec des troupes inférieures en
 nombre, & déjà fatiguées, de hazar-
 der un combat sans nécessité. Au con-
 traire, Ménandre & Euthydème, qui
 venoient d'être nommés pour parta-
 ger le commandement de l'armée
 avec Nicias jusqu'à l'arrivée de Dé-
 mosthène, piqués d'ambition & de
 jalousie contre ces deux Généraux,
 se hâtoient de faire quelque exploit
 éclatant, pour en dérober la gloire à
 l'un, & surpasser s'il se pouvoit celle
 de l'autre. Le prétexte qu'ils pre-
 noient étoit la réputation d'Athènes;
 & ils soutinrent avec tant d'ardeur
 qu'elle seroit entièrement perdue &
 ruinée si l'on évitoit le combat que
 présentoient les Syracusains, qu'enfin
 ils forcèrent Nicias à donner la ba-
 taille. Les Athéniens avoient soixante
 & quinze galères, & les Syracusains
 quatre-vingts.

Le premier jour les flotes demeu-
 rèrent en présence l'une de l'autre,
 dans le grand port sans en venir à un
 combat, & se contentant de quel-
 ques légères escarmouches, après
 quoi elles se retirèrent de part & d'au-
 tre. Et il en fut de même des troupes

DARIUS

de terre. Le second jour les Syracusains ne firent aucun mouvement. Nicias, profitant de ce repos, fit mettre les bâtimens de charge sur une même ligne à quelque distance les uns des autres, pour former une enceinte qui pût servir de retraite à ses galères en cas de disgrâce. Le lendemain les Syracusains se présentèrent plutôt même qu'à l'ordinaire : une bonne partie du jour se passa encore en escarmouches, & ils se retirèrent. On ne comptoit pas qu'ils dussent revenir, & on attribuoit leur retraite à crainte & à lâcheté. Mais aiant pris promptement de la nourriture, & étant remontés dans leurs galères, ils allèrent fondre sur les Athéniens qui ne s'attendoient à rien moins. Contraints de se rembarquer à la hâte, ils remontèrent en désordre sur leurs vaisseaux, sans avoir le tems de se ranger en bataille, & étant là plupart à jeun. La victoire ne balança pas. Les Athéniens, après une courte & légère résistance, se sauvèrent derrière l'enceinte des bâtimens de charge. Les ennemis les poursuivirent jusques-là, & furent arrêtés par les antennes de ces bâtimens, auxquelles

on avoit attaché des * dauphins de plomb d'un très grand poids, qui venant à tomber rudement sur les galères des ennemis les auroient coulées à fond. Les Athéniens perdirent dans ce combat sept galères, & grand nombre de soldats, qui furent tués ou pris.

Cette perte jetta Nicias dans la dernière consternation. Tous les malheurs qui lui sont arrivés pendant qu'il a été seul Capitaine en chef, lui reviennent dans l'esprit; & en voici un plus grand qu'il s'est attiré par la faute que lui ont fait commettre ses Collègues. Pendant qu'il s'occupoit de ces tristes pensées, on voit arriver la flotte de Démosthène dans un appareil magnifique, & qui devoit jeter la terreur parmi les ennemis: c'étoit le lendemain du combat. Elle étoit composée de soixante & treize galères, qui portoient cinq mille combattans, & environ trois mille tant archers que frondeurs & gens de trait. Toutes ces galères étoient richement parées, ornées aux proues d'éclatantes banderoles, équipées de

Thucyd. lib.

*7. pag. 513.
518.*

Plut. in Nic.

pag. 337.

Diod. pag.

141. 142.

* Cette machine perçoit | jusqu'au fond de cale, tant
une galère depuis le pont. | elle tamboit avec violence.

DARIUS bons rameurs , commandées par de bons Officiers , & retentissoient du bruit des clairons & des trompettes , Démosthène aiant affecté de s'avancer ainsi fierement comme en pompe & en triomphe pour effraier les ennemis.

Cet appareil en effet les allarma au dela de ce qu'on peut dire. Ils ne voioient ni fin ni trêve à leurs maux. Tout ce qu'ils avoient fait & souffert jusques-là devenoit inutile , & il falloit recommencer sur nouveaux frais. Quelle espérance de lasser la patience des Athéniens , après qu'un camp ennemi, retranché au milieu de l'Attique, n'avoit pu les empêcher d'envoyer en Sicile une armée aussi grande que la première , & que leur puissance, aussi bien que leur courage, sembloit, malgré toutes leurs pertes, s'accroître de jour en jour, loin de diminuer ?

Démosthène , s'étant bien informé de l'état des choses , crut qu'il ne falloit pas perdre le tems comme avoit fait Nicias , qui aiant d'abord répandu par tout la terreur à son arrivée, étoit ensuite tombé dans le mépris pour avoir passé l'hiver à Catane au

lieu d'aller droit à Syracuse, & dans NOTHUS;
 la suite avoit donné lieu à Gylippe
 d'y jeter des troupes. Il se flatoit
 d'emporter la place d'emblée en pro-
 fitant de l'allarme que sa venue y
 avoit jettée, & de terminer ainsi
 promptement la guerre : sinon, son
 dessein étoit de lever le siège, sans
 fatiguer davantage les troupes par
 tant de combats qui ne décidoient
 de rien, & pour ne point épuiser la
 ville d'Athènes par des dépenses inu-
 tiles.

Nicias, effraïé d'une résolution si
 brusque & si hardie, le conjuroit de
 ne rien précipiter, & de prendre du
 tems pour peser toutes choses mûre-
 ment, & pour ne laisser aucun lieu au
 repentir. Il lui représentoit que les
 délais étoient tous contre les enne-
 mis : qu'ils n'avoient plus ni vivres,
 ni argent : que leurs alliés étoient
 prêts à les abandonner : que bientôt,
 pressés par la disette, ils prendroient
 le parti de se rendre, comme ils l'a-
 voient voulu faire auparavant. Car
 il y avoit dans la place des gens qui
 entretenoient avec lui une secrète
 intelligence, & qui l'exhortoient à
 demeurer & à ne pas s'impacienter,

DARIUS parce que les Syracusains étoient fatigués de la guerre , & las de Gylippe ; & que pour peu que la nécessité où ils étoient réduits vînt à augmenter , ils se remettroient à sa discrétion.

Comme Nicias ne s'expliquoit pas clairement , & ne vouloit pas déclarer en termes formels qu'il étoit instruit par des voies sûres de tout ce qui se passoit dans la ville , on regarda ses remontrances comme un effet de la timidité & de la lenteur qu'on lui avoit toujours reprochées. » Voila , » disoient-ils , ses longueurs ordinaires , ses remises , ses défiances , ses craintives précautions , par lesquelles il a émoussé toute le vivacité & éteint toute l'ardeur de ses troupes , en ne les menant pas d'abord contre l'ennemi , & en attendant pour les attaquer que ses forces fussent affoiblies & méprisées. « Cela fit que les autres Généraux & tous les Officiers se rangèrent à l'avis de Démosthène , & Nicias lui-même fut enfin forcé de s'y rendre.

Démosthène , après avoir fait une tentative inutile contre le mur qui coupoit la contre-vallation des afflic-

geans, se reſtraignit à l'attaque d'Épi-
 pole, dans la créance qu'en étant le NOTHUS
 maître, perſonne n'oſeroit plus de-
 meurer à la déſenſe du mur. Il prend
 donc pour cinq jours de vivres, avec
 les ouvriers, les outils, & tout l'é-
 quipage néceſſaire pour fortifier &
 défendre ce poſte quand il ſ'en ſe-
 roit emparé. Comme on n'y pouvoit
 monter de jour ſans être découvert,
 il ſ'y rend de nuit avec toutes les
 troupes, ſuivi d'Eurymédon & de
 Ménandre : car Nicias étoit demeuré
 à la garde du camp. Ils montent par
 Euryéle, comme on avoit fait la pre-
 mière fois, ſans être aperçus des ſen-
 tinelles, attaquent le premier retran-
 chement & le forcent, après avoir tué
 une partie de ceux qui le défendoient.
 Non content de cet avantage, Démo-
 ſthène paſſe outre, pout ne point laiſ-
 ſer refroidir l'ardeur des ſoldats ; ni
 retarder l'accompliſſement de ſon
 deſſein. Sur ces entrefaites, les trou-
 pes de la ville, ſoutenues par Gylip-
 pe, ſortent en armes hors des retran-
 chemens. Dans l'étonnement & la
 ſurpriſe où elles étoient, que l'ob-
 ſcurité de la nuit augmentoit encore
 beaucoup, elles ſont d'abord repouſ-

DARIUS

ées, & mises en fuite. Mais comme les Athéniens s'avançoient en desordre pour forcer tout ce qui résistoit, de peur que l'ennemi ne se ralliât si on lui donnoit le loisir de se reconnoître & de respirer, ils sont arrêtés tout court par les Béoriens, qui sont ferme, & marchant contre les Athéniens les piques baissées, les chassent avec de grands cris, & en font un carnage horrible. Le trouble & l'effroi se répandent dans le reste de l'armée. Les fuyards entraînent avec eux ceux qui venoient à leur secours, ou même tournent leurs armes contre eux, les prenant pour des ennemis. Tout est pêle-mêle, dans le desordre & la confusion, n'étant pas possible de discerner les objets dans l'horreur d'une nuit, qui n'étoit ni si obscure qu'on ne pût rien voir, ni assez claire pour distinguer ce que l'on voioit. Les Athéniens s'entre-cherchoient, sans se pouvoir rencontrer; & à force de demander le mot, qui étoit la seule voie de se pouvoir reconnoître, il se faisoit une confusion de voix qui ne causoit pas peu de trouble, outre qu'on le divulguoit par ce moyen aux ennemis, sans qu'on

pût savoir le leur, parce qu'étant ensemble & vainqueurs, ils n'avoient pas besoin de le dire. Cependant ceux qu'on poursuivoit se précipitoient du haut des rochers, & plusieurs furent écrasés de la chute; & de ceux qui se sauvèrent, la plupart égarés dans la campagne, & écartés les uns des autres, furent massacrés le lendemain par la cavalerie ennemie qui sortit après eux. Il y eut deux mille morts du côté des Athéniens, & l'on prit un grand nombre d'armes, parce que les fuyards les jettoient pour se sauver plus facilement par les précipices.

§. XIV. *Consternation des Athéniens. Ils hazardent un nouveau combat naval, & le perdent. Ils prennent le parti de se retirer par terre. Poursuivis vivement par les Syracusains, ils se rendent. Nicias & Démosthène sont condamnés à mort, & exécutés.*

Après un échec si considérable, les Généraux Athéniens étoient bien embarrassés à résoudre ce qu'ils devoient faire dans le découragement & le desespoir de l'armée, qui dépérissoit tous les jours par les maladies de l'automne, & par le mauvais air du

NOTHUS.

Thucyd. lib.
7. p. 518-520.
Plut. in Nic.
pag. 538-542.
Diod. p. 142.

DARIUS

marais où l'on campoit. Démosthène étoit d'avis de partir sans plus tarder, après avoir manqué une entreprise de la plus grande importance ; d'autant plus que le tems étoit encore propre à la navigation, & qu'on avoit assez de vaisseaux pour forcer le passage en cas que les ennemis voulussent le disputer. Il disoit qu'il étoit bien plus avantageux de faire lever le blocus d'Athènes, que de continuer celui de Syracuse, en se consumant en frais inutiles : qu'il ne leur viendrait pas certainement une nouvelle armée, & qu'avec celle qui leur restoit ils ne pouvoient pas espérer de venir à bout des ennemis.

Nicias sentoît bien que son Collègue dans ce qu'il venoit de dire, raisonnoit fort sensément, & il étoit de son avis : mais il craignoit qu'un aveu si public de leur foiblesse, & la résolution qu'ils prendroient de se retirer, dont le bruit ne manqueroit pas d'arriver jusqu'aux ennemis, n'achevasent de ruiner leurs affaires, & ne les missent peut-être hors d'état d'exécuter cette résolution quand ils le voudroient. D'ailleurs, il n'étoit point sans espérance que les assiégés, réduits

duits eux-mêmes à une grande extré-NOTHUS.
 mité par le manque de vivres & d'ar-
 gent, ne songeassent enfin à faire une
 composition honorable. Ainsi, quoi-
 que dans le fond il fût encore incer-
 tain & flottant, il faisoit entendre dans
 ses discours qu'il ne partiroit point
 sans l'ordre des Athéniens, parce qu'il
 savoit bien qu'ils ne le trouveroient
 pas bon. Que leurs Juges, n'ayant pas
 vu l'état des choses, n'opineroient pas
 comme eux, & ne manqueroient pas
 de les condamner à la persuasion de
 quelque Orateur. Que la plupart de
 ceux qui crioient maintenant le plus
 haut à cause des incommodités qu'ils
 souffroient, parleroient alors d'une
 manière toute différente, & les accu-
 seroient d'avoir pris de l'argent pour
 lever le siège. Que connoissant, comme
 il faisoit, le caractère & le naturel des
 Athéniens, il aimoit mieux périr glo-
 rieusement par la main des ennemis
 s'il le falloit, que de subir une honteuse
 condamnation de la part de ses citoyens.

Ces raisons, quelque fortes qu'elles
 parussent, ne convinquirent point
 Démosthène, & il demeura toujours
 persuadé que l'unique bon parti qui
 restoit à prendre, étoit celui de la re-

DARIUS traite. Mais, comme il ne s'étoit pas bien trouvé de son premier avis, il n'osa pas insister davantage sur celui-ci, & il eut d'autant moins de peine à donner les mains à celui de Nicias, qu'il crut, comme beaucoup d'autres, que ce Général pouvoit avoir quelque ressource secrète, puisqu'il s'opiniâtroit si fort à demeurer.

Thucyd. lib. 7. pag. 521. 548. Gylippe, après avoir fait le tour de la Sicile, avoit ramené avec lui un

Plut. in Nic. pag. 538. grand nombre de troupes. Ce nouveau

Diod. l. 13. pag. 142-161. renfort arrivé aux ennemis effraia extrêmement les Athéniens, dont l'ar-

mée déperissoit tous les jours par les maladies; & ils commencèrent à se repentir de n'avoir pas levé le siège, d'autant plus que les assiégeans se préparoient à les attaquer par terre & par mer. D'ailleurs, Nicias ne s'opposoit plus à cette résolution: il vouloit seulement qu'elle ne fût pas rendue publique. On donna donc ordre au départ le plus secrètement qu'il fut possible, afin que la flotte pût faire voile au premier jour,

Quand tout fut en état, au moment qu'on alloit mettre à la voile sans que les ennemis se doutassent de rien, parce qu'ils ne s'attendoient pas à un dé-

part si précipité, la lune tout-à-coup vint à s'éclipser au milieu de la nuit, & à perdre entièrement sa lumière, ce qui remplit de fraieur Nicias & tous les autres, qui par ignorance & par superstition étoient étonnés d'un changement si subit, dont ils ne connoissoient point la cause, & dont ils redoutoient les suites. On consulte les devins, qui n'étant pas plus habiles que les autres, ne servirent qu'à augmenter la crainte. La coutume étoit, après ces sortes d'accidens, de ne suspendre ses entreprises que pendant trois jours. Les devins prononcèrent qu'on ne devoit partir qu'après trois fois neuf jours, ce sont les termes de Thucydide; nombre mystérieux sans doute dans l'esprit des peuples. Nicias, scrupuleux jusqu'à l'excès, & plein d'un respect mal entendu pour ces interprètes aveugles de la volonté des dieux, déclara qu'il vouloit attendre la révolution entière de la lune, & son retour à pareil jour du mois suivant, comme s'il ne l'avoit pas vûe bien claire & bien nette dès le moment qu'elle fut sortie de l'espace ombragé & obscurci par l'interposition du corps de la terre.

DARIUS

On ne lui en laissa pas le tems. La nouvelle du départ projeté s'étant bientôt répandue dans la ville, on résolut d'attaquer les assiégeans par terre & par mer. Les Syracusains commencèrent le premier jour par l'attaque des retranchemens, & remportèrent contre les ennemis un léger avantage. Le lendemain ils y firent une seconde attaque, pendant qu'avec soixante & seize galères ils voguoient contre quatre-vingts-six des Athéniens. Eurymédon, qui commandoit la droite de la flotte d'Athènes, s'étant étendu le long du rivage pour les envelopper, ce mouvement fut la cause de sa perte. Car, comme il s'étoit détaché du corps de la flotte, les Syracusains, après avoir enfoncé le corps de bataille qui étoit au milieu, tournèrent contre lui, le poussèrent vivement dans le fond du golfe appelé Dascon, & l'y défirent entièrement. Il fut tué dans le combat. Ils poursuivirent ensuite le reste des galères, & les poussèrent contre le rivage. Gylippe, qui commandoit l'armée de terre, voyant que les vaisseaux des Athéniens étoient poussés contre terre sans pouvoir rentrer dans leur estacade, descendit avec

une partie de ses troupes sur le rivage, **NOTHUS** pour combattre les soldats à la descente s'ils étoient contraints d'échouer, & pour donner plus de moien à ceux de son parti de remorquer les galères qu'ils auroient prises. Mais il fut repoussé par les Tyrrhéniens qui étoient en garde de ce côté-là, & obligé par les Athéniens qui accoururent pour les soutenir de se retirer avec quelque perte jusqu'au marais Lyfimélie qui étoit tout proche. Ceux-ci sauvèrent la plupart de leurs vaisseaux, excepté dix-huit que les Syracusains prirent, dont ils tuèrent tout l'équipage. Ensuite, voulant bruler les autres, ils remplirent un vieux vaisseau de matières combustibles, & y aiant mis le feu, ils le poussèrent à l'aide du vent contre les Athéniens, qui trouvèrent le moien d'éteindre le feu, & d'éloigner ce vaisseau.

Chacun dressa de son côté des trophées : ceux de Syracuse pour la défaite d'Eurymédon, & pour l'avantage remporté le jour précédent ; & les Athéniens, pour avoir poussé une partie des ennemis dans le marais, & fait prendre la fuite à l'autre. Mais les dispositions des deux peuples étoient

DARIUS

bien différentes. Les Syracusains, que l'arrivée de Démosthène avec sa flotte avoit jettés dans la consternation, se voiant vainqueurs dans un combat naval, conçurent de nouvelles espérances, & se promirent une pleine victoire de leurs ennemis. Les Athéniens au contraire, frustrés de l'unique ressource qui leur restât, & vaincus sur mer contre leur attente, perdirent absolument courage, & ne songèrent plus qu'à la retraite.

Les ennemis, pour leur en ôter tout moyen, & pour empêcher qu'ils ne leur échappassent, fermèrent l'embouchure du grand port, qui avoit environ cinq cens pas de largeur, avec des galères en travers, & d'autres vaisseaux arrêtés avec des ancres & des chaînes de fer; & en même tems préparèrent tout pour le combat, en cas qu'ils eussent encore le courage de le tenter. Quand les Athéniens se virent ainsi enfermés, les Généraux & les Colonels s'assemblèrent pour délibérer sur l'état présent des affaires. Ils manquoient absolument de vivres, parce qu'ils avoient défendu à ceux de Catane d'en apporter, sur l'espérance de la retraite; & ils ne pouvoient en

faire venir d'ailleurs, s'ils ne se ren- NOTHUS.
doient maîtres de la mer. Ils prirent
donc le parti de hasarder un combat
naval. Dans cette vûe, ils résolurent
d'abandonner leur ancien camp, &
leurs murailles, qui alloient jusqu'au
temple d'Hercule, & de se retrancher
sur le bord près de leurs navires dans
le moindre espace qu'ils pourroient.
Leur dessein étoit de laisser là quelques
troupes pour garder leur bagage &
les malades, & de combattre avec le
reste sur tout ce qui leur restoit de vais-
seaux. Ils faisoient état de se retirer
à Catane, s'ils étoient victorieux; si-
non, de mettre le feu à leurs navires,
& de gagner par terre la plus prochai-
ne ville de leurs alliés.

Cette résolution prise, Nicias fit
embarquer promptement sa meilleure
infanterie, & en remplit cent dix ga-
lères; les autres n'ayant plus de rames,
& mit le reste des troupes en bataille
sur le rivage, & sur tout les gens de
trait. Parce qu'on craignoit extrême-
ment les éperons des galères de Syra-
cuse, Nicias s'étoit muni de harpons
de fer pour les accrocher, afin d'en
rompre le coup, & d'en venir d'abord
aux mains comme sur terre. Mais les

DARIUS ennemis, qui s'en étoient aperçus, couvrirent de cuir la proue & le haut des galères, pour ne pas donner tant de prise. De part & d'autre les Chefs avoient exhorté leurs troupes, & jamais les motifs n'avoient été plus pressans, le combat qui alloit se donner devant décider, non seulement de leur liberté & de leur vie, mais du sort de leur patrie.

Le combat fut des plus rudes & des plus sanglans. Les Athéniens étant arrivés à l'embouchure du port, se rendirent aisément maîtres des vaisseaux qui en défendoient l'ouverture : mais quand ils voulurent rompre la chaîne des autres pour rendre le passage plus libre, les ennemis accoururent de toutes parts. Comme près de deux cens galères venoient de part & d'autre fonder toutes en un même endroit qui étoit assez étroit, la confusion ne pouvoit être que très grande, & l'on ne pouvoit pas facilement ni avancer, ni reculer, ni tourner pour revenir à la charge. Les éperons des galères, par cette raison, ne firent pas beaucoup d'effet : mais les décharges étoient rudes & fréquentes. Les Athéniens furent accablés d'une grêle de pierres

qui portent toujours leur coup de quel-
 que endroit qu'on les jette , au lieu NOTHUS.
 qu'ils ne se défendoient qu'en jettant
 des dards & des traits , dont l'agita-
 tion de la mer par le mouvement du
 vaisseau rendoit le coup incertain , &
 faisoit que la plupart se perdoient inu-
 tilement , ne portant point où l'on vi-
 soit. C'étoit un conseil que le pilote
 Ariston avoit donné aux Syracusains.
 Après ces décharges , les soldats pe-
 samment armés essaioient d'entrer
 dans le vaisseau ennemi pour en venir
 aux mains : & il arrivoit assez souvent,
 que tandis qu'ils montoient d'un côté,
 on entroit de l'autre dans le leur , &
 que deux ou trois navires se trou-
 voient accrochés à un seul, ce qui cau-
 soit une grande confusion & un grand
 embarras. D'ailleurs, le bruit des vais-
 seaux qui s'entrechoquoient , joint
 aux différens cris des vainqueurs &
 des vaincus, ne permettoit point d'en-
 tendre ni l'ordre des Officiers , ni ce-
 lui du Comite. Les Athéniens vou-
 loient qu'on forçât le passage à quel-
 que prix que ce fût, pour s'assurer le
 retour en leur patrie ; & les ennemis
 faisoient tous leurs efforts pour l'em-
 pêcher , afin de remporter une victoi-

DARIUS

re plus entière & plus glorieuse. Les deux armées de terre rangées sur le haut du rivage, & les habitans de la ville qui étoient accourus sur les murs, pendant que les autres prosternés dans les temples prioient pour leurs citoiens, distinguoient clairement, à cause du peu de distance, tout ce qui se passoit dans cette action, & contemploient la bataille comme de dessus un amphithéâtre, non sans inquiétude & sans fraieur. Attentifs & tremblans à tous les mouvemens & à toutes les vicissitudes qui arrivoient, ils marquoient la part qu'ils prenoient au combat, leur crainte ou leur espérance, leur douleur ou leur joie, par différens cris & différens gestes, étendant leurs mains, tantôt vers les combattans pour les animer, tantôt vers le ciel pour implorer le secours & la protection des dieux. Enfin, après un long combat & une vigoureuse résistance, la flotte des Athéniens prit la fuite, & fut poussée par les ennemis contre le rivage. Un cri universel de joie de la part des Syracusains spectateurs, annonça à toute la ville l'heureuse nouvelle de la victoire. Le vainqueur demeura maître de la mer, &

cinglant vers Syracuse dressa un tro- NOTHUS.
phée, tandis que les Athéniens abba-
rus & accablés ne songeoient pas seu-
lement à redemander leurs morts pour
leur rendre les derniers devoirs.

Il ne leur restoit pour ressource que
deux partis : ou de tenter une seconde
fois le passage , & ils avoient encore
assez de vaisseaux & de troupes pour
le faire ; ou de se retirer par terre, en
abandonnant leur flotte aux ennemis.
Démosthène proposa le premier : mais
les matelots tout éperdus refusèrent
d'obéir, ne se croiant point en état de
soutenir un nouveau choc. On s'en
tint donc au second parti , & l'on se
prépara à partir de nuit , pour déro-
ber aux ennemis la marche de l'armée.

Gylippe , qui s'en douta , sentit de
quelle importance il étoit de ne pas
laisser échaper de si nombreuses trou-
pes, qui pourroient se cantonner dans
quelque coin de la Sicile , & de là re-
commencer de nouveau la guerre. Les
Syracusains étoient actuellement dans
la joie & dans les festins , & ne son-
geoient qu'à se délasser des fatigues
du combat ; outre que ce jourlà même
ils célébroient la fête d'Hercule. Leur
proposer en cet état de reprendre les

DARIUS

armes pour courir sus aux ennemis, & vouloir les arracher par persuasion ou par force à leur divertissement, c'eût été chose fort inutile. On s'y prit autrement. Hermocrate envoya des gens à cheval crier, comme s'ils eussent été amis, qu'on dît à Nicias qu'il attendît le jour pour se retirer, parce que les Syracusains lui avoient dressé des embuches, & s'étoient saisis des passages. Ce faux avis l'arrêta tout court, & l'on ne partit pas même le lendemain, afin que le soldat eût plus de loisir de se préparer au départ, & d'emporter ce qui étoit nécessaire pour sa subsistance, en abandonnant le reste.

Les ennemis eurent tout le tems de s'emparer des avenues. Le lendemain dès le matin ils occupèrent les passages les plus difficiles, fortifièrent les gués des rivières, rompirent les ponts, & répandirent des détachemens de cavalerie çà & là dans la plaine, de sorte qu'il ne resta pas un seul lieu par où les Athéniens pussent passer sans combat. Ils se mirent en marche le troisième jour d'après le combat dans le dessein de se retirer à Catane. Toute l'armée étoit dans une consternation qui ne se peut exprimer, à la vûe des

morts & des mourans, dont on laissoit NOTHUS.
 les uns exposés aux bêtes, & les autres
 à la cruauté des ennemis. Les mala-
 des & les blessés les conjuroient avec
 larmes de les emmener avec eux, &
 les retenoient quand ils vouloient par-
 tir ; ou, se traînant après eux, ils les
 suivoient le plus loin qu'il leur étoit
 possible : & quand les forces venoient
 à leur manquer, ils avoient recours
 aux pleurs, aux plaintes, aux impré-
 cations, & poussant vers le ciel d'une
 voix plaintive & mourante des cris
 douloureux, ils invoquoient contre
 eux & les dieux & les hommes ; &
 tout retentissoit de gémissemens.

L'état de l'armée n'étoit pas moins
 déplorable. Une morne tristesse avoit
 faisi tous les esprits. Ils se sentoient
 intérieurement déchirés de dépit & de
 rage, quand ils venoient à se représen-
 ter la grandeur d'où ils étoient déchus,
 l'extrémité de la misère où ils se trou-
 voient, & les maux encore plus grands
 auxquels ils prévoioient ne pouvoir
 échaper. Ils ne pouvoient soutenir la
 comparaison qui s'offroit sans cesse à
 leur esprit, de l'état triomphant dans
 lequel ils étoient partis d'Athènes au
 milieu des vœux & des acclamations

DARIUS. de tout le peuple, avec la honte de leur retraite ignominieuse, accompagnée des cris & des imprécations de leurs parens & de leurs concitoiens.

Mais le spectacle le plus triste & le plus digne de compassion, c'étoit Nicias. Abbattu & exténué par une longue maladie, manquant des choses les plus nécessaires dans un tems où son âge & ses infirmités en avoient le plus de besoin, pénétré non seulement de sa douleur particulière, mais encore plus de celle des autres qu'il portoit tous dans son cœur ; ce grand homme, supérieur à tous ses maux, ne songeoit qu'à consoler les troupes, & à ranimer leur courage & leur espérance. Il alloit criant par tout, qu'il n'y avoit encore rien de desespéré, & que d'autres armées avoient échapé à de plus grands dangers ; qu'il ne faloit point s'accuser, ni s'affliger sans mesure, des maux dont l'on n'étoit point coupable ; que s'ils avoient offensé quelque dieu, sa vengeance devoit être maintenant satisfaite ; que la fortune se lasseroit de les poursuivre & de les maltraiter, après s'être montrée si lontems favorable à leurs ennemis. Qu'au reste, ils étoient encore

formidables par leur nombre & par NOTHUS.
 leur valeur : (les restes de l'armée
 montoient à près de quarante mille
 hommes.) Qu'aucune ville de Sicile
 ne pourroit soutenir leur effort, ni les
 empêcher de s'établir où ils vou-
 droient. Que chacun seulement prît
 soin de sa sûreté, & marchât en bon or-
 dre. Que par une retraite prudente &
 courageuse, qui étoit devenue leur uni-
 que ressource, non seulement ils se
 salvoient eux-mêmes, mais conser-
 voient leur patrie, & la mettoient en
 état de recouvrer son ancienne gran-
 deur.

L'armée marchoit en deux corps de
 bataille, rangés l'un & l'autre en quar-
 ré en forme de phalange ; le premier
 commandé par Nicias, & l'autre par
 Démosthène ; avec le bagage au mi-
 lieu. Lorsqu'ils furent arrivés à la ri-
 vière d'Anape, ils forcèrent le passage,
 & eurent ensuite sur les bras toute la
 cavalerie ennemie, & les gens de trait
 qui tiroient sans cesse contre eux. Ils
 furent ainsi harcelés pendant plusieurs
 jours de marche, ne trouvant point de
 débouché libre, & ne pouvant gagner
 pays qu'à la pointe de l'épée. Les en-
 nemis ne vouloient point hazarder de

DARIUS combat contre des troupes que le désespoir seul pouvoit rendre invincibles ; & dès que les Athéniens se présentoient pour combattre , ils lâchoient le pié : puis, lorsqu'ils se mettoient en marche, ils venoient fondre sur eux dans leur retraite.

Démosthène & Nicias, voyant le mauvais état des troupes qui étoient sans vivres avec quantité de blessés, furent d'avis de se retirer vers la mer par un chemin tout contraire à celui qu'ils tenoient, & de tirer droit vers Camarine & Gèle, au lieu d'aller à Catane, ce qui avoit été leur premier dessein. Ils partirent de nuit, après avoir allumé quantité de feux. Il y eut beaucoup de confusion & de desordre dans la retraite, comme il arrive pour l'ordinaire aux grandes armées dans l'horreur des ténèbres, sur tout lorsque l'ennemi est près. L'avant-garde, qui étoit commandée par Nicias, ne laissa pas de s'avancer en bon ordre : mais plus de la moitié de l'arrière-garde se détacha du gros, & s'égara avec Démosthène. Le lendemain les Syracusains, qui sur le bruit de leur retraite avoient fait une diligence extraordinaire, lui tombèrent sur les bras vers le midi, &

l'aient investi avec leur cavalerie, le **NOTHOS.** poussèrent dans un lieu étroit & fermé d'un petit mur, où ses soldats se défendirent comme des lions. Comme ils les virent sur la fin du jour accablés de fatigues & percés de coups, ils permirent aux Insulaires de se retirer, ce qui fut accepté de quelques-uns; & ensuite ils accordèrent la vie aux autres, qui se rendirent à discrétion avec Démosthène, après avoir stipulé qu'en leur laissant la vie sauve, on ne pourroit les retenir dans une prison perpétuelle. Environ six mille soldats se rendirent à ces conditions.

Le soir même Nicias arriva à la rivière d'Erinée, & l'aient passée se campa sur une montagne, où les ennemis l'atteignirent le lendemain, & le sommèrent de se rendre comme avoit fait Démosthène. Il ne voulut point croire d'abord que ce qu'on lui disoit de Démosthène fût vrai, & demanda la permission d'envoyer quelques cavaliers s'en informer. Sur leur rapport, il offrit de rembourser les frais de la guerre, pourvu qu'on le laissât aller avec ses troupes, & de donner autant d'Athéniens pour otages, qu'il y auroit de talens à paier. Les ennemis re-

DARIUS

jettèrent cette proposition avec mépris & insulte, & recommencèrent à le charger. Quoique Nicias manquât absolument de tout, il ne laissa pas de soutenir leurs attaques toute la nuit, & marcha vers le fleuve Asinare. Quand ils furent sur le bord, les Syracusains les aiant joints, en précipitèrent la plus grande partie dans le courant, les autres s'y étant déjà jettés dans l'impatience de se desaltérer. Là se fit le plus grand & le plus cruel carnage, ces pauvres malheureux étant massacrés sans miséricorde pendant qu'ils buvoient. Nicias, ne voyant plus de ressource, & ne pouvant soutenir un tel spectacle, se rendit à discrétion, à condition que Gylippe feroit cesser le combat, & épargneroit le reste de son armée. Le nombre des morts fut grand, & celui des prisonniers encore plus, de sorte que toute la Sicile en fut remplie. Il paroît que les Athéniens furent mécontents que leur Chef se fût ainsi rendu à discrétion ; & c'est pour cela que dans un monument public où l'on avoit inscrit les noms des Chefs qui étoient morts pour la République, le sien fut omis.

*Pausan. lib.
1. pag. 56.*

Les vainqueurs décorèrent des ar-

mes captives les plus beaux & les plus NOTHUS.
 grands arbres qui fussent sur les bords
 de la rivière, dont ils firent comme
 des trophées, & se couronnant de cha-
 peaux de fleurs, ornant magnifique-
 ment leurs chevaux, & ayant coupé les
 crains de ceux des ennemis, ils entré-
 rent en triomphe dans Syracuse, après
 avoir terminé heureusement la plus
 grande guerre que les Grecs eussent
 jamais eue entre eux, & remporté par
 leur force & leur valeur une victoire
 très signalée & très complete. Le len-
 demain on convoqua l'assemblée, pour
 délibérer sur ce qu'il falloit faire des
 prisonniers. Dioclès, l'un des Chefs
 les plus accrédités parmi le peuple,
 proposa cet avis : Que tous les Athé-
 niens de condition libre, & les Sici-
 liens qui avoient embrassé leur parti,
 seroient mis en prison dans les carrié-
 res, où on leur donneroit seulement
 par jour deux mesures de farine & une
 d'eau ; que les esclaves, & tous les al-
 liés, seroient vendus publiquement ;
 que les deux Généraux des Athéniens,
 après avoir été battus de verges, se-
 roient mis à mort.

Ce dernier article revolta extrême-
 ment tout ce qu'il y avoit de gens sages

*Diod. l. 13.
 pag. 149-161.*

DARIUS & modérés à Syracuse. Hermocrate, qui avoit une grande réputation de probité & de justice, voulut faire des remontrances au peuple : il ne fut point écouté, & les cris qu'on jeta de tous côtés ne lui permirent pas de continuer son discours. Alors un *
vieillard, respectable par son âge & par sa gravité, qui avoit perdu dans cette guerre deux enfans, seuls héritiers de son nom & de ses biens, se fit conduire par ses domestiques sur la Tribune aux harangues. Dès qu'il y parut, on fit un profond silence. « Vous » voiez, dit-il, un pere infortuné, qui » a senti, plus qu'aucun autre Syracu- » sain, les funestes effets de cette guer- » re par la mort de deux-fils, qui fai- » soient toute la consolation & toute » la ressource de ma vieillesse. Je ne » puis point, à la vérité, ne pas admi- » rer leur courage & leur bonheur, » d'avoir sacrifié au salut de la Répu- » blique une vie que la loi commune » de la nature leur auroit tôt ou tard » enlevée : mais je ne puis aussi ne pas » sentir la plaie cruelle que leur mort » a faite à mon cœur, & ne point haïr » & détester les Athéniens, auteurs de » cette malheureuse guerre, comme

les homicides & les meurtriers de NOTHUS.
 mes enfans. Cependant, je ne puis
 le diffimuler, je suis moins sensible
 à ma douleur, qu'à l'honneur de ma
 patrie : & je la voi prête à se desho-
 norer pour toujours par le cruel avis
 qu'on vous propose. Les Athéniens,
 il est vrai, méritent toutes sortes de
 supplices & de mauvais traitemens
 pour l'injuste guerre qu'ils nous ont
 déclarée : mais les dieux, justes ven-
 geurs du crime, ne les ont-ils pas
 assez punis, & ne nous ont-ils pas
 assez vengés ? Quand leurs Chefs
 ont mis bas les armes, & se sont ren-
 dus à nous, n'a-ce pas été dans l'es-
 pérance de conserver leur vie ? &
 pouvons-nous la leur ôter, sans en-
 courir le juste reproche d'avoir vio-
 lé le droit des gens, & d'avoir des-
 honoré notre victoire par une barba-
 re cruauté ? Quoi ! vous souffrirez
 que votre gloire soit ainsi flétrie
 dans tout l'univers, & qu'on dise
 qu'un peuple, qui le premier a éri-
 gé un temple dans sa ville à la Mi-
 séricorde, n'en a point trouvé dans
 la vôtre ? Sont-ce les victoires &
 les triomphes qui rendent à jamais
 illustre une ville, & non pas la clé-

DARIUS » mence pour des ennemis vaincus, la
» modération dans la plus grande
» prospérité, & la crainte d'irriter les
» dieux par un orgueil fier & insolent?
» Vous n'avez point sans doute ou-
» blié que ce même Nicias, sur le sort
» duquel vous êtes près de prononcer,
» est celui qui plaida votre cause dans
» l'assemblée des Athéniens, & qui
» employa tout son crédit & toute son
» éloquence pour les détourner de
» vous faire la guerre. Une sentence
» de mort prononcée contre ce digne
» Chef, est-elle donc une juste récom-
» pense du zèle qu'il a témoigné pour
» vos intérêts. Pour moi, la mort me
» sera moins triste, que la vûe d'une
» telle injustice commise par ma pa-
» trie & par mes concitoyens. «

Le peuple parut touché par ce discours, d'autant plus que voiant paroître ce Vieillard dans la Tribune, il s'étoit attendu qu'il alloit demander vengeance contre les auteurs de tous ses maux, & non pas implorer sa clémence en leur faveur. Mais les ennemis d'Athènes aiant exagéré avec force & véhémence les cruautés inouïes que cette République avoit exercées contre plusieurs villes de leurs enne-

mis & même de leurs anciens alliés ; **NOTHUS.**
 l'acharnement de ses Chefs contre Sy-
 racuse, & les maux qu'ils lui auroient
 fait souffrir s'ils avoient été vain-
 queurs ; la douleur & les gémissemens
 d'une infinité de Syracusains, qui pleu-
 roient la mort de leurs enfans & de
 leurs proches, dont les mânes ne pou-
 voient être apaisés que par le sang de
 leurs meurtriers : le peuple rentra dans
 ses premiers sentimens, & suivit en
 tout l'avis de Dioclès. Gylippe fit de
 vains efforts pour obtenir que Nicias
 & Démosthène fussent conduits à La-
 cédémone, d'autant plus qu'ils étoient
 ses prisonniers. Sa demande fut re-
 jettée avec hauteur & insulte, & les
 deux Généraux furent mis à mort.

Les personnes sages & modérées ne
 purent refuser des larmes à la fin tra-
 gique de ces deux grands hommes, &
 sur tout à celle de Nicias, qui de tous
 ceux de son tems paroissoit le moins
 digne de cette infortune. Quand on se
 rappelloit dans l'esprit les discours
 qu'il avoit tenus & les remontrances
 qu'il avoit faites pour empêcher cette
 guerre, & que d'un autre côté l'on
 considéroit l'attachement inviolable
 qu'il avoit toujours eu pour tout ce

DARIUS

qui regarde la religion, la plupart étoient tentés d'accuser hautement la Providence, en voyant qu'un homme qui avoit toujours témoigné un respect infini pour les dieux, & qui n'avoit jamais rien épargné quand il s'agissoit de leur honneur & de leur culte, en étoit si mal récompensé, & n'éprouvoit point une fortune plus heureuse que les plus méchans & les plus scélérats des hommes. Il n'est pas étonnant que les malheurs des gens de bien inspirassent de telles pensées aux payens, & les jettassent dans le murmure & le découragement, vû qu'ils ne connoissoient ni la sainteté de Dieu, ni la corruption de la nature humaine.

Les prisonniers furent enfermés dans des carrières, où ils souffrirent des maux incroyables pendant l'espace de huit mois, entassés les uns sur les autres dans ces lieux étroits; exposés aux injures de l'air & du tems; brûlés pendant le jour par l'ardeur du soleil, puis glacés pendant la nuit par les froids de l'autonne; empoisonnés par la puanteur & de leur propre ordure, & des cadavres de ceux qui mouroient de leurs blessures ou de la maladie; enfin consumés par la faim & par la soif,

car

car on ne leur donnoit à chacun par NOTHUS.
 jour qu'une petite mesure d'eau, &
 deux de farine. Ceux qu'on tira de là,
 deux mois après, pour les vendre com-
 me esclaves, parmi lesquels se trou-
 vèrent plusieurs citoyens qui avoient
 déguisé leur état, éprouvèrent un sort
 moins fâcheux. Leur sagesse, leur pa-
 tience, & un certain air de probité &
 de retenue, leur furent d'un grand se-
 cours. Car ou ils furent bientôt mis
 en liberté, ou ils demeurèrent auprès
 de leurs maîtres qui les traitèrent avec
 toute sorte d'estime & de considéra-
 tion. Il y en eut même plusieurs qui
 dûrent leur salut à Euripide, des pièces
 duquel ils avoient récité les plus
 beaux endroits aux Siciliens qui en
 étoient fort curieux ; & à leur retour
 dans leur patrie, ils allèrent le saluer
 comme leur libérateur, en lui racon-
 tant ce qui leur étoit arrivé à l'occa-
 sion de ses vers.

§. XV. *Effet que produit à Athènes la
 nouvelle de la défaite de l'armée.*

LA NOUVELLE de la défaite aiant Thucyd. lib. 2.
 été portée à Athènes, on n'en voulut pag 551. 553.
 rien croire d'abord ; & l'on étoit si Plut. de Gar-
 rulis. p. 509.
 éloigné d'y ajouter foi, qu'on condan-

DARIUS

na au supplice celui qui le premier l'avoit répandue. Mais quand on l'eut avérée, la consternation fut générale parmi les Athéniens ; & comme si ce n'avoit pas été eux qui eussent décerné la guerre , leur dépit & leur colère éclata & contre les orateurs qui avoient favorisé l'entreprise , & contre les devins qui par des oracles ou des prodiges supposés leur en avoient fait espérer un heureux succès. Jamais ils ne s'étoient vûs dans un pareil état. On se trouvoit sans cavalerie, sans infanterie , sans argent , sans galères , sans matelots , en un mot dans le dernier desespoir ; de sorte qu'on s'attendoit à toute heure que les ennemis, enflés d'une si grande victoire, & fortifiés par la révolte des alliés , viendroient fondre sur Athènes par mer & par terre avec toutes les forces du Péloponnèse. Ils ne se laissèrent pourtant point abbattre , & ne perdirent point courage. On résolut d'amasser de l'argent de tous côtés , & de faire venir du bois pour construire des vaisseaux, afin de retenir les alliés dans leur devoir , & particulièrement l'île d'Eubée. On retrancha toutes les dépenses superflues, & l'on établit un nouveau

Conseil de vieillards , pour agiter les **NOTHUS.**
affaires avant que de les proposer au
peuple. Enfin l'on n'omit rien de tout
ce qui pouvoit être utile dans la con-
joncture présente , l'allarme où l'on
étoit & le danger commun rendant les
esprits attentifs à tous les besoins de
l'État, & dociles à tous les bons avis.

Je ne puis pas achever dans ce volu-
me le récit de la guerre du Pélopon-
nèse, & je me trouve obligé, contre
mon intention, d'en renvoyer la fin au
volume suivant. La déroute de l'ar-
mée de Nicias fut suivie de la prise
d'Athènes, où Lyfandre changea tou-
te la forme de l'ancien gouvernement.
Cicéron ^a a raison de dire, en parlant
du combat naval donné dans le port
de Syracuse, que c'est là que les forces
d'Athènes, aussi bien que ses galères,
furent ruinées & coulées à fond ; &
que c'est dans ce port que la gloire &
la puissance des Athéniens firent un
funeste naufrage.

^a Hic primum opes illius civitatis victæ, comminutæ, depressæque sunt: sum nobilitatis, impetii, gloriæ naufragium factum existimatur. Cic. Verrin. 7. n. 97.

F I N.

De l'Imprimerie de G. F. QUILLAT.

K k ij



TABLE

DU TROISIÈME VOLUME.

HISTOIRE

DES PERSES

ET

DES GRECS.

AVANT-PROPOS. page 1

ARTICLE I. *Idée abrégée de l'Histoire renfermée dans ce troisième Volume. Fruit que l'on en doit tirer.* 2

ART. II. Plan & division de ce troisième Volume. 22

ART. III. Abrégé de l'Histoire des Lacédémoniens, depuis l'établissement de leurs Rois, jusqu'au règne de Darius I. 26

§. I. Origine & condition des Ilotes. 27

§. II. Lysurgue Législateur des Lacédémoniens. 29

§. III. Guerre entre les Argiens & les Lacédémoniens. 31

§. IV. Guerre entre les Messéniens & les Lacédémoniens. 33

Première guerre de Messénie. *ibid.*

Seconde guerre de Messénie. 43

T A B L E.

LIVRE SIXIÈME.
HISTOIRE
DES PERSES
ET DES GRECS.

CHAPITRE PREMIER.

HISTOIRE de Darius jointe à celle
des Grecs. 51

§. I. Mariage de Darius. Imposition de
tributs. Insolence & punition d'Inta-
pherne. Mort d'Orètes. Histoire de Dé-
mocède médecin. Permission donnée aux
Juifs de continuer le bâtiment du tem-
ple. Générosité de Syloson récompen-
sée. 52

§. II. Révolte & réduction de Babylone. 73

§. III. Darius se prépare à marcher
contre les Scythes. 80

Digression sur les Scythes. 81

§. IV. Expédition de Darius contre les
Scythes. 93

§. V. Darius fait la conquête de l'Inde. 114

§. VI. Révolte des Ioniens. 116

§. VII. Expédition des armées de Da-
rius contre la Grèce. 135

1. Etat d'Athènes : caractère de Mil-
tiade, de Thémistocle, & d'Aristide. 137

2. Darius envoie des Hérauts dans la

T A B L E.

- Grèce , pour sonder les peuples , & pour demander qu'ils se soumettent. 149
3. Défaite des Perses à Marathon par Miltiade. 152
- §. VIII. Darius songe à porter la guerre contre l'Egypte & contre la Grèce. Il est prévenu par la mort. Dispute entre deux de ses fils pour la roiauté. Xerxès est élu Roi. 170
- CHAP. II. Histoire de Xerxès jointe à celle des Grecs. 179
- §. I. Xerxès , après avoir réduit l'Egypte, se prépare à porter la guerre contre les Grecs. Il tient conseil. Sage discours d'Artabane. La guerre est résolue. ibid.
- §. II. Xerxès se met en marche , & passe d'Asie en Europe en traversant le détroit de l'Hellespont sur un pont de bateaux. 194
- §. III. Dénombrement de l'armée de Xerxès. Démarate marque librement sa pensée sur l'entreprise de ce Prince. 208
- §. IV. Les Lacédémoniens & les Athéniens députent inutilement vers les alliés pour demander du secours. Commandement de la flotte accordé aux Lacédémoniens. 215
- §. V. Combat des Thermopyles. Mort de Léonide. 226
- §. VI. Combat naval près d'Artémise. 238

T A B L E.

- §. VII. Les Athéniens abandonnent leur ville. Xerxès la prend & la brule. 242
- §. VIII. Bataille de Salamine. Retour précipité de Xerxès dans l'Asie. Eloge de Thémistocle & d'Aristide. Défaite des Carthaginois en Sicile. 249
- §. IX. Bataille de Platée. 267
- §. X. Combat près de Mycale. Défaite des Perses. 293
- §. XI. Inhumaine & barbare vengeance d'Amestris femme de Xerxès. 297
- §. XII. Les Athéniens rétablissent les murs de leur ville malgré l'opposition des Lacédémoniens. 302
- §. XIII. Noir dessein de Thémistocle, rejeté d'un commun accord par le peuple d'Athènes. Condescendance d'Aristide pour ce peuple. 308
- §. XIV. La fierté de Pausanias fait perdre le commandement aux Lacédémoniens. 313
- §. XV. Trame secrète de Pausanias avec les Perses. Sa mort. 317
- §. XVI. Thémistocle, poursuivi par les Athéniens & les Lacédémoniens comme complice de la conjuration de Pausanias, se réfugie chez Admète. 321
- §. XVII. Desintéressement d'Aristide dans le maniement des deniers publics. Sa mort. Son éloge. 327

T A B L E.

- §. XVIII. *Mort de Xerxès tué par Artabane. Son caractère.* 341

LIVRE SEPTIÈME.

Suite de l'Histoire des Perses & des Grecs, sous le règne d'Artaxerxe Longue-main.

CHAPITRE PREMIER.

- §. I. **A**rtaxerxe détruit le parti d'Artabane, & celui d'Histaspes son frère aîné. 346
- §. II. *Thémistocle se réfugie vers Artaxerxe.* 349
- §. III. *Cimon commence à paroître à Athènes. Ses premiers exploits. Double victoire remportée contre les Perses près du fleuve Eurymédon.* 358
- §. IV. *Révolte de l'Egypte contre les Perses, soutenue par les Athéniens. Mort de Thémistocle.* 373
- §. V. *Inarus livré à la mere du Roi contre la foi du traité. Douleur de Mégabyze. Sa révolte.* 383
- §. VI. *Artaxerxe envoie à Jérusalem d'abord Esdras, puis Nehémie.* 387
- §. VII. *Caractère de Périclès, moïens qu'il emploie pour gagner le peuple.* 394
- §. VIII. *Tremblement de terre à Sparte. Sédition des Ilotes. Semences de divi-*

T A B L E.

sion entre Athènes & Sparte. Cimon est banni. 407

§. IX. *Cimon est rapellé. Il rétablit la paix entre les deux villes. Il remporte plusieurs victoires qui obligent Artaxerxe de conclure un traité fort glorieux pour les Grecs. Mort de Cimon.* 413

§. X. *On oppose Thucydide à Périclès. Envie contre celui-ci. Il se justifie, & vient à bout de faire bannir Thucydide.* 419

§. XI. *Périclès change de conduite à l'égard du peuple. Son extrême autorité: son d:sintéressement.* 429

§. XII. *Jalousie & différens entre les Athéniens & les Lacédémoniens. Traité de paix pour trente ans.* 438

§. XIII. *Nouveaux sujets de plainte & de brouillerie entre les deux peuples, par le siège de Samos que firent les Athéniens, par le secours qu'ils accordèrent à ceux de Corcyre, par le siège qu'ils mirent devant Potidée. Rupture ouverte.* 444

§. XIV. *Affaires suscitées contre Périclès. Il détermine le peuple d'Athènes à soutenir la guerre contre les Lacédémoniens.* 460

CHAP. II. *Affaires des Grecs tant en Sicile qu'en Italie.* 471

§. I. *Défaite des Carthaginois dans la Si-*

T A B L E.

<i>cile. Théron, tyran d'Agrigente. Règne de Gélon à Syracuse, & de ses deux freres. Rétablissement de la liberté. ibid.</i>	
I. GELON.	ibid.
II. HIERON.	483
III. THRASYBULE.	493
§. II. De quelques personnes & de quelques villes célèbres dans la grande Grèce.	499
1. Pythagore.	ibid.
2. Crotone. Sybaris. Thurium.	503
3. Charondas Législateur.	507
4. Zaleucus, autre Législateur.	511
5. Milon l'Athlète.	514
CHAP. III. Guerre du Péloponnèse.	518
§. I. Siège de Platée par les Thébains. Ravages mutuels de l'Attique & du Péloponnèse. Honneurs rendus aux Athéniens morts dans la première campagne. Première année de la guerre.	519
§. II. L'Attique ravagée par la peste. Le commandement ôté à Périclès : son rétablissement : sa mort. Seconde & troisième années de la guerre.	535
§. III. Lacédémone a recours aux Perses. Prise de Potidée par les Athéniens. Siège de Platée par les Lacédémoniens. Siège & prise de Mytilène par les Athéniens. Platée se rend. La peste recommence à Athènes. Quatrième & cin-	

T A B L E.

- quième années de la guerre. 554
 §. IV. *Les Athéniens prennent Fyle ,
 puis y sont assiégés. Lacédémoniens
 enfermés dans la petite île de Spha-
 Etérie. Cléon s'en rend maître. Mort
 d'Artaxerxe. Sixième & septième
 années de la guerre.* 589
-

LIVRE HUITIÈME.

*Suite de l'Histoire des Perses & des
 Grecs , & de la guerre du Péloponné-
 se , sous les régnés de Xerxès II. de
 Sogdien , & de Darius Nothus.*

CHAPITRE PREMIER.

- §. I. **R**egnes fort courts de Xerxès &
 de Sogdien. Darius Nothus
 leur succède. Il appaise la révolte de
 l'Egypte, & celle de Médie. Il donne à
 Cyrus le plus jeune de ses fils le comman-
 dement en chef de toute l'Asie Mineure.
 603
- §. II. *Les Athéniens se rendent maîtres
 de l'île de Cythère. Expéditions de
 Brasidas dans la Thrace. Il prend
 Amphipolis. Exil de Thucydide l'hi-
 storien. Combat près de Délie, où les
 Athéniens sont vaincus. Huitième
 année de la guerre.* 614

T A B L E.

- §. III. Trêve d'un an entre les deux peuples. Mort de Cléon & de Brasidas. Traité de paix conclu entre les Athéniens & les Lacédémoniens pour cinquante ans. Neuvième & dixième années de la guerre. 621
- §. IV. Alcibiade commence à paroître. Son caractère. Opposé en tout à Nicias, il fait rompre le traité que Nicias avoit conclu. L'exil d'Hyperbolytus met fin à l'Ostracisme. 632
- §. V. Alcibiade engage les Athéniens dans la guerre de Sicile. Seizième & dix-septième années de la guerre. 648
- §. VI. Dénombrement des peuples qui ont habité la Sicile. 654
- §. VII. Les Egestains implorent le secours d'Athènes. Nicias s'oppose en vain à la guerre de Sicile : Alcibiade l'emporte sur lui. Ils sont nommés tous deux Généraux avec Lamachus. 657
- §. VIII. On se prépare au départ. Sinistres présages. Mutilation des statues de Mercure. Alcibiade accusé ne peut obtenir qu'on juge l'affaire. Départ triomphant de la flotte. 670
- §. IX. Allarme de Syracuse. La flotte Athénienne arrive en Sicile. 676
- §. X. Alcibiade est rappellé. Il se sauve, & est condamné à mort par contu-

T A B L E.

mace. Il se retire à Sparte. Souplesse de son génie. 682

§. XI. *Description de Syracuse.* 689

§. XII. *Nicias , après quelques actions , forme le siège de Syracuse. Lamachus est tué dans un combat. La ville est réduite à l'extrémité. Dix - huitième année de la guerre.* 695

§. XIII. *Syracuse songe à capituler. L'arrivée de Gylippe change la face des choses. Nicias , forcé par ses Collègues , donne un combat sur mer , & est vaincu. Ses troupes de terre sont aussi battues.* 713

§. XIV. *Consternation des Athéniens. Ils hazardent un nouveau combat naval , & le perdent. Ils prennent le parti de se retirer par terre. Poursuivis vivement par les Syracusains , ils se rendent. Nicias & Démosthène sont condamnés à mort , & exécutés. Dix - neuvième année de la guerre.* 743

§. XV. *Effet que produit à Athènes la nouvelle de la défaite de l'armée.* 769

F I N.

PRIVILEGE DU ROY.

LOUIS PAR LA GRACE DE DIEU,
Roy de France & de Navarre: A nos
amez & féaux Conseillers, les Gens tenans
nos Cours de Parlement, Maîtres des Re-
quêtes ordinaires de notre Hôtel, Grand-
Conseil, Prevôt de Paris, Baillifs, Séné-
chaux, leurs Lieutenans Civils, & autres
nos Justiciers qu'il appartiendra: S A L U T.
Notre très-cher & bien amé le sieur CHARLES
ROLLIN, ancien Recteur de l'Université de
Paris, & Professeur d'Eloquence en notre
Collège Roial, Nous ayant représenté qu'il
desireroit donner au Public un Ouvrage qui
a pour titre *Histoire ancienne des Egyptiens, des
Carthaginois, des Assyriens, des Médes & des
Perses, des Macédoniens & des Grecs*, de
sa composition, s'il Nous-plaisoit lui accorder
nos Lettres de Privilege sur ce nécessaires:
A CES CAUSES, voulant traiter favorable-
ment ledit Sieur Exposant, & lui donner
des marques de la satisfaction que Nous avons
des services qu'il Nous a ci-devant rendus, &
de ceux qu'il nous rend encore actuellement,
Nous lui avons permis & permettons par
ces Présentes de faire imprimer ledit Ou-
vrage ci-dessus spécifié en un ou plusieurs
volumes, conjointement ou séparément, &
autant de fois que bon lui semblera, sur pa-
pier & caractères conformes à ladite feuille
imprimée & attachée pour modele sous no-
tredit contrescel, & de le faire vendre, & dé-
biter par-tout notre Royaume, pendant le
temps de six années consécutives, à compter
du jour de la date desdites Présentes. Fai-
sons défenses à toutes sortes de personnes de

quelque qualité ou condition qu'elles soient ; d'en introduire d'impression étrangère dans aucun lieu de notre obéissance ; comme aussi à tous Imprimeurs , Libraires , & autres, d'imprimer , faire vendre , débiter , ni contrefaire ledit Ouvrage ci-dessus exposé en tout ni en partie, ni d'en faire aucuns extraits sous quelque prétexte que ce soit d'augmentation , correction , changement de titre ou autrement, sans la permission expresse & par écrit dudit Sieur Exposé , ou de ceux qui auront droit de lui , à peine de confiscation des Exemplaires contrefaits , de quinze cens livres d'amende contre chacun des Contrevenans , dont un tiers à Nous, un tiers à l'Hôtel - Dieu de Paris , l'autre tiers audit Sieur Exposé , & de tous dépens, dommages , & intérêts. A la charge que ces Présentes seront enregistrées tout au long sur le Registre de la Communauté des Imprimeurs & Libraires de Paris , dans trois mois de la date d'icelles ; que l'impression de cet Ouvrage sera faite dans notre Royaume & non ailleurs, & que l'Impétrant se conformera en tout aux Reglemens de la Librairie ; & notamment à celui du 10 Avril 1725 , & qu'avant que de l'exposer en vente , le Manuscrit ou imprimé qui aura servi de copie à l'impression dudit Livre , sera remis dans le même état où l'approbation y aura été donnée ès mains de notre très-cher & féal Chevalier Garde des Sceaux de France le Sieur CHAUVELIN , & qu'il en sera ensuite remis deux Exemplaires dans notre Bibliothèque publique , un dans celle de notre Château du Louvre , & un dans celle de notre très-cher & féal Chevalier Garde des Sceaux de

France le Sieur CHAUVELIN ; le tout à peine de nullité des Présentes. Du contenu desquelles nous vous mandons & enjoignons de faire jouir ledit Sieur Exposant, ou les ayans cause, pleinement & paisiblement, sans souffrir qu'il leur soit fait aucun trouble ou empêchement. Voulons que la copie desdites Présentes qui sera imprimée tout au long au commencement ou à la fin dudit Livre, soit tenue pour dûement signifiée, & qu'aux copies collationnées par l'un de nos amez & féaux Conseillers & Secretaires, foi soit ajoutée comme à l'original. Commandons au premier notre Huissier ou Sergent de faire pour l'exécution d'icelles, tous actes requis & nécessaires, sans demander autre permission, & nonobstant clameur de Haro, Chartre Normande, & Lettres à ce contraires. CAR tel est notre plaisir. DONNE' à Paris le trentième jour du mois de Septembre, l'an de grace mil sept cent vingt-neuf, & de notre Règne le quinzième. Par le Roy en son Conseil.

Signé, SAINSON.

J'ai cédé mon droit au présent Privilège au Sieur JACQUES ESTIENNE, Libraire à Paris, pour en jouir suivant nos conventions. A Paris ce 5 Octobre 1729.

C. ROLLIN.

Registré, ensemble la Cession, ci-dessus, sur le Registre VII. de la Chambre Royale des Libraires & Imprimeurs de Paris N°. 448. fol. 390. conformément aux anciens Réglemens, confirmés par celui du 28. Février 1723. A Paris le trois Octobre mil sept cent vingt-neuf.

P. A. LE MERCIER. Syndic.

